
限界超えバトル！！ポケハン学園バトル部

フォック・リザハート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

限界超えバトル！！ポケハン学園バトル部

【Nコード】

N5077J

【作者名】

フォック・リザハート

【あらすじ】

ここはポケモンとモンスターがともに住んでいる世界
そしてポケモンとモンスターが学ぶ高校、ポケハン学園
リザードンのラッシュとリオレウスのレウトは登校中に出会い仲良
くなった、そして今ラッシュとレウトはそこからある部を始めた
その名はバトル部

この物語はラッシュとレウトとバトル部の仲間によるバトル&コメ
ディ

そしてポケモンとモンスターハンターのクロスオーバーである

バトル1 出会は突然(前書き)

ついに完成しましたポケモンとモンハンのコラボ

実はやりたかったんで作りました

ではどうぞ

バトル1 出会は突然

ピピピッ

ピピピッ

目覚ましがなる

ピピピッ

ピピピッ

カチッ

目覚ましが止まる

「????? うーん・・・朝かよ、ふわあああああっつて!?!? も
うこんな時間かよやべえ!?!? 初日から遅刻になっちまう!?!?」

とオレンジ色でしっぽに炎が燃えている竜のようなポケモンが朝か
ら焦っていた

ただいまの時間7時30分

その頃、別の方では

「????? やべえ!?!? 遅れちまう」

と朝からドタバタしていた

竜のような顔そして赤い体に赤い鱗うろこにおおわれたモンスター

そうこの二匹、実は今日から高校生なのだ

そうこうしてる内に

「????? いってきまーす!?!?」

と一人暮らしなのに元氣よくあわてて出て行く
彼、火炎ポケモンのリザードンが勢いよく空を飛んだ

一方

????? 「ひゝ初日から遅刻だゝ!!」

と勢いよく飛び出していったのは先ほどの赤い色のモンスター
別名空の王者と呼ばれている火竜リオレウスも空を飛んだ

.....

リザードン 「早くしねえと!!」

リオレウス 「遅れちまう!!」

とその時!?

リザードン 「うわっ!?!どいてくれ!?!」

リオレウス 「うわああ!?!ぶつかる!?!」

どじーん!!

なんと空を飛んでいた二匹は急いでいたためか互いにぶつかってしまっ
た

そしてそのまま地面に落ちていった

.....

リザードン 「いつつ・・・てめえ!なにすんだ! (怒)」

リオレウス「そりゃあコッチのセリフだ！いてえじゃねえか！（怒）」
と互いにケンカする

リザードン「こうなりやバトルってやべえ！遅刻しちまう」
リオレウス「うおこうしちやいらねえ」

と互いに飛んでいった

リザードン「って！？なんでお前がそちに飛んでんだよ！」
リオレウス「おめえもなんでそっちなんだよ！って！？もしかして
お前ポケハンなのか」

リオレウスがいったポケハンとは
ポケハン学園

そこはポケモンとモンスターが通う高校なのである

リザードン「ああ、お前もか？」
とリオレウスにきく

リオレウス「ああ、そうなんだ・・・なんだじゃあ一緒ってことか」
リザードン「ぶつかって来たってことは俺達運がいいってことか」
リオレウス「そういうことだな」

リザードン「じゃあ行こうぜ！俺はラッシュ、リザードンのラッシュだ！」

ラッシュと呼ばれたリザードンは自己紹介した
一方のリオレウスも

リオレウス「ラッシュか、俺はリオレウスのレウト！よろしくな」
ラッシュ「ああ、よろしくな！」

こうして二匹は仲良くポケハン学園へと急いだ

バトル1 出会は突然（後書き）

ラッシュ「オッス！俺はリザードンのラッシュ、よろしくな！」

レウト「俺はリオレウスのレウトだ！」

と言うわけでこの二人が来ました

ラッシュ「やっと俺らのデビューか！」

レウト「まさかのコラボってわけか！」

うん元々やりたかったんだよ、ポケモンとモンハンで

ラッシュ「まっ他の先輩かたの方、特にドッジ先輩の方は少しだが
すごくなってるな」

レウト「俺らもその内でちゃったりして」

うんそうかもねw

レウト「まじか！？」

いや、まだ決まったわけじゃないし

ラッシュ「おし！作者！このままどんどん書いてくれ！」

よゆうがあればね、俺はもう疲れたからじゃね

レウト「よゆうって（汗）」

バトル2 先生は人気の大怪鳥（前書き）

さて第二話です。

今回はあの大人気のあの鳥が登場します W

ではドウゾ

バトル2 先生は人気の大怪鳥

ポケハン学園校門前

ラッシュ「はあはあ・・・なっ・・・何とか間に合った」

レウト「早く組のほうみようぜ」

2匹は組が貼り出された掲示板へと向かった

なんとか組がわかり教室へと向かった

ちなみに2匹は同じクラス1年A組だ

1－A教室

なんとか席に着いた2匹そこへ

????「あっ!? ラッシュじゃない!」

ラッシュ「よっ! サクラ!」

サクラと呼ばれたピンク色のリザードンがラッシュに挨拶する

サクラ「よっ! じゃないわよ! あんたまたギリギリ、いつつもこう
なんだから」

なぜか説教されるラッシュ

ラッシュ「俺だって努力してるけどよお（汗）」

サクラ「その割には抜けてないけど」

ラッシュ「!？」

痛いところを突かれた

と、そこへ

????「あら・・・彼があなたの彼氏？」

と緑色の鱗におおわれた竜、陸の女王と呼ばれる雌火竜めすかりゅうリオレイア
がやってくる

サクラ「あら、レイラじゃない!そうよコイツがそう」

とラッシュの頬をつねる

ラッシュ「いてててっ!」

レイラ「ふふWアイツとそっくりね」

とそこへ

レウト「それって俺の事か、レイラ？」

レウトが現れる

サクラ「へえ〜レイラの彼氏って結構かっこいいんだ」

とほれぼれする

レイラ「やだぁ〜照れるじゃない!」

としっぽを振る

レウト「いてててっ!」

サクラ「ほんとにアイツとそっくりだわW」

その後4匹は互いに自己紹介しあった

キーンコーンカーンコーン♪

授業のチャイムになる

そして先生が入ってきた

????? 「うゝ・・・」

と入ってきたのはピンクの鱗におおわれ、耳の周りにエリマキがめだつ、

大怪鳥イヤンクツクだった

なぜか足がガクガク震えていた

どうやら新人の先生のようにだ

イヤンクツク「お・・・おはよう」

と緊張しながらあいさつをする

イヤンクツク「きょ・・・今日からこのクラスの・・・た・・・担当になりました・・・イ・・・イヤンクツクの・・・イックンと・・・申しまひゅ・・・ど・・・どうぞ・・・よっ・・・よろしくね！」

と若干下を噛じゃっかんんでしまったがイヤンクツクのイックン先生は自己紹介した

イックン「うーどうしよう」

と緊張した面持ちだ

すると

ぱちぱちぱちぱち

とクラス全員が拍手した

イックン「ふえっ!?!」

と驚きの声をあげる

イックン「(こ・・・こんなに拍手してる・・・こ・・・これはがんばらないと)」

と少し間をおき

イックン「それじゃあ入学式が始まるから体育館へ行こう」

と入学式が始まる体育館へとクラス全員行った

ラッシュ「（おもしれえせんこうだな）」

レウト「（楽しみだぜ先生よ）」

と思いながら2匹も体育館へ

さてここからが

2匹の学園生活が始まる

そして次回

物語の扉が

今開く！

バトル2 先生は人気の大怪鳥（後書き）

さて次回は本格的始動です。

本編にもあつたバトル部の始動です。

ラッシュ・レウト「楽しみにしてろよ！」

バトル3 結成！バトル部（前書き）

さあついにバトル部結成です

ではどうぞ

バトル3 結成！バトル部

1－A教室

ガラッ

ラッシュ「オッス！」

レウト「よっ！」

二人が教室に入ってきた

????「よっ！ラッシュ」

ラッシュ「オッス、ブレイ！」

ブレイと呼ばれるバシャーモがラッシュにあいさつをする

レウト「よっ！ルガー」

ルガー「ああ」

レウト「ったく、つめてえな」

ルガー「いつもだ」

ルガーと呼ばれる迅竜ナルガクルガがレウトにあいさつした

この二匹はラッシュとレウトと仲良しの友達で

ブレイは運動神経がよくライバルがいる

ブレイ「ルガー！今日は負けねえぞ！」

ルガー「勘弁してくれ」

と冷静に話しているルガーは冷静で走りも早い

なぜブレイのライバルなのか

それは、ブレイがルガーと運動で勝負して負けてしまったからブレイがルガーをライバルとしてしまった

当の本人は嫌らしい

帰りのホームルーム

イックン「えゝみんなは部活は決まった？」

先生はホームルームで部活の事を言った

イックン「もう入学式から1週間になるけど、部活は決めるようにね・・・それじゃあホームルームを終わりにします。」

こうしてホームルームは終わった

ここで説明しよう

イックン先生が部活の事を言ってるのは、この学校はかならずどの部に入るのかを決めなければならない

モチロン帰宅部などはなにか事情がなければ認められない

そんなこんなで放課後

ラッシュ「それにしてもどうすっかな」

レウト「決まらねえな」

二匹は悩んでいた

ラッシュ「悩んでもしかたねえ、かたっぱしから行くしかねえか」
レウト「そんじゃ行くか」

そんなこんなで二匹は部活決めるために最初の場所に向かった

グラウンド野球場

最初は野球部の方へとやってきた二人

だが

ラッシュ「とりゃ！」

カキン！！とボールが何処かへ飛んでいった

レウト「マジで!？」

そうラッシュはホームランを打ってしまった

しかも遠くへ飛ばしてしまった

野球部部員「す・・・すごい！き、君野球部へ入らない」

なんと誘いが来た

しかし

ラッシュ「ごめんなこんなんじゃないやつまんねえから」

レウト「えゝ!？」

なんと誘いを断った

・・・・・・

レウト「なんで断ったんだよ！？いい感じだったし」
レウトがいうが

ラッシュ「俺は数倍に鍛えてるから運動神経は拔群ばっぐんだけどな、けど
さすがにこれじゃつまないからやめた」
とはっきりいう

レウト「おいおい！？レギュラーつかめるんだぞ！？いいのか？」
ラッシュ「いいんだ、俺はもっと燃えるもんがねえと足りねえんだ」

もっと燃えるもの

それがラッシュに求めるもの

・・・・・・

他の部活をやってみた結果

サッカーはラッシュが運動神経拔群のせいかゴールネットはやぶけ
無理

その他の運動部はすべてこの二匹が運動神経拔群のせいほとんど
壊滅に近い状態だった

学校内の部活は完全に無理があった

家庭科以外はすべて壊滅的（オイ）

・・・・・・

ラッシュ「結局はなかなか決まんねえな」
レウト「俺達って部活潰しに来たのか？」
とレウトはそんなことをいう

ちなみに二匹はほとんど運動神経抜群は共通で、
違いは、それぞれの趣味

ラッシュはギターが弾けるためそれなりに得意だがほとんどが吹奏
楽なため無理だった

レウトは楽器が出来ないが裁縫さいほうが得意である

ラッシュ「一体どうすりゃあいいんだ」

????「あっ!?!探したよラッシュ君達」

レウト「あつ、イックン先生」

なんとイックン先生がやってきた

ラッシュ「どうしたんスカ?先生」
と聞くと

イックン「実は君たちが部活まわって決まっていから探してたんだ・・・それで君達には自分達の部活を作ればいいと校長先生にいわれたんだ」

なんと自分達の部活を作る事ができるらしい

イックン「そこで君達はどんな部活にしたいか考えてきてほしんだ」

といったが

ラッシュ「いや、先生もう決めたんだ」

イックン「えっ？」

ラッシュのいったことに頭にハテナを浮かべるイックン先生

レウト「決めたって？部活か？」

ラッシュ「ああ、やっぱ俺達にはアレがかかせねえな」

レウト「それは一体？」

それは

ラッシュ「バトル部ってのはどうだ！」

と豪快にバトル部と言った

レウト「おっいいねえ！気に入ったぜ俺は」

レウトは賛成

イックン「うーんたしかに君たちは強いからできるかも」

ラッシュ「よっしゃ！さっそく部活に認定して部室とか作るか！」

イックン「えっ？でもそんな時間は」

ラッシュ「詳しいことは後で説明しますとりあえず部室の材料を大

至急持ってきてくれねえか？先生」

と部室をすぐに作る事に

.....

グラウンド

ラッシュ「よし！認定したところでさっそくとりかかるか！」

気合十分なラッシュ

レウト「でもどうやって部室を作るんだよ？」

そう1日で部室を作るのは無理なのだ

ラッシュ「大丈夫だ！・・・そんなじゃ始めるからレウトも手伝ってくれ」

レウト「しゃあねえな・・・やってやるよ」

こうして二匹は部室作りをした

そして1時間後

レウト「それにしてもお前結構早くできるんだな、しかも完璧に」
ラッシュ「まあそれでも体力はあるぜ」

二匹の目の前には

立派な部室が完成していた

目立つのは道場みたいなでかでかでモンスターを楽々と入れるスペースやバトル場ができており

まさに体育館のような広さでそれは完成した

レウト「ある意味こんなに早く作れるお前がすげえよ」

ラッシュ「まっこれでも大工とか作るのも得意だけどな」

とまあこんな感じにバトル部は活動をスタートした

バトル3 結成！バトル部（後書き）

ラッシュ「やっと始動したな」

そうだね

レウト「ところで作者、なんでラッシュはこんなに短時間で部屋とか作れるんだ？」

うーんたんなる思いとかも入ってるけどポケモンだから力あるし、それにリザードンだからできることだと思うんだ

レウト「俺は空から色々と道具とか運んできたけど」

まっレウトはリオレウスだからできるんだ

レウト「まっいいけどよ」

ラッシュ「はあ、疲れたから帰るわ」

レウト「じゃあねえな、じゃあ俺達帰るわ作者、それより次回は？」

今回は部員集めだよ

レウト「誰がくるんだか？」

それは俺しだいだけど

レウト「俺しだいって（汗）」

バトル4 部員求めてその1（前書き）

ラッシュ「なんかあのパロティのように感じるが？」

細かいことは気にしない♪

レウト「とりあえず、進めようぜ（汗）」

ラッシュ&レウト「ではバトル4！行くぜえ！」

バトル4 部員求めてその1

ラッシュ「これでよしっ」と

次の日の放課後

二匹はなにやら掲示板にポスターを貼っていたようだ

その内容は

集え（つどえ）戦う者達
バトル部部員募集！！

条件

強い奴また弱いので強くなりた奴、そして修行したい奴

部員になりたい奴はバトル部部室にて今日と明日の二日間面接を行う

ただし道場破りはお断りだ！また暴力で解決するヤローは却下だ！

以上！

バトル部部长 ラッシュ

バトル部副部长 レウト

・・・

とまあこんな感じの内容だった

.....

バトル部部室

ラッシュとレウトは期待になる部員を待つためしばらく待った

数分後

レウト「なあ？こんな条件で来るんだろうな？」

ラッシュ「とりあえず待て、それにバトルには忍耐も必要だろう？」

レウト「へいへい」

レウトは待つのが苦手らしい

待つことは、己の集中力にも影響があり、どんな場面でも集中するのが大事なのだ

待つことさらに数分・・・ついに

コンコン

と部室のドアをノックする音が聞こえた

レウト「やっと来たかゝ待ちくたびれたぜ」

やっと来たことに嬉しいレウト

ラッシュ「入ってきていいぞ」

とラッシュはドアの前にいる人物に声をかける

部室のドアが開かれ現れてきたのは・・・

バトル4 部員求めてその1（後書き）

はい！ここまで！

レウト「っおい！なんでここで終わるんだよ」

こちらとら時間の関係上なので、とりあえずいったん間をおいてから書くから待ってケロ

レウト「なにがなんだか（汗）」

バトル5 部員もとめてその2 あいつらも!?! (前書き)

さて後半です。今回は新キャラ登場です。

ではどうぞ

バトル5 部員もとめてその2 あいつらも!?

入ってきたのは体色は黄色と水色をした異様な模様に

4本のたくましい腕と足

顔はまるで不良のような怖い顔だ

見た目はトカゲのように見えるが、飛竜種の竜だ

ラッシュ「そんじゃ名前とモンスター名を言ってくれ」

そういうとその飛竜は自己紹介した

????「俺は轟竜こうりゅうティガレックスのレースです。よろしくお願
いします」

ティガレックス、レースは敬語であいさつした

ラッシュ「俺はリザードンのラッシュだ」

レウト「俺はリオレウスのレウトだ」

二匹もあいさつした

ラッシュ「さっそくだが、ここに入る理由を教えてください」

するとレースは言った

レイス「俺はいつも弱気で見た目から強いと思われているけど、弱くていじめられて・・・」

レイスは少し涙ぐむ

ラッシュ「そっか・・・お前も辛いんだな・・・わかった合格だ」

レイス「へっ？」

なんと合格が

ラッシュ「これから強くなりゃあいいじゃねえか、俺達がみっちり鍛えてやつから泣くなよ」

レイス「はい・・・」

レウト「ところでレイスはたしか俺達と同じクラスだったな？」

レイス「はい、同じクラスです・・・」

ラッシュ「まっ同じクラス同士で仲良くやろう、いつでも相談にのってやつから」

レイス「ありがとうございます」

レイスはおじぎをした

ラッシュ「おいおい、そんなにしないでいいから普通でいいぜ」

レイス「はい」

レイスは笑顔になった

とりあえずレウトにレイスの特訓を任せ、次の部員希望者を待つ

数分後

トントン

再び部室のドアのノックが響く

ラッシュ「入ってくれ」

すると勢いよく扉が開き入ってきたのは

ラッシュ「ブレイにルガーじゃないか!？」

なんとブレイとルガーだった

ブレイ「おめえらがバトル部を立ち上げたから俺達も入らせてもら
うぜ」

唐突だった

ルガー「俺は入る気h」

ブレイ「おらおらルガー逃がさないぜ」

とルガーのしっぽをつかみ逃がさないようにする

ルガー「はなせ」

ブレイ「はなさねえよ」

ラッシュ「しゃあねえからお前らも入っていいぞ」

と二匹を入らせるようにする

ブレイ「よっしゃ！ありがとなラッシュ！そんじゃやろうぜルガー」

ルガー「ちよつとまで！ってこらしっぱをひっぱるなってやめろー
！」

ルガーは強制的にブレイに引っ張られ連行される

ラッシュ「すまないルガー、ブレイにうるさくしたら困るので」

これで二匹も入部（一匹強制だが）

さらに数分後

ボタン

ラッシュ「なっ！？サクラにレイラ！？」

サクラ「なっ！？じゃないわよ！あたし達もそのバトル部に入れな
さいよ！」

とサクラは脅す（おどす）ようにラッシュに詰め寄る

ラッシュ「わっわかったから近い近い!？」

なんとか距離を離す

サクラ「わかればよろしい、行こうレイラ」

レイラ「えっ、ええ」

レイラもこれには驚く

そしてさらに

????「私達もバトル部に入っているかしら」

と入ってきたのは体色が青色で翼も青く、顔が怖い雌めすのモンスターと
頭が白く、両手に赤と青のバラに緑のマントを身に着けているポケ
モンが現れた

????「あっ自己紹介がまだでしたね、私は1-Bの炎妃龍えんきりゆうナナ・
テスカトリのテスナと申します。」

青色をした龍、ナナ・テスカトリのテスナが自己紹介をした

????「同じく1-Bのロズレイドのロゼアと申します」

もう一方の方、ロズレイドのロゼアは自己紹介した

今回は7人が入部した

ラッシュ「これで9匹だな」

レウト「ああ、そうだな」

今日はこれで解散となり

次の日

イックン「えー今日は転校生を紹介します」

なんと転校生が来るらしい

ラッシュ「まじかよ」

レウト「なあ？一体誰が来るんだ？」

これがバトル部にどう影響を受けるのか？

そして転校生とは？

はたして

バトル5 部員もとめてその2 あいつらも!?(後書き)

レウト「つかよお、作者あ」

なに？

レウト「まだ部員募集の方終わってねえだろ？いきなり転校生って大丈夫か？」

まったりあえず次回になればわかるから

レウト「なにがなんだか・・・あれ？ラッシュは？」

部室とかの改造に言ってるよ

レウト「まじで!？」

バトル6 転校生は番長!?(前書き)

ラッシュ「このタイトルからして転校生は番長か・・・」

そう、だけど君にもかかわることだよ

ラッシュ「えっ!? じゃあ」

まって、まだ続きがあるよ

ラッシュ「続き?」

君の過去に関係があるよ

ラッシュ「過去? はて? なんだ?」

とりあえず話に進めるね・・・どうぞ

バトル6 転校生は番長!?

入ってきたのは頭に炎が燃え、体つきはたくましく、筋肉質だ

そしてそいつは

????? 「俺、参上!」

と某特撮に出てくるセリフを言って入ってきた

なぜかポーズをとって

イックン「えゝ・・・じゃあ自己紹介を」

そう言うとその者、かえんポケモンのゴウカザルがなぜか教壇きょうだんの上に立っていた

イックン「えっ!? ちょ・・・」

先生が言う前にゴウカザルは自己紹介した

????? 「俺はゴウカザルのモモだ! てめえら俺のいうときけよな(ギロツ)」

なぜかクラスみんなを睨む

レウト「(なんだあこいつ?)」

モモ「いっとくが俺は別の高校では番長って呼ばれたんだ、みんな

俺の事は番長と呼んでくれよ」

とあたりは不穏な空気が流れる

・
・
・
・
・

放課後

レウト「なあ？あいつなんなんだ？番長とか、むしろKYじゃねえか！」

放課後のバトル部は不穏な空気が流れていく

レイラ「そうよね、たしかになんか嫌だったし」

レイス「俺もなんか嫌だ」

みんなして転校生にイヤミを言っていた

ラッシュ「ほら、ボサツとすんな」

とラッシュの一言でみんなそれぞれの特訓を開始した

ラッシュ「ふん！ふん！」

ラッシュはサンドバックでパンチを連発している

他の者を見てみよう

レウト「火炎放射！」

レウトは火炎放射の練習をしている

ちなみに部室もとい練習場は防火性により燃えない

レイス「えいっ！」

レイスは突進の練習

レイス「痛い（泣）」

ラッシュ「がんばれ！泣くな！」

とラッシュが特訓しながら応援する

レイス「はい！」

涙になりながらレイスは特訓する

その時！？

どんどん！

と、部室のドアがノックする

ラッシュ「誰だ？希望者か？」

ラッシュがドアを開いた

するといたのは

ラッシュ「ん？なんだ？番長さんじゃないか？なんか用か？」

なんとモモだった

するとモモは口を開く

モモ「ついに見つけたぜ！ラッシュ！」

ラッシュ「はあ？なんだ？俺の名前おぼえてたのか？」

モモ「しらばっくれても無駄だぜ」

とバトルの体制に入る

ラッシュ「なんだよ？バトルしてえのか？」

モモ「そうだ・・・いつとくが俺は最初からクライマックスだぜ！」

と、また某特撮のセリフを言う

ラッシュ「ほう、おもしねえな、じゃあかかって来いよ」

と挑発したラッシュ

モモ「ならその減らず口たたきだしてやる・・・そして過去の俺とは思ふなよ！龍炎りゆうえんのラッシュ！」

とモモはラッシュに向かって雷パンチを繰り出した

バトル6 転校生は番長！？（後書き）

さて少しラッシュの過去があきらかになっており

ラッシュ「いや、まだちょっとぐらいだろう？」

まあね、次回はバトルにやっと入るよ

ラッシュ「がんばれよ」

君がやるんだよ、あとラッシュの過去が明らかになります。お楽しみに

バトル7 龍炎・・・ラッシュの強さ(前書き)

ラッシュ「あれ？連続更新か？」

うん、テオ倒したから余裕ができちゃったんだ

ラッシュ「そんじゃバトルといこうか」

そんじゃ7話どうぞ

バトル7 龍炎・・・ラッシュの強さ

龍炎のラッシュ

俺はそんな肩書き・・・久しぶりだ

そんな俺の方で番長のモモが雷パンチを繰り返して俺を攻撃した

モモ「くらえー！」

雷パンチがラッシュの顔にもう少しで当たるが！？

パシッ

モモ「なっ！？」

なんと片手で受け止めた

さわぎを聞きつけメンバーが出てくる

レウト「なっ！？」

レイラ「パンチを！？」

レイス「片手で！？」

これにはメンバーも驚く

しかし一匹を除いて

サクラ「……………」

モモ「くっ!？」

モモはそのまま受け止めたため動けない

ラッシュ「どうした〜♪もうおしまいかな？」

と、とうの本人は余裕な表情

モモ「なめんなよ！」

ともう一方の拳で攻撃

ラッシュ「おっと」

ラッシュはもう一方の拳をまた片手で受け止める

そして

ラッシュ「うりゃ！」

なんとモモをそのまま投げ飛ばすが

モモは受身をとった状態にしてそのままばくちゅうしてなんとかダメージをしのぐ

モモ「はあはあ……あんたも変わらないな……そのパワー」

ラッシュ「俺は鍛えてるからそのくらい当然だぜ、番長さん」

ラッシュを見ると、疲れた表情をしていない

モモ「ならば俺の必殺技！受けてみる！」

と、モモは姿勢を低くする

ラッシュ「おう！やってみろよ！鬼炎きえんのモモよお！」

そして・・・

モモ「行くぜ！オーガ・フレイド！」

モモは炎を身にまとい突進してきた

モモ「くおらああっ！」

突進をモロにくらっていくラッシュそこから

モモ「オラオラオラア！」

連続で炎をまとったパンチがラッシュに襲い掛かる

だがラッシュは絶えている

モモ「オラア！どうしたあ！」

連発のパンチを食らっても平気な顔をするラッシュ

すると

ラッシュ「カウンター」

するとラッシュの拳が、モモの脇腹わきばらにグリーンヒット

モモはそのまま地面にひきづられ、倒れてしまった

レウト「つ・・・強い！」

レイラ「あれがラッシュの実力!？」

レイス「すごい」

メンバー全員が驚きの表情を見せる

感想の発言をしたメンバー以外は固まっている

ただ一人だけ、冷静だった

サクラ「・・・・・・・・」

レイラ「サクラ?・・・」

サクラはただ彼を見ていた

ラッシュ「よし!みんな!こいつの看病をするから手伝ってくれ
!」

と、ラッシュはそう言い、モモを担いで部室に運んだ

・・・

レウト「なあ？ラッシュに聞くが・・・龍炎のラッシュって・・・まさかお前があの」

となぜか緊張した様子だった

ラッシュ「しゃあねえーなあ・・・そんなじゃ教えてやるぜ」

と、モモを看病しているメンバーとそれを聞きたいメンバーがラッシュに目を向ける

ラッシュ「サクラはもう聞いてるからな・・・いや・・・知ってるんだ」

レイラ「えっ!？」

サクラ「うん、」

サクラはどうやら知っているらしい

ラッシュ「そんなじゃ話すぜ」

とラッシュは語った

バトル7 龍炎・・・ラッシュの強さ(後書き)

バトルって難しいな

ラッシュ「それでもがんばったと思うぜ？」

だんだん慣れていかないかね

ラッシュ「次回は俺の過去だな」

うん、連続更新になったけど

ラッシュ「けど？」

あんまつかれてないんだけどね

ラッシュ「なんじゃそりゃ(汗)」

バトル8 信じる道（前書き）

・
・
・
・
・

ラッシュ「元気出せよ、これからやっていけばいい、がんばれよ」

・
・
・
・
・

レウト「どうしたんだ？作者？」

ラッシュ「そっとしておけ、ではどうぞ」

バトル8 信じる道

ラッシュ「俺は生まれたときから一人ぼっちだった・・・両親は格闘家で、ずっと家を留守にしていたんだ、俺も中学の時は暴れん坊で、みんなから『龍炎のラッシュ』と呼ばれていた」

レウト「俺もそのうわさは聞いたことがある！強くて凶暴なりザードンがいるって、まさかラッシュのことだったのか！」

ラッシュ「まあな・・・けどあの時から俺は変わった」

全員（ラッシュとサクラを除く）「変わったって？」

ラッシュ「ああ・・・あれは2年前の頃な」

・・・

2年前

ラッシュ「オラァ！」

俺はケンカケンカの大騒ぎだった、

もちろんあいつと戦った

・・・

それがモモだ

まっどっちにしろ俺が勝ってたからな

だが俺は、ある男に敗れた

そいつは竜っぽくてな

強かった、

ラッシュ「そして俺はその時に傷を付けられたんだ・・・」

ラッシュは右翼の翼膜には痛々しい傷の跡が付いていた

ラッシュ「けどな・・・俺はソイツに言われたよ」

『力はそのんな風に使うもんじゃない！力は！仲間と大切な者のために使うんだ！お前には希望がある！』

自信を持って！そして、バトルは楽しくやるもんだ』

その時俺の心に何かが貫いていた

ラッシュ「それから俺は改心してな、仲間も作った、もちろんサク
ラもだけどな」

サクラ「あたしも、あいつとは付き合いが長いからラッシュには変わってもらいたいと思っていたしね」

するとラッシュのほほをつねる

ラッシュ「いててててっ！やめてくれ！サクラ」

サクラ「やめない♪」

全員「あはははっ！」

全員笑った

レウト「俺はいつでもついていくぜ！」

レイス「怖いけど、部長についていくよ！」

ルガー「ふんっ！俺もだ」

ブレイ「なにがあらうと仲間は仲間だ」

テスナ・ロゼア「私達も」

全員が一致団結する

すると

モモ「う・・・うゝん」

モモが起きる

ラッシュ「起きたか？モモ」

モモ「・・・」

モモはだまる

ラッシュ「オラッ！」

するとラッシュは平手でモモの肩をたたく

モモ「うおっ！」

ラッシュ「もう過ぎたことだぜ・・・いつでも相手になりたいなら、バトル部に入るか？」

なんとバトル部の入部を言い出したラッシュ

レウト「えっ！？大丈夫なのか？」

ラッシュ「どうせコイツに居場所がねえからな」

モモ「なぜ俺をそこまで？」

とモモは聞いていくが

ラッシュ「決まってるだろ、仲間だからだ」

仲間

それがラッシュにとっての言葉であり、原動力である

モモ「・・・ごめんなさい」

するとなぜか謝るモモ

ラッシュ「気にするな」

こうしてモモを仲間に加えたバトル部

さて次回はどうなることやら

バトル8 信じる道（後書き）

ラッシュ「はあく終わったぜ」

レウト「それより作者、どうしちまったんだ？」

ラッシュ「それは活動報告に載ってるから行って来い」

レウト「あ・・・ああ」

ラッシュ「はあく作者がこんな状態じゃ説明できないな・・・そんなじゃ俺が説明しますか」

ラッシュ「いちおうモモは電王のモモ○○○が由来らしい、とりあえずこのぐらいか？」

バトル9 顧問は誰だ？（前書き）

ラッシュ「そういやあ、顧問は誰だかわかってねえな」

今回はバトル部顧問の先生は誰なのかを決まるよ♪

レウト「やけに機嫌いいな」

モンハンとか落ち着いたから

ラッシュ「ポケモンはどうすんだよ（汗）」

執筆しながらやっていくよ、

レウト「なにがなんだか、ではどうぞ」

バトル9 顧問は誰だ？

ポケハン学園職員室

イックン「とりあえずは落ち着いたけど、バトル部の顧問はどうしよう」

イックン先生は前回のモモの事とかが解決して落ち着いたが、今度はバトル部の顧問をどうするか悩んでいた

イックン「僕とかはうまくできそうにないし、ガル君とかだったらできそうだしな」

????「俺がどうかしたか？」

と、登場したのはイックン先生と姿は同じだが耳はウサギのような紫で、体色は少し暗い紫だ

黒狼鳥こくろうちようイヤンガルガだ

イックン「あつ、ガル君」

ガル「どうしたんだイックン」

イックン「実はね、バトル部の顧問をどうするか考えてたの」

ガル「顧問……かあ……なら俺がやるがいいか？」

イックン「えっ!？」

ガル先生の答えに驚く

ガル「まっお前と幼い頃から知り合ってるしな、友達ってもんだろ？」

イックン「うん！ありがとうガル君！」

ガル「いや、俺はなんかバトル部に興味があつてな、校長に顧問を頼まれたからな」

本人は校長に頼まれたためやるみたいだ

イックン「ありがとう！」

ガル「あつ、ちなみに校長がお前に用があると呼んでいるぞ」

イックン「えっ！？校長先生が！？」

ガル「今から行って来い、呼びだぞ」

イックン「わかった、行って来るね」

そう言うといックン先生は職員室から出て校長室へと向かった

ガル「さて、俺はバトル部に行ってみるか」

そう言うときガルはバトル部の部室へと向かった

・・・

コンコン

???? 「入りなさい」

イックン 「しっ、失礼します!」

イックンは校長室へと入った

校長室

???? 「よく来てくれました、イックン先生」

そう挨拶した^{あいさつ}のは、頭に角のような触角に、体にサークル状のアクセサリー? 体色は白いポケモン、

創造ポケモンのアルセウス、彼こそこの学園の校長だ、

イックン 「はい、ゼウス校長」

校長の名はゼウスと呼んでいる

ゼウス 「ここに来たのはあなたに頼みたい事があります」

イックン 「頼みたいこと?」

校長が頼みたい事とは

ゼウス 「実はバトル部の副顧問をあなたに任せたいと思いますが?」

イックン「副顧問を？」

イックンは緊張の面持ちだ

イックン「でも僕は」

イックンは断ろうとしたが

ゼウス「あなたならできます、あなたはもうこの学園に少し慣れていきました、なのでこれから副顧問として生徒を見て、守る立場としていったほうがいいと私は思います。どうか副顧問になっていただけないでしょうか」

とお願いする校長

少しの静寂

そして・・・

イックン「・・・わかりました・・・やります」

イックンからOKが出た

ゼウス「ありがとうございます。それではもう行っていいですよ」

イックン「はい、ありがとうございます」

そう言ってイックンは校長室を出た

・・・

ガル「ここか・・・」

その頃、ガルは部室の入口前までやってきた

ガル「さてどうなんだ」

ガルは部室に入って行った

バトル9 顧問は誰だ？（後書き）

ラッシュ「副顧問はわかったが顧問のガル先生は途中なんだが」

それは次回になるから待ってて

レウト「あの先生おっかないからな」

ある意味の強敵っぽいけど

ラッシュ「まっ！俺はいいけどな」

レウト「いいのかよ」

バトル10 対決！ラッシュVSガル（前書き）

ラッシュ「おっ！俺と先生とバトルかあ〜」

今回は君にある力があることを書いておくよ

ラッシュ「なるほどな・・・で？どんな力だ？」

それは見てからのお楽しみ

ラッシュ「そうか・・・ではどうぞ」

バトル10 対決！ラッシュVSガル

モモ「とりゃあ！」

モモがラッシュに攻撃をしかける

ラッシュ「甘いぜ」

ラッシュはバックステップでかわす

ラッシュ「龍炎拳！」

ラッシュは拳を強く握る、

すると拳に龍のような炎がこめられる

ラッシュ「おら！」

モモはそれを避けられず龍炎拳を食らってしまった

モモ「くあっ!？」

モモは倒れた

ラッシュ「あまり攻撃的に攻めるな」

とモモに手を差し伸べる

モモ「うっ!？うっせえ」

と恥ずかしそうにちちこまるモモ

すると部室のドアからガル先生が入ってきた

部員一同は一斉にガルの方を見た

ガル「ほう、さすがバトル部だな」

と一言言う

ラッシュ「ガル先生か・・・なんのようで？」

と質問したラッシュ

ガル「ああそうだったな・・・今日から俺がバトル部の顧問を務めるガルだ」

と言う

すると

全員『えええええええええっ!?!?』

と全員驚く

ガル「なんだ？驚くことないだろ？」

とガル先生

ラッシュ「そうか・・・じゃあよろしく願いしますガル先生」

とラッシュは挨拶する

ガル「そうか・・・ところでラッシュだったな・・・部長は」

ラッシュ「はい」

ガル「俺とバトルしてくれないか？」

なんとバトルの申し込みが

ラッシュ以外の全員『ええええええええええっ!?!』

レウト「まじかよ!?!」

と驚く

するとラッシュは

ラッシュ「はい!ぜひやらせてもらいます」

と、バトルをOKした

ガル「ありがとな、だが先生だからといってなめるなよ、俺は元々教官だった身だ、それなりに覚悟はできてるだろうな？」

と、質問した

ラッシュ「先生だからって負けません」

と、

・・・

バトル部バトルフィールド（外）

両者が前に出る

レウト「それでは、ラッシュVSガル先生、試合開始！」

と両翼で旗を下げるレウト

ガル「先制はもらうぞ、炎ブレス3連打！」

と、ガルは自分の得意技炎ブレス3連打をラッシュに与える

だがラッシュは

ラッシュ「守る！」

守るでなんとかしのぐ

ガル「ならこれはどうだ」

いつの間にかラッシュの前に

ガル「サマーソルト！」

体勢を低くして宙吊りにしつつ、毒のあるしっぽで攻撃する

ラッシュ「くっ!？」

ラッシュは守るの効果が切れてサマーソルトを避けられず食らってしまった

ラッシュ「うっ!？」

食らった後ラッシュの顔色が悪くなる

ガル「どうだ？俺のサマーソルトの毒にやられた感想は？」

と、言うガル

実はガルのしっぽには毒があるのだ

なのでラッシュは毒状態になった

サクラ「毒!？」

レイラ「やばいわね、これじゃあラッシュはこのままやられるわ」

モモ「まじかよ!?!ピンチじゃねえか!?!」

ルガー「どうするラッシュ?」

ブレイ「長期戦は無理だぞ!?!」

レイス「部長」

と、観客の部員達はラッシュを見守る

ラッシュ「へっ、やるじゃねえかよ先生」

とこんな状態でも笑顔を見せるラッシュ

ガル「こんな状態なのになぜ笑ってるんだ？」

と、聞くガル先生

ラッシュ「楽しいから言うんだよ、」

とラッシュ

ガル「ふんっなかなか根性あるな」

ラッシュ「へへっ」

と照れるラッシュ

ガル「だが毒の状態でこの俺に勝てるかな？」

たしかにラッシュは毒状態

長期戦になると不利な状態だ

ラッシュ「へへったしかにな・・・そんじゃ少し本気ですか！」

とラッシュは目を閉じて瞑想めいそうをした

ガル「？」

するとラッシュの周りに風が集まりさらにラッシュに赤いオーラが出てくる

ラッシュは目を開けた

ガル「（なんだ？この感じは？・・・）」

とガル先生もなにか感じた

ラッシュ「そんじゃ行くぜ先生、波動弾！」

するとラッシュの拳に赤い光球が放たれた

ガル「くっ！？」

ガルは波動弾をくらってしまった

ガル「くっ！？まだまだ」

ガルは立ち上がるが

ガル「なっ！？」

目の前にラッシュが攻めてきた

ガル「くっ！？炎ブレス」

と炎ブレスを放つが

ラッシュはそれを軽々とかわした

ラッシュ「行くぜ先生！火炎放射！」

と近距離で火炎放射を放った

ガル「くっ！？だが俺は炎はあまり通用しないぞ」

そう、イヤンガルガは炎には耐性がありあまり通用しない

ラッシュ「続けて雷パンチ！」

と今度は雷パンチを繰り出した

ガル「ぐわっ！？」

これも食らってしまう

ラッシュ「最後だ！セイントブレス！」

ラッシュの口から光のブレスを放った

ガル「ぐわあああああっ！？」

ガルは食らってしまい倒れた、戦闘不能だ

・
・
・
・
・

ラッシュ「大丈夫ツスか？」

その後ガルを部室で休ませたラッシュ

ガル「ああ大丈夫だ、さすがに強いな」

と強さを認めるラッシュ

ラッシュ「いや、まだまだですよ」

と言う

ガル「そうか」

すると

イックン「ガル君！」

とイックン先生が部室へと入ってきた

イックン「うわあ！大丈夫！？」

と心配するイックン先生

ガル「俺は大丈夫だイックン、それで話は済ませたか？」

と聞くガル先生

イックン「うん、僕バトル部の副顧問をやることになったんだ」

と

ラッシュ「おっ！イッくん先生が副顧問かぁ」

ガル「ははっこれからがんばらないとな」

そんなこんなで顧問のガル先生と副顧問のイッくん先生が仲間になった――（えっ！？）

そんなこんなで

バトル部は

前へと進む

バトル10 対決！ラッシュVSガル（後書き）

ラッシュ「波動か・・・」

あたり、

レウト「けど波動ってルカリオとかが使うんじゃないのか？」

本当はそうなんだけど、ラッシュは特訓を重ね、波動が使えるようになってるんだ

ラッシュ「なるほどな」

セイントブレスは自分のオリジナルでラッシュにはまだ特殊な能力があるんだ

レウト「けどチートとかにはならないよな？」

そこまでしたら意味ないでしょ、負けるときは負けるのもあるよ

ラッシュ「まっそうだな」

さて今回はラッシュの実家におじゃまします

レウト「あれ？ラッシュは一人で暮らしているんじゃない？」

家は自分用だけど実家は別だよ

ラッシュ「まっ楽しみにしてくれ」

レウト「気になる」

バトル11 実家は!?(前書き)

レウト「このタイトルは?」

ラッシュの実家に入りまゝす

レウト「ラッシュの実家って一体?」

見ればわかるよ、ではどうぞ

バトル11 実家は!?

ピリリリリッ!!

ピリリリリッ!!

ガチャ

ラッシュ「もしもし」

????? 『ラッシュ坊ちゃま』

ラッシュ「ああセバスか」

????? 『そちらの方はどうぞいますか?』

ラッシュ「ああ、楽しんでるぜ」

????? 『そうですか、おっとそうでした、坊ちゃま! 実家にお戻りください』

ラッシュ「なにかあんのか?」

????? 『はい・・・実は・・・』

セバスと呼ばれた電話の主

彼はラッシュに事情を説明した

ラッシュ「わかった、俺の友達達もつれていいか？」

と、いうと

????『はい、お友達もつれてきていいですよ、所で?』

ラッシュ「なんだ?」

????『サクラ様との関係はどうですか?』

ラッシュ「なっ!?!」

ラッシュはとたんに頬を赤く染める

ラッシュ「ばっ!?! バカヤロウ!?! なんて事いうんだ!?!」

????『すっすみません坊ちゃま』

ラッシュ「はあゝ、とりあえず土曜に行くからな」

????『はい、お待ちしております』

がちやつ

プープープー

ラッシュ「つたく! セバスのヤロー」

ラッシュはどうやら土曜に何処かへ行くようだ

・
・
・
・
・

土曜日

ラッシュ「お前らいるか？」

と、みんなにいう

ちなみにメンバーは

・ラッシュ

・サクラ

・レウト

・レイラ

・ルガー

・ブレイ

・レイス

・モモ

以上

残るバトル部メンバーは都合により欠席

ラッシュ「今回は俺の実家の里帰りだ、しかもトレーニングルームもあるからな、そんじゃあ出発！」

バトル部メンバーはバスでラッシュの実家のあるとなり町へと向かった

数分後

ラッシュ「到着だ」

歩いてすぐ

レウト「でっけえー！ー！ー！？？」

レイス「ええええええええええっ！！？？」

ルガー「お前の実家って！？」

ブレイ「大金持ちだったのか！？」

と、ラッシュにいう

ラッシュ「ああ、ここが俺の実家だ」

目の前には大きな黒い門

その先には一本道の森

ちなみにサクラは知っているため驚かない

モモはあまりのラッシュの実家の敷地の大きさに驚く

ラッシュは早速

ピンポーン

???? 『ハイ?』

ラッシュ「俺だ、ラッシュだ! 門を開けてくれ」

???? 『ラ、ラッシュ坊ちゃま! ? す、すぐ開けます! ? 』

すると門は開いた

ラッシュ「行くぞ」

ラッシュに続けてメンバーもラッシュについていく

.....

レウト「でけえ」

メンバーの目の前にはお城のような建物があった

その横には二つの石像が並んでいた

どちらもリザードンの形をした石像だ

ラッシュ達はそのままバカでかい扉を通り、中へ入っていった

すると

『おかえりなさいませ！！！坊ちゃま！！！！』

と、メイドに執事しゅじが出迎えてくれた

そしてその中心から一匹のポケモンがやってきた

鼻にドリルのような突起物

その上に角があり、手には穴が開いていた

体は鎧のような体で岩のようだ

ドリルポケモンのドサイドン

ラッシュ「ただいま、セバス・・・いや・・・ドリ」

ドリと呼ばれたドサイドンが地に伏せる

ドリ「お帰りなさいませ、坊ちゃま」

・・・

みんなはそれぞれラッシュに実家の見学をした

続きはまた次回

バトル11 実家は!?(後書き)

レウト「これだけか!？」

うゝんもつと書きたいけど色々と整理してからかな

レウト「ってかどんだけなんだよラッシュの実家は!？」

続きはまた今度ね

レウト「ある意味ラッシュって何もん？」

うゝんチートもあつたりしたり(笑)

レウト「おい!?(汗)」

バトル12 知り合いゝ新たな仲間ゝ（前書き）

ラッシュ「ん？新たな仲間？」

今回はラッシュの実家の続きで、新たに仲間が増えるよ

ラッシュ「どんな奴だ？」

それは君に関係ある人物だよ

ラッシュ「いや（汗）わかんねえよ」

ではどうぞ

ラッシュ「おい！（汗）」

バトル12 知り合いゝ新たな仲間ゝ

ラッシュ「パーティー？」

セバス「はい、なので今夜は坊ちゃまのお友達にも参加させていただきます」

二匹はなにか話していた

ここはラッシュの実家のラッシュの部屋

いたって普通の部屋で

いたるところにマンガやトレーニンググッズなどが置かれている

ラッシュ「まああいつらにはいいと思うぜ」

セバス「しかし、坊ちゃま？お友達はマナーの方はどうなんでしょうか？」

と、言う

ラッシュ「まあ別にマナーがどうだろうとなくみんなにマナーの特訓とかもしたからな」

セバス「マナーの特訓ですか、バトル部というものすごいですな」

ラッシュ「いや（汗）マナーはバトルと関係ねえーし」

とつっこむラッシュ

セバス「ではとりあえず他の方達に夕方頃に入浴するようお願いします」

ラッシュ「わかった、それからオヤジ達は帰ってくるのか？」

と、質問する

セバス「残念ながらご主人と奥様は」

ラッシュ「わかった、まあしかたねえか」

セバスの会話を中断するラッシュ

セバス「それではこれにて」

セバスは部屋を出た

.....

ラッシュ宅トレーニングルーム

レウト「つばめがえし！」

ガスッ！

レウト「いてえええええええええっ！！？？」

メンバーはトレーニングをしていた

その中でレウトはポケモンの技、ツバメ返しの練習をしていた

レイラ「レウト？大丈夫？」

レウト「うっ！？だ・・大丈夫（泣）」

泣き泣きの表情だ

レイラ「もう無理しないの！」

と、しっぽでたたく

レウト「いててて！？」

一方

サクラ「いやしょ！ケアラ！」

サクラは回復魔法などを練習していた

しかも本を持っていた

ラッシュ「よっ」

ラッシュが出てきた

サクラ「ラッシュ、見てたの？」

ラッシュ「見てたぜ、回復魔法かく俺にもかけてくれよ」

サクラ「えっ／＼／＼／」

サクラが当然赤くなる

ラッシュ「どうしたんだ？」

サクラ「なっ！？なんでもないわよ！」

ラッシュ「赤いぞ？顔？」

ゴスツ！

サクラはラッシュに顔面パンチした

バタツ！

ラッシュは気絶した

サクラはわれにかえる

サクラ「いっ！？いけない！？ケアルガ！」

すぐさま回復魔法ケアルガでラッシュを回復した

ラッシュ「お・・・おまつ！？それはないだろう」

サクラ「知らない！アンタが悪いんでしょ！」

怒ってそっぽを向くサクラ

ラッシュ「ごめんな俺が悪かった、だからマジでこっち向いてくださいサクラさん」

と、謝るラッシュ

すると

サクラ「わかったわよ、もう！」

それでも怒ったままのサクラ

でも、なぜか笑顔になったサクラ

ラッシュ「はあゝなにがなんだか」

ある意味こんなラブラブな会話になる

ピンポーン

ラッシュ「ん？誰か来たようだな」

サクラ「行ってみましようよ」

二匹は玄関に向かった

玄関

そこには獅子のような赤い体色のモンスターがいた

紫の角に大きな翼にしっぽの先端に赤い毛がフサフサに揺れる

ラッシュ「おっ！テトじゃねえか？久しぶりだな」

するとテトと呼ばれたモンスター、テオ・テスカトルが二匹に振り向く

テト「おっ！ラッシュにサクラじゃん！久しぶりだな！」

ラッシュ「お前も相変わらずだな」

テト「お前、ずいぶん変わったな、サクラがいたからか？」

するとラッシュの顔が赤くなる

ラッシュ「バツ！？ちげえよ！？」

サクラは笑っている

テト「照れるなよ、俺もやっと彼女を見つけたんだしよ」

ラッシュ「彼女？」

テト「ああ、入ってもいいぞ」

すると

サクラ「えっ！？テストじゃない」

テスト「ラッシュにサクラ！？なんであなた達が！？」

テト「えっ!?!? どういうことだ!?!?」

テトが驚く

なんとバトル部のメンバー

テスナがいたのだから

バトル12 知り合いゝ新たな仲間ゝ（後書き）

ということでテトに来てもらったよ

テト「俺はテオ・テスカトルのテトだ、よろしく頼む」

ラッシュ「しかしびっくりしたな（汗）まさかテスナとお前が」

まあ次回にはパーティー開催だからね（汗）

テト「ってか俺にもしやべらせろ！」

ではまた次回

テト「って人の話を聞けー！！」

バトル13バトルパーティー（前書き）

ラッシュ「あれ？なんで俺らの方なんだ」

こっちの方がなぜか人気あるらしくて、さらに君はコラボしてるからこっちの方をがんばろうと思ってね

ラッシュ「なるほど」

そして・・・あの人の再会が

ラッシュ「あの人って・・・まさか!？」

過去にラッシュの心を変えた恩師の登場だよ!そして、もうすぐこのアクセス数が3000になるよ!

ラッシュ「よしっ!がんばるか!」

ちなみに俺の方から選出した者を選んだ、中でも俺の小説のキャラもいくつか登場してるぞ

ラッシュ「マジかよ!?!それじゃああいつらもか!?!」

そのとおり!ではどうぞ!

バトル13バトルパーティー

テスナを含めてほぼ集まったバトル部一行

夜

パーティー会場

ラッシュ達はお風呂に入ったため体もキレイになっていた

レウト「そういりゃあラッシュ？パーティーってなんのパーティーをやんだ？」

レウトが質問する

ラッシュ「ああ、みんな実はな・・・バトルパーティーを毎年やってるんだ」

サクラ・テト以外の全員『ええええええええええっ！？』

モモ「ということは・・・よっしゃあ！燃えてきたぜ！絶対倒してやるぜ！ラッシュ！」

と、モモは気合が入っていた

ラッシュ「まあ俺も参加してるし・・・今年はシードだからな」

レイラ「今年も？」

サクラ「ええ、ラッシュが考案したのよ、だから帰ってきたのよ、今年が第3回で毎年やるのよ」

レイラ「そうなの（汗）」

そんなこんなで

セバス「さあー！今年も始まりました！ラッシュ坊ちやま主催のバトルパーティー！わたくし司会実況は私ドサイドンのセバスがおおくりいたします！」

わああああああああああああああああああ！！！！

パーティー会場はおおいにわく

セバス「さて、それでは早速始めましょう！注目のトーナメント表はコチラ！」

トーナメントはこのようなになっている

1回戦 レイドVSテト

グレスト（激昂ラージャン）VSモモ

ドッジ（ゴウカザル）VSリサル（ドダイトス）

フォケVSレウト

シード ラッシュ

以上

セバス「それでは1回戦第1試合、謎のフードをかぶる男、その正体はたして！謎のフード男レイド！」

バトル場にフードをかぶったその者が現れる

姿もわからない

ちなみにバトル会場はパーティー会場の外のドームで行われている

セバス「続いて、ラッシュ坊ちやまの友人、テト様！」

テトが翼を広げ空に登場した

テト「見ていてくれよ！ラッシュ！テスト！俺が優勝してやるぜ！」

意気込むテト

しかし

レイド「お前では俺は倒せない」

テト「何っ！」

挑発したような声だ

レイド「始めよう、お前の实力を見せてみる！」

テト「へん！その返事！たっぷり返してやるぜ！火炎放射！」

テトが火炎放射を繰り返した

レイド「・・・・・・・・」

無言のまま上へ回避した

だが

レイドの周りに黄色の粉塵が舞っていた

テト「よしっ！かかった！粉塵爆破！！」

すると粉塵が爆発した

粉塵爆破

テオ・テスカトル、ナナ・テスカトリが得意とする攻撃技で中・遠距離と近距離の技だ

ただ弱点がある、それは粉塵の色により攻撃方法がわかってしまうことだ

赤の粉塵なら近距離、黄色の粉塵で中・遠距離の粉塵爆破ができるのだ

中でも黄色の粉塵は隙がでかく、攻撃される場合があるのだ

だがテトは空中では避けられないことを知っているため空中で粉塵爆破を起こしたのだ

テト「俺の勝ちだ！」

と、勝利を確信したが

テト「くっ！？」

突然テトは倒れてしまった

レイド「残念だったな」

目の前にはレイドが現れた

テト「な・・・なんで・・・」

レイド「俺は身代わりを使ってお前の粉塵爆破を予測していた・・・だからだ」

テト「くっ！？・・・」

テトはそのまま眠ったように倒れた

セバス「しょ・・・勝者！レイド！」

わあああああああああああああああ！！！！！！

勝利はレイドによって収められた

それを見ていたラッシュは

ラッシュ「あの感じ・・・そして一瞬でテトを・・・まさか!?!
あの人は!?!」

バトル13バトルパーティー（後書き）

ラッシュ「なあ？あの人って」

フードの男だね・・・それは試合してるとわかるよ

ラッシュ「俺にはわかるがなんで隠すんだ？」

そこはネタバレんなのでいえない

ラッシュ「そうか・・・ところでなんでドッジやフォケまでいんだ？」

ドッジ「だって俺達にもこっちの出番が来たってオファーがきたんスよ」

フォケ「レウトと戦うのかぁ〜これは楽しみだな」

レウト「ええええええっ！？俺狩られちゃう！？」

安心しろレウトよ、討伐とかじゃないからなそれに武器は最小限に考えている

レウト「そ・・・そうか（汗）」

今回は俺の苦手な激昂ラージャンVSモモの対決とドッジVSリサルの対決となるぞ

ラッシュ「フォケとかは人間だが大丈夫なのか？（汗）」

大丈夫♪人間キャラもたぶんいるから

ラッシュ「たぶんっておい!? (汗)」

バトル14ゴリラとWサルとカメとバトル(前書き)

ラッシュ「なんかバ○○○みたいだな(汗)」

調子に乗ってたらこうなったというか連続更新だよ

ラッシュ「すごく嫌な感じがするが(汗)」

バトル14ゴリラとWサルとカメとバトル

セバス「続いて第2試合、そのパワーを胸に焼き付けろ！激昂ラー
ジャン！グレスト！」

グレストと呼ばれるラージャンはバトル場に立つ

強くたくましい筋肉質な黒い体色にしましまの金色、頭の毛は黄金だ

セバス「続いて、俺はとことんとまらない、燃える番長！モモ！」

モモがバトル場に出る

モモ「俺、s」

セバス「さあバトル開始です！」

モモ「ちょっと待て！？決めゼリフぐらい最後まで言わせろ！」

そんなこんなでバトル開始

グレスト「ほうゝこんなチビザルが相手か・・・フン！」

グレストは挑発する

対するモモは

モモ「へん！てめー見たいな金ピカゴリラ野郎には負けたくねえな
！」

こっちも挑発する

すると

グレスト「なんだと!!」

なんとグレストが挑発に乗ってしまった

グレスト「この俺を怒らせたことを後悔すんなよ小僧!!」

自慢の連続パンチを繰り出すが

モモ「見せてやるぜ俺の必殺技パート2! バーニングインファイト
!!」

するとモモの足と拳が炎を宿す

モモ「オラララララアアアアアアッ!!!!!!」

連続で炎をまとったインファイトを繰り出した

グレスト「ぐおおおおおおっ!! 負けてたまるかあああああ
あ!!」

グレストが両腕で守るが

モモ「オラオラオラア!! ならブレイブインファイトオ!!」

さらに炎がまし、さらに強くなった

グレスト「ぐわあああああああっ!?!?!」

グレストは耐えられず倒れた

セバス「勝者! モモ!」

モモ「やったぜ!」

モモは指をVサインした

セバス「かなり盛り上がってきました! それでは第3試合、ドッジバトルで鍛えた期待のエース! ドッジ!」

ドッジがバトル場に現れた

ドッジ「おお! 燃えてきたッス!」

一方

ラッシュ「あのドッジっていうゴウカザル、かなり強い感じだな」

テト「えっ!?! 感じるのか?」

テトはみねうちらしく、ケガはしてるがたいしたことはいらない、古龍種はケガはするが、直るのは時間がかかるが、特製の傷薬により少しずつなおっている

ラッシュ「ああ、見てわかる」

バトル場に戻ろう

セバス「続いては、パワーとディフェンスで鉄壁を誇るパワーオブディフェンダー！リサル！」

リサルがのっしのっしとバトル場に立つ

セバス「ちなみにお二人は知り合いらしくこれはどういう試合となるでしょうか！」

ドッジ「リサル！かかってくるツスよ！」

するとリサルは

リサル「今回はお前には食い物のうらみも含めて倒す！」

リサルはなぜか怖いオーラを放っていた

ドッジ「うわぁ〜かなりやばいツスね（汗）」

セバス「それではバトル開始！」

ドッジ「先行はもらったツス！マツハパンチ！」

ドッジはマツハパンチで先制攻撃する

だがリサルはその場を動かない

そのままマツハパンチを受け止める

ドッジ「なっ!？」

リサル「俺にそんなパンチが効くと思うのか？」

ドッジを睨むリサル

リサル「地震！」

至近距離から地震で攻撃

ドッジ「わっ!？ヤバッス!？ごめんッス!リサル！」

リサル「何!？」

なんとリサルにのったドッジ

ドッジ「というわけでゴメンッス、ドッジ&エッジ！」

こっちも至近距離から炎の剣を作り出してリサルに攻撃した

リサル「ぼわああああああああっ!?!?？」

リサルは黒コゲになり倒れた

セバス「勝者!ドッジ！」

ドッジ「やったッス！」

一方の観客席

ラッシュ「やるな」

テト「あわれに思うぞ、あのドダイトス（汗）」

サクラ「次はレウトね」

レイラ「大丈夫かしら」

サクラ「全力で応援しましょう」

レイラ「そうね」

次はレウトだ

セバス「1回戦も残すところ1戦となりました！さあいきます！まずはブリーダーハンターと呼ばれ、別世界から登場したハンター！フォケ！」

フォケが赤い王様のな防具を着ていた

カイザーシリーズと呼ばれる防具らしい

セバス「続いてラッシュ坊ちゃまのお友達でバトル部副部長！レウト様！」

レウトが空高く登場した

セバス「さて、見てみると若干フォケ選手が有利に見えます、カイザーシリーズはテオ・テスカトルの素材を使用しています。ちなみにフォケ選手は別世界のポッケ村という村の出身であります。モン

スターハンターの彼でもやっぱりモンスターは飼っています。そんな対するフォケ選手はどうなのか楽しみです！」

レウト「どうしようカイザーシリーズじゃ俺の炎は効かないしな・
・あの技とか俺はヘタレでもがんばってきたんだ・・やるぞ！」

レウトは気合をいれた

フォケ「相手はリオレウスか・・あいつもそうだしな・・けど俺はそう簡単にやられるか」

フォケは氷の太刃氷刃「雪月花」と構えた

セバス「さあ！バトル・・開始！」

バトル15レウトVSフォケ決めろ！つばめがえし！（前書き）

フォケ「マジどうしょ」（泣）」

ラッシュ「なくなよ、最初の話からどんどんお前へタレになつてろぞ（汗）」

さあ！行け！レウト！このまま君はヘタレウスからヘタレチキンへと昇格してしまうぞ！

レウト「いやあああああああああっ！！！！？」↑昇格されることが嫌で嘆く

ラッシュ「一言でこの咆哮かよ（汗）」

バトル15 レウトVSフォケ 決めろ！つばめがえし！

セバス「それでは！試合開始！」

試合が始まったと同時にフォケが動く

フォケ「くらえ！」

フォケが一太刀振るう

レウト「そうはいくか！」

レウトは空へと回避

だが

フォケ「ならこれはどうだ？閃光玉！」

なんと閃光玉を使いレウトを落とす

レウト「うわっ！？」

レウトは閃光をくらい地面に落ちた

レウト「いてえー！ー！ー！ー！？！？！？」

それは足などにも影響した

会場にいる観客はみんな咄嗟とっさに目をつむっていた

ルガー「閃光玉か・・・厄介だな」

ブレイ「なかなかやるな、あの人間」

レイス「リオレウスの行動をよく見ているよ」

ラッシュ「あれは飛行系などの対策にはもってこいだ、このフォケと呼ばれる人間、あなどれないな」

レイラ「レウト・・・」

レイラが心配する

サクラ「大丈夫よ！それでもラッシュと特訓してるから」

サクラがレイラを励ます

レイラ「そ・・・そうね」

レイラはそのままレウトを見守る

バトル場に戻ろう

フォケは太刀で連続でレウトを切りつける

レウトは少しずつボロボロになっていく

レウト「くっ！？足いてえし目がいてえ」

もはや追いつかれた状態だ

フォケ「さて、とどめだ！きじん気刃切り！」

太刀の奥義気刃切りでとどめをさすつもりだ

レウト大ピンチ！？

レウト「くっ！？どうすりゃあいいんだ！？」

まだ閃光の効果が切れない

すると

レイラ「あきらめんじゃないわよ！！」

レイラの声が聞こえる

レウト「レイラ・・・？」

レイラはレウトに叫ぶ

レイラ「あんたは私の彼氏でしょ！！あんたヘタレてないで攻撃したらどうなのよ！！」

レイラはじゃっかん怒っているように叫んだ

レウト「わぁーてるよ！チクショー！！」

レウトはすぐに空へと飛んだ

フォケ「何っ!？」

これにはフォケは驚く

なにせ閃光の効果で目をつぶされながら空を飛んでいるのだから

レウト「やるしかねえ!あの技を」

そう、レウトはまだ完成していない技、つばめがえしをやるつもりだ

レウト「行くぜ!!」

レウトがそのままフォケに向かっていく

フォケ「ならば俺も行くぞ!」

レウト「うおおおおおおおおおっ!!!!!! つばめがえし!!」

フォケ「きじんひょうげつか気刃氷月花!!」

レウトの体に風の抵抗がのる

フォケの太刀が凍り、赤いオーラが出る

フォケ「はあああああああああっ!!」

レウト「うおおおおおおおっ!!」

互いに攻撃

一瞬爆発が起こり

爆風が襲う

ラッシュ「くっ!？」

爆発がおさまり

曇っていたものが消える

二人は立っていた、だが

二人『うっ!？』

同時に倒れた

セバス「この勝負!引き分け!」

ラッシュ「レウト!」

ラッシュがレウトに駆け寄る

レイラ「レウト!」

続いてレイラが駆け寄る

レウト「ううゝ」

レウトは完全に目が見えた

だが体はもうボロボロだ

ラッシュ「大丈夫か？」

レウト「すまねえな・・・お前と戦いたかった・・・うつ！？」

ラッシュ「無理すんな、ゆっくり休め」

レイラ「レウト・・・」

レウト「ごめんな・・・レイラ」

レイラに謝るレウト

レイラ「バカ！なんでアンタが謝るのよ！」

と、怒る

ラッシュ「とりあえずレイラ、レウトを頼んだ」

レイラ「わかったわ」

ラッシュはそのままレウトを観客席において

レイラはレウトを見ていることにした

次の試合

レイドの见えない攻撃でモモは敗北

続いてドツジVSラッシュ

ラッシュはエアスラッシュなどでドツジを攻撃

しかし、ドツジはそれを軽くよけるが

ラッシュのつばめがえしにより敗北

ドツジ「うわゝ悔しいッス！」

ドツジは悔しがる

するとラッシュは

ラッシュ「お前はかなり強かった、また勝負しような」

と、手を差し伸べた

ドツジ「ありがとうッス」

ドツジはラッシュの手を掴み、互いに握手した

そして決勝

・
・
・
・
・

セバス「さあ！残すところ決勝となってしまいました！それでは行

きます！まずはこれまで一撃で相手を倒した実力者！レイド！」

レイドがバトル場に立つ

セバス「続いて私達の坊ちやま！ラッシュ！坊ちやま！」

ラッシュ「はずかしいだろ！！」

ラッシュははずかしながらバトル場に立った

レイド「……………」

ラッシュ「……………」

互いに睨み合う

セバス「互いににらみあっています！それでは始めましょう！バトル……開始！」

と、すぐにレイドはすばやくラッシュに攻撃する

が！？

パシッ！

レイド「！？」

ラッシュは両手で攻撃を押さえた

レイドの腕には剣のような葉だった

レイドは後退した

ラッシュ「……やっぱり……アンタだったのか……」

レイド「……お前は……あの時のリザードンか……」

するとラッシュは

ラッシュ「やっと会えたぜ！レイドさん……いやゼルスさん！」

笑顔で叫ぶラッシュ

すると、レイドは

レイド「そうだな……もうこれはいらないな」

レイドはフードを脱ぎ、投げた

脱いだその姿は、トカゲのようなモンスターだった

体色は黄緑で、腹に赤のラインがあり、しっぽはジャングルでよく
みる葉っぱのようなしっぽ

腕には突起物とつぎぶつのような物、背中には丸い黄色い物がついていた

ゼルス「久しぶりだな……」

と、こちらも笑顔に答えるレイド……いやゼルスと呼ばれたジュ

カインが言う

バトル15 レウトVSフォケ決めろ！つばめがえし！（後書き）

レウト「ああゝ痛かったゝ」

じつとしててよ！↑ケアルガとかで回復している

ラッシュ「ついにゼルスさんと対決かぁゝ燃えてきたぜ！」

まあジュカインとかも好きだから、俺

ラッシュ「悪くないぜ」↑笑顔のリザードン

ちなみにゼルスはFEのゼ○○○○から名前を由来にしましたゝ

ラッシュ「ファイヤーエムブレムかぁゝ」

スマブラでマルスとアイクが出てるしね♪

ラッシュ「作者ってFEに興味あったのかぁゝ」

スマブラとか、色々はまってきて、FEもその一つだったから、あれは悲しさもあってさらに大変なんだから！

ラッシュ「シュミレーションだからか？」

そう！戦略とかも考えなきゃなんないんだから！

ラッシュ「頭使うからなぁゝ」

ほとんど攻略本に頼ってるし

ラッシュ「おい!?(汗)」

バトル16 ラッシュVSゼルス(前書き)

ラッシュ「ついに対決かあゝ」

さてどうすつかなゝ

ラッシュ「かなわないかもな」

どうかなゝ

バトル16 ラッシュVSゼルス

互いに構える

ラッシュ「ゼルスさん・・・俺は・・・」

ゼルス「あの時より強くなったのか?・・・なら俺を倒してみろ!」

ゼルスが速く動いた

ゼルス「シザークロス!」

腕の葉をクロスにして攻撃

ラッシュ「クロスクロー!」

こつちも腕をクロスして爪で攻撃

互いにはじかれ、二匹はあどずさる

ゼルス「エナジーソニック!」

ゼルスの腕の葉から緑色の衝撃波がでる

ラッシュはそれをかわした

ゼルス「ツイストリーフ!」

今度は草の竜巻が3方向にラッシュにせまる

ラッシュ「熱風！」

熱風で竜巻が消えた

ゼルス「どうした？この程度か？」

と、いうゼルス

するとラッシュは

ラッシュ「へへっ！まだまだ！」

ラッシュはなぜか笑顔に答える

それを見ている観客席のみんな

レウト「ラッシュ、なんであんな笑顔なんだ？こんな状況なのに」

ルガー「なんかアイツバトルを楽しんでるように見えるが？」

と、ルガー

サクラ「ラッシュはずっとゼルスさんにあこがれてたの」

レイラ「えっ！？」

ブレイ「どうということなんだ？」

みんなサクラに質問する

サクラ「あの時、ラッシュはゼルスさんに言われたの」

レウト「もしかして！？あの人って！？」

サクラ「そう、あの人こそラッシュを改善した人なのよ」

全員『ええええええええええええええっ！？』

全員驚く

レウト「そうか・・・ラッシュの恩師なんだ・・・あのゼルスって人」

モモ「そういうことだったのか」

レイス「ラッシュさんがこんなに強かったのはゼルスさんっていう人がきっかけだったんだね」

視点をラッシュに戻そう

ラッシュ「今度はこっちから行くぜ！フレアソウル！」

ラッシュは炎の弾を数発ゼルスに飛ばした

ゼルス「中距離の攻撃か・・・」

ゼルスはバックステップでそれをかわす

炎の弾は引き返して爆発した

ラッシュ「ならこれはどうだ！ファイガ！」

ラッシュは前方の3方向に3つの炎の弾を飛ばした

ゼルス「甘い！」

ゼルスは炎の弾を腕の葉で切り裂く

ゼルス「リーフブレード！」

ゼルスは接近してリーフブレードをしかける

ラッシュ「おっと」

ラッシュは瞬時に見切ってリーフブレードをかわした

ラッシュ「ルーンクロー！」

青い爪でそのままゼルスに切り裂く

ゼルス「ぐあっ!？」

ゼルスはダメージを受けた

ゼルス「なんだ・・・まるで体力を奪ったような」

ラッシュ「ルーンクローは体力を奪う技なんだ、だからゼルスさんはそんな感じにおちいってるんだ」

ゼルス「そういうことか・・・ならギガドレイン！」

ギガドレインをしかける

ラッシュ「守る！」

ラッシュは守るでギガドレインを阻止

ラッシュ「フレアソウル！」

ゼルス「くっ!？」

ゼルスはフレアソウルをまともに受けてしまった

ゼルス「ツイストリーフ！」

ラッシュ「ぐあっ!？」

ラッシュは反撃をくらってしまった

ラッシュ「はあはあ」

ゼルス「はあはあ・・・ラッシュ・・・そろそろ決めるか？」

ラッシュ「はあはあ・・・そうだな・・・そろそろ決めますか？」

互いに体力を消耗している

ルーンクローで体力を奪ったがツイストリーフでダメージを受けて

しまった

互いに構える

ラッシュは炎のオーラを宿し

ゼルスは草のオーラを宿す

全員が見守る

ゼルス「行くぞ！超究草覇斬！」
ちようきゆうそうはざん

ゼルスは腕の葉のエネルギーででかい草の剣を作る

ラッシュ「超究龍炎斬！」

互いにリーフブレードとドラゴンクロードと炎のパンチの攻撃をしかける

ほとんど互角

ラッシュ「はあああああああああつ！……！！」

ゼルス「おおおおおおおおおおおつ！……！！」

お互い一撃を入れる

ラッシュ「くっ！？」

ゼルス「ぐおっ！？」

ラッシュの腹にリーフブレードがあたり

ゼルスの腹に炎のパンチが当たる

すると爆発が起こった

観客全員目をおおう

爆発がおさまり、煙がおさまった

そこには二匹が立っていた

ラッシュ「さ．．．す．．．が．．．ゼルスさんだ．．．」

ゼルス「強くなったな．．．」

そして互いに倒れた

セバス「な！？なんということでしょう！！今回の優勝はこの二匹
となってしまうたあ！！」

二匹はそのまま倒れていたが

ラッシュ「ははははははははははっ」

ゼルス「ははははははははははっ」

互いに笑顔で笑っていた

ラッシュ「あゝおもしろかった！こんなバトルできて」

ゼルス「それは俺もだ」

二匹は終わっても笑っていた

バトル16 ラッシュVSゼルス（後書き）

ラッシュ「楽しかったな」

よかったね♪

ゼルス「俺もうれしかったぞ」

ゼルスまできたんだ（汗）

ラッシュ「さて、そろそろパーティーが終わるな」

うん、今回は意外な展開になるよ

ラッシュ「なんだ？」

楽しみに待っててね

バトル17 その後（前書き）

さて、実家編もこれでおしまいです

ラッシュ「まあ、俺は戦えてよかった」

満足できてよかったね♪

ラッシュ「そんじゃどうぞ！」

バトル17 その後

バトルが終わり

みんながパーティーをしていた

みんな食い物を食べまくった

特にドッジはかなり食っていた

ドッジ「おかわりッス♪」

ラッシュ「なんか楽しそうだな（汗）」

ラッシュはボロボロだが今はピンピンしていた

サクラ「さすがに回復力はあるわね」

ラッシュ「まあな、これでも鍛えたからな、それに波動があっから回復力があるんだ」

どうやら波動により回復力が早いらしい

ゼルス「さすがだな」

ラッシュ「ゼルスさん」

ゼルスも食べていた

ゼルス「結局優勝は俺達だけってことになったな」

ラッシュ「俺はこれでもがんばってきたんです」

ラッシュは右翼の翼膜の傷跡を見た

ゼルス「あれから2年か…強くなったな」

ラッシュ「はい」

強さは努力を重ねれば強くなる

ラッシュも

そしてゼルスも

そんなこんなでパーティーは終わった

……

次の日

ラッシュ「そんじゃセバス、後は頼んだぜ」

セバス「わかりました坊ちゃん」

バトル部メンバーはラッシュの実家を後にした

もちろんオマケに

テト「まさか俺もここに入るとはな」

なんとテトがいた

ことの発端は帰る前のことだった

……

テト「なあ？ラッシュ」

ラッシュ「なんだ？テト」

テトはラッシュを呼んだ

テト「実はな…俺…ポケハン学園に転入するんだ」

ラッシュ「転入？」

どうやらテトはポケハン学園に入ることになっていた

テト「だから…俺をバトル部に入れてくれないか？」

と、言ってきた

ラッシュ「もちろんだ、歓迎するぜ」

ラッシュはOKした

……

で、今にいたる

もちろん

ゼルス「ラッシュ、俺もお前のバトル部で色々教えてやるぜ」

ゼルスもバトル部に入るらしい

しかもコーチとして

ちなみにゼルスは20歳と若いのだ

こうして

ラッシュ達バトル部は

新たな仲間とともに

さらに強くなっていく

バトル17 その後（後書き）

ラッシュ「これで二匹仲間か」

よかったね

ラッシュ「まさかゼルスさんまで」

これから強くなればいい、俺もこれからがんばらないとね

ラッシュ「これで実家編は終わったが、そろそろやってもいいんじゃないのか？」

なにを？

ラッシュ「コラボだよ、結構がんばってきたんだしよ」

たしかにラッシュは逆コラボしたしね、そろそろかな、だいぶなれてきたけど

ラッシュ「まあ無理とは言わないが、考えろ」

わかった、自分で考えるよ

バトル18 新たな転校生！？自由人（フリーダム）なポケモン（前書き）

さあ！なんとついに！初のコラボとなりました

ラッシュ「おお！やるじゃねえか」

レウト「ってか一体誰なんだ！？」

それは見てからの

ラッシュ「もういいだろ」

うーん、そこまで言うのならいうけど、あちらの作者さんにOK出してもらったし、そろそろ見せてあげる♪

レウト「さあて！バトル18！」

ラッシュ「盛り上がって行くぜ！！」

バトル18 新たな転校生！？自由人（フリーダム）なポケモン

それから2日後

いつものようにポケハン学園は今日も平和なのだが、

今日、新たに嵐が吹き荒れる

……

ポケハン校門前

????? 「ここか：噂のバトル部があるっていう学校は」

一匹のポケモンが校門の前に立っていた

見た目はジュカインのようだ

????? 「兄貴：俺はかならず兄貴をやった奴を倒してやるからな」

そう言うとそのまま学校へと入った

……

1-A教室

レウト「なあ？ラッシュ？」

ラッシュ「なんだ？」

ラッシュはマンガを読んでは最中レウトに声を掛けられた

レウト「なんか今日、転校生が来るっていうんだ」

ラッシュ「転校生？こないだモモが入ったばっかなのか？」

と、言う

そこに

ルガー「どうやら転校生はポケモンらしい」

ブレイ「なんでも休みすぎで留年したらしい」

ラッシュ「休み過ぎて（汗）いくらなんでも」

ラッシュ達は休み過ぎにつっこむ

ラッシュ「で？一体どんな奴だ？」

そこにモモとテトが話にはいる

テト「ゼルスさんと同じジュカインらしい」

モモ「俺もよくわかんねえんだよ」

どうやらゼルスと同じジュカインらしい

ゼルスはバトル部のコーチを務めることになり

ポケハン学園でバイトをしている

もちろんゼウス校長の許可がおりて

ガラッ

教室にイッくん先生が入ってきた

イッくん「えー今日はみんなにお知らせがあるよ、今日は新たに転校生が来ることになりました、なんでも休み過ぎで留年のため、この学園で君達の新たな仲間となることになったよ、それでは入って」

すると教室のドアが開く

ガラッ

出てきたのはゼルスと同じジュカインだ

イッくん「それじゃあ自己紹介してね」

そのジュカインは自己紹介した

????? 「俺はジュカインのリングだ、よろしくな!」

と、元気にあいさつした

イッくん「一応彼は18歳だから（汗）年上でも仲良くね（汗）」

と、イッくんは言って、リングは席に着いた

席はラッシュと隣だ

ラッシュ「（あのルングっていうジュカイン…なんかあるな）」

と、ラッシュは考えていた

……

放課後

バトル部はいつものようにトレーニングをしていた

ラッシュ「波動弾！」

ラッシュはコーチでもあるゼルスと一緒にバトルしていた

ゼルス「リーフブレード！」

波動弾をリーフブレードではじきとばし、波動弾を無効にした

ラッシュ「さすがはゼルスさん」

ゼルス「どうした〜♪」

ラッシュ「こっからですよ」

二匹は楽しくバトルしていた

一方

モモ「必殺！オーガフレイド！」

オーガフレイドでブレイに攻撃

ブレイ「俺にそんなの効かないぜ、ビルドバック」

ブレイはバックステップでかわしながらビルドアップを使った

モモ「何！？」

ブレイ「今度はこっちから行かせてもらう、フレミングアッパー！」

ブレイは炎のパンチにスカイアッパーでモモに攻撃した

モモは上空に飛ばされた

モモ「ぐわっ！？」

ルガー「中々だな」

ルガーは二匹の試合の様子を見ていた

一方

ガル「泣くな！男だろ！」

レイス「そんなこと言われても」（泣）

レイスは泣きながらトレーニングをしていた

ガル先生の鬼の特訓をさせられて（汗）

レイラ「ヘイストからファイガ！」

一方こちらは女の対決だった

サクラ「そうはいかないわ！リフレク！」

サクラはリフレクを唱えてファイガを跳ね返した

レイラ「やばいわ」

と、レイラは自分の魔法をかわす

サクラ「やるわね、レイラ」

レイラ「サクラもね」

レイラは魔法を覚えていないが、実はサクラに教えてもらったため、魔法をある程度覚えていた

サクラ「うーんもう少し魔法覚えた方がいいわよ？」

レイラ「そうね」

サクラはほとんどの魔法を覚えているため、魔法力が高いのだ

魔法練習は毎日といっていいほどトレーニングしている

……

バトル部部室前

ルング「ここだな、バトル部の部室は」

部室前にはルングが立っていた

ルング「兄貴…」

彼は部室に入った

ルング「たのもー!!」

と、大きな声で言った

一同は声の主を見た

ラッシュ「ん？ルングじゃないか？どうしたんだ？」

ルング「あんたがバトル部の部長か？」

と、聞いてきた

ラッシュ「ああ、俺が部長だ」

と、答えた

するとルングは

ルング「あんたとバトルがしたい」

するとラッシュは

ラッシュ「バトルしていいがなんか目的があんだろ？俺にバトルを求めているのは」

するとルングは話した

ルング「俺は兄貴を殺した奴を探してその相手を殺すために俺は腕を磨こうとここを訪れた」

するとラッシュは

ラッシュ「ようするに、お前の兄貴の敵討ちってことか？けどなあ、俺達は殺すためにそんなことやってるわけじゃねえんだぞ？」

と、言われた

ルング「それでも…俺は」

ルングはあくまでバトルしたいため引き下らない

ラッシュ「しゃーねえーな…わかった、お前のやる気に免じてバトルしてやるよ」

ルング「本当か!？」

リングは嬉しそうになる

ラッシュ「ただし、俺は本気を出させてもらおう…覚悟はいいか？」

と、言ってきた

リングは覚悟を決め

リング「わかった、それじゃあよろしくお願いします！」

こうしてラッシュVSリングのバトルが始まろうとしている

バトル18 新たな転校生！？自由人（フリーダム）なポケモン（後書き）

はい！というわけでフュールングからジユカインことルング君が来てくれました♪

ルング「俺はルングだ！よろしく」

ラッシュ「ついにコラボか」

念願のコラボできてよかった♪ちなみにルング君はコトハさんのキヤラなんだけど、名前があるんだけど、訳あって名前を語れないため、俺がコトハさんにジユカインの仮の名前を出すことになりました、

ラッシュ「で？ルングって名前がOKとなったと？」

フュールングってタイトルだからこの方がいいかなーと思って

ルング「俺も作者もコトハさん気に入ったぜ」

よかった♪気に入ってくれて

ルング「そういえばなんて呼べばいいんだ？」

俺？フォックでもいいよ、呼び捨てでも読んでかまわないし♪

ルング「そうか、じゃあそう呼ばせてもらうぜ」

さて、次回はルング君とラッシュのバトルだよ♪

ラッシュ「おお！」

ルング「負けないぜ！」

さて、バトルはどんな風になるのか！コトハさん！ルング君をレギユラーにしてみました！が、コラボどうもありがとうございました、フールルングの方もがんばってください、

では！また次回！

バトル19 ラッシュVSルング（思い）（前書き）

さあ！ラッシュとルング君のバトルの始まりだあ！

ラッシュ「おっしやあ！」

ルング「ついにあのラッシュと戦える時が！」

さて、その实力は？ではどうぞ！

ラッシュ「燃え上がれ！！」

バトル19 ラッシュVSルング（思い）

二匹は互いに一步も動いていない

二匹「……」

ギャラリーが静まり返る

すると、先に動いたのはラッシュだった

ラッシュ「波動弾！」

ラッシュが波動弾をくりだす

ルング「エナジーボール！」

ルングはそれをエナジーボールで防ぐ

攻撃が爆発して白い煙がふく

ルング「リーフブレード！」

ルングが攻める

ラッシュ「おっと」

ラッシュはリーフブレードを受け止めた」

ルング「なっ!？」

ルングはリーフブレードを受け止めたことに驚く

ルング「驚いたな…まさか本当に波動弾を撃ってくるとはな」

ルングは少し冷や汗をかいた

ラッシュ「どうした？俺はまだやれるぞ♪」

とうの本人はまだまだだった

ルング「なら、エナジーボール！」

再びルングはエナジーボールを放つ！

ラッシュ「波動弾！」

ラッシュは波動弾を撃ち込む

再び煙がまいあがる

煙が収まると

ラッシュ「なっ！？いない」

ルングの姿がなかった

すると

ルング「リーフブレード！」

なんと背後からルングがリーフブレードを放つ

それがラッシュの腹に直撃

ラッシュ「ぐはっ!？」

ラッシュはダメージを受けたが

ラッシュ「カウンター!」

カウンターで今までのダメージを倍に返した

ルング「ぐっ!！」

ルングはそのまま倒れた

ラッシュ「もう終わりか？」

ラッシュが言う

ルング「ぐっ!！」

ルングは悔しくなっていた

ルング「（俺は…負けられないんだ…俺は!！」）

すると突然、ルングの体が光かがやいていた

ラッシュはその場を離れルングを見た

ラッシュ「なんだ？この力は？このジュカイン…一体」

ルングはゆっくり立ち上がった

するとルングが動いた

ラッシュ「なっ！？なんてスピードだ！？」

そしてラッシュの目の前でアイアンテールを繰り出した

ラッシュ「守る！」

ラッシュは咄嗟とっさに守るでアイアンテールを防いだ

ラッシュ「（こいつは…たしか別世界にはフールングという者がいるっていう噂があるが…こいつがそのフールングってことか）」

フールング、それは導きという意味で、伝説の力

それが彼…ルングの事だ

ラッシュ「（まさか伝説の力を拝めるとはな、だがな…）」

するとラッシュは構える

ラッシュ「行くぜ…メルトン！」

ラッシュは魔力をこめて大きな火球をルングに飛ばす

ルングはそれを早く避けるが

ラッシュ「残念だな…そいつはおとり囧だ、ほんとの攻撃はこれだ！ブラストバーン！！」

なんとメルトンはただの囧で本当の攻撃、ブラストバーンがルングを襲う

ルング「ぐわあああああああつ！！？？？」

ルングは倒れた

すぐさまラッシュはルングに駆け出す

ラッシュ「大丈夫か？」

ラッシュは手を差し伸べる

ルング「あ…ああ…大丈夫だ」

体がボロボロだがまだふらつく

ラッシュはルングを支えた

サクラ「ラッシュ！」

すぐさまサクラが駆けつける

サクラ「すぐに直してあげる…ケアルガ！」

するとルングの体はなにもなかったかのように治っていた

ルング「すごいな、回復まで出来るなんて」

ラッシュ「これは回復魔法だ、サクラは魔法が使える」

ルング「そうか…」

そのままギャラリーにいた者とともに部室へと入った

…

ラッシュ「で？お前はその力をまだ完全にコントロールしていないな」

ラッシュはルングにそう言った

ルング「ある奴にこの力をもらったが、俺はうまくできないんだ」

ルングは伝説の力のコントロールがまだうまくできないらしい

ラッシュ「だが、お前にはまだ希望がある」

ルング「えっ？」

ルングは少し驚く

ラッシュ「ただ、お前の兄の仇はいつでもとれる…でもな…大切なのは力なんなのかを考えるべきじゃないのか？」

と、ラッシュは言った

ルング「力を…考える？」

ラッシュ「お前はまだ未熟だ…でも俺達がお前を鍛えてやるぜ！お前の熱意…受け取った」

するとルングの目に涙が出ていた

ルング「ありがとな…」

ルングはしばらく泣いた

強くなりたい

彼はこうしてバトル部に入った

伝説の力

そして、強さ

彼は今

スタート地点へと

位置につく

バトル19 ラッシュVSルング（思い）（後書き）

はあく連続でやるの大変

ラッシュ「伝説の力ってすごいな」

一歩間違えば力の暴走で死ぬってこともありそうだしな（汗）

ルング「けど、楽しかったぜ！」

それはよかったよ

ルング「ところでフォック？俺にもオリジナル技ってあるのか？」

それは次回になるよ、ただ

ルング「ただ？」

少しきつくなるけど

ルング「ああ、その点は大丈夫だ」

それならいいよ

ラッシュ「なあ？オリ技とかは作者だけじゃなく、コトハにも考えた方がいいんじゃないのか？」

ルング「そうだな！よしっ！俺、言ってくる！」↑コトハさんの元へ

さすが^{フリーダム}自由人（汗）

バトル20 新たな技を身につけ！（前書き）

ラッシュ「おっ！このタイトルは？」

今回はリング君中心に、新たな技を身につける修行をしま〜す

リング「ありがとな、フォック」

いいんだ♪元々草タイプが好きだから

ラッシュ「ある意味愛があるな〜作者は」

それじゃあバトル20

リング「行くぜ！！」

バトル20 新たな技を身につけ！

ここは何処かの密林

そこに3匹がいた

ここはモンハンの世界の密林というフィールドだ

なぜ3匹はこの世界に来ているのか

それは数時間前のこと

……

ラッシュ「もしもし、フォケか？」

フォケ「おお！ラッシュか！この前のリオレウスとの戦いの時は世話になったな！」

ラッシュ「ああ、実は頼みがあるんだが……」

数分後

フォケ「なるほど…わかった！いい所紹介してやる」

ラッシュ「ほんとか！」

フォケ「ああ、待ってろよ！」

すぐに電話が切れた

ちなみに携帯だ

……

土曜日

ルング「ラッシュ？今日は俺を連れて修行か？」

レウト「なんで俺まで（汗）」

メンバーはルングにレウトにラッシュの3匹

ちなみに今日は部活はお休み

ラッシュ「悪いなレウト（汗）ルングのためなんだ」

そう！今日はルングの修行で、2匹がいるのだ

ラッシュ「そんじゃ行くか」

ラッシュ達はごほうせいのサークルの中へと入った

するとラッシュ達の姿は消えた

……

ラッシュ「着いたぞ」

そこは農場だった

すると

フォケ「やあラッシュ、レウト」

フォケだ

レウト「フォケ！」

そう！前回レウトと対決して引き分けたブリーダーハンターのフォケだ

フォケ「ん？君はたしかラッシュの言ってたルングって言うのか？」

視点をルングに向ける

ルング「ああ、あんたがフォケって言うハンターなのか？」

フォケ「ああ、そうだ」

と言った

ラッシュ「早速だが、修行場所をお願いしたい」

フォケ「ああ、地図はこれだ」

フォケはラッシュに地図を渡した

ラッシュ「ジャンボ村という村の近くに行けばいいんだな」

フォケ「ああ、あとはモンスターが出る、気をつけろ」

ラッシュ「大丈夫だ、俺も準備はしてきた」

ラッシュは大きな剣を取り出した

先端から段々オレンジになっている大剣だ

フォケ「テスカ・デル・ソルか？」

ラッシュ「ああ」

ラッシュの大剣、テスカ・デル・ソル、テオ・テスカトルから取れる素材から作れる大剣だ

これはテトからもらった剣で、本人曰く（いわく）剣が扱えないため、ラッシュに渡したらしい

フォケ「それならよかった、本当は雪山がいいが、ルングには寒さには耐えられないから、やっぱり密林の方が草タイプなどにとってはちょうど修行にいいだろう

ラッシュ「ありがとな…それじゃあ俺達は行くぜ」

3匹は空へ飛んで密林へ行った

……

そして今にいたる

ラッシュ「とりあえずここで練習だ、まずはリング、お前には新しい技とかを覚えてから力のコントロールの練習だ、いいな？」

リング「わかった」

ラッシュ「レウトは他の技を覚えることだ」

レウト「わかったよ」

しぶしぶいいながら練習するレウト

……

リング「うーん、どうしたらいいんだ？新しい技」

リングは考えていた

ラッシュ「まあ無理ないな…それならお前はコンボとかに適用する技がいいだろ、ならない場合があるが、どうする？」

リングは

リング「わかった、じゃあそうするか」

と、言った

その頃のレウトは

レウト「エアスラッシュュ！」

岩に向かってエアスラッシュュの練習をしていた

なぜその技なのか

レウトは前回引き分けに終わったためラッシュュにエアスラッシュュを教えて欲しいと頼んだ

だが、エアスラッシュュは空気の流れにさらにコントロールが難しい技だ

リオレウスであるレウトには至難の技だ

レウト「うーん、もう少し風を集めるように放てるようにしなきゃな」

もう一度風を集めた

……

ルング「はじけろ！エナジーサークル！」

少し全身して、リーフブレードを横回転で振る

すると小さな緑のエネルギーが出てきた

そのエネルギーは爆発した

ラッシュュ「中々だな」

と、ほめる

ルング「まさかエナジーボールとリーフブレードでこんなことができるなんて」

と、驚いている様子

ラッシュ「何回かなればできる、結構かったな」

そう、短期間でなんとか一つの技を習得したルング

ルング「これで俺も一つ成長したな」

ラッシュ「いや、まだ力のコントロールとかができていない、まだまだだ」

ルング「そうか」

ルングは落ち込む

ラッシュ「だが、まだ一つだ、こっからしっかり行くぞ」

ルング「おう！」

バトル20 新たな技を身につけ！（後書き）

まずは一つ目の技完成

ルング「やったぜ！」

ラッシュ「考えるなく作者も」

色々参考にしてやっただけだよ、ちなみにエナジーサークルはディシディアでスコールのフェイテッドサークルから考えたんだ

ラッシュ「そういやあルングの設定は落ち着いて物事を考えて行動するタイプだったな」

さらに作戦を練ってから戦う、彼にはコンボ系の方が似合ってるから

ルング「なるほど」

だからスコールみたいな戦術が少し合うかなーって思って

ラッシュ「それでも他の技をスコールみたいにするのか？」

ほとんどしたらダメだよ！？そこは考慮してるし、また新たに技とかを考えるよ

ラッシュ「そうか？」

次回もルング君の修行になるよ、コトハさんから頂いた技とかも使わせてもらうけど、技名とかは俺が考えてつけるよ

リング「そんじゃ期待してるぜ」

まかせて♪

バトル21 異世界から!? (前書き)

ラッシュ「もう21話か」

リング「すごいな、それにまた更新(汗)」

まあね♪さて!さらにまたコラボキャラが来るんですよこれが♪

ラッシュ「またかよ!?!」

今回はその子が登場します。

リング「俺に続けてか(汗)そんじゃバトル21」

ラッシュ「かかって来いやあ!!!」

バトル21 異世界から!?

そうこうしてるうちに夜になった

ルング「エナジーバレット!」

ルングはエナジーボールのエネルギーで岩を引き付けるが

岩は壊れてしまった

ラッシュ「もう少しエネルギーを小さくして相手をひきつけろ」

ルング「わかった」

やっと一つ目の技を習得したが、まだまだこれだけじゃ意味がない

一方

レウト「エースラッシュ!」

レウトは翼に風の塊かたまりを作って岩に攻撃した

すると岩は壊れた

レウト「よしっ!」

レウトはエースラッシュを覚えた

……

ラッシュ「よし！今日はここまでだ、そんじゃ飯にするぞ」

レウト「おーし！飯だ！」

ルング「メニューとかはどうすんだ？」

とルングに言われ

ラッシュ「それなら肉焼きセットにフォケから色々もらってきた、とりあえずご飯を炊くぞ」

と、ラッシュははんごうを用意した

……

数分後

ラッシュ「よし！こっちはどうだ？」

ルング「ご飯炊いたぞ」

レウト「肉は焼けたぞ」

ラッシュ「よし！」

……

3匹は席についた

レウト「ラグラージ：だよなあ」（汗）」

浜辺に浮かんできたのはウサギのような黒い耳のような物、しつぽは魚のヒレのように黒い

3本指の手足、ほっぺにはオレンジの突起物

沼魚ポケモンのラグラージだ

ラグラージは目を回していた

ラッシュ「こりゃあ大変だ（汗）すぐに運ぶぞ」

3匹はラグラージを運んだ

……

ラッシュ「とりあえず大丈夫か？」

ラグラージは目をつむっている

ルング「上から落ちてきたよな（汗）」

レウト「間違いないぜ（汗）」

二匹は突然の人が落ちてくるのに対して汗が流れる

ポケモン

すると

ラグラージ「う…う…ん」

ラグラージが目を開ける

ラッシュ「お！気づいたか」

するとラグラージは

ラグラージ「えええええええええっ！！？？ここは何処！？」

驚いていた

ラッシュ「落ち着けよ（汗）」

ラッシュが落ち着かせる

ラグラージ「いきなり何処かに飛ばされたからビックリしたよ、君達は？それにその赤い竜はポケモン？」

と言ってきた、赤い竜はレウトのことだ

ラッシュ「そうだな、俺はリザードンのラッシュ」

ルング「俺はジュカインのルング」

レウト「俺はポケモンじゃないが飛竜種っていう種族のリオレウスのレウトだ」

3匹は自己紹介した

ラグラージ「僕はラグラージのラグ、よろしくね」

ラグラージ、ラグが自己紹介した

ラッシュ「よろしくな」

ルング「ところでラグはなんで空から降ってきたんだ？」

するとラグは

ラグ「なぜか知らないけど、ミュウとかに修行のためと言ってなぜかこっちの世界に来ちゃったんだ」

ラッシュ「なるほどな（汗）つまりテレポートとかなんかで別の世界にきたんだろ？」

ラグ「うん（汗）僕バトルとかが弱くて」

レウト「弱い？」

ラグは話した

ラグ「僕ね、いつも弱くて友達とかにも負けちゃうし、技を出すのがみんなより遅いし、それで」

ラッシュ「なるほどな…ならラグ！俺達と一緒に修行するか？」

なんとラッシュはラグにも修行することになる

ラグ「えっ！？いいの！？」

ラッシュは笑顔で

ラッシュ「いいぜ！弱いのはお前にはなにかが足りないと思うぜ、この先お前の実力では無理がある、だからやろうぜ」

するとラグは

ラグ「ありがとうラッシュ君」

ラッシュ「ラッシュでいいぜ」

ラグ「えっ!？」

ラッシュ「お前はもう俺達の友達^{ダチ}だし、いいだろ？」

一瞬間をおきラグは

ラグ「わかった、じゃあこれからそうさせてもらおうよ」

ラッシュ「そんじゃ飯にしようぜ」

こうして

新たな仲間ができた

彼が弱い理由はなんなのか

それはまだわからない（汗）

バトル21 異世界から！？（後書き）

はい！というわけで『ポケットモンスターラグラージの冒険』から、ラグ君が来てくださいました！

ラグ「こんにちは」

ルング「俺は初めましてか」

そうだね、最初のコラボはルング君だしね♪

ラッシュ「ようがんばるな〜作者」

これはラグ君じきじきにコラボしたいという要望があったからね〜

ラグ「これからよろしくお願いします」

はい、よろしくね♪さて！ラグラージの冒険のコアラさん、コラボありがとうございます。ラグ君は責任持って強くいたしますので今後も期待してください♪

バトル22 ラグの实力と力の制御（前書き）

やっとラグ君が弱い理由がわかったよ

ラッシュ「これで作者の執筆がより進めるな」

うん、ラグ君にはまずはこっちからね

ラグ「うん、で？今回はなににするんですか？」

今回は君の实力と君に合う戦術などになるよ

ラグ「ほんとにいいんですか？」

君には知っておかないといけないものもあるからね

ラッシュ「そんじゃ」

ラグ「バトル22…が…がんばります」↑緊張している

バトル22 ラグの实力と力の制御

次の朝

ラッシュ「そんじゃラグをメンバーにしたが、まずはラグの实力を見せてもらおうか？」

と、ラッシュがラグとのバトルを提案

ラグ「えっ！？でも」

するとリングは

リング「大丈夫だ、俺も色々と学びたいんだ」

と言った

ラグ「わかった…バトルを受けます」

と、バトルを申し込んだ

……

バトル場はもちろん密林のエリア10という場所

ラッシュ達が野宿したあの場所だ

ここはあまりモンスターがこないため、というか来るモンスターは来るが（汗）

比較的に安全だ

ラッシュとラグが構える

リング「そんじゃ行くぜ：試合開始！」

リングの合図でバトルが始まった

ラグ「行くよ、水の波動」

ラグは水の輪でラッシュに攻撃した

ラッシュ「中々な水の波動だぜ：しかし」

ラッシュの周りに炎が包む

ラッシュ「行くぜ！ラグ、フレアソウル！」

ラッシュはフレアソウルで水の波動を攻撃した

すると水の波動は水蒸気となり、残りの小さい火球がラグに迫る

ラグ「わわっ！？かげぶんしん」

ラグはかげぶんしんでその場をしのいだが

ラッシュ「セイントブレス！」

ラッシュは白き息吹でラグの分身を消してラグにダメージを与えた

ラグ「うわっ!？」

ラッシュ「続けて行くぜ、ホーリーコンボ！」

ラッシュは続けて光球の追尾弾を並べてラグに放った

ラグ「わっ!？」

ラグは避けきれず光球に当たってしまった

するとラッシュは炎の弾をラグに向かって飛ばした

ラグ「うわっ!？」

これも避けきれずラグにダメージを与えた

ラグ「くっ!？」

ラグはまだ体力はあるようだ

ラッシュ「中々の体力に防御力だな」

ラッシュはほとんど無傷の状態

ラグ「ま…まだまだ」

ラグはまだやれるようだ

すると

ラッシュ「そこまでだ」

ラグ「えっ!？」

なんとバトルを中断した

ラグ「な…なんで」

するとラッシュは

ラッシュ「今回はお前の实力を見るためのバトルだ、あまり無意味にやるとやばいからな」

と

リング「そんじゃバトルは中断だ」

バトルは中断

……

ラッシュはラグと話すため、二匹は別の修行に行っていた

ラッシュ「ラグ…まずお前の実力だが、まあまあだ…だがお前…力のコントロールなどリミッターみたいなもんがかかってるな」

ラグ「うん」

ラグは落ち込んでいた

ラッシュ「お前は向上心がいいからいいけどな…だが今のお前じゃ勝つことは難しいな」

ラグ「そ…そんな」

ラグはショックを受けた

ラッシュは一言おいて

ラッシュ「だがよ」

ラッシュは言った

ラッシュ「お前はかなり努力してる…そこは認めるぜ」

と、ラグをほめた

だがラグは

ラグ「でも僕は」

ラッシュ「おっと」

ラッシュは止める

ラッシュ「それ以上いうな…ようするにお前のはリングと同じ力のコントロールがまだできていない、いわばまだ未熟だ…けど、このままだとまずいな…そうだ！力のリミッターのついでにお前には新しい技を覚える特訓をしたほうがいいな」

ラグ「僕の：新しい技？」

ラッシュ「そうだ」

どうやらラグに新しい技と力のリミッターの特訓をするようだ

ラグ「でもどうすれば」

するとラッシュは

ラッシュ「なら説明が必要だな」

ラッシュはラグに説明した

ここでラッシュの変わりに説明しよう

ラッシュがいうには今のラグの実力では強敵など、様々な相手に勝てないということだ（ラグの実力は大体コイキング程度ぐらい）

そこでラッシュはさらにラグに技を磨き、力のリミッターを知ることにとそれを制御すること

ラッシュ「というわけだが、だがこれだけじゃない、お前のバトルスタイルは大体検討がつく」

ラグ「バトルスタイル？」

バトルスタイルはいわゆる戦術、それぞれのバトルスタイルを見てみよう

まずラッシュは攻撃にさらに補助系をつけた攻撃補助重視型

レウトは空から攻めるエアマスターで攻撃型

ルングは相手を見てそこから戦略を考えて行動する、さらにコンボで相手を落とす、また、ジユカイン見たいな種族は素早さが高いため、ルングは速攻頭脳型だ

これが3匹のバトルスタイルだ

それぞれが自分に合ったスタイルで戦う、それがバトルスタイルだ
ラッシュ「ラグの場合はまだ力のコントロールがうまくいってない、そこでラグは防御重視の方でいき、相手に攻めるやり方が合うだろう」

ラグ「ラグの場合、素早さがイマイチだが、他はかなりの固体値だ、特に攻撃が高い種族だが」

ラグの場合は力がうまくいかないため、攻撃などがうまく相手に効かないことになる

だが、ラッシュはラグの防御力を見て、守りに特化して、そこから攻撃を跳ね返して相手に与える、防御重視型の方がラグには合っている、そのため

ラッシュ「ならカウンターやミラーコート覚えればそれなりに有利だろ…だがそれじゃあダメだ」

ラグ「えっ!?!じゃあどうすればいいの?」

するとラッシュは

ラッシュ「つまりそれだけじゃなくて新たに俺みたいな技を考えればいいだろう」

するとラグは

ラグ「わかった…やってみる」

ラッシュ「そうだ、お前ならできる」

そこでラッシュは

ラッシュ「ラグ、まずはお前の覚えている技を教えてくださいか?」

ラッシュはラグに技を自分に教えるよう言う

ラグ「わかった、僕が覚えてるのは…」

ラグが覚えてる技は次の通りだ

・水の波動

・マッドショット

・冷凍ビーム

・気合パンチ

・かげぶんしん

・ストーンエッジ

ラグ「以上だよ」

ラグの技はかげぶんしん以外は攻撃技が多いようだ

ラッシュ「なるほどな…ならお前が覚える技はこれくらいだ」

ラッシュはラグに覚えてもらおう技を言った

ラッシュ「まずはカウンターとミラーコートだ、これはお前にとって重要な技だ、いいな？」

ラグ「うん」

ラッシュ「次を守ると身代わりとがむしゃらだ」

ラグ「がむしゃら？」

がむしゃら

それは相手に自分と同じダメージを与える技だ

ラッシュ「ああ、これはお前のダメージを相手に跳ね返せるから実践には使える」

そう！これなら相手と同じ状況を作ることができるのだ

ラッシュ「後は冷凍パンチに地震、さらにハイドロポンプとハイドロカノンを覚えろ」

ラグ「えっ！？あの最強技を！？」

ラッシュ「ああ、特にハイドロカノンは覚えるのが難しい、だがまずは補助と防御技から覚えてからオリジナルの技を覚えるぞ」

ラグ「オリジナル？」

ラッシュ「ああ、俺のフレアソウルもその一つだ」

ラッシュのほとんどはオリジナルの技が多い

ラグ「たしかにあの小さな火球とか、白いブレスとかも」

ラッシュ「だが、ホーリーコンボは魔法攻撃だからな」

ラグ「魔法！？」

その言葉に驚く

ラッシュ「まだお前では無理だ、今はこっちに集中するぞ」

ラグ「うん」

はたしてラグの技などは覚えるのだろうか

バトル22 ラグの実力と力の制御（後書き）

ラッシュ「さすが作者だな」

はあはあ、この説明とか大変だったんだからね

リング「俺は次の技と力のコントロールの練習だからな（汗）」

ラグ「僕、がんばらなきゃ！」

そのいきだよラグ君、俺が考えたんだから感謝してね

ラグ「ありがとうフォックさん」

どういたしまして

バトル23 デンラージとフュールング（前書き）

ラッシュ「今回はこのタイトルの説明だ」

かなり書かないといけないからねえ」

ラッシュ「人気急上昇だからな」

そんじゃバトル23

ラッシュ「盛り上がって行くぜえ!!」

バトル23 デンラージとフュールング

ここは密林、エリア10

ここに4匹が集まっている

ラッシュ「ではそれぞれの説明を聞きたい、まずはラグ」

ラグ「はっ！？はい！」

ラグがみんなの目の前に来る

ラグ「それでは、僕がなぜこの世界に来たかを説明します、ラッシュは知っているけど、僕は『デンラージ』という僕の最終進化形態が使えるんだけど、僕には力のリミッターがあってバトルがうまくできないんです」

ラグには『デンラージ』というラグラージの最終進化形態がある

ラグ「その『デンラージ』は僕の先祖で、僕はその力が強すぎてリミッターがかかっているんだ」

すると

レウト「なあ？今リミッターはどうなってんだ？」

レウトが質問する

ラグ「今はリミッターはかかったままだけど、ミュウと戦った時に

は少しはずれかかってね」

と答えた

ラグ「だけど、僕はこの力に不安があるんだ」

ルング「不安」

その不安とは

ラグ「この力は僕に使えるかどうか」

そう、ラグの不安は

それは『デンラージ』の力が使えるかどうかなのだ

一歩間違えば世界やポケモン達を傷つけてしまうんじゃないかとラグは不安に思っていた

そんな中

ラッシュ「大丈夫だ、お前はがんばれば強くなる、自分に自信を持て」

ラッシュがラグを励ます

ラグ「ありがとうラッシュ」

そう、自信を持つこと

それがラグに与えた試練

ラッシュ「そんじゃ次はリングだ」

次にリングが目の前に立つ

リング「俺の力『フュールング』はよくわからない部分だが、伝説の力だけで俺にもさっぱりわからないんだ」

『フュールング』については本人はよくわからないらしい

ラッシュ「そうか、とにかくもういいだろ」

……

ラッシュ「うーん、どうやら課題があるな」

3匹「課題」

課題

それぞれ力が違うがなんとかすればやれる

そこで

ラッシュ「そこで俺達は1週間ここでそれぞれの課題をやることにした」

ちなみにラッシュ達の世界とは時間や日にちもずれるため、1週間こっちの世界に来てても時間は遅れているため安心

ラッシュ「まずはラグには防御技に俺の言った技とオリジナル技を習得と精神の修行をお前にはやってもらうぜ」

ラグは精神面が不安があり、これでは『デンラージ』になっても暴走してしまうので精神面を鍛えることに、あとは防御技とオリジナル技の習得だ

これでなんとかすればラグはデンラージの能力をフルに活動できる
後に魔法も習得する予定だ^{のち}

ラッシュ「次にルングだが、お前には引き続きオリジナル技の習得と力の制御だ」

ルング「わかった」

ルングは引き続き技習得と力の制御

ちなみにルングはすでに3つのオリジナル技を習得している

それは後ほどになるだろう

ラッシュ「俺は見ながら一緒に修行だ、レウトはお前自身の修行をやってこい」

レウト「おう！」

これで彼らの今後が見えた

ラッシュ「そんじゃ本格的修行開始だ！」

バトル23 デンラージとフューリング（後書き）

さて！次回からはそれぞれのキャラを視点に書いていきます

ラッシュ「それで誰から行くんだ？」

まずはラグ君からね

ラグ「僕！？」

そう、ラグ君の方が終わったら、次はリング君ね

リング「わかった」

ラッシュ「やけに気合はいつてるな作者（汗）」

まあね♪

ラッシュ「他のも更新しろよ」

がんばってみるね

バトル24 力とは？ラグ編（前書き）

さあてラグ君編です

ラッシュ「これはなんか別々に行くのか？」

そう、まあいったりきたりだけど、まずはラグ君からね

ラグ「うん」

まあディシディア風になるけどね

ラッシュ「あれか？ナレーター風にか」

そう♪

ラッシュ「（汗）とにかくいくか」

バトル24

ラッシュ・ラグ「どうぞ」

バトル24 力とは？ラグ編

向上心があり努力するラグラージ、ラグ

彼はミュウの提案でラッシュ達の世界に来た

だが彼にはリミッターというものがあり

彼自体は強いが

『デンラージ』

その力により力に制限がかかっている

彼は伝説の力『デンラージ』を制御できるよう

ラッシュの元で修行することに

彼ははたして

力の意味

彼はこのことを知らなければならない

力とは？

ラグ「ミラーコート！」

ラグは攻撃を跳ね返した

ラッシュ「守る！」

ラッシュは守るで跳ね返した自分の技を防いだ

ラッシュ「よし、がんばったな」

ラグ「ありがとうラッシュ」

ラグはここにきてから3日

何とか防御技をマスターした

ラッシュ「中々の守りだ」

ラッシュはほめる

ラグ「ここにきてからなぜかうまくできたよ」

防御技は簡単に覚えられる技だ

攻撃技などは時間がかかるが、きっかけなどがあれば覚えられる

最初ラグは防御技を覚えるのが少し苦労したが

たった5日でなんとかマスターした

ラッシュ「少し覚えが早いな」

ラグ「僕も結構覚えたし」

ラグも手ごたえがあった

ラッシュ「でも、まだまだだ」

と言われガツクリする

ラッシュ「でもここからだ、色々技を覚えて覚えないと大変だからな」

ラグ「うん！よし！がんばるぞ！」

ラグは気合を入れる

ラッシュ「そこで最終日に試合をやるぞ」

ラグ「し！？試合！？」

ラッシュ「ああ、相手はすでに決まってる、それまでにはがんばれ、それじゃ俺はリングのほう見てくる」

ラッシュは去った

ラグ「（僕は…ここまでがんばれた…けどまだリミッターはかかったまま、これじゃああさってまで大丈夫なのか）」

ラグは不安にあおらげる

ラグ「（でも！僕は力をどうするか、それが僕の課題なんだ、みんなを守る力に…僕は！）」

バトル24 力とは？ラグ編（後書き）

はい！ラグ君編はここで終了

ラグ「おつかれさまです」

ラグ君？君が気づく点はあったかい？

ラグ「僕は力がなんなのか…その答えが見つかったよ」

よかった、まだ弱いままだけど、がんばって

ラグ「はい！がんばります」

次回はリング君視点になります

ラグ「僕の試合の相手は誰なんですか？」

それはリング君の話が終わったら次で相手がわかるよ

ラグ「楽しみです」

バトル25 強さとは？ルング編（前書き）

ついにルング君編だよ

ルング「俺か」

まだ『フールルング』についてはわからないけど、色々君には理解してもらわないとね

ルング「そうだな」

ではバトル25

ルング「どうぞ」

バトル25 強さとは？ルング編

導きの運命を進むジュカイン、ルング

彼はラッシュとバトルし、なんとかバトル部へと入部した

だが、彼の力『フールング』はまだわからない部分があった

彼はまだ、力の制御が不安定な状態

強さの先に

なにあるのか

それは彼が知る

強さの意味を

強さとは？

ルング「はあはあ」

俺は密林のエリア7の滝で修行していた

そして滝での修行が終わり、エリア7へと戻ってきた

ルング「エナジーマテオ！」

俺はすぐさま技の習得にとりかかった

今練習してるのはエナジーマテオというエナジーボールのエネルギーをぶつける技だ

まず、エナジーボールのエネルギーを大きくし、

そこからリーフブレードでエネルギーを攻撃

エネルギーは小さなエネルギーに分散して攻撃する

これを覚えるのに丸1日はかかった

ルング「はあはあ」

俺が覚えた技はこれで4つ

まだ力のこともわからず俺はとにかく精神を鍛えた

するとそこに

ラッシュ「どうだ？調子は？」

ラッシュだ

ルング「まあなんとか習得した、後は力の方だな」

フューリングの力のことは俺だけじゃなくて、ラッシュもわからない

ラッシュ「まああわてるな、あせると力の制御は難しいからな」

たしかに、ラッシュの言うとおりあわててしまうと力がうまくコントロールできない

ラッシュ「お前は戦術が得意なんだ、それなりにがんばれよ」

がんばれよ…か…

ラッシュ「それからあさつてに試合がある、相手は言わないが楽しみにしとけ」

試合か…一体誰と試合すんだ

ラッシュ「そんじゃ俺は修行してくるからがんばれよ」

ラッシュは自分の修行のため去っていった

…

俺もがんばらないとな

自分の力を制御できるように

…

それから2日後

場所はエリア10

ラッシュ「そんじゃお前らの戦う相手を言うぞ」

僕の相手は誰なんだろう？

俺の相手は誰なんだ？

ラッシュ「ラグとリングだ」

ラグ・リング「「えっ!？」」

なんと対戦は

ラグとリングの対決となった

バトル25 強さとは？ルング編（後書き）

ルング「俺とラグか」

ラグ「僕とルング君なの！？」

そう！最初は別の方でバトルしようかな～と思ってたけど、やっぱり君達みたいな力の制御をまだしていない君達ならだと思ってこの組み合わせにしたんだ

ラグ「そうなんだ」

後、コトハさんからもらった技を今回使わせてもらってたけど、技のネーミングもアレンジして考えたけどどう？

ルング「悪くないな」

よかった♪次回はこの二人の対決です！

ラグ「次回も」

ルング「楽しみにしてろよ」

バトル26 ラグVSルング前編(前書き)

ラッシュ「ついに対決か」

今回は前後編というわけで分けます

ラグ「負けないよ!」

ルング「俺もだ!」

ラッシュ「そんじゃバトル26」

ラグ・ルング「どうぞ!」

バトル26 ラグVSルング前編

密林エリア10

モンスターの姿はなく

いるのは4匹のモンスター達

その中で2匹は構えた

ラグラージのラグと

ジュカインのルングだ

互いに1週間も修行したのだ

その成果が試される(ためされる)

ラッシュ「そんじゃバトル開始だ!」

ラッシュが合図した

先に出たのはルング

ルング「リーフブレード!」

ルングはリーフブレードでラグを攻撃

相性ではルングが有利

だがラグは

ラグ「そうはいかないよ！カウンター！」

カウンターでリーフブレードを跳ね返そうとしたが

リング「俺がカウンターでやられるとでも思ったか？見切り！」

すかさず見切りでカウンターを回避

続けてラグは水の波動で攻撃

リング「リーフブレード！」

リングはリーフブレードで水の波動を無効にした

ラグ「これはどうかな？水冷弾！」

ラグは水と氷の弾をリングに放った

リング「なら！空牙天昇！（くうがてんしょう）」

リングはリーフブレードをしながら体を回転し上昇

それにより、水冷弾は跳ね返され、あらゆる方向にとんだ

ラグにも放った水冷弾が来たが

すかさずラグは守るでなんとかダメージを負わなかった

リング「さすがだな」

ラグ「僕もここまで強くなるなんて、それにすごいよ！リング君」
互いにほめる

リング「でもな」

ラグ「ここからが本番だよ」

バトル26 ラグVSルング前編（後書き）

さて、前編が終わったよ

ラッシュ「なんかモンハンの弾の名前があるが（汗）」

だってこうじゃないとなんかつけるのも苦労するよ（汗）だって名前これしか思いあたらないんだもん

ラグ「でもすごいよ！」

そうかい

ルング「俺のもすごいな！」

ルングの技空牙天昇はディシディアでクラウドが使ってる技なんだけど、名前が漢字だったからわからなくて（汗）その技を見て出したんだけど

ラッシュ「漢字がわからない部分あるからなく作者は（汗）」

次回もラグ君とルング君のバトルだよ

ラッシュ「次回も期待だぜ」

バトル27 ラグVSルング後編（前書き）

引き続きバトル後編です

ラッシュ「もはやラグのリミッター関係ねえ感じだが（汗）」

一応リミッターはついたままだよ

ラッシュ「じゃあなんでだ」

それは見てからのお楽しみ♪

ラッシュ「気になるな（汗）そんじゃバトル27」

レディーゴー！

バトル27 ラグVSルング後編

レウト「かなり白熱だなあゝでもラグの奴、リミッターのほうどうなってるんだ？なんか十分強い感じに思えるが？」

レウトはそんな疑問をいだいていた

そんなこんなで二匹が動いた

ルング「カウンターとかも厄介だな、ミラーコートも覚えてるからなあゝ…さゝて…どうするかだな」

ルングは防御技をどうするか考えていた

ルング「（なら！あの技しかないな！）リーフブレード！」

ルングはリーフブレードを繰り出した

ラグ「カウンター！」

ラグはカウンターを使う

ルング「それを待ってた！エナジーサークル！」

ルングはラグがカウンターを使うのをわかっていた

そこでエナジーサークルで攻撃

カウンターは物理攻撃

だがエナジーサークルは魔法ガードを持っているがそれだけじゃない
エネルギーを出し、エネルギーを爆発

それによりラグはダメージを受けた

エナジーサークルは元々、エナジーボールのエネルギーを縮小した技
もちろん攻撃は特殊なため、物理攻撃を出すカウンターは特殊を跳
ね返せないため、無効となる

ルング「続けてエナジーバレット！」

ルングは縮小した4つのエナジーボールでラグを引き寄せた

ラグはダメージを少し受けたが、さすがに草タイプに対しては効果が
4倍だ

ルング「これで終わりだ！アッパーリーフブレード！」

エナジーバレットでラグをひきつけたあと

ルングはすばやく一歩踏み出してリーフブレードを振り上げ、ラグ
を軽く打ち上げた

そこからジャンプして接近し、リーフブレードを連続で振ってラグ
を真下へたたき落とした

ラグ「うつ!?!」

ラグはまだやられていない

ラグの体力はもう残っていない

ルング「俺の勝ちだな」

ルングは勝利を確信した

だが

ラグ「ぼ…僕はまだ…やれる」

ルング「!?!」

なんとまだやれるようだ

ラッシュ「まだ大丈夫だ、そんじゃ試合続行だ」

ルング「なら行くぜ! 空牙天昇!」

ルングはリーフブレードしながら体を回転し、ラグに攻める

だがラグは

ラグ「僕は負けない! ドレインバリアー!」

ラグの周りに緑色のバリアーが張られた

ルング「なっ!？」

ルングの攻撃はバリアにより防がれた

だが、それだけじゃない

ルング「なんだ…なんか体力が」

ルングは体の異変に気づいた

ラグを見てみると

ルング「!？」

ラグの傷は癒されていた

ラグ「僕のド레인バリアーは攻撃によって効果が違うけど、ルングの攻撃は接近と物理だから体力が奪われたんだよ」

ルング「なっ!？」

ド레인バリアーはラグの防御技で、攻撃によって効果が違うのだ

さっきの攻撃は物理に近距離の攻撃だ

したがってド레인バリアーの効果は、バリアーに触れると体力を奪い、それを自分の体力回復に使うのだ

他はまた機会があれば説明しよう

それにより、形勢は逆転された

だが、ラグはリミッターはかかっているはずなのだ

だが今もラグのリミッターはかかったまま

なぜなのか

それは、力とのシンクロ

今までは力を恐れてしまう感じのラグだったが

ラッシュの修行により、精神が少しは安定、まだ修行が足りないが彼には心を力にリミッターがかかっている今でも力が発揮されるのだ

つまり、ラグは自分の心で力の安定をしているのだ

力だけがすべてじゃない

心もその一つだ

そんな中、互いの方を見てみると

ラッシュ「あいつら、楽しんでるな♪」

レウト「ホントだ」

二匹は楽しんでいた

笑顔だった

ラグ「僕…わかったんだ、もっとも大事なのが」

ルング「俺もわかったぜ、もっとも大事なのが」

それは

ラグ・ルング「「バトルを楽しむ事を！」」

そう

バトルを楽しむ

それが大切なのだ

負けられない戦いは負けてはいけない

けど、それとは別にこれは勝ち負けは関係ない

楽しくやればいいのだ

ラグ「行くよ…ルング君！これが僕の大技！」

ルング「見せてやるぜラグ！俺の最強技を！」

二匹は互いに最強技を放った

ラグ「行くよ！ホーリーティアブレス！」

ラグは高圧の光の水で攻撃

リング「行くぜ！ブレイブフューリング！」

リングがリーフブレードで切りつける

そして爆発する

……

はたして二匹は

……

煙が晴れる

するとそこには

……

ラグ「はあはあ…引き分けになっちゃったね」

リング「はあはあ…ああ」

互いにボロボロになりながら、両者とも倒れていた

ラッシュ「お前らよくがんばったな」

ラッシュは二匹の様子を見た

ラグ「僕…がんばるよ…もっと強くなる」

リング「俺もだ…兄貴…俺はもっとがんばっていつか倒してやるからな」

そんなこんなで二匹の戦いは終わった

バトル27 ラグVSルング後編（後書き）

はい！やっと終わった〜♪

ラッシュ「夜中にごくろうさん」

ラグ「すごい疲れたよ」

ルング「俺もくたくただ」

よくがんばったね、二人とも

ラッシュ「作者もよくがんばれたもんだ」

はいはい、それじゃあ次回はラグ君もついに

ラッシュ「帰るのか？」

違うわW誰も帰るなんて一言も言っていない

ラッシュ「じゃあなんだ？」

それはまた次回で

ラッシュ「気になるな？」

バトル28 強くなるために（前書き）

ラッシュ「なんかはえゝな（汗）」

なんかこつちがすごくアイデア浮かんできて、どんどん物語が（汗）

レウト「作者すげえゝ（汗）」

さて、今回はラグ君の正体みたいな感じですが（汗）

ラッシュ「まさか」

レウト「そういうことだったのか（汗）」

バトル28

ラッシュ・レウト「どうぞ」

バトル28 強くなるために

二匹の戦いが終わり

二匹は休憩していた

ルング「それにしてもラグは強いな」

ルングはラグの強さをほめた

さっきの戦いであれだけの強さなのだから

ラグ「僕はまだまだだよ、ルング君の方こそ」

ラグもルングをほめた

ラッシュ「お前ら、よくがんばったな」

ラグ「うん！」

ルング「ああ！」

互いが絆を作り

そして強さを認める

ラッシュ「なあ？ラグ」

ラグ「ん？どうしたの？」

ラッシュがラグに質問してきた

ラッシュ「お前…分身だな？」

ラグ「!?!?なんでわかるの？」

なんとラグは分身とittedただけに驚く

ラッシュ「俺が気づかないと思ったか？俺は波動が使えるから大体わかるんだ」

となりにいたルングも

ルング「マジかよ!?!」

驚いていた

ラグ「別に隠すことじゃないんだけど、もう一人の僕はこっちの修行のためこっちに残ってるんだ、僕はミュウによってそれを似せてるんだ」

レウト「つまり、コピーか？」

だがラグは

ラグ「僕は強くなるためこっちにやってきたけど、中々ラッシュ達にいえなくて」

どうやら言える状態じゃなかったらしい

ラグの説明によると

こっちのラグはそのまま『デンラージ』に必要な力を身につけるためこっちの世界に残った

それはみんなと離れるのが寂しいかららしい

そこでミュウにより、今のラグ、すなわち分身ラグは本物のラグの力をそのまま引き継ぐため、ラッシュ達の世界で修行することにした

ラグ「僕が覚えるのは防御技だけど、攻撃技まで覚えちゃってどうしようかと思った」

するとラッシュは

ラッシュ「そんなことはないぜ」

ラグ「えっ？」

ラッシュは続けていう

ラッシュ「お前は何を言おうがラグはラグだ、お前は本物に力を与えるために来たんだろ？」

ラグは首を縦に振った

ラッシュ「それでいいんだ、こっちのラグと同じにこっちでも俺達がサポートするぜ、『デンラージ』を力を制御できる力をな」

ラッシュは笑顔だった

どんな奴だって

心があるのだから

ラッシュ「お前だって、分身でも心があるじゃねえか」

ラッシュの言ったとおり

分身でも、心は同じなのだから

ラッシュ「だから、俺達がこっちのラグにがんばってもらうために、俺達も全力で強くしてやるぜ」

ラッシュは笑顔で言った

ラグ「ありがとう、ラッシュ」

リング「俺も力のことはよくわからないけど、それでもついていくぜ」

リングも笑顔に言った

ラグ「リング君」

レウト「俺達、仲間だろ？」

仲間

それが彼の心に響いた

ラグ「そうだね…ありがとうレウト」

…

ラッシュ「そんじゃ帰ろうぜ」

ルング「そうだな」

ラッシュ「ところでラグは何処か住むところないんだったら俺のところではばらくいるか？」

なんとラッシュはラグに自分の家に住まさせてもらうことにした

ラグ「いいの!？」

ラッシュ「ああ!」

こうしてラグはラッシュの家でしばらく世話をすることにした

そして

ラッシュ「これからもよろしくな!ラグ!」

ラグ「うん!」

4匹は密林を飛びだった

バトル28 強くなるために（後書き）

ついにラグ君が次回バトル部に入部だよ♪

ラグ「わーいありがとうございます！」

ラッシュ「分身でもよろしくな」

ラグ「うん！」

リング「そんなじゃ次回も楽しみにしとけよ」

バトル29 元人間（前書き）

ラッシュ「なんだ？このタイトルは？」

そんなわけで、またもコラボだよ♪

ラッシュ「作者、わりい」↑作者の頭を殴る

ほげばあ↑殴られて気絶

レウト「おい！？これじゃ作者がコラボキャラの紹介することができねえじゃねえか！？」

ラッシュ「大丈夫だ、後書きになったら起きる」

レウト「（汗）とりあえずバトル29」

ラッシュ「気合入れて行くぜ！」

バトル29 元人間

数日後

ラグはポケハン学園に入学＋バトル部に入った

バトル部部活終了の時間

ガル「そんじゃこれで解散だ!!」

全員『おつかれさまでした!!』

全員解散した

……

ルガー「それにしても、ラグはここんところここになれたな」

ラグ「うん!まさかここまでしてくれたなんて思わなかったよ」

ラッシュ「まあ、バイトはしてるけどな」

彼らは帰りを集団で歩いていた

今日も夕日が赤く輝いていた

リング「俺もここになれたな」

ブレイ「リングも結構がんばってるな」

モモ「まあでもいいんじゃないの？」

レイス「そうだね」

そんなこんなで

ブレイ「そんじゃ俺はこの辺で」

ルガー「俺も」

モモ「じゃあな」

3匹は別の方向に帰った

さらに数分後

レイス「じゃあ俺はこの辺で」

レイスが帰った

残ったのは4匹

ラッシュ・レウト・ラグ・ルングだ

ラッシュ「そんじゃ行こうぜ」

ラッシュ達が歩いていると

ラッシュ「ん？」

レウト「あれって」

ラグ「ピカチュウだよね？」

なんと道端^{みちばた}にピカチュウが倒れていた

ルング「なんでこんなところに倒れてるんだ？」

ラッシュ達が倒れているピカチュウのところに駆け出す

ラッシュ「意識はあるようだな」

すると

ピカチュウ「う…うう…」

かすかだがそのピカチュウは声を出していた

ラッシュ「大丈夫か？」

するとそのピカチュウは

ピカチュウ「は…」

全員『は？』

ピカチュウ「腹が…」

レウト「腹がどうしたんだ？」

ピカチュウ「腹が…減った…」

全員『だぁー！！！！！っ！！？？』

全員ずっこけた

はたしてこのピカチュウは一体

ラッシュ「とりあえず俺の所に運ぼう、お前、名前は？」

すると

ピカチュウ「俺は…ケン…」

ケンと呼ばれるピカチュウらしい

ラッシュ「ケンか…とりあえず運ぶぞ」

ラッシュ達はラッシュの家に向かった

バトル29 元人間（後書き）

というわけで！ケンの物語から、ケン君が来てくれました！↑復活した

ケン「俺はケンだ、よろしくな」

作者さんの轟トドロキさんからしばらくの間のコラボとなりました

ラッシュ「それより作者？タイトルどおりになってねえぞ（汗）」

だって、彼が元人間だからタイトルをそうしただけだよ

ラッシュ「おい（汗）」

ケン「ここってポケモンだけじゃなくてポケモンじゃないモンスターまでいるな（汗）」

だってこれはポケモン×モンハンのクロスオーバーだからだよ♪

ケン「けどすごいな、フォックって（汗）」

ラッシュ「まあ作者は今お前を含めて3キャラもコラボしてるぞ」

ケン「すげえ！！！？どんだけだよ！？（汗）」

まあ俺の気力がすごいからかな？

ケン「あんた、マジ何者だよ！？」

何者と言われてもねゝ（汗）

ラッシュ「とりあえず次回はなんだ？」

次回は少し短くなるかな

ラッシュ「まだバトルしないってことだな」

ケン「バトルかあゝ楽しみだな」

期待しててね♪ケン君♪

バトル30 腹が減っては戦はできぬ(前書き)

ラッシュ「ついに記念すべきバトル30になったか」

あまりタイトルと関係はないけど(汗)

ケン「あんたの気力があればなんとかなるだろう？」

んなこと言われても限度があるんだよ(汗)

ラッシュ「まあ限度はあるがな、そんじゃケン、タイトルコールは任せたぜ」

ケン「おっしやあ！」

それではバトル30

ケン「行くぜ!!」

バトル30 腹が減っては戦はできぬ

そんなこんなでケンというピカチュウをなんとかラッシュの家に運んだ

ラッシュ達4匹はバイトが休みのため、いるらしい

もちろん今日は金曜なので明日は一応部活の予定は午前中となっている

……

ケン「うめえ♪」

ケンはラッシュの作った料理を食っていた

幸せそうに（汗）

ラッシュ「まあよかったな（汗）」

ラグ「しかもよく食べるね（汗）」

レウト「ラッシュ（汗）食費は大丈夫かよ」

ラッシュ「フオケンところから取り寄せてるんだ、とりあえずはなんとかなるが、コイツすごい食欲だな（汗）」

ラッシュ達はケンの食欲に驚く

ケン「おかわり！」

おかわりまで要求してきた

ラッシュ「ルング、手伝ってくれ」

ルング「わ…わかった（汗）」

……

数分後

ケン「あゝ食った食った♪」

ケンは満腹になりねっころがった

一方のラッシュ達は

ラグ「洗物も大変だよ」

レウト「コイツの食欲には驚くな（汗）」

ラッシュ「とにかく洗うぞ」

食器など、ケンが食べ終えた食器を洗っていた

……

数分後

ケン「ありがとな、もう少ししたらうえじにしそうだったぜ」

ラッシュ「そうなのか(汗)」

ラグ「でもよかったね(汗)」

とりあえずはなんとかなった

ラッシュ「ところで？なんでお前はあそこに倒れてたんだ？」

するとケンは

ケン「仲間とはぐれてな、気づいたらここに来てたんだ」

と、ケンは言った

ラッシュ「そんじゃお前は別の世界から来たんだな？」

と、ラッシュは質問した

ケン「ん、まあそうだけどな、でも俺は元々ポケモンじゃないんだ」

ルング「なっ!？」

ラグ「ポケモンじゃない!？」

レウト「そんじゃ何者だよお前!？」

すると

ケン「俺は元々人間だったんだ、とあることで俺の世界だった世界に来たんだ」

レウト「何っ!？」

ルング「ケンが!？」

ラグ「元人間!？」

元人間

それが彼の元の姿

ポケダンみたいに人間だった者が、突然ポケモンになるという現象があるのだ

そう、彼のように

ケン「まあ俺がいた世界に来てから、色々技とかも覚えたからなく負けたこともあったしな」

彼もポケモンでもポケモンで行っている

ラッシュ「なるほどな、どうりでお前の波動がポケモンじゃない感じだと思ったな」

ラッシュは気づいていた

ケン「えっ！？でもお前ってリザードンだよな！？ルカリオなら分かるがなんでお前が波動使えるんだ？」

波動は誰でもあるが、その波動をきわめし者は少ししかない

ルカリオや神と呼ばれしポケモンなどは波動をもっており、波動弾などの波動を使った技を使える

ケン「あつても俺の仲間に波動打てるのいるからな」

ケンの仲間がいる世界には波動を使える者はいるらしい

ラッシュ「まあ、俺は色々極めてつから使えるからな」そういりやあ自己紹介がまだだったな」

そういえば

ケン「あっ！？そうだったな、お前だけじゃ誰だかわからないからな」

ただ単に忘れていた

ラッシュ「そんじゃ紹介するぜ、俺はラッシュって言うんだ」

レウト「俺はリオレウスのレウト、ポケモンじゃないが一応モンスターだ、よろしくな」

ラグ「僕はラグラージのラグ、分け合ってこっちの世界に来てるんだ」

リング「俺はリング、わけあってこの名は俺の仮の名前なんだ、本当の名前はあかすことができないだ、よろしくな」

それぞれ紹介した

ケン「へえ、俺だけじゃなくて、こっちに来てる方もいるのかあ」

自分だけじゃなかったのかとケンは思っていた

ラッシュ「そんじゃケンはこれからどうすんだ？」

するとケンは

ケン「こっちに来たのはなにか縁がありそうだな、しばらくはいいいか？」

と、言ってきた

すると

ラッシュ「ああ、いいぜ、ただしお前には色々と手伝ってもらおうかな」

と、言ってきた

ケン「わかった、そんじゃしばらくはよろしくな」

こうしてケンはしばらくこの世界にいるようだ

……

夜

ケン「へえ、バトル部の部長なのか、ラッシュは」

ラッシュ「まあな、ところでケンは今いくつなんだ？」

ラッシュはケンの年齢を問いかけた

ケン「うゝん、たしか14だったかな」

ラグ「少し年は離れているね」

ラッシュ「ルングは大体18だからな」

ケン「えっ！？あのジュカインが18！？」

ケンは驚いた

18だと高校を卒業する年なのだ

ラッシュ「いやアイツは休み過ぎで留年でな（汗）」

ラグ「自由人フリーダムなんだ（汗）彼」

ケン「マジかよ！？」

そりゃあ驚くわ（汗）

ケン「そんな奴がバトル部にいるのかあゝでも俺の知らないモンスターもいるなゝたとえばレウトというリオレウスだっけ？あれって見た目はドラゴンだよな？」

ケンはモンスターハンターのモンスターを知らない

だってこれはあくまでポケモンとモンハンのクロスオーバーなので
(汗)

ラッシュ「まあ、まだなれないが明日は部活の見学に行くか？」

と、言ってきたラッシュ

するとケンは

ケン「いいぜ、どうせこのまま家にいるのも悪いしな」

賛成のようだ

ラッシュ「そんじゃ明日は7..00に起きるぞ」

ラグ「ラッシュも最近は早く起きたしね」

と、ラグに言われたが

こうして1日は終わった

バトル30 腹が減っては戦はできぬ(後書き)

ラッシュ「まだバトルじゃないのか？」

次回かその次かにはバトルにはなると思うよ

ケン「早く戦いてえゝな」

待っててね

ラッシュ「ところで作者はほとんど執筆に音楽かけるなゝ」

これは俺の集中を高める効果に、アイデアなどの浮かぶときには必要なの

ケン「なんでFFのゲーム音楽なんだ(汗)」

ゲーム音楽もテンションがあがるから、それにその曲自体が話しにあってる感じになるから

ケン「なるほどなゝあんたってやっぱただものじゃないな」

これでも姿は狐獣^{フォックス}人な感じだけどね

ラッシュ「作者の動力源は音楽だな(汗)」

もちろんサイコー・エブリデイとかもいいしね

ケン「ポケモンのOPのあれか？」

そう♪

バトル31 見学（前書き）

今回はケン君の部活見学になっております♪

ラッシュ「まあまずは小手調べだな」

ケン「いや（汗）小手調べって感じじゃないぞ（汗）」

そんじゃ行ってみよう！バトル31

ラッシュ・ケン「どうぞ」

バトル31 見学

午前7…00

ラッシュとラグは起きていたが!?

ケン「ZZZ…」

ケンはぐっすり寝ていた

ラッシュ「なあ? ラグ、とりあえずケンを起こしてくれ、俺は朝食をやりから」

ラグ「うん、わかった」

ラグはケンを起こす

ラグ「ケン君、朝だよ」

だがケンは起きない

ラグ「うーんどうしよう」

ラッシュ「どうしたんだ?」

そこへ朝食を作り終えたラッシュがきた

ラグ「ケン君が起きないんだ」

ラッシュ「ちょっと待ってくれ」

ラッシュはすぐさま朝食をテーブルに置いた

ラッシュ「うーん、どうやら誰かと話しているな」

ラグ「えっ！？誰って誰なの？」

ラッシュ「わからないが、どうやらケンにとっては重要なことらしいな」

ラグ「重要なこと？」

ラッシュ「そのうち目覚めるだろう、別に死んだようじゃないからな、俺の波動能力を甘く見るな」

そう、ラッシュには波動が使えるため相手の状況もわかるのだ

一方、ケンの夢の中

ケン「俺は…」

ケンは悩んでいた

彼の仲間がいる世界でのこと

彼は仲間とバトルをした

だが結果は惨敗

彼にはなにが足りないのか

『……………』

夢の中の相手は話す

なにを言ってるのかわからない

彼にはわかった

その言葉を

だが、それはあまりいい意味ではなかった

彼はなぜ負けたのか

このまま自分は足手まといなのか

彼の夢は重々しいものだった

……

ケン「んん」

ケンはなんとか起きた

ラグ「あっ！起きたよ」

ケン「あれ？ここは？」

ラッシュ「お前？寝ぼけてるのか？朝食だ、食うぞ」

ケン「お…おう」

3匹は朝食をとった

とりあえず彼らは朝食をとったあと、準備をして学校へと行った

…

ポケハン学園

ケン「でけえゝ（汗）」

ポケハン学園のでかさと広さに驚くケン

ラッシュ「そんじゃ行こうぜ」

3匹は校舎に入った

…

バトル部部屋

ラッシュ「よっス」

レイス「おはようございますラッシュ、ん？そのピカチュウは誰ですか？」

レイスがケンに気づいた

ブレイ「誰なんだ？そのピカチュウ」

ケン「ん？疾風？^{はやて}」

ケンは疾風となんか名前のようなことをブレイに言う

ブレイ「疾風？俺はブレイだが」

ケン「（そんなわけないか）ご…ごめんな（汗）俺の仲間があんたみたいなバシャーモだったから」

ブレイ「そうなのか？なんだそうならそうと早く言えよ」

ブレイはそれでも元気があっていた

ケン「（なんかこいつ元気いいな）」

そんなこんなで部活の時間

ゼルス「えー今日はガル先生がいないため、俺が今日お前達を見ることにした、よろしくな」

ガル先生は今日は急用のためいない、イッくん先生もそうだ

ゼルス「で？今回はバトル部を見学に来たものがいてな、ちょっとだけ見ることにした、では来てくれ！」

ゼルスはケンを誘導する

ケンがバトル部全員の前へきた

ゼルス「そんじゃ自己紹介してくれ」

ケンは自己紹介した

ケン「俺はケンっていうんだ、よろしくな」

自己紹介が終わり

他のメンバーも紹介した

ゼルス「そんじゃこれで以上だそんじゃみんなそれぞれ特訓開始だ！」

その声でみんなはバラバラにちらばった

ケン「バトル部ってすげえな（汗）」

バトル部のすごさに驚くケン

ゼルス「ところでケンはこのまま見学するか？」

と聞いてきた

ケン「ああ、俺はちよつと修行のためにきたから、ちよつとバトルがしたいんだ」

ゼルス「そうか、じゃあラッシュとバトルすればいい、なにかアイツに色々と教わればいい修行となるぞ」

ケン「わかった」

ケンはラッシュのもとへと向かった

一方のラッシュは

ラッシュ「フレアソウル！」

ラグ「アクアカノン！」

ラッシュはラグと練習

互いに技をぶつけた

技は互角

打ち消した

ラッシュ「ラグもだいぶサマになったな」

ラグ「おかげでうまくなったよ」

ラグはラッシュ達のおかげでさらに成長した

課題があるがそれでも彼はがんばっていた

ラッシュ「もう慣れてきただろ？それじゃあ今度は魔法とかを覚えるか？」

ラグ「魔法かあゝ♪うん！やるやる！」

ラグは魔法を覚えたくワクワクしていた

ラッシュ「そんなに早速」

ケン「おい！」

突然ケンがやってきた

ラッシュ「どうしたんだ？ケン」

ケン「実はあんたに頼みがあるんだ」

頼みとは

ケン「ゼルスってジュカインに許可を得て、俺とバトルしたいんだ、あんたと」

ラッシュ「俺と？いいぜ」

ラッシュはOKだ

ケン「そんなにやろうぜ」

ラッシュ「そうだな、お前の実力も見たいからな」

互いにかまえる

ラグ「そんなに僕は審判をやるよ、それじゃあ試合開始」

二匹の戦いが始まる

バトル31 見学（後書き）

ケン「次回がバトルかあ」

まあ君の実力もかねて俺も君に技を伝授しよう

ケン「けどいいのか？」

別に大丈夫、ほとんど俺考案の技の数々だから

ケン「ほんとあんたって化け物みたいだな（汗）」

化け物ほど（汗）

バトル32 ラッシュVSケン〜実力〜(前書き)

さて、バトルだよ

ケン「おっしゃあ！やってやるぜ！」

ラッシュ「俺にかてるか？」

ケン「絶対勝つ！」

なんか気合が入ってるところで、バトル32

ケン「燃えて来たぜ！！！」

ラッシュ「まあいいか」↑本当のセリフ担当

バトル32 ラッシュVSケン〜実力〜

先に攻めてきたのはケンだ

ケン「行くぜ！10万ボルトオ！」

ケンは10万ボルトでラッシュに攻撃

ラッシュは飛行タイプなので効果は抜群

だがラッシュは

ラッシュ「あわてるなよ、そんなんじゃ俺には効かないぜ♪ヒートソウル！」

ラッシュはフレアソウルの強化した技、ヒートソウルで10万ボルトを防いだ

この技はさらに炎の弾をパワーアップして攻撃する技だ

ケン「ならこれはどうだ！トライス・ツインスピア！」

ケンは電光石火でんこうせっかでラッシュに接近してそこから二本の槍を出現させた

ラッシュ「槍？…まさか！？聖霊せいれい技か！？」

ラッシュが言った聖霊技とは？

聖霊獣と呼ばれるものから技の名がきている

ケンが言った技トライスと名のつく技がその一つだ

ラッシュ「だが俺には効かないぜ♪」

なぜか余裕な感じのラッシュ

ケン「そんなのやってもなきゃわかんないだろ！行くぜ！」

ケンは槍をラッシュに向けて投げた

ラッシュはドラゴンクロード槍をはじいたが

ケン「おおおおおおおおおっ！！」

ケンがもう一方の槍をかまえて突進してきた

ラッシュは避けたが脇腹をかすめた

ラッシュ「中々やるなあ〜効いたぜ♪」

少しのダメージでもまだまだ余裕のラッシュ

ケン「はあはあ、なんであんまり効かないんだ？ならトライス・チェンジ・ザ・コンディション！！」

ケンの周りに五つの電気の球体が出現した、目の下にはM・A・Cと文字が刻まれていた

ケン は球体の一つから槍を取り出した

ケン 「これは俺の技の一つだが、武具をこの球体で取り出す技だ」

ラッシュ 「おお！いい技じゃねえか♪だがそんなんじや俺には勝てないぜ、なら俺は新しい技を確かめるか♪バーニングジョブウェポン」

ラッシュ の手から炎が集まり形を整える

ラッシュ の手には炎で作った斧おのが現れた

大きいがラッシュ は片手で持っていた

ケン 「行くぜ！ラッシュ！」

ケン が攻める

ラッシュ は槍を斧の腹で受け止める

ケン 「なっ!？」

ラッシュ 「行くぞ！」

ラッシュ は斧を一振りする

ケン はすかさず丸い電気の盾を取り出して防いだ

そこをラッシュ は

ラッシュ「防いだが、ならこいつにするか」

ラッシュの斧が炎に戻り新たに具現化した

今度は槍のようだ

ラッシュ「行くぜ！スピアラッシュ！」

ラッシュは両手に槍を構え何度もケンに連続で突いてきた

ケンは盾で防ぐがだがそれもここまでだった

盾にヒビが入り盾は砕け、ケンは連続の突きでダメージを負ってしまった

ケン「ぐあっ！？」

ケンは地面にたたきつけられた

ケン「くっ…」

ケンはなんとか立つ

ラッシュ「中々根性あるな、だが力不足だ、そんなんじや俺には効かないぜ」

とラッシュは言った

ケン「まだだ…まだ俺は戦える！」

ラッシュ「まだ立てるな」

ケン「俺は…負けられないだ…！」

ケンは突っ込む

ラッシュ「来い！」

ラッシュは構える

ケン「ならこれで！雷の才・いかずちのきぬせら輝世羅！」

ラッシュの頭上に大きな電気の球体が出現してラッシュの頭上に落ち、爆発

ケン「へへっ、やった…ぜ…」

ケンは言葉を失った

なぜなのか

それは

ラッシュ「ふう…危なかった…俺がテトに炎まとい教わりにいってなかったら今頃俺は倒れてたぜ」

ラッシュの周りには炎がまとい

さらに炎はまだラッシュの周りをまとっている

ケン「なっ！？なんで効かないんだ！？」

ケンは自分の聖霊技…いや真・聖霊技が効かなかったことに驚く

ラッシュ「なんで効かなかったか？それはな…この炎まといをさらに強化したからだ」

なんと炎まといを強化！？

一体

ラッシュ「炎まといは相手の体力をうばうが攻撃が通ちまうからなあ、そこで俺は炎まといにちよつとしたことで防いだ、それは俺の技カウンターフレイムで防いだからな」

なんとラッシュはカウンターフレイムを炎まといにプラスして防いでいたのだ

ケンは驚いた

なぜか体力は限界になって倒れてしまった

ラグ「ケン君戦闘不能、ラッシュの勝ちだよ」

ラグが言う

その後ケンを部室に運んだ

……

部室

ここにはベットもあり、休めることができる

そんなベットで休むケン

なぜか悔しい顔をしていた

今はラッシュとラグがいる

ラッシュ「とりあえず言うが、お前はまだ力不足だ、それにお前には足りないものがある」

ラッシュは言った

ケン「足りないもの？」

ケンにはなにが足りないのか

ラッシュ「お前は相手の行動などの観察力が足りない、そこで、お前の敗因は」

ケンには観察力が足りない、そして力不足

それが彼が弱い理由だ

ピカチュウは攻撃やとくこうが低いがすばやさだけは早い

だがケンはそれぞれの技や能力にデメリットがあるのだ

電気玉などのアイテムを持たせるのも手段だが

彼には不足しているものはあるにはある

だがラッシュは

ラッシュ「だがお前は中々根性がいい、ただ力や他は色々経験不足だ」

ケンはションボリする

ケン「俺は…メンバーの一人と戦って負けた…俺は負けたくなかった」

ケンの瞳に涙がほほを伝って流れる

そこで

ラッシュはケンの頭をポンとたたいた

ラッシュ「これから強くなればいい、俺がついてるぜ」

ラッシュは優しく言った

すると

ケン「う…うわああああああああああん!!」
（泣）

ケンは思いつきり泣いた

弱い自分が情けなくなっている

少々熱血漢でバカなところがあるが

それでもケンには泣いた

強くなりたい

そんな思いを胸に

……

ラッシュ「大丈夫か？」

思いつきり涙を流したケン

ケン「ああ、ありがとうラッシュ」

ケンはラッシュに礼を言った

ラグ「ケン君、僕も同じだよ、僕もラッシュと修行してがんばってるから君も強くなるよ」

ケン「ラグ」

ラグはケンを励ます

ラッシュ「そんじゃこれからやるか」

ケン「ああ！よろしくな…そうだ実はラッシュに頼みがあるんだが」
ラッシュ「頼み？なんだ？」

ケンの頼みとは

ケン「俺の仲間でココロっていうのがいて、ソイツは能力あるけど、ある事で多進化できなくなったんだ」

ラッシュ「多進化？」

ケン「ああ、ココロもこのままじゃ戦えないからなあ」

するとラッシュは

ラッシュ「それなら一ついい方法がある」

なんと方法があるらしい

ラッシュ「つまりそれでは足でまといだろ？なら虹色の石って言う石がある、それを使えばお前の仲間はその能力を再び使える」

ケン「本当か！ならその石はどこにあるんだ！」

と、ラッシュに迫る

ラッシュ「落ち着けよ（汗）その石は虹の山って言うところにあるんだが、今いるところから離れてる、大体こっから歩いてくと2日はかかるぞ」

なんと二日かかるらしい

ラッシュ「それにあそこにはホウオウがいてな、そいつを倒さないともらえないんだ」

ホウオウを倒さなければその石をもらえない

ケン「そうか、ならラッシュ！俺を鍛えてくれ！」

ケンは土下座してラッシュにお願いした

すると

ラッシュ「顔を上げろよ、元々お前を鍛えようかと思ってたからな」

本人は承知していた

ケン「ありがとう！ラッシュ！」

こうしてケンの特訓が今始まろうとしている

バトル32 ラッシュVSケン〜実力〜（後書き）

ラッシュ「やっとバトル終わったな」

ちよつと挑発的な感じになっちゃったかな？

ラッシュ「まあちよつとあるがな（汗）」

ケン「でも、俺は強くなりたからな」

がんばってね、俺も色々とケン君に合った技を考えるよ

ケン「たよりにしてるぜ」

うん、次回はケン君修行編です、大体2話分を使うとは思いますが

ラッシュ「次回も楽しみにしてろよ」

バトル33 ケンの修行開始！（前書き）

ついにケン君修行編になりました！

ケン「やけに気合入ってるな」（汗）」

このくらいしないと書けないからね〜というわけで音楽スタート♪
↑ノーマルバトル（ディシディア）をかける

ラッシュ「曲によってだなありや（汗）」

それじゃあバトル33

ラッシュ・ケン「負けねえ！！！」

バトル33 ケンの修行開始!

そんなこんなで次の日

場所は何処かの滝だ

そこにはバトルフィールドなどがもうけている

ここはポケハン学園から歩いたところにあるバトル滝^{たき}とよばれる場所だ

ラッシュ達はケンの修行につきあうためここにやってきた

ケン「で?俺はなにすればいいんだ?」

と、ケンは言ってきた

ラッシュ「今回お前には魔法とお前の技の強化に新しい技を覚えることだな」

ケン「魔法?」

するとラッシュの代わりにサクラが説明する

サクラは魔法が使えるため、ほとんどの魔法は覚えている

なのでサクラがいてもおかしくない

サクラ「魔法は一応覚えておいた方がいいわよ、色々と有利にはな

るから」

と

ケン「けど俺はなんの魔法覚えればいいんだ」

と質問する

サクラ「うーんケンは魔力がそこそこはあるみたいね、ピカチュウだから、初歩的にはサンダー系と白魔法攻撃のホーリーに補助魔法のヘイスト・ヘイスガとリフレクね」

まとめてみると

ケンが覚えるのはサンダー・サンダラ・サンダガのサンダー系統に白魔法のホーリー、補助魔法のヘイスト・ヘイスガ・リフレクの以上だ

サクラ「一応理由を言うわね、サンダー系はピカチュウのアンタならできる魔法だから、タイプが同じだと威力もアップするの」

同じタイプの技は威力が増す、そのためサンダー系統の魔法はケンには重宝するのだ

サクラ「ホーリーはケンには相性がいいから選ばせてもらったわ、消費は激しいと思うけどあなたにはいい魔法よ」

ホーリーは白魔法の中ではゆういつの攻撃魔法なのだ

サクラ「あとヘイスト・ヘイスガはあなたの仲間の助けにもなるし、

これを覚えればアンタ自身の助けにもなるわ」

ヘイスト・ヘイスガは行動やスピードを上げる魔法

素早さの高いピカチュウなどに重宝する

サクラ「リフレクはアンタのスパークフィールドというバリアをさらに強化するために必要なの」

ケンの技にはスパークフィールドという防御技がある

これをさらに強化するにはリフレクも必要だ

なぜかというと、さらに攻撃技を跳ね返すようになり、カウンターやミラーコートみたいになる

そうすれば戦いは有利となる

サクラ「そうだ!?!あの魔法をどうしても覚えておかなきゃ!?!」

ある魔法とは?

ケン「あの魔法?」

サクラ「これは結構消費が激しいのよ、ケンに耐えるかどうかは分からないわ」

ケン「へへっ、俺はそれでも強くなりたい」

サクラ「そう、わかったわ、そこまで言うんなら言うわ、その魔法とはかつて偉大なる白魔道士が封印を解いて自らの命と引き換えにある者に託した（たくした）魔法なの、あたしも覚えてるけど、あれはかなりきついだよ、なんてたって最強の魔法だから」

ケン「最強の魔法!？」

ケンは驚く

ケン「そんな魔法を俺が覚えて大丈夫なのか!？」

と、いったが

サクラ「強くなりたいんでしょ？」

その言葉に沈黙

ケン「そうだな…俺ちょっと困惑しちゃった」

ラッシュ「まあ無理ねえな、けどお前の修行にはどうしても覚えておかないとこの先不安だ」

とラッシュは言った

ケン「わかった、その魔法の名はなんだ」

サクラ「名前はアルテマ、究極の魔法アルテマよ」

アルテマ

アルティメットからその名がついた最強の魔法

使えばそれがケンの強さになる

サクラ「今は難しいけど、そのときにはなんとかやってみましょう」

サクラはアルテマ習得にはこれまで苦労した

それでも彼女はラッシュのため、そして自分でがんばってなんとかアルテマを習得した

ラッシュ「そんじゃまずは魔法だな、これを渡す」

ラッシュは色とりどりの丸い球体を取り出した

ケン「これは？」

サクラ「それはマテリアっていうのよ、これがあれば魔法を覚えられるわ」

マテリア

それはある世界にあるところで使われた物だ

これがあれば魔法なども覚えられる

ケン「けどどうやってつけるんだ？」

付け方がわからない

ラッシュ「とりあえずトライス・チェンジ・ザ・コンデイションしとけ」

ケンはうなずき、トライス・チェンジ・ザ・コンデイションを発動した

五つの電気の球体がケンの周りに現れた

サクラ「その球体の中に入れてばいいわ」

とりあえずケンは五つの球体に覚えた技が入っているマテリアを球体に入れた

そのあとに五つの球体は消えた

ケン「これでいいのか？」

サクラ「これでなんとかなるわね、後はバトルや特訓を繰り返せば覚えられるわ」

ラッシュ「しばらくはそのままだ、覚えたら返してくれ」

ケン「わかった」

……

ラッシュ「そんじゃケンにはここの滝でバトルを数回やってもら
ぜ」

ケン「数回？」

ラッシュ「そうだ、そうしないと魔法は覚えない、あとはここで新
しい技を習得すればいい」

このバトル滝はモンスターも出るため、修行にはもってこい、もち
ろん野生のポケモンやモンスターもでる

ケン「マジ？」

ラッシュ「そんじゃ俺もついてるから行くぞ！」

……

数分後

ちーん↑すでに灰のケン

ラッシュ「おいおいまだ修行は始まったばかりだぜ、へばるなよ」

ラッシュはまだまだ余裕だ

ケン「んなこと…言ったって」↑もはや虫の息

ラッシュ「ほらよ」

ラッシュはミックスオレをケンに差し出す

ケン「ありがとな…ゴクゴク」

…

数分後

ケン「ふっかつ!!」↑元気になった

ラッシュ「そんじゃ続きでもいくか」

ケン「もちろん!」

ラグ「今度は僕もいくよ」

ルング「俺も」

レウト「俺も」

なんとさらに3匹が加わる

3匹は用事を済ませたらしくかけつけた

ラッシュ「よし!みんな行くぞ!」

全員『おおーーーーー!!!』

サクラ「がんばってね」

サクラは用事があるため去った

バトル33 ケンの修行開始！（後書き）

さて、ついに始まったケン君修行編

ラッシュ「ってかFF7のマテリアまで出るとは（汗）」

こうもしないと覚えないから

ケン「よし！がんばるぞ！」

技も色々と次回から出るから

ケン「楽しみだぜ！」

バトル34 槍と双剣（前書き）

さて、やっと色々とケン君の技が結構できたよ

ケン「おお！」

ラッシュ「そんじゃ始めるか」

バトル34

ケン「燃えるぜ！」

バトル34 槍と双剣

そんなこんなで2週間がたった

レウト「火炎龍！」

レウトは龍の顔の形の炎を吐き出した

相手はケンだ

ケン「トライス・ツインソード！」

ケンは二本の剣を取り出して炎をはじき返した

レウト「中々やるじゃねえか、それでこそだ！火炎放射！」

レウトは火炎放射を放った

ケン「ほっ！はっ！」

ケンは華麗に避ける

ラッシュ「あれからがんばったな、ケン」

サクラ「魔法もなんとかこなせるようになってきたわね」

レイラ「さすがサクラね」

ブレイ「あれから二週間でここまで成長するとはな」

ルガー「元人間なのにやるなあ」

ラグ「僕達も協力したからね」

ルング「それなりにがんばってきたんだ」

あれから二週間でケンは成長した

魔法を覚え、新しい技を覚え

それでも彼はがんばった

バトルを何回かこなし、傷だらけになりながらも彼はがんばった

レウト「風おこし！」

レウトは自分の翼で風をおこした

ケン「スパークリフレクション」

ケンの周りに電気が覆い、さらに緑のバリアーがケンの周りに発生した

風は跳ね返されレウトに向かってくる

レウト「エアスラッシュ！」

レウトはエアスラッシュで風を相殺した

すると

レウト「なっ！？ いねえ！？」

レウトは姿が消えた

ケン「俺はここだ！」

レウト「！？」

なんとレウトの真上にいた

ケン「行くぜ！ トライス・シーズスピア！」

ケンは電気を帯びた槍をレウトに向けて投げた

レウト「くわっ！？」

槍はレウトにヒットし、レウトはケンに向かって引き寄せられた

そこからケンはもう一つの槍を出現させて、レウトに槍を縦に振り回して何度も攻撃して、レウトを遠くに吹き飛ばした

レウトは岩にぶつかり気絶した

ケン「はあはあ」

ケンは疲れながら立っていた

ケンの体はほとんどボロボロで傷だらけだ

ここ二週間、何度もバトルしていた

負けたこともあったが、それでも彼は負けずにがんばってきた

そしてレウトに勝った

ラッシュ「おつかれケン」

ラッシュはミックスオレをケンに渡した

ケン「サンキュー」

ケンはミックスオレを飲んだ

サクラ「とりあえず怪我を治すわ、ケアルガ！」

ケンの傷が完全に治る

ルガー「人間なのにやるな」

ラグ「ピカチュウだけどね（汗）」

ケン「ぷはあゝあゝ生き返る」

ケンは幸せそうな顔をしていた

ラッシュ「よくがんばったな」

ラッシュはケンの頭をポンと軽く叩いた

ケン「ありがとなラッシュ、おかげで強くはなれた」

レウト「俺を倒したんだからお前は強いぜ」

レウトは頭にタンコブが出来ていた

ケン「ぷっwレウトの頭にタンコブついてるぜ」

レウト「なっ！？笑うな／／／！」

全員（ルガー以外）「はははははは」

……

ラッシュ「それで虹の山に行く日だが」

そう、最終目的は虹色の石を手に入れることだ、修行もかねてのことだが、大切な仲間が足手まといになるとなお不利だ

ケン「いつになるんだ？」

ラッシュ「ホウオウが来るのは決まってるじゃないが、ホウオウは月に一度だけ旅に出るらしい、で、旅に出るのがその3日後になる」

ケン「そんじゃ早く出発しようぜ」

ラッシュ「まで、あわてるな、お前は明日までにゆっくり休め、まだ疲れてるだろ？」

たしかに、レウトと戦ったのもあって疲労している

ケン「そうだな…じゃあ今日は帰るか」

サクラ「そうね、もう夕方だから」

レイラ「明日は学校お休みだから大丈夫ね」

ルガー「俺も行くぞ」

ブレイ「ルガー！抜け駆けはするいぞ！俺も混ぜろ！」

サクラ「私も行くわ」

レイラ「私もよ」

ラグ「僕も」

ルング「俺も行こう」

なんと全員で虹の山に行くらしい

ラッシュ「そんなに大人数でいくのは（汗）」

サクラ「いいのよ♪どうせ学校のバスを借りる予定だし」

ラッシュ「あのな（汗）」

ラッシュはたじたじ

本当は少人数の方がいいのだが

みんな行きたいといったため、明日みんなで虹の山に行くことになった

……

その夜、ラッシュ宅

三匹は寝ていたが、ケンは緊張しているのか起きてしまい眠れなかった

ケン「…外で風でもあたってよう」

ケンはベランダに出た

星がたくさん輝いていた

ケン「こっちの方は大丈夫だろうか…やっぱり負けたのが悔しいな…あの時、俺は負けた…」

ケンは一人の仲間との敗北に悔しさを思い出した

思えば負けたことが色々あった

それが走馬灯のようになれる

ケン「それでもここに来てからはラッシュ達、バトル部のおかげでここまでがんばれた」

ケン「俺って…強くなれたかな」

そういうと

ラッシュ「強くはなったぜ」

ケン「ラッシュ!？」

ラッシュ「どうした? 眠れないのか?」

ラッシュがベランダに出てきた

ケン「ああ、なんかな～緊張しちゃってな」

ラッシュ「まあ誰でもあるぜ、でもお前なら大丈夫だ」

ラッシュはケンを励ます

ケン「そうだな…でもなんでラッシュはそこまでして俺を面倒見てくれてんだ?」

すると

ラッシュ「まあ俺も強いが、まだまだだ、でも俺のライバルもいる、お前は俺のライバルだから俺はそういうことをする」

ケン「なんだかな」(汗)」

それでも二匹は笑顔だった

ラッシュ「色々あるが、俺はそれでもお前を信じてる、そして勝てよ」

ラッシュはケンの頭をなでる

ケン「ありがとな」

ケンは笑顔になりながら

ケン「おやすみ」

ラッシュ「ああ、おやすみ」

ケンは自分のふとんに寝た

ラッシュ「さて、俺も寝ますか」

ラッシュはベランダの窓をしめて自分のふとんにもぐった

そして……

バトル34 槍と双剣（後書き）

やっと終わった〜

ケン「ありがとなフォック」

ケン君の技がやっとできあがってよかったよ♪

ラッシュ「次回で虹の山だな」

そしてケン君とのコラボもそろそろ終盤に差し掛かったよ

ラッシュ「ということはそろそろ別れがくるか」

ケン「作者の事情があっからな（汗）」

それでもコラボしたのは嬉しいよ♪

ケン「あんたもがんばれよ」

がんばってみるよ

バトル35 虹の山（前書き）

ついにケン君の方も終盤になったよ

ラッシュ「ついに虹の山のホウオウと対決か」

いやまだ

ケン「そんじゃあバトルは」

それは後書きで

ラッシュ「そんじゃバトル35」

ケン「貫け！」

バトル35 虹の山

朝のポケハン学園校門前にはみんな集まっていた

ラッシュ「うっす」

ブレイ「おー！ラッシュ！」

ルガー「よ」

サクラ「来たわね」

レイラ「私達もよ」

レウト「よっ！ラッシュ！」

ルング「ケンもラグもおはよう」

ラグ「おはよう！みんな！」

ケン「よっ！」

ラッシュ「みんな揃ったな」

これで行くメンバーがそろった

ちなみにバスで虹の山までは1時間だ

バス運転はゼルスがすることに

ゼルスは運転免許やバス運転免許をもっている

ゼルス「みんないいな！それじゃあ出発だ！」

ラッシュ達は虹の山へと出発した

……

出発から1時間後

ようやくバスは虹の山の駐車場に止まった

ここからは歩いて山頂をめざす

虹の山はずっともみじが赤いままの山だ、なぜもみじがずっと赤いままなのか？

ここは何年たってももみじが赤いままで虹の山は観光名所として多くの観光客が訪れる

まあ環境がいいのかわからないが（汗）

そんな中、ラッシュ達バトル部一行は山を登った

……

山に登り

疲れながら上る

そんな中ケンはどう思った

俺は絶対強くなる、そしてみんなを守れるように、そしてアイツを倒すために

そんな思いを胸に彼は汗をかきながら山に登った

そして……

……

虹の山頂上

ラッシュ「やっとなついたな」

ケン「ここが山頂」

サクラ「わあ」

レイラ「綺麗きれい」

そこには景色がとても美しかった

赤いもみじがそれを演出して、夕日のような景色をうつす

ブレイ「すごいな」

ルガー「ああ」

ラグ「こんな山初めてだよ！」

ルング「こんな景色はすごいな」

ゼルス「それがこの虹の山だ」

みんな感心していた

その時

一つの影がこっちに向かってきた

だんだん近づくにつれてその姿があらわになった

赤と黄緑のあわせた翼、黄色のクチバシ、とさかは黄金のようなととのったとさか

これが虹色ポケモンのホウオウだ

そんなホウオウはラッシュ達の前に降り立つ

ホウオウはまずラッシュを見た

「久しぶりだな不良リザードンよ」

不良リザードンとはラッシュのことだ

ラッシュ「久しぶりだな、スザク」

ラッシュはホウオウ、スザクに言った

スザク「ほう、ずいぶん成長したな。1年前とはくらべものにならないな」

みんな驚く

ラッシュはなんとホウオウのスザクと知り合っていたことを

もちろんサクラは知らずに驚く

[illegible]

「ラッシュ」なっ!?!? なんだよ!?!? 俺がホウオウと知り合いだから驚いてるのか」

まったくもってそのとおりだ

ケン 「まさか知り合いとは（汗）」

レウト「ラッシュってすごっ!？」

とまあそこはおいといて

ラッシュ「実はスザク、お前に虹色の石をもらいたいんだ、だが俺が相手じゃない、そこにいる俺のメンバーでピカチュウの奴と戦ってもらいたい」

するとスザクは

スザク「いいだろう、私もそろそろ旅に出るところならば相手しよう、そのピカチュウよ、お前が私の相手か？」

ケンのことだ

ケン「ああ、あんたの虹色の石が必要なんだ」

スザク「ではついてこい」

スザクは山頂の別のところへ案内した

……

そこは山頂のバトルフィールドだった

サクラ「すごい」

ルガー「和のフィールドか」

バトルフィールドは和を彩ったフィールドだ

地面には少しもみじが落ちているがフィールドとしては十分だ

そんなスザクとケンはバトルフィールドに立つ

スザク「遠慮なく来るがいい」

ケン「負けないぜ：俺は絶対」

バトルが今始まる

バトル35 虹の山（後書き）

ラッシュ「次回はついにスザクとケンの対決だな」

はたして、ケン君は無事にスザクに勝てるのだろうか

レウト「次回もお楽しみに」

バトル36 ケンVSスザク 決めろ！トライス・アルテマスパア！！（前書き

ついにケン君がスザクと対決だよ

ケン「やつとか…俺は負けない！」

その意気だよ！ケン君、ではバトル36

ケン「決めてやる！」

バトル36 ケンVSスザク 決めろ！トライス・アルテマスピア！！

すでに観客席にはラッシュュ達

バトルフィールドにはホウオウ、スザクとケンが立っていた

互いに構える

そして

タッ

先に動いたのはケン

ケン「まずはトライス・ツインスパアだ！」

ケンは二本の槍を出現させた

ケン「いっけえー！！」

ケンはそのうちの一本をスザクに向けて投げた

スザク「私にそんなものは効かない、守る」

スザクは緑色のバリアーを張った

ケン「なら！守るを打ち消せばいいんだろう？」

そんなことをケンが言ったが？

そんなこんなで槍はバリアーに当たる

すると

バリアにヒビが入り、破られてしまった

スザク「何!？」

これにはスザクは驚く

槍はスザクの左翼をかすった

こちら観客席は

レウト「おお!やるじゃん」

サクラ「守るをあんな簡単に!？」

レイラ「でもなんで？」

ラッシュ「ああ、実はあいつにある技があるんだ」

ルガー「ある技?それはなんだ？」

その技とは

ラッシュ「フェイントだ」

フェイント

守るや見切りなどに有効な技だ

だが使うタイミングなどが難しいために覚ええない技だ

だがラッシュは

ラッシュ「ピカチュウであるケンなら、フェイントは覚えるはずだから、それに」

全員『それに?』

そこにゼルスが一言はいる

ゼルス「それをトライス・ツインスピアにフェイントの効果を追加したんだ、俺も見切りを破られたからな」

これにより、スザクは守るを封じられた

バトルに戻そう

ケン「少しかすったが、これであの技が使える! トライス・オールスピア!」

ケンはそこからスザクに近づき、連続で突き、最後に槍を振ってスザクを吹っ飛ばす

スザクは飛ばされたが、岩にぶつからずに両翼でバランスをとった

トライス・オールスピアはトライス・ツインスピアの派生技

派生技とは

一定の技をマスターして、そこから追加の攻撃技を加える技だ

ケンはずでにトライス・ツインスピアをマスターしたために派生技、トライス・オールスピアを出せたのだ

スザク「中々やるな」

だが関心のスザクはピンピンしてる

ケン「なっ!？」

スザク「このくらいの攻撃が私に通用すると思うか」

たしかに

伝説のポケモン相手だと、強さも異なる

それに対策なども考えてあるだろう

ケン「まさか!?!自己再生!?!」

スザク「そのとおりだ」

自己再生によってスザクは回復していた

スザク「今度はこっちの番だ、火炎放射」

スザクは地面に向かって火炎放射を放った

ケン「どこ狙ってるんだ？」

だがそれはフィールドにある木の葉を燃やした

スザク「私が狙ってるのはこの木の葉達だ、なぜ攻撃したかはお前の周りをみればわかる」

ケン「何っ!？」

ケンは辺りを見回した

なんとちりちりに木の葉が燃えてるではないか

ケン「まさか!？」

スザク「そう、そのまさかだ」

スザクはフィールドの木の葉を利用したのだ

それは、ケンの行動範囲を狭くしたのだ

相手のスピードで翻弄するのが、素早さの高いポケモンのバトルスタイル

だがそのスピードが封じられたのだ

これによりケンは行動範囲を制限されてしまった

あたれば火傷だ

ラッシュ「やるな」

ラグ「これじゃあケン君が不利だよ!？」

ルング「これはかなり苦戦するな」

ケン「くっ!？」

スザク「さあ、どうする?」

もはや袋の鼠だ
ふくろのねずみ

スザク「なら、行くぞ!フレアスター!」

スザクは火球を散らした5つの弾で輪を作ってケンのいる中心に爆発させる

ケン「うわあ!？」

ケンは避けられずにダメージを受けた

ケンはすかさずその後ジャンプして少し距離をおいた

スザク「ほお、中々やるな、だがここまでだ」

スザクは何かの攻撃の態勢に入った

スザク「ととめだ、聖なる炎！」

スザクは聖なる炎を繰り出した

聖なる炎

それは炎タイプでもっとも高威力の技だ

覚えられるのはホウオウのみだ

そんな炎がケンに迫る

ケンは思った

俺は…負けるのか…

そんな中、ケンの思い出が走馬灯そうまどうのように思い出す

仲間に負けたこと

ラッシュ達バトル部と一緒に修行につきあってくれたこと

そんな思いが彼をつきうごかす

ラッシュ「あきらめるな！ケン！」

ラッシュがさけんだ

ラッシュ「お前は強くなりたかったんだろ！なら俺たちに見せ付けてみる！」

さらに声が聞こえる

レウト「俺たちがいる！ケン！負けんじゃねー！」

サクラ「なんのために魔法習得したのよ！ケン！」

レイラ「負けないで！」

ブレイ「負けるな！燃え上がれ！」

ルガー「まだ負けてないだろ！あきらめるな！」

ルング「行け！！ケン！」

ラグ「がんばれ！！ケン君！」

みんなの声が…

そうだな…

俺はこんなところで

聖なる炎は爆発した

……

スザク「終わったな」

スザクはそういい立ち去るが

スザク「炎がスザクに襲い掛かった」

スザク「くっ!？」

スザクはダメージを受けた

そこから、光球が5つスザクに襲い掛かる

さらにヒットしてケンのいたところからさらに雷の弾がスザクに連
発ヒットした

スザク「ぐわっ!？」

スザクはよろけた

????? 「まだ俺は負けてねえ!!」

スザクはケンのいた場所を見た

するとそこには

トライス・チェンジ・ザ・コンディションを発動したケンの姿だった

スザク「まさか聖なる炎からどうやって!？」

なぜケンはこの間に聖なる炎から自分を守ったのだろうか

ケン「それはな：俺の技、スパークリフレクションで守ったんだ、それによって聖なる炎の一部を跳ね返したんだ」

ケンは聖なる炎がきたすんぜんでスパークフィールドを強化した技、スパークリフレクションを発動したのだ

スパークリフレクションはスパークフィールドにリフレクを加えてさらに強化した防御技だ

もちろん技を跳ね返すことができ、大技はその一部を跳ね返すことができるのだ

これにより、ケンへのダメージは通らず

逆にスザクにダメージが来たのだ

ケン「行くぜ！トライス・チェンジ・ザ・コンディション！ソードモード！」

5つの電気の球体の一つを使い、そこから二つの剣を取り出した

ケン「行くぜ！」

ケンはスザクを剣で上空に飛ばした

そこからケンは

ケン「トライス・ブレイバー！」

ケンは剣を一つにして、剣を突き出した姿勢でスザクに突進

スザク「くっ!？」

スザクの左翼にヒット、そこから剣は電気を帯、ケンはそれを連続でスザクに向けて振った

スザクは避けきれずにダメージを受けた

ケン「トライス・マジックスピア！」

今度は剣から槍に変更して三本の槍を操る

スザク「そんなもの! 鳳凰ほうおうの舞！」

スザクは周りを炎で包み込む

スザク「これで槍はおr」

だが槍は炎を簡単に貫いた

スザクは槍にあたり

ケン「トライス・ホーリースピア」

さらにケンは派生技トライス・ホーリースピアを繰り出した

スザクの周りに光球が周り、そこからスザクに向けて集中攻撃した

スザク「守る！」

これを守るで防ぐ

だが

ケン「雷の才・聖雷！」
いかずちのせいらい

ケンは電気を帯びた光球をスザクめがけて飛ばし

バリアーにヒット

そこからさらに雷の弾と光球を繰り出した

これにより守るが破られた

スザク「なんだと!?!」

これにはスザクは驚く

バトル36 ケンVSスザク 決めろ！トライス・アルテマスピア！！

（後書き）

はあくなんとかケン君の技をすべて出したよ

ラッシュ「前の話と今回の話でか？」

うん、後は魔法の方はつけるの忘れてたけど、コラボ終わったら轟さんに技とかの説明とかをメッセーじで送るから

ラッシュ「さて、次回はなんだ？」

次回はケン君とのコラボがここで終了するよ

ラッシュ「ついにケンとお別れか」

さみしくはなるけど、また会える日があればね

バトル37 いつかまた会える日を（前書き）

これでケン君とのコラボはこれでおしまいだよ

ラッシュ「ついに」

ケン「また会えるよな？」

うん、またコラボできたら会いに来てよ

ケン「ありがとな！フォック！」

そんじゃケン君にしめさせてもらいましょうか！バトル37！

ケン「いつかまた会える日をな！」

バトル37 いつかまた会える日を

……

……

こ……こ……は……

……

ここは君の夢の中だよ

…誰だ!?

ここはケンの夢の中

そこにケンは立っていた

そして謎の声は

????? 「やあケン君」

それは狐の獣人だった

ふだんの服を着ており、眼鏡をかけていた

ケン「あんたは？」

ケンは狐の獣人にいった

???? 「俺はフォック、ラッシュ達のバトル部の作者だよ」

なんと作者本人降臨!?

ケン「いや、俺のところに作者きてるが(汗) つかアンタが出てきていいのかよ(汗)」

フォック(作者) 「こちらの世界でも出てきたじゃないか」

たしかに(詳しくはケンのストーリーで)

ケン「で?なんでアンタがここにいるんだ?」

するとフォックは

フォック(作者) 「実は君がこの世界にいる時間が少なくなってるんだ、なので俺が出てきたんだ」

ケン「何iiiiiiii!?!?!」

ケンは驚く

フォック(作者) 「なので俺が夢で出てきたことはラッシュには内緒ね♪それに君は目が覚めたらラッシュ達に別れをいうんだ」

するとケンは

ケン「ちょ…ちょっと待てよ!?!それじゃあラッシュ達と一生会えないってことだろ!?!」

というが

フォック（作者）「安心して、また会えるようにするから、今度は君の仲間を連れてきてね♪ラッシュュ達は歓迎してくれるから」

ケン「ほんとか？」

フォック「大丈夫、俺は君を信じてる、きっとまた会えるよ、かならずね」

するとケンの体が消えていく

ケン「なっ！？体が」

フォック「もう、君が目覚める時間だよ、最後に行っておくね…君はかならず困難を乗り越える、そしてラッシュュ達と過ごした日々を忘れないで、そして忘れないで、ラッシュュ達に教えてもらったことを」

フォックが消える

ケン「忘れない…忘れない！！」

ケンは涙ながら叫んだ

……

……お……

おい……

ケン「ん?…」

ケンは目を覚ました

ラッシュ「大丈夫か?」

ラッシュはケンに言う

ケン「ああ、ありがとな」

ケンは立った

……

ケン「なあ?ここは?」

レウト「ここはスザクの住みかだぜ」

ケンは辺りを見回した

そこにはバトル部のメンバーがそろっていた

ケン「みんな…」

サクラ「やっと起きたわね」

ラグ「よかった」

ルング「ようやくか」

ルガー「いいバトルだった」

ブレイ「よくがんばったな！」

レイラ「よかったね」

みんなが声を掛けてくれた

ケン「みんな…」

ケンは自然と涙が流れた

ラッシュ「よくがんばったな」

ラッシュはそっとケンを抱きしめた

涙の数だけ強くなれるよ

その涙を胸に

大きく彼は成長する

……

なんとかケンの涙はおさまった

ラッシュ「そうだ、お前にこれを渡そうと思ったんだ」

ラッシュは虹色に輝く石を取り出した

そう、ケンはスザクに勝ったため、虹色の石をもらえるのだ

ラッシュ「受け取れ」

ラッシュはケンに虹色の石を渡した

ケン「ありがとな」

すると

ラッシュ「ああ」

ケンとラッシュは笑顔で言った

……

ラッシュ「ありがとな、スザク、ケンを送りに行くの賛成してくれるなんてな」

スザク「私に勝ったんだから、それなりにがんばってもらわないと

な」

スザクは旅の準備をしていた

しかもバトルしてから数時間後だ

日は夕日となっていた

なぜなのか

それは

ケンをこっちの世界に帰すのだ

ケン「そんじゃ俺は行くぜ、ありがとな！ラッシュュ！みんな！」

みんな笑顔になる

ラッシュュ「こっちでもがんばれよ！」

ケン「ああ！」

ケンはスザクに乗った

スザク「それじゃあ行くぞ！」

スザクは羽ばたいた

スザクの体は黄金に輝いていた

ケン「そんじゃみんな元気でな!!」

ラッシュ「また遊びに来いよ!今度はお前の仲間も連れて来いよ!」

ケン「ああ!みんな元気でな——————!!」

全員『元気でな(でね)——————ケン(君)!!』

ケンとスザクは飛び去っていった

ラッシュ「俺たちはいつでも繋がってるからな」

……

ここはラッシュ達の世界のワープゲート

サークルがあり、これにより、別の世界へとワープできるのだ

ケン「そんじゃ俺は行くぜ」

ケンはスザクと別れた

スザク「気をつけるんだぞ」

そういうスザクは飛びだった

ケン「そんじゃ行くぜ！」

ケンがのったサークルはケンを包むようにケンの姿を消した

そこにはもう

ケンはいなかった

……

ワープ中

ケンは虹色の石のほかに、ある物を渡された

……

ワープ前

スザク「これを渡そう」

スザクはなにかの巻物をケンに渡した

ケン「これは？」

スザク「それはお前の仲間がいる世界の聖霊技の巻物だ、これで何か参考でもいいがもらっておけ」

ケンは巻物をしまった

……

ケンが渡した巻物にはなんの技が書いてあるのか

それはこちらの世界で暴かれることだろう

……

一方、ラッシュ達は

ラッシュ「あいつは無事に帰れたんだろうか」

レウト「大丈夫だ、あいつなら帰れる」

リング「いつか帰るべき場所へ」

ラッシュ達はそれぞれ帰って行った

いつかまた会えると信じて

バトル37 いつかまた会える日を（後書き）

終わった〜！！

ラッシュ「ケンに行ったな」

なんかあつというまだったよ

ラッシュ「また会えればいいな」

そうだね

ラッシュ「次回はなんだ？」

次回は…それぞれのキャラの視点からになるよ

ラッシュ「ということは俺の出番がないってことか？」

いや、出るのは出るけど、視点が変わるから、ラッシュの出番もちよくちよくでるかな？

ラッシュ「いや、ちよくちよくって（汗）、ラグとルングもか？」

いや、コラボキャラの二匹とラッシュ以外

ラッシュ「そうか」

まあ次回もお楽しみ

バトル38 また転校生（前書き）

ちよつと今回ある先生の企画に参加したために急遽新たに仲間を増やします

ラッシュ「増やすのかよ」

まああっちの方のルールを見てきたらポケモンのみという限定らしいから

ラッシュ「そうなるとルングやラグも出るのか？」

いや、二匹はコラボだから出せないよ、それに俺もメンバーを考えてるけど

ラッシュ「そんじゃあますますなんとかしないとな」

まあね、ではバトル38

ラッシュ「突き進むぜ!!」

バトル38 また転校生

ポケハン学園校門前

そこに一匹のポケモンが立っていた

????? 「ここだな、噂のバトル部がある学校は」

そのポケモンは学校に入った

……

イックン 「えゝまた転校生がやってきたよ」

こちら1-A

また転校生が来るらしい

ラッシュ 「また転校生か」

ルング 「今度は誰なんだ？」

ラグ 「誰なんだろう？」

レウト 「まあ見てみねえとな」

どうやら転校生が来るらしい

テト「一体どんな奴なんだ？先生？」

テトが先生に質問する

イックン「うゝんたしかポケモンだったね」

どうやら転校生はポケモンらしい

モモ「どんな奴なのか楽しみだな」

と、モモはケンカ腰になる

ラッシュ「おいモモ、席つけよ」

モモ「あいあい」

モモは席についた

イックン「来たみたいだね、それじゃあ入って」

ガラッ

その転校生とは

アザラシのような体系に二本の牙、頭には白いモコモコの毛のポケモンだった

イックン「えゝそれじゃあ自己紹介を」

???? 「俺はトドゼルガのエイガだ、よろしくな」

トドゼルガ、エイガはみんなに自己紹介した

イツクン「えゝそれじゃあ席はルガー君のとなりがあいてるから」

エイガはルガーの席に移動して座った

エイガ「よろしくな」

ルガー「……よろしくな」

相変わらず素直じゃないルガー

ラッシュ「(トドゼルガか…)」

そんなこんなで放課後

ラッシュ達が部室に向かうと

????? 「おい！」

ラッシュ達が振り向くとエイガがすべって追いかけてきた

エイガ「あんたらバトル部の連中だろ？」

ラッシュ「ああ、それがどうしたんだ？」

すると

エイガ「お願いします！どうか俺を弟子にしてください！」

全員『は！？』

バトル38 また転校生（後書き）

ラッシュ「弟子って（汗）」

ホントは部活に入りたいってことだけど

ラッシュ「こんなお願いしなくてもいいんだがな（汗）」

次回は彼の実力をあの男が試します

ラッシュ「俺じゃないのか？」

ラッシュばかりじゃいけないだろう？

ラッシュ「まあたしかにな」

それじゃあ次回もお楽しみに♪

バトル39 エイガVSルガー（前書き）

ラッシュ「ん？ルガーが戦うのか？」

そう、それにこっちの方はどうやら締め切りしてたけど、参加するのOKだって

ラッシュ「おお！それで5名選ぶんだろ？」

その5名は俺が色々とこっちの方を進めていって選ぶよ

ラッシュ「俺は確定だな」

確定は確定だよ

ラッシュ「あと4匹だな」

それをこちらで進めて間に合わせるようにする！それでは連続でバトル39

ラッシュ「行くぜ！」

バトル39 エイガVSルガー

エイガ「お願いします！どうか俺を弟子にしてください！」

全員『は！?』

全員が固まる

エイガ「実は俺強くなりたくてこっちに引越したんです、だから俺みなさんのように強くなりたい、バトル部はラッシュさんが部長の部とわかっています、なので！」

エイガがラッシュユに向く

エイガ「お願いします！」

ラッシュユ「え！？俺に言われても」

エイガ「そこをお願いします！」

エイガは頭を下げてラッシュユに弟子入りというか入部したいという意味でお願いした

ラッシュユは悩むがそこに

ルガー「俺はいいと思う」

なんとルガーがいいといった

ラッシュ「ルガー」

ルガー「俺は別にこいつを入れてもなにも問題ないだろ？ だったら俺もお前を鍛えるっていうのはどうだ？」

と、普段は一人で行動（一緒のときはブレイに強制）していたが

ラッシュ「（ルガー、なんか変だな）わかったいいだろう」

エイガ「ありがとうございます！」

エイガは涙を流した

ラッシュ「おいおい（汗）泣くなよ（汗）とりあえず部屋にいくぞ」

ラッシュ達は部屋へと向かった

……

部屋に到着したラッシュ達は部屋に入った

すると

ゼルス「ラッシュ」

ラッシュ「ゼルスさん、一体どうしたんですか？」

すると

ゼルス「実はバトルグランプリというポケモンバトル大会が別の世界で行われてるみたいなんだ」

レウト「おお！そんなじゃあ俺達にも運g」

するとゼルスは少し残念そうに

ゼルス「残念だがポケモン限定だ、ポケモンじゃないレウトとそのほかは参加できない」

レウト「しょんなゝ（泣）」

レウトは参加できず泣く

ラッシュ「なくなよ、その大会は俺がお前の分までがんばってくるから（汗）」

……

とりあえずみんなが落ち着いて

ラッシュ「問題はメンバーか」

ゼルス「そうだ、メンバーは全部で5匹で参加だ」

ラッシュ「そんじゃあ誰にするんですか？」

沈黙が流れる

ゼルス「まずはラッシュは決まりだ」

ラッシュ「俺が部長だからやっぱな」

一人目はラッシュに決まったようだ

ゼルス「残りはどうするかだな」

そう、ラッシュはもう決まったも当然だが、残りの4匹をどうするのかだ

バトル部のほとんどがモンハンモンスター組なのだ

ラッシュ「これはメンバーどうするかだな」

別世界の二匹はちょっと無理だな
リング・ラグ

たしかに二匹は別世界のもの

今は強くはなったが、事情も事情だ

ラッシュ「とりあえずメンバー集めたほうがいいですね」

ゼルス「そうだな」

ラッシュ「そんじゃ俺はちょっと」

ラッシュは部室を出た

ゼルス「（まあ実力のあるこの大会でなにかいい結果が残せばいい

が」

……

ラッシュ「よし、そんじゃ始めるか！」

ラッシュ達は弟子入りもとい、入部したエイガの特訓に付き合うことに

ラグ「ねえ？僕達はバトルグランプリには参加できないの？」

と、ラグは言った

ラッシュ「すまないな、ラグとルングはちょっと難しいからな」

ルング「まあ俺達の分までがんばってくれ」

ラッシュ「ああ！」

3匹は互いに誓い合った

こちらバトルフィールドにはルガーとエイガが立っていた

ルガー「遠慮なく行かせてもらう」

エイガ「よろしくお願いします！」

二匹は特訓のため試合を行うことになった

ルガー「まずはこっちからだ、トゲ弾！」

ルガーはしっぽを振り回した

すると大量のトゲがエイガに向かって一直線にきた

エイガ「アイスシールド！」

エイガは氷のバリアーでトゲ弾を防いだ

エイガ「!？」

なんとエイガのすぐ目の前にはルガーが迫っていた

ルガー「夜刀双剣^{やとうそうけん}」

ルガーは静かにその技を言い終えると両腕の刃でアイスシールドを切った

すると氷のバリアーはいとも簡単に切られた

エイガ「なっ!？」

それを見ていたラッシュ達は

レウト「すごっ!？」

ブレイ「さすが俺のライバル」

ラッシュ「隙をついたな」

バトルに戻そう

ルガー「どうした？バリアーがもろいぞ」

エイガ「くっ！？ブリザーストーム！」

エイガの周りに氷の竜巻が周る

ルガー「氷の竜巻か…」

ルガーはそれを軽々と避けた

エイガ「避けた！？あんな状況から！？」

ルガーにたしかにあたるがそれがあたらない

なぜこうも簡単によけられるのか

ラッシュ「あいつ、影分身で避けたな」

なんと影分身を作ってよけたのだ

レウト「えっ！？なんで！？」

と、レウトにはわからない状況だった

リング「つまり影分身と怒り状態を使って避けたっていうことか？」

ルングは答える

ラッシュ「まあ正解だな」

エイガ「まさか俺の技が避けられるなんて」

エイガもまさかこんな状況で避けられるとは思わなかった

ルガー「ふん、俺はそう簡単にはやられない」

エイガ「なるほど、かなりのやり手なわけだ…ならこれはどうだ！
ウェーブアイス！」

エイガは大波を起こした

ルガーは大波に飲み込まれた

その後大波は凍った

エイガ「はあはあ、どうですか？俺の最強技は…くっ！？」

エイガは突然倒れた

ルガー「ああ、中々だった」

なんと大波に吞まれたはずのルガーがいた

エイガ「なぜ…」

ルガー「あの時に俺が身代わりで回避した、見てみる」

大波には凍ったルガーの身代わりの姿

するとルガーの身代わりは消えた

ルガー「まあでもお前はよくやる、これから俺や仲間が強くなろう」

ルガーは静かにエイガをのせて部屋へと運んだ

バトル39 エイガVSルガー（後書き）

ラッシュ「ルガーもよくやるな」

ルガー「まあな」

お話中すまないけど、次回はメンバー決定だよ

ラッシュ「ついにか」

ルガー「でもメンバーが少ないんだろ？」

まあそこは俺にまかせて♪

ルガー「不安だ（汗）」

バトル40 メンバーは？（前書き）

ラッシュ「ついに40までいったか」

レウト「ここまで長い道のりだったぜ」

連続での更新もこれで3つだよ

ラッシュ「ついにメンバー決定か」

うん

レウト「俺も出たかったな」

ポケモン限定だからしかたないよ、けど、こっちも対策はあるから

レウト「対策？」

それは見てからのお楽しみ、それじゃあバトル40

ラッシュ・レウト「行ってこいやー!!」

バトル40 メンバーは？

翌日の放課後

部室にはポケモンメンバーが集まった

ゼルス「さて、メンバーだが今回ラッシュが中心となってバトルグランプリに参加することになった、なので参加するメンバーを4匹を選ぶ」

全員『ザワザワ』

あたりがザワつく

ゼルス「発表はラッシュがいう」

ラッシュがみんなの前へ向いた

ラッシュ「みんな！俺たちに出場が来た、モンハン組は参加できないが、そこで数ヶ月後にバトル大会の別世界大会がある、その練習を行ってる間は練習してほしい、以上だ、それでメンバーだが」

ついにメンバーが言われる

ラッシュ「メンバー4匹を発表する、まずはエイガ」

エイガ「俺ですか！？」

ラッシュ「ああ、お前は防御をもっと強化すればより強力な防御になる、いいか？」

エイガ「はい！よろしくお願いします！」

一人目はエイガだ

ラッシュ「二人目はブレイでいいか」

ブレイ「俺か」

ラッシュ「炎タイプはかぶるがお前のバランスのよさをいかして戦ってほしい」

ブレイ「よし！いっちゃってやるぜ」

ブレイは選ばれて嬉しかった

ラッシュ「3人目はモモ」

モモ「お！俺か！」

ラッシュ「まあアタッカーだが油断するなよ」

モモ「おお！俺の活躍を期待しとけよ」

モモが選ばれた

残りはあと一人

ラッシュ「最後はサクラだ」

サクラ「あ、あたし!？」

なんとサクラが選ばれた

ラッシュ「サクラは色々魔法などを覚えてる、それに他に技を覚えてたからな」

なんとサクラは魔法だけじゃなくて他にも技を覚えていた

サクラ「あたし、がんばるわ」

これでメンバーは決定

選ばれたメンバーはここに残り

他は帰った

レウトは副部長のため残った

ラッシュ「それでチーム名をどうするかだが」

モモ「チームモモフレイム!」

ゼルス「却下だ」

モモ「がーん」

モモはショックを受けた

エイガ「でもほとんど炎タイプが多いですが大丈夫ですか？」

と聞くと

ラッシュ「俺たちは大丈夫だ、これでも鍛えたからなく弱点などの特訓などやったから抵抗は少しはある」

まあ大丈夫だろう

エイガ「（さすがバトル部だ、対策まで考えてあるなんて）」

ゼルス「うーん、どうすればいいかな」

中々チーム名が決まらない

ラッシュ「そんなこんなチームにすればいいんじゃないか？」

サクラ「なにかいいの考えたの？」

サクラがラッシュにいう

ラッシュ「ブレイブラッシュっていうのはどうだ？」

すると

ゼルス「なるほどな、それならいいかもしれないな」

サクラ「その名前いいわ！」

モモ「納得できないがいいぜ」

ブレイ「決定だな」

こうしてチーム名はブレイブラッシュに決まった

ゼルス「これからだが、こっちではある事件が起こってる」

ラッシュ「ある事件？」

それは

ゼルス「バトルグランプリの出場するポケモンが何者かに襲われたらしい」

サクラ「襲われた!？」

モモ「なんだって!？」

みんな驚くが

ラッシュは驚かなかった

ラッシュ「なるほどな、そんなじゃあ同時にそいつもいるってことか、これは何か裏とかあるな、だがそれでも俺たちは」

ブレイ「バトル部だ、そいつが何者だろうが邪魔したらたたき潰す」
すると

サクラ「そうね、怖がってるわけにはいかないわ」

エイガ「それでもバトル部の誇りがありますから」

レウト「俺たちの分を無駄にしないでくれよ」

ラッシュ「ああ」

みんなが輪になる

ラッシュ「みんな！かならず優勝を目指そうな！」

全員『おお!!』

こうしてかれらの挑戦が始まる

バトル40 メンバーは？（後書き）

やっとメンバー決まった！

ラッシュ「ついに！」

これでハーブさん所に

レウト「がんばってこいよ」

次回はその練習で別視点になるから、そこにオリ技とかも作成するから

ラッシュ「これは忙しくなるぞ（汗）」

バトル41 新たな力を身につけ ラッシュュ編

ここは虹の山の滝

ここにラッシュュが滝に打たれていた

普通ならしっぽの炎が消えてしまうがラッシュュは別だ

自分の波動でしっぽの炎は消えることはない

ラッシュュは滝に打たれながら

いつか来る大会で優勝を目指して

がんばっていた

……

ラッシュュ「ふう〜さすがに長く滝に打たれるのはな〜」

ラッシュュはさすがに炎タイプが滝に打たれるにはかえって悪い感じに言ったが

ラッシュュ「これでもがんばらねえとな」

それでも彼はがんばっている

……

ラッシュは虹の山の頂上についていた

頂上にはいつもの和のフィールド

そこに

スザク「ラッシュか」

虹の山の管理者、ホウオウのスザクが帰ってきた

ラッシュ「よっ」

ラッシュは挨拶した

スザク「どうやらなにかようがあってきたんだろ？」

と、スザクは言った

ラッシュ「まあな、実は…」

一時沈黙

そこで

ラッシュ「俺に新たな力を身につけたいんだ」

スザク「ほう、新たな力か」

これまでラッシュは波動などの能力がかなり鍛え上げられていた
しかし

ラグやルングは特殊な能力があり、他の世界には特殊な能力を持つ
ポケモンもいる

今回のバトルグランプリでもそんな特殊な能力者がいる可能性がある
るからだ

スザク「バトルグランプリか、こっちの世界では事件が起きている
からな」

ラッシュ「なら俺も特殊な力を身につけたほうがいいからな」波動
だけでは相手に効くかわからないからな」

ラッシュはスザクにお願いして、新たな能力を完成させるためにス
ザクを呼んだのだ

とりあえず事情を説明して

スザク「いいだろう、なら付き合ってやろう」

こうしてラッシュの特訓が始まる

……

次の日

スザク「まずはお前の特殊な能力は何にするかだな」

ラッシュ「そうだな」

まずスザクが考えたのはどんな能力にしたいのかだ

それにより自分の特殊能力がわかるようになり、使いこなせる

ラッシュ「まずは俺が考えたセイバーモードというんだが」

スザク「セイバーモード？」

ラッシュはセイバーモードについて説明した

ラッシュ「俺は武器が使えるからな、なら炎で剣と鎧を具現化すればいいしな」

ラッシュの考えた特殊能力その1

セイバーモード

これは炎の力で剣と鎧を出現して戦うフォームだ

これは前、ケンがトライス・チェンジ・ザ・コンデイションを見て思いついた能力だ

スザク「なるほど、前に戦ったピカチュウが使ったのを参考に考えたんだな」

ラッシュ「アイツのは技だからな、なら俺の場合は特殊能力だ」

そういうラッシュ

スザク「なら、OKだろ」

どうやらOKらしい

続いて

ラッシュ「もう一つ考えたんだけどな、これはどういけるかだな」

スザク「まずは言ってみないとわからないな」

ラッシュはもう一つ考え出した特殊能力を言った

ラッシュ「もう一つはモードチェンジだ」

モードチェンジはラッシュにとってはセイバーモードから別のモードへと変える戦術だ

このモードチェンジがあればどんな状況でも打開できる

スザク「だがセイバーモードだけだぞ？」

とスザクが言うが

ラッシュ「それなら考えてあるぜ、他のモードをな！」

ラッシュが考えたモードは次の通りだ

セイバーモード――（さっき言った）

ダガーモード

ランスモード

アックスモード

ロットモード

ガンモード

そして最強のモードが

ブレイブモードだ

これは剣が大幅パワーアップして、相手に大きなダメージを与える最強モードだ

ラッシュ「以上だ」

スザク「なら早速特訓といくか」

ラッシュ「おう！」

こうしてラッシュの新たな力を身につける特訓が始まった

バトル41 新たな力を身につけ ラッシュ編（後書き）

ラッシュ「ついに始まったな」

とりあえずはそれぞれのフォーメーションを使った特殊能力を身につけます

ラッシュ「まあ虹の山までは飛んでいくからな」

まあ学校があるからね（汗）

ラッシュ「けどよく思いついたな」

まあケン君の技もそうだけど、実はこれはFF13の召喚獣のドライブモードを参考にして考えたんだけどね

ラッシュ「13は召喚獣がバイクや車とかに変形するからな」（汗）
」

まあここからが本番だからがんばっていきこうね

ラッシュ「おう！」

バトル42 魔力をこめて サクラ編（前書き）

ラッシュ編は続きますが、ここから別視点の方に行きます、次はサクラ編です

サクラ「私ね」

今回魔法もオリジナルにしないといけなかったので

サクラ「けど私ががんばるわ！」

気合が入ったところでバトル42

サクラ「甘くみないで！」

バトル42 魔力をこめて サクラ編

ラッシュが修行を開始しているその頃

別のメンバーの方を見てみよう

……

サクラ「うーんフレイガとウォータリルにボルテイルにストリームは覚えたわね」

サクラはバトルグランプリに向けて、新たな魔法と技を習得していた

今回、FF系統の魔法が使えないため、今回は自分が覚えたオリジナルの魔法と技を覚えなければならない

サクラ「炎タイプばかりだから、そうとうなものね」

ほとんど参加するメンバーは炎タイプがほとんど

とくにラッシュとサクラは飛行タイプを持っている

モモとブレイは格闘タイプをも持っている

弱点を突かれるとやばいのだ

そこでその弱点を補うためにサクラはオリジナルの魔法を覚えていくのだ

もちろん魔法を使ったオリジナル技も考えていた

今サクラが習得した魔法は

炎魔法フレイリル

水魔法ウォーターリル

雷魔法ボルテイル

風魔法ストリーム

地の魔法グランドルク

氷の魔法アイスリル

回復魔法ティアヒールとセイントヒール

状態異常回復魔法ユニフェス

状態異常魔法バイポネス（毒）・スリース（眠り）

攻撃補助魔法アタックリル

防御補助魔法ディフェンスリル

素早さ補助魔法スピードリル

魔力・とくこう補助魔法マジックリル

魔防・とくぼう補助魔法マグリル

以上だ

サクラ「あとは光魔法と最強魔法だけね」

残るは光魔法最強魔法だけになった

それには問題があった

サクラ「最強魔法が問題ね」

最強魔法はかなりの魔力を消費してしまういわばもろはの剣だ

それなりの覚悟を決めないと勝てないのだ

サクラ「まずは光魔法を完成しなきゃね、ティアライト！」

サクラは光球と光の帯を直線に向ける

その先には練習用の木があった

魔法はその木にあたり木はふっとんで半分に折れた

サクラ「これでOKね♪」

これで光魔法は覚えた

サクラ「最後は最強魔法マジブレイブね」

マジブレイブ

これはサクラの家にある魔法の書に書いてあった魔法だ

この魔法は数少ないものだけしか使えない魔法なのだ

だがサクラはそれでもマジブレイブを覚えるためになんとかやってみた

…

1週間後

サクラ「はあはあ、ダメだわ、全然」

マジブレイブを習得するために1週間はやったが中々できなかった

サクラ「これはかなり辛いわ、一体どうしたらいいのかしら」

サクラは戸惑った

するとそこへ

レイラ「サクラ！」

なんとレイラが駆けつけた」

サクラ「レイラ！」

……

サクラ「おいしいわ♪ありがとね♪レイラ♪」

レイラ「それにしてもよく食べるわね（汗）」

サクラはレイラと一緒に昼食を取っていた

幸い今日は日曜だったみたいだ

それにしてもサクラはかなり食べていた

レイラ「あなた食欲はかなりあるわね（汗）」

サクラ「あら？あたしはこれでも大食いだから」

という

レイラ「太るわよ？」

というレイラだが

サクラ「あたしはいつも運動をかなりしてるし、それに魔法なんてかなり体力つかうのよ？だからかなり食べるのあたし♪」

と本人はそうらしい（汗）

……

サクラ「はあゝありがとねレイラ♪おかげでなんとかなるわ♪」

レイラ「そう（汗）」

サクラ「それじゃあやってみるわ、マジブレイブ！」

木に紫の魔力の球体と白い魔力の球体が現れた

二つの球体は木の周りを回りながら木を魔力の膜で包み込んだ

サクラ「はあっ！」

すると二つの球体は魔力の膜にぶつかり膜とともに爆発した

辺りが煙に包まれた

煙が薄くなり

サクラ「!?!? やったわ！」

サクラは確信した

そこには木がたってあったところはクレームができていた

レイラ「やったわね！サクラ！」

サクラ「やったわ！」

二匹が抱きしめた

サクラ「これでなんとかなったわ、後は私のオリジナルの技の完成を急がないとね」

レイラ「私も手伝うわ!」

サクラ「ありがとう!」

これでサクラは

オリジナルの魔法を使えるようになった

バトル42 魔力をこめて サクラ編（後書き）

サクラ「やっと魔法完成ね」

おめでとう

サクラ「さてと、今度はオリ技だけど、次の人にいくからそれは後でになると思うわ」

まあそうだけど（汗）

サクラ「さて、そろそろ私はいくね♪」

ちょ！？なんで！？

サクラ「まだ特訓があるからそれじゃあね♪」

えっ！？ちょ！？まっ！？行っちゃった（汗）次回はモモ視点でいきます

バトル43 本当の強さ モモ編（前書き）

モモ「おっ！ついに俺の番か！」

はいはい黙ってて、そうだよ

モモ「そんじゃ暴れてやるぜ！」

君はそれしか脳がないのか！？

モモ「へへん！俺を本気にさせると痛い目にあうぜ！」

はあ、そんじゃバトル43

モモ「最初からクライマックスだぜ」

バトル43 本当の強さ モモ編

一方

モモ「まったく、なんで俺がゼルスと付き合いななきゃならねんだ」

モモは不機嫌そうに言った

なぜかというか

……

モモ「何iiiiiiii!!俺がゼルスと一緒に修行だと!」

モモはでかい声で言った

ラッシュ「しょうがねえだろ、ゼルスさんはお前の実力じゃやられるから一緒に修行だって」

モモ「俺は十分強いぞ!なんなら今ここでb」

ゼルス「はいはいお前は俺と一緒にくるんだ」

ゼルスはげんこつでモモの頭を叩いた

モモ「がつ!?!」

モモは気絶した

ゼルス「そんじゃ後は頼んだぞ」

モモは強制的にゼルスに引きずられた

……

つれてきたのはゼルスがよく修行した場所、聖密林

ここは迷うことはなく修行にちょうどいい場所だ

現在モモはゼルスの手ほどきを受けている

モモ「なんで俺が走らなきゃなんねーんだよ」

また不機嫌に言う

ゼルス「お前には攻撃ばかりじゃなく補助も覚えろ、そうじゃないとお前は負けるからな」

モモ「チッ！」

そんなこんなでやらされる

……

モモ「なんで俺に打たれなきゃなんねえんだよ（泣）」

モモは俺に打たれていた

ゼルス「お前は精神と忍耐が足りない、しゃべってるヒマがあるな

ら我慢しろ」

モモ「そんなこと言われてもよ…ハ…ハ…ハークション!!」

くしゃみをするモモ

…

モモ「はあはあ」

ゼルス「ほら！モタモタするな」

モモ「んなこと言われてもよ〜！」

モモの体には縄が縛っており、タイヤが数個ついていた

モモ「これは鬼だぜ（泣）」

ゼルス「鬼のモモがそんなんでへばっていいのか？」

モモ「もう勘弁してくれ〜（泣）」

もう涙目であった

…

モモ「……」

ゼルス「……」

ゼルス「そんじやお前にはこれから補助などの技とオリジナルの技を習得を開始する」

モモ「へへっ、ようやくかよ」

もはや修行でボロボロなモモ

モモ「補助はなに覚えればいいんだ？」

とモモはゼルスに質問した

ゼルス「お前にはこの技を覚えてもらう」

ゼルスはそれを記した紙をモモに見せた

・ビルドアップ

・瞑想めいそう

・守る

・にほんばれ

・鬼火おにび

・身代わり

・影分身

・草結び

ゼルス「以上だ」

モモ「はあっ！なんで草結びなんか俺が覚えなきゃなんねんだよ！」

とモモは草結びに不満を持っていた

ゼルス「モモ、これはお前にとって覚えなきゃならない技だぞ」

モモ「けどこんな子供っぽい技なんて使えるか！」

そんなモモにゼルスは

ゼルス「モモ、お前はなぜこんな修行させたのかわかるか？」

と真剣にゼルスはモモに質問する

モモ「そりゃあ俺を強くすることだろ？」

とモモは答えた

するとゼルスは

ゼルス「それもそうだがそれだけじゃない」

モモ「じゃあなんだよ！」

とモモは怒鳴るような声で言った

するとゼルスは

ゼルス「大事なのは強さとはなんなのかだ」

モモ「強さ？」

ゼルス「お前は自分が強いと思っている、だが上には上がいる、それにお前はただ自分が最強と思っているだろ？」

モモ「ギクッ！」

モモはややひるむ

ゼルス「はあ、あのなモモ、お前はただ暴れているだけで勝てると思ってるのか？それは違うぞ、バトルはケンカじゃない、楽しくやることだ、お前は性格からしてそれが逆にバトルをケンカに思えてしまう、だがよく考えろ、力だけがすべてじゃない、バトルは頭も使わなきゃならない、お前は色々と自覚しなきゃならない、ラッシュに負けているのはお前にはまだまだラッシュには遠く及ばないってことだ」

モモは考えた

俺のバトル

そして俺の強さ

ただケンカでは勝てる相手はいない

だがゆういつ負けたのが

ラッシュだった

不良から足を洗ったラッシュに対してモモは明け暮れるケンカばかり

俺は：一人なんだ

ゼルス「モモ」

するとモモは

モモ「ああ！なら俺はアイツにまだ勝ってねえ！ならなんだろうと
覚えてやるよ！」

とはんぱがむしゃらに言う

ゼルス「そう来なきやな」

ゼルスはフツと笑った

モモ「そんじゃ早速補助と防御技を覚えるぜ！」

とはりきって取り組みモモ

ゼルス「がんばれよ」

ゼルスはモモの後を追った

バトル43 本当の強さ モモ編（後書き）

さて、モモ編はこれでおしまいです

モモ「アイツには絶対負けねえ！」

盛り上がってるところ申し訳ないがそろそろ次回の方にいくから、えゝ次回はブレイ視点になります

モモ「作者！俺にもオリ技増やせ！」

わかったから大声出すのやめい

モモ「いいから作れ！」

五月蠅い（うるさい）！アルテマ！！（怒）

モモ「あゝれゝ！！！」

バトル44 スピードが切り札 ブレイ編（前書き）

ブレイ「俺の出番か」

ついに切り札が出るよ

ブレイ「俺の切り札か、楽しみだ」

そんじゃバトル44

ブレイ「スピードは誰にも負けねえ！」

バトル44 スピードが切り札 ブレイ編

一方こちらブレイの家の裏にある山

ブレイ「はっ！ やっ！」

ブレイは丹念に修行に励んでいた

ブレイ「はあはあ」

息が上がってきた

ブレイ「休憩するか」

ブレイは休憩することにした

……

ブレイ「……」

ブレイは休憩しながら考えてた

ブレイ「（俺の切り札の技）」

ブレイはラッシュみたいな切り札を持っていない

ブレイ「（すると切り札はどうするかだな）」

今回のバトルグランプリはなにが起きるかわからない

出場者を襲う敵

それにも対抗しなければならぬ

ブレイ「そうするとブラストバーン以上の技じゃないとな」

そう言うブレイ

ブレイ「考えてもしかたがないな、練習再開とするか」

ブレイは練習を再開した

……

ブレイ「ふう」

ブレイはかなり練習したかあまり疲れた表情をしていない

ブレイ「さすがに切り札の技はそう簡単にかないか」

切り札はそう簡単に覚えるものではない

ブレイ「となると俺の切り札はスピードを生かした技にすればなんとかなるな」

本来バシャーモという種族は攻撃と特攻が高く、素早さも最近は高くなっている

そうするとブレイはこのバシャーモ特有の脚力に素早さと攻撃など

でどんな切り札を完成させるのかだ

ブレイ「スピードならなんとかあるがあとは攻撃と特攻を生かすしかないな」

そういうと

ブレイ「はあっ！」

ブレイは走り出した

ブレイ「（スピードを生かして攻撃…ならああするしかない！）」

ブレイが考え出した切り札は

ブレイはでんこうせっかを繰り出してそこから

ブレイ「はあっ！」

サマーソルトした

そしてそこからジャンプして

ブレイ「炎のパンチ！」

炎のパンチを繰り出した

さらに

ブレイ「炎のパンチ！」

さらに炎のパンチを早く繰り出した

空中からの炎のパンチの攻撃

それを空中で往復しながらの攻撃

そこから

ブレイ「ブラストバーン！」

ブラストバーンで攻撃した

地面にはクレーターが出来ていた

ブレイ「これで完成だな、俺の最強技、ブレイジングドライブが」

ブレイの最強技ブレイジングドライブが完成した

バトル44 スピードが切り札 ブレイ編（後書き）

ブレイ「これで俺の切り札完成だな」

そうだね、そんなブレイジングドライブの説明するよ

・ブレイジングドライブ

でんこうせつかで相手に接近してサマーソルトで相手を上空に飛ばす、そのあと相手に接近して炎のパンチを往復するように攻撃、最後にブラストバーンで相手を真下に落とす

以上がブレイの最強技です

ブレイ「まあ速さから出した俺の考えた技だからな」

まあこれでがんばってみて

ブレイ「まかせろ」

そんな次回はいが視点でお送りいたします

ブレイ「次回も楽しみにしてろよ！」

バトル45 水と氷 エイガ編（前書き）

さて、エイガ編です

エイガ「俺は選ばれてよかっただろうか」

そんな緊張しなくてもいいよ

エイガ「だが油断はできない」

そうだね、かなり気を抜かないようにしなきゃ

エイガ「そうだな、そんじゃ始めますか？」

ほいほい♪ではバトル45

エイガ「すべてを守る力を」↑ティナ（汗）

バトル45 水と氷 エイガ編

一方、別の場所

ここは水ポケモンがよく修行にくる場所、海岸

ここではたくさんのお水ポケモンや魚竜種ぎよりゆうしゆと海竜種かいりゆうしゆが訪れるが今日は誰もいない

そこに一匹のポケモンが修行をしていた

トドゼルガのエイガだ

エイガ「かなりのオリジナル技をなんとかできたが、ウェーブアイスでは勝てない、これではまずは難しい」

そう、前にルガーと戦った時にウェーブアイスがルガーには効かなかったのだ

身代わりによりエイガは破られたがこれがバトルグランプリで身代わりなどが出されると大幅消費が激しくなる

エイガ「もう一つの最強技を完成させるしかないな」

そういったエイガ

最強技をもう一つ考えるのはよいいぎなことではない

ラッシュは最強技は2つもある

もう一つはかなり最強の奥義であり本人にとってのすごい技だ

エイガ「それでも負けるわけにはいきませんからね」

エイガはそうつぶやくともう一つの最強技を完成させるために特訓を開始していた

エイガはすでにオリジナル技を数個も習得しており

この最強技を完成させるためにかなり時間もかかった

この海岸にきてはや1週間だ

エイガ「うーんやはり水と氷を使った最強技は難しいな」

エイガがやる最強技はウェーブアイスとは一味違う水と氷の最強技

エイガ「絶対零度の命中率に水の波動を組み合わせた技がうまくできないうな」

そこへ

ラグ「こんにちは」

ラグだ

エイガ「ラグじゃないか、どうしてここへ」

ラグ「へへっ、僕も修行しに来たの、エイガもどうせ一人でやってたんでしょ？ だったら僕と一緒に修行しようよ」

なんとラグと一緒に修行だ

エイガ「そうだな、俺も一人でやるより二人でやったほうがいいな」

ラグ「そうだよ♪やろう♪」

二匹は修行した

……

エイガ「中々なもんだな、ラグは」

ラグ「僕もここに来てからラッシュのおかげで強くなったよ」

二匹は休憩していた

ラグ「僕ね、この海岸は僕のお気に入り場所なんだ、夕日がきれいでいいんだ」

エイガ「そうだな、今日の夕日は格別だな」

夕方の海岸はきれいだった

ラグ「エイガはあんまり無理しないで、結構ボロボロだよ？」

よくみるとエイガはボロボロになっていた

エイガ「そうだな、俺は最強技を作ってる、中々うまくは行かなくてな」

ラグ「けど大切なのはとううまくできるかじゃないの？」

それを聞いたエイガは

エイガ「（うまくできるか…！？そうか！）」

エイガは突如海に入った

ラグ「どうしたの？」

エイガ「これなら…水の波動！」

エイガは水の波動を放った

エイガ「そこから絶対零度！」

エイガは絶対零度を放った

すると

ラグ「水の波動が凍った」

水の波動は波とともに凍った

エイガ「これだ！」

エイガは砂浜に上がった

ラグ「もしかして！」

エイガ「これで使える！新しい最強技が！ラグ！手伝ってくれないか？」

ラグ「うん！」

……

エイガ「行くぞ！絶対波動零度^{ぜったいはどうれいど}！」

エイガは水の波動の後に絶対零度を放った

するとフィールドは凍った

それと同時に水の波動が輪のまま凍っている

エイガ「完成したな、俺の最強技、絶対波動零度」

ラグ「おめでとう！」

こうしてエイガの新たな最強技が完成した

バトル45 水と氷 エイガ編（後書き）

エイガ「さすがに組み合わせで疲れる」

水の波動と絶対零度のコンボ技ですが、考えるのにかなり疲れる

エイガ「まあこれでもがんばってやったからな」

そうだね、次回はラッシュ編に戻ります、はたして新たな力を身につけることができるのだろうか

エイガ「次回も楽しみにしてくれ」

バトル46 新たな力フォーメーションモード ラッシュ編2 (前書き)

ついにこの時が来たよ

ラッシュ「ついにか」

ラッシュの新たな力、とくところんあれ！バトル46

ラッシュ「行くぜ！セイバーモード！！」

バトル46 新たな力フォーメーションモード ラッシュ編2

2週間後

ラッシュ「行くぜ！セイバーモード！」

ラッシュの周りに炎が包む

炎は消えラッシュは確認した

炎のまとった鎧に剣がちゃんと現れていた

ラッシュ「よしやあ！」

ラッシュはガッツポーズした

スザク「ほう、フォーメーションモードを完成させるとはな」

スザクはそれを見ている

ラッシュ「まあロットモードはバトルグランプリでは使用しねえからな」

一応ロットモードは完成しているが魔法を使うロットモードは今回使わない

スザク「それではお前がどこまで強くなったか見せてもらおうか」

二匹は虹の山のバトルフィールドへと向かった

……

虹の山のバトルフィールドは相変わらず紅葉が落ちている

ラッシュ「そんじゃ行くぜ」

ラッシュが構える

スザク「来るがいい」

スザクが構える

ラッシュ「まずは小手調べに火炎放射！」

ラッシュは広範囲の火炎放射を吐いた

スザク「守る！」

スザクはすぐに守るの体制にはいった

スザク「フレアスター！」

スザクはすぐさまフレアスターを繰り出した

ラッシュ「おっと！」

ラッシュはそれを見切り飛んでかわした

スザク「風見鶏^{かざみどり}！」

スザクは火の鳥を出現させてラッシュに攻撃

ラッシュ「ならシールドモード！」

ラッシュはすぐさま炎をまとった

風見鶏はラッシュに当たった

スザク「やったか？」

煙がはれる

スザク「ほうくやるな」

ラッシュ「へへっ！」

ラッシュは鼻をこする

そこには炎の鎧に身を包み、さらにでかい炎の盾を持ったラッシュがいた

ラッシュ「ここからが本番だ！シールドブーメラン！」

ラッシュは炎の盾をブーメランのように投げた

すると炎の盾はブーメランのように縁を描きまわる

スザク「ふん」

スザクはそれをかわしたが

スザク「何っ!？」

炎の盾は戻ってきて再びスザクに襲い掛かる

スザク「くっ!？」

スザクはなんとかギリギリでかわした

ラッシュは戻った盾をつかんだ

ラッシュ「こいつはただ守る効果があるが武器としてもできるんだぜ♪」

ラッシュは余裕の表情だ

スザク「ほうく中々やるなく昔の不良の面影がなくなってきたな」

ラッシュ「まあな♪」

ラッシュは笑顔でいう

スザク「ならば私も全力で相手せねばな!」

スザクの体が赤いオーラに包み込む

ラッシュ「そんじゃ俺も本気ですか、モードチェンジ!ブレイブモ

L

今度は大剣だ

しかもラッシュは片手で持っていた

「ラッシュ
「そんじや行くぜ！」

ラッシュは大剣を振り回す

スザク「行くぞ！ フレイムバード！」

スザクはブレイブバードを炎でプラスした技フレイムバードで攻撃

ラッシュ
「行くぜ！ブレイブバーン！！」

ラッシュは炎に包み、大剣を構えてスザクに向かえうつ

すると

[illegible]

大爆発が起きた

煙がフィールドを包んだ

煙が晴れると

スザク「中々だったぞ」

ラッシュ「俺の負けだな」

スザクは立っていた

ラッシュは倒れた

スザク「立てるか？」

とスザクはラッシュに声をかけた

ラッシュ「ああ、なんとかな」

ラッシュは立った

スザク「これでお前はフォーメーションモードが使えたな」

ラッシュ「そうだな、まあ俺は負けちまったが楽しかったぜ♪」

負けてもラッシュは笑顔だった

ラッシュ「そんじゃ俺はこれで失礼するぜ、それじゃあな」

ラッシュはボロボロになりながら自分の家へと帰った

スザク「がんばってこいラッシュ」

そう言うときスザクは自分の家に帰った

バトル46 新たな力フォーメーションモード ラッシュュ編2（後書き）

ついに完成！

ラッシュュ「新たな力、フォーメーションモード、これでなんとなるな」

あとはバトルグランプリが開催するまでは日常編になるかな

ラッシュュ「そうだな、まあ他に紹介できなかったモードは後でハーブに送らなきゃ名」

うん、もしくはハーブさんも見てるから何か感想あれば嬉しいかな

ラッシュュ「それじゃあ俺達もがんばらねえとな」

スザクに負けても、また機会があればバトルできるといいね

ラッシュュ「まあ負けても学べるものがあるからな」

けど他は負けるわけにはいかないからね

ラッシュュ「そうだな」

それでは次回もお楽しみに

バトル47 目覚める力 ラッシュ編3（前書き）

ラッシュ「あれ？日常編に戻るんじゃないのか？」

日常編は次になるから、今回は色々とハーブさんところで武器の多さがまずいということを言われたので今回は変更というかラッシュに眠る力を解き放ちます

ラッシュ「それはなんだ？」

見てからのお楽しみ

ラッシュ「そんじゃバトル47、行くぜ！」

バトル47 目覚める力 ラッシュ編3

次の朝

ラッシュ「ん？武器系は難しいか」

ラッシュは改めてバトルグランプリのルールやその他の情報を見ていた

今はスザクに呼ばれて虹の山に来ていた

ラッシュ「こりやセイバーモードが使えないな（汗）」

さすがに生身のポケモンもいるため

ラッシュ「今回は使えないなこりや（汗）」

これでセイバーモードの修行が意味をなくしてしまった

一体どうすればいいのか？

そんなとき

スザク「悪いな、急に呼び出してしまって」

スザクが現れた

ラッシュ「いや、いいんだ」

ラッシュは言った

スザク「実はなぜお前を呼び出したのは他でもないが、こっちの方では武器の方の制限があるとは私も忘れていた」

というスザク

ラッシュ「問題はどうかだな」

そう、フォーメーションモードを使わずにどう戦うのかだ

スザク「すでに決まってる」

ラッシュ「は？」

スザクは意味不明なコメントをした

ラッシュ「それはどういうことだ？」

ラッシュはスザクに質問する

スザク「お前には隠されていた特殊な能力がある」

ラッシュ「俺に隠された能力？」

それは一体どういう意味なのだろうか？

スザク「今からお前の隠された能力を開放する」

ラッシュ「まあそうならわかった」

スザクは翼を羽ばたかせながらなにかをいう

スザク「我が元に、この者の隠された力を解き放ち、導かれし光となりこの者に力を解放せよ」

するとラッシュの体が光る

ラッシュ「な…なんだこれは…力がわいてくる」

ラッシュの周りに光が包み込む

そしてそれはまぶしく光った

…

ラッシュ「これが…俺の…眠っている力」

ラッシュは光輝いていた

スザク「これでなんとかなるな」

ラッシュ「なあこれは一体？」

するとスザクは

スザク「これがお前に眠る能力、セイントリミットだ」

ラッシュ「セイントリミット？」

セイントリミット

それがラッシュに眠る力

スザク「お前には聖なるオーラが眠っていた、そして今のお前に使
いこなせるだろう、修行をこらしたからすぐに使える」

ラッシュ「そうか…そんじゃ元に戻るか」

ラッシュは少し落ち着いて光のオーラを抑える

すると光は収まった

スザク「ほうくやはりできるか」

ラッシュ「それじゃあ行くぜ…はっ！」

ラッシュの周りに光が包み込み、光のオーラがラッシュにまとわる

ラッシュ「どうやら成功だな」

スザク「これでバトルグランプリにはどうにかできるだろう、さら
に修行すればさらに強力になる」

ラッシュ「そうか、ありがとな」

これでラッシュはセイントリミットが使えるようになった

バトル47 目覚める力 ラッシュ編3（後書き）

ラッシュ「セイントリミット…これが俺の隠された能力」

まあこれでなんとかなると思うよ

ラッシュ「ありがとな作者」

がんばってね

バトル48 ラッシュの1日(前書き)

さて、今回はチートなりザードン、ラッシュの1日を見ていきます♪

それではバトル48

燃え上がれ!!

バトル48 ラッシュの1日

ラッシュ「…朝か」

ラッシュはすでに起きていた

まだ部屋は少し暗い

時計は4…30を示していた

ラッシュは少し体のあちこちを動かしてから何処かへ出かけていった

ラッシュが何処に行くのだろうか？

……

ラッシュ「ふう〜気持ちいいな〜♪」

俺はラッシュ

種族はリザードンでバトル部の部長をしている

今は気分がいいんでな♪

毎朝のランニングをやってんだ♪

まあほぼ毎日（特別やなにかようがある以外）やってるけどな（汗）

まあそのおかげで足腰が鍛えられてるってわけだ

俺は町を五周してから家に着く

まあ俺の一日はこのランニングから始まる

……

家に帰った俺は朝食の準備と学校に持っていく昼飯を作る

まあ俺は前は遅刻癖があったが（汗）

今はこうして起きられるからな

まあ少し俺の生活を見直してそうしてるんだがよ（汗）

俺が不良の時と入学式的时候は寝坊が多くてな

それ以来なんとか朝起きれるようにがんばってはみたんだ

まあランニングを入れたおかげでスッキリするからな♪

俺は朝食を作ってからラグを起こした

今の時刻は6…00だ

ラッシュ「ラグ、朝だぞ？」

ラグ「う…うゝん」

なんとかラグを起こすラッシュ

まあ彼は優しい一面を色々持っている

…

なんとかラグを起こした俺は、ラグと一緒に朝食を食った

弁当とかは俺が大体作るけどな（汗）

あとは準備をして学校にGOだな

まあ俺は飛んでいくけど、ラグは飛べないから俺とラグは徒歩で学校に通ってる

遅刻しそうな時はだって

その時はラグを掴んで飛ぶけどな

…

AM 8…00

教室に入って、ルガーとブレイとレイスとサクラと話してな、けどレウトは相変わらず遅刻が多いんだよな（汗）

チャイムがなり俺は席についた

そこから

ズザ
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
！！

レウトが教室に入ってきた

レウト「はあく間に合った!!」

はあく間に合った!! じゃねえよ W

そんなこんなで授業は進んでいった

ラッシュは一応頭は普通なので勉強はする

ただのトレーニングバカではないので W

ラッシュ「なんかいったか（怒）」

ごめんなさい

$$\vdots$$

お昼

「さして食うか」

俺の昼は大体ボリュームが多いからな

なぜかっていうとな♪

それは

ラグ「相変わらずラッシュのはすごいね（汗）」

ラグは少し苦笑いした感じに言った

ルング「マジでラッシュってすごいな（汗）」

冷静なルングまでも驚いている

それは

レウト「量とかはんぱなく多いな～お前って（汗）」

弁当の量が多いのだ

ラッシュ「いっただっきま～す♪」

それをラッシュはほおぼる

ラッシュ「うめえ～♪」

そして満面な笑顔で表現（汗）

数分後

ラッシュ「あ～食った食った♪」

お腹をさすり満面の笑み（えみ）で自分が作った弁当を完食

だがこんなに食べて大丈夫なのか（汗）

太るではないのだろうか、いや元々そんな体型だとは思うが（汗）

午後は2..00に終わり、部活の時間だ

……

みんな部活を始める

ラッシュはこの後最初になにをやるのだろうか？

ラッシュ「まずはランニングだ」

俺はまず初めにランニングでグラウンドを20周はする↑え！？

まあ俺は早いため、大体2・30分で完走するけどなw

まあ昼に食った弁当はかなり量があるだろ？

俺は元々の種族の体型だからな（汗）

でもその分運動を部活や自主トレでやってるからなw

その後俺は腕立てを500回

腹筋を500回

サンドバックでパンチトレーニングを2000連発

練習バトルを数回

まだまだあるがこのくらいだな

そんなこんなで部活はPM4…00に終わる

……

そこから俺は帰ってからバイト、週に2回はやる

バイト先はコンビニでレジ打ちとかだな

コンビニは普通のだな、外見は赤で統一されてるからな（汗）

中は普通のコンビニと変わらない

けどな、俺のバイト代は他のよりはかなり多いんだよな（汗）

なぜかというとな

するとラッシュのバイトするコンビニの自動ドアがあげられ中から
覆面を被ったモンスターが押し寄せてきた

するとそのモンスターは

????? 「おい！金を出せ！出さないと殺すぞ！！」

と、ナイフを脅したのだ

これには来ている客は大パニック

だがそれに動じないのがわれらがバトル部部长、ラッシュ

ラッシュがそのモンスターに近づく

????? 「なんだ！おい！動くな！」

だがラッシュは

ラッシュ「あんた、俺がいるときは運が悪いな」

と言った次の瞬間

????? 「!？」

ラッシュの姿は消えた

ラッシュはそのモンスターの背後にたって

ラッシュ「波動弾！」

赤い波動弾を至近距離から放った

????? 「ぐあああああああつ!!!!????」

くらった強盗モンスターはやられた

……

数分後

警察が来てそのモンスターは御用となった

バイトは3時間はやっている

それからラッシュは家に帰った

……

帰った後、ラグが夕食を担当して、一緒に食べた

その後はまたラッシュは自主トレで汗をかいてからPM9…30にはお風呂へ入った

炎タイプが風呂に入っているのか？

いや、炎タイプは温泉などは大丈夫なのだ

なぜかという、温かいとか、水じゃないとか、炎タイプは温泉や風呂でも平気なのだ

そしてPM10…30

ラッシュ「お休みラグ」

ラグ「お休みラッシュ」

ラグにお休みの挨拶をして

眠
り
に
つ
い
た

バトル48 ラッシュの1日（後書き）

ラッシュ「／／／／」

照れてる！？

ラッシュ「ここまで俺の生活見られるのは／／／／」

てれちゃってW

ラッシュ「まあでも強盗はなあゝ（汗）」

ラッシュ「いると餌食になるからねゝ（汗）」

ラッシュ「別に食うわけじゃないからな（汗）」

そりゃわかってるって、そこで俺もちよつと暇だからこんなお知らせをしようかな

ラッシュ「なんだ？」

ラッシュ「戦いたい挑戦者募集！！」

ラッシュ「つまり俺と戦いたい奴を募集するってことか？」

そうだよ、ラッシュと戦いたい者は俺にメッセージを送ってください

ちなみに対戦の場合はモンスターのみにということにします

武器は大体剣類のみとします

どしどし応募ください♪

ラッシュ「バトルグランプリに出場するやつらだったらどうすんだ？」

うーん、出たらやばいから出場する者以外というのにするよ、モンスターはオリジナルやゲームのもいいので

ラッシュ「挑戦者待ってるぜ♪」

バトル49 レウトの災難な1日（前書き）

ラッシュ「レウトの1日か（汗）」

ついにあのヘタレウスの1日が見れるよ（黒）

ラッシュ「作者黒いぞ（汗）」

そこは気にしちゃだめ、今回はナエトルさん所のキャラ、ホムラ君のリクエストです。

ラッシュ「そんじゃバトル49、見やがれ!!」

バトル49 レウトの災難な1日

ぴぴぴ！！

ぴぴぴ！！

ぴぴぴ！！

がしゃー！ー！ー！ー！ー！ん！！

レウト「ZZZ…」

朝6…00

ここはレウトの家

目覚ましが鳴ったのに目覚ましを右翼で壊したレウト

彼はそのまま深い眠りに

……

AM8…00

レウト「やべえー！ー！ー！ー！ー！遅刻だあああああああああああああああああああ！……！！！！！！！！！！」

朝からハイテンションでうるさく叫ぶレウト

焼いた食パンを加えて、家の鍵を閉めて家を飛び出していった

……

やあ！俺はリオレウスのレウトだ！

今日も元気に学校…ってそんなこと言ってる場合じゃねえ！！急がねえと！？

俺は一目散に学校へと向かっていった

……

AM 8…28

やべえ！！！！

俺は急いで教室へと向かった

残り1分

時間がない

俺はピカチュウのボルテッカーのごとく猛ダッシュした

おっ！教室が見えた！

レウト「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！

レウトは購買部へと向かった

ラッシュ「そんじゃ俺達は頂くとするか♪」

今日もラッシュは自分で作った弁当を持参

量も相変わらず（汗）

ラッシュ「うめえ♪」

それを見ていた他の人は

ルング「ラッシュってすごいな（汗）」

ラグ「うん、僕も最初は驚いたよ（汗）」

ルガー「太るぞ？」

とルガーに言われたが

ラッシュ「うっせえwこれでも自主トレしてんだよw」

という

一方

レウト「売り切れかよ（泣）」

購買部に行ったレウトだが

イッくん「そんじゃ今日はここまで、お疲れ様でした」

全員『お疲れ様でした!!』

やっと終わった

今日はバイトがねえし、あそこにいくか

レウト「そんじゃ俺はちよつとよるところあつからこの辺でな、じゃあな」

ラッシュ「じゃあなレウト」

俺はラッシュとラグとルングと途中でわかれて帰った

ラッシュ「あいつの遅刻癖直らねえんだ(汗)」

ルング「自業自得だ」

ルングに厳しくもいわれた

いないが哀れレウト

……

レウト「うめえ」♪やっぱレギのおやっさんのラーメンは最高だわ
♪おっちゃん!おかわり!」

レギ(レジギガス)「あいよ!」

ここはラーメンの屋台

おでん屋みたいに赤い屋根に黒い文字でラーメンとかかれたのれんがかかっている

この店主、レジガスのレギはレウトとの知り合い

というかレウトはほぼこの屋台に通っている

このラーメンはうまいのだ

数時間後

レウト「あゝ食った食ったゝ♪」

レウトは満足そうにラーメンを食べた

ちなみに50杯は食ったらしい（汗）

お金とかは大丈夫だろうか（汗）

とりあえず俺はレギのおっちゃんにラーメンの代金を支払って家に帰った

レウト「あゝ満足満足♪」

満足に家に帰還

だが

ぐるるるるるる

レウト「うっ！腹が！」

俺は咄嗟とつさにトイレに駆け込み、数時間もトイレと格闘した

その後腹を壊してしまい今日は寝た（泣）

バトル50 元モンスターの人間（前書き）

ついに50話突破だよ♪

ラッシュ・レウト「やったぜ!!」

ここまで長い道のりだった（泣）

ラッシュ「これからバトル部をよろしくな!!」

レウト「全力でがんばっていくぜ!」

というわけで記念の最初はなんとまたもコラボというBIGなものが♪

ラッシュ「おお!」

レウト「そんで誰とコラボしたんだ?」

レウトが知っている人物だよ♪

レウト「誰なんだ?…!?まさか!?!」

その先はいえないよ、見てからね、そんなバトル50

ラッシュ・レウト「燃えてきたぜ!!」

バトル50 元モンスター人間

今日もいつもの部活

ラッシュ「今日もがんばらねえとな♪」

今日もラッシュは軽く？ランニングをした

ちなみに10周増えて40周を走っている

それを1時間終わらせてしまった

なんという（汗）

今日も俺は絶好調にトレーニングした

調子にのるわけにはいかねえしな

そんななかレウトなんだが（汗）

レウト「腹いてえ」（泣）」

なにがあつたが知らないが昨日から腹を壊してんだよな（汗）

なんか悪いもんでも食ったのかアイツ（汗）

そんなこんなで数時間後

……

ガル「今日はここまでだ！明日は休みだ！しっかりと体を休め！いな！」

全員『はい！』

レウト「はい…」

レウト以外は元気に答える

ガル「そんじゃ明日は部活は休みだ！次は月曜日に行う！それじゃあ！解散だ！」

ラッシュ「ありがとうございました！」

全員『ありがとうございました！』

今日は部活は終わった

明日はどうすっかな、レウトに元気になるよう何処か出かけるか

……

帰り道

それぞれ分かれて、残っているのは俺とレウトとラグとリングだ

ちなみに俺とラグのとなりの家にリングが住んでるんだ

レウトはさらにリングの家からさらに数キロにある

まあ一回あいつの家に遊びに行ったら掃除とかしてねえから結局部屋掃除で数時間で遊べなかったしな（汗）

ラッシュ達はレウトの家まで来たとき

ラッシュ「ん？人間か？」

一人の青年がレウトの家に立っていた

髪型はレウスレイヤーでもみあげが長く、横側が所々に跳ねていた

その後ろがものすごく跳ねが激しかった

だが前髪もついていて、髪色は茶色に近い赤だ

まるでリオレウスのようだった

瞳は澄んだ青色をしている

そして背中には刀のような武器が背負ってあった

これは太刀という武器だ

その青年の武器は、火竜リオレウスの素材から作られた太刀、その名も飛竜刀「朱」（ひりゅうとう「あか」という

そこにラッシュが声をかけた

ラッシュ「おい、お前レウトに用があんのか？」

するとその青年はラッシュ達に振り向いた

青年「いや、ちょっとここは何処なのか聞きたいんだが」

するとラッシュは答えた

ラッシュ「ここはポケモンとモンスターが住む世界だ、もしかして別世界から来たのか？」

その青年は答えた

青年「ああ、実はそうだ」

そうらしい

するとラッシュはなにか察したのか

ラッシュ「お前、もしかしてモンスターなのか？」

と聞くと

青年はビックリしたように驚く

青年「俺がモンスターだってわかったのか!？」

ラッシュ「まあ俺は波動があつてな、それでわかるんだ、どうやら擬人化のようだな」

擬人化

それはモンスターは普段の姿があるため、これを原種と呼ばれている
ポケハン学園は原種が多いが実は中には人間になっているモンスター
もいる、これを擬人化と呼ぶ

モンスターはある事情により、人間になってしまっただけ戻らない者が
多い

そのため擬人化のモンスターもこの世界に存在する

青年「そうか…俺実は元に戻る方法を探してるんだ、なにか知らない
か…え」と

するとラッシュは自己紹介した

ラッシュ「俺はリザードンのラッシュだ」

青年「ラッシュか…なにか知らないか？」

と聞くが

ラッシュ「残念だが方法がないんでな、こっちは擬人化OKの世界
だから人がいてもおかしくないぜ、まあ方法はないわけじゃないが
色々あるんでな、すまないな」

と、ラッシュは謝った

青年「ああ、すまないな、俺、これからどうしようか考えてな」

ラグ「それでレウトの家の前で立っていたんだね」

どうやらそうらしく、青年はコクリとうなずいた

ルング「つてかどうすんだ？」

ルングはいうが

ラッシュ「うゝんどうするかだな」

すると

レウト「なら俺と住むか？」

なんとレウトが声をかけた

青年「いいのか？」

するとレウトは

レウト「いいぜ♪だってお前って俺達と年は同じみたいだしな♪それに同じリオレウスだから、俺は別にいいぜ」

すると青年は涙を流した

青年「ありがとな」

嬉しかった

同じリオレウスで俺に声をかけたことが嬉しかった

こっちに来て、俺は、初めて友達^{ダチ}ができてすげえ嬉しかった

ラッシュ「そういやあお前名前はなんだ」

あのラッシュとかいうリザードンも優しいな、仲良くなれそうだ

そうだ、名前

青年「俺はホムラっていうんだ、元リオレウスだ」

青年、ホムラは自己紹介した

そして

レウト「俺はレウトだ♪よろしくな♪兄弟♪」

ラグ「僕はラグラージのラグ、君と同じ別世界から来た者だよ」

リング「俺はリング、同じ別世界からきたジュカインだ」

こうしてレウトと一緒に住むことになった元リオレウス、ホムラ

これから彼はどんな成長を見せてくれるだろうか

おまけ

レウト「さっ♪上がってくれ♪」

玄関に上がる一人と一匹

ホムラ「これからもよろしくな♪レウト♪」

そんなこんなで始まるホムラのレウトとの共同生活が始まる

バトル50 元モンスターの人間（後書き）

というわけでMONSTER⇄HUNTERからホムラ君が来てく
れました♪

ホムラ「俺はホムラだよろしくな！」

元気いっぱいだね♪

ホムラ「あこがれのレウトと競演+レギュラーになるなんて夢にも
思わなかったぜ♪」

やっぱ同じリオレウスだからね♪

ラッシュ「前の話の感想で馬鹿といわれてレウトショックだったが
（汗）」

レウト「やっほ♪ついにホムラと一緒に♪」

ホムラ「たとえ友達^{ダチ}でも生活とかちゃんと見てやるからな！」

レウト「ホムラ（泣）」↑ホムラに抱きつく

あの（汗）抱きつくのはちょっと（汗）

バトル51 ホムラ初めての学校（前書き）

ラッシュ「ホムラの初めての学校入りか」

ホムラ「なんかすげえく震えてるが」

緊張してるんじゃない

ホムラ「たしかに緊張する…マジ」

それじゃあいつてみるからね？

ラッシュ「バトル51」

ホムラ「い…行くぜ！」↑まだ緊張している

バトル51 ホムラ初めての学校

次の朝

ホムラ「起きろ!! レウト!!」

バシッ

ホムラは自分の太刀のみねの所でレウトの頭をたたいた

すると

レウト「いてええええええええええええええええ!!!!!!!!」

ホムラ「ほら朝食とか作ってあるから食えよ!」

ホムラは熱くなったようにいう

……

よっ! 俺は元リオレウスのホムラ

俺は別世界から来たハンターというか俺はハンターなんて嫌だったからな

理由? ある二人のハンターに強制的にやらされたんだよ!

俺は元リオレウスだぜ!

なんで元モンスターがハンターなんてやらなきゃならねんだよ！

と、そんな感じだ

今日は俺がポケハン学園に入学する日だ

俺は気合が入っていた

なぜかというとな

そりゃ嬉しいからだ♪

ここに来て1週間は経過したが

レウトの奴が中々起きなくてな（汗）

すごく苦戦したが

俺の持つてる太刀のみなで頭を殴ってやったら目が覚めたようなんだよな（汗）

まあここに来てすげえ優しい奴らばっかだからな♪

そんな俺は制服に着替えた

まあこっちには制服はどれでもよくってよく私服でもいいんだと（汗）

どんだけなんだよあの高校は！？

ホントビックリしたけどな（汗）

俺が着ているのは学校に行く服だ

半そでのYシャツ（第2ボタンまで開いてる）と黒のGパンを着て、俺はレウトにまたがり学校に向かった

……

学校に着いた俺とレウトは別々に分かれて職員室という所に入った

色んな物があつたりと俺はワクワクしていた

そして担任のイャンクックだよな（汗）

なんかおどけてる感じな奴だな（汗）

そんな感じに思った俺だけど

イックン「よろしくね」

と、モンスターなのに優しい感じだった

すげえなこの学校（汗）

……

そんなこんなで俺はイックン先生と一緒に教室へと向かった

なんだ？

なんか足とかガクガクするが（汗）

これが緊張ってやつか？

そうこうしてるうちに教室まで来てしまった

先生が中に入って

その後俺が教室に入った

……

教室には俺と同じ擬人化のやつらとラッシュと同じポケモンというやつらや、レウトと同じモンスターの原種達までいた

イックン「それじゃあ自己紹介を」

先生が俺に自己紹介をすすめた

とりあえず自己紹介だ

ホムラ「俺は元リオレウスのホムラだ、よろしくな」

俺は自己紹介を終え、席についた

席はレウトとなりだ

その後、休み時間などに色んな奴らに質問された

というかちよつと待て!?

????? 「ねえねえホムラ君は前は何処に住んでたの?」

????? 「親とかは?」

????? 「なあ趣味とかはなんだ?」

なんでこうなるんだ!?

……

放課後

俺はレウトが通う部活、バトル部へと向かった

……

俺は部室を見て驚いた

何じゃこりゃあああああああああああああ!?!?!?!?!

すぐくでけえ!?!?!?

体育館と繋がってるし!?

色々と部屋とかあるし!?

まるで寮というところみてえじゃねえか!?

これを作ったのはラッシュらしい

さすがバトル部部长(汗)

おみそれしました(汗)

……

とりあえず俺は見学した

ラッシュなんて練習量ハンパねえ!?

なんだよあれは!?

腕立てとか早くてもう1000回ぐらいはやってるぞ!?

次の腹筋だって

リザードンだから体型とかはそのままだが

腹筋とかすげえええ(汗)

そりゃねえーだろ!!!？

なにせ相手はあのラッシュだぞ!？

マジでやるのかよ!？

まあ太刀はあるみてえだしな

しょうがなく俺はラッシュの相手をすることにした

バトル51 ホムラ初めての学校（後書き）

今回はラッシュとホムラ君が戦います

ホムラ「あのく師匠くこれはマジ死亡ブラグとかになるんですがく
（汗）」

大丈夫だよ、程度とかあるから大丈夫♪

ラッシュ「楽しそうにみえるけどな（汗）」

ホムラ「まあでもやるしかないな！」

がんばってね♪

バトル52 ホムラ初めてのバトル ラッシュVSホムラ（前書き）

ついに対決だよ♪

ホムラ「おーし！師匠と剣を交わして鍛えた剣技でラッシュを倒してやる！」

ラッシュ「俺に勝てるかな♪」

ホムラ「ぜってえー勝つ！」

気合入ってるね♪そんなじゃバトル52

ホムラ「本気で行くぜ!!」

バトル52 ホムラ初めてのバトル ラッシュVSホムラ

校庭のバトルフィールドには俺、ホムラとリザードンのラッシュが立っていた

ラッシュの実力はどれほどのものか：やるしかない

そう思った俺は背中にある太刀、飛竜刀「朱」をとり、構えた

この太刀は俺と同じリオレウスの素材から作られた太刀だ

炎属性だからラッシュには効かないとは思うが

だが俺は構える

ホムラ「行くぜ」

俺は走り出した

……

走って来たホムラは俺に向けて太刀を一振り振った

ラッシュ「おっと」

俺はそれをかわした

生身じゃ斬れるが、世界事に色々と異なるんだよね（汗）

とりあえず反撃しなきゃな

ラッシュ「火炎放射！」

ラッシュは火炎放射を吐いた

ホムラは避けられず浴びるが

ホムラ「人間でも弱点とかは変わらないか」

なんとホムラは火炎放射を浴びても少ししかダメージを与えられなかった

ラッシュ「やっぱ元リオレウスだから炎は効かないか」

ラッシュは舌打ちした

たとえば人間でも元の原種であるモンスターなのだから

弱点もモンスターと同じだが

それぞれ能力が違う

人間と原種

それぞれが異なるが

それでもモンスターを擬人化した存在だ

そう簡単にやられない

ホムラは次の一手を打つ

ホムラ「気刃切り！」

続けてホムラは気刃切りでラッシュに一振りする

ラッシュ「くっ」

ラッシュにダメージを与えたが属性が炎のためたいしてダメージを与えられなかった

ホムラ「てやっ！」

さらに一振り振った

ラッシュはいったんホムラから離れた

……

中々だな

ホムラの奴、太刀の腕はまあまあだな

さすがに俺にダメージを食らわせるとはな

ラッシュ「やるな〜♪」

ホムラ「ああ！俺だってやるときはやるんだ！」

あいつとやってたから、覚えたんだよな（汗）

でもラッシュも中々やるな

スピードは俺が上のような

なら練気の方もたまってるようだから、ここは一気に行くぜ！

ホムラ「行くぞ！気刃大回転切り！」

ホムラは練気でたまった太刀を自分を軸に遠心力で回す

ラッシュ「そうは行かないぜ！守る！」

ラッシュは守るで技を防いだ

今だ！

ラッシュ「超究龍炎斬！！」

ラッシュは隙について大技超究龍炎斬を繰り出した

ホムラ「何っ！？ぐわっ！」

ラッシュの怒涛の連続攻撃がホムラを襲う

炎のパンチとドラゴンクロウ

炎と龍属性のそれぞれの攻撃がホムラに大ダメージを負わせる

元リオレウスでもさすがに弱点はある

リオレウスやリオレイアなどはそれぞれ共通の弱点を持っている

希少種は別の弱点だが弱点は同じ

普通のと亜種は弱点は同じで一つ共通している

それは

龍属性だ

ドラゴンクローはドラゴンタイプの技で同時に龍属性の技でもある

リオレウスは氷と龍が弱点

ラッシュの超究龍炎斬は炎と龍の二つの属性を持った技

連続攻撃により、弱点を補う

ホムラの場合炎は効かないがドラゴンタイプの技ドラゴンクローは効果は抜群

なので炎はあまりダメージは食らわないが龍・ドラゴンタイプには効果抜群だ

ラッシュ「行くぜ」

ラッシュの最大パワーの炎のパンチを浴びせられたホムラはふっ飛

ばされ、倒れた

この勝負はラッシュの勝ちだ

ホムラ「くっ！」

ホムラはボロボロだ

……

俺は負けた

やっぱラッシュは強えな

悔しいぜ

けど…

一つ俺はアイツに学ばれた

それは…

ラッシュ「大丈夫か？」

ラッシュは俺に手を差し伸べてくれた

ホムラ「ああ」

俺はボロボロになった体で立った

ラッシュに支えられたがこれはかなり効いたな

ラッシュ「歩けるか？」

ホムラ「へっ！大丈夫だ、これでも俺の体は回復力が高いんだ、何日か寝れば大丈夫だ」

俺は体が丈夫っていうか回復力があるため休めば回復する

やっぱ俺が元リオレウスだからか？

まあつばつければ治るとかどっかで聞いたことがあるけどな

でも俺は楽しかったぜ

ホムラ「ラッシュ：楽しかったぜ」

俺は笑顔じゃねえがラッシュに言った

するとラッシュは

ラッシュ「よかったぜ♪お前のバトル」

俺をほめて俺は部屋に向かった

これが楽しむってことなんだな

俺ももっと強くならないとな

ありがとなラッシュ！

バトル52 ホムラ初めてのバトル ラッシュVSホムラ（後書き）

ホムラ「強かった」

でも色々と学べたことはあったでしょ？

ホムラ「師匠もがんばってるから俺も強くならないとな」

まあホムラ君はそのうちオリ技を習得すると思うから

ホムラ「俺にオリ技ですか？」

うん、まだ考案中だけどね

ホムラ「楽しみにしています」

ラッシュ「いいバトルだったぜホムラ」

ホムラ「ああ♪ありがとな！ラッシュ♪」

バトル53 記憶がないリザード（前書き）

ラッシュ「今度はなんだ？リザード？」

実はまたコラボなんだ、どうやら初めてのコラボらしいから気をし
っかりしないと

ラッシュ「リザード…うーん」

とりあえず見ればわかるから、それではバトル53

ラッシュ「燃えるぜ！！」

バトル53 記憶がないリザード

今日もいつものようにバトル部は活動している

ラッシュ「行くぞ！」

ラッシュはドラゴンクローをホムラに向けて繰り出した

キンッ！

ドラゴンクローを太刀で受け止めるホムラ

そこからホムラは一振りしてドラゴンクローをなぎ払った

ラッシュ「おお！中々だな」

ホムラ「はあはあ、そう簡単にはいかないからな！」

あれからさらにホムラは太刀の腕を磨いていた

それでも強く

一歩一歩を

駆け上がる

……

ガル「解散!!」

全員『ありがとうございました!!』

ふう

なんとか終わったか

だが俺はまだまだ鍛え足りないかな？

とりあえず今日は帰るか

バイトもねえしな

レウト「ラッシュュ〜!行くぞ〜!」

ラッシュ「ああ!」

俺はレウト達の所に向かった

……

レウト「はあ〜疲れた〜」

レウトは疲れきった表情をしていた

まあかなり鍛えてるからな〜

ブレイ「しかしなんだか結構部員が増えてきているな」

たしかに

結構部員が増えてきてるんだよね／＼バトル部の

かなり努力してきたからね／＼

ラグ「まあこうして特訓してるのもラッシュとかのおかげだしね」

ラグがそういうのも嬉しいな／／／／

リング「俺もがんばらないとな」

リングもあれからがんばっていた

数日前にフールリングの能力の事がわかったらしくてな

これでリングが今できる課題ができた

そんな話が色々としていて

ここでルガーやブレイなどと分かれた

……

残った俺達はまっすぐ帰る

色々あったな／＼

レウトとバトル部を作って

そしたら色々異世界から来た奴や

そりゃあ色々あったなゝ

これからがんばらねえとな♪

そんな意気込みで俺は帰る

すると

ラグ「ん？ねえあれ何かな？」

ラグがいった先にはなにやら赤と白のボールがあった

ホムラ「ボールだよな？」

ん？これって何処かで…あっ！

ラッシュ「これモンスターボールじゃねえか？」

ホムラ「モンスターボール？なんだそりゃ？」

ルング「ラッシュは聞いたこととか見たことあるのか？」

とりあえず俺は近寄った

…やっぱりだ

間違いなくモンスターボールだ

ラグ「うーんたしか聞いたことあったような気がするんだよね」

ラグはうなる

ラッシュ「こいつは別世界で人間がポケモンを捕獲するボールだ、
けどなんでこんな所にあるんだ？」

たしかに疑問だな

ルング「まさか異世界の何処かで捨てたってことか？」

ルングはそう言うが

ラッシュ「いや、それはないと思うが、それにこの中に誰か入っ
てるな」

レウト「入ってる？」

レウトは疑問に思ってるな

ラッシュ「つまりポケモンが入ってるってことだ、どうやら誰かこ
の中に入ってるようだな、感じる」

中に入ってるのは…ん？なんだ？

ラグ「とにかくここじゃなんだからひとまずラッシュの家を持って
いこうよ」

俺はうなずきモンスターボールを拾い上げ、すぐさま俺の家へと向かった

……

とりあえず家について、俺はみんなの前でモンスターボールを投げた

すると閃光が走り、中から

レウト「なっ!？」

ルング「これは!？」

出てきたのは赤い体色でラッシュと同じしっぽに炎が宿っていて、頭に突起があった

ラッシュ「やはりな」

俺は確信した

そう、リザードンの進化前でヒトカゲの進化系

リザードだ

そのリザードは眠っていた

しかも

なんかリュックとかもあるな……ん？なんだこの資料みたいなのは？

ラグ「この資料、あの子についてのってるみたいだよ」

ラグはそういった

俺はその資料を読んでみた

……

その資料によれば

このリザードの名前はリザレと呼ぶらしい

なんだか失敗作とかなんとからしいが見た目は普通のリザードだ

だがリザレにはある特殊な能力があるらしい

それは

メタモンというポケモンの細胞によって、メタモンと同じように変身することができるが

あいにく変身にかぎりがあるらしい

リザードでもメタモンの細胞を持ってるとはな

俺達も驚いた

どうやら人間の手によって別の次元に送ったらしい

元々処分するらしかったからな

……

なんか…悲しい感じだ

コイツは生きてる

それでも何処かに迷い込んでも生きてる

俺やレウトや他はなぜか悲しい表情をしていた

知ってしまったからな

コイツの事を

そんなシリアスな場面だったが

リザレ「…う…う…ん」

なんと起きそうだった

リザレ「ん…」

リザレは目を覚ました

リザレ「…アレ？ここは…君達は？」

そういうトリザレは立ち上がる

すると

リザレ「ん？あっ！それ！」

リザレはラッシュを指差す

それは手に持っているリザレについての資料だ

ラッシュ「目を覚ましたか…すまないな、これは返す」

俺はリザレというリザードに資料を返した

リザレ「それにしてもここは？…心夏のいた世界じゃない」

…

俺は目を覚ましたときにはポケモンと後ポケモンかわからないモンスターとか、心夏みたいな人間とかがいた

俺は俺の進化後のポケモンであるリザードンに俺についての資料を

返してもらった

ラッシュ「お前はリザレって名前か？」

そのリザードンは俺に質問した

リザレ「うん、そうだよ、俺はリザレ、ここは何処なの？」

俺はリザードンに逆に質問した

ラッシュ「ここはモンスターなどがいる世界だ」

リザードンはそう説明した

俺はそのリザードンに詳しくその世界の事について聞いた

……

話によると俺はどうやらモンスターがいる世界にいた

しかもここは学校などもあり、人間だけが住む世界と同じようにこっちもそういう風だった

すごいな

心夏がいた世界とは違い

モンスターなどがある

ポケモンはなんとかわかるけどポケモンなのかわからないモンスターとかもいる

そういうトリザードンと他の人達は自己紹介した

ラッシュ「俺はリザードンのラッシュ」

ラッシュというリザードン、なんかたくましいな

レウト「俺はリオレウスのレウトだ、よろしくな♪」

リオレウス

それが種族名でポケモンじゃないらしい

ラグ「僕はラグラージのラグだよ」

ルング「俺はルングだ」

ホムラ「俺は元リオレウスのホムラだ」

元というと元々はレウトと呼ばれたモンスターみたいな姿だったってことかな？

とりあえず自己紹介が終わり、俺は自分のことを話した

記憶がないこと

人間の世界に飛ばされたこと

などなど

色々と話した

するとラッシュというリザードンは

ラッシュ「とりあえずリザレは家がないだろ？なら俺のところでしばらく住むか？」

俺は考えた

ラッシュは優しいし、ラグも優しい

なら俺もここでがんばってみよう

リザレ「わかりました、お世話になります」

俺はこうしてラッシュ先輩とラグとともに暮らすことにした

ドキドキしてるけど

俺、この先やっていけるかな？

それでも俺は

この世界でがんばろうと決心した

もちろん心夏の世界にも帰りたい気持ちもあるけど

かならず帰れるようにがんばろう

俺がいる世界で

バトル53 記憶がないリザード（後書き）

はい！というわけでリザードの地球漂流記から、リザレ君が来てくれました！

リザレ「初めまして、俺はリザードのリザレです」

緊張してるけど大丈夫？

リザレ「ここでコラボしてるのですごくドキドキしてます／＼／＼」

あんまり無理はしないでね

リザレ「フォックさんって優しいですね」

まあ俺も色々ところからコラボしてもらってるみだから、リザレ君みたいな子は色々あるから

ラッシュ「まあよろしくなりザレ♪」

リザレ「お世話になります、ラッシュ先輩」↑頭を下げた

次回はリザレ君、バトル部入部です

リザレ「次回も大丈夫かな」↑緊張は少ししてる

ラッシュ「落ち着けよ、大丈夫だ」

バトル54 ドキドキリザレ君の高校生活（スクールライフ）（前書き）

リザレ「なんかすごいタイトルですね（汗）」

ラッシュ「ドキドキっておい（汗）」

レウト「高校だからそうだけだよ（汗）」

細かいことは気にしない♪

ラッシュ「先が思いやられる」

やっところちにリザレ君の年齢とかがわかったから後はリザレ君の初体験になるかな」

リザレ「たしかに（汗）」

ホムラ「俺なんて緊張したぞ（汗）」

リザレ「そうなんだ（汗）」

それじゃあいってみよう」バトル54

リザレ「も…もえあががれ」↑ちよつと囁んだ

バトル54 ドキドキリザレ君の高校生活（スクールライフ）

青空はあっちの世界と変わらない

元気にしてるかな

心夏

あ…どうも

俺はリザードのリザレです

今はラッシュ先輩とラグのところでしたらしばらく住まわせてもらっています

まあ先輩より年は上なんです（汗）

年齢は19です

もう大体大学生ぐらいだったかな？

大学生っていうのはラッシュ先輩とかに教えてもらった

高校を卒業して、勉強がよくがんばったものだけがいける学校らしいです

あ、そうだ

今日から俺はラッシュ先輩と同じ高校であるポケハン学園っていう

学校に初めての登校日で

俺は年は上ですが高校生です

お金とかはどうしてるかって？

実はラッシュ先輩の実家から出してもらってくれたんです

ラッシュ先輩には本当に感謝しています

俺もがんばらないと

そんなわけで

アルバイトも体が弱い俺でもできるバイトをラッシュ先輩のおかげで先輩と同じバイトをすることになった

一応週に2日です

俺は元々体が弱いためか、色々とご迷惑になってるかもしれませんが

それでも俺は元気にやっています

ここに来てから3日ぐらいになりました

まだ3日しかたっていないのですが

優しい先輩とラグのおかげで

がんばっています

それじゃあ俺は登校しなきゃ

……

ラッシュ「大丈夫か？リザレ？」

リザレ「…大丈夫です」

俺は緊張してしまった

どうしよう

足はガチガチで

怖い感じだ

俺は臆病なためかそういう感じに思ってしまう

ラッシュ「無理すんなよ？」

ラグ「僕達がついてるよ」

先輩とラグが声をかける

リザレ「はい先輩、ラグ」

とりあえずそんな足取りで学校へと到着した

……

俺は職員室ってところでラッシュ先輩と別れて先生へあいさつした
イッくん先生はイヤクックというモンスターで少し臆病（自分も
だけど）なところがある

けど生徒で人気の先生で

優しいみたいだったから俺は先生になじんだ

……

イッくん「リザレ君大丈夫？保健室につれていこうか？」

リザレ「いいや大丈夫です、気にしないでください」

俺の顔は青ざめてる感じでもう心臓はバクバクして

もうクラクラしそうだ

それでも俺はなじめるかどうかの不安とかがある

あっちの世界に来たときはどこだかわからず迷い、あげくのはてに
はばれるのもあった

それでも俺は

ポケモンだから

……

教室につき、先生が先に入った

ついに俺が入るのか…心臓バクバクだよ

イックン「今日は新しいお友達を紹介するよ、仲良くしてね、それじゃあ入って」

俺は重い足を一步一步歩いて教室に入った

なかには色んなモンスターやポケモンがいる

俺の知らないモンスターも中にはいる

その中には

ラッシュ「来たか」

ラッシュ先輩やレウト

ホムラやラグにルングまでいた

イックン「それじゃあ自己紹介して」

俺はつばをぐくりとのみ、自己紹介した

リザレ「お…俺はリザードのリザレといいますどうぞよろしく願
いします／／／／」

舌かんじやった

どうしよう

さらに心臓はバクバクする

ただでさえ俺身体弱いのに

だが

パチパチパチパチ

なんと拍手になった

ホッ

とりあえず大丈夫かな？

そんなこんなで俺は指定した席に座った

席はラッシュ先輩の後ろの席だ

そんなこんなで俺の高校生活が始まろうとしていた

バトル54 ドキドキリザレ君の高校生活（スクールライフ）（後書き）

リザレ 「はあゝなんとか自己紹介とかできたよ」

ホムラ 「俺も緊張したぜ、なにせ高校は初めてだったからな」

リザレ 「そうなんだ」

ラッシュ 「まあ誰でも緊張はするぜ、次回はどうなんだ作者？」

次回はリザレ君がバトル部に！！？

ラッシュ 「すごいテロップな感じだな（汗）」

バトル55 リザレの初の部活〜準備編〜（前書き）

リザレ「なんですか（汗）このタイトル（汗）」

リザレ君はまず基本からなので準備編です♪

ラッシュ「まあバトルはまだだからな」

リザレ「そうですか」

それじゃあ今度は緊張しないでね♪バトル55

リザレ「俺大丈夫かな（汗）」↑えっ!？

バトル55 リザレの初の部活〈準備編〉

俺は授業を終えた後、ラッシュ先輩の部であるバトル部の部室へと向かった

初めての部活だ

俺できるかな？

……

そんなこんなで部室に入り早速ラッシュ先輩は

ラッシュ「俺はランニングしてくるぜ」

そういうとグラウンドを早く走った

先輩のスタミナどれぐらいだろう（汗）

俺はどうしたらいいのかわからずとまどっているけど

ホムラ「何か軽いトレーニングでもやるか？」

ホムラに言われ俺は軽いトレーニングをやってみた

……

ホムラ「大丈夫か？」

リザレ「はあはあ、大丈夫だよ」

少し軽くグラウンドを3周したけど限界

3周は走ったけど、疲れた

ホムラ「体力の方はあまり無理しないほうがいいぜ」

とホムラに言われたけど

リザレ「うん、ちょっと休憩してくるね」

俺は部室で休憩することにした

……

リザレ「ふう〜」

少しは軽くなっただけど

リザレ「俺って…」

元々俺は体力がないため激しい運動とかでは疲れてしまう

俺の技で変身技はあるけど、それでは時間の関係でもたない

そうしていると

ん？誰か来る

どうしようゝ

俺一人でいたいけどどうしようゝ

そんなこんなで部室のドアが開く

入ってきたのは

ラッシュ「ん？リザレどうした？」

ラッシュ先輩だ

ラッシュ「大丈夫か？」

そういつて心配してくれた

なんだろう

ラッシュ先輩はなんかこう優しさを感じるようだった

リザレ「ありがとうございます、俺は大丈夫です」

俺は先輩にとりあえず心配かけたくなくそういった

ラッシュ「そうか、無理はすんなよ」

そういうとかけてあるタオルを持って部室を出た

先輩

……

数時間後

俺は部員のみんなと自己紹介して部活を始めた

体力はないけど

それでも俺は

そんな中で

ゼルス「リザレ、少し誰かとバトルするか？」

ゼルスさんに声を掛けられた

俺はどうしようかと思ったけど、それでも

リザレ「わかりました、それじゃあ相手はレウトでお願いします」

俺はレウトにした

なぜかというと

レウトは時にボケたり変な風になったりなんだろう（汗）ヘタレと
いう感じだからかな（汗）

とりあえずバトルフィールドへと向かった

……

バトルフィールドは普通のアニメでも出ているフィールドだ

オープニングのあれだよ

そこにはレウトがいて

観客席にはラッシュ先輩とラグ、サクラ先輩にレイラさんまでいた

ゼルス「それではこれよりレウトVSリザレのバトルを開始する、
両者準備はいいな？」

リザレ「はい」

あまりバトルはしたくないけど、ここに入った以上はやるしかない、
負けても俺は……

レウト「いいバトルしようぜ♪」

そんな中ついに

ゼルス「試合開始！」

戦いのゴングはなった

レウト「そんじゃ行くぜ！火竜のブレス！」

レウトは龍の形の火の玉を数発吐いた

俺はそれをなんとか避ける

とりあえずここはアレしかない

時間はないかもしれないけど

リザレ「行きます！ちびリザへんしん！」

俺はそういうと俺の体に異変が起きる

体がオレンジになり、頭の突起はなくなつてつるつるしたような頭になり

顔もかわいい感じになった

レウト「なんだ!？」

レウトは驚いてる

そりゃそうだよ、俺の技は変身能力だから（汗）

メタモンの細胞が俺の中にはある

けど変身できる時間は限られてる

今のヒトカゲ状態で倒せるかどうかかわからない

ラッシュ「なるほどな…これがリザレの能力か」

サクラ「メタモンの細胞でできる変身能力ね」

ラグ「まさか本当に!？」

ルング「変身しやがった!？」

みんな驚いてる

けど

リザレ「俺の能力はメタモンの細胞で変身できる変身能力ですが、時間は限られています、体力や素早さも格段に上がっていますが、残念ながら時間がないため簡単に説明できないので行きます!」

レウト「マジ!？」

俺は駆け出した

バトル55 リザレの初の部活〜準備編〜（後書き）

初めての入部にそしてバトル

リザレ「ついに俺がバトルするんですか」

続きは次回になるよ

リザレ「俺時間上のため負けるのはわかっています」

けどそうなると思う？

リザレ「え？」

バトル56 リザレの初の部活〜対決編VSレウト〜（前書き）

ついに対決だよ

リザレ「おてやわかに行きます」

まあとりあえずリザレ君のバトルスタイルがなんなのかを見てから
リザレ君のオリ技を考えるよ

リザレ「ありがとうございます」

ラッシュ「そんじゃバトル56」

リザレ「行きます!」

バトル56 リザレの初の部活対決編VSレウト

今俺はちびリザ変身でヒトカゲへと変身した

後は時間との戦いになる

俺の変身技、ちびリザ変身はその通りヒトカゲに変身する技なんだから

時間があって変身できる時間は大体30分ぐらい

それまでに倒すことは無理かもしれないけど

やるしかない！

レウト「さくしてリザレには悪いが勝たせてもらうぜ！龍の波動！」

青い気のブレスが俺に襲い掛かってきた

俺はそれを軽々と避ける

……

変身技か……

リザレの体はメタモンの細胞がその半数もしくはだが

少なからずにある

そのため変身にも限度がある

ヒトカゲの状態はまさに退化したような感じだ

それに体力がないのに変身でこうも変わるとは

あいつは…強くなるような感じがした

やっぱり同じリザードンだからか？

でもどう行くんだ？リザレ？

…

俺はとりあえず技を出す

リザレ「火の粉！」

俺は小さい炎をレウト目掛けて吐いた

レウトはそのまま火の粉に直撃したけど

レウト「そんな炎じゃ俺には効かないぜ♪」

やっぱり炎は効かないってことか

俺は事前にモンスターのことを調べていた

リオレウスの弱点は氷と龍

つまり氷タイプとドラゴンタイプの二つ

だけど俺にはその技を覚えていない

ドラゴンクローもちろん覚えていない

やっぱり炎じゃ無理がある

ならノーマルタイプの技なら少しずつはダメージを受けるかも

俺はそう考えレウトにきりさくを繰り返した

レウト「おっと」

レウトは空中に飛んだ

レウト「空は俺のフィールドだ！行くぜ！つばめがえし！」

レウトは空中から上から周り急降下で俺に襲い掛かってきた

やばい！どうしたらいいんだ！

…そうだ！

俺は咄嗟^{とっさ}につばめがえしを見分けて、レウトに飛び移った

レウト「なっ！？何処だ！？」

俺は案の定ダメージは受けず、レウトの背中 にいた

とりあえずきりさく！

ズシヤ！

レウト「ぎゃあああああああ！？」

今度は連続できりさく！

ズシヤズシヤ！

[illegible]

やっぱりノーマルだと効果は普通だったみたい

あとは

リザレ「雷パンチ！」

俺はレウトの背中から雷を帯びたパンチを出した

[illegible]

レウトはしびれたような反応をする

これはかなりダメージを負ったようだ

俺はすぐさまレウトの背中から降りた

レウト「ハラヒレハラホレ」

これはチャンス

かみな…うっ！

俺は攻撃できずにいた

やばい…時間がない

やるしかない

俺は…

俺は立ち上がり

リザレ「夜あああああああああああ！！！！！！？」

こんしんなのかわからないけど雷パンチをレウトの頭に叩き込んだ

レウト「ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！！？」

レウトは倒れた

それと同時に俺の変身は解除され、俺はその場で倒れた

…

どれくらい経っただろう

俺は黒い世界にいた

そこから一筋の光が出ていた

進んでみよう

俺はその光を目指して進んだ

すると光は輝きを増し

俺を包み込んだ

……

リザレ「う…うん…」

俺は目を覚ました

ラッシュ「大丈夫か？」

ホムラ「お前が戦い終わった後倒れたから心配したぜ」

ラッシュ先輩とホムラがいた

リザレ「ここは…」

ラッシュ「部室だ、かなり消耗していたからな、とりあえずゆつく

り休んどけ」

俺は先輩のこういでそうさせてもらった

ちなみにこの勝負は引き分けに終わった

レウトは背中が痛いためかホムラに治療を受けていた

かなり痛かったか涙目になったけど（汗）

俺はバトルは楽しかった

けどまだまだだな

俺もがんばらないと

バトル56 リザレの初の部活対決編VSレウト（後書き）

リザレ「バトルは疲れたよ」

おつかれさま、ゆっくり休んでね

ラッシュ「それにしてもここからどうすんだ作者？」

リザレ君のバトルスタイルとどんな戦いでいくかはある程度は決まったかな？あとはオリ技を考えないと

ラッシュ「大変になるな（汗）」

かならずいい技を身につけるようにするよ

ラッシュ「次回はなんだ？」

次回はようやくラッシュの挑戦者が現れるよ

ラッシュ「それは一体誰なんだ？」

それは次回になってからね♪

バトル57 ディアブロスの挑戦者+クックの女の子とリザレのバトルスタイル

ラッシュ「今回はコラボとリザレのバトルスタイルか」

うん、リザレ君のバトルスタイルもなんとなくわかってきたし、オリザレも少し考えたよ

リザレ「フォックさんありがとうございます」

いいよ♪リザレ君もがんばらないといけないから、それじゃあ行くよ♪バトル57

リザレ「がんばります！」

バトル57 ディアブロスの挑戦者＋クックの女の子とリザレのバトルスタイル

ここはポケハン学園校門

???? 「ここが噂のポケハン高校か」

???? 「ねえカクサスウゝやめようよ（泣）」

一人は黒髪で短髪の男

もう一人は見た目が14・15の少女で髪は薄いピンクで癖毛で腰まで長い

持っているのは剣と盾だ

どうやら武器のようだ

これは片手剣と呼ばれる武器だ

カクサス 「ここまで来ておじけつくのか？アイリス？」

カクサスと呼ばれる黒髪の男がいう

アイリス 「しよんなこといわれてもゝ（泣）」

アイリスと呼ばれる少女は涙目だ（汗）

カクサス 「俺の修行にもなる、それにアイリスはスバルのためだろ

「？」

アイリス「うっ！そういわれても」

アイリスはだだをこねる

カクサス「とにかくいくぞ」

カクサスはアイリスを引きずり、学校へと入った

……

その頃

リザレ「行きます！ヒールフレイムサークル！」

リザレの周りの地面に円が現れた

ラッシュ「よし！完璧だ！」

ラッシュがほめる

リザレ「ありがとうございます」

どうやら技を編み出したようだ

……

あっ！みなさん

リザレです

俺がここに来て1週間になりました

俺は今技を編み出したんです

今やったのはヒールフレイムサークルという技です

俺のバトルスタイルはキュアジョブフェンサーと呼ばれたバトルスタイルです

説明しますと

俺は大体が回復の技があって（まだ未公開だと思いますが）

ラッシュ先輩に説明させたんです

それでラッシュ先輩は俺にあったスタイルはこれらしく

俺は早速、技を編み出していたんです

リザードの状態でも使える技や、その変身の姿によってバトルの状況を変える

それが俺のバトルスタイルです

なので俺はまずは攻撃技を覚えて

次に回復技を編み出し

現在は2個ぐらい技は完成しました、ヒールフレイムサークルの他に攻撃技は旋炎斬せんえんざんという攻撃技だけです

まだまだですががんばっています

そんなとき、なにやら二人のカップル？が俺達を訪ねてきました

カクサス「貴方がバトル部の部長のラッシュなのだな？」

どうやら先輩に用があるみたいです

なんかもう一人の方はなんか泣いているみたいです（汗）なんで？

ラッシュ「ああ、もしかして挑戦者か？」

挑戦者といったラッシュ先輩

実はバトル部では挑戦者を募集するのがあり

バトル部メンバーを鍛えるためにラッシュ先輩が考えたものです

どうやら挑戦者がきたらしいです

そこへ

レウト「おい！ラッシュ！」

レウトが来たみたいです

レウト 「ん？挑戦者か？」

と、レウトも言っただみたいです

カクサス「ああ、そのため来たんだ、俺とのバトルついでに俺の連れであるアイリスを鍛えてくれないか？」

どうやら連れの方は鍛えるために来たのになぜか涙目でした

「ラッシュ 挑戦者か、ならバトルだな、名は？」

カクサス「俺はカクサス、正々堂々と戦おう」

カクサスという人間は正々堂々な戦いが好きってことかな？

ラッシュ「なるほどな、騎士道精神の元ディアブロスカ」

えっ！？

カクサス「さすがだな、そうだ、俺は元ディアブロスなんだ」

ええええええええええええっ!?!元ディアブロスってことは元モンスターってことだね

カクサス「ついでにアイリスは元イェンクツクだ」

あの少女もそうなんだ（汗）ホムラもそうだけど

「ラッシュになるほどな、武器は拳か？」

カクサス「そうだ、俺はそれでも戦える」

拳で戦うなんてさすが（汗）

ラッシュ「それじゃあバトルフィールドに案内しよう」

そういつて俺達はバトルフィールドに向かった

……

ゼルス「さあ！ここで挑戦者が現れた！バトル部のバトル♪審判は俺、ゼルスがやらせてもらう」

マイクでしゃべりながらそう言ってるゼルスさん

少しノリノリですよ（汗）

レウト「実況は俺、バトル部副部長、リオレウスのレウトと」

ホムラ「元リオレウスのホムラでお送りするぜ！」

まあ観客席はバトル部メンバー全員いるけどね

レウト「いや〜ついに初の挑戦者がきたな〜♪」

ホムラ「元ディアブロスか〜これは見ものだな〜♪」

そんなこんなで

ゼルス「それでは始めるぞ！ラッシュVSカクサス…バトルスター
ト！」

バトル57 ディアブロスの挑戦者+クックの女の子とリザレのバトルスタイル

はい！挑戦者からは『モンスターハンター狩人とモンスターの奇妙な話』から、カクサス君とアイリスちゃんが来てくれました！

カクサス「元ディアブロスのカクサスだ」

アイリス「ア、アイリスです（泣）」

どうしたの？なんか涙目だけど

カクサス「すまないな、アイリスは修行場所がここで不安があって怖くなってるみたいなんだ」

そうなんだ（汗）まあしばらくの間よろしくね

ラッシュ「泣くなよ（汗）大丈夫だからな」

アイリス「ホント？」

ホントだからがんばろうね（汗）

アイリス「うん（泣）」

カクサス「しばらくの間よろしくな」

バトル58 ラッシュVSカクサス（拳と拳の戦い（前書き））

ラッシュ「ついにか」

うん、さらに今回はラッシュに新技がつきます

ラッシュ「マジかよ!？」

ホムラ「そんじゃ行くぜ!!バトル58!」

レウト「かかってこいやあああああああああああああ!」
「!!!!!!」

バトル58 ラッシュVSカクサスく拳と拳の戦い

俺は今、元ディアブロス、カクサスとの戦いをしていた

カクサス「双剛破打！」

カクサスは両手で掌撃を繰り出した

俺はどうするか考えた

拳でやるなら拳だ！

ラッシュ「炎のパンチ！さらに雷パンチ！」

俺は両手で炎のパンチと雷パンチを繰り出した

両手のパンチは互角だ…ん？

カクサス「そう簡単に効かないか、だがそこからせんしゅとっしょう潜手突掌！」

くっ！あの技はフェイクか！？

ラッシュ「くっ！」

レウト「おっと！ラッシュがカクサスの技のフェイクからの攻撃で食らったぞ…！」

ホームラ「カクサス選手も拳での戦いはすごい！」

くっ！かなりやるな

ラッシュ「やるな」

カクサス「俺はそれでも：行くぞ！滅碎瞬牙撃！！」

カクサスは俺に向かって目にも止まらぬ早さのパンチを繰り出してきた

やばいな：どうすりゃあいいんだ

俺はそれを瞬時に見極めてパンチを素早くタイミングを見て避けた

カクサス「中々だな、だがもう一度だ！」

またか：！そうだ！ならこの技だ！俺も特訓して編み出したまだ見せてない技だ

カクサス「滅碎瞬牙撃！！」

行くぜ！！

ラッシュ「ブレイバーラッシュ！！」

カクサス「何っ！？」

俺は光をまとった拳でパンチを連続で繰り出した

さらに俺はそこにセントリミットの力を使ってさらに拳の威力を

あげた

ラッシュ「オラオラオラ！！！！！」

これによりカクサスの連続のパンチは俺の拳によって吸収されダメージは無効となった

ラッシュ「これで行くぜ！！ドラゴンラッシュ！！！」

俺は青い炎をまとった拳でパンチを連続で繰り出した

カクサス「くっ！あっ！」

カクサスはかなりダメージを食らったか

カクサス「俺も負けん！滅碎瞬牙撃！」

ラッシュ「！？！」

そこからまたあのパンチを繰り出してきやがった！？

ラッシュ「くっ！俺も負けないぜ！！！」

拳と拳がぶつかりあう

……

ラッシュ「はあはあ」

カクサス「はあはあ」

俺とカクサスはかなりボロボロになっていた

手もかなりきいていた

ホムラ「拳と拳とがぶつかりあう二人の戦い!!」

レウト「男と男の戦いとなってきたぜ!!」

わあああああああああああああ!!!!!!!!

歓声が盛り上がる

ラッシュ「オラァ!!」

カクサス「ハアアアッ!!」

ゴスッ!!

ホムラ「なっ!?!」

レウト「なんと!?!」

リザレ「先輩!」

俺とカクサスの拳が互いの頬を殴った

ラッシュ「中々だったぜ」

カクサス「いいバトルだった、ラッシュ」

バタッ

ゼルス「両者引き分け！」

勝負は引き分けに終わった

あの後俺とカクサスは治療した

幸い大丈夫だったため1日で治った

……

カクサス「ありがとな」

カクサスは俺にお礼をした

ちなみに部室のベンチに座って互いに話していた

カクサス「とりあえず戦えて嬉しかった、あとはアイリスなんだが」

ラッシュ「アイリスならサクラに任せたから大丈夫だろ」

カクサス「ここにきてよかった、アイリスの軟弱な意志が治るまでしばらくここに世話になる」

ラッシュ「ああ、色々と修行とかに付き合ってくれないか？」

と、俺はカクサスに修行に付き合うかお願いした

カクサス「ああ、その方がいいな」

OKになった

がんばらないとな

だがこのとき

俺はさらに強い奴に会おうとは

このときの俺は知る由もなかった

バトル58 ラッシュVSカクスス（拳と拳の戦い（後書き））

やっと終わった〜

ラッシュ「新技は拳か」

目には目を、拳には拳をなんてね

ラッシュ「かなりあるな〜どれぐらいなんだ？」

大体連発できるのは50ぐらいかな？

ラッシュ「そんなにか！？」

カクススには30発だから、こっちは50ぐらいの方がいいと思って

ラッシュ「すごいバトルだったからな〜」

さて今回はあの双剣の少年ハンターとそのパートナーとあの青年が登場するよ♪

ラッシュ「誰なんだ？」

かなり腕のたつ少年だよ

ラッシュ「双剣といえば…誰なんだか？」

それは次回のお楽しみ♪

バトル59 同じ名前?の双剣使いの少年と青年その少年のパートナーの元人

ラッシュ「ついか」

ついにあの双剣使いの少年とそのパートナーとさらにオリジナルかはあのチートな青年の登場だよ♪

レウト「なあそのパートナーって誰なんだ？」

それはレウトやホムラ君はなんなのかだよ

レウト「ん?それって？」

ホムラ「えっ!?!まさか師匠!？」

ふふふ(黒)そこからは自分で見てね♪

リザレ「どんな人たちなんだろう？」

ラッシュ「そんじゃ行くぜ」

リザレ「バトル59」

レウト・ホムラ「うっしやあああああああああああああああ
ああ!?!?!」↑やけにテンション→なレウスコンビ

バトル59 同じ名前?の双剣使いの少年と青年その少年のパートナーの元人間

????? 「ここが噂のバトル部か…」

ここはポケハン学園の校門

またお決まりの場所だ

そこには一人の少年とレウトとホムラ（人間だが）と同じリオレウスがいた

リオレウス「ここが…なあラセ?ここで修行するのか?’

そういうのはリオレウスだ

ラセ「僕はリオのために強くならなきゃならないんだ、ここでもつと強くないといけないから」

ラセと呼ばれるローブを被った少年はそういう

彼の背中には二つの剣があった

一つは白く

もう一つは黒い

どうやらこれは双剣らしい

リオ「そんじゃ行こうぜ♪ラセ♪」

ラセ「うん、行こう！」

ラセと呼ばれる少年とリオと呼ばれるリオレウスは学校の中へと入っていった

……

数分後

????? 「ったく！なんで今度は別の世界に飛ばされるんだ！ああ
ゝここは何処なんだゝ（泣）」

涙目になるのは黒い髪をして黒服を着て、背中に大剣を背負った青年だった

????? 「まあでもアイツから離れられるからいいか♪」

いいのかよ!？

????? 「ん？ポケハン学園？とりあえず入ってみるか」

そういうと黒髪の青年は学校の中へと入っていった

これが後に青年本人が驚くことになるとはこのとき知る由もなかった（汗）

……

ここはバトル部のバトルフィールド

カクサス「はっ！」

ラッシュ「よっ！」

ラッシュとカクサスが練習バトルをしていた

一方別のバトルフィールド

ホムラ「魔法剣ファイガ！」

ホムラは魔法剣ファイガを放った

ホムラの太刀から火の弾が3発放たれた

そして戦ってるのは

リザレ「旋炎斬！！」

リザレだ

今は普通のリザードの状態

最初は体力とかがなく疲れてしまうが

今はラッシュの特訓のおかげでリザードの状態でも動けるようになった

さらにヒトカゲに変身しても体力と素早さはさらに強くなった

リザレは回転して爪で炎の弾をはじきかえした

炎の弾はあらゆる方向に飛んだ

ホムラ「さすがにやるな」

リザレ「お互いね」

そんな中になったホムラとリザレ

それを見ているレウトと出番がなかったティガレックスのレイスと
テオ・テスカトルのテトだ

レイス「出番がきたよ（泣）」

テト「ってか作者！！（怒）なんで俺の出番とかでねえんだよ！！
（怒）」

作者「だってコラボキャラ達が多いんだもん」

テト「だけどこれじゃ俺の出番が（泣）」

作者「泣くなよ（汗）」

テト「誰のせいだと思ってるんだ！！（怒）」

そんな作者にお怒りのテト君（汗）

一方のラッシュサイトの方はリング・ラグ・ルガー・ブレイの4匹だ

ルング「それにしてもハイレベルだな（汗）」

ラグ「そうだね、けどラッシュ楽しそう」

ルガー「さすが正々堂々だな」

ブレイ「俺も早速ルガーと正々堂々と」

ルガー「やめい（汗）」

ルガーは嫌にブレイが腕を掴んだので振りほどいた

そんな時

ラセ「ここがバトル部か？」

みんなが振り返ると

そこには双剣にローブを頭から被った少年とリオレウス

ラッシュ「ん？お前らは？」

ラセ「僕は神月^{かみつき}ラセ、双剣使いのハンターだ」

リオ「そして俺がラセのパートナーのリオレウスのリオだ♪」

レウト「何い！？」

ホムラ「リオレウスだと！？」

レウスコンビは驚く

なぜなら自分らと同じリオレウスがいるからだ

ラッシュ「ラセっていうのか…俺はリザードンのラッシュだ、ここ
のバトル部の部長だ」

ラッシュはラセに自己紹介した

ラセ「ラッシュっていうのか…なら僕と戦ってくれるか？」

ラセはそういう

ラッシュ「いいが？何か理由があるのか？」

ラッシュの質問にラセは答えた

ラセ「僕はリオを守るため強くなりたい、だからここのバトル部の
噂を聞いてやってきた、だから僕はここに（バトル部）入部したく
来たんだ」

リオ「俺はラセを守るためにここにラセと一緒に来たぜ♪」

リオを守るために戦う少年ラセ

そんなラセを守るために戦うリオレウス、リオ

ラッシュは

ラッシュ「わかった、その前にお前達の実力を見せてもらいたい」

ラセ「わかった」

そう承諾したラセ

するとそこに

????「ふう〜なんなんだここ…は…」

みんなが振り返ると

そこにはさきほど校門に入った黒髪の青年だ

????「ぎゃあああああああああああああつ！
！！！！！！」

黒髪の青年は驚いていた

ラッシュ「なっ！？なんだ！？」

ホムラ「落ち着けよ！おい！」

……

数分後

人間であるホムラとラセとかに説明をされなんとか治まった

????? 「へーここがポケモンとモンハンの世界かーすげえ、モン
スターがしゃべるなんて」

黒髪の青年はモンスターがしゃべることに驚く

だってこの世界ではしゃべるので（汗）

テト「それより名前はなんだ？」

テトはそういと黒髪の青年は

????? 「俺は神月羅瀬^{かんづきらせ}、中学三年の15歳だ」

ラセ「えっ!?! 僕と同じラセ!?!」

羅瀬「えっ!?! お前もそうなのか!?!」

これは驚く

なにせラセという下の名前が同じ少年と青年がいるのだから

リオ「これは驚いたぜ（汗）」

そんなハンターのラセのパートナーリオも驚く

とりあえずそんなこんなで

異世界ラセ「俺がバトル!?!」

なんと異世界ラセを加えてのバトルとなった

ちなみに同じラセって名前が二人いるので別々に異世界ラセ君、ハ
ンターラセ君と分けるようにしておきます

今はそうですが、ちょっと考える必要があるかも？

そんなこんなで最初のバトルは一体誰がやるのか？

それは次回で！

バトル59 同じ名前？の双剣使いの少年と青年その少年のパートナーの元人

モンスターハンター『赤き翼』から神月ラセ君とリオ君、そしてオリジナル小説の異世界に飛ばされた俺の異世界放浪日記から神^{かんづき}ラセ君にお越しになりました！

ハンターラセ「神月ラセだ」

リオ「リオレウスのリオだ」

異世界ラセ「そして同じ下の名前の神月羅瀬^{かんづきらせ}だ！」

ラッシュ「ついに来たな」

ハンターラセ「僕は負けないよ」

ラッシュ「かかってこい！」

リオ「それにしてもレウトとホムラに会いたかったぜ」

レウト「俺もだ！リオ」

ホムラ「俺もリオレウスだが人間だけだな」

ついにレウス3兄弟までできてしまったか（汗）

異世界ラセ「なんなんだ！？もはや世界観壊してるような感じが！？」

そりゃあ驚くわ(汗)

今回はそれぞれの戦いなので3つに分けます

ラッシュ「いいバトルしようぜ」

ハンターラセ「こちらこそ」

レウト「リオ♪俺んちに行くか♪」

リオ「マジ！行く行く♪」

ホムラ「俺が飛びっきりのごちそう作ってやるよ♪」

異世界ラセ「もはやつつこみどころありすぎだあああああああああああああ
ああああ！……！！……！！？」↑パニックってる(汗)

バトル60 剣と剣のぶつかりあい！ホムラVS異世界ラセ（前書き）

さして最初のバトルは

ホムラ「俺か」

異世界ラセ「まあ人間だし大丈夫っしょ」

まあそうだけど、じゃあ行くよ！バトル60

ホムラ「行くぜ！！！！！」

バトル60 剣と剣のぶつかりあい！ホムラVS異世界ラセ

とりあえずバトルの方をどうするかをみんなまとめた

それで決まった

ゼルス「まずはホムラVS異世界ラセ、次はレウトVSリオ、最後はラッシュVSハンターラセだ」

と、このようになった

……

フィールドに二人が立っていた

一人はホムラ

もう一人は異世界のラセ

互いに構える

さうて俺とのバトルか

よっ！俺はホムラ

ついに俺が戦うことになった

相手は人間、しかも別の世界から来た人間だ

たしか神月羅瀬かんづきらせだったな

俺は異世界ラセをみながら勝負の時を待っていた

ゼルス「それじゃ行くぞ、バトル：開始！」

戦いの火蓋がきつておとされた

まず俺は

ホムラ「フレイミングウェーブ！」

俺は太刀を一振りした

するとそこから赤い波が現れる

これは俺のオリ技だ

さーて、どう攻める

異世界ラセ「風よ！舞え！」

なっ！？

魔法か！？

俺の放った技は風によって消された

異世界ラセ「闇達よ来たれ、邪の者に漆黒の刃を！」

次にあいつは黒い刃を俺に向ける

殺す気か！？

ホムラ「うわっ！あぶねえ！？」

俺はギリギリで黒い刃をかわす

なんだよあいつ！？チートか！？

と、心の中でつつこむ俺

異世界ラセ「かなりやるな〜あの元リオレウス」

ホムラ「て、てめえ（怒）」

ホントになんなんだよコイツは！？

俺はとりあえず接近して攻撃したが

異世界ラセ「ちょっ！？まっ！？俺、心の準備が！？」

なんで接近戦で心の準備だよ（汗）

ホムラ「大丈夫だ、一応こっちの世界はあまり傷つけないようにしてあるから大丈夫だ」

まあそうだ

ちなみに世界にもよるが、武器は大体皮膚とかを切ると傷がついて血とかが出るだろ？

けどこっちの世界ではゲームと同じような感じで血とかは出ない

それにまあみねうち程度だからバトルしても大丈夫だ

ホムラ「てやっ！」

俺は太刀を一振りした

だが

異世界ラセ「切られてたまるか！」

大剣の腹で受け止めやがった

異世界ラセ「水よ！」

すると俺の真下から水が！？

ホムラ「ゴボッ！」

俺は水に飲み込まれた

なんという魔力だ

……

サクラ「あの子（異世界ラセ）の魔力、以上に高いわね」

ラッシュ「かなりやるな！異世界のラセ」

ハンターラセ「下の名前が同じだと思わないほどすごい」

リオ「なんなんだよマジ！？」

カクサス「かなりやるな…あの青年」

そこからつつこみとか色々と出てきた

あの一マジ苦しいんですけど（汗）

……

異世界ラセ「よし！そんなじゃあトドメと行くか！」

くそっ！

水をなんとかしねえと負けちまう！

どうすれば…

このとき俺は…

ある考えが浮かんだ

そうだ！

これだ！

ホムラ「ゴボッ！ゴボボボ！！——（ノヴァ！ブレイド！！）」

異世界ラセ「なっ！？」

俺は太刀に炎の魔力を出して水を切り裂いた

すると水は切り裂かれ、俺はなんとか脱出した

ホムラ「ゲホゲホ！！」

かなり来たな〜こりゃ

さあて、反撃だ！

ホムラ「切り上げ！」

異世界ラセ「うわっ！」

俺は太刀を切り上げでラセ（異世界の）を上空に飛ばした

よし！これで

ホムラ「超究大炎斬^{ちようきゆうだいえんざん}！！！」

俺は太刀を何度も連続で切りつけた

異世界ラセ「ちよっ！？まっ！？イテッ！？」

行くぜ！

俺は最後に太刀を構えて回転切りして太刀を背中に収めたと同時に着地した

そこからあいつが落ちてきた

目を回して倒れていた

ゼルス「異世界ラセ戦闘不能！この勝負ホムラの勝ちだ！」

わあああああああ！！！！！！

俺はなんとか勝利した

さすがに危なかったけどな（汗）↑漆黒の刃に

ホムラ「はい！ありがとうございます師匠！」

いえいえ

バトル61 レウトVSリオくヘタレの実力く（前書き）

レウト「俺とリオだな」

リオ「負けないぜ」

ついにリレウス同士の対決だよ、二人とも？覚悟はできてる？

レウト・リオ「いつでもいいぜ！」

そんじゃあバトル61

レウト・リオ「なめるなよ！！！」

バトル61 レウトVSリオくヘタレの実力く

次の対戦はレウトとリオのリオレウス対決だ

互いににらみつける

……

俺はリオ

元人間のリオレウスだ

今対峙してるのはレウトだ

同じリオレウスでも負けられないな

ゼルス「バトル…スタート!!」

なら先手必勝!

リオ「ガアアアアアアアアアアアアアアアっ!!」

俺はバインドボイスで動きを封じようとした

……

くっ!やるなく

よっ!俺だ、レウトだ!

リオが先制でバインドボイスをしやがった

けど負けられねえ！

レウト「龍の波動！」

俺は龍の波動を放った

$$\vdots$$
[illegible]

俺は龍の波動をモロに食らった

ってかなんでリオレウスなのにポケモンの技覚えてんだ!?

やべっ (汗) マジでやべえ (汗)

ポケモンの技まで覚えてるとは！？

レウト「へへっ！どうだ！リオ♪俺だっ
てやるときはやるんだ！」

そうかいそうかい（汗）

いいな〜俺もポケモンの技とかオリ技とか習得してえな〜

$$\vdots$$

とりあえずリオにダメージは与えたな、それじゃこつちもこれで

俺はホバリングして空を飛ぶ

リオ「俺も！」

なっ！？

リオも空を飛んだ

あつ、そりゃリオレウスだからか（汗）俺もだけど

なら！

行くぜ！空中蹴り！

俺は空中蹴りでリオに攻撃

……

行くしかない！

これでレウトに……ってあれは失敗したが今度こそ！

リオ「サマー」

俺は空中でホバリングして

リオ「ソルトオオオオオオ……！！！！！！！！！！」

そのまま急降下した

ラッシュ「互いに空中蹴りかよ（汗）」

ホムラ「俺がバカに思う（汗）」

こうして2回戦は互いに空中蹴りで激突して互いに気絶し、引き分け（汗）

バトル62 ラッシュVSハンターラセ（一人でかかえるな）（前書き）

ついにハンターラセ君との対決だよ♪

レウト「ラッシュは勝てるんだろうか」

リオ「ラセ、がんばってくれ」

ホムラ「この二人はかなり迫力ある戦いになりそうだな」

まあそうなるね、バトル62

レウス3兄弟「燃えるぜ!!!!!!!!!!」

バトル62 ラッシュVSハンターラセ（一人でかかえるな）

ついにこの二人の対決となった

互いにかまえる

そして

ゼルス「バトル…始め！」

……

僕は神月^{かみつぎ}ラセ

ハンターだ

僕と戦うのはリザードンのラッシュだ

なんだろう？

油断できない

僕は間合いをとってから一気に攻めた

僕は白い剣を一振りした

……

ラッシュ「おっと」

俺は剣をかわした

そこから

ハンターラセ「はあっ！」

黒い剣か

がしっ

ハンターラセ「なっ!？」

俺は黒い剣をつかむ

ハンターラセ「くっ！」

ラセはそのまま離れた

黒い剣はラセがまだ持つてる

まあとりあえずは離れたが

手には少し傷ができた

龍属性があるな、あの双剣には

……

あのリザードン、中々やるみたいだ

僕もリオと修行してるけど

こんな奴と戦ってみて

なんだろう？

何かを感じる

一体？

ラッシュ「フレアソウル！」

ハンターラセ「！？」

僕はそう考えてるとラッシュは炎の弾を出してきた

僕は炎の弾を軽々とかわした

けど

僕はそのままラッシュに向かってつつこんで剣をクロスして攻める

これで…終わりだ！！

だが

ラッシュ「バーニングジョブウェポン！」

！？

ラッシュの手から炎が現れそれが具現化して斧が出てきた

なっ！？

斧の腹で防いだ！？

ラッシュ「火炎放射！」

ハンターラセ「くあっ！」

僕は火炎放射をくらってしまった

ラッシュ「ドラゴンラッシュ！」

くっ！やばい！？

ラッシュ「オラオラオラオラ！」

ハンターラセ「くっ！あっ！がっ！」

リオ「ラセ！」

僕はこのままやられるのか

ナラボクガ

意識が…

……

ラッシュ「ん？」

俺はラセが何か黒い感じになっていたためラセから離れた

ラセは黒くなっていた

ハンターラセ「コロス」

こいつおかしくなってるな

このままじゃやべえな

ラセは接近してきた

やるしかないな

そしてラセが俺の目の前に来た

今だ！

ラッシュ「闇に捕らわれるな！ラセ！ブレイバーラッシュ！！」

俺は光をまとった拳でラセを連続でパンチした

ラセ「クッ！ガッ！」

助ける！

ラッシュ「とどめだ！」

俺は光をまとった拳でラセを殴った

ハンターラセ「グワアアアアアアアアアッ！……！！！！！！？」

ラセは気絶した

リオ「ラセ！」

リオがラセの元へ駆けつける

ラッシュ「安心しろ、あいつは闇に心を捕らわれているみたいだ、
リオ、ラセを部屋に運んでくれ」

リオ「わ、わかった」

……

とりあえず俺はラセのところに行った

ラセはぐっすりと寝ている

リオ「ラセ……」

リオはラセを看護していた

ラッシュ「リオ」

俺はリオに声を掛けた

リオ「ラッシュ…すまない」

リオは謝った

ラッシュ「お前が謝ることじゃない、それにラセの様子がおかしかったからな」

リオ「おかしい？」

俺はリオに言った

ラッシュ「ラセはなんか黒い感じなんだ、心に闇があるような感じだ」

あの時

ラセの様子がおかしいのは

あいつに…

心の闇があるんじゃないのか？

俺はそう思った

あいつの辛い過去になにかあったのか

ラッシュ「なありオ？ラセに何かあったのか？あいつの様子がおか

しいのはたしかだ、何か知ってるか？」

リオ「いや、俺は知らない、あいつといて、そんな様子はなかったな」

リオには見えてないな

やはりラセに何かあったに違いない

後で聞いてみるしかないな

どうやら俺は

あいつの事を詳しく知る必要だな

それぞれみんなを見ると辛い過去や色んな奴がいる

だから俺は……

やるしかない！

俺はバトル部の

部長なんだ！

……

その頃

????「ここは…」

一匹のゴウカザルが白い空間にいた

????「俺はたしか…」

????「ここは生と死の狭間、君は傷ついた仲間をダメージを受けても回復させたんだ」

そこにリザードンが現れた

腰には剣を収めている

ゴウカザル「お前は？」

ゴウカザルはリザードンにたずねる

????「俺はフォック、まあ作者でもあるんだけどね♪」

ゴウカザル「なあ？なんでそんなところにいるんだ？それに俺はどうなってるんだ？」

フォック「君は仲間を回復して死んだんだ、でもまだ君は生き返らせることができる」

するとフォックのとなりからゴウカザルが現れた

ゴウカザル「なっ！？これは！？」

フォック「そう、君の体だよ、ゴウ君」

バトル62 ラッシュVSハンターラセ（一人でかかえるな）（後書き）

ラッシュ「終わったな」

ハンターラセ君の心の闇

辛いけどやっぱみすごせないよね

ラッシュ「ああ、俺もがんばらないとな」

うん

ラッシュ「それにしても作者は何やってんだ？」

そこは次回ぐらいでね、でもラッシュとかには言わないからね

ラッシュ「（作者、なにか隠してるな）」

バトル63 元人間のモンスターとオーラをまとう者（前書き）

さらにコラボキャラが登場♪

ゴウ「なんか楽しそうだな（汗）」

まだ出ちゃダメ！↑セイントで押し返す

ゴウ「どわあああああああああ！！！！！！？」

さあてそろそろ行きます！バトル63、行くぜ！

バトル63 元人間のモンスターとオーラをまとう者

ゴウ「なぜ俺の体が!？」

ゴウは驚いていた

フォック「君の世界からとりにいったんだ、とりあえずは元に戻ったほうがいいよ？」

ゴウ「あ、ああ(汗)」

ゴウは自分の体に透き通るように入った

すると

ゴウ「やっと取り戻したぜ！」

体が戻って嬉しくなるゴウ

フォック「よかった、さて!本題に入らなきゃいけないから話聞いてくれる？」

ゴウ「お、おう」

とりあえず本題に入る

フォック「本題だけど、君の今の實力ではエンドには勝てない」

ゴウ「なっ!？」

それは突然のことだった

エンドとは、ゴウの世界である団体のリーダーでギラティナだ

ゴウ「ってかなんでお前がエンドの事知ってるんだ!？」

ゴウが驚きながら質問する

フォック「色々な世界を見てきてるからそれぞれの世界の事情とかも把握してるんだ、やっかいな事にはなってることは間違いないと思う」

ゴウ「たしかに、でも1週間後には戦いに備えないといけねえんだ!」

フォック「そこは大丈夫、時間を止めておいたから安心して修行できるから」

フォックが時間を止めているのでなんとかなる

もちろん他のメンバーも時間によって動かない、そしてゴウが別の世界に行ったことは知らない

ゴウ「そうか、なら安心だな!でも俺はその間何をやればいいんだ?」

ゴウはフォックに言った

フォック「君にはラッシュ達の世界に行って、鍛えてもらうよ」

ゴウ「鍛えるってことはバトルか？」

ゴウはそう聞いてくる

フォック「もちろんバトルとかもできるよ」

ゴウ「おお！燃えてきた！！」

頭の炎がゴウゴウと燃え上がる

フォック「でもただ鍛えるだけじゃない、君のオーラの能力で異常があるみたいなんだ」

ゴウ「異常？」

それにはわからないゴウ

フォック「まあ手短に言うと君のブレイクオーラだけど、あれを君は操れていないんだ」

ゴウ「え！？」

ブレイクオーラとは

ゴウの能力であるオーラの一つ

白いオーラを身を包みかなり能力が高いオーラだ

だがそれは自分がおかしくなってしまう、使用者はその時の記憶がない

フォック「ブレイクオーラは使用者をおかしくしてしまい、そして心が弱い者は狂気となって他の者を巻き込んでしまう」

ゴウ「それで俺は…」

ゴウは落ち込んでしまった

理由はブレイクオーラで彼の仲間を傷つけてしまったからだ

フォック「けど落ち込んでちゃだめ、まだ君の心を強くするように俺はラッシュ達に任せようと思ったから君をここに連れてきたんだ」

ゴウ「でも俺はそれで傷つけてしまうのが」

ゴウはさらに落ち込む

フォック「君はこのままでいいの！」

ゴウ「!?!」

フォックが大声を出す

フォック「ただ逃げてはだめ、狂気や心の弱さにおびえちゃだめ、君が変わらないとエンドには勝てない、そして仲間までも犠牲となってしまう、俺は命を失うのは嫌なんだ! だから君をここに呼び出した! 変えるために!」

命を失わせたくない

そんな気持ちをフォックは言う

しばしの沈黙

そして

ゴウ「そうだな…俺はここで死ぬわけには行かないからな！それじゃあ行ってやろうじゃねえか！その世界に！」

そう決断したゴウ

フォック「よかった、それじゃあまずはこちらを」

フォックはゴウに星型をしたネックレスをゴウの首にかけた

ゴウ「これは？」

フォック「それは創造のネックレス、すぐにわかるよ」

すると何処からか声が

「?????」「ここは…なっ!?なぜゴウの体を借りずに!?」

その声はどこからか聞こえてくるのかわからない

ゴウ「なっ!?ハピネスの声が!?!」

ハピネスとゴウは言う

どうやら声が聞こえるらしい

フォック「それは君と他の人がハピネスと会話できるようにできる
ネックレスなんだ」

どうやらわたされたネックレスはそういうことができるらしい

ハピネス『まさかそれで声を聞けるとは、これで体を借りずに話せるな、我はアルセウスのハピネスだ』

アルセウス、ハピネスはフォックに自己紹介した

フォック「よろしくね、俺はフォック、作者で世界の監視者だよ」

……

ハピネス『なるほど、ブレイクオーラやダークオーラを何とかしないとエンドには勝てないということだな』

フォック「うん、なんとかしないと二匹では勝つことが難しい、それにエンドがゴウ君のブレイクオーラで君の仲間を傷つけて操っていたみたいだから、だけどこの二つのオーラで勝てる見込みがあるけど制御できなければ意味がない、そこで心を強くしなければゴウ君はブレイクオーラで仲間を傷つけてしまう」

ハピネス『なるほど、たしかに何とかしなければ』

ハピネスは説明を聞いていた

ゴウは聞いているのだがつまんなそうにしていた

フォック「なので二匹はブレイクオーラの制御と心を強くしてほしい」

ハピネス『フォックよ、話はわかった、とりあえずゴウがつまんなそうにしてる、早くしてはくれないか？』

フォック「わかった、それじゃあ今から行くよ、ワープ！」

二匹はワープした

……

二匹がワープしているその頃

ここはポケハン学園の校門

そこにたっているのは一匹のモンスター

突起物が多く、大きい牙があるモンスター

覇竜アカムトルム

アカム「ここがポケハン学園かぁ♪楽しみだな♪」

そういうとアカムは学園に入っていた

……

ラッシュ「フレアソウル！」

フレアソウルで攻撃するラッシュ

相手はリザレだ

リザレ「旋炎斬！」

リザレは普通の状態（リザード）で旋炎斬を繰り出した

フレアソウルの炎の弾は吸収された

なぜなのか？

旋炎斬は炎属性を持っており、同じ炎属性は吸収してしまう

ラッシュ「よく旋炎斬をマスターしたな♪」

ラッシュはリザレにほめる

リザレ「はい！先輩達のおかげです」

リザレは旋炎斬をなんとかマスターした

そこに

アカム「おお！やってるやってる♪」

そこにアカムが現れた

ラッシュ「挑戦者か？」

アカム「ああ♪」

どうやらそうらしい

ラッシュ「そういえば気になるが…お前？人間だな？」

アカム「なっ！？なぜ気づいたんだ！？」

アカムはビックリした

そう！このアカムトルムは元人間なのだ

リオも元人間だが

アカム「まあ俺は元人間だ、人間に戻れるけどな、今はこの姿の方が俺に合うからな」

という元人間のアカム

ラッシュ「そうか、でも他の世界の奴らには内緒にしておくぜ、なにか事情がありそうだしな」

と、優しくするラッシュ

アカム「ホントか！ありがとな♪お前は今日から友達だ♪そこにいるもう一匹もだ♪」

リザレ「えっ！？俺も！？」

なんと強制というかすぐに友達になった

アカム「おっと自己紹介がまだだったな♪俺はエイクだ」

エイクと呼ばれた元人間のアカムトルムが自己紹介した

ラッシュ「よろしくなエイク、俺はバトル部部长のリザードンのラッシュだ♪」

リザレ「リザードのリザレです」

二匹も自己紹介した

その時！？

ラッシュ達から少し離れた所に光が出ていた

光が収まりそこから

フォック「ふうゝなんとか到着♪」

ゴウ「ここが」

ラッシュ「ん？作者？こんなところで何やってんだ？」

ラッシュ達が駆けつけた

フォック「ああ、ラッシュ、実は頼みでここに来たんだ」

ラッシュ「例のオーラを持つポケモンの特訓か？」

フォック「わかってるね」

どうやら事前にラッシュは知っているらしい

ラッシュ「で？こいつがそのオーラを使うポケモンだな？」

ラッシュはゴウを指差す

フォック「そうだよ、とりあえず挨拶して」

ゴウは挨拶した

ゴウ「俺はゴウカザルのゴウ、よろしくな」

フォック「早速だけど、ラッシュはゴウとバトルしてくれない？俺はちよつと事情でここを離れなきゃならないから」

ラッシュ「ああ、気をつけてな作者」

フォックはワープして消えた

ラッシュ「そんなかどうかだな、エイクはレウトとバトルしてくれないか？」

するとエイクは

エイク「いいぜ♪どうせだから他の奴らの見てみたいからな♪それにここにいてもいいだろう？」

と言ってきたエイク

ラッシュ「いいぜ」

OKだ

ゴウ「お前はええっと？」

ラッシュ「リザードンのラッシュだ」

ラッシュは答えた

ゴウ「そうだったな、俺もバトル好きだからな♪」

ゴウはバトルしたくうずうずしている

ラッシュ「あわてるな、ちゃんとバトルしてやるよ」

彼らは移動した

……

別世界

そこは青空が広がり、下も青空だ

そこにフォックが立っていた

フォック「さてと、ゴウ君の事はラッシュに任せて俺はあのガキに
お灸すってからまた世界をまわりますか♪」

そういうと何処かへと飛びだった

バトル63 元人間のモンスターとオーラをまとう者（後書き）

というわけでゴウの旅物語からは主人公のゴウ君、モンスターハンター／＼モンスターの視点／＼から元人間のアカムトルム、エイクに來てもらいました♪

ゴウ「ゴウカザルのゴウだ！」

エイク「エイクだぜ♪」

ラッシュ「ゴウもここでは感想だけでモンハン知らなかったな」↑
たしかに

ゴウ「お、おう（汗）俺何もわからないからな」（汗）」

エイク「そうなのか、でもお前も友達だぜ♪」

ゴウ「っていつお前の友達になったんだよ!？」

エイク「さっき」

ラッシュ「すごい強引な感じだな（汗）」

エイク「ラッシュだってもう友達と認めたぜ♪俺の友達は俺の友達だからな♪」

ラッシュ「ジャ○ア○かよ（汗）」

まあこれにぎやかにはなるね♪

ラッシュ「そういう作者もすごいがな（汗）」

俺はまだまだだよ♪

エイク「早く戦いたいな♪」

ゴウ「俺も♪」

次回になってからね（汗）

リザレ「（すごい強引とかすごくポジティブだな）（汗）エイ
クってすごいな）」

バトル64 レウトVSエイクゝケ〇〇かお前は!?! (前書き)

ラッシュ「なんというタイトルなんだ(汗)」

レウトとエイクの対決だよ、今回はギャグがあるんで(汗)

ラッシュ「なんか嫌な感じがするが(汗)」

ゴウ「一体どんなバトルなんだ?俺も見てみてえな」

わかった、それじゃあ行くよ!バトル64

ゴウ「燃えてきたぜ!!」

バトル64 レウトVSエイク〜ケ○○かお前は!?!〜

こちらはバトル部バトルフィールド

ここには副部長レウトと元人間でアカムトルムのエイクがたっていた

ゴウ「早くバトルしてえな」

ゴウは早くラッシュとバトルするのが待ち遠しくなっていた

ラッシュ「あわてるな、まずはこの二匹のバトルが終わってからな」

ラッシュが冷静に言う

エイク「こっちは準備OKだ!遠慮なく行くぜ!」

対するレウトは

レウト「アカムだろうが負けねえ!」

ホムラ「がんばれよ!レウト!」

リオ「ホムラに恥かかせるなよ!」

ずてん!

レウトはリオのセリフにずっとこけた

レウト「わ、わかってらい!!／／／／」

レウトは赤くなる

エイク「へへっ♪楽しみだな♪」

楽しそうに構えるエイク

ゼルス「バトル開始!!」

今戦いのゴングがきっておとされた

……

さて、レウトの実力を見てみるか、にらみつける

エイクは早速レウトをにらみつけた

レウト「ここはよっと」

レウトは空を飛んで目をそらした

中々やるな、だがこれはどうだ?

エイク「バインドボイス!!」

俺はバインドボイスでレウトの動きを封じようとする

レウト「わぁっ!?!」

レウトは落ちてきた

よっしゃあ!!落ちてきた

エイク「体当たり!!」

俺はレウトに向かって体当たりをする

レウト「やらせるか!龍の波動!」

何っ!?

エイク「ぐあっ!」

いってえゝ効果抜群だ、やるじゃねえか

レウト「続けて龍の怒り!」

青いブレスが俺を襲う

エイク「ぐあっ!」

またダメージを食らっちゃった、だが俺も負けられねえ!

エイク「うおおおおおおおっ!!!」

俺は真っ先にレウトに迫る、龍の怒りを受けながら

レウト「なっ!」

ラッシュ「龍の怒りを受けながら!？」

リオ「せめやがった!？」

ホムラ「あいつ元人間なのにすげえな(汗)」

ハンターラセ「元人間でもこんな力があるなんて」

異世界ラセ「何者なんだよ!？あのモンスター!？」

エイク「うおおおおおおおおお!?!?!?!?!」

さらに早く、距離をつめる

レウト「はやっ!？」

どんどん距離が迫る

レウト「ここは空中回避だ!」

レウトはホバリングして空へと回避した

そこから止まらない勢いでエイクは通過したがその先にはある物が
あった

それは

エイク「おお!芸人魂に火がついたあああああああああ
!?!?!?!バナナの皮は誰にも踏ません!?!」

バナナの皮だった

つるっ

エイク「おわっ！」

ずずーん！

見事に踏んで転んだ

エイク「いてて」

レウト「チャンス！これで決めるぜ！レウスブラスト！！」

レウトは口から炎の弾を大きくしてそれを放った

エイク「ってやばっ！嘆きの咆哮！！」

エイクは咆哮した

炎の弾は咆哮で押し返すがすぐにエイクの元へと迫る

エイク「ぎゃあああああああああああああああああああ
あ！！！！！！！！？」

どかーーーーーん！！！！！！！！！！

大爆発が起こり、煙におおわれる

煙がおさまりそこにいたのは

エイク「バナナの皮最高…ガクッ」

なぜ最高というのかわからないがエイクは倒れた

ゼルス「エイク戦闘不能（汗）レウトの勝ち」

レウト「よっしゃあああああああああ……！！！！！！！！！！」

レウトは勝利した

すぐにエイクに駆け寄る

レウト「大丈夫か？」

エイクは起き上がり

エイク「ああ、大丈夫だ♪楽しかったぜ♪」

こうして二匹の戦いが終わり、次はゴウとラッシュの対決になった

だがこの戦いでゴウは

ある事を知る

バトル64 レウトVSエイク〜ケ〇〇かお前は!?!?〜 (後書き)

ホムラ「なぜバナナ(汗)」

エイク「だって俺の芸人魂に火がついてきたんだ!」

ラッシュ「まさかのバナナの皮か(汗)」

エイクの芸人魂に火をつけました♪

レウト「でも今度はバナナの皮なしで戦おうぜ(汗)」

ラッシュ「そうだな(汗)」

バトル65 ラッシュVSゴウく異変く(前書き)

ラッシュ「ゴウとの対決だな」

ついにカントー御三家VSシンオウ御三家の対決だよ

ゴウ「そういえばそうだったな」

うん、それじゃあバトル65

ゴウ「燃えるぜ!!」

バトル65 ラッシュVSゴウく異変く

バトルフィールドにはラッシュとゴウが立つ

ゼルス「それじゃ準備はいいか二人とも」

ラッシュ「いつでもOKです！」

ゴウ「俺もだ！」

二人とも準備OKだ

ゼルス「それじゃ、バトル開始！」

戦いのゴングがきつておとされた

ゴウ「まずはマッハパンチ！」

ゴウは先制できる技、マッハパンチを繰り出した

パシッ

ゴウ「なっ!？」

なんとラッシュは拳を片手で受け止めた

……

くっ!?! 中々やる、さすが部長ってことはあるな

俺はその場から離れた

ラッシュ「フレアソウル!」

ラッシュは炎の塊?を数発飛ばしてきた

ゴウ「おっと」

俺はそれをなんなくかわした

ゴウ「なっ!?!」

もう俺に近づいたのか!?!

ラッシュ「ドラゴンラッシュ!」

ラッシュの拳が青い炎に包まれていた

ラッシュ「オラオラオラオラオラ!」

連続パンチを受けて俺はダメージを受けた

うっ…なんだ…意識が…

……

ラッシュ「ん?」

ゴウの周りに白いオーラが出ていた

俺はゴウのそばから離れた

これが作者が言っていたブレイクオーラだな

ゴウ「ぎやはははははは！！」

ゴウの様子がおかしい

やはりあのオーラの影響か

やっかいなことになったな

するとゴウが動いた

ラッシュ「フレアソウル！」

ゴウにフレアソウルを放ったがそれを軽々とかわした

あのオーラでもやるなく、でもまだあのオーラの制御をしてないな、
あいつの心がそこまで弱かったってことだな

……

リザレ「先輩」

ホムラ「大丈夫なのか！？」

ルガー「今はラッシュを信じよう」

みんなこの戦いで戸惑う

それはゴウの今の状態だ

今のゴウはブレイクオーラによって狂気へと満ちていた

•
•
•
•
•
•

「なら俺も全力で行かせてもらうぜゴウ！」

ラッシュが迫る

ゴウ「ぎやはははははは！」

狂気になりながら攻めるゴウ

-
-
-
-
-
-

ゴウ「こころは…」

ゴウは何処か暗い空間にいた

すると暗い空間が一瞬で明るくなり、青空広がる世界へと変わった

ゴウ「ここは一体？」

するとそこから

ゴウ「!?!」

何処かから炎がゴウを襲った

ゴウは炎を避けた

ゴウ「誰だ!」

するとそこから

ゴウ「なっ!?!」

ゴウは驚いていた

なぜなのか、それは…

ゴウ「俺…!」

もう一人のゴウだった

だがもう一人のゴウは白いオーラに包まれていた

ブレイクオーラだ

そしてそこから何かが映し出す

ゴウ「!?!? ラッシュ!」

それはブレイクオーラをまとっているゴウとラッシュが戦っていた

ゴウ「俺はラッシュまで巻き込んだってことか…」

ゴウは落ち込んでしまった

白ゴウ「ぎゃははははは!!」

もう一人のゴウは狂気に笑っていた

まるで殺しあうかのように

ゴウ「…俺は…どうすれば」

するとゴウのネックレスから声が

ハピネス『ゴウよ、落ち込むな』

ハピネスだ

ゴウ「そういわれても」

するとハピネスは

ハピネス『これはお前の心の戦いだろう、このままもう一人のゴウに体をのっとられるとお前の心までブレイクオーラにのっとられる、なら戦うぞ! 我がついている、だから』

ハピネスの言葉でゴウは

ゴウ「…わかった…やってやるよ! 俺は…絶対にみんなを…守る! もう誰にも傷つけねえ!!」

ゴウの頭の炎が燃え上がった

白ゴウ「ぎゃはははははははははは!!」

白ゴウはゴウに迫る

ハピネス『行くぞ!ゴウ!』

ゴウ「行くぜ!」

バトル65 ラッシュVSゴウく異変く(後書き)

ラッシュ「こんなことになるとはな」

次回はそれぞれの戦いを交互になるかな

ラッシュ「そうなるな」

ゴウ君ははたして!?

バトル66 ラッシュVS狂気ゴウ&ゴウVS白ゴウく心の試練く(前書き)

ここからは互いのバトルになります

ラッシュ「ゴウ！俺は止めるからな！」

それじゃあバトル66

ラッシュ「覚悟しとけよ！」

バトル66 ラッシュVS狂気ゴウ&ゴウVS白ゴウく心の試練く

現実

ゴウ「ぎやはははははは！」

ゴウは今でもブレイクオーラで狂気のままだ

やるしかないな

ラッシュ「フレアソウル！」

俺はフレアソウルを吐いた

ゴウは俺の攻撃をかわす

かなりやるようだな

やはりあのオーラがやかいだな

なんとかしないとな

オーラを変えることはできないな

そう考えてたらゴウが迫ってきやがった

ラッシュ「守る！」

ゴウ「ぐあっ!？」

俺は腹に強烈なパンチが炸裂して吹っ飛んでしまった

ゴウ「ぐはっ!？」

見えない壁に激突して倒れた

ゴウ「くそっ!」

俺はなんとか立ち上がる

ゴウ「いてえ」

腹を押さえてもう一人の俺に向かっていった

……

ラッシュ「れっかえん烈火炎!!」

俺は新技のれっかえんを吐いた

烈火炎は火炎放射を強化した技だ

しかも広範囲で全体効果がある技だ

ゴウはなんとか離れた

ラッシュ「あいつのオーラは一体なんなんだよ!」

これがブレイクオーラの力ってことか！

ゴウ「ぎゃはははははは！！」

ゴウがなにか技を繰り出してきた

マッハパンチか

ラッシュ「なっ！？」

インファイト！？

ラッシュ「くっ！」

俺はインファイトを見切ってかわした

マッハパンチとインファイトの組み合わせた技か

……

ゴウ「くそっ！」

俺はもう一人の俺の攻撃をかわしつつける

悔しさがこみ上げてくる

その時もう一人の俺のオーラの色が変わった

ゴウ「なんだ…」

それは俺が夢で見た黒いオーラだ

まるで俺の心の闇と同化してるようだ

ゴウ「まさか!？」

……

ラッシュ「セイントブレス!!」

俺はセイントブレスでゴウを攻撃した

これならゴウは食らうだろう

俺の予想通りゴウは食らった

だが

ゴウ「ぎゃははははははは!！」

まだ立ち上がる

ラッシュ「くそっ!」

悔しがる俺

するとゴウのオーラに変化が

ラッシュ「オーラが黒くなりやがった」

ゴウのオーラは黒くなった

ラッシュ「これは!？」

あのオーラ、闇がうずまいてるぜ、ゴウ、お前は心の闇にのっつけられるのか!このままじゃゴウがやばい!

ラッシュ「ゴウ!!」

俺はゴウの名を叫んでゴウに向かって攻撃をしかける

……

白ゴウ「ぎやははははははは!」

もう一人の俺の頭の炎が黒くなる

悪夢がよみがえる

ゴウ「くそっ!」

俺はなぜか泣いていた

悔しい、それだけが俺を苦しめていた

白ゴウ「ぎやはははははは!」

ゴウ 「!?!?があつ!?!?」

俺はもう一人の俺のマツハフアイトを食らった

さらに

白ゴウ 「ぎやははははははははははは！！！」

ゴウ「ぐあっ！？がつ！？」

さらに連続でパンチとキックが俺に襲い掛かる

そして

ゴウ「ぐあああああああああああああつ！！！！！！！！！！」

俺は真下に落とされ倒れた

うごかねえ

俺はボロボロになっていた

体がいうことをきいてくれねえ

白ゴウ「ぎやははははははははははは！」

もう一人の俺が俺に近づいてくる

ここまでなのか……チクシ ヽオ……チクシ ヽオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!!!!!!!!

……

ラッシュ「ぐあっ!？」

俺は地面に叩き落された

くそっ!

ゴウが俺に近づく

やめろ!ゴウ!

声が…出ねえ

やばい…ゴウ

このままじゃ俺は…

……

一步一步ゴウに近づく白ゴウ

白ゴウ「ぎやははははははははははは!」

チクシヨオ…俺は…また誰かを傷つけてしまった

俺はこれ以上

仲間を

傷つけたくない

みんな…ごめんな…

俺の心が弱いせいか

みんなを傷つけてしまって

俺は悔しかった

憎かった

だけどそのせいで俺は大切な仲間達を傷つけてしまった

みんな…ごめんな…

俺の目から涙があふれた

その時

ハピネス『あきらめるな!』

!?

声が聞こえた

ハピネスだ

ハピネス『立て！ゴウ！また自分の命を犠牲にするつもりか！お前にはまだやるべきことがある！我はいつでもお前のそばにいる！だから立て！仲間が待つ場所へ！』

…そうだ

俺はまだ

…

ゴウ「負けられねえ！！！！！」

すると俺の体が光に包み込んだ

ゴウ「なんだ…」

光は俺のオーラへと変わった

温かけえ

俺は立ち上がった

白ゴウ「ぎゃは！？」

すると俺の体は元の状態に戻っていた

ゴウ「なんだ…一体」

俺は光のオーラに包み込んでいた

……

ここまでなのか

俺は覚悟を決めたその時！

???? 「エナジィグラビティー！！」

緑のエネルギーが重力を帯びてゴウの動きを封じた

ゴウは重力のしたじきになった

ラッシュ 「ゼルスさん！？」

ゼルス 「どうしたラッシュ、お前はここにくたばるのか？」

ラッシュ 「すみません、俺が油断してしまって」

俺はゼルスさんに謝った

ゼルス 「謝ることはない、誰にでも油断はある」

すると重力を帯びたエネルギーはなににかによって消された

ゴウ 「ぎやははははははははは！！」

ゴウだ

あまりダメージは受けていない様子だ

ゼルス「ここまでやるとはな…かなりやつかいなオーラだ」

ゴウ「ぎゃはははははははは！！」

ゴウが二匹に迫る！？

レウト「龍の波動!!」

「ホムラ ノヴァブレイド!!」

「ドラゴニックブレス!!」

ラグ「ウォーターソリューション!!」

リザレ「フレイム9!!」

なんと5匹が助けに入る

「先輩大丈夫ですか！」

リザレがラツシュに駆け寄る

「あ、ラッシュ、なんとかな」

リザレ「今回復します、ヒールフレイムサークル&キュアフレイム
ウィンド」

ラッシュ達の周りに星のサークルが現れた

さらにラッシュの周りに炎の風が発生した

おかげでラッシュの傷はみるみるうちにふせがれる

ラッシュ「ありがとなりザレ」

ラッシュはリザレの頭をなでた

リザレ「先輩にはお世話になってますのでこれくらいはします」

リザレはゴウに向かう

「ゴウーぎやははははははははははは！」

ゴウがリザレに迫る

リザレ「ラグ！」

ラグ「ウォーターソリューション!!」

ラグは水弾を連発してきた

リザレはそれを読んでたかのように避ける

リザレ「チェンジフォーゼ！ジュカイン！」

リザレはそう叫ぶと体に変化していった

姿がジュカインへと変化した

二匹が駆けつけた

サクラ「ホントにあんたはもう！」

ラッシュ「いてててやめろよ」

ラッシュはサクラにほほをつねられた

そこから

ルガー「ソニックニードル！」

ブレイ「サマードライブ！」

ルガーとブレイが参戦

さらに

モモ「同じ種族でも止めてやるぜ！兄弟！オーガトリガー！！！」

モモも参戦

レイス「助けに来ました！いわなだれ！」

レイスも

ラッシュ「みんな…」

テト「仲間だろ？俺達」

エイガ「俺達も仲間です！」

異世界ラセ「フラッド！ そうだ！ 俺達は！」

「龍の波動！もう！」

ハンターラセ「風月乱舞！仲間だ！」

次々と仲間が出てくる

ラッシュ「みんな…よし！ゴウを元に戻すぞ！！」

[illegible]

•
•
•
•
•
•

ゴウ「俺は…みんなを…守る!!」

ゴウは光のオーラをまとい白ゴウに接近した

•
•
•
•
•
•

フオック「ついに君はあのオーラを身につけたね」

その頃フオックは鏡でラッシュ達の様子を見ていた

フォック「ゴウ君、君はセイントオーラを身につけたんだよ」

そういうと何処かへ消えた

バトル66 ラッシュVS狂気ゴウ&ゴウVS白ゴウ（心の試練）（後書き）

ラッシュ「もうオールスターじゃねえか（汗）」

まあこのままだとやばいから参戦したけどね（汗）

ラッシュ「次回で決着か？」

うん、そしてゴウ君の新たなオーラ、セイントオーラについてもね」

バトル67 バトル部レギュラーメンバーVS狂気ゴウ&ゴウVS白ゴウく光

ついに決着です！

ラッシュ「全力で行くぜ！」

レウト「俺達の絆でゴウの目を覚まさせてやるぜ！」

そんじゃバトル67

ラッシュ・レウト「行きやがれ！！！」

バトル67 バトル部レギュラーメンバーVS狂気ゴウ&ゴウVS白ゴウ／光

現実

ルング「ドラゴニックブレス!!」

ゼルス「エナジーブレイク!!」

ルングは青いブレスは吐き

ゼルスは緑のエネルギーを放つ、エネルギーは地面を進んでゴウに向かっていく

ゴウ「ぎゃはははははは!!」

ゴウは二匹の技をジャンプしてかわす

そこから

リザレ「フレイム9!!」

ラグ「アクアスター!!」

リザレは九発の炎の弾を放ち、ラグは正面から水弾を吐き、水弾は爆発した

ゴウ「ぎゃは!?!」

かすかだがゴウには少し当たった

だがゴウはそのまま落ちてマッハパンチの構えをしていた

その時

エイク「オラァ！」

ゴウ「!？」

エイクが地面から飛び出してきた

ラッシュ「エイク!？」

エイク「俺を忘れるなよ!ソニックブラスト!!」

エイクは風のブレスを吐いた、アカムトルムの最強技ソニックブラスト、この威力でゴウは飛ばされた

エイク「おい!誰か!バナナの皮ないか？」

エイクはバナナの皮を要求

ラッシュ「こんなときにバナナっておい!？」

ラッシュはつつこむ

レウト「バナナの皮だ!」

なんとレウトはバナナの皮を持っていた、それをエイクの前に投げた

すると

「うおおおおおおお!!!!!!」

いっしょにバナナの皮に向かってありえないほどの速さでエイクはバナナの皮に向かった

エイク「行くぞ！ 必殺！！ バナナアタアアアアアツク！！！」

エイクはバナナの皮を利用してゴウに向かってすべっていき

ゴツ！

ゴウ「ガッ!？」

ゴウにぶつかっていった

なんという芸人魂から生まれた技なんだ（汗）

「ホムラ 龍牙天昇！！」

ホームラは太刀を振り回しつつ上昇、ゴウは太刀に巻き込む吹き飛ばされた

そこから

カクサス「助太刀するぞ！滅碎瞬牙撃！！」

カクサスが助太刀で助けにきた

ラッシュ「カクサス!？」

カクサス「ここでライバルが倒れては俺の騎士道にはんする、仲間
でやるのは嫌だがゴウを助けるのなら力を貸すぞ!」

カクサスがゴウに迫る

……

精神

白ゴウ「ガッ!？」

白ゴウはおされていた

ゴウ「行くぜ! シューティングフレイム!」

ゴウは光の炎を吐いた

炎は綺麗に輝いていた

白ゴウ「ぎゃは!？」

白ゴウは炎を浴びた

白ゴウ「ぎやはははははは!!」

白ゴウは体勢を立て直しなおも攻める

白ゴウ「ぎやははははははは!!」

白ゴウはマッハファイトを繰り出した

ゴウ「ほっ!はっ!」

ゴウはマッハファイトを軽々とかわしていく

ゴウ「俺の技は見抜いている!そう簡単にやられるか!ブレイバー
アッパー!!」

ゴウは光をまとった拳で白ゴウにアッパーを繰り出した

白ゴウ「がっ!?!」

白ゴウは上空に飛ばされる

そこからゴウがジャンプして接近してきた

ゴウ「ルーンパンチ!!」

ゴウの拳が青い光をまとい、白ゴウを殴る

白ゴウは真下に落とされた

白ゴウ「ぎゃは!?!」

ゴウ「いける！」

ゴウは接近するが

白ゴウ「ぎやははははははははははは！……！！！」

ゴウ「うわっ!？」

白ゴウの黒いオーラ、ダークオーラはさらに増していった

ゴウ「オーラが強くなりやがった!？」

白ゴウ 「ぎやはははははははははは！」

白ゴウが素早く迫る

ゴウ「やばっ!？」

そこから白ゴウは

白ゴウ「ぎやははははははははははは！！！！！」

またマツハフアイトだ

ゴウ「ぐあっ!？」

ゴウは食らうが

ボンツ！

なんとゴウ自体が消えてしまった

白ゴウ「ぎゃは!?」

ゴウ「俺はここだ!!」

なんと上空にいた

しかも白ゴウの真上だ

ゴウ「セイントシュート!!」

ゴウのまとう光のオーラがさらに増す

白ゴウ「がっ!?!」

白ゴウはゴウの突進を食らってしまった

だがゴウの快進撃は止まらない

白ゴウ「ぎゃははははは!!!!!!!!」

白ゴウは暴走する、破壊本能が動いてしまった

ゴウ「そろそろトドメささねえと」

ゴウの手から光が集まりだす

……

現実

ゴウ「がっ!？」

ゴウの体はかなりボロボロだ

ラッシュ「ゴウ…」

ラッシュが立ち上がる

リザレ「先輩!？まだ立っては!？」

リザレは元のリザードに戻りラッシュを心配してかける

ラッシュ「平気だ、お前の回復技でなんとか大丈夫だ、心配すんな」

リザレ「先輩…」

リザレはこれ以上声をかけなかった

ラッシュ「みんな!聞いてくれ!」

みんなの視線がラッシュに向ける

ラッシュ「ゴウへのトドメは俺がやる!みんな離れてくれ!」

ラッシュ「行くぜゴウ!! 龍炎!!」

ラッシュの最強技龍炎がゴウを飲み込んでいった

……

精神

白ゴウ「ぎゃはははははははははは……!!!!!!!!!!」

白ゴウが接近してくる

ゴウ「これで…決めてやる!!」

ゴウの手に集まった光がさらに増していく、そして

ゴウ「これで終わりだ!! セイント…ブラスタアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!!!!!」

ゴウの手に集まった光は一直線に白ゴウを飲み込んだ

爆発が起こり煙がまきおこる、煙がおさまるところにはボロボロになった白ゴウがいた、白ゴウは同時に光の粒子となって消えていった

ゴウ「終わったんだな…」

同時にゴウは気を失った

……

現実

ラッシュの最強技龍炎に飲み込まれたゴウは

光に包み込んでいった

炎は爆発して煙がふいた

ラッシュ「ゴウ!!」

ラッシュは叫んだ

煙はおさまりそこには

ゴウ「ここは…」

なんとゴウは正気を取り戻した

ラッシュ「ゴウ!!」

ラッシュはゴウに駆け寄った

ラッシュ「ゴウ!無事だったか!」

ゴウ「ああ、なんとか…俺は…闇の心にかっ…た…ん…」

バタッ

ゴウはそのまま倒れた

ラッシュ「ゴウ！」

みんなが駆け寄る

……

ゴウ「いたたたた!!? もっと優しくやってくれよ!?(泣)」

リザレ「無理するからですよ、こっちの身にもなってくださいよ！」

ゴウ「そう…だったな(汗)」

ゴウの体はまるでミイラのようにになっていた

あんなに戦ったのだそりゃこんなにもなる(汗)

ラッシュ「まあ無事でよかったしな♪それにセイントオーラまで使えるなら大丈夫だな」

あの後ラッシュ達は回復のため学校を休んでいた、一応学校自体も休みにしてもらった、理由はゼウス校長がそれを予知していたためだそうだ(汗)ちなみにラッシュの家だ

ラッシュ「もうダークオーラはなくなったけどな、でもこれからが
んばっていいこうなゴウ♪」

ゴウ「おう！」

二匹は誓いの握手をしたが

[illegible]

ラグ「あらら（汗）」

ゴウの断末魔がラッシュの家に響いた

バトル67 バトル部レギュラーメンバーVS狂気ゴウ&ゴウVS白ゴウ／光を

ゴウ「やっと終わった」(泣)

おつかれさま♪

「まじやばかったからな（汗）」

まあこれでブレイクオーラはまだ操ることは可能にはなるけどまだまだだよ

ゴウ「えっ!?!あれじゃあダメなのか!?!」

そう簡単に行くと思うの？

「作者はなにを考えているのか？」

しいていうと今のはセイントオーラを習得した事になってし、ブレイクオーラの狂気を取り除いただけだよ

ゴウ「何じゃそりゃあああああああああああああああああ！
！！！！！！！！」

ラッシュ「そんじゃ次回はブレイクオーラの制御になるのか？」

それもあるけど、一応どうなのかはわからないから待ってて

「わかった」

バトル68 ゴウの修行開始!! 恋人を追ってきた彼女(前書き)

ゴウ「ついに修行開始だな！」

うん、そしてまたもやコラボキャラが来ます

ラッシュ「またか、まあ作者のことだ、そんじや行くか！」

バトル68

ラッシュ・ゴウ「熱いぜ!!！」

バトル68 ゴウの修行開始!! 恋人を追ってきた彼女

ゴウのオーラ暴走から一ヶ月

今日も平和な毎日が続く

今日は休みで部室には誰もいない

ゴウはあの後なんとか怪我をかんちして、ついに本格的な修行の開始となった

[illegible]

ゴウは滝に打たれていた

ラッシュ「お前の精神を鍛えないと意味がない、我慢しろよ」

[illegible]

それでも滝に打たれ続ける

ゼルス「モモがやった方法なら効果がありそうだからな♪」

何♪とつけてるんですかゼルスさん（汗）

モモ「これは本当にやばかったぜ（汗）がんばれよ兄弟（汗）」

同じゴウカザルのモモにも言われる

ゴウ「ふざけるなああああああああああああああ
ああああああ!!!?!?!?!?」

ゴウの叫びが滝に響く

•
•
•
•
•
•

サクラ 「それにしてもあれから一ヶ月ね」

レイラ「アイリスを特訓してもうね、けどあまりうまくいつてない感じだね（汗）」

サクラとレイラは買い物に行ってその帰りだった

サクラ「アイリスの性格、アレをなんとかしないと」

レイラ「まあ料理はうまくなってるし、剣も少しは腕がたつてきてるしね」

二匹が歩いていると

「くすん（泣）」

「あら？ 誰か泣いているわ」

レイラ「ホントだわ」

二匹は泣いていた者をみつける

黒く長い髪をしていて女性だ

二匹はその女性にかけよる

サクラ「ねえ？どうしたの？」

????「えっ!？」

長い髪の女性は驚く

レイラ「泣いてたけど？」

すると落ち着いたのか長い髪の女性は言う

????「実は私、探してる人がいるんだけど、この世界に来てる
みたいで心配なの」

どうやら誰かを探しているようだ

サクラ「どんな人？」

サクラが聞く

????「一緒にいる私と同じ女の子と一緒に行ったの、ちなみに
男よ」

どうやら探し人は男らしい

レイラ「とりあえずここではなんなし、サクラの家に行きましょう」

サクラ「そうね、そういえばあなた名前は？」

長い髪の女性は名前を言った

????「私はナデシコっていうの、元ディアブロス亜種よ」

サクラ「へえ、ディアブロスね…何処かで聞いたような？」

とりあえず三人（二匹と一人）はサクラの家へ向かった

…

ゴウ「ゼエゼエ」

ゴウは大の字に倒れていた

ゼルス「がんばったな」

ゴウ「マジきついぜ」

ゴウはかなり疲れていた

体もボロボロになっていた

ゼルス「ゴウの場合は精神に異常がある、セイントオーラは使いこなせることができるがブレイクオーラやダークオーラなどは正気でも制御できるようにしなければならぬ、そのためにはゴウの精神を鍛える必要があるからな」

ゼルスによると

ゴウは辛い過去や心に闇がある、だが今ゴウの闇である白ゴウは倒したため心の闇はほとんど吹き飛んだためブレイクオーラは数秒にしか維持できない

ゴウはブレイクオーラ自体を発動してみたが正気にはなるがオーラ自体の維持が制御できていない、そのためブレイクオーラの維持とさらにダークオーラの維持の二つのオーラを維持しなければならない

そこでゼルスはカクサスと協力してゴウの特訓メニューを考えた、ゴウは強いが頭などを使う頭脳面は比較的に低い、ゴウの勉強嫌いとかを何とかするためにゼルスとカクサスは考えに考えた結果、滝に打たれることなどゴウの精神を鍛えるための特訓になったのだ

「とりあえず次はめいそう特訓だな」

[illegible]

ハンターラセ「そう叫ぶな、僕だってやってるんだから」

リオ「うんうん」

前回、ラセの闇が出てしまったためラセも結局参加していた

異世界ラセ「なんで俺まで（泣）」

なぜか異世界ラセまで参加していた

ゼルス「お前は魔力が高いが危険がある、魔力の制御しないとやばいからな」

どうやら魔力の危険があるため魔力制御の特訓らしい

異世界ラセ「だって俺別にそんな風じゃないし」

そう反論するが

ラッシュ「それがお前の場合は魔力発動になると顔が怖くなって無意識になるんだ」

異世界ラセ「俺意識あるんですけど（泣）」

そういうが

ゼルス「意識はあるが魔法を唱える集中力はあるがこのままだと人とかを殺す適度までいくぞ？」

異世界ラセ「マジデスカ（泣）」

異世界ラセは涙目になりながら特訓の続きをする

エイク「うおおおおおおおおお！……！……！……！」

こちら元人間のアカムトルム、エイクはバナナの皮をすべりまくっている

ラッシュ「ちょっ!?! エイク!?!」

エイク「いてて、なんだよ♪」

ゼルス「真面目にやれ(怒)」

ゴチン!!

エイク「いてっ!?!」

ゼルスにげんこつを食らわされたエイク、芸人魂やってる場合じゃないですよエイクさん(汗)

ルング「集中しろよ」

ラグ「僕は何回かやってるからなれてきちゃった」

ルングもフールングのリミッターの制御

ラグは慣れたのか滝に打たれていた、そりゃ水タイプだから(汗)

ホムラ「ほっ!はっ!」

ホムラは太刀の特訓を

リザレ「はあはあ」

リザレは体力作りでランニング

リザレ「先輩、次は何すればいいですか？」

リザレはランニングを終えて戻ってきた

ラッシュ「次は技の特訓だ、レウト！頼んだ！」

レウト「わかった！」

リザレとレウトは今現在いる滝から近いバトルフィールドに向かった

ちなみにここは学園の近くにある学校の裏庭、そこには特訓用のバトルフィールドがあり、滝までかねそなえている

さすが学園（汗）

……

サクラ「とりあえずお茶よ」

ナデシコ「ありがとう」

一方サクラたちは、サクラの家でくつろいでいた

サクラ「それじゃあ私達の紹介ね、あたしはリザードンのサクラ」

レイラ「私はリオレイアのレイラよ」

二匹は紹介した

ナデシコ「サクラにレイラね、よろしくね」

なんだがわきあいあいだ

サクラ「ねえ？ナデシコの探してる相手ってどんな人？」

サクラがナデシコに相手のことについて質問した

ナデシコ「私の彼はいつもかっこよくて強いので、ラージャンに襲われた私を助けてくれてね」

サクラ「ラージャンに襲われたところを助けてくれるなんて♪すごいじゃないの♪ナデシコの彼氏♪」

レイラ「相当イケメンだと思うわね♪」

恋に盛り上がる雌龍^{めすりゅう}二匹（汗）

サクラ「ねえ？そのイケメンの名前は？」

サクラが名前を聞いてきた

するとナデシコが答えた

ナデシコ「名前ね…名前はカクサスよ」

サクラ・レイラ「えっ!？」

二匹は固まった

ナデシコ「あの〜？私何か悪いこと言った？」

とりあえず二匹は首をふるふるとふるった

サクラ「カクサス！？」

レイラ「いるわよ！」

ナデシコ「えっ！？」

もはや3人は驚く

ナデシコ「それでカクサスは何処に！」

ナデシコはカクサスの場所を二匹に言う

サクラ「カクサスなら学校の裏庭にいるわ、案内するわ」

ナデシコ「ありがとうサクラ、レイラ」

3人は学校に向かう

バトル68 ゴウの修行開始!! 恋人を追ってきた彼女(後書き)

今回はさらにモンスターハンター狩人とモンスターの奇妙な話から
ナデシコちゃんが来てくれました

ナデシコ「ナデシコです」

ついにカクサスに会いに行くよ♪

ナデシコ「早く会いたいですよ!」

はいはい、ちゃんと次回であわせてあげるよ

サクラ「楽しみね♪」↑恋のキューピット1

レイラ「私達がついてるわよ♪」↑恋のキューピット2

バトル69 やっと会えた(前書き)

サクラ「さて行くわよ♪」

レイラ「バトル69」

ナデシコ「カクサス…」

なぜに!?(泣)

バトル69 やっと会えた

ゴウ「ぜえぜえ（泣）」

ゴウは大の字に倒れていた

しかも涙目だ（汗）

ラッシュ「おい、生きてるか？」

ゴウ「生きてるぜ」（泣）」

とりあえず大丈夫のようだ

カクサス「ここに来てから一ヶ月か…今頃スバル達はどうしているんだろうか」

ラッシュ「そういやあカクサスとアイリスは別の世界の人間と住んでるんだったな」

ラッシュが声を掛ける

カクサス「ああ、俺も色々大変なんだよな、ものすごく嫌なブラコンな妹や俺を好きになった二人がいるんだよな」

レウト「それって彼女か？」

レウトが質問する

カクサス「まあ彼女だが二人が俺が好きだから色々そんな感じになってるんだ」

ラッシュ「苦勞してるんだなカクサス（汗）」

苦勞人なカクサス

カクサス「だが俺はこの世界でラッシュと戦えたことがよかったかな」

カクサスはラッシュといういい相手とめぐり合ったことがよかった
ラッシュ「そうだな」

そんな時

ナデシコ「カクサス!!」

カクサス「ナデシコ!？」

なんとナデシコが駆け出してきた

サクラ「待ってよナデシコ!!」

レイラ「私達を忘れないでよ!!」

そこにサクラとレイラが駆けつける

ゼルス「二人か、どうしたんだ？」

ホムラ「なんかあわててたが？」

二匹はハアハアと疲れた表情をしていた

ナデシコ「やっと会えた…もう私を一人にしないで（泣）」

カクサス「よしよし、大丈夫だ、よくここまで来たな」

そんな様子を見ていたみんなは

ルング「彼女か…」

ラグ「仲がいいね♪」

ホムラ「そうだな」

リザレ「ホントだね」

異世界ラセ「あの怖い少女を思い出すな（汗）」

ハンターラセ「ああ」

リオ「そうだな」

エイク「俺もあいつを思い出すな」

ゴウ「なんかよくわからないがいい感じなんだな」

こうしてなんとか再会できたナデシコ

この二人の幸せは愛の形なのだろう

バトル69 やっと会えた(後書き)

やっと再会できてよかったね

ナデシコ「ホントよかった」

カクサス「俺も驚いてはいるがな」

でもいいと思うよ？お二人はなんかベストカップルな感じだし♪

カクサス「そ、そうか(汗)」

ナデシコ「／／／／」

バトル70 新たな入部希望者（前書き）

久しぶりのバトル部だよ♪

ラッシュ「大丈夫か？作者？」

大丈夫

ホムラ「よかったです師匠♪／／／／」↑抱きついている

はいはい、今回は新キャラの登場だよ、今回はフッフ（黒）

ラッシュ「なんかよからぬことやりそうだな（汗）」

それじゃあバトル70

ホムラ「／／／／」

ラッシュ「タイトルコール（汗）しゃあね～どうぞ」

バトル70 新たな入部希望者

穏やかな春はもうすぐ夏へと変わる、今は5月の終わりだ、バトル部も入部する人も増え、ますますのことだ

そんなある日のこと

ラッシュ「今日は暑いから俺達にとっては大丈夫だな」

ゴウ「うへーやっとテスト終わった」

そう、バトル部みんなはテストが終わって部活に入ろうとしていた、今日は短縮のためあまり時間がない、後は個別に特訓するのみだ

ホムラ「まあこんな暑いときが一番だな」

レウト「たしかにな」

リオ「まあ暑いけどな（汗）」

レウス3兄弟がそういう

ちなみにハンターラセと一緒に住んでいる、もちろんレウトの家だ

ハンターラセ「やけにテンションが高いな…」

冷静にいうハンターラセ

異世界ラセ「うへーあちい」

異世界のラセはうちわを仰ぎながら歩いていた

サクラ「まあ紫外線はお肌の天敵だしね」

レイラ「そうね」

サクラとレイラは日傘をさして来た

ラッシュ「そんじゃあ部活を始めますか」

部活が始まったそんな時

????「あゝここがバトル部って所なの？」

ラッシュ「ん？入部希望者か？」

????「はい」

入部希望してきたのは一人の人間だ

髪は銀髪のみドルヘアの少女だ

サクラ「あらアオイじゃない♪」

サクラがアオイと呼ばれた少女に声を掛ける

アオイ「サクラにレイラ！あなたたちもバトル部に入ってたの！」

アオイと呼ばれた少女はサクラとレイラのもとに駆け寄る

レイラ「そうよ♪元リオレイアのあなたが来るなんて」

どうやらアオイと呼ばれた少女は元リオレイアだった

そんな様子を見ていた他のメンバーは

レウト「レイアの擬人化か」

リオ「中々だな」

ホムラ「……」

ホムラはそれを見ていてじっとしていた

そんなとき

リザレ「どうしたの？ホムラ？」

リザレが声を掛ける

ホムラ「なんでもねえよ」

ホムラはそのまま立ち去った

レウト「どうしたんだ？ホムラ？」

リオ「あいつさっきからあの子のこと見てたが」

リザレ「なんか少し赤い感じだった」

その後から

カクサス「ん？シロン？なぜこんなところに？」

カクサスが来た

そこからカクサスの彼女であるナデシコとさらにアイリスまで来た

ナデシコ「おかしいな、シロンはあっちにいるはず？」

アイリス「こんなところにいるわけがないよ」

そういう三人

ゴウ「けど名前違うみたいだぜ」

そこからゴウが話にはいる

カクサス「ゴウ」

ゴウ「名前はアオイっていうんだ」

アイリス「けどシロンに似ているね」

どうやらカクサス達には同じ人物がいるみたいだ

カクサス「ヒントに瓜二つだな」

ナデシコ「それより準備しようカクサス♪」

カクサス「あ、ああ」

二人は準備をする

……

バトル部部室の裏、ホムラはなぜか顔が赤くなっていた

ホムラ「（あの女…なんだ…このドキドキ感は何?）」

一体彼になにが!?

それは次回に続く

バトル70 新たな入部希望者（後書き）

今回は短くなったけど、新キャラのアオイちゃんだよ！

アオイ「初めまして、アオイです」

アオイちゃんは三月語さんの方からシロンと同じリオレイアの擬人化キャラです

アオイ「私と瓜二つなんだね」

うん、まあこちらから許可が得たため出すことになったけどね

アオイ「そういえば集会所の看板娘といわれたのですが？」

うーん、それはまた後ほどね

アオイ「はい」

次回はホムラ君が！？

アオイ「あの私を見ていた男の人？」

うん、でもそのうちわかるから

バトル71 ホムラの恋(前書き)

ラッシュ「作者？ホムラがいないんだが？」

え？ホムラ君なら悩みがあつて壁に頭を打ち付けて頭ドラム状態になつてるよ(汗)

ガンガンガンガン！！↑ホムラが壁に頭を打ち付けている

ラッシュ「壊れたなこりゃ(汗)」

とりあえず落ち着かせないとね(汗) アルテマ

ホムラ「ぎゃあああああああああああ……！！！！！！！！？」
↑気絶

ラッシュ「そんじゃバトル71どうぞ(汗)」

バトル71 ホムラの恋

ホムラ「（この胸の苦しさはなんだ…あの女を見てから急に胸がドキドキする…）」

ホムラは胸のドキドキが気になって特訓に集中できない

そんな様子を彼らは見ていた

リザレ「ねえ先輩？ホムラの様子が変わんですが？熱とかでもあるんですか？」

リザレはラッシュに質問する、リザレにはまだ恋というものは知らないらしく本人は熱でもあるんじゃないかと思っている

ラッシュ「ああそういうことか…だからあいつアオイを見たときに赤くなってたからな」

リザレ「……？」

リザレは頭にハテナがつく

サクラ「ねえ？これってもしかして」

レイラ「そうに決まってるわ！ならいいこと考えたわ、サクラ！」

サクラ「もちろんよ♪」

こちらは何か企んでいるもよう（汗）

……

ガル「そんじゃ今日はここまでだ！明日とあさってはゆっくり体を休め！以上だ！」

全員『おつかれさまでした！！！！』

時間が短縮のため部活が早く終わった、みんな帰ろうとしたとき

サクラ「アオイ悪いけど私達用があるから誰かと帰ってくれないかしら？レイラも用があるみたいだから」

サクラは用があると言ってレイラと一緒に帰った、だがこれはサクラとレイラの策略だった

他のメンバーも色々と用があると言って帰った

ホムラ「えっ！？用があるのか！？」

レウト「ごめんな、だから俺達は先に帰ってるから誰かと帰っていきよ♪」

リオ「先に俺達は用すませて帰るから」

ハンターラセ「それじゃあ先に帰ってる」

ホームラ「えっ!?!ちよっ!?!お前ら!?!」

レウト・リオ・ハンターは先に帰った、実はこれもサクラとレイラによる策略だった

実はサクラとレイラは赤くなっているホムラを見てあることに気がついた、それはアオイの事が好きじゃないのか？と思ったのだ、そこでサクラとレイラはホムラとアオイ以外のメンバーに作戦として二人きりにしてやろうと考えていたのだ、鈍感なものもいるがなんとか二人にしようと他のメンバーは帰っていったが実はかえっていないのだった

「ラッシュ、こんなで大丈夫なのか？」

サクラ「平気よ♪これはあの二人の恋のためよ」

サクラは遠くから双眼鏡などで二人の様子を見ていた

•
•
•
•
•
•

二人きりになったホムラとアオイ

ホムラ「（マジかよ!?!俺どうしたらいいんだよチクシヨオオオオ
オオオオ!!!!!!）やばい!?!胸のドキドキがああああああ
あああああああああ!?!」

ホムラは壊れてきた、なぜなら一目ぼれの彼女がいるのだから

!!!!!!?」

心の中で一番の親友達の助けを求めたホムラ、だが心の中では誰も助けてくれない(汗)

……

ホムラ「(どうすりゃいいんだ俺は／／／(滝汗))」

ホムラは緊張してカクカクと歩く

アオイ「(どうしようゝ私のせい?…でもどうすれば)」

アオイも同じことを考えていた

そんなとき

????「よう兄ちゃん、彼女と一緒にだな」

????「俺達が遊んでやるよ」

なんと二人に不良が二匹道を塞ぐ

ホムラ「なんだよお前ら、そこどけよ!」

そういうホムラだが

不良1「そうはいかないな」

不良2「ねえ彼女？俺と遊ばない」

不良の一匹がアオイの手をつかもうとしたその時！？

ドカツ！！

不良2「グハッ！？」

不良2は倒れた

不良1「なっ！？」

ホムラ「俺の彼女に…てえだすな…！！！！！！！！」

ボカツ！！

ホムラは不良1を腹を殴った

不良1「ぐわっ！？」

不良1も倒れた

ホムラ「行くぞ！早く！」

アオイ「わ、わかったわよ！」

二人は手をつなぎながら走っていった

不良1「く…くっそお！！」

不良2 「覚えとけ！！」

「誰が覚えとけだって？」

パキッポキッ

ラッシュとその他のメンバーが不良二匹を囲んだ

ゴウ「俺達がいるってこと」

「わすれるなよ」

不良達「ぎゃあああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！！！！！！！？」

不良達の断末魔が響いていた

•
•
•
•
•
•

ホムラ「はあはあ、ここまでくれば大丈夫だろ」

二人は公園まで走ってきた

アオイ 「そ、そうね」

二人は疲れた表情をしたが

ホムラ「はあはあ」

アオイ「ねえ？ホムラだっけ？その…」

アオイがホムラに何かをいいたそうだった

アオイ「助けてくれてありがとう、かっこよかった」

するとホムラは

ホムラ「お、俺は別にそんなわけじゃ／／／／／」

ツンデレな感じなのか再び顔が赤くなる

アオイ「フフ…素直じゃないな」

ホムラ「う、うせえ／／／／／」

なおもさらに赤くなるホムラ

アオイ「でも嬉しかった、あの時言った言葉」

ホムラ「あの時…あっ!!」

…

ホムラ『俺の彼女に…てえだすな!!!!!!!!!!!!!!』

…

アオイ「それが嬉しかった、私ね…ホムラの事…好きだよ！」

ホムラ「!?!」

そんな公園は誰もいない、だが一陣の風が二人をまるで祝福したかのように吹いていた

……

ホムラ「ただいま」

レウト「おかえり〜ホムラ♪（ニヤニヤ）」

リオ「おかえり〜♪（ニヤニヤ）」

ハンターラセ「遅かったな」↑見ていたがとりあえずスルーした

ホムラ「ああ、すまない」

そんなニヤニヤしている二匹は

レウト「よかったじゃねえ〜かホ・ム・ラ♪（ニヤニヤ）」

リオ「いい感じじゃねえか♪（ニヤニヤ）」

そんなときホムラは怒りを覚えた

ホムラ「まゝさ〜かお前ら見たってわけじゃねえだろうな?」

バトル71 ホムラの恋(後書き)

やっとこれでカップル成立♪

ホムラ「師匠、俺達の愛は何処にいったのですか」(泣)」

あのね、(汗) やっと二人をくっつけたのにそりゃないよホムラ君
(汗)

ホムラ「だって俺師匠のことが」

わかったからそれは(汗) 俺の方はlikeの方でアオイちゃんの方はLOVEの方でこれで解決! はい終わり! ↑一気にかたつけた

ホムラ「師匠」(泣)」

とりあえずここからは彼女を幸せにするんだよ、俺と付き合うのは無理があるから、それにせいかくの恋人だよ? そこは男女の関係だからね

ホムラ「師匠…」

大丈夫、いつでも俺は見守ってるから

ホムラ「師匠」(泣) ありがとうございます」(泣)」

バトル72 小さきクルペッコと普通のドスジャギィ（前書き）

ラッシュ「再び挑戦者か」

まあそうなるね

ホムラ「師匠くデートとかは？」

君が全員ぶっ殺すとか感想でそう言ったから出番はさき回しだよ

ホムラ「ごめんなさ〜い！！」（泣）↑スライディングDO☆GE
☆Z A

とりあえず今度そう言ったらデートなしだからね（怒）

ホムラ「はい（泣）」

アオイ「あまりそういわないでホムラ（汗）」

それじゃあバトル72

ラッシュ「燃え上がっていくぜ！！」

バトル72 小さきクルペッコと普通のドスジャギィ

アオイがホムラの彼女になってから

ホムラ「／／／／♪」

機嫌がよくなっていた（汗）

それを見ていたレウト&リオのレウスコンビは

レウト「よかったな」

リオ「レウトとホムラだけ羨ましいな」

二人（一人と一匹）に彼女がいて自分には彼女がいないと羨ましが
るリオ

ハンターラセ「そのうちリオにも春が来ると思うよ（汗）」

リオ「ラセ~~~~~（泣）」

唯一の友であるハンターのラセに励まされたリオ

ラッシュ「まあよかったからいいじゃねえか」

と、ラッシュ

そんなこんなで今日も学校、みんなは登校中だったのだ

そして放課後、学園の校門には2匹のモンスターが立っていた、一匹は口がラッパのような物がついていて、鮮やかな体色で鳥のようだが、手には石がついていた、しかも小さく、羽には金と銀の羽がまざっている、鳥竜種的大型モンスター、彩鳥クルペッコだ

もう一方のモンスターは先ほどのクルペッコよりは大きい、いやクルペッコ自体が小さいのだろう、通常のクルペッコとは違いこのクルペッコは人間と同じサイズだった、っともう一方の方の説明をしないと、もう一方のモンスターは頭にはエリマキがついていて大きい、体色は薄紫だ、クルペッコと同じ鳥竜種と呼ばれるモンスター、ドスジャギィ、ジャギィと呼ばれるモンスターの長である、ジャギィはエリマキがついていないモンスターでドスジャギィはジャギィの中ではボス的な存在のモンスターである、つまりドスランポスなどと同じことになる

クルペッコ「ねえ♪アレス♪ここが噂のポケハン学園だね♪」

クルペッコはアレスと呼ばれたドスジャギィに声をかける

アレス「そうだな、ここに強い奴がいるみたいだ、二匹で挑戦して俺たちがどれだけの実力か見てみるか、メロ」

と、メロと呼ばれたクルペッコに言うアレス

メロ「そうだね♪僕楽しみ♪がんばって修行しよう♪」

と、喜んでいるように小躍りするメロ

アレス「俺たちでは色々と実力差がある、ここで修行もできるから

な」

メロ「うん♪じゃあ早速行こう♪」

二匹は学園へと入っていった

……

ゴウ「ブレイクオーラ！」

ゴウはブレイクオーラを発動した

だが数分後

ゴウ「また失敗か」

ブレイクオーラは長くもたなかった

ラッシュ「そうあわてるな、正気のままブレイクオーラが制御できたのはすごいことだ」

ラッシュが褒める

ゴウ「そうだな！よし！」

ゴウは再びブレイクオーラを長く保つ修行をおこなっている

……

ゴウ「ぜえぜえ」

ゴウは汗をかいて疲れて大の字に倒れた

ラッシュ「がんばったな、とりあえず休憩だ」

休憩に入った

ゴウ「まあここに来てからなんとかなったからな」

疲れながらも言うゴウ

そんなとき

メロ「あっ♪ここだ♪あのくすみませくん♪」

先ほどのクルペッコ、メロが出てきた

ラッシュ「ん？挑戦者か？」

アレス「ああ、俺とこいつとだ」

そこからアレスまで来た

ラッシュ「つまり二人か、ならダブルバトルになるな」

ダブルバトル、それはお互い二匹で戦うバトル方式で、お互いの絆や相性によって戦況は変わる、今回は二匹が参加するということがダブルバトルになった

ラッシュ「それじゃ俺たちはその二匹を選ぶ」

ラッシュ達は部室へと向かう

メロ「楽しみ〜♪」

……

バトルフィールド、そこにはアレスとメロが立っていた

メロ「どんなのが相手だろう〜♪」

小躍りしながら言うメロ

アレス「さあな、ラッシュというリザードンもそれなりに強そうだから〜」

アレスもラッシュの強さをうすうすと感じていた

ゼルス「対戦相手は…この二匹だ」

出てきたのは

ゴウ「俺が相手だ!」

エイク「全力で相手するぜ♪」

ゴウとエイクだ

アレス「アカムか…油断できないな」

メロ「大丈夫だよ♪僕がちゃんとサポートするから♪」

アレス「ああ、頼りにしてるぜ♪」

そんななか、ゴウとエイクは

ゴウ「大丈夫なのか？」

エイク「大丈夫大丈夫♪俺がいるんだからな♪任せろ♪」

余裕なエイク

ゼルス「それじゃ…バトル開始!!」

バトル72 小さきクルペッコと普通のドスジャギィ（後書き）

彩鳥モンハン物語からメロ君とアレスが来ました♪

メロ「こんにちは♪メロです♪」

アレス「アレスだ！」

ラッシュ「メロとアレスか、油断できないな」

エイク「俺は強いからな！」

はいはい、対抗しないでいいから（汗）

ゴウ「俺も他のオーラもできたからそのテストも含めるからな」

お互いががんばってね

バトル73 メロ&アレスVSゴウ&エイクゝポケモンとモンハンのダブルバトル

ゴウ「ついに俺とエイクのダブルバトルだな」

エイク「俺のギャグ技でやってやるぜ♪」

ゴウ「っておい!?!」

大丈夫なのか(汗) それじゃあバトル73

ゴウ「燃えてくるぜ!?!」

バトル73 メロ&アレスVSゴウ&エイク／ポケモンとモンハンのダブルバトル

アレス「行くぜ！」

アレスは真っ先にゴウを狙う

ゴウ「スピードオーラ!!」

ゴウの周りが黄色のオーラに包み込みゴウは避けた

エイク「行くぜ! バナナの皮をポイっと♪」

エイクはバナナの皮をアレスとエイクの間に投げた

エイク「うおおおおおおおおおおおおおおおおお
お!!!!!!!!!!!!!!」

ゴウ「おい!?! まさかバナナアタックじゃねえよな」(汗)「

ゴウが不安そうにいう

……

ラッシュ「またバナナの皮かよ!?!」

リザレ「(汗)」

ホムラ@「アイツどんだけバナナの皮にこだわるんだよ!?!」

アレスは体を回転させて尻尾でゴウを攻撃した

ゴウ「ディフェンスオーラ！」

ゴウはすぐさま青いオーラ、ディフェンスオーラに切り替える

ゴウ「これで、がっ!？」

ゴウは尻尾の攻撃を受けて倒れた

ゴウ「なんだ…攻撃が!？」

ゴウはわけがわからずにとりあえず体勢を直した

メロ「♪♪♪♪」

メロはまた小躍りしながら歌う

アレス「メロの超攻撃力UP真のおかげだ」

どうやらメロの踊りと歌によってそれぞれ能力を上げているようだ

エイク「くそっ、どうすりゃあいんだ」

ゴウ「そりゃこっちのセリフだ！」

二匹はこのメロの能力UPの踊りと歌に苦戦している

ゴウ「どうすry」

アレス「よそ見してる場合か？」

アレスはゴウに噛み付いてくる

ゴウ「くっ！ブレイクオーラ」

ゴウは白いオーラに包んでなんとかかみつきをしのいだが

ゴウ「くっ！」

白いオーラは1分して消えてしまった

……

ラッシュ「まだまだブレイクオーラの制御は難しいな」

リザレ「ゴウは大丈夫なのかな？」

リザレが心配する

ホムラ「あいつらなら絶対大丈夫だ」

ラッシュ「そうだ、心配すんな」

二人がリザレを励ます

……

ゴウ「（やっぱブレイクオーラはまだなれねえ…：ならあのオーラを試してみるか）」

するとゴウはエイクのところに駆け寄った

ゴウ「エイク！」

ゴウはエイクに何か伝える

エイク「いいのか？」

ゴウ「おう！やってくれ！」

何か作戦をやったようだがエイクは少し戸惑った感じだった

エイク「行くぞ！ソニックブラスト！！」

エイクはアカム最強技、ソニックブラストを放った

アレス「避けるぞ！メロ！」

メロ「うん♪」

二匹は軽々と避けた

アレス「そう簡単に食らうかよ」

と、余裕で言うアレスだが

ゴウ「マッハファイト！！」

そこからゴウがマツハフアイトでアレスに攻撃した

アレス「ぐわっ!？」

アレスはダメージを受けた

アレス「なんでだ?なぜ防御を上げてるのにダメージが!？」

そう、防御力がUPしたのにもかかわらずダメージを半減などできなかった

ゴウ「なぜかってな?それは俺のこれだ！」

ゴウの周りに透明なオーラがまとっていた

ゴウ「俺の新オーラ、デイスペントオーラだ！」

デイスペントオーラとは、オーラをまとったデイスペントオーラで相手に攻撃したときに、相手の能力を元に戻すのだ、つまりポケモンの技、黒い霧と同じ効果を持っているのだ

アレス「まさか!?!メロ！」

メロ「わかってる♪♪♪♪♪」

メロは再び踊りと歌でアレスの能力を上げようとするが

エイク「おっとそうはいかないぜ♪」

メロ「わぁ!?!」

メロはエイクにつかまれ動きを封じられた

ゴウ「よし!ドラゴニックオーラ!!」

ゴウのオーラは透明から藍色(少し黒い青)に変わった

ゴウ「行くぜ!バーストドラゴンズ!!」

ゴウは龍の波動と火炎放射を吐いた、龍の波動は青い龍に、火炎放射は赤い龍に姿を変えた、そのまま二体の龍はアレスに向かって襲い掛かってきた

アレス「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!?!」

アレスは火傷の跡を追って目を回して倒れた

ゼルス「アレス戦闘不能!」

これによってアレスは戦闘不能になり、メロは降参してゴウとエイクは勝利した

バトル73 メロ&アレスVSゴウ&エイク〜ポケモンとモンハンのダブルバトル

ゴウ「やっと勝てた〜」

エイク「サマーバナナソルトはよかったぜ♪」

ラッシュ「エイクお前は作者にギャグ技を作らせようとすんなよ（汗）」

エイク「え〜」

ラッシュ「え〜じゃねえよ（汗）」

まあ勝てたからいいとして次回はあの二人が登場！！

ラッシュ「あの二人って？」

それは次回に♪

ゴウ「まあ俺の新オーラのおかげで勝てたからいいか」

ラッシュ「だがブレイクオーラの方なんとかしないとな」

ゴウ「逆に勘弁してくれ！？（泣）」

バトル74 元お姫様と伝説の龍（前書き）

ついにあの二人が登場します

ラッシュ「あの二人って？」

レウト「誰なんだ？」

それはラッシュが一度戦ったことのある人物だよ

ラッシュ「一体？」

まあそれは本編で、バトル74

ラッシュ「行きやがれ！！」

バトル74 元お姫様と伝説の龍

ここはいつものポケハン学園の校門

????? 「ここがポケハン学園なのね♪どんな人達がいるんだろう
♪楽しみ♪」

????? 「そうだな」

校門に立っているのは二人（一人と一匹）

まず一人は女の子だ、ピンクの服にベルトがあり、ベルトの中央には花がついていた、白に近いクリーム色の内巻きカールのロングヘアで肌は白く美しい

もう一人はドラゴンのような、背中にはバラがついていて、全身がトゲだらけで翼は鳶が集まってできている翼だ

????? 「迷ったけどなんとかついたわねがばね」

????? 「はあ、俺がいなかったらラッシュのいるポケハン学園につけなかっただろリリー（汗）」

それぞれ名前でいっている

説明すると女の子の方はリリーという名前でバラの龍の名前はがばねというらしい

リリー「それじゃあ行きましょう♪」

がばね「そうだな」

二人はポケハン学園の中へと入った

……

ラグ「えいっ！」

ラグはそういうとラグの体に変化があった、耳のヒレが鋭くなり、ラグの周りに電気がまとった

ラッシュ「やったな、とりあえずまだまだだが長時間デンラージの力を制御できるようにしとかないな」

どうやらラグはデンラージになったようだ、だがまだ長時間でのデンラージはできないようで最低時間は1分ぐらいらしい

リザレ「すごいなラグ、俺もがんばらないと」

リザレはラッシュに色々と教えられている

ホムラ「はっ！」

ホムラは素振りをしていた

ハンターラセ「はっ！」

異世界ラセ「わっ!?! ちょっ!?!」

Wラセは互いにバトルしている

ルング「はっ!」

ルングはホムラと同じくリーフブレードで素振りだ

モモ「ヒートアップからフレアドライブ!!」

ゴウ「ならこっちはディスペントオーラからマッハファイト!!」

モモは同じ種族のゴウとバトルしている

ブレイ「俺の早さは負けん!」

ルガー「もういいかげんにしてくれ(汗)」

ブレイは無理やりルガーと早さ対決していた(汗)

するとグラウンドから

リリー「あゝやってる♪」

がばね「よっ! ラッシュ」

リリーとがばねだ

ラッシュ「おっ! リリーとがばねか」

リリー「やつほ〜♪ラッシー」

がばね「来てやったぜ」

どうやらラッシュとは知り合いらしい

「先輩？この方達は？」

ここでラッシュはリリーとがばねを紹介した

ラッシュ「ああ、元お姫様のリリーと伝説のドラゴンのがばねだ」

リザレ「えええええええええええええええええつ！！！！！！」

リザレは驚いた

「元お姫様!？」

ラグ 「伝説のドラゴン!？」

全員（ラッシュ以外）が驚いていた

そこから

サクラ「あら？ リリーにがばねじゃない♪」

レイラ「サクラ？知り合いなの？」

レイラが質問する

サクラ「まあそういうことね」

サクラもそうだった

……

がばね「いやあ、バトル部に入部しようと思ってリリーと一緒に来たんだ」

がばねが説明する、どうやら目的はバトルと二人の入部らしい

ラッシュ「そうだったか、あのバトル以来がばねとリリーは友達だったからな」

あのバトル以来とは？それはいずれ話すかもしれない

リリー「それよりバトルしたい♪」

どうやらバトルしたいと待ち遠しいようだ

ラッシュ「だが今日は無理だ、それにお前ら二人は入学届けとかそういうのしてないだろ？」

リリー「あっ！そうだった！」

がばね「なら入学届け出したらにするか」

こうしてリリーとがばねがポケハン学園へと入学することになった、

続きは次回へ！

バトル74 元お姫様と伝説の龍（後書き）

はい！リリーとがばねの過去物語！からリリーちゃんとがばねの二人がきました！

リリー「やっほ♪リリーだよ♪」

がばね「がばねだ」

オリジナルである二人がここで参戦だよ♪

リリー「わぁ〜フォアの所に来たかったから嬉しいよ♪」

がばね「そうだな、ありがとなフォック」

いいよ、来たかったからよかったし♪それとフォアはリリーちゃんが俺につけた名づけです。他のコラボキャラとかの名づけとかもリリーちゃんがつけています（感想とかで）ちなみに変更不可です（汗）

がばね「他のコラボキャラの作者さん達すまないな、リリーは最初に会ったやつらに名づけするんだ、俺はそのままだがすまない」

まあ名づけで反論してる人はいないから大丈夫だよ

がばね「そうか、よかった」

リリー「早くバトルにならないかな♪」

がばね「そういえばなんでラッシュやサクラは知り合いな感じにな

ってるんだ？」

すでにこっちの感想とかで話しているし、サクラは知らない感じにしたらラッシュがリリちゃんが好きになってしまうからあえて知り合い設定にしたの

がばね「なるほどな、感想でもラッシュと戦ったからな」

でもこっちではちょっとエピソードになると思うから

リリ「わぁーフォーありがとね♪」

ラッシュ「まあたしかに感想で一度戦ったからな」↑詳しくはリリーとがばねの過去物語！の感想にて

次回はバトルじゃないけど二人の入学になります

リリ「楽しみ♪」

バトル75 リリーとがばねの高校生デビュー（前書き）

リリー「わーやっと入学だー♪」

がばね「リリーに言うけどな（汗）あんまりフォックの迷惑かけるなよ？こっちはコラボした身なんだからな」

リリー「わかってるよ♪」

ホントにわかってるの？とりあえずバトル75

リリー「バトルしましょう♪」

バトル75 リリーとがばねの高校生デビュー

リリー＆がばねが来て1週間、ついに

リリー「夢の高校生デビュー♪」

ハイテンションでリリーはがばねと一緒にポケハン学園に来た、ちなみに校門前です

リリー「制服もすごくいいし♪」

がばね「まあ俺は擬人化にしようと思ったがこのままでも大丈夫みたいだからそのままだ」

リリーの服はセーラー服だが色は全部ピンク色だ

サクラ「中々似合ってるわよリリー♪」

制服が似合ってることにサクラは褒めた

リリー「ありがとうクラリス♪」

クラリスとはサクラの名づけだ、リリーは最初に出会った者達に名づけというニックネームを強制的につけられるリリーの癖だ、まあ元々ラッシュとサクラは知り合いなので問題はないが（汗）そんなこんなで教室に行く（リリーとがばねは職員室）

……

イックン「えー今日は新たに転校生を二人紹介します、それじゃあ入って」

教室にリリーとがばねが入ってきた

イックン「それじゃあ自己紹介して」

二人はうなずいた

リリー「今日からこの学園に入ったりリリーっていいですよ♪人間です
がみなさんよろしくお願いします♪」

元気に挨拶したりリリー、他からは拍手がなった

がばね「俺はがばねだ、ドラゴンだ、よろしくな」

さすがに自己紹介で過去に付けられた名づけは言えない

そんなこんなで放課後になった

バトル75 リリーとがばねの高校生デビュー（後書き）

ラッシュ「短いな」

次回はバトルだから今回は短いよ

リリー「最初は誰とバトルなのかな♪」

楽しみにしててね

バトル76 リリーとがばねのバトル部とのバトル（準備）（前書き）

リリー「フォー！！今日こそバトル？」

いや準備からだよ

リリー「ええ」

がばね「まあまありりー、フォックだって色々あったからそうなんだよ」

リリー「そうなんだ…」

それじゃあバトル76

がばね「燃えてくるぜ！！」

リリー「がばねがすごく燃えてる〜♪」

がばね「リリー空気よんでくれ（汗）」

バトル76 リリーとがばねのバトル部とのバトル準備

放課後

リリー「わぁ〜すご〜い♪」

リリーはバトル部の部室を見学していた

がばね「これをラッシュが一人でか」

ラッシュ「まあ他にも手伝ってもらったからな」

というラッシュ

リリー「ねえ？バトルは？」

そう、バトルを忘れては困る

ラッシュ「ああ、対戦相手だな、しばらく待ってな」

どうやらまだ二人の対戦相手は決まっていないうだ

リリー「じゃあ待ってるね♪」

というわけでした。しばらく待つことにした、その間がばねは特訓、リリーは部室見学をした

……

ゼルス「待たせたな」

ゼルスさんだ

リリー「わく♪ゼルスィー早く♪」

ゼルスィーとはゼルスのつけた名付けだ

ゼルス「わかった…これが対戦相手だ」

対戦カードをみるとラッシュとがばねが対決となった

がばね「ラッシュか…あいつには色々世話になったからな」

リリー「えーとあたしの相手は…ルンガー!？」

なんとリリーの相手はルングだった

バトル76 リリーとがばねのバトル部とのバトル準備（後書き）

リリー「ねえフォー！！なんであたしの相手がランガーなの！？」

実はこれには理由があるんだ、それは次回でわかるよ

リリー「ランガーに何かあったのかな」

まあそうだね

がばね「フォック、ラッシュとの対戦の組み合わせありがとな」

いやいや、がばねとラッシュじゃないとバトルは白熱しないし

リリー「けどランガーとの対決楽しみにしてる♪」

そう（汗）

バトル77 ルングVSリリー（力なし条件）（前書き）

ラッシュ「ルングとリリーのバトルか」

今回、ルング君には条件付きのバトルになるけど

ラッシュ「条件付き？」

フュールング見ててこれはやばいから（汗）

ラッシュ「なるほどな…そういうことか」

ではバトル77

ラッシュ「かかってこいや!!」

バトル77 ルングVSリリー〈力なし条件〉

一人の少女と一匹のポケモンがフィールドを見渡す

ルング「……」

ルングは無言だった、なぜルングがリリーとバトルするのか…

対するリリーは

リリー「行くよ！！フラワーウィップ！」

叫んだと同時に地面から百合の花が現れた

レウト「おーっと！！リリーが百合の花を出したぞ！！」

レウトは実況

ホムラ「あの女、一体何者なんだ！？」

こちらの実況するホムラ

リリーはその百合の花を引っこ抜いた

ルング「花を引っこ抜いた！？」

百合の花から鋭い剣が出てきた

リリー「これがあたしの武器、これでも強いよ！」

リリーの目が少し鋭かった

ルング「（やるしかない）」

ルングはリリーに接近して

ルング「リーフブレード！！」

リーフブレードで切り裂こうとするが

リリー「よっ！」

ジャンプしてかわした

ルング「エナジーバレット！！」

ルングは4つの小さなエネルギーでリリーをこっちにひきつける

ルング「（エナジーバレットでひきつけて、そこからエナジーサークルで！）」

と、戦術を考えていた、だが

唸りの鞭打ち（シェイクカット）！！

フラワーウィップを鞭のようにならせて勢いよく振った、これによりエナジーバレットでつくったエネルギーはフラワーウィップで消えてしまった

ルング「なっ!？」

レウト「これはすごいぞ!! エナジーバレットのエネルギーがリリーの武器により無効となったぞ!!」

ホムラ「あの女、つええ」

観客席

ラッシュ「さすがはリリーだな」

がばね「それがリリーだ」

がばねはリリーを見守る、彼は彼女を信じて

……

ルング「くっ! 空牙天昇!!」

あわてているのか、ルングはリーフブレードで体を回転して上昇、リリーを巻き込もうとしたが

リリー「蔓の暴走!!」
ウィップカーニバル

すると地面から無数の蔓が出てきてルングに襲い掛かる

だがリーフブレードで蔓は切り裂かれた

リリー「これで動きを封じるわ!! 気まぐれの花達!!」
フラワーバフューム

リリーがそういつて武器を振った途端、ルングの体からどんどん花が咲いてきた

ルング「なんだ…力が…」

ルングの様子がおかしい

観客席

リザレ「先輩、あの技は」

リザレはあの技をみやぶったらしい

ラッシュ「ああ、状態異常系の技だ」

どうやら状態異常系の技を使ったため、ルングは力が出ない

ルング「(くっ！ここはフールングを使って…いやだめだ！)」

ルングは戸惑っていた

ゴウ「なあ？ラッシュ」

ゴウはラッシュに質問してきた

ラッシュ「どうした？」

ゴウ「なんでフールングを使わないんだ？アイツならこれで逆転はできるはずだぜ？」

たしかに、フューリングを使えば逆転はできるが、今のリングはフューリングを使いたくても使いたくない状況だった

ラッシュ「ああ、実はな……今回フルリングの力を使わないで戦うって条件でリングは戦っているんだ」

その言葉に全員が

[illegible]

驚く

ハンターラセ「それってどういうこと？」

ハンターラセが質問してきた

ラッシュ「今回俺やゼルスさんはルングの事情を聞いてきたんだ」

•
•
•
•
•
•

それはリリーと戦う3日前だった

一度ルングは自分の仲間達の世界に帰ってきたんだ、だがなぜか悔しい表情をしていた、俺とゼルスさんは何があったんだ？と質問した、すると敵に負けてしまったらしくてな、フュールングの力を使ってもズに負けた、『力に溺れた』とそいつに言われてしまったてな、おまけに仲間の一人がさらわれてしまって大変だったみたいなんだ、そこでゼルスさんは『フュールングの力を使うな』と言われてフュールングを使わないんだ、だからルングはフュールングを使ってい

ないんだ

……

ルング「（このままだとやばい）エネルギーボール!!」

ルングはエネルギーボールを放った

リリー「しまっ!?!」

リリーはエネルギーボールを受けてしまった

リリー「癒しよ!! 癒しの復活!!」
アロマシャイン

すると花と蔓がリリーを包み込んでいった

リリーは回復した

ルング「なっ!?! 回復技!?!」

リリー「そう簡単にはいかないわよ! これでとどめよ!! 花々の最
ラストフラ
ワーアウト
後!!」

ルングの上に巨大な花が咲いた

ルング「一体何をするつもりだ」

ルングは静かにいう

リリー「この技はね、ビームを出す技なの、ごめんね」

リリーがそういうと巨大な花の中心からビームが出てきた

ルングは動きを封じられたためビームを食らってしまった

ルング「ぐわあああああああああああああああああああああ
ああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」?

ルングは倒れてしまった

ルング「(くっ! 体が…俺はまだ…)」

意識はあるがそれでも倒れてしまった

ゼルス「ルング戦闘不能!! リリーの勝ち!!」

リリー「やった〜!!」

リリーは勝利して喜んだ

ゼルスはルングの近くに来て

ゼルス「とりあえず休んでくれ、お前はまだまだだがお前には学ぶ
ことがある」

ルング「……」

ゼルスはルングを担ぎ部室へと入っていった

ラッシュ「ついに俺達だな」

がばね「ああ、今度は負けないぜ」

ラッシュとがばねの周りにはオーラが包む

二匹の龍の対決が、今始まろうとしていた

バトル77 ルングVSリリー（力なし条件）（後書き）

リリー「あゝ楽しかった♪」

ちよつと容赦しなかった感じかな？

がばね「まあでもいいバトルだった」

リリちゃんは回復や防御、そして状態異常とかだから状況によって使う感じだね

リリー「フォーもさすがに色々気づいているね♪」

まあね、さてがばね

がばね「やっとだな」

ラッシュ「負けないぜ♪」

がばね「俺もだ♪」

リリー「ファイト♪」

バトル78 ラッシュVSがばねく炎の龍とバラの龍く(前書き)

ラッシュ「なんかやけに早いな？」

さて、ここからは燃えるようなバトルを！！

がばね「そんじゃいかせてもらうか」

バトル78

ラッシュ・がばね「負けねえ！！」

バトル78 ラッシュVSがばねく炎の龍とバラの龍く

ついにこの二匹の龍の対決となった

レウト「赤くくナくバトル部部长くラッシュく」

実況担当レウトによりラッシュがフィールドに立った

レウト「青くくナくバラの龍くがばねく」

つづいてがばねがフィールドに立った

ラッシュ「ついにお前と対決だな!!」

がばね「ああ!今度は負けねえぞ!!」

互いににらみ合っている

観客席

リザレ「先輩…」

リザレが心配そうに見る

そこに

トンッ

リザレ「ビクッ!？」

リザレの肩を誰かが軽くたたいた

ゴウ「大丈夫だ、ラッシュなら負けるはずねえよ、心配すんな」

リザレ「ゴウ…」

ゴウに励まされなんとか不安がほぐれたリザレ

…

ゼルス「二人とも、準備はOKか？」

ゼルスが二人に聞く

ラッシュ「OKです」

がばね「こっちもだ」

二人は準備万端

ゼルス「それじゃあ行くぞ…バトル開始!!」

バトルが開始された

ラッシュ「うおおおおおおおおおおおおおっ!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

がばね「うおおおおおおおおおおおおおっ

!!!!!!!!!!!!!!」

バトル開始と同時に二人が接近してきた

ラッシュ「行くぞがばね!!ドラゴニックラッシュ!!」

ラッシュはドラゴニックラッシュ

がばね「行くぞラッシュ!!鋼の乱れ切り（スチールクロー）!!」

がばねの爪が鋼のような銀色となりラッシュを切り裂く

しかし

ラッシュ「オラララララララララア!!!!!!!!!!」

連発するパンチにより爪で防ぐしかなかった

がばね「くっ!」

がばねは爪でガードしながら攻撃を防ぐ

ラッシュ「セイントラッシュ!!」

今度は光をまとったパンチだ

がばね「何っ!?!ぐわっ!?!」

がばねはまともに防げずダメージを受けてしまった

がばね「くっ、中々やるなラッシュ」

だががばねは苦しい表情をしているが口が笑っていた

ラッシュ「へっ！俺もだてに修行したわけじゃねえんだ、そう簡単には負けねえよ♪」

一方のラッシュは笑顔だ、よほどいい相手がいたからだろう、それはラッシュにとってはいきいきとしていた、がばねもなぜかいきいきしていた

がばね「こっちもだ！！破壊の牙！！」
メテオクラッシュ

がばねは勢いよくラッシュに噛み付く

ラッシュ「くっ！」

ラッシュは腕を噛まれたが

ラッシュ「いてえな♪それでこそだ！」

だがこんな噛みつかれてる状況でもラッシュはまだあきらめなかった

ラッシュ「炎の牙！！」

ラッシュも負けじとがばねを噛み付いた

がばね「ぐっ！」

互いに噛み合っている

がばね「くそっ！」

がばねはラッシュの腕を離した

ラッシュもそれにつられて離した

観客席

リザレ「すごい…」

リザレは何か自分にこみ上げたような感じがした

ゴウ「すげえ」

ゴウは啞然とした

リリー「がんばれがばねー！！」

リリーは応援

レウト「これはすごいバトルだー！！」

ホムラ「さすがバトル部部长とがばねだ、これが熱いバトル…」

観客席も一気にヒートアップした

……

がばね「すげえなラッシュ、ここまで強くなるとはな」

がばねはラッ
シュをほめる

「あ、だが俺もまだただけだな」

そういうラツシュ

がばね「それじゃあこれで行くぜ、俺の最強技!! プロミネンスクロー!!」

がばねの爪が光に包まれる、真っ向勝負だ

ラッシュ「俺はこれ wait してた！！がばね！！龍炎はさらに強くな
ったんだぜ！！これが俺の…全力…」

ラッシュの体が光に包み込んだ、セイントリミットだ、さらに拳が炎に包み込む

「ラッシュ
聖龍炎！！」

ラッシュはがばねに接近する

互いがぶつかり合い

ドカ
ン！！！！！！

爆発した

だが二人は

強き光、それは強くなつた者の証

ラッシュ「よっしやあああああああああああああああ
ああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

わあああああああああああああああああああああ
ああああああああ

大歓声が学校中に広まった

ラッシュは倒れてるがばねの元に

「大丈夫か？」

ラッシュは手を差し伸べる

がばね「ああ……負けちまったけど……楽しかったぜ」

ふっと笑いラッシュの手を掴んだ

二人の龍がぶつかり合い、それが友情を芽生える、たとえば伝説のドラゴンやハンターに追われていても…彼らはつながっている、彼らの居場所があるのだから

バトル78 ラッシュVSがばねく炎の龍とバラの龍く（後書き）

ラッシュ「早く終わったな」

熱くかけたかな？

がばね「まあいいバトルだったぜ、ごめんなりりー」

ラッシュ「さて次回はなんだ？」

次回はリング君修行パート2！今度はあの人までも参加！

ラッシュ「誰なんだ？」

それは次回にて♪

バトル79 兄のぬくもり(前書き)

ラッシュ「なんだ？このタイトル？」

今回はルング君の修行だけど、今回修行相手になるのはあの人

ラッシュ「タイトルからして…まさか!？」

そのまさか、バトル79

ラッシュ「燃えあがれ!!」

バトル79 兄のぬくもり

ここは学園の裏庭

そこに2匹のポケモンがいた

リング「ここで何をするんだ？」

一人はリング、フュールングの力を使うジュカインだ

ゼルス「いまから言う」

もう一人はバトル部のコーチ、ジュカインのゼルス

今日は学校は休みで部活もお休みだ、なぜ二人なのか？

前回、リリーと戦ったリング、だが今回はゼルスがフュールングの力を使うなど言われ、使わずに負けてしまった、リングは前にもある一匹のポケモンに敗れてしまい悔しい思いをしていた、そんなときゼルスから今日修行ということとなった

ゼルス「まずは基本からだ、まずは腕立て！」

リング「腕立て…わかった」

リングは腕立てをした

ゼルス「とりあえずまずは100からだ、慣れたら数回増やす」

ルング「えっ！？増やすのかよ！？」

これに驚くルング

ゼルス「負けたくないのか？あの敵に？」

ルング「!？」

この言葉にルングは何も言うことはなかった

……

ルング「いてえ」

ルングは腕を押さえ痛んでいた

ゼルス「まだまだだ、ここで休んでる暇はないぞ？」

ゼルスは腕組みをして言う

ルング「くっ！」

ゼルス「次はグラウンドを20周だ」

「うへえ」とルングは言うがそれでもルングはグラウンドを20周した

……

ルング「はあ…はあ…」

リングはかなり疲れていた、体はもうボロボロだ

ゼルス「よし、休憩するぞ」

やっと休憩に入った

リング「はあ…はあ…」

息が上がる、すると

ゼルス「大丈夫か？」

ゼルスが手を差し伸べた

リング「すまない」

リングはゼルスの手を掴んでなんとか立った、その時

リング「（兄貴…）」

ゼルス「ん？どうした？」

ゼルスがブーツとしているリングに声をかけた

はっ！としたリングは首を横に振り

リング「な、なんでもねえよ！」

あわてていた

ゼルス「？」

……

リング「ぜえ…ぜえ…」

ゼルス「今日はここまでだ」

すでに夕日が出ていた

ゼルス「今回は防御と補助技と防御と補助のオリ技だな」

ゼルスがいうには、リングは攻撃技が多く、色んな攻撃オリ技が出ている、だがリングには欠点があった、それは防御や補助技を覚えていないのだ、それでリングはある奴に負けてしまったのだ、元々リングには攻撃以外の技を覚えていないためか攻撃が最大の防御がリング的にはバトルスタイルだが、今のリングでは攻撃だけでは勝てない、そこでゼルスはリングに防御と補助などを覚えるために今回フューリングを使うことを止めていたのだ

リング「そうか、それじゃ俺はこれで」

ゼルス「明日もやるからな」

リングは疲れながら家へと帰っていった

……

リング「（兄貴…なんかゼルスが兄貴に思っているのは気のせいか

「？）」

リングはゼルスが自分の兄に思えてしまっていた、そんな時

ラッシュ「よっ！リング！」

リザレ「こんにちは〜リング」

ラッシュとリザレだ

リング「ラッシュにリザレじゃないか、どうしたんだ二人で」

ラッシュ「いやな〜リザレと一緒に特訓とかしたんだ」

どうやら二人で特訓したらしい

リザレ「俺も色々慣れないといけないからこうやって先輩と二人で特訓したんだ、リングは今日何処にいったの？」

リザレに質問され

リング「ゼルスと一緒に特訓してきたんだ」

リザレ「ゼルスさん？たしかリリーに負けたから？」

というリザレ

ラッシュ「いやリザレ、リングは勝てない敵に勝つためにそうしてるんだ」

リザレ「そうなんですか、ごめんルング！」

リザレが謝るが

ルング「気にすんな、リザレだって悪気があって言ったわけじゃないだろ？」

ルングは受け止める

リザレ「よかった」

ラッシュ「そんじゃ俺達はこの辺で、修行がんばれよ！」

ラッシュに励まされラッシュとリザレは去った

ルング「リザレとかも変わったな…でも俺は…」

不安があおいでいた

…

それから毎日とはいわないがルングはがんばって特訓した、ゼルスは厳しいがルングは色々と思考が回っているが、それでも悔しい思いがあり、一生懸命やってきた

それから1ヶ月後…

ルング「ずいぶん俺がんばれたな…」

ルングの体には変化があった

腕は筋肉ができ力強くなり足も速くはなった、

リング「腕もパンパンだがかなり鍛えられたしな」

少し納得するリング

リング「今日もゼルスの所に行くか」

リングは学校の裏庭へと家を出て向かった

……

学校裏庭

リング「ふう〜」

ゼルス「基本とかもよくがんばったな」

ゼルスは褒めてリングの頭をなでた

ゼルス「次は技だ」

ゼルスはリーフブレードでリングを襲う、だが

リング「守る！」

リングは守るでリーフブレードを防いだ

ゼルス「よし！これでなんとかなったな、特訓の成果が十分に伝わってきた」

ルング「ああ」

これでルングは強くなったはずだ

ルング「ここまでこれたのもあんたのおかげだゼルス」

ルングはお礼をいう

ゼルス「まあ同じジュカイン同士だったからな、これでもがんばったお前もよかった」

ルングは褒められた

ゼルス「少しいいか？」

ゼルスは突然ルングに聞いた

ゼルス「ここ1ヶ月から俺を見るとボーッとしてる時があるがどうしたんだ？何かあるのか？」

唐突に質問されたルング、いつもの表情が暗い表情になった

ルング「あんたが俺の兄貴に見えてきたんだ」

ルングはゼルスにゼルスが自分の兄に見えたと言った、するとゼルスは

ルング「!？」

なんとルングに抱きついた

ゼルス「そうだったのか、だが俺がいる、それに仲間がいる、きつとお前の兄は優しかったんだろ？うな、だが俺はお前を強くしてやる、お前の兄とはいかないがやってみせる」

その時ルングの目に涙が浮かんできた

ルング「(兄貴…)」

悲しみは誰もある、きつと誰かが見守っている、そばにいる人がいる、それでも負けない強さが自分の中にある

…

ラッシュ「あれからルングはゼルスさんとがんばってるな」

リザレ「俺達もがんばっていきましょう、先輩」

ラッシュとリザレは登校していた

ホムラ「よッス！」

ホムラが挨拶した

ラッシュ「よっ！」

レウト「おいッス！」

レウトが元気良く挨拶したが

リザレ「どうしたの！？その頭のたんこぶ！？」

レウトの頭にはたんこぶが数個できていた

ホムラ「気にするな、それじゃあ行こうぜ♪」

ホムラは機嫌がいいが

ラッシュ「(ぜってえ)ホムラにたたき起こされたんだろう(汗)」

リザレ「(うわぁ)レウトご愁傷様(汗)」

同時に思ってしまった二匹

リング「おはよう！」

リングが合流した

ゼルス「おはよう！」

今度はゼルスが合流

リング「あっ！ゼルスの兄貴！」

リングはゼルスのことを兄貴と呼んでいた

ラッシュ「（いつの間にかゼルスさんにか…あいつもやるな）」

リザレ「（やっぱ同じジュカインだからかな）」

ゼルス「今日はお前の实力を見せるバトルだ、いいな？」

するとルングは元氣を出して

ルング「はい！」

それは彼にとってのぬくもり、自分の兄と同じぬくもり

バトル79 兄のぬくもり（後書き）

ラッシュ「やっぱ同じジュカインだしな」

まあでもルングを強くしたから次回はルングがその実力を見せるときだよ

リザレ「まあでも楽しみだよ」

リザレ君もラッシュと一緒にだと元気だね♪

リザレ「うん、だって先輩は俺の事心配してくれるから」

ラッシュ「進化前と後だからな」

バトル80 リベンジ！ルングVSリリー（前書き）

ルング「ついに俺の修行の成果を見せるときだ」

ここまでがんばれたんだから絶対ブルートに勝とうよ！

ルング「ああ！だがその前に」

特訓の成果だね、バトル80

ルング「切り裂け！！」

バトル80 リベンジ！ルングVSリリー

放課後

ゼルス「今日はルングの特訓の成果を見せるために試合を行う」

一体誰と戦うのか

ゼルス「前回と同じリリーが相手だ」

なんと前回ルングに勝ったリリーが戦うこととなった

リリー「えっ！？あたし！？」

がばね「がんばれよリリー」

がばねに励まされるリリー

ゼルス「それじゃあ二人ともバトルフィールドに行け」

二人は頷き（うなずき）バトルフィールドに向かった

……

互いにバトルフィールドに立った二人

ゼルス「ではこれよりルングVSリリーの再バトルを行う！！準備

はいいか二人とも？」

二人は

ルング「こっちはいつでもOKだ！」

リリー「いつでもOK♪」

二人の調子はいいようだ

ゼルス「それではバトル開始！！」

ついに戦いのゴングがきって落とされた

リリー「いっくよ♪フラワーウィップ」

地面から百合の花が出てきた

ルング「(武器か)」

ルングは一度戦ったことはあるためこの技はわかっていた

リリーは百合の花を引っこ抜いた、そこから鋭い剣を取り出した

リリー「さあ行くわよ♪唸りの鞭打ち(シェイクカット)！！」

リリーの武器が鞭のようになやかになった

ルング「よっと！」

ルングはそれを軽くバックステップでかわした

リリー「何の♪蔓の暴走ウィップカーニバル!!」

地面から無数の蔓が現れた

ルング「リーフブレード!!」

ルングはリーフブレードで1本ずつ蔓を切った

リリー「隙あり♪花達の戯れ（フラワークレシェンド）!!」

花の竜巻が発生してルングに襲い掛かる

ルング「守る!!」

ルングは咄嗟に守るで防いだ

ルング「エナジーブレス!!」

ルングは口から緑色のブレスを吐いた

リリー「きゃっ!?!」

リリーはエナジーブレスを受けてしまった

リリー「癒アロマシャインしの復活!!」

リリーはアロマシャインで回復した

ルング「やっぱあの回復技がやかいだな、でも俺は負けねえ!!
ギガドレイン!!」

ルングはギガドレインでリリーの体力を奪った

リリー「うっ! ルンガーもかなり強くなってる、ここはあの技で、
気まぐれの花達^{フラワーバフューム}!!」

ルングの体から花がどんどん咲いた

ルング「くっ!」

リリー「これでなんとか…えっ!？」

ルングの体が光の粒子で消えてしまった

リリー「どうなってるの!？」

そこから

ルング「エナジーブレス!!」

ルングが上空からエナジーブレスを吐いた

リリー「やばい!？ 花卉の守り（フラワーガード）!!」

リリーの周りに大きな花がリリーを包み込み、ブレスを防いだ

ルング「いい感じだったんだがな」

残念そうにいうルング

観客席

ラッシュ「身代わりだな」

リザレ「身代わりなら状態異常を防ぎますし」

レウト「おーやるじゃんルング♪」

ホムラ「修行の成果がでたんだな」

ルガー「1ヶ月前までとは比べ物にならないほど成長している」

それぞれルングのことを述べる

がばね「リリー」

そんな様子を見ているがばね

……

ルング「兄貴との修行よりは大分マシになってきたな」

リリー「はあ…はあ…ここまでやれるなんて、ルンガーもがんばったんだね」

リリーは疲れながらもルングを褒める

ルング「俺はまだまだだ、でも俺は守れるようにしねえといけねえ」

リリーは巻き込まれルングはさらにすれちがいざまにリリーを攻撃して最後はリーフブレードで自分自身を回転してリリーを吹っ飛ばした

「きやあああああああああああああつ！！
リリー」

リリーは空高く飛ばされた

「がばね
リリー！」

がばねがそう叫んで助けに行こうとしたが、ラッシュが止めた

「ラッシュ！なんで止めr」

「だまってみていろ！」

ラッシュががばねを一喝した

がばね 「ラツシュ」

ラッシュ「大丈夫だ、リリーは」

リリーはどんどん落ちていく、そこから

「よつと！」

ルングが素早くリリーをキャッチ、お姫様だっこしながら着地した

[illegible]

「……………っ!!!!!!!!!!」

観客席から拍手が沸いてきた

ルング「ふう〜大丈夫か？」

するとリリーは

リリー「はあ〜負けちゃった、ルンガーは強かったよ」

と、笑顔になった

ゼルス「リリー戦闘不能！ルングの勝ちだ！」

こうしてルングはなんとか勝利を収めたのである

バトル80 リベンジ！ルングVSリリー（後書き）

ルング「ふう〜さすがにリリーと戦って疲れたな」

お疲れ様

ルング「俺、強くなったかな」

まだただだけどこれからもつとがんばれば

ルング「そうだな、ありがとなフォック」

どういたしまして♪

バトル81 修行する不良参上(前書き)

ラッシュ「更新早いな」

さらにコラボだよ♪

ホムラ「師匠すげえ〜(汗)」

リザレ「なんか俺達が出てる時点でレギュラーな感じだね」

まあ俺の中ではこのような感じかな

ホムラ「師匠のために全力をつくします!」

アオイちゃんもね(汗)

ホムラ「はい!」

はあくバトル81

ラッシュ・リザレ「燃え上がれ!!」

ホムラ「リザレが珍しく大きく言ったな」

リザレ「俺それでもがんばってるから」

バトル81 修行する不良参上

ここはいつものポケハン学園の校門

????? 「ここが噂のポケハン学園だな！やっと来たぜ！あいつに負けねえよう強くならねえといけねえから早速入るか！ここには強えゝ奴がいるって噂だからな！やってやるぜ！」

一人の人間が学園の中へ入ろうとしていた

まず髪は黒でショートヘアのオールバック、服は白のTシャツに下はジーンズ、さらに赤のジャケットを着ていた

????? 「待ってろよ！！このまま支配校にしてやるぜ！！」

気合十分な彼、彼はラッシュとモモと同じ不良なのだ、今回はかなりの嵐になりそうだ（汗）

……

グラウンド

リザレ「レイムボール！！」

リザレは小さい火球を連発してラッシュに放った

ラッシュ「……」

ラッシュはそのままりザレの技を受けた

ラッシュ「中々だな、だがもう少し火球を大きくしねえとだめだな、あまりダメージがない」

リザレ「すみません先輩、俺がまだ弱いから」

リザレは謝った

ラッシュ「謝る必要はない、これからがんばればいいんだ」

ラッシュがリザレを励ます

リザレ「はい！先輩！」

リザレはなんとか立ち上がる

ラッシュ「よし！もう一回だ！」

リザレ「はい！」

リザレもがんばってラッシュと特訓した

一方

ホムラ「オラァ！」

ホムラは太刀を一振りする、相手はリングだ

リング「影分身！！」

ルングは影分身で太刀の一振りを回避した

ホムラ「やるじゃねえか」

ルング「まだまだ」

二人はまだやる気らしい

ラグ「雷パンチ!!」

レウト「おっと！」

ラグとレウトは戦っていた、ラグはデンラージになってレウトを攻撃、レウトは雷パンチを回避

レウト「うへえ〜デンラージになるとすげえ〜なラグ」

ラグ「僕もルングに負けないようこっちの僕を強くしないといけな
いから」

と、もう一人であり本物のラグと同等に強くする分身のラグ

ゼルス「みんながんばってるな」

それを見ていたゼルス

アオイ「行くよ〜♪はっ！」

アオイは火竜刀「葵」でリリーに迫る

リリー「花卉の守り（フラワーガード）！！」

リリーはフラワーガードで防いだ

アオイ「やるじゃない」

リリー「そっちこそ♪」

互いに構えながら戦う

がばね「茨の乱れ撃ち（キャノンニードル）！！」

がばねはキャノンニードルでハンターラセに攻撃

ハンターラセ「鬼人化…」

ラセは双剣をクロスして鬼人化を発動した

ハンターラセ「乱舞！」

双剣を交互にまるで剣が踊っているように振った、キャノンニードルはすべて乱舞によって打ち落とされた

がばね「くっ！」

ハンターラセ「僕はリオを守るよう強くないと」

自分の誓いを胸に立ち向かうハンターラセ

……

ガル「久しぶりだがとりあえず休憩だ」

みんな休憩に入った、するとそこから

????「ここだな：おゝい！！ここに強えゝ奴がいると聞いたがここか！！」

大声で叫ぶ一人の人間

エイク「って！？御羅^{おら}じゃねえか！？」

エイクは彼の事を知っているらしい

ラッシュ「知り合いか？」

ラッシュは聞いただした

エイク「ああ、番長を目指して旅をしていてな、ライバルの金という奴と一緒にだが今は一人のようだな、何しに来たんだ？」

エイクには疑問だった

ラッシュ「ったくしょうがねえな」

ラッシュは御羅という青年のところに向かった

……

御羅「出てきやがれ！！俺と勝負しろ！！」

すると

ラッシュ「なんだ？なんか用か？」

ラッシュが駆けつけた

御羅「俺は御羅負^{おらふりよう}だ！俺はここに強え！奴がいると聞いたんでな、お前なんか知らないか？」

そういう御羅

すると

ラッシュ「それは俺のことだが？俺になんかようか？」

ラッシュがばらしてしまった

御羅「お前が！ここで一番強え！奴なんだな！！」

ラッシュ「そうだが」

すると御羅は構える

御羅「早速俺と勝負しろ！！」

なんと勝負を申し込まれた

ラッシュ「まあちょうど休憩だ、休憩が終わってから相手になろう」

御羅「ああ!! 俺は負けねえぜ!!」

こうして御羅という不良と勝負を挑まれたラッシュ、だが彼は気づかなかった

元不良であるラッシュの実力を

バトル81 修行する不良参上（後書き）

俺は不良く番長物語から御羅君が来てくれました

御羅「オッス！！俺は御羅負^{おら}狺^{ふりよう}だ！！」

ラッシュ「元気いいな（汗）」

御羅「もちろんだ！！このバトル部でかなり強いラッシュと戦えることができるんだからな！！」

えゝ元気いっぱいですが一応不良なので彼（汗）

御羅「絶対勝ってやるぜ！！」

気合十分な彼ですがラッシュはどう思う？

ラッシュ「熱いバトルになるなこれは」

これはかなり白熱としたバトルになりそうです！以上作者フォックでした！！

ラッシュ「レポーターか（汗）」

バトル82 元不良と不良くラッシュVS御羅（前書き）

ラッシュ「ついにバトルか」

御羅「俺の技とかはどうなるんだ？」

そこはポケモンの技とかオリ技でなんとかするよ

御羅「おっ！さすがフォック！」

それじゃあバトル82

御羅「負けねえ！！」

バトル82 元不良と不良くラッシュVS御羅

ゼルス「二人とも準備はいいか？」

ゼルスがフィールドの二人にいう

ラッシュ「OKです」

御羅「こっちもだ！」

御羅は十分に気合が入っていた

その頃、観客席

エイク「まさかあいつが来るとはな」

ゴウ「お前あの不良の事知っているのか？」

ゴウがエイクに質問してきた

エイク「ああ、かなり強いからな」だが油断はできねえ」

リザレ「それほどの実力なんだね？」

めずらしくエイクは少し真剣だった

モモ「俺が番長なのに、俺も戦いてえ」！！」

若干一人暴れそうな猿が一匹（汗）

……

ゼルス「バトル開始!!」

ゼルスの掛け声でバトルは始まった、最初は御羅がせめてきた

御羅「行くぜ!! ラリアット!!」

まず御羅は右腕を垂直にしてそのままラッシュに当てようとした

ラッシュ「ふん!」

ガシッ

ラッシュは腕を受け止めた

ラッシュ「オラァ!!」

そのまま腕を離さずに御羅を振り回した

御羅「うおっ!」

振り回して御羅を上へと投げた

御羅「うおお!!?」

御羅はそのまま上へと放り出された

御羅「くっ！なら必殺！改プロトセイバー！！」

御羅はかかとおとしの体勢で落ちる、そこから右足を振り下ろした

ラッシュ「守る！」

ラッシュは守るで防いだ

御羅「いってー！！！！？」

御羅は着地して右足の痛みを抑えた

ラッシュ「どうした？それじゃ俺に勝てないぜ？」

とうの本人は余裕だ

御羅「くっ！やるじゃねえか、それでこそやりがいがあるぜ！！」

なぜか気合が入っていた

観客席

リザレ「あの御羅っていう人、すごいね（汗）」

ゴウ「マジで人間なのに（汗）」

リザレとゴウ、その他のメンバーは御羅に対してタジタジだった（汗）

ホムラ「だが元不良のラッシュはかなり強いかしな」

一度ラッシュとバトルした者達はそのように感じていた、ラッシュの強さに

……

御羅「こうなったらポケモンの技を使うぜ！！ブレイズキック！！」

御羅は再びラッシュに接近して右足に炎を包んで蹴った

ラッシュ「ほっ！」

ラッシュは軽々とかわす

御羅「まだまだ行くぜ！！炎のパンチ！！」

今度は拳に炎を包んで殴る

ラッシュ「おっと」

これも軽々とかわしていった

御羅「なら弱点であるこのパンチは効くだろ！雷パンチ！！」

なんと雷を帯びたパンチを繰り出した

ラッシュ「こっちも雷パンチだ！」

ラッシュも雷パンチで応戦

互いの拳がぶつかり合う

御羅「負けねえ!!」

気合で御羅はラッシュを押す

ラッシュ「やるなくだがこれならどうだ?ドラゴニックラッシュ!」

ラッシュは青い炎をまとった拳で連続攻撃した

御羅「何っ!?!ぐあっ!?!?」

御羅はドラゴニックラッシュを受けてしまいそのまま倒れてしまった

ゼルス「御羅戦闘不能、ラッシュの勝ちだ」

こうして勝利はラッシュになった

……

御羅「くそおゝ負けちまった、これじゃあ俺の番長の夢も」

そうなげいでいると

ラッシュ「お前も中々だったな、かなり修行しているみてえだな」

と、ラッシュは御羅を褒める

御羅「そういわれるとありがたいな、あんたには負けたよ、そこでお願ひがある！」

御羅はラッシュにお願いをした、その内容は

御羅「あんたの弟子にしてくれ！そしてここのバトル部に入れさせてくれ！」

と、土下座してラッシュにお願いする

すると

ラッシュ「顔上げろよ、もちろんお前の事気に入ったぜ♪」

と、グーサインをするラッシュ

御羅「ありがとな！それで後な、ホテルとか何処か泊まる所ないか？」

と、泊まる所を要求した、そこでラッシュは

ラッシュ「そんなじゃ俺のところにしばらくいな、俺とリザレとラゲとゴウがいるから増えても大丈夫だ♪」

御羅「そんなじゃしばらくラッシュ、いや師匠のところに世話になるぜ！よろしくな！！」

こうして御羅負狼がバトル部の仲間になった

バトル82 元不良と不良くラッシュVS御羅（後書き）

御羅「師匠のところで世話になるぜフォック！！」

元気がいいね（汗）

御羅「ったりめくдаро！！ここで強くなって番長になってやるぜ！！」

一応言うけど番長はモモだから（汗）

御羅「それを早く言えよ！！あの猿なんだな！！それじゃあ今すぐ勝負を」

待て待て（汗）そこまで早くできないから少し我慢してね（汗）

御羅「早く勝負してえく！！」

ラッシュ「時には待つことも大事だぞ」

御羅「しゃあねえな、師匠がそこまでいうならしかたねえ、そんじやフォックよろしくな！！」

こちらこそ

バトル83 記憶喪失のカイリューと少女（前書き）

ラッシュ「ん？このタイトルはなんだ？」

今回もまたこっちに来るキャラが出てくるよ

ラッシュ「それは楽しみだな」

ホムラ「師匠、一体誰が出るんですか？」

それは見てからのお楽しみ（笑）

リザレ「気になるね」

ゴウ「早く始めようぜ」

御羅「戦いてえ！！」

はいはい（汗）それじゃあバトル83

ラッシュ「行くぜえ！！」

バトル83 記憶喪失のカイリューと少女

もう梅雨の時期の6がつ

天気は今は快晴、絶交のバトル日和だ

今日は土曜日だが今回もバトル部メンバーはトレーニングに励んでいる

ラッシュ「リザレ、大丈夫か？」

ラッシュはグラウンドと一緒に走っているリザレに聞いた

リザレ「俺は大丈夫です先輩」

リザレはガッツポーズして自分の調子は大丈夫だと伝える

レウト「火竜炎弾!!」

レウトは連続で火球を吐いた

ホムラ「火柱!!」

ホムラは火柱を作り火球を防いだ

御羅「改プロトセイバー!!」

御羅はエイクに向かって蹴り上げた

エイク「ぐはっ!？」

エイクはダメージを受けた

御羅「どうした!! もっと俺を燃え上がらせろ!!」

と、気合十分な御羅

エイク「ならあの技で行くぜ!!」

するとエイクはバナナの皮を取り出して自分の目の前に投げた

エイク「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

アカムトルムとは思えないほどの足の速さでバナナの皮に向かって
走り滑った

エイク「バナナアタック!!」

御羅「ぐはっ!？やるじゃねえか!!」

御羅はダメージを受けたが倒れる様子はなかった

エイク「効くのにな」

あんまり修行していないエイク、修行しろよ(汗)

ちなみに、今メンバーの中にはいない者達がいた

ゴウ「そういえばリリーとがばねの姿がないな」

ゴウがそういうとラッシュが説明した

ラッシュ「リリーとがばねは都合によりしばらくは休みだ、大切な人達がいなくなってな、今はそっとしておけ」

ゴウ「そうだな」

二人はしばらくは休みになりそうだ

……

その頃、別の場所にはある二人が迷ってるように空にいた、まず一人は少女だ、深緑のワンピースにジーンズ、髪は黒で長い

もう一人はポケモンだ、体は大きいがそれより小さい両翼、少し黄色い体色にクリーム色のしましまのお腹に尻尾、頭には二本の白い触手に小さい角、目は鋭い

ドラゴンポケモンのカイリユーだ、だが普通のカイリユーとは大きく、普通のカイリユーの特徴であるかわいい目付きだがこのカイリユーの目付きは鋭い

少女「ねえ？アルス？私達何処にいるのかな？」

少女はアルスと呼ばれたカイリユーに言う

アルス（カイリユー）「それはこっちがききてえよ、俺達の所とは

違うようだしな、どうするんだ？ シュナ」

アルスはシュナと呼ばれた少女に言う

シュナ「うーん、あっ！あの建物の所に誰がいるよ！」

シュナが下を指差した、そこには数名の小さいものがいた

アルス「誰かいるみたいだな、それじゃあしっかりつかまってる！」

アルスはシュナにそういい、下へと飛んでいった

……

ラッシュ「ん？誰かくるな」

リザレ「先輩何か感じたんですか？」

その頃バトル部の方、ラッシュは何か来るのを感じた

すると上空から何かがこちらに迫ってきた

リザレ「なんなんだろう？」

リザレは首をかしげると

ゴウ「あれは！？カイリユーと少女がこっちに向かってくるぞー！」

どうやら先ほどの少女とカイリユーのようだ

ラッシュ「とりあえず離れたほうがいいな」

着地時点を見極めてラッシュ達は離れた

するとカイリユーはボハリングしてグラウンドに着地した

アルス「ふう〜とりあえずは降りたか、シュナ大丈夫か？」

アルスはシュナに無事を確認する

シュナ「大丈夫だよ」

シュナは無事のようにだ

アルス「ん？なんだお前ら？」

突然の登場にバトル部メンバーはざわめいた

そこにラッシュがアルスに近づく

ラッシュ「ここはポケハン学園のグラウンドだ、お前は誰なんだ？」

唐突にラッシュがアルスに聞く

アルス「そうだな、俺はアルス、それでこっちがシュナ、人間だ」

アルスは自己紹介してシュナを紹介する

ラッシュ「アルスにシュナか、俺はリザードンのラッシュ、バトル

部の部長だ」

シュナ「バトル部？」

シュナは疑問に思った

ラッシュ「まあバトルする者が集まる場所で部活だ」

というラッシュ、だがアルスは

アルス「部活？よくわかんねえな」

アルスは頭に？（ハテナ）が浮かんでいた

ラッシュ「わかんねえか、お前の波動を見ればアルスといったか、お前記憶喪失で色々とわかんねえようだな」

アルス「!？」

これにはアルスは驚いた

シュナ「えっ!？アルスが記憶喪失だとわかってるの!？」

シュナも驚く

ラッシュ「俺には波動が使えるからわかるんだ」

シュナ「でもリザードンなのに波動が使えるなんて」

シュナは咄然とした、リザードンなのに波動が使えることを

アルス「まあいいか、それよりラッシュュだったな、ちょうどウォーミングアップしたところなんだ、俺とバトルしてくれないか？」

なんとアルスがラッシュュにバトルを申し込んだ

ラッシュュ「いいだろう、お前とやるとなんかすごくなりそうだしな
♪」

ラッシュュは微笑む

アルス「ずいぶん余裕だな？俺はそう簡単にはいかねえよ」

と、アルスはラッシュュに言う

ラッシュュ「俺もそうはいかねえよ、それでもお前とバトルしてみればわかる」

二匹のポケモンが激突する

バトル83 記憶喪失のカイリューと少女（後書き）

シュナとアルスの不思議な旅から、シュナちゃんとアルス君です

シュナ「初めましてシュナです」

アルス「アルスだ、記憶を取り戻すためシュナと旅をしている」

ラッシュ「ついに来たな」

アルス「まさかあのバトル部から来るとはな、だが俺もちょうど体を動かしたいところだしな」

ラッシュ「負けねえぜ♪」

アルス「ああ、ちょうどいい相手になりそうだしな」

次回はついに対決です、お楽しみに

バトル84 ラッシュVSアルス〜力と力〜（前書き）

ラッシュ「ついにバトルだな」

アルス「俺はそう簡単にいかねえぞ？」

ラッシュ「それはどうかな」

アルス「そこまでの自信だな？」

ラッシュ「まあ楽しくやろうぜ♪」

アルス「ああ、俺もちょうどそうしようと思ったんだな」

それじゃあバトル84

アルス「やってやるぜ」

バトル84 ラッシュVSアルス〜力と力〜

バトルフィールドにはラッシュとアルスがいた

互いににらみ合う

ゼルス「二人とも、準備はいいか？」

ゼルスが二人に聞く

アルス「俺はいいぜ」

ラッシュ「俺もだ」

二人とも準備万端だ

ゼルス「それではバトル開始!!」

ついにバトルが始まった

観客席では

シュナ「アルスがんばって！」

シュナはアルスを応援

ホムラ「この戦いはどのようなになるでしょうか!!」

レウト「すげえ戦いになりそうです!!」

こちらレウス二人は実況

リザレ「アルス強そう」

ゴウ「強く感じるな」

……

アルス「俺から先にいくぜ」

アルスが先にラッシュに攻撃する

アルス「きあいだま!!」

アルスは青いエネルギーを両手に込めて放った

ラッシュ「フレアソウル!!」

ラッシュはフレアソウルに対応

それぞれの攻撃は打ち消された

アルス「やるじゃねえかよ」

ラッシュ「お前もな」

お互いニヤリと笑う（アルスは目が少し鋭いが）

アルス「だがこれでどうだ！でんじは」

ラッシュ「くっ！」

ラッシュはでんじはを受けてしまったが

ボンッ！

ラッシュは突然光の粒子で消えてしまった

アルス「身代わりか！」

ラッシュ「そうだ！」

ラッシュはアルスの真上にいた

ラッシュ「雷パンチ！！」

ラッシュは雷を帯びた拳でアルスに殴りかかろうとしていた

アルス「ドラゴンクロー！！」

アルスはドラゴンクローで防ぐ

竜の爪と雷の拳がぶつかり合う

ラッシュ「くっ！」

ラッシュとアルスは後方に下がった、力は互角のようだ

アルス「お前かなりつええな」

ラッシュ「お前も結構つええじゃねえか」

と、互いにニヤリとする

観客席では

シュナ「アルス、なんだか楽しそう」

シュナがそういう

リザレ「きつと先輩という強い相手と戦えたことに思えたんだと思うよ」

そこにリザレが言う

ゴウ「アルスっていうカイリユ―つええな」

そこにシュナは

シュナ「アルスは強いよ、記憶喪失でもあたしのために」

アルスには守るべき者がいる、それが彼の強さでもある、記憶はなくしても戦いは刻まれる

……

ラッシュ「そろそろ俺もこれを使わせてもらうぜ、セイントリミッ

ト!!」

ラッシュの体が光に包まれる

アルス「それがお前の力なんだな…おもしれえ!!…やってやるぜ!!」

お互い構える

アルス「竜の舞!!」

アルスは竜の舞で能力を上げる

ラッシュ「そんじゃお前の全力を俺に見せてみろ!!」

アルス「ああ! やってやるぜ!!」

二人の気迫が出る

アルスは思った

これが…楽しいバトルなんだな…と…

ラッシュ「セントラッシュ!!」

アルス「ドラゴンダイブ!!」

お互いの技がぶつかり合う

ラッシュ「オラオラオラア!!」

ラッシュは連続の光のパンチを

アルス「うおおおおおおおおおおおおおっ！……！！」

アルスはパンチを受けながらドラゴンダイブ

すると突然爆発する

観客席

シャナ「キャッ！？」

リザレ「うわっ！？」

ゴウ「うおっ！？」

ホムラ「うっ！？」

レウト「うわっ！？」

全員顔を覆う

……

煙がもくもくとしていた……

煙が晴れるとそこには

ラッシュ「はあ…はあ…」

アルス「ぜえ…ぜえ…」

ラッシュとアルスはボロボロになってもまだ立っていた

ラッシュ「お前とバトルできて…よかった…た…ぜ…」

アルス「お前もな…ラッシュ…楽しいバ…トル…だった…ぜ…」

二人はニヤリと笑いながら倒れた

ゼルス「両者戦闘不能！」

この対決は引き分けとなった

倒れてる二人は…

ラッシュ「なあアルス…」

アルス「なんだ…」

ラッシュとアルスはまだ倒れてはいた

ラッシュ「楽しかったろ？…バトル…」

するとアルスはニヤリとして

アルス「ああ…楽しかったぜ…こんなバトルできたことがな…」

互いが認め合っていく

その後、シュナとアルスはバトル部に入部と同時にラッシュとともに住むこととなった

バトル84 ラッシュVSアルス（力と力）（後書き）

ラッシュ「引き分けか…」

アルス「俺はよかったぜ、これがバトルなんだなって」

熱い思いとかもあるし、燃えるのがバトルなんだ

アルス「かなりのウォーミングアップでよかったぜ、ありがとな」

どういたしまして

アルス「お前も作者なのに気遣ってくれるんだな」

まあそうだけどね

ラッシュ「作者も色々あるがそれでもな」

アルス「まあ悪くはねえよ」

ありがとう

バトル85 エイク修行作戦!! (前書き)

ラッシュ「エイクか」

うん、あのなまけアホムの根性たたきなおしの回です♪

御羅「師匠!! ぜってえーあいつの根性をたたきなおします!!」

がんばってね

ホムラ「いつの間にか御羅が師匠の弟子になったんだ？」

リザレ「なんかフォックさんのアルテマがすごかったみたいでそれで弟子になったって」

ホムラ「そんじゃ俺は先輩ってことだな」

御羅「よろしく!! ホムラ先輩!!」

ホムラ「威勢がいいみてえだな、そんじゃ御羅!! タイトルコール行くぞ!!」

御羅「オーッス!!」

気合入ってるね、バトル85

ホムラ・御羅「行くぜえ!!」

バトル85 エイク修行作戦!!

こちらは大きな家、でかい者でも入れる、屋根は赤で壁は白い

ここはラッシュユの家、家の中をのぞくと

ラッシュユ「それじゃあこれから部活会議を始める」

全員ではないがみんな集まっている

そこにはゼルスもいた

ゼルス「今回みんなに集まってもらったのはもってのほか、エイクの部活さばりと修行なまけについてだ」

冷静なゼルスさんだが少しムツとした表情だ

ラッシュユ「最近、エイクがギャグ技とかで部活を休んでいる、偵察から帰ってきたルガーによれば、どうやらギャグ技の考えだけでなく、本格的にさばってゲームなどをしているらしい」

どうやらエイクの事についてだ

エイクはこのところ部活をさばり、さらには部活にいかずにゲームなどしてなまけている、エイクの強さは十分だが修行しないとその強さはもったいないほどになる、元人間でも部活に來ないのはあんまりだ、もちろん今いるメンバーの中でエイクはいない

ゼルス「顧問のガル先生も怒っている、これではトレーニングしている意味がない」

リザレ「これじゃあなんのためにここに来ているのかわかりませんね」

リザレはそういう

ラッシュ「リザレ、体の方は大丈夫か？無理はするなよ？」

リザレは元々体が弱いほうなので倒れそうな感じもあったが

リザレ「大丈夫です…それにラッシュ先輩のそばにいるから少しはやわらげているので」

リザレは今ラッシュのとなりにいる、リザレはラッシュといえるほうがホッとしているが部員みんなだと色々と倒れそうな感じもあるが、リザレはそれでもみんなと仲良くなりたいたいという気持ちもあってここにいるのだ

レウト「とりあえず薬はあるみたいだから大丈夫だろ？」

リザレにはとりあえず薬は用意してある、一度病院に行って診察して、薬をもらってきている

リザレ「ごめんみんな…」

暗くなるリザレだが

ラグ「そんなに暗くならないで、みんなリザレ君の味方だから」

ラグがリザレを励ます

リザレ「ありがとう、ラグ」

ラグにありがとうと言うリザレ

ゼルス「それじゃあ続きを話すぞ、そこでエイクの怠けを直すことにした」

エイクの怠け癖、それを直さないとエイクは弱いままのアカムトルムだ（元人間だけど（汗））

御羅「何か作戦を考えねえとな」

御羅はめずらしいことを言う

ホムラ「めずらしく言うな、御羅」

ちなみに御羅はホムラととなり、御羅とホムラは仲良しなのだ

ラッシュ「まあ最近御羅とホムラは仲良くなってるな、感心だ」

ラッシュは二人を褒める

レイス「とりあえず作戦を考えた方が」

レイスの言葉でみんな一丸となり作戦を考える

アルス「作戦って言われてもなあゝもぐもぐ、俺は頭はあまり使う

ほうじゃねえんだよな」

アルスは好物のリンゴをもぐもぐと食っている

シュナ「アルスはいいよ、あたしが考えるから」

代わりにシュナが作戦を考える方にまわった

アルス「俺が頭良かったらな」

のんきにリンゴを食うアルス

……

ブレイ「これでいいな」

ルガー「明日決行だ」

ゼルス「今日はここまでだ、それじゃあ解散!!」

ゼルスの言葉でみんな帰っていった（ラッシュと同居している者達以外）

……

次の日

今日は休みだが部活の日だ

こちらはエイクの家

エイク「Z Z Z……」

エイクは寝ていた

プルルルル…プルルルルル…

突如電話がなった

エイク「ん…なんだよ朝っぱらから…」

ガチャ

エイク「は…いいエイクですけど…」

寝ぼけながらエイクは電話をする

ラッシュ「エイク、今日海とかに行こうと思ってるが一緒に行くか？
』

なんとラッシュから海に行く誘いが来た

エイク「あ…わかった…じゃあ用意していく」

ラッシュ『場所はポケハン学園のグラウンドで待ち合わせな…待ってるぜ』

ガチャ

……

ピッ

ラッシュ「これでなんとかおびき寄せたな、おい！こっちの準備はどうだ？」

そこにはレウトとリオ、それから御羅とホムラだ

御羅「ばっちりだ！！」

ホムラ「あいつをうまく誘導するからな」

レウトとリオの尻尾にはロープはついており、その先にはなんとバナナの皮だ

御羅「ケ〇〇みたいな奴だ、バナナの皮で誘導してやるぜ！！」

気合が入る御羅

ラッシュ「それでOKだ」

ついに作戦は決行される

……

エイク「はあ〜やっとなついたら〜それにしてもラッシュ達は何処だ？」

ここは水ポケモンや海竜種や魚竜種が修行や遊びに来る海岸、そこにエイクがやってきた、それもすごいスピードで

エイク「はあ……はあ……やっ
と追いついた……」

すでに汗だく

バナナの皮は海岸のと真ん中

[illegible]

アカムとは思えないスピードでバナナの皮に駆け寄る

後少しでバナナの皮に近づいたその時!?

ズボツ

[illegible]

なんと落とし穴にはまってしまった

アカム「くっ！ちくしよお抜けねえ！！」

落とし穴に落ちてしまい抜けなくなってしまった

ラッシュ「やっとな」

ラッシュと他のメンバーがエイクの前を囲む

エイク「これはどういうことだ！」

エイクは言うど

ゼルス「それはこっちのセリフだエイク、なぜお前はそうなったのかわかるか？」

ゼルスはエイクに質問した

エイク「そういってもな」

ラッシュ「わかってないようだな」

アルス「お前が修行さぼるからだろ？」

エイク「なっ!？」

エイクはグサツと胸が突き刺さる

ラッシュ「お前がなまけているから俺達がこうしたんだ」

だがエイクは

エイク「俺は十分強い！それにギャグ技だって…」

そう言おうとしたが

ゼルス「それでも修行しないと体はなまってしまい弱くなる、お前はそう思っているが体はそう感じている、お前はバナナの皮を追いかけたときどうだ？」

そう、バナナの皮を追いかけるようにしたのは今のエイクのなまけをチェックするためのものだ

リザレ「エイクはここに来て汗だくだったでしょ？それが自分なまけてる証拠で弱っている証拠だよ」

リザレに厳しい言葉を言われた

だが

エイク「俺は十分強いぜ！！何ならみんなかかってこいよ！！」

なんと反省する気もなくみんなを挑発する

だがそれがみんなに火に油を注ぐことになることになるとは

ラッシュ「そうか：じゃあこの場でお前の根性を叩きのめす（怒）」

ゼルス「反省する気はないようだな（怒）」

リザレ「同感ですラッシュ先輩（怒）」

ラグ「みんながんばってるのに（怒）」

ルング「お前だけ楽にしようとしやがって(怒)」

ハンターラセ「殺す(怒)」↑殺気

レウト「お前な(怒)」

リオ「俺達が(怒)」

ホムラ「どんだけお前のためにやってると思うか(怒)」

異世界ラセ「自分が強いからといって(怒)」

ブレイ「調子に(怒)」

ルガー「のるな(怒)」

みんなエイクを睨みつけエイクは汗だらだら

アルス「お前舐めてんのか?(怒)」

ゴウ「俺達だって(怒)」

御羅「やってんだよ!!!(怒)」

全員怒りのボルテージが上がった

エイク「ちょっ!?!タンマ!?!」

全員『問答無用!!(怒)』

バトル86 カクサスからの依頼（前書き）

ラッシュ「カクサスから？」

これはラッシュ宛に来たわけじゃないよ、そして今回はあの：

ホムラ「師匠くどうしたんですか？」

これは言えない（汗）

御羅「何がなんだかしらねえけどなにかあるんだろ？」

そう

リザレ「カクサスと関係あるキャラですか？」

あたり、さすがリザレ君

リザレ「当たっても逆にいやな予感しかない（汗）」

まあそれがあの二人により吹っ飛ばされるけどね、バトル86

リザレ「燃え上がれ」

バトル86 カクサスからの依頼

今日はいつもの平日だが：

レウト「夏休みだあああああああああああああああああああ
あああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ゴ
ス
ツ
!
!

ホムラ「うつせえ!!」

レウト「酷いよホムラ」
（泣）」

レウトはホームに叩かれ頭にたんこぶができていた、コントのように始まったが今日から夏休み、バトル部も夏休みだが部活もかぎりがあり、日数もある

御羅「よし！！早速特訓するぞエイク！！」

エイク「へいイ泣」

エイクは涙目になりながらも真面目にトレーニングに励んだ、前回みたいにメンバー全員を挑発しないようにしようとエイクは二度とそうしないよう誓った

「ラッシュ
おりゃあ！！」

ラッシュはサンドバックで連続でパンチを繰り返した

ラッシュ「ふう〜」

ラッシュの体に汗が落ちる

リザレ「先輩も気合はいつてますね」

そんなラッシュととなりでリザレはトレーニングしている

ラッシュ「無理はすんなよりザレ」

ラッシュはリザレに注意をしたが

リザレ「大丈夫です、先輩がいるから俺はやれますしがんばれます
！」

ここのところラッシュと出会ってからラッシュとも距離を縮めるようになり、お互い仲良くなっている

ラッシュ「（ここまでがんばるリザレもすごいな…暗い感じがなくなってきたいるな）」

ラッシュは波動でリザレの様子を見てリザレも問題なくトレーニングしている、そこに

ゼルス「ラッシュ、カクサスから手紙が来ている」

ゼルスだ

ラッシュ「カクサスから？」

ラッシュは手紙を受け取り早速読んだ

拝啓ラッシュ

こちらは元気にやっている、向こうは元気にしているか？あれから俺達はがんばっている、それからスバルはアイリスともカップルとなりスバル争奪戦が激しくなったがそれでも元気に過ごしている、おっとこんなので手紙をしたわけじゃない、実はスバルとアイリスのカップル成立の話だけじゃない、頼みがあってこのように手紙になったが、ラッシュとそれからサクラとレイラにしか頼めない相談だが、実は俺の妹の事でお前達に頼みがあつてな、俺の妹の名はアスカというんだがあいつは俺にいつもしつこくしていてな、しまいには俺が殺されそうだったんだ、まあみんないたから止められたけどな、それにあいつはKYになってさらに頭も悪くてな、このままでは俺もやばくてな、まあ治っても離れたい気持ちはあるけどな（汗）そこでラッシュ達にしばらくアスカのこの異常なまでの性格などを直して欲しいんだ、さらにスバルからも異常に大変な者達がいてな、この件をサクラとレイラなどにしてほしくて手紙を送った、もしOKなら今すぐにでもアスカをそちらに向かわす、返事をよろしくな

追伸

それからスバルとアイリスも近いうちに遊びに来る、俺は行かないがスバルとアイリス、その他の者も来るからその時はスバル達の方もよろしくな、それじゃあな

カクサス

ラッシュ「これはカクサスも危ないってことだなこりゃ（汗）」

リザレ「カクサスも苦勞しているんだね（汗）」

想像しただけで冷や汗がかくりザードとリザードンの先輩後輩コンビ

ゼルス「まあこのままじゃカクサスが危ないからな、しばらくは預かったほうがいいな」

ラッシュ「サクラとレイラにこの件まかせたほうがいいですね、やっぱ女性ならやっぱこの二人とアオイがいますから」

どうやら決定のようだ

ラッシュは部活が終わった後手紙を送ってカクサスのところに郵便屋に届けていった

だがこれにより彼の妹が後に二人によって大変なことになるとは、まだ彼女には知るよしもなかった

バトル86 カクサスからの依頼（後書き）

はあくやつとアスカとダイアナとかを登場できるようにするよ

ラッシュ「嫌な予感がするが（汗）」

まああの二人に目をつけられたらもう後戻りできないしね（汗）

ラッシュ「まあカクサスも困ってるしな（汗）」

バトル87 恐怖の更正作戦!？暴走する二人の恋のキューピット(前書き)

サクラ「ついにやってまいりました!！」

レイラ「活動報告でもお伝えしたとおり、コラボよ♪」

ハイテンションだねお二人さん(汗)

ラッシュ「まあ二人は喜んでいるどころか(汗)」

レウト「黒くなってる感じが(汗)」

リザレ「なんで嬉しくなるんだろうこの二人は(汗)」

ホムラ「アオイはやらなくていいからな!な!」↑心配しすぎ

アオイ「そんなに心配しなくていいよホムラ(汗)」

それじゃあバトル87

サクラ・レイラ「おしおきよ!！」

バトル87 恐怖の更正作戦!？暴走する二人の恋のキューピット

ここはいつものポケハン学園の校門、そこに女の子4人が立っていた

????? 「ここがお兄ちゃんがかよったポケハン学園（ブルブル）」

一人は長い黒髪の少女、なぜか震えていた

????? 「ここにスバルと戦ったリザードンがいるんだ…どうしよう（ブルブル）」

一人は髪が長くて赤い

????? 「もう姉さん！そんなに震えないでよ！あたしが言った時はスバルと引き分けたんだから大丈夫よ！それにサクラさんとレイラさんに姉さんのその性格を鍛えてくれるんだから我慢してよ！」

姉さんと呼ばれたこの少女、前にここに来たことがあり面識があるのだ、髪は黒で腰まで長い、赤い髪の少女の妹らしい、彼女はイシアと言う少女だ

実はイシアは前にラッシュの依頼でついてきたのだ、その時には前に来たカクサスなどのメンバーだった

????? 「アタシ何やらされるの（泣）」

涙目になっているもう一人の少女は床に着くほどの紫の髪

そうこの4人、実はカクサスとスバルからラッシュに宛てて依頼したのだ、しかもサクラとレイラに

なぜそうなったのか？彼女達（イシア以外）を紹介して理由を言おう

まず最初に震えていた黒い長髪の少女、彼女の名はアスカ、カクサスの妹なのだ、彼女がここにいるのは完全にカクサスからの依頼というか頼みなのだ、アスカはカクサスの事が好きだがそれ以前にありえないことを思っているのだ、それは『カクサスとの結婚』という無理があるものだ、さらに彼女はカクサスを刺そうとしていた、つまりぞくに言うヤンデレというものだ、このままではやばいと思いかクサスはしばらくじゃなくて『ずっとでいいからアスカの事を頼む』ということを書いたラッシュに書いて送り、彼女の性格というかさらにKYでス〇ン〇ほどのおバカなので直して欲しいとカクサスからそう依頼されていた（汗）

次に赤い髪の少女でイシアの姉である、名前はサンナという、彼女もスバルに抱きつきすぎなどで色々問題となっており来た、イシアはその付き添いで来たのだ

最後に、紫の長髪をした少女、名前はダイアナ、彼女は麻痺毒などで相手を魅了するがこの麻痺毒が原因でスバルはとんでもないことになる、このままだとスバルが動けなくなるということで彼女も来たのだ

イシア「みんな行こう」

三人「うん（泣）」

イシア以外の三人は涙目になりながら学校に入った

……

ラッシュ「はあくなんでも俺たちがまたなきやなんねえんだよ(汗)」

リザレ「俺まで(汗)」

サクラ「しかたないわよ」

レイラ「部長などがいないとね」

レウト「副部長の俺もかよ(汗)」

ホムラ「待たされるのはどうかと思うけどな(汗)」

グラウンド

ここに待ち合わせしているのだ、部長のラッシュと副部長のレウトはまだしも他のメンバーまで待たされることになった(汗)

アオイ「まあせつかくだしね」

もちろんアオイもだ

ホムラ「たしかにな(汗)」

そんな時、4つの影が

サクラ「あっ！来た！イシアー！！ここよー！！」

4人が走ってきた

イシア「おまたせーそしてお久しぶりです！」

イシアはバトル部のメンバーにあいさつした

レイラ「元気そうでなによりだわ♪」

イシアの再会に喜ぶサクラとレイア

その後それぞれ自己紹介した

アスカ「私はアスカよ、お兄ちゃんはあたし…し…」

自己紹介しているアスカは途中言葉を失う

なぜならサクラとレイラの威圧感が襲ってきたのだ

サクラ「あなたのことは聞いてるわ、でもカクサスは嫌がってるわよ」

レイラ「妹でも私達は容赦しないわよ？覚悟しなさい」

イシア以外の三人は恐怖を感じていた、この先サクラとレイラに何をやらされるのか、それが恐ろしくなっていた

ラッシュ「それじゃあ後は頼んだ」

リザレ「がんばってください」

ホムラ「俺達はどっか行くかアオイ？」

アオイ「そうね、じゃあ行こうか♪」

レウト「それじゃあ後頼んだ」

関係ない5人（二人と三匹）は去った

残ったサクラとレイラは

サクラ「さてと…今日からびっしりといくから覚悟しなさい!! 特
にアスカ!! あんたは相当覚悟しなさい!!」

いきなりの指名にアスカは

アスカ「いやああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

恐怖ですでにやばくなっていた（汗）

レイラ「それじゃあ特訓開始♪イシアはお手伝いしてね♪」

イシア「わかった♪」

こうして彼女達の特訓が始まった

……

数時間後

アスカ「……」↑返事がない、ただの屍だ

サンナ「……」↑同じく

ダイアナ「……」↑同じく

サクラ「特にアスカは異常ね、それじゃあアスカとサンナとイシアはあたしの家でしばらく住んでもらうわ」

イシア「姉さんいくよ（ずるずる）」

イシアはサンナを引きずってサクラの家に向かう

レイラ「ダイアナは私の家ね」

サクラ「それじゃあ頼んだわ」

こうして彼女達の特訓が始まった

すでに倒れてはいるが生きています（汗）

一体どのようなトレーニングをすればこうなるのか、それは彼女達には知らない（汗）

バトル87 恐怖の更正作戦！？暴走する二人の恋のキューピット（後書き）

えーまたまたモンスターハンター狩人とモンスターの奇妙な話から
アスカ・サンナ・イシア・ダイアナの4人が来てくれました

イシア「今3人はサクラさんとレイラさんの特訓のせいでまだ起き
れないのであただけ紹介します、元ウロコトルのイシアです、姉
さんはちなみに元アグナコトルです」

サクラ「さてどうしようかしら（黒）」

レイラ「そうね（黒）」

ドル君移りすぎだよ！？

バトル８８ 復活と再会（前書き）

ついにあの二人が帰ってくる

ラッシュ「あいつらだな」

リザレ「なんか悲しいことがあったみたいで休んでたけど」

もう大丈夫みたいでよかった♪でも実はサプライズを用意したんだよね♪

リザレ「サプライズ？」

ホムラ「師匠？何を？」

それはお楽しみとしてとっておいてね、あの二人には内緒にしてあげるから

ラッシュ「これは期待できるようだな」

それじゃあバトル８８

リザレ・ホムラ「燃えてくるよ！！（ぜ！！）

バトル88 復活と再会

.....

.....

????? 「ここは…」

????? 「何処なんすか？」

????? 「たしか僕達」

????? 「死んだはずだよな？」

ここは何処かの世界、空間は青空で彼らはそこにいた、彼らは同じような感じの姿だ、グリーンベレーの頭に顔は黒く目が丸く口がついていない、体にはボタンのようなものが二つ、それぞれ色が違う

????? 「ここは生と死の狭間、君達はプリムだね」

そこに現れたのはリザードンだ、首に青いスカーフを巻いていて、腕には星のブレスレットをつけている

????? 「アンタは？」

青いプリムがそういった

フォック 「俺はフォック、作者で世界の監視者」

作者であるフォックだった

フォック「ところで君達の名前は？こっちも名乗ったからこちらも名乗ってほしいんだけど？」

フォックは彼らの自己紹介を要求

ブルー「すまない：俺はブルー」

青いプリム、ブルーが自己紹介する

イエロー「僕はイエローです」

黄色のプリム、イエローが自己紹介する

グリーン「オイラはグリーンっす」

普通のプリム、グリーンが自己紹介する

シルバー「俺はシルバー」

メタルプリム、シルバーは自己紹介した

フォック「君達がプリムレンジャーってことだね」

プリム達「！？」

プリム達は驚いていた

フォック「まあブルーというプリムとイエローというプリムは改造かなにかでそうなっているみたいだね」

ブルー「俺とイエローが改造と知っていると…リザードンなのに何者なんだアンタ…」

ブルーはフォックをじーつと見つめる

フォック「俺は作者だから知っているものは知ってるんだ、グリーンというプリムはビクプリムだね」

グリーン「なぜオイラがビクプリムだと知ってるんすか!？」

グリーンは驚く

フォック「まあ後はメタルプリムとか色々みたいだね、それより君達は死んでるみたいだけど？」

するとプリムレンジャーの四人は

ブルー「たしかに俺たちは」

イエロー「タブーによって」

グリーン「死んでしまっているっす」

シルバー「もう未練はない」

そういう4人

だがフオックは大胆な発言をした

フォック「いや君達はまだ生きることができるよ」

その言葉に

[illegible]

驚く

ブル―「待て!?!俺たちは!?!」

フォック 「死んでるってことだよね？でも俺が生き返らせてあげるよ♪」

フオックは生き返らせるという

グリーン「でもどうやってっすか？」

グリーンの答えにフオックは

フォック「任せて♪…死者の魂達よ、希望の光とともに生き返れ！
！ソウルリカバー！！」

フォックはそういう、すると周りに星のサークルが現れ彼ら4人はみるみるうちに透けて見えた姿は見えるようになった

ブルー「すごい…」

イエロー「わーい生き返った♪」

グリーン「すごいっす！！ありがとうっす！！」

シルバー「ホントに生き返った」

すると

フォック「これでなんとか大丈夫だね、さて君達をある世界に送ろうと思う」

4人「ある世界？」

するとフォックは語る

フォック「そう、実は君達に会いたい者達があっちにいるんだ、ただ君達が失ったせいで悲しい思いをしてる、だから思いっきり再会してきなさい、もう君達は生き返ったから…ホイッ」

フォックは剣を一振りした、すると彼ら4人の姿が消えかかっていたブルー「これは…」

フォック「君達をワープしようとしてるんだ、大丈夫、地獄に送るわけじゃないよ、もう君達はタブーなどの呪縛から抜けているから」

その言葉を聞いた四人は言おうとしたが消えてしまった

フォック「これでリリちゃんやがばねは喜ぶだろう、もうリリちゃ

んは悲しむことはないよ、でもまた何かあったら俺が何とかするよ」

そういうと空を飛んで何処かへと消えていった

……

リリー「ただいまー!!」

元気よい声が聞こえた、ここはポケハン学園のグラウンド

ラッシュ「おっ！リリーか、大丈夫か？」

するとリリーは

リリー「おかげさまで♪」

元気いい声で元気になったのを見せるリリー

がばね「心配かけたなラッシュ」

がばねがラッシュに謝る

ラッシュ「謝ることじゃねえよ、二人してなくなった奴らの事が気になっていたから学校とか休んだんだろ？」

そう、リリーとがばねは事情によって学校を休んでいた

リザレ「まあ今は夏休みだからよかったけど」

ホムラ「チッ帰ってきやがった」

ホムラは小声で愚痴を言った

理由はリリーの名付けのムラララが気に食わないからだ（汗）

ゴウ「まあ帰ってきてなによりだな」

そんな中がばねは何か気づく

がばね「そういえばまた増えたんだな、メンバーが」

どうやら彼らが言ってる間にメンバーが増えることに気づく

ラッシュ「ああ、まあ後で自己紹介する」

こうしてなんとかリリーとがばねは復活した

……

ガル「こうしてリリーとがばねが帰ってきてよかったな」

イックン「ホントだね」

顧問&副顧問は嬉しそうだった

ゼルス「えゝみんなも知っているとおり、リリーとがばねが事情により休みをとってあったが、今日戻ってきた、まだ自己紹介していな

いものもいるから来たものの自己紹介をしよう、ただしリリー名付けはするなよ？」

リリー「ぶっ」

ゼルスに名付けを止められふてくされるリリー

ゼルス「それじゃあまずはシュナとアルスからだ」

シュナとアルスが立った

シュナ「あたしはシュナ、戦うことはできないけどこのバトル部のマネージャーとサポーターとしてがんばりますのでよろしくお願いします」

みんなが拍手した、次はアルス

アルス「俺はカイリューのアルスだ、記憶喪失以外はなんにもねえ、以上だ」

全員唾然としたが少ししか拍手が出た

アスカ「私はアスカ、お兄…」

また言葉を失う、なぜならサクラ&レイラに睨まれ結局は言葉を失う

サンナ「サンナです」

イシア「あたしはイシア、サンナ姉さんの妹です」

ダイアナ「あたしはダイアナよ」

それぞれなんとか自己紹介した

ゼルス「えゝそれでは今日の部活は終わりだ」

ゼルスが次の説明をしたその時!?

リザレ「何かサークルが出ています!」

なんとグラウンドにサークルが現れそこから

ブルー「うわっ!？」

イエロー「わあっ!？」

グリーン「っす!？」

シルバー「うわっ!？」

4人のプリムが飛び出してきた

ラッシュ「なんだ?こいつら?」

全員が4人に駆け込んで周りに集まった

……

ブルー「ここは…」

イエロー「しかもモンスターと人間まで」

グリーン「一体ここは何処なんすか？」

シルバー「あのフォックというリザードンは何がしたいんだ？」

4人はバトル部メンバーに囲まれた

ラッシュ「お前ら誰なんだ？」

ラッシュが声を掛ける

ブルー「そっちこそ誰なんだ？」

ブルーも声を掛ける、すると何処から声が

リリー「プリムレンジャーのみんな!!」

がばね「お前ら死んだはずじゃ!?!夢じゃないよな!?!」

そこにリリーとがばねが駆けつける

4人「リリー!!」

4人はリリーとがばねに駆け寄り

リリー「みんな!!」(泣)

感動のご対面を果たした

……

ラッシュ「驚いたな、まさかリリーの知り合いでしかもプリムレンジャーのメンバーだったのか」

ラッシュはことの真実に驚く

ブルー「まあそうなんだ」

イエロー「フォックさんっていうリザードンが僕達を生き返させたんだ」

ラッシュ「作者が」

リザレ「でも再会できてよかったねリリー」

リリー「うん（泣）」

リリーはまだ涙を流している

ラッシュ「しばらくはそっとしたほうがいいな、で？お前達四人はこれからどうするんだ？」

すると四人は

ブルー「ここの部活に入っているか？」

イエロー「リリーとがばねが入ってるなら」

グリーン「オイラ達も入るっす！」

シルバー「あんたらがよければな」

すると

ラッシュ「いいぜ、せっかく再会したからな」

するとリリーが

リリー「ラッシーありがとう（泣）」

ラッシュにありがとうと感謝する

ラッシュ「それじゃあこれからもよろしくな、プリムレンジャーの
4人」

4人「よろしく（な、っす）」

バトル88 復活と再会（後書き）

はいサプライズとはリリちゃんとがばねと一緒にいたプリムレンジヤーの4人です！

ブルー「ブルーだ…」

イエロー「僕はイエロー」

グリーン「オイラはグリーンっす」

シルバー「俺はシルバーだ」

コラボさせていただいたリアルイージ先生、プリムレンジヤーの4人をありがとうございました！こちらでのコラボも楽しみにしています

イエロー「あれ？フォックさんって出るの？」

うん、バトル部メンバーの誰かと俺自身がスマハンの続編に出演することになったんだ♪

ブルー「あんた…ホントにリザードンなのか？」

リザードンで子供っぽい作者です

ラッシュ「まあ俺も出るみたいだけどな」

リザレ「先輩がんばってください！！」

ラッ
シュ
ユ
「あ
りが
とな
」

バトル89 再び登場！フレイム・ヴァルキリー&彼氏のカップル&プリティー

ついにあのカップル&三人の女の子が登場だよ！！

ラッシュ「ついにあいつに会えるな♪」

うん、それにカップル成立してるからこれからが楽しみなんだよね♪

リザレ「それは一体誰なんですか？」

ホムラ「俺も気になります師匠」

ゴウ「？」↑鈍感なためわからない

そんじゃバトル89

ラッシュ「気合いれていくぜ！！」

夏休みに入りバトル部の熱気と汗臭いにおいが漂う、そんなポケハ
ン学園の門、そこには5人の人間がいた、ほとんど女性ばかりだが
一人男がいた

???? 「やっと落ち着いたところにやってきたな、ラッシュに会
えるの楽しみだ」

その男はまるでここに来たことがあるようなように言っていた

首筋にかかるほどの長さの黒髪に左目には痛々しい傷があり、どう
やら失明しているらしい、さらに背中には太刀という武器がある

アイリス「そうだね、カクサスと一緒に行ったときとスバルと行っ
たときと変わらないな」

そう言ったのはアイリス、彼女はスバルという男と腕を抱きついた
状態でいた

どうやらアイリスはスバルとカップルとなっていたのだ

???? 「ここでスバルがラッシュというリザードンと戦ったんだ
ね」

少し恥ずかしがる女の子

髪は藍色で触角のような毛が二本生えていてさらに長い

アイリス「もう！ウィリア大丈夫だから心配しないで」

ウィリアと呼ばれるさきほどの藍色の髪の少女を励ますアイリス

ウィリア「でもここで修行すれば…」

スバル「それにイシア達もいるからな（汗）」

スバルがイシア達というのは前々回で来たアスカ達4人の事だ

????「ここで…スバルが…戦ったんだ…」

冷静なもう一人の女の子

スバル「まあプリムラにはちゃんとしてくれるとは思うしな」

スバルはプリムラと呼ばれる女の子に話す

プリムラ「そうね…」

彼女の周りに少し粉雪が出ているが気にしない

????「ここでカクサスが修行したんだ」

灰色の髪で長い髪で縛っている女性

アイリス「リナトは知らないけど、前ナデシコが言ったしね」

リナト「羨ましいな～ナデシコだけ（泣）」

リナトと呼ばれた女性は涙目だった（汗）

スバル「とりあえず入るぞ」

そういうと5人は中に入っていった

……

サクラ「そこ！漢字とか間違ってるわ！！やり直し！！（怒）」

アスカ「うええ〜ん！！お兄ちゃん！！（泣）」

アスカはサクラに厳しく漢字などを教えられているため泣いている
レイラ「アイデンティティはそう簡単に見つかるものじゃないから
色々と学ばないとね」

サンナ「わかった」

イシア「その通りよ姉さん」

レイラはサンナにアイデンティティを教える、イシアはその付き
添い

ダイアナは同じくサクラに色々とおわっている

サクラ「恋というのは毒という卑怯な手を使えば確実に振られるわ
よ、だからここは色々とか彼を好むことをすればいいわ、わかっ

たかしらダイアナ？」

ダイアナ「わかったわ」

他の男子組の方は

リザレ「セイントバースト！」

リザレは光輝く炎を吐いた

ラッシュ「守る！！」

ラッシュは守るで防ぐ

ラッシュ「いい感じだ♪その調子だリザレ！」

リザレ「はい先輩！！」

元気になっているのか少しイキイキとしていたリザレ

ホムラ「紅蓮波！！」

ホムラは二刀流で二つの剣を地面に叩きつけサメのようなヒレの形の炎の衝撃波を出してきた

御羅「地盤地震！！」

御羅は拳を地面に叩きつけ紅蓮波を無効化した

ホムラ「やるな」

御羅「そっちもな!!」

互いに認め合う

ハンターラセ「やるぞエイク」

エイク「もう嫌」(泣)

涙目になりながらエイクはハンターラセと修行していた

ハンターラセ「はあ」(呆)

異世界ラセ「食らえ!! グランドラッシュ!!」

異世界ラセは地面に大剣を指して地震を起こすが

アルス「こんなの空飛べば問題ねえし」

アルスはすぐに空を飛んで回避

シュナ「地面効果ないよ」(汗)

異世界ラセ「なぜだ!!」(泣)

涙目の異世界ラセ

リング「はっ!」

ルガー「ふん！」

リングとルガーが見えないほどのスピードで攻撃する

ルガー「さすがだな、ここまで強くなるとは」

リング「俺も伊達にゼルス兄貴と修行したわけじゃねえよ」

と言うリング

ブレイ「リングの野朗、俺のスピードを」

ゴウ「いい加減にしろよスピードバカ（汗）」

ブレイにスピード魂に火をつけるがゴウの一言で

ブレイ「何っ！？なら今から俺と戦え！！ゴウ！！」

ゴウ「なんでそうなるんだよ！？」

戦うハメになるゴウ

ゴウ「まあ俺も少しは強くなったからな、それでもなれるようにしねえといけないし」

そういうと白いオーラを出す、ブレイクオーラだ

ブルー「あいつら結構強いんだな」

テト「まあそれでもな」

レイス「俺も強くはなったけどまだまだだからテト、もう少し付き合ってくれない？」

レイスはテトに修行の付き合いをする

テト「わかった」

二匹はこの場に去った

イエロー「みんな強いね」

グリーン「すごいっす」

シルバー「リリーとがばねがやけに元気かと思っただらな」

ブルー「そうだな…」

そう思っているプリムレンジャーの4人

リリー「まあラッシーがいたからよかったし」

がばね「まあ俺も楽しいバトルが出来たからいるけどな」

そんな思いをするリリー＆がばね

……

ラッシュ「ふう〜」

ラッシュは汗を腕でぬぐう

リザレ「はあはあ…」

疲れ気味のリザレ

ラッシュ「リザレ、休憩だ」

ラッシュはこれ以上はリザレの体に障るため休憩をとることになった

…

リザレ「すみません先輩」

ラッシュ「心配かけるわけにはいかねえからよ、それにここに来てからがんばったなりザレ」

二匹はベンチで休憩している、リザレはスポーツドリンクを飲んで
いた

リザレ「はい、少しはスッキリした感じですが、ホントラッシュ先輩
には感謝しています」

ラッシュに笑顔を見せるリザレ

ラッシュ「そうか、それはよかった」

ラッシュも自然と笑顔になる

すると

スバル「おっ！　いたいた、ラッシュュー！」

なんとさきほど校門にいた5にんだ

ラッシュュ「おっ！　スバルじゃねえか！！　元気だったか！」

久しぶりの再会にラッシュュはさらに笑顔になる

スバル「お前も相変わらずな、そこにいるリザードは？」

リザレ「初めまして、リザレです」

リザレはスバルにペコリとおじぎした

スバル「リザレっていうのか、俺はスバル、前にラッシュュと戦った縁でまたここに来たんだ」

リザレ「えっ！？　そうだったんですか！？」

リザレは驚く

ラッシュュ「まあスバルは俺と引き分けたからな、それでも強いからな」

するとリザレは

リザレ「そうだったんだ…先輩と引き分けた…」

放心状態になるが

ラッシュ「大丈夫か？」

ラッシュが声を掛ける

リザレ「はっ！ごめんなさい先輩、驚いてしまって」

ラッシュに謝るリザレ

ラッシュ「いや気にするな…所でスバルはなんでここに？」

スバルは

スバル「まあこっちにしばらくは滞在しようと思ってな、俺と他の修行をするためな」

どうやら修行のためらしい

ラッシュ「そうか…ところでお前もアイリスとカップルになったってカクサスから聞いたがおめでとうな」

ラッシュはスバルとアイリスがカップルになったことをカクサスから手紙で見たため知っていた

スバル「ありがとな、アイリスは今サクラと挨拶してる」

ラッシュ「そうか…」

こうして再びライバルと再会したラッシュ

……

一方女性サイトは

サクラ「アイリス久しぶり!!!元氣く!!!」

アイリスその他ウィリアとプリムラとリナトがサクラ達に挨拶する

アイリス「おかげさまでスバルとカップルになったの!!!これもサクラとレイラのおかげだよ!!!」

サクラとレイラに感謝するアイリス

レイラ「よかったわ」

サクラ「そうね、ところでそちらの3人は？」

三人の存在に気づく

ウィリア「ウィリアです」

プリムラ「私は…プリムラ」

リナト「私はリナトっていうの」

それぞれ自己紹介する

サクラ「噂にはきいたわ、アイリスとウィリアとプリムラの3人はすごい異名を持ったみたいだと聞いたわ、すごいわ!!!」

サクラは三人に褒める

レイラ「そうよ!!こっちまできたのよ!!すごいわよ3人とも」

こっちも褒める

アイリス「えへへ／／／／」

ウィリア「褒めなくても／／／／」

プリムラ「／／／／」

三人とも赤くなる

サクラ「それとリナトは幻術とかを教わりたいてって言ってたわね？」

レイラ「私達は幻術知らないけど後で幻術を教える人を見つけるから待ってていいかしら？」

二人は幻術を使うことができないため難しいので誰か幻術を使うものを見つけることにした、リナトはそれを承諾する

こうしてしばらくスバル達は滞在することになった

バトル89 再び登場！フレイム・ヴァルキリー&彼氏のカップル&プリティ

またまたモンスターハンター狩人とモンスターの奇妙な話から主人公のスバルとスバルの彼女で再登場のアイリスと元ダイミヨウザザミのウィリアと元ギアノスのプリムラと元バサルモスのリナトが来てくれました

スバル「スバルだ」

アイリス「お久しぶり！！」

ウィリア「ウィリアです／＼／＼」 ↑はずがしがつてる

プリムラ「プリムラです…」

リナト「リナトです」

それぞれ出てきたみたいでよかった、三月語先生ありがとうございました

スバル「逆コラボ以来だしな」

そうだね、スバルとその他のメンバー（ウィリア、プリムラ、リナトは参加していない）でこっちのバトル部でのコラボをさせてもらったからスバルはラッシュと戦ったしね、ありがとう戦ってくれてスバル「こっちもカクサスが知り合っていなかったらラッシュとバトルできなかったしな」

そしてスバルとアイリスおめでとう！！色んな試練があるけどお互いがんばってね

スバル「ありがとなフォックさん」

アイリス「ありがとう♪」

バトル90 デートだよ!!! 全員集合!!! 前編 (前書き)

ラッシュ「なんだよこのタイトル(汗)」

レウト「ド○フみてえだな」

今回はあの二人と色々なことでデートです

ラッシュ「それは誰なんだ？」

それはみてからのお楽しみ、ではバトル90

ラッシュ・レウト「燃えるぜ!!!」

バトル90 デートだよ!!! 全員集合!!! 前編

ホムラ「♪／／／／」

ホムラはたくさん荷物などを持って何処かに出かけるみたいだ、一体何処に行くのか？それは2日前にさかのぼる

……

2日前

アオイ「あのねホムラ、実は最近出来たりゾートモンスターランドに行こうと思ったの、だから一緒に行かない？」

それは二人で歩いたときだった、アオイはホムラにデートの誘いもとい娯楽施設に遊びに行こうとしたのだ

それにホムラは

ホムラ「マジかよ!?!? 行きてえ!!!」

ホムラは嬉しそうだった

アオイ「よかった♪じゃあ2日後の水曜日に行きましょう、場所はリゾートモンスターランドの入口で待ってるね」

そういうとアオイは帰っていった

ホムラ「（またデートの約束か：／／／／／しかも最近できたあの娯楽施設かあゝ／／／／／」

ホムラは顔を赤くにやけながら帰路につく

ホムラ「だたいまゝ♪」

だが今日は誰もいなかった

ホムラ「誰もいねえな…あゝ2日後が楽しみだゝ♪／／／／／」

もうウキウキだった（汗）

……

で、今に至る

ホムラ「そういえばレウトまで何処か出かけるみてえゝだったがまあいいや♪／／／／／」

またまた顔をにやけながら目的地に向かう

……

リゾートモンスターランド入口

ホムラ「よっ！」

ホムラはアオイに声を掛けた

アオイ「あっ！ホムラ♪やっと来たんだね♪」

ホムラ「待たせたな」

アオイはそういわれて首を横に振った

アオイ「別に大丈夫よ、早速中に入ろうよ♪」

アオイはホムラの腕を掴んで

ホムラ「／／／／」

顔を赤くしながらのホムラと楽しみにしているアオイは早速中に入った

……

アオイ「わあゝすごい♪」

アオイははしゃいでいた

ここリゾートモンスターランドは色んなプールや温泉、さらに遊園地や泊まれる施設など様々あり、とてもいい場所なのだ

アオイ「それじゃあ早速泳ごうよホムラ♪」

ずっと腕にしがみついてはしゃぐアオイ

アオイ「ホムラ？」

ホムラはブーツとしていた

アオイ「ホムラ」

ホムラはすぐにハッとした

アオイ「どうしたの？　なんか顔赤かったけど？」

アオイが言うが

ホムラ「な、なんでもねえよ！　さあ行こうぜ！！」

やけにハイテンションになるホムラ

二人はプールで泳ぐことにした

……

アオイ「はあく気持ちいい♪」

アオイは泳いでいた

それを見ていたホムラも泳ぐ

ホムラ「（アオイすごくいいな／＼／＼／＼）」

赤くなりしまいには

アオイ「ホムラ大丈夫！？　なんか鼻血が出てる！？」

ホムラ「ハッ！」

ホムラは気づかないうちに鼻血を少し出していた

鼻血出してよかったのだろうか（汗）

とりあえずホムラを上がらせて鼻血を止めるアオイ

……

アオイ「はあゝホムラゝ鼻血出すからよ」

ホムラ「す、すまない」

まあ少なかったためかプールにはなんも影響はなかったが

ホムラ「ごめんな、そんじゃあアイスとか買うか、俺がおごるから
な」

アオイ「ありがとう〜♪」

アオイは笑顔で答える

ホムラ「（やっぱかわいいぜアオイ／＼／＼／＼）」

またホムラは赤くなる

……

アオイ「おいしい〜♪」

アオイはソフトクリームを食べていた、彼女はいちごとバニラのミックス

ホムラ「そうだな」

ホムラも同じく彼女と同じ味だ

数分後

アオイ「あ〜おいしかった〜♪」

ソフトクリームを全部食べ終えた二人

ホムラ「そんじゃあ次は温泉でもいくか!」

アオイ「うん♪」

二人は温泉に行こうとしたその時

リザレ「あっ! ホムラとアオイだ〜」

なんとリザレがいたのだ

ホムラ「リザレ!?!」

アオイ「どうしてここに?」

リザレが二人に駆け寄る

リザレ「実は先輩とサクラさんと一緒にここに遊びに来たんだ」

なんとラッシュとサクラの二人と一緒に来たのだ

そこから

ラッシュ「よっ！お前ら二人も来てたのか」

サクラ「奇遇ね、あたし達もよ」

そこからラッシュとサクラのリザードンペアが来た

ホムラ「マジかよ！？ってかお前らもデートか？」

驚きながらホムラは言う

サクラ「そうよ」

サクラは答える

ラッシュ「まあリザレを連れてきたけどな、リザレは俺と離れないようにしててな」

リザレ「俺は色々なれないといけないからこうして先輩とサクラさんと来てるんだ、ホムラとアオイはどうして？」

リザレはなぜ二人がここにいるかを聞く、そこからアオイが言う

アオイ「私達も同じよ、ホムラと一緒に温泉に行こうと思ったの♪」

サクラ「あらあたしも温泉に行こうと思ったの♪炎タイプには温泉は大丈夫だから」

水は水でも温泉なら炎タイプでも問題はないらしい

ホムラ「はあ」

ホムラは落ち込む、せつかくの二人だけのデートにラッシュ達に会ったのだから

アオイ「どうしたの？ホムラ？」

アオイが声を掛ける

ラッシュ「俺達邪魔だったか？」

ラッシュが謝る

アオイ「ねえ？デートって言ってもみんないたらいからね？」

アオイはホムラに説得する

すると

ホムラ「わかった、アオイがそういうならしかたねえ！！そんじや行こうぜ！！」

なんとか元気になったホムラ、5人は温泉がある温泉ゾーンへと向かう

バトル90 デートだよ!!! 全員集合!!! 前編（後書き）

ホムラ「師匠!!! なぜラッシュ達が（泣）」

普通のデートじゃ面白くないでしょ？それにラッシュとサクラとりザレ君も組み合わせだと親子みたいな感じにしたから

アオイ「だから3匹が出てきたのね（汗）」

ラッシュ「まさか次回も誰か出るってことか？」

まあそうだね、ホムラ君はショック受けない、せっかくアオイちゃん誘いなんだからそこは受けとっておこうね

ホムラ「師匠がそういうならわかりました」

そうそう♪

バトル91 デートだよ!!! 全員集合!!! 中編1 (前書き)

ホムラ「師匠」(泣)」

どうしたの(汗)

ホムラ「どうしてデートなのにラッシュ達と会うんですか(泣)」

まあ待ちなさい(汗)ちゃんとサプライズを用意するから(汗)

ホムラ「よっしゃあ!!! 師匠!!! マジ好きです!!!」

はいはい(汗)バトル91

ホムラ「燃えてくるぜ!!!」

バトル91 デートだよ!!! 全員集合!!! 中編1

ラッシュ「はあゝいい湯だぜ♪」

ラッシュ達は温泉に入っていた

リザレ「先輩、そろそろ遊園地に行きましょう」

リザレは少しのぼせながら言った

ラッシュ「そうだな」

ホムラ「俺も」

3人は温泉から上がりアオイとサクラと合流して遊園地へと向かった

……

レウト「怖かった」(泣)

お化け屋敷からレウトが出てきた

レイラ「ホントだらしないわね! だからヘタレなのよ」(怒)

レイラが次に出てきた

レウト「だってよぉ」(泣)

レイラ「はあゝ（呆）次行くわよ」

そう言うのとレイラはレウトを引きずって次のアトラクションへと向かった

……

リリー「ねえがばね♪ジェットコースターに乗ろう♪」

リリーとがばねの二人は遊園地のアトラクションジェットコースターに来ていた

がばね「わかったからそんなにはしゃぐなよ（汗）」

リリーはわくわくしながらジェットコースターへと向かった

がばね「おい待てよ!？」

がばねはリリーを追いかけた

……

ゴウ「なあ次どうすんだ？」

モモ「ジェットコースターに乗るぜ!！」

ゴーカードから出てきたのはゴウとモモのゴウカザルコンビだ

ゴウ「そんじゃ行こうぜ」

モモ「行こうぜ兄弟!!」

そう言うともモはゴウの手を掴んで猛ダッシュで向かった

ゴウ「おい!?! ちょっと待て!?!」

掴まれたゴウはモモに引っ張られた

……

ラッシュ「とりあえずまずは何処から乗るか?」

遊園地へと来たラッシュ達

リザレ「そうですねゝゝん? あそこで何か騒がしくなっていますけど?」

リザレが指を指したのはレストランなどの食事できるところだった
ラッシュ「ん? たしかに騒がしいなゝゝあれは!?!」

そこにいたのは

アルス「もぐもぐゝおかわり」

シュナ「アルスすごい食欲(汗)」

そこにいたのはシュナとアルスの美女と野獣な二人

しかもバイキングだった、そこから

ラッシュ「アルスにシュナ、何やってんだよ（汗）」

アルス「おっ！ラッシュか！この飯がうめえから食ってんだよ、腹減っちゃってな」

シュナ「それでアルスと食事してたけどアルスがはんぱない量を食べてて（汗）」

かなりのお皿の量に唖然としているシュナ

ラッシュ「そうか（汗）」

アルス「ところでお前らはなんでここに？」

ホムラ「俺はデートだったがラッシュと会っちゃってな」

ラッシュ「まあ一緒に遊園地で遊ぼうと思ってな」

すると

アルス「じゃあまずは腹ごしらえしてから遊ぼうぜ」

結局食事となった

バトル91 デートだよ!!! 全員集合!!! 中編1 (後書き)

ラッシュ「アルスとシュナの他にレウトとかも来てるのか(汗)」

ホムラ「師匠? そのサプライズとは?」

それはまだだよ、そして次回は他のメンバーも来るんだよねこれが♪

ホムラ「師匠(汗)」

バトル92 デートだよ!! 全員集合!! 中編2 (前書き)

今回は他のメンバーがやってきます、そしてさらにカップルが増えます

アルス「もぐもぐ、おかわりくれ」↑まだ食ってます

(汗)

バトル92 デートだよ!! 全員集合!! 中編2

エイク「この世界に来て正解だな、それに連れてきて正解だしな」

エイクはリゾートモンスターランドの入口に来ていた、もう一匹のモンスターを連れて

????? 「ここでなんとかすればいいのね」

そのモンスターは♀のようだ、黒き翼に白いお腹に足と手があるモンスター、古龍種のミラボレアスだ

エイク「それじゃあまずはリゾートで遊ぶか! ミナミ」

ミナミと呼ばれたミラボレアスが頷く

ミナミ「それにバトル部にもお世話になるから挨拶しないと」

エイク「そうだな、行こうぜ」

アカムトルムとミラボレアスの異色のカップルがリゾートモンスターランドに入っていた

……

エイクとミナミが入った後

ブルー「ここだな」

イエロー「わーい遊園地だ〜♪」

グリーン「遊び放題っす」

シルバー「息抜きしておかないとな」

プリムレンジャーの4人が来て、そのまま入っていった

……

ラグ「プール楽しみ〜♪」

ルング「息抜きでもしとかないとな」

ゼルス「休むことも大事だぞルング」

さらに数分後にはラグとジュカイン二匹がやってきた

ルング「兄貴！ラグ！行こうぜ」

ラグ「うん♪」

ゼルス「そうだな」

3匹は入っていった

……

異世界ラセ「プールだ！！ひゃっほう！！」

リオ「泳ぐぜ!!」

ハンターラセ「行こうか…」

こちらはWラセ&リオの二人と一匹がやってきて入っていった

……

スバル「なあアイリス（汗）いつまでこうしているんだ（汗）」

アイリス「だめ!スバルと一緒に遊園地行ったりきたりとかするんだから!」

こちらはカップル成立のスバル&アイリスの二匹

スバル「だからって俺にくつつきすぎだ（汗）」

アイリス「いいのいいの♪」

もはやスバルに自由の権利はない感じだった（振り回されているため）

……

リザレ「それにしてもすごいなく先輩俺ジェットコースターに乗ってみたいのですがいいですか?」

リザレはジェットコースターに乗りたがってるようだ

ラッシュ「いいぜ、そんじゃみんなでいくか」

ホムラ「そうだな」

アオイ「楽しみ♪」

サクラ「やっぱ爽快にしたいわね」

するとそこから

レウト「アレ？ホムラー！！！」

なんとレウトがラッシュ達に迫ってきた

ホムラ「なんでテメエがいんだよ！！（怒）」

ホムラの鉄槌により

レウト「ピクピク」

レウト、たんこぶができ気絶（汗）

レイラ「サクラも来てたんだ♪」

サクラ「レイラ！奇遇ね」

こうしてさらに増えてしまった（汗）さらに

エイク「おっ！ラッシュー！！」

そこからエイクまで来た

ホムラ「お前もか!!」(怒)

またもやホムラの鉄槌で

エイク「ピクピク」

エイク、レウトと同じくたんこぶができ気絶

ミナミ「あれ?エイクどうしたの?」

ホムラ「ちょっと気絶させたただけだ?…って誰だ?」

エイク「テメエ!!何俺を殴るんだよ!!」(怒)

エイクはたんこぶができた状態で起き上がる

ホムラ「だってよ」

エイク「だってよ」じゃねえよ!!」

ラッシュ「それよりエイク?こっちは誰なんだ」

ミナミの紹介を忘れていたエイク

エイク「すまねえ、ミナミっていうんだ、俺の…／／／／」

すると赤くなった

サクラ「もしかしてあんたの彼女!?!?」

エイク「あ…ああ…／／／／」

エイクはさらに赤くなる

ホムラ「まさか彼女だったとはな(汗)」

アオイ「でもまさか彼女連れてくるなんて」

みんな驚く

ミナミ「で? あなた達がバトル部のメンバーなの?」

ラッシュ「ああ、俺はバトル部部長のラッシュだ」

そしてみんなそれぞれ自己紹介した

…

ミナミ「エイクが世話になっていいわね…ねえ? 私をバトル部に入
れて、私あるところで改造されてエイクと逃げてきたの、それにま
た狙われるからこっちの世界に来たの、だからお願い!」

ミナミはお願いした、すると

サクラ「ラッシュ、どうせだから入れてあげましょう」

ラッシュ「そうだな、エイクの彼女だしな」

バトル92 デートだよ!!! 全員集合!!! 中編2 (後書き)

さらにモンスターハンター〜モンスター達の絆からミナミちゃんが来てくれました

ミナミ「ミナミです」

あのヘタレトルムの彼女ですが

ミナミ「まあエイクってそんなことがあったの？」

まあそうだけどね

ミナミ「でもあなたってすごい、魔法とか色々覚えてるけど何者？」

作者です↑キツパリ

ミナミ「(汗)」

バトル93 デートだよ!! 全員集合!! 後編(前書き)

ど
ん
ど
ん
集
ま
っ
て
き
た
部
員
達
、
も
は
や
全
員
が
集
結
し
て
い
た
、
そ
し
て
:
:

バトル93 デートだよ!!! 全員集合!!! 後編

リザレ「全員来ていたんですね（汗）」

ホムラ「（泣）」

あの後ラッシュ達は全員ジェットコースターに乗った後、他に來ているメンバーと出会いそしてほぼバトル部の面々が集合していた

アイリス「スバルとせっかくの二人きりのデートだったのに!!!（泣）」

スバルとのデートを待ち望んでいたアイリスだったが、ラッシュ達に出会ってしまったってショックだった

スバル「（少しは開放できたな（汗）サクラとレイラがいて助かる）」

スバルは安堵な気持ちだった、アイリスに振り回されて自分の自由がなかったが、ラッシュ達がいたため内心安堵の表情をしていた

……

夜、リゾートモンスターランドのホテルでは

レウト・リオ「今夜はパーッと行くぜえ!!!」

レウト&リオのレウスコンビはわいわいはしゃぐ

サクラ・レイラ「ほら泣かないの」

アイリス「うえゝん（泣）」

サクラ&レイラはアイリスをなぐさめる、よほどショックだったの
だろう（汗）

ラグ「リザレ？無理しないでいいよ」

ルング「まだ慣れてないんだろ？」

リザレ「大丈夫だよ：俺もがんばらないとみんなに迷惑かけるから」

リザレは少しふらふらしているがそれを心配したのかラグとルング
が別の部屋へと運ぼうとしたが

リザレ「水ない…」

ラグ「はい水だよ」

するとリザレは薬を取り出して水と一緒に飲んだ

リザレ「ふうゝなんとかなったよ」

リザレが吞んだ薬はリザレの心臓の脈を抑える薬である、リザレは
メタモンの細胞があるため体が弱いのだ、だが今は少しはマシには
なってきたいるが、前にバトル部のメンバーが泊まりに来たときに
大人数のプレッシャーなどで脈が上がって意識が朦朧もうろうとしてしまい

倒れてしまう場合があるのだ、つまり心臓が弱いためそうなるしまう、だがラッシュのおかげでマシにはなってきたがまだまだ、そこでリザレは病院などで薬をもらってきてなんとか抑えているのだ

ルング「焦らずにな」

ラグ「そうだよ、ゆっくり少しずつでいいから」

そんなリザレを二匹のポケモンが励ます

リザレ「ありがとう」

リザレは二匹に感謝をした

リリー「みんな楽しいね♪」

がばね「お前らまで来るとはな（汗）」

ブルー「どうせ…暇だったからな…」

イエロー「今日は楽しかった♪」

グリーン「また遊びたいッスね♪」

シルバー「みんないるからな…」

リリー＆がばねとプリムレンジャーの4人は今日の事を話し合って会話していた

モモ「あゝ疲れたぜ」

ゴウ「俺もだゝホントありがとなモモ」

モモ「いいってことよ兄弟♪たまには息抜きが必要だからな！」

ゴウとモモの猿コンビは疲れて倒れてしまった

アルス「やっぱうめえなもぐもぐ」

シュナ「アルスの胃袋ってどんなもんだろう（汗）」

アルスはもぐもぐと食っていた、そこにはかなりの皿の量があった

まあシュナが大金持ちだったため支払いはなんとかあったが（汗）

ゼルス「ラセ（ハンターの）」

ハンターラセ「はい…」

ゼルス「あんまり無理するな、闇に捕らわれては自分を見失う、それだけは覚えてくれ」

ハンターラセ「胆に命じておきます」

ゼルスとハンターラセは悩みなどの相談をしていた、悩みはハンターラセだが

スバル「こうにぎやかでいいな…まあアイリス達よりはマシだけだな（汗）」

スバルは一人で飲んでいた、しかもジュースで

異世界ラセ「よし俺も!!」

異世界ラセはレウスコンビの元へつつこんだ

レウスコンビ「ぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!」

異世界ラセとぶつかってしまい、レウスコンビは頭にタンコブがつ
いて気絶(汗)

ラッシュ「ん? ホムラとアオイとエイクとミナミは何処いったんだ
?」

ラッシュは4人がいないことに気づいた

……

ホテルの屋上

ホムラ「綺麗な星だな」

アオイ「うん」

ホムラとアオイの二人は星を眺めていた

アオイ「今日は色々あったけどありがとう♪」

ホムラ「俺もだ、ありがとなアオイ」

そんないいムードな二人、一方

エイク「こうして二人でいるのも久しぶりだな」

ミナミ「そうね」

エイク&ミナミは夜の観覧車に乗っていた（人間の状態で）

ミナミ「ねえエイク」

エイク「なんだ…」

するとミナミは

チュッ

エイク「!?!?!」

なんとキスをした

ミナミ「好きだよ…エイク」

するとエイクは

エイク「俺もだ、ミナミ」

エイクはミナミを抱きしめた、すると同時に花火がなった

……

アオイ「うわぁ〜綺麗〜♪」

ホムラ「綺麗だな…」

そんなとき

アオイ「ホムラ♪」

ホムラ「なんだ…」

チュツ

ホムラ「!?!?!」

アオイ「えへへ♪」

このカップルもまた

ホムラ「アオイ…!?!」

ホムラはアオイを抱きついた

ホムラ「一緒だからな…」

アオイ「うん…」

そんな彼らのデートはこうして幕を閉じた

バトル93 デートだよ!! 全員集合!! 後編(後書き)

ホムラ「師匠〜!! ありがとうございます!! 〳〳〳〳」

フフフ♪

エイク「俺とミナミまでこのようにやるとはな」↑アカムになってる

まあ結果オーライでいいじゃん♪この方がよかったし♪

アイリス「フオック〜!!」(泣)「なんでスバルと私のキスシーンないの〜!!」(泣)」

気持ちはわかるけどスバルの気持ちを考えて今回は出さなかったよ

アイリス「しよんな〜」(泣)」

まあまあ、さあて次回はなんとコラボ企画です

ラッシュ「ついか」

うん、それは見てからのお楽しみです♪

バトル94 バトル部大会出陣（前書き）

ついにこちらでもコラボ編となります

ラッシュ「ついにか」

コラボしている作者さんもこちらの作者さんの小説で書いていきます、つまり交互でとなります

ラッシュ「どうなるかな」

それじゃあいくよ！バトル94

ラッシュ「後6話だ！！」

バトル94 バトル部大会出陣

夏

まだ暑いそれでも、バトル部は汗臭い感じに活動している

そんなある日

ゼルス「みんな、今日はいいいニュースがある」

部活が終わりになった頃、ゼルスから話があった

全員ざわざわしている

ゼルス「実は別世界からバトル大会がある」

全員『よっしゃあ!! (やったー!!)』

なんとバトル大会があるらしい

ゼルス「そこで今日、イックン先生とガル先生と話し合った結果その大会に出る者と着いていくものを選んだ」

はたして誰なのか

ゼルス「大会に出場するのはラッシュとサクラの二人だ、それから着いていくものとしてレウトが行く」

すると

レウト「それって俺も大会に出られるってことですか？」

レウトは質問したが

ゼルス「残念だがポケモン限定の大会だ、レウトみたいなポケモンじゃないものはそのまま応援になる」

レウト「しょんな」(泣)

レウト大会に参加できず(汗)

ホムラ「まあしょうがねえよ、ラッシュュ!! がんばれよ!」

レイラ「サクラもがんばってね♪」

みんなラッシュュとサクラと応援した

ちなみに大会は4日後だ

……

夜

リザレ「先輩? 緊張してませんか？」

リザレはラッシュュと一緒に部屋で寝ている

ラッシュュ「大丈夫だ」

ラッシュは大丈夫そうだった、緊張という緊張がない

リザレ「先輩はすごいなく俺尊敬するほどだけど」

リザレは羨ましがるが

ラッシュ「そうだな、でもな、俺も昔緊張はしてたけどな」

リザレ「えっ！？先輩も緊張したことがあったんですか？」

リザレはラッシュに質問する

ラッシュ「小学生の頃にバトル大会に出た事は話たよな？」

リザレ「たしかバトル大会で優勝でしたよね？」

そう、ラッシュは過去にバトル大会で優勝したことがあった

ラッシュ「あれでも俺は緊張してたが優勝したら緊張もなくなったな」

リザレ「へえ〜そうなんですか…」

緊張は誰にでもある、それでもラッシュは

ラッシュ「勝っても負けても俺はバトルしてやる…それでもな」

それでも彼のバトルは彼らしいものだ

リザレ「そうですか…それじゃあおやすみなさい」

ラッシュ「お休みなりザレ」

二匹は眠りについた

……

朝

イックン「それじゃあ行こうか」

ラッシュ「はい」

サクラ「ええ」

レウト「(泣)」

ゼルス「(まだ塞ぎこんでるのかレウト(汗))」

じゃっかん一人塞ぎこんでいるが問題なくワープゲートを通って異世界へ

……

ラッシュ「ここがトキミチタウンか」

ここはトキミチタウンと呼ばれる町だ、ここのトキミチ大会が今回ラッシュ達が参加する大会だ、ここは大都会らしく活気がある

イックン「それじゃあ市場に行こう」

ラッシュ「市場？大会の会場でエントリーするんじゃないんですか？」

ラッシュはそう言うが

ゼルス「市場が大会のエントリー会場なんだ、それじゃあ俺とレウトはホテルを探す、イックン先生・ラッシュ・サクラはエントリーしてからホテルで合流だ」

こうして分かれて行くことになった

……

市場のエントリー会場

3匹はエントリー会場に来ていたそこには受付の男と少女とラッシュとサクラと同じリザードンがいた

だがラッシュは感じていた

ラッシュ「（なんだ？このリザードン、二つの魂を感じるな…それに一つは人間だな…どうなってるんだ？）」

少しチンプンカンプンになってきた

受付の男「じゃ、受付番号26番な、これ、組み合わせの順番でもあるから大事にな、はい、受付票」

関西弁をしゃべる受付の男は少女に26と書かれた受付票を渡した

少女「ありがとう♪」

少女は満面の笑みでこの場を去ろうとした

ラッシュ「(次だな)」

そこからイッくん先生が受付に

イッくん「すみません、大会に参加したいのですが」

イッくん先生が受付の男に話す、すると男は驚き

受付の男「ん？うわ！鳥がしゃべっとる！」

イッくん「あつすみません、僕はイャンクックのイッくんと申します、異世界からこちらのバトル大会のことを聞いて参加しにきました」

受付の男は

受付の男「あ、参加なくしかもイャンクック？聞いたことないな
新種かいな」

受付の男はそういうが

イッくん「まあモンスターですので(汗)ポケモンじゃないですが
(汗)あの僕が参加するわけじゃないのですが(汗)」

イッくん先生は焦っていた

そりゃあ別の世界からきたからそりゃあ驚くわ（汗）

受付の男「そうなん？じゃあ参加するのは誰なんや？」

するとイッくん先生は

イッくん「参加するのはあの子達なんですけど」

イッくん先生が指さすほうを見ると

少女「り、リザードン？」

少女も驚くが連れのリザードンも驚いていた

ラッシュ「さあて参加登録するか」

そこに受付の男が

受付の男「り、リザードンが！？しゃべっとる！？」

これは驚く

ラッシュ「わりいな、異世界から来たからしゃべるのは驚くよな（汗）とりあえず参加したいんだがいいか？」

受付の男は驚いた表情を見せるがなんとか立ち直り一通り説明してからなんとかエントリーを済ませた

イックン「ふうゝなんとかエントリーが終わってよかったよ（汗）」

サクラ「とりあえずホテルに行きましょう」

ラッシュ「そうだな」

ラッシュ達はホテルへと行った

……

ゼルス「来たか」

イックン「ゼルス君、こっちはエントリーを済ませたよ♪」

俺たちはゼルスさんたちと合流した

サクラ「レウトはどうしたんですか？」

そういえばレウトがいねえなゝ

ゼルス「それが大会に出られないことで部屋に引きこもってな（汗）」

引きこもりになったのか（汗）

ラッシュ「とにかく部屋へ行きましょう（汗）」

俺たちは一晩をホテルで過ごした

……

次の朝

俺達は別々に分かれて大会の調整などを行った

ラッシュ「はっ！」

ゼルス「まだまだだ、フェイントが少しぎくしゃくしてるぞ？」

俺はゼルスさんにフェイントなどの特訓をして大会まで調整した

……

サクラ「さてあたしは少しお買い物でもしてから特訓しとかなきゃ」

サクラは一人、町を歩いていた

サクラ「あら？フローゼルが歩いてるわね？」

サクラは一匹のフローゼルが歩いてるのを見た

サクラ「でもフローゼルが一匹歩いてるのはおかしいわね？誰かのポケモンかしら？」

するとそのフローゼルがこちらに向かってきた

サクラ「あたし？」

するとそのフローゼルは喋った

フローゼル「あなた、昨日のピンクのリザードンじゃない」

それは以外だった

サクラ「え？あなたに会うのは初めてよ？」

サクラは頭にハテナを浮かべる

フローゼル「ちょっとついてきて」

フローゼルにつられながら人が目立たない森に入った

……

フローゼル「ここなら大丈夫ね：ソウル・アウト」

するとフローゼルは姿が変わり

サクラ「えっ！？あなたは昨日の少女！？」

そう、フローゼルは昨日の少女へと姿を変えた

少女「あっ！説明してなかったわね」

少女は説明した

……

サクラ「その石に封印したポケモンでポケモンに変身できるってこ

とね」

????? 「その通りよ」

少女の隣にはブイゼルがいるが足がなく幽霊のような感じだった

サクラ「それにこの封印されたポケモンがねーそういうえばあなた達に名前を教えてなかったわね、あたしはサクラ、色違いのリザードンよ」

すると少女とブイゼルも紹介する

少女「私はアキ、このブイゼルのマキのマスターよ」

少女、アキが自己紹介した

サクラ「まあなんか少し寒気もした感じがあったけどまさか封印されたポケモンだったなんて」

サクラにはマキの姿は見えていた

アキ「まあせっかく仲良くなったから少しお茶しましょうか？」

するとサクラは

サクラ「そうね、色々知りたいことがあるから」

そういうと二人（一人と一匹）はお茶をしにカフェへと向かった

……

サクラ「おいし〜い♪」

サクラはケーキを食べていた

アキ「ねえあのリザードンはサクラの何？」

するとサクラは答えた

サクラ「あいつとは幼馴染、一応恋はしてるわ」

そう言うと

マキ「えっ!?!? そうなの!?!?」

ブイゼルのマキが驚く

サクラ「名前はラッシュって言うの、別世界にあるバトル部の部長をやっているあたし達は副顧問の先生とコーチと一緒に来たの」

アキ「へえ〜そうなの」

女の会話は続いた

……

アキ「なるほどね〜ポケモンじゃないめずらしいモンスターもこっちにいるんだ〜♪私もこっちに来たいけど今は無理ね」

サクラ「今は無理でもこの出会いはいいものよ、あさってはお互い

がんばりましょう♪トオルとかいう人間とリュウと言うリザードンでもラッシュは負けないわよ」

お互い会話がはずみそれから会計を済ませて二人は分かれて別々に行った

……

サクラ「ただいま」

ラッシュ「何処行ってたんだよ」

サクラはラッシュ達の元へと戻った

サクラ「昨日会った少女とおしゃべりしてきたわ♪」

イックン「あの少女だね」

サクラはラッシュ達に色々と説明した

……

ラッシュ「なるほどな…だから俺の波動で二人の魂が見えたってわけだな」

ゼルス「リザードンに変身する少年か…どうやらこれは楽しみだな」

ラッシュは高ぶるように

ラッシュ「これは燃えてきたな♪それじゃあ少ししたら昼飯食って

特訓再開だ!!」

彼らの戦いが今静かに燃えてくる

バトル94 バトル部大会出陣（後書き）

え〜今回コラボしてくれたのはソウル〜魂の戦い〜のトオル君、リザードンのリュウ君、アキちゃん、ブイゼル・フローゼルのマキちゃんの4キャラの方でした

ラッシュ「いいバトルになりそうだな」

これはこちらの小説のバトル部の視点で書いていきます。コラボしてくださったカナリアさん、どうもありがとうございます

イックン「久しぶりに出れて嬉しいよ♪」

影が薄くならなくてよかったね

イックン「作者さん（泣）」

次回はバトルとなります、お楽しみに♪ちなみに他のコラボキャラはその間お休みになりますのでご了承ください

バトル95 開幕!! 波乱の予感(前書き)

さてこちらの方も進めておかないと

ラッシュ「ついにバトル大会だな」

というわけで今度はバトル部視点の方になります、まあこっちでも書かれてなかったことも書くので

ラッシュ「さて：俺も行きますか」

それじゃあバトル95

ラッシュ「燃えてくるぜ!!」

バトル95 開幕!! 波乱の予感

大会当日

ラッシュ「それじゃあ行こうぜ」

サクラ「あたしも負けないわよ!」

サクラは女の子でも気合が入っていた

レウト「なじえ…(泣)」

涙目になっている一匹のヘタレリオレウス(汗)

ゼルス「元気出せよレウト(汗)」

ゼルスがなだめてもだめだった

イックン「ついたよ!」

一行は会場であるバトルアリーナについた、そこには大観衆が巻き起こっていた

ラッシュ「うわぁーこれは楽しみになってきたな♪」

サクラ「ラッシュには負けないわ」

一行は中に入り受付を済ませた

……

ここでラッシュとサクラはそれぞれの控え室へと向かった

ラッシュ「俺は307だな」

ラッシュは307の控え室へと入った

サクラ「あたしは308ね」

サクラは308の控え室へと入った

……

数分後

????「307…307…」

一匹のリザードンが控え室を探していた

????「ここだな」

そのリザードンは307の控え室へと入った、すると

????「あ…(汗)」

ラッシュ「おっ、お前たしかエントリー会場にいた奴だろ？」

なんとラッシュと同じ控え室だったのだ

ラッシュ「話はサクラから聞いてるぜ、トオルって言うんだろ、俺はラッシュだ、よろしくな」

ラッシュはトオルと呼ばれたりザードンに手を差し出した、トオルと呼ばれたりザードンはその手をぎゅっと握り

トオル「こちらこそよろしく」

挨拶をした

ラッシュ「ああ、それにしても人間がリザードンになるなんてな…」

トオル「!?!」

トオルは驚いていた、なぜなら自分の正体がばれていたのだ

トオル「なぜ俺が人間と?」

トオルは疑問になったため質問した

ラッシュ「俺は波動が使えるな、それにしても強そうだな、お前のパートナーか?」

トオル「まあそうだけど(汗)しかしリザードンが波動使えるなんて驚いたな(汗)」

一部のポケモンは波動が使えるがリザードンは波動は使えない

リュウ「驚いたな、まさか俺までばれるとはな」

そこからリュウと呼ばれたりザードン（マキと同じく封印されたポケモンで幽霊みたいな状態）が飛び出す

ラッシュ「なるほど、そいつがお前のパートナーか」

ラッシュは納得したようにいう

リュウ「おう！言ってくれるじゃねえか！お前同じリザードンでもすげえな！」

リュウはラッシュのすごさに尊敬した

トオル「でもすごいな、波動は普通リザードンが覚ええないはず」

たしかに波動を覚ええないが

ラッシュ「俺は修行して習得した、特殊な修行だったけどな」

特殊な修行とは、それは後に語られるだろう

トオル「ここまでやるなんて…」

リュウ「ラッシュ！俺達は負けないぜ！」

自身満々に言うリュウ

ラッシュ「言ってくれるな、じゃあお互いに決勝までいければな」

トオル「こっちもだ！決勝では負けねえ！」

それぞれが話をしたら、組み合わせ抽選会が始まったエントリーのときに受け取った受付票の番号順にくじを引く、今は昨日サクラと話したアキがくじを引いている

『皆さん、おはようございます、今日はここ、スーパーアリーナから』

テレビの実況放送が始まっていた

ラッシュ「へえ、この大会ってすごく注目されているのか」

ラッシュは実況放送に少々驚いていた

それだけ注目する大会だろう

組み合わせ抽選が始まり、ラッシュ達はしばらく様子を見ていた

……

次にアキがくじを引く、紙にはB－14と書かれていた

そして次にクジを引くのは

ラッシュ「（レウトか…）」

ただいま涙目になっているヘタレウスことバトル部副部長のレウトだ、レウトは口で紙を取った、書かれているのはA－1、続けてイックン先生がクチバシで紙を取った、書かれているのはB－9、こちらはサクラの方だ

ラッシュ「決まったな」

するとトオルがかたくなにラッシュに聞く

トオル「なあ？お前のクジを引いたドラゴンって誰？」

ラッシュ「ああ、あいつはレウトって言うんだ、あれでもバトル部の副部長だからな」

そう答えるラッシュ

トオル「へえ」

ラッシュ「まあドラゴンだが、こいつはリオレウスと呼ばれるモンスターなんだ」

リュウ「へえ、ポケモンとは違うのか？」

リュウがラッシュに質問する

ラッシュ「まあそうだな、ポケモンやポケモンじゃないモンスターもいるからな、俺達の世界はポケモンだけじゃなくそれとは違うモンスターもいるんだ」

トオル・リュウ「へえ」

そんなこんなで

係員「ラッシュ選手、第1試合なので来て下さい」

係員がラッシュを呼び出した

ラッシュ「さて、お前と対戦できたらいいな」

トオル「ああ」

二匹はお互いに交わしながらラッシュはフィールドに向かった

トオルとリュウはテレビでラッシュの試合を見る

……

アナウンサー『さあ！オープニングゲームの前にルール説明をしよう、バトルは準決勝まで5分、決勝戦は7分の時間制、引き分けの場合は準決勝まではクジを引き、決勝戦は同点優勝となり、優勝商品は山分けとなる、おっとそんなこと言っていると第1試合の選手が出てきたぞ！！』

アナウンサーが第1試合の選手を紹介した

アナウンサー『まずは昨年の準優勝、エビワラーのマサトだ！！』

まず紹介したのはボクシンググローブをつけたポケモン、エビワラーだ、すでにやる気満々のようだ

アナウンサー『反対側からは、今年初出場、喋るリザードン、ラッシュ選手！』

ラッシュ「おいおい（汗）喋るリザードンってそのままかよ（汗）」

ラッシュはアナウンサーにつつこんだ

ラッシュ「もう少しマシな紹介ねえのかよ（汗）」

アナウンサー『そう言われてもですね（汗）』

もはや何を言えいいのかわからなくなったアナウンサー

アナウンサー『えゝ少し時間がありましたがまもなく試合開始です！』

レフリーの手が上がり

カーン！！

コングになった

するとその数秒後

ずずーん

控え室

トオル「へ？」

トオルは間拔けな声を出して驚いていた

なぜなら

アナウンサー『た、倒れている！マサト選手が倒れています！』

対戦相手が倒れていたのだ

しかもレフリーも相手が気絶したと判断してカウントしなかった

アナウンサー『レフリーがカウントを……しない！完全に気絶している！』

トオル「嘘ー！？」

トオルは驚いていた、あの昨年の準優勝者が一瞬で戦闘不能にしたのだった

リュウ「ラッシュ、マジ強え（汗）」

リュウも驚き、口をあんどりさせていた

アナウンサー『まさかまさかの準優勝者が一匹のリザードンによってまさかの敗退だー！！』

レフリーはラッシュの手を掴み上げた

これにより第1試合はラッシュの勝ちとなった

……

トオル「……」

ラッシュ「よっ！」

ラッシュが控え室から帰ってきた

リュウ「ラッシュ、お前どうやって」

リュウはラッシュに質問した

ラッシュ「ああ、それはな、相手にカウンターで倒した」

トオル「すごい…」

トオルは啞然としていた

ラッシュ「まあ俺にはある人がいるからな」

ラッシュには仲間がいる、相手がマッハパンチをしかけてからカウンターでパンチして倒す、ラッシュも強くなったものだ

トオル「（これはかなりなもんだな）」

リュウ「（これがラッシュの実力）」

二匹はこのバトルが波乱なバトルになることは、まだ知る由もなかった

バトル95 開幕!! 波乱の予感(後書き)

おつかれ

ラッシュ「昨年の準優勝の割にはあっさりだったな(汗)」

あんたが強いからだろうが(汗)

ラッシュ「俺はまだまだぞ作者？」

まだまだどころじゃねえよ(汗)

バトル96 サクラ出陣！（前書き）

さあサクラの出番だよ

サクラ「遅い！（怒）」

いたたたた！！何もつねらなくても（泣）

サクラ「あたしバトルしたところ書いてないみたいで遅かったからよ（怒）」

すみません（泣）気をとりなおして、バトル96

サクラ「出撃よ！」

バトル96 サクラ出陣！

ラッシュは勝利してから次々と勝者が決まる、ついに

サクラ「あたしね」

サクラの出番が来た

アナウンサー『さあ！盛り上がってきたぞ！！次の相手はこの二匹だ！』

バトルフィールドから二匹の姿が

アナウンサー『まずは昨年ベスト8まで進んだ実力者！今年はもちろん優勝！エーフィーのエルム選手！！』

額に赤い宝石をつけて、枝のように分かれたしっぽを持つポケモン、エーフィーが元気よく飛び出した

アナウンサー『対するは今年が初出場でこちらではめずらしい色違いのリザードン！サクラ選手！！』

サクラが華麗に登場

サクラ「（相手はエーフィーね、ここはあれで）」

サクラは何か作戦を考えてるようだ

アナウンサー『それでは試合開始!!』

コングがなりサクラが最初に動いた

サクラ「火炎放射!」

サクラは火炎放射を吐いた

だが、エーフィは

エーフィ「エゝフィ!」

サイコネシスで火炎放射を無効にしようとした、だがサクラはそれを分かっていた

サクラ「メテオ!」

サクラはエーフィに隕石を降り注ぐ

エーフィ「エフィ!!」

エーフィは隕石に当たってしまった

サクラ「まだよ!エレメントスター!」

サクラはスピードスターを出してさらにその星型に全属性を追加してエーフィに向けてはなった

エーフィ「エフィエフィ!」

エーフィは避けるが、スピードスターと同じようにエレメントスターも必中技なのだ

エーフィは避けられずに倒れてしまい

カンカンカーン！

アナウンサー『なんと勝者はサクラ選手！これはすごい！魔法を使えるとは思ってもみませんでした！すごいぞ！』

観客は大歓声をあげた

サクラ「さて！次は誰と相手なのかしら？」

こうしてラッシュもサクラも全員1回戦を勝ちあがった

それから2回戦と勝ち進んだが3回戦でサクラが昨年のチャンピオンに惜しくも敗れてしまった

サクラ「はあゝあたしの負けかゝ」

落ち込んでしまった

ゼルス「それでもよくがんばった、後はラッシュにたくそう」

そして準決勝ではラッシュは謎のポケモンと戦っていた

ラッシュは炎の渦で謎のポケモンを閉じ込めたが念力で返された、しかしそこは考えていたためなんとか避けた、するとラッシュは突っ込んだ

ゼルス「相手は中々の実力だな…ん？ラッシュが突っ込んだな、相手は守るを使ったか…だが甘いな」

ゼルスさんがそんな言葉をかけた瞬間

相手は倒れた

これによりラッシュは決勝へとコマを進めた

その後ラッシュはインタビューを受けて決勝に望む

ゼルス「あの謎のポケモンは消えたか…一体なんだったんだ？」

それはゼルスさんにもわからなかった

バトル96 サクラ出陣！（後書き）

サクラ「負けちゃった」

よくがんばったよ、ラッシュがサクラの分をがんばってるから

ラッシュ「決勝まで進んだが、早くはい上がって来いよトオル、リ
ユウ」

うん、こちらの方もどうなるかな♪

バトル97 決勝戦！ラッシュVSトオル（リュウ）（前書き）

ついに決勝戦のバトルがついに！

ラッシュ「長かったな」

この勝負、見過ごせません！！

ラッシュ「気合入ってるな（汗）」

まあ久しぶりのバトル部だしいじゃん♪そんじゃバトル97

ラッシュ「全力で行くぜ！！」

バトル97 決勝戦！ラッシュVSトオル（リュウ）

トオルが前回チャンピオンを倒したのを控え室で見っていたラッシュは

ラッシュ「やるじゃねえか♪これは楽しみだな♪」

喜んでいた、まるで待っていたかのように

……

数分後

控え室からトオルが戻ってきた

ラッシュ「お疲れ様（笑）」

ラッシュは笑顔で手を振ってトオルを迎えた

トオル「約束通り、決勝戦に来たぞ」

トオルはなんとか約束を守った、そんなラッシュは

ラッシュ「当たり前だろ、ここで負けたらお前と戦えないからな」

たしかにここで負けてたらラッシュとは戦えない

トオル「なら決勝では全力で行かせてもらおうぜ」

そう決意するトオル

アナウンサー『それでは試合前に二人に意気込みを聞いていきます、ワールドの浅井さん!』

浅井『はい！フィールドの浅井です、それでは二匹に意気込みを聞きたいと思います！まずはラッシュ選手から聞いていきます！』

浅井というアナウンサーはラッシュにマイクを向けた

浅井『ラッシュ選手！決勝の意気込みをお願いします！』

ラッシュ「俺は全力で勝ちます！バトル部のみんなのためにも全力で優勝を狙います！！」

わあああああああああああああああ!!!

大歡聲が広がる

浅井『ありがとうございます！！続いてトオル選手の意気込みを聞いていきます！』

今度はトオルのところへ

浅井『トオル選手！決勝の意気込みをお願いします！』

浅井はトオルにマイクを向ける

トオル「俺も全力で勝ちます！このバトルがいいバトルであるように」

[illegible]

会場もすでにヒートアップした

浅井『ありがとうございました!!』

浅井はフィールドから出た

アナウンサー『さーついに決勝戦が始まろうとしています!!』

いよいよ決勝戦が始まろうとしていた

觀客席

ゼルス 「いよいよだな」

サクラ「ラッシュ、あたしの分までがんばって！」

レウト「俺のうつぶんはらしくくれ〜!!」

レウトは自分に対してだがそれはある意味違う意味でのことだ（汗）

•
•
•
•
•
•

一方こちらラッシュ達の世界のラッシュの家では

リザレ「先輩！がんばってください」

リザレがテレビでラッシュを応援する

ゴウ「がんばれよ！！ラッシュ！！」

ラグ「負けないで！！」

ゴウ&ラグも応援

御羅「やっちまえ！！ラッシュ！！」

御羅も応援する

しかも応援団みたいな服装で（汗）

……

ラッシュ「……」

トオル「……」

お互い無言で構える

アナウンサー『それでは決勝戦の開始です！』

カーン！！

コングがなった

ラッシュ「フレアソウル!!」

ラッシュはフレアソウルで先制した

トオル「くっ!」

トオルは空を飛んで回避した

ラッシュ「空中戦か…なら俺も」

ラッシュも翼を広げ空を飛んだ

トオル「なら炎の渦!」

トオルは炎の渦でラッシュを動きを封じ込めるが

ラッシュ「その炎の渦! 利用させてもらうぜ!」

ラッシュは力をいれるとラッシュの周りに炎が包み込んだ

リュウ『なんだ!?! あの技は!?!』

リュウは驚いていた

ラッシュ「炎まといとして利用させてもらった、動きを封じても無駄だぜ♪波動弾!!」

ラッシュは赤い気の弾を放った

トオル「わっ！ドラゴンクロー！」

トオルはドラゴンクローで波動弾を切り裂き消した

そこからラッシュがふところに入る

ラッシュ「波動弾は囷だ、ドラゴンクロー！」

ラッシュもドラゴンクローでトオルを切り裂こうとしたが

カキーン！

ラッシュ「なっ！？」

トオルはドラゴンクローを同じ技で防ぐ

ラッシュ「くっ！」

ラッシュはいったん離れた

ラッシュ「やるじゃねえか♪」

トオル「そっちもね」

互いに燃えている

ラッシュ「ならこっちも本気で行くぜ！セントリミット！！」

ラッシュは力を入れると体全体が光に包んだ

トオル「それが、お前の本気なんだな！」

リュウ『セイントリミットか…おもしれえ…！行くぜラッシュユ…！』

リュウも燃えてきた

ラッシュユ「かかってこい！」

ラッシュユは挑発する

トオル「なら全力で行かせてもらうぜ！」

トオルはドラゴンクロードでラッシュユに攻める

ラッシュユ「ならこっちもだ！」

ラッシュユもドラゴンクロードで対抗

カキーン！キーン！

互いの爪がまるで剣のように音になる

観客席

ゼルス「さすがだな…それにあのトオルというリザードンも中々やるな」

サクラ「すごい…これがバトルなの…」

レウト「すげえ」

3匹は啞然としていた

……

リザレ「先輩すごい！」

ゴウ「それにあのリザードンもすげえ！」

ラグ「ラッシュの動きについてきてるようだよ！」

御羅「いっけえ！！ラッシュ！！」

こちら留守番組はラッシュを応援

……

アナウンサー『残り時間は後1分！』

残り時間が後1分に迫った

トオル「これじゃきりがいい……ならあの技を使うしかない……ラッシュみたいにも俺もオリ技があるけどな」

リュウ『トオル！アレを使うのか！』

どうやら何か技を使うらしい

ラッシュ「何企んでるんだ？」

ラッシュはトオルに言う

トオル「企んでない、だが俺も負けられない…行くぜ！ラッシュ！
フレア・トルネード！！」

トオルの周りに炎の渦が囲まれる

ラッシュ「（炎の渦を自ら囲むだど？）」

だがそれはラッシュを惑わせるに過ぎなかった

そこからトオルは高速移動でラッシュを囲んだ

ラッシュ「くっ！なんだ…目が…熱いな…」

ラッシュは咄嗟とつひに目をつぶった

そう、この技は相手を目くらましにするのだ

ラッシュの周りにはトオルの残像がいくつもいた

トオル「（これならラッシュでも見えないな、後は残像と俺とで攻撃すれば）」

この技は残像と本体で一斉に攻撃するらしい

ラッシュはいまだに目を閉ざしたまま

ラッシュ「（熱いということは目くらましか…だが俺には）」

「はあ……はあ……」

お互いボロボロになっていた

そして…

カンカンカーン！！

なんとここで戦いの終わりのコングがなった

アナウンサー『これまでのバトル、今までなかったでしょうか：今まさにそれは誕生しました！！二匹の新チャンピオンの誕生です！』

[illegible]

会場は大歓声が響いた

なんと二匹は同時優勝をしてしまった

決勝戦

ラッシュとタオルは

見事同時優勝というのを勝ち取った

トオル「いいバトルだったぜラッシュ」

ラッシュ「お前もな」

トオルとラッシュは互いに握手をした

こうして優勝はラッシュとトオルの同時優勝で幕を下ろした

バトル97 決勝戦！ラッシュVSトオル（リュウ）（後書き）

ラッシュ「引き分けか」

決勝戦は決まらなかったら同時優勝みたいだから引き分けでも優勝だよ！

ラッシュ「ああ、そうだな…いいバトルだったぜ♪」

そして次回でトオル君達と別れます

ラッシュ「まあ別れもそうだな」

まあ会える日があるよきつと

バトル98 別れ またいつかバトルしような!! (前書き)

さあついに大会編クライマックス!!

ラッシュ「トオル達と別れるのか」

それにもうすぐで100話に突入するんだよね♪

ラッシュ「気合はいるな」

それじゃあバトル98

ラッシュ「ありがとな!!」

バトル98 別れ またいつかバトルしような!!

リュウ『うめえ〜♪』

ラッシュ「よく食うなリュウ（汗）」

トオル「俺もこいつには呆れた感じに思ってるしな（汗）」

ここは食堂、ラッシュ達バトル部のメンバーとトオル達が一緒に最後の食事をしていた、トオル達は旅の続き、ラッシュ達は元の世界へとそれぞれの道へと歩んでいく

今トオルは人間の姿に戻っている、リュウはかなりの量を食べている

ラッシュ「まあ俺も昔は結構食ってたしな（汗）」

トオル「ラッシュもか？」

その言葉にトオルは反応する

ラッシュ「昔はストレスとかで食ってて太ってたな、まあ修行してから鍛錬は怠らずにやって、すっかりやせたけどな」

ラッシュの体を見るとたしかにスリムって感じもする

トオル「すごいな、ラッシュも」

ラッシュ「お前も努力して鍛錬すれば強くなれるぜ♪まあ今度会っ

たときはまたバトルしてくれよ♪」

ラッシュは握手を求めた

トオル「ああ、またバトルできる日を楽しみにしてるぜ」

ラッシュとトオルは互いに握手した、また会える日を

サクラ「アキはこれからがんばって」

アキ「ええ、サクラもがんばってね」

こちら女性二人と

マキ『また会える日を楽しみにしてる♪』

ブイゼルになっているマキもだ

ゼルス「今回はいいバトルだったな…帰ったらまたがんばらないとな」

ゼルスは納得したように食事をしていた

だがそんな者達の中で一人

レウト「……（暗）」

大会で出られなかった哀れなヘタレリオレウスのレウトだった

……

次の日

ラッシュ「じゃあな!! がんばれよ!!」

サクラ「こっちにも遊びに来てね!!」

トオル「ありがとな!! また会おうぜ!!」

リュウ『ラッシュ!! 今度あったら負けねえぞ!!』

アキ「サクラー! 今度バトル部にも遊びに行くね!!」

マキ『元気でねー!!』

彼らは別々の道を進んだ

トオル達は旅を続け、ラッシュ達は元の世界へと帰った

……

ラッシュ「ただいま帰ったぞ」

リザレ「あっおかえりなさい先輩!」

リザレが真っ先にかけていく

御羅「おつかれ!!」

ゴウ「やったな！」

ラグ「すごいバトルだったよ！」

シュナ「すごいよラッシュ」

アルス「すげえなラッシュ」

みんな出迎えた

ラッシュ「ありがとな」

ラッシュは玄関から上がって早速部屋に向かった

……

ラッシュ「かざつとかなきやな」

ラッシュは優勝トロフィーを飾った

アルス「ここまでやるとはな」

ゴウ「俺達も応援したかいがあったな」

と、みんながわいわい騒ぐ

ラッシュ「あっ！そいえば忘れてた、実は今日ある奴が家に来る」

ある奴？一体誰なのだろうか？

リザレ「誰かまたここに住むんですか？」

ラッシュ「ああ、実は作者から更正してくれとあいつをよこしたんだ」

どうやら作者自体かららしい

御羅「一体どんな奴なんだ？」

御羅が質問してきた

ラッシュ「そいつは別世界で悪いことしてな、バトル部で更正してくれとな」

リザレ「更正ですか…誰なんでしょう？」

みんな不安もあったが期待に胸を膨らませた

ピンポーン！

するとドアからインターホンがなった

ラッシュ「来たな」

ラッシュ達は玄関に向かった

……

ガチャ

ラッシュは早速玄関を開けた、そこにいたのは一匹のポケモンで、
ゴウとモモと同じゴウカザルだ

ラッシュ「来たか、待ってたぜ♪フレン」

ゴウカザル：フレンは首を縦に頷いた

バトル98 別れ またいつかバトルしような!! (後書き)

さて、これで大会編は終了、最後に出てきたポケモンは、ななしばさんの錬金術師の探検日記一始まりの花ーから、敵だったゴウカザルのフレンが来てくれました

フレン「敵だったって(汗) まあ俺敵だけど(汗) 俺はゴウカザルのフレン、よろしくな」

今回更正のためにバトル部で新たに次回仲間として活躍させてもらいます

ラッシュ「まあなぜこのようにしたのかはななしばの所の錬金術師の探検日記一始まりの花ーの感想でわかるぜ、まあその前に本編読んでから作者の感想見ればわかるぜ」

次回はこのフレンの更正が始まります♪

フレン「強制な所もあったけどな(汗)」

バトル99 歩む道を…(前書き)

ラッシュ「後1話か…」

うん…ついにバトル100まで後1話…長かった…

レウト「俺も汗と涙n」

お前は少ししかやってないだろ(汗)

レウト「(泣)」

ラッシュ「おいおい(汗)」

じゃあレウト、タイトルコールお願いね…バトル99

レウト「突き進め!!」

バトル99 歩む道を…

ここはポケハン学園、今は夏も終わりの時…大会が終わった…数日後

フレン「ここがポケハン学園ってどこか？」

ポケハン学園の校門にはゴウカザルのフレン、そしてラッシュやレウトなどのおなじみのメンバーが来ていた

ラッシュ「ああ、ここが俺達の学校だ」

レウト「これからここに通うんだぜ」

そう、すでにフレンは入学届けを提出したため今日はバトル部の活動や自己紹介などをやり、さらにフレンの歓迎会をやるらしい

フレン「へえ〜そうなんだ…じゃあ入ろうぜ♪」

気持ちを切り替えて校門へと入っていった

…

フレン「すげえ〜…」

フレンはバトル部の部室を見て呆然としていた

バトル部の部室はそれぞれがスムーズに行けるようになっており広い

ラッシュ「まあ今日は外でやるからな」

そう言うのとフレン達は外へ

……

ゼルス「みんな来たか…集合!」

ゼルスが号令をかける

ゼルス「えー今日は新しい仲間を紹介しよう、今回更正目的でバトル部の仲間になるゴウカザルのフレンだ、みんな、仲良くやってくれ、フレン、自己紹介だ」

フレンが前に出てみんなの前で自己紹介する

フレン「俺はフレン、ある奴に進められてここに来た、元は悪だったけど、ある奴に言われてここで世話になる、よろしくな」

フレンは自己紹介した

すると

パチパチパチ

バトル部メンバーが拍手した

ゼルス「元悪だが仲良くやってくれ、フレン、お前もなれるようみんなと仲良くやるんだぞ」

フレン「はい…」

少し暗い感じに言うフレン

ゼルス「それじゃあ今日の部活…始め!!」

こうして部活は始まった

……

ゴウ「はあくやっぱなれないな」(汗)」

モモ「そのうちなれるぜ兄弟♪」

ゴウ&モモの猿二匹は滝に打たれていた

フレン「うわ」(汗)」

フレンは唾然とした、同じゴウカザル二匹が滝に打たれているのを
ハピネス『そういうなゴウよ、我もゴウとともにがんばらないとエ
ンドを倒せなくなるぞ』

ゴウの星のペンダントからハピネスの声が

ゴウ「ヘイヘイ(汗)」

モモ「ん?おっ!お前たしかフレンだったな?」

モモはすぐさまフレンを見つける

ゴウ「ああ、俺達と住むことになってな、見分けとして赤のスカーフを右腕に巻いてあるしな」

そう、ここで解説しよう

この作品にはすでにゴウカザルが3匹いて誰が誰なのかわからなくなってしまうている、そこで見分けつくためにこういう設定にしてみました

まずモモは学校などは応援団のような服、つまり長ランやボンタンという学生服を来ていて、赤いハチマキをつけている、部活のときは学生服は脱ぐが、赤いハチマキはつけたまま

ゴウは作者であるフォックからもらった星のペンダントがあり、これによってゴウ以外の者でもハピネスとの会話が可能となっている、さらに青いスカーフを右腕に巻いている

フレンはゴウが言ったとおり、赤のスカーフを右腕に巻いている

以上

モモ「まあいいや、俺達と一緒にやろうぜ♪」

フレン「えっ!？」

はんぱ強制的にやらされた

フレン「おい!？ちよつとまっ!？」

……

フレン「ぜえ…ぜえ…俺、なんでこんな目に…」

フレンはモモに振り回され疲れてしまった

ゴウ「しゃあねえだろ？俺もあいつに振り回されてんだしよ（汗）」

ゴウはなれてきたか少しの疲れを見せなかった

ゴウ「まあ…それがあいつのいいところだからな」

ゴウは苦笑いした

フレン「（モモか…俺、こんなに楽しいって思ったのはなかったな…）」

フレンは楽しいと思った

彼は子供っぽいが気持ち的にはそう感じていた

モモ「次行こうぜ♪」

フレン「え…またかよ…」

フレンは呆れる

だがその裏では苦笑いをしていた

モモ「ほらほら俺様の特訓パート1は終わってないぜ♪」

俺様の特訓パート1ってなんだよ（汗）その様子を見ていたラッシュとレウトとゼルスさんは

ゼルス「モモとゴウがいて正解だな」

ラッシュ「同じ種族でモモみたいな暴れん坊な奴にはちょうどいいと思いますよ」

レウト「フレンって子供っぽいけど案外素直なんだな」

という3匹の感想だった

フレンの更正はまだ始まったばかり

彼はどう変わっていくのか

バトル99 歩む道を…（後書き）

フレン「モモってかなり乱暴な感じもあるな（汗）」

まあモモタロスモデルだし（汗）フレンは俺と同じ子供っぽいし

フレン「あんたも俺と同じなのか？」

性格がね

ラッシュ「まあそうだな（汗）」

次回でついにバトル100に突入です！今回はバトル部の視点である方の作品とコラボします

ラッシュ「ついにか」

うん、ついに来たよ♪

フレン「なんだよ！教えてくれよ！」

次回にね♪

フレン「むゝ」↑頬を膨らませる

バトル100 とあるバトル部の壊滅編（かいめつさくせん）（前書き）

ついに100話来たぜ!!

ラッシュ「よっしゃあ!!」

レウト「俺達ついにやったぜ!!」

えゝついに記念の100話になりました、その記念すべきバトル100はある方とコラボリンクしてお届けいたします、バトル100

ラッシュ「これからもよろしくな!!」

バトル100 とあるバトル部の壊滅編（かいめつさくせん）

夏休みもうすぐ終わり、そんな彼等は部活を終えて

ラッシュの家

ラッシュ「さてと…夕食はこれでOKだな」

ラッシュ達は夕食を作っていた

リザレ「みんな今日は疲れましたね」

フレン「修行は厳しいな」

フレンは疲れてしまい横になる

ゴウ「俺もなれるまでどれだけ苦労したのか（汗）」

その経験をしているゴウはもうなれてはいたがある意味トラウマな
感じだ

シュナ「ラッシュさん、こっちは終わりました」

シュナも来て

アルス「あゝ腹減った」

食いしん坊兼大食いのカイリユー、アルスのお腹になる

ラッシュ「あんまり食べ過ぎるなよアルス」

アルス「ヘイヘイ」

アルスに注意して夕食の仕上げをしたその時

プルルルルル

電話がなった

御羅「ラッシュ、電話なってるぜ」

ラッシュ「今行く」

ラッシュは電話の子機で電話をした

ラッシュ「もしもし」

????『あっ！ラッシュ先輩！俺です！ヒロです！』

電話の相手はヒロという者からだ

ラッシュ「ヒロか、よお♪どうしたんだ？」

ヒロは少し落ち込んでる感じであわただしかった

ヒロ『実は先輩…』

ラッシュ「その様子だと何かあったんだな…俺でよかったら話してみろ」

と、ラッシュは優しく言う

と、ここで彼の事を説明しよう

ヒロというのはラッシュの進化元であるヒトカゲで、電気タイプの技が使える交雑種^{ハイブリット}という二つのタイプの技を使うことができるポケモンの事なのだ、つまり彼は炎タイプだけでなく、電気タイプも使うことができるのだ、ただしデメリットがあり、彼は不幸体質があり、不幸な事が起こっている、今回も何があったのかは明白だ

ヒロ（ヒトカゲ）『はい、実はダイルが…』

ラッシュ「ダイル？あいつがどうかしたのか？」

ダイルとはヒロの友達でワニノコである、彼はいじめられたがヒロによってヒロの友達となった

ヒロ『ダイルがあいつらに襲われて、今病院に入院してて、回復は困難だと言われたんです』

どうやら今回はダイルというワニノコを襲った奴等の事らしい

ラッシュ「ダイルが…ブラックサイドの奴等か…」

ブラックサイド

それは極悪な集団で黒い学ランを着ている最低な集団だ

前にヒロはあるブラックサイドの一員をやっつけ、ダイルをなんとか助けた、だが今回はその集団がダイルを襲った犯人だろう

ヒロ『はい：俺はなんとかしてダイルの仇を討ちたく、ラッシュ先輩に電話をかけたんです』

ヒロは一番頼りになるラッシュに電話をかけたのだ

ラッシュ「つまりブラックサイドの奴等を壊滅させるってことだな？」

ヒロ『はい：あの野郎が：俺の事を狙って』

やつらはどんな手段を使っても欲しい物を手に入れる輩だ、ダイルを狙った理由はヒロの電気タイプの力の見込みで仲間に誘い込もうとダイルを襲ったのだ

ラッシュ「なら：俺もあいつらにダイルを襲ったのなら俺も手を貸すぜ」

ラッシュは参戦するようだ

ヒロ『いいんですか？こっちも事情があると思うんですが？』

ヒロはそう言うが

ラッシュ「ああ、どうせ明日とあさっては部活は休みだ、それに俺だけじゃなく、バトル部のメンバーも許さねえと思うぜ？」

ラッシュは明日とあさつては休みのようで大丈夫のようだ

ヒロ『ありがとうございます！こっちもフォックさんにも連絡しました』

ラッシュ「あゝ作者もやっぱダイルの事でキレてるな（汗）」

どうやら作者本人も出るみたいだ

ヒロ『回復とかもできるのでフォックさんには回復を頼みました』

ラッシュ「そうか…なら俺はどうすんだ？」

ラッシュはどうするのか？

ヒロ『俺の仲間に連絡しました、明日の夜に奴等のアジトに集合です、ラッシュ先輩はそこで俺の仲間と合流してください』

ラッシュ「仲間がいたのか…わかった、明日の夜にそこに行く、やつらの居場所の地図を俺のメールに転送してくれ」

ヒロ『わかりました、よろしく願います』

プツッ

電話がきれた

リザレ「先輩？誰からですか？」

リザレが気になってきた

ラッシュ「ヒロからだ、ダイルがあいつらに襲われたんでな、明日留守番などを頼めるか？」

するとリザレは

リザレ「わかりました、俺も誰かが傷つくのいやですし、ダイル君が酷い目にあってなんて…俺も回復とかでダイル君を…」

しかしラッシュは止める

ラッシュ「後であのおたま野郎捕まえてバトル部のサンドバックにしてお返ししてやるよ、だから頼んだぜ」

ラッシュはリザレの頭をポンと叩く

リザレ「はい！」

リザレは元気良く返事した

ラッシュ「そんじゃあ他のやつらにも言うておかないとな…」

……

次の朝

バトル部屋

ゼルス「ブラックサイド…やつらが一匹のポケモンを…」

ガル「なんということを!!許さないな!」

イックン「そのダイル君って子…大丈夫かな?」

ラッシュはゼルス、ガル、イックンの3匹に事情を説明した

ゼルス「わかった、ならあのガイというニョロボンには俺達が何か罰を与えておこう」

ガル「ならサンドバックにしてバトル部の怒りを晴らすのはどうだ?」

ガルの提案に

ラッシュ「作者ならそうやりそうなのでそうしよう、俺はもういくのでこっちの方は頼みました」

そう言うラッシュは準備をしに家に帰った

イックン「でもこんなことするんて…うちの学校も色々対策とか練ったほうがいいね」

ガル「そうだな、前のスパーク団の時は対策を出していなかったしな、それにもうすぐゴッシュ達も来る予定になってる、なら色々こっちも学校の対策しておかんな」

顧問と副顧問の二匹の先生は学校対策などを考案していた

ゼルス「奴等には俺達バトル部の制裁をしておかないとな(怒)」

ゼルスは怒りを表していた

バトル100 とあるバトル部の壊滅編（かいめつさくせん）（後書き）

はい！ついに100話目からはブラックサイド壊滅編をやります

ラッシュ「ヒロの方だな」

うん、このブラックサイド壊滅編はメガネ獣人さんの「電撃ヒトカゲと正義の法則のストーリー」のバトル部視点でお届けいたします、ストーリーなど詳しくは「電撃ヒトカゲの正義の法則」で詳しいのが乗っています

ラッシュ「ついにあのおたま野朗を倒すんだな」

うん、もちろんこの俺がじきじきにね（黒）

ラッシュ「まあついに100話に入ってシリアスになってるが、応援よろしくな！」

バトル101 とある二匹の火竜（リザードン）（前書き）

ラッシュ「なんだ？このタイトルは？」

えゝ実はね…というかわかるよ

ラッシュ「まさかとは思うが俺とS」

ストップ！ネタバレだよ！ではバトル101

ラッシュ「行くぜ！！」

バトル101 とある二匹の火竜（リザードン）

夜

ラッシュ「さてと…たしかここだよな？」

ラッシュは指定した場所をホバリングしながら様子を見ている

そこは廃工場であり、月に照らされていた

ラッシュ「ん？」

ラッシュは何かを発見した

下には2つの影

ラッシュ「あいつらか？」

そういうとラッシュはその二つの影に向かう

……

一方、別の場所で

????? 「はあ……はあ……急げ!!」

真っ暗なヒワダ町の道を5匹のポケモンが駆け抜ける、黒い学ラン

を着たブラックサイドのメンバー達である

????? 「まったく……あんな奴等がいるなんて聞いてないぞ!!」

5匹の家の1匹が走りながら愚痴をこぼす、その事を思っているのは彼だけではない、ここで走っている全員が思っているはずだ、さっきの公園で起きた光景を見ていたら

????? 「とにかくこの事を早くガイさん達に……」

5匹が次の曲がり角を曲がろうとした瞬間

ドン!!

一番前を走っていたポケモンが何かにぶつかり、衝撃を受け、後方にはじき飛ばされる

????? 「イッテ~~~~~~~~危ねえじゃねえか!! 一体何処見て歩いてやがる!!」

尻餅をついた状態でぶつかった壁?に怒鳴り散らす

????? 「急にぶつかって来たのはそっちだろ? 何をそんなに急いでいるか知らないが謝るのはあんたらの方じゃないのかな?」

目の前の壁?は謝る事なく、尻餅をついているポケモンを見下ろし指摘する

見下ろしているのはリザードン

不思議な事に頭にはゴーグル、首には青いスカーフが巻かれており、背中にはリュックサックを背負っている、何より珍しいのは剣と言う名の武器を持っている事だった

????? 「(なんだ……コイツ……?)」

リザードンの前に立つ5匹のポケモン達が同じ疑問を抱く

リザードン「それで? 謝るのか謝らないのかどっちなんだ?」

????? 「うるせえ!! 謝るわけないだろうが!! おかしな格好しやがって……これ以上俺達ブラックサイドに文句言うんだったら容赦しねえぞ!!」

ピクッ

リザードンの眉が反応する

彼にとって今、聞き捨てならない単語を耳にしたからだ

リザードン「……ねえ……何に文句言ったら容赦しないって?」

????? 「ああん!? 聞いてなかったのか!? 俺達ブラックサイドに文句……」

そこで彼の言葉が詰まる、理由は簡単、自分が怒声をあげていた相手の様子がおかしかったからだ

リザードン「へえ……テメェら……ブラックサイドの連中だったのか……道理でその黒い学ランが気になったわけだ、それ……確

か teme エらの制服なんだよね……」

目の前のリザードンが小さく……しかし妙に憎しみのこもった声で喋っている

????? 「だ、だからなんだよ!?!」

リザードン「ある人から teme エらの話を聞いたんだ、それで用事を頼まれてな……」

リザードンは剣柄に手をかける

????? 「えっ!?!」

リザードン「本当なら戦いに来たわけじゃないが……丁度いいや、話では teme エら全員捕まえるつもりだから……」

鞘から剣を抜く、抜かれた刀身が月明かりによって煌めき、相手に恐怖を抱かせた

????? 「(コイツ……本気で俺達を殺す気か!?!)」

????? 「(うそだろ!?!いくらなんでもそんな!?!)」

????? 「(なんであんなもん持ってたんだよ!?!)」

????? 「(やばい……目がマジだ!?!)」

????? 「(こ……殺される!?!)」

五匹『わあああああ!!』

5匹が一斉に反対側に逃げていく

リザードン「無駄だ! 傷を負った彼の気持ちを思い知れ!! (怒)
光の剣雨!」

リザードンが剣を掲げると刀身が光輝き、彼等の頭上高くに神々しい光を放つ剣が数多く形成される、そして光の剣はその名の如く雨のように逃げていく彼等に向かって降り注がれた

ドカーカーカーカーカーカー!!

五匹『うわああああああつ!!?』

連続で鳴り響く轟音と共に叫び声が交わる

光の剣の雨が止むと、そこには目を回して気絶している5匹の姿があった

リザードン「ふん、口ほどにもない、さて、待ち合わせ場所に向かうか……ついでにあいつ等も……」

リザードンは剣を鞘に納めると、倒れてる5匹に近づいて行った

……

リザードン「もうすぐだな」

リザードンは5匹を縄にかけ、ズルズルと引きずる、目的の場所に

は二匹のポケモンとすでに捕まっているもう5匹のポケモンがいた

???? 「お待ちしておりました、フォックさん」

フォックと呼ばれたりザードン、そう！作者であるフォックなのだ、そのフォックに話してきたのは一匹のイーブイ

そのイーブイは目がだるそうで目つきが悪く、さらに科学者が着るような白衣を着ており、手にはペロペロキャンディーがあり、それを舐めていた

フォック「君達がヒイロ君が言ってた仲間だね？」

と、フォックは二匹に声をかけた

イーブイ「はい、初めまして、僕はラハールと申します、そしてこの馬鹿がユーノです」

ユーノ（ブイゼル）「誰が馬鹿だ！！（怒）」

白衣のイーブイラハールとその馬鹿と言われたブイゼル、ユーノ、彼等がヒイロの仲間である

フォック「ラハールにユーノね：俺はフォック、作者で世界の監視者なんだ」

フォックは二匹に自己紹介した

ラハール「世界の監視者ですか：不思議ですね」

フォック「まあヒロ君から聞いたからよろしくね…それにこのブイゼルいいな」

フォックはユーノに目を向ける

ユーノ「な…なんだよ!？」

ユーノは後ずさる

フォック「俺はブイゼルとか好きだしさすがヒロ君♪好みわかってるね♪」

ラハール「あの馬鹿を気に入るとは…さすが作者さんとしかしいようがないですね、よかったですね馬鹿な君の種族を好きな方がいて」

ラハールは黒い感じに言う

ユーノ「ちょっと待て!？ってかそのリザードン!？俺に目を向けるのやめろ!!（怒）」

フォック「怒らないでよ、俺も好きなポケモンだしいいじゃん」

と、子供っぽく言うフォック

フォック「ってかそんな事してる場合じゃないな、早く彼の所へ急ぎましょう」

ラハール「わかりました、それでは行きましょう」

3匹は10匹のポケモンを引きずりながらポケモンセンターへと向

か
っ
た

バトル101 とある二匹の火竜（リザードン）（後書き）

えゝ今回はラッシュの視点と俺の視点でお届けいたしました

ラッシュ「まあ作者も来てるからな…それにしてもようやるな…作者」

まあこいつらは捕まえたから今度はダイル君の治療に行かないと…まあヒロ君にはあのおたま野朗を殺してもらわないと♪（黒）

ラッシュ「まあそうだな」

それにしてもななしばさんからエド借りにいってもこちらからの返信来ないから次回どうしよう（汗）

ラッシュ「とりあえず来なかったら伏字でエドはマイナンって名前になるな」

そうなんだよね（汗）

バトル102 とあるリザードンの回復魔法（ケアルガ）（前書き）

さて、こっちも更新しないと

ラッシュ「ずいぶんと張り切るな」

早くブラック進めたいからこれ執筆してから赤き龍と一緒に更新だから

ラッシュ「まあいいけどよ」

そんじゃあバトル102

ラッシュ「舐めるな!!」

バトル102 とあるリザードンの回復魔法（ケアルガ）

こちらはブラックサイドアジト

ラッシュ「まあこれで終わりってことだしそろそろヒイロの所に行くか？ウラン」

そういうと一匹のポケモンがいた

バレリーナのような姿、そして緑の頭、頭には二本の赤い角があった、感情ポケモンのキルリア、名をウランという

ウラン「そうですわね、ヒイロ様の心配もありますし、今こちらから連絡でもう一方の方と合流して今こちらに向かっているようですわ」

お嬢様言葉でそう喋るウラン

ラッシュ「それじゃあ行くか」

そういうとラッシュとウラン、さらにもう一匹のポケモンもヒイロの元へ

……

ラッシュ達がブラックサイドの団員達を片付けた数時間前

こちらは作者であるフォックサイト

こちらはラハールとフォックが病院の診察室にいた

ちなみにユーノはある事情というからハールが事情により捕まった
10匹のブラックサイドの団員を見張りをやらせていた

理由は彼、ユーノにある

実はかなりの女好きであるためヒロの友達であるピカチュウのア
カリとチコリータのリーフの二匹がいるため合わせれば即某元ジム
リーダーのようになってしまったため見張りということになった

診察室にはさらにもう一匹ポケモンがいた

犬のような精悍^{せいかん}な顔立ちで手の平にはトゲの突起物、さらに胸から
腹のあたりは白い毛皮のポケモン、波動ポケモンのルカリオだ、彼
の名はレオと言って、ダイルの担当医だ

レオ「だが疑似神経をやってもその後はどうすんだ？」

そう、話しているのはダイルの手術のことだ

今回ラハールは医療で認められていないかつ違法の疑似神経をダイ
ルの体につけることだった、色々話してその後の処理の事だ、どう
やら傷口を塞ぐ問題だった

フォック「それなら心配いりません」

フォックは座っていたいすから立ち上がる

フォック「俺が回復魔法で傷口を塞げば問題ないですよ」

レオ「だが」

そこにラハールがとめる

ラハール「でも彼の事を信じましょう、フォックさんが呼ばれたのなら彼のことを信じてやればいいとは思いますが？」

レオは少ししぶしぶだが

レオ「わかった…君を信じよう」

そして……

こちら手術室ではダイルの治療というか手術が行われた

数時間やってなんとか早く疑似神経をダイルの体につけた

そして

ラハール「フォックさん、出番です」

フォック「待ってました！」

フォックは待ち遠しくダイルの前に立ち

フォック「ダイル君…もう君は大丈夫…いくよ…ケアルガ!!」

フォックは回復魔法を唱えるとダイルの体が柔らかな光に包まれた
するとダイルの体に変化が

ダイルの体が嘘のようにどんどん怪我をした部分や手術で切った部分
が塞がれていくではないか

数秒後、ダイルの体はすでに傷がなく回復された

レオ「これが…魔法…」

担当医のレオは驚く

こうしてダイルの手術は成功した

バトル102 とあるリザードンの回復魔法（ケアルガ）（後書き）

なんとかダイル君の手術完了！

ラッシュ「これで後はあのおたまだけだな」

火あぶりしたり色々してやる♪（黒）

ラッシュ「もう作者黒くなってるな（汗）」

バトル103 その後（前書き）

え〜ついに終わりですこちらも

ラッシュ「やっとだな」

それではバトル103を

ラッシュ・フォック「どうぞ！」

バトル103 その後

ラッシュ「ふう〜やっとこいつを懲らしめることができるようだな」

フォック「フッフ（黒）どうやってあの野郎を懲らしめようかな〜♪（黒）」

二匹は今、ブラックサイドを壊滅させ、ヒーロ達と別れをつけていたのだ

ラッシュ「まあまた何かあったらかけつけねえとな、ほっとけねえし」

フォック「そうだね…とりあえずこいつには色々と利用しねえとな（黒）」

何かよからぬことを企んでいる作者フォック

ラッシュ「まあ作者に任せる、頼んだぜ」

フォック「そんじゃ俺はこのおたまを連れてフルボッコにしてからそっちに送るわ」

そう言ってフォックはワープゲートを作り飛び込んで行った

ラッシュ「行ったか…まあダイルやヒーロがこっちに来るの楽しみだな♪」

ラッシュは笑顔で帰っていった

……

ラッシュ「帰ったぞ」

リザレ「あっ！先輩お帰りなさい」

リザレが出迎えた

ラッシュ「すまないなリザレ、留守番頼んで」

ラッシュがリザレに謝る

リザレ「大丈夫ですよ、先輩が帰ってきてよかったです♪」

笑顔で言う

ラッシュ「さて、明日は休みだ、ゆっくり休ませてもらうぜ」

リザレ「はい、後は俺達に任せて、ゆっくり休んでください」

ラッシュは自分の部屋に行き倒れるように寝た

リザレ「俺も先輩と寝よう」

リザレもラッシュの布団で一緒に寝た

こうして

ブラックサイドは壊滅した

バトル103 その後（後書き）

ラッシュ「（汗）」

さうて♪次回はゲストが来ます♪かなり大人数ですがさらに来週にはガイだけでなく、電撃ヒトカゲと正義の法則のヒロ君とダイル君も出演予定です♪お楽しみに

ラッシュ「来週か、ようやるな」（汗）」

おたまイベントだから♪（黒）↑恐ろしい悪魔の怒り龍（汗）

バトル104 歓迎!!そして…(前書き)

ラッシュ「久しぶりの更新だな」

ついにあのキャラ達がついに登場!!それじゃあ!!バトル104

ラッシュ「ようこそ!!」

バトル104 歓迎!!そして…

ブラックサイドが壊滅して数ヶ月後

いつものポケハン学園、そう、今は二学期に突入したのだ
そんなラッシュ達のクラス

今日はいつもと違うようだ

イックン「えゝ今日はみんなにいいお知らせだよ♪」

1-Aの教室は静まりかえった

イックン「今日から新しくここにクラスの仲間が来るよ」

レウト「おゝ!マジかよ!どんな奴なんだろう?」

レウトはワクワクしている

イックン「ラッシュ君達は知ってる人達だよ?」

ラッシュ「俺たちを知ってる奴等?」

それは一体?

イックン「それじゃあ入ってゝ」

イッくん先生の合図で教室から誰かが入ってきた

それは……

モモ「ゴーシュ!?」

ラッシュ「それにリオーネ達まで!?!」

教室から入ってきたのは5匹のポケモンと一人の人間だ

人間の方はリオーネという青年

他はポケモン

まずはモモ・ゴウ・フレイと同じゴウカザル、ゴーシュだ

年齢は17だが事情により高校1年となっている

次は赤いたてがみに狐の獣人のポケモン、ゾロアーク、アバリだ

次にゼルスと同じポケモン、ジュカイン、名はユーム

次に犬のような顔に二足の獣人のポケモン、ルカリオ、名はバベル

最後は半分クリーム色の体毛で後ろの方は黒の体毛に頭にとがった
かわいい耳のポケモン、バクフーン、名はムゲン

この6人は元はスパーク団の連中だがラッシュ達によって変わって
いった

……

ラッシュ「良く来たな」

リオーネ「まあこっちは何とかこっちにこれたからな」

ゴーシュ「まあ俺達もやっとバトル部入部だしな」

放課後、みんな話していた

ラッシュ「それより今日はお前等だけじゃないんだ、来るのは」

ゴーシュ「どういうことだ？」

ゴーシュは疑問に持つ

ラッシュ「実はお前等が来る前に俺はある組織を壊滅した」

リオーネ「たしかブラックサイドだったな」

リオーネはどうやらその事を何処かで知ったようだ

ゴーシュ「リオーネさんと共にこっちに来た時にその事を聞いたんだ」

ラッシュ「だからか……」

リザレ「さすが悪の組織……」

リザレは震えていた

ゴーシュ「そういえばそのリザード震えてるが？」

ゴーシュはリザレの事が気になった

ラッシュ「リザレはまだ色々なれてねえし、色々怖いことがあったみたいでな、俺と住んでるから鳴れるようにしている、まあ仲良くしてやってくれ」

リオーネ「わかった、よろしくな」

リオーネは挨拶した

リザレ「俺もなれるようにするよ、こちらこそよろしくね」

リザレも挨拶する

レウト「おーい！早く準備しようぜ！」

ラッシュ「ああ！」

みんなは何か準備をしていた

……

ポケハン学園の校門、そこに二匹のポケモンの姿があった

一匹は尻尾に炎が灯っていて、お腹はクリーム色のポケモン、ヒトカゲと、ワニのような姿で水色の体色のポケモン、ワニノコだ

ヒトカゲ「ここがラッシュ先輩の高校だな！」

ワニノコ「兄貴！早く入りましょう！オイラ、ラッシュさんにお礼
言いたいんです！」

ヒトカゲの事を兄貴と呼ぶワニノコ

ヒトカゲ「ああ、そうだな、行こうぜダイル」

ヒトカゲはワニノコ、ダイルと共にポケハン学園に入った

ダイル「はい兄貴！」

ダイルもヒトカゲの後についていく

……

ラッシュ「ようやく出来たな」

バトル部の部室はまるで歓迎会のように飾りなどされていた

リオーネ「ここまでやるとはな…それに中学生が来るなんてな…そ
いつ強いのか？」

リオーネはラッシュに問う

ラッシュ「まあ俺の進化前の前だしな、強いぜ♪」

と、ラッシュが太鼓判を押した

その相手とは？

???? 「先輩!!」

みんなが振り返る

そこにいたのは先ほどのヒトカゲとダイルと呼ばれたワニノコがいた

ラッシュ「来たかヒロ♪」

そう…

このヒトカゲは

ラッシュに頼んでブラックサイドと一緒に壊滅させたポケモン、ヒトカゲのヒロだ

リオーネ「あれが交雑種^{ハイブリット}ポケモンと呼ばれ、電氣が使えるポケモン、ヒロって言うんだな」

リオーネは静かに言う

ヒロ「来ました先輩！」

ヒロは元気に挨拶した

ゴッシュ「へえ〜こいつが〜」

ヒロ「ん?」

ヒロはリオーネ達に気付く

ヒロ「先輩？こいつらって？」

ラッシュ「ああ、大丈夫だ、こいつらは俺達の仲間になった元スパーク団の連中だ、警戒しなくていい」

ヒロはコガネ出身でもちろんスパーク団の事などは知っている

ヒロ「そうですか…さすがラッシュ先輩ですね」

ヒロは感心する

リオーネ「まあたしかに俺達は元スパーク団だ…だがラッシュやフォックによって変わった、俺はリオーネだ」

リオーネはヒロに挨拶する

ゴーシュ「俺はゴーシュ、よろしくな！」

ゴーシュも元気良くヒロに挨拶する

ヒロ「あ、ああよろしくな」

少し表情が笑ってないがそれでも挨拶した

ダイル「ラッシュさん！いやラッシュ先輩！」

そこにダイルがわって入った

ラッシュ「おっ！ダイル♪元気になったな♪」

ダイルに頭をなでるラッシュ

ダイル「おかげさまで元気になりました、これもフォックさんやラッシュ先輩のおかげです！今回オイラを強くさせてもらおうということで、よろしくお願いします！！ラッシュ先輩！！」

ダイルは頭を下げた

ラッシュ「そうか：嬉しいぜ♪」

ラッシュは笑顔になる

ラッシュ「そんじゃみんな！！」

ラッシュの掛け声とともに全員が出てきて

全員『ようこそ！！ポケハン学園バトル部へ！！』

バトル104 歓迎!!そして…(後書き)

はい! 予告どおり『電撃ヒトカゲと正義の法則』からヒトカゲのヒロ君とワニノコのダイル君です!!

ヒロ「ヒロだ! よろしくな!!」

ダイル「オイラはワニノコのダイルです、よろしくお願いします」

そして『ポケットモンスター 天空の使途×魔界の使途』からはスパーク団のリオーネ、ゴウカザルのゴーシュ、ゾロアークのアバリ、ジュカインのユーム、ルカリオのバベル、バクフーンのムゲンの6人が来てくれました

リオーネ「リオーネだ」

ゴーシュ「ゴウカザルのゴーシュだ!」

アバリ「ゾロアークのアバリだピョン」

ユーム「…ユームだ…」

バベル「ルカリオのバベルだ」

ムゲン「僕はバクフーンのムゲンだよ」

ダイル「フォックさん! オイラを治してくれてありがとうございます!」
す!!」↑頭を下げる

いいや、君の傷つくところ見たくないから

リオーネ「そういえばガイというニョロボンが逃走中だと聞いたが？」

あゝあのおたまはちゃんと次回出るから…もちろんフルボッコ参加者多いから♪（黒）

リオーネ「お前ホント恐ろしいな（汗）完全にドSだな（汗）」

ゴーシュ「さすが（汗）それにしてもフレイというゴウカザルもあるな、ホントフォックってゴウカザル好きだな（汗）」

そりゃあサトシがキツカケだし

リオーネ「優しさと逆鱗のフォックはある意味すごいな（汗）」

ラッシュ「それが作者だ」

ゴーシュ「まあ次回はそのおたまフルボッコだろ？」

さすが♪わかってるじゃんゴーシュ♪

ゴーシュ「そ、そうか（汗）」

バトル105 歓迎パーティとおたま(前書き)

イツツ！テイステイングタイム！！

ラッシュ「デントか(汗)」

いやゝ一度やりたかったからやってみた

リオーネ「なんじゃそりゃ(汗)」

ゴーシュ「最近、ベストウイッシュが放送されたな」

ヒロ「サトシ、ポカブゲットしたな」

うん、ポカえもんをね

ダイル「ポカえもん(汗)」

それじゃあそのへんにして、バトル105！

ラッシュ・ゴーシュ・ヒロ「燃えるぜ！！」

バトル105 歓迎パーティとおたま

ラッシュ「みんな集まったな…それじゃあまずはみんなの自己紹介だ」

ラッシュ達バトル部は部室に集まっていた

そこには豪華な料理などがぎっしりと並んでいた

ラッシュ「まずはホムラからだ」

ホムラが前に出る

ホムラ「俺は元リオレウスのホムラだ、よろしくな、ヒイロとダイルだったか？」

ヒイロ「よろしく、ホムラ先輩！」

ダイル「よろしくお願いします」

続いて

サクラ「あたしはピンクの色違いのリザードン、サクラよ♪」

サクラが自己紹介

レイラ「私はレイラ、リオレイアよ」

リザレ「俺はリザードのリザレ、体は弱いけど今はラッシュ先輩のおかげで少し元気になったのでよろしくね、俺すごくヒロ君の事気になって」

リザレは目をキラキラさせる

ヒロ「ああ、俺電気使えるからか、まあよろしくリザレ先輩」

ダイル「よろしくです」

……

ラッシュ「大体自己紹介終わったところで今日はヒロ達とリオーネ達の歓迎会とダイルの退院祝いだ、みんな、グラスは持ったか？」

全員がグラスを持ってうなずいた

ラッシュ「それじゃあ乾杯!!」

全員『乾杯!!』

……

リザレ「ねえねえヒロ君、君ってどうやって電撃使えるの？」

リザレが質問してきた

ヒロ「俺は交雑種^{ハイブリット}ポケモンですから、元はリザレ先輩と同じ、体が弱かったですけど、今は元気です」

リザレ「そうなんだ：すごいね」

ラッシュ「まあリザレが興味示すわけだ♪」

ラッシュは笑顔になる

ヒイロ「ところで先輩？ガいの奴は何処に？」

そう、彼等にはもう一つの目的があった

それはブラックサイドのボス、ガいの引き取りだった

彼も逮捕状が出ているので返す予定だ

ラッシュ「それならあそこだ」

ラッシュが指を指した方を向くと

そこにはボロボロになってゴム製の縄と蔓つるで身動きがとれない一匹のポケモンの姿があった

お腹には渦巻き模様、腕は筋肉質のポケモン、ニョロボンだ

こいつがブラックサイドのボス、ガイだ

ヒイロ「うわぁー（汗）すげえ使われてる（汗）」

ラッシュ「まあおかげでサンドバックとして使っている、ゼルスさんが「こいつには傷つけた者の痛みを身を持って教えた方がいいな」とサンドバックにしてこうしている」

さすがバトル部コーチだった(汗)

フレン「俺がゴウカザルでよかった(汗)」

ゴーシュ「そうだな(汗)」

モモ「まあ自業自得だよな(汗)」

ゴウカザル3匹が哑然とした

ゴウ「まあでもこうしてパーティできるしな、誰か！俺とバトルしてくれ！」

ゴウはバトル相手を探す

ラッシュ「バトルも燃えるな♪」

ダイル「嬉しいですがやりすぎのような(汗)」

そういうダイルだが

ラッシュ「反省していないからな、もうしばらくいいか？とりあえずダイル、明日から特訓するぞ、覚悟を決めてくれ」

ダイル「お願いします」

ダイルは頭をペコリと下げた

こうして歓迎パーティは盛大に盛り上がった

バトル105 歓迎パーティとおたま（後書き）

次回からはダイル君の特訓とさらに別れが

ラッシュ「誰が分かれるんだ？」

それは次回のお楽しみに

ダイル「ありがとうございますフォックさん」

ダイル君はもう大丈夫だし、それにみんな辛いし、ラッシュも優しく教えてくれるから勇気だして

ダイル「はい！」

バトル106 ダイルの特訓開始とゴウ異世界に帰る（前書き）

ラッシュ「ゴウが!？」

うん、ゴウさん（作者さん）が色々都合で元の世界に戻すみたいだから今回、ゴウ君はここでコラボ終了だよ」

ラッシュ「また会えるか？」

大丈夫、かならず会えるようにするよ、それじゃあバトル106

ラッシュ「バトルしようぜ!!」

バトル106 ダイルの特訓開始とゴウ異世界に帰る

ダイル「えいっ！」

ダイルはおたまサンドバックにパンチを繰り返した

ラッシュ「冷凍パンチの冷気が集まってないな、冷気を集めるようにしないとできねえぞ」

ダイル「はい！」

ダイルはラッシュに特訓されてる

ヒロ「ヒート・オブ・レールガン!!」

ヒロはヒート・オブ・レールガンで攻撃する

相手はホムラ

ホムラ「爆ぜろ! 炎陣爆華！」

炎陣爆華で防いだ

ヒロ「すげえな」

ホムラ「お前もすげえよ♪」

ホムラは笑顔を出す

みんなが部活してるが、一人悩んでいた

ゴウ「はあゝ」

ゴウだった

ハピネス『ゴウ、あの夢のことか…』

そう、昨日の夜

…

ゴウ「ここは…」

????? 「ゴウ君」

ゴウ「誰だ!」

そこにいたのは

ゴウ「フォック!?!」

そう、作者であるフォックだった

フォック「やあ、実は話があって夢に出てきたんだ♪」

ゴウ「そ、そうか(汗) って話ってなんだ?」

フォックが静かに語る

フォック「実はゴウさんから君をこっちに戻すと言ってきたから時間 came たら戻すんだ」

ゴウ「えっ!？」

ゴウは驚く

フォック「あまり時間ないけどみんなに別れを告げるんだ」

だがゴウは

ゴウ「ちょっと待て! そうしたら」

するとフォックは

フォック「大丈夫だよ、あのガキティナ倒したらまた機会があったらこの世界に戻すよ、だから今は一度だけどまた会えるときを楽しみにして、それじゃあ、時間が来たら来るから♪」

ゴウ「えっ!？ ちょっと!？ フォック!？」

すると夢は途切れた

……

ハピネス『だがもうこっちで修行した、また会える、あっちのみんなが心配してるはずだ』

たしかに、彼は死んだままだが生き返ってこっちの世界にいる

ラッシュ「おい！」

そこにラッシュが駆けつけた

ラッシュ「ちょっといいかゴウ」

ゴウ「どうした？」

ラッシュはゴウを連れて学園の裏庭に

……

ラッシュ「なあゴウ、俺夢で聞いたんだ」

ゴウ「まさか…」

そう

ラッシュ「元の世界に帰るんだな…」

ゴウ「俺…」

ラッシュはゴウの肩を軽く叩いた

ラッシュ「俺は大丈夫だ、お前と一緒にいたこと…ここで修行したことを思い出してエンドを倒して来い！」

ラッシュはグーサインをした

ゴウ「ありがとな…」

ウカザル3匹がこっちでも応援してるぜ！」

フレン「がんばれ〜！」

ゴーシュ「油断するなよ、お前と戦えてよかったぜ♪」

3匹がそれぞれグーサインをした

ゴウ「ありがとな！みんな！行ってくるぜ！！！」

ゴウは部活を出た

ホムラ「がんばれよ！！ゴウ！！」

リザレ「またかならず戻ってきてね！！」

ブレイ「達者でな！！」

ルガー「油断するなよ！！」

サクラ「がんばってね！！」

レイラ「応援してるわ！！」

イックン「またここに来てね！！」

ガル「がんばって勝ってこい！！」

全員『ゴウ！！がんばれ！！』

ゴウは涙を流しながらバトル部、そしてポケハン学園を後にした

……

それを見ていた者が

フォック「さて：俺も行くようだし、ゴウ君、ガキティナを倒して、
またバトル部に戻ろうね」

フォックは様子を見てゴウの元に向かった

別れても、また会える時を

いつかまた：

会えるその時を

バトル106 ダイルの特訓開始とゴウ異世界に帰る（後書き）

はい、ゴウ君は元の世界に帰りました、詳しくはゴウさんの作品、ゴウの旅物語でもあるのでぜひ読んでみてください♪

ラッシュ「ゴウはがんばれるか？」

大丈夫、俺が一生懸命考えたオーラや技、さらにバトル部での修行とそして：俺がゴウ君と一緒にガキティナを倒すこともね（黒）

ラッシュ「結局いくのかよ!？」

あのガキティナが俺を殺そうとしてるし、じきじきに来ればいいけど、奴もかなり厄介だからがんばらないと

ラッシュ「そうなるのか（汗）それで次回は？」

次回はダイル君の修行の続きとさらにラグ君の話になるよ

ラッシュ「そういえば元気なかったな」

この言った意味は次回に

バトル107 カリバー（前書き）

はいついにラグ君の話です

ラッシュ「何が一体？」

実はラグ君の小説でも大変なことに、それじゃあバトル107

ラッシュ「イッツ！ テイスティングタイム！！」 ↑男らしく

バトル107 カリバー

今日もバトル部ではダイルとヒロが来て特訓をしていた

ダイル「えいっ！」

ドガッ

ガイ「グホッ!？」

ガイは凍った

ダイル「やっと冷凍パンチできた！」

ラッシュ「よし!よくがんばったな♪」

ダイルはやっと冷凍パンチを完成させた

だがバトル部で一人また悩むポケモンが

ラグ「はあ〜」

そう、ラグであった

なぜ彼が元気ないのか？

リザレ「ラグ?どうしたの?」

リザレが駆けつけた

ラグ「あつ、リザレ、色々だね」

リザレ「そうなんだ…俺なら何か相談する？俺もうまく話せないけど」

リザレが相談することに

リザレは一人の時間が好きだが体が弱いため色々プレッシャーがあるが少しは慣れてきている

ラグ「実はね、もう一人の僕が大変なんだ」

リザレ「もしかして本物のラグの方？」

実はバトル部にいるラグは分身で本物はこっちの世界で旅に出ている

ラグ「うん、だけどヒードランというダークポケモンに負けてね、なんとかミュウがカリバーで倒して撤退したけど、僕はもういいんだろう」

ラグは涙目になる

リザレ「たしかにね…でもどうしたらいいんだろう？うーん…」

リザレは考えた

すると

ゴーシュ「ならそのカリバーをパワーアップとか新しい技を作ると

かいいんじゃねえか？」

そこにゴーシュがわってはいった

リザレ「パワーアップ？たしかさらに技の威力とかをあげるとか？」

ゴーシュ「ああ、そのとおりだぜ、それにたしかプラズマカリバー
って意思があるような気がすんだよね」

ラグ「意思？」

そう、ラグのカリバーはそれに答えるように光を増した、それが意
思というものだろう

ラグ「でもどうやって…」

リザレ「ねえ？たしかカリバーが出来たのは電気と水タイプが混ざ
ったような感じがしない？」

たしかに言われてみると

ラグ「たしかにそうだね…もしかして！？」

ゴーシュ「だったらそれに何か他のタイプの奴を入れるとかいいん
じゃねえか？」

そう提案したゴーシュ

ラグ「うん、やってみよう！」

すると

????? 「おやおや、君たちががんばってるね」

そこに来たのは

ゴーシュ「ゼウス先生!？」

学園の校長、ゼウス校長だ

ゼウス「実はラグ君のそのプラスマカリバーには新たなことがわかったんだ」

ラグ「新たなことですか？」

それは一体

ゼウス「ある古文書には、王の剣、19の属性をあわせし時、最強の剣エクスカリバーが指導する、剣に込められた意思とその剣の持ち主の力が一つになるとき、最強技、エレメントシュート、レディアンドエレメントの二つの技が使えるだろう、このように書かれています」

ゴーシュ「それじゃあ!？それぞれの属性をプラスマカリバーに取り込めば」

最強の剣が使える

ラグ「やってみよう!でも属性って多分タイプだからゼウス校長は全属性のプレートがありましたよね?それなら」

だが

ゼウス「残念だが、私ばかり頼ってはいけない、これは仲間の力を一つにしないと出来ないのな、あっちの世界のラグ君にも協力してもらわないとそれはできない」

と、キツパリといわれた

ラグ「そうですか…」

ラグは落ち込んだ

ゼウス「それならゴーシュ君、リザレ君、そしてラッシュ君の炎技をプラスマカリバーに取り込むことができるはずです」

なんと炎タイプの技を持つポケモンに技を使って取り込むことができるようだ

そこに

ラッシュ「おーい！」

ラッシュが来た

ゼウス「ちょうどよかった、ラッシュ君」

ラッシュ「ゼウス校長、それにゴーシュやリザレやラグもどうしたんだ？」

ラグ「実は…」

ラグはこれまでのことをラッシュに話した

ラッシュ「なるほどな…それで落ち込んでたんだな…そうならそう
と言ってくれよ」

ラグはラッシュに相談してなかった

ラグ「ごめん…でも僕はどうしたらいいのかわからなくて」

たしかに

ラッシュ「ならやってやろうぜ…リザレ、フレイムサークルできる
か？」

リザレ「えっ！？でもこれ回復魔法じゃ」

ゼウス「属性が炎タイプなので大丈夫ですよ、ではラグ君、プラズ
マカリバーをここにおいてください」

ラグ「はい…プラズマカリバー！」

そう叫ぶと雷と水の大剣が現れた、ラグはプラズマカリバーを地面
に置いた

ゼウス「ではこれに炎技をお願いします」

リザレ「いきます！フレイムサークル！」

フレイムサークルがプラズマカリバーを囲んだ

ゴーシュ「ジグザクフレイム!!」

ゴーシュはジグザクフレイムでカリバーを飛ばした、そこから

ラッシュ「龍炎!!」

ラッシュの龍炎がカリバーを襲う

ゼウス「今です…炎の宝玉よ」

ゼウスはふところから赤い宝玉を取り出した、すると宝玉は技を受けたカリバーの元にいき、カリバーに吸い寄せられた

するとカリバーに変化が

カリバーの剣刀がオレンジ色となった

するとゆっくりカリバーは地面に刺さった

ゼウス「これでいいでしょう、ラグ君、このカリバーに触れてください」

ラグ「はい」

ラグは剣に触れた、すると

????「ふぁーあーよく寝たぜ」

ラグ「わっ!?!」

ラグはしりもちをついた

ラッシュ「これは!?!」

するとゼウスは説明した

ゼウス「カリバーには意思があります、ならしゃべることも可能
は、可能です」

たしかに、今カリバーがしゃべっていた

????「なんだよ、何しりもちついてんだよご主人様よ」

ラグ「僕のカリバーがしゃべった!?!」

????「ああ、俺はカリバーだよ、あんたの剣だよろしくな…
ってか俺が喋るのの抵抗あったな(汗)」

カリバーは俺口調で喋っていた

ゼウス「ある世界では武器は人間になることがあるってありました
し、それならこのカリバーにも意思があるはずですよ」

武器には意思があり、しゃべることがあるのだ

カリバー「そんじゃあたしか分身だなくよろしくなご主人、ってか
ラグだったな」

バトル107 カリバー（後書き）

はいカリバーをパワーアップしました

ラグ「大丈夫なんですか？」

なのはのレイジングハートとかフェイトのバルディッシュとか喋ってるというか英語だったからカリバーも喋ればいいかな〜と思ってね、カリバーをパワーアップしたんだ

ラッシュ「なるほどな」

カリバーもそのうちポケモン化するかもね

カリバー「まじか!？」

マジ、ってかコアラさんがどのような反応するかだけど（汗）

バトル108 ラグの修行1く始まりく

次の日

ラッシュ「おはよう」

リザレ「あ、おはようございます先輩」

御羅「ゴウがいない今俺達がやらないとな」

シュナ「今朝食が完成しましたので、はいどうぞ」

シュナがみんなの分の朝食をテーブルに置く

朝食はあったかい白いご飯に、味噌汁、そしてベーコンエッグなどだ

アルス「はく俺腹がペコペコだぜ」

アルスはお腹をさすりながら言う

シュナ「もうアルスったら」

シュナも怒ったように言う

ラッシュ「まあアルスはかなり食う量あるからな（汗）そんなじゃ頂くとするか…ってラグはどうした？」

テーブルには5人がいる

今いるのはラッシュ、リザレ、御羅、シュナ、アルスだ

だがないのはラグだ

シュナ「なんか様子が変なんですよ、起こしにいったら、なんかふとんに潜っていて中々起きないんです」

ラッシュ「何かあったんだろう…ちょっとそのままにしていたほうがいいな」

ラグの様子が変

一体？

…

ラッシュ「今日は休みだからどうする？」

そう、今日は部活と学校は休みで自由だ

アルス「俺はシュナと買い物してくる」

ラッシュ「食い物とか奪うなよ（汗）お前すぐに食い意地はるしな（汗）」

心配そうに言う

アルス「なんだよ、腹が減ったんだからしかたねえだろ」

ラッシュ「だからって手を出すなよ（汗）犯罪だぞ（汗）」

そう、ラッシュ達の世界はもちろん現代と同じように法などもある
ちなみにゴーシュ達の件はゼウス校長がなんとかして彼等の方の罪
を罰せなかった

ゴーシュはゼウス校長と会っていたため面識があるのだから

御羅「俺は支配校めぐりだな」

御羅はライバルとの支配校めぐりのため休みのときは喧嘩にあけぐ
れている

ラッシュ「あんまり暴れすぎるなよ（汗）」

そう忠告するラッシュ

御羅「そんじゃあ行って来るぜ!!」

朝食を食べ終わった後、速攻で御羅は走っていった

……

シュナ「それじゃあ行ってきます」

アルス「ふわぁ〜ねみい〜行ってくるな」

ラッシュ「気をつけてな」

シュナとアルスも出かけていった

残ったのはラッシュとリザレとラグ

リザレ「ねえ先輩、昨日の件はもう解決したのにラグ」

ラッシュ「何かあったのはたしかだな」

そう確信する二匹

二匹はラグの部屋へ

……

ラグ「……（泣）」

ラグは悲しんでいた

その理由は

ラグ「（異世界の僕が…クレセリアとレジガスに負けて…僕は…何もできなかった…みんな…ごめん…分身の僕がもっと強くなっていたら……そしたらみんなを傷つけていなかった……僕は……僕は……（泣）」

ラグの目には涙がポタポタと流れ落ちていった

悔しい

それが分身のラグにとっては仲間を傷つけるのがいやだった

デンラージでも叶わない敵、ダークポケモン

その敵の力が強く、どうしたらいいのかわからない

ラグ「（僕はどうしたら……どうしたら……（泣））」

……

ピンポーン

リザレ「誰か来たみたいですよ先輩」

ラッシュ「つたく、こんな時に誰なんだ」

出てきたのは

リング「よっ」

ホムラ「遊びに来たぜ」

リングとホムラだ

ラッシュ「リングにホムラ、よく来たな」

リザレ「いらっしやい」

リングとホムラは家に入った

リング「そういえば他のやつらは？」

ラッシュ「御羅は喧嘩しにいつて、シュナとアルスは買い物だ」

リザレ「それで俺達が留守番だけど、どうもラグの様子がおかしいんだ」

リザレ「ラグの様子が？」

リングとホムラの頭に？マークが浮かぶ

ラッシュ「とにかくお前等も来てくれ」

リングとホムラは頷き、ラグの部屋へ

……

ラグ「くすん……（泣）」

ラグはまだ泣いていた

シーツは涙とかでくしゃくしゃに

すると

コンコン

ラッシュ「ラグ、入るぞ」

ガチャリ

ラッシュ達が入ってきた

ラッシュ「いつまで寝てるんだ、朝だぞ」

ラッシュはふとんをとった、すると

ラッシュ「ラグ！？どうしたんだ！？」

ラグは涙でいっぱいいっぱい目が充血していた

リザレ「わっ！？目が充血してる！？」

ルング「ラグ！？どうしたんだ！？」

ホムラ「とりあえず落ち着け、一体どうしたんだ！？」

みんな驚いたが、とりあえずラグをリビングに連れて行った

……

ラッシュ「一体どうしたんだ？涙まで流したということは何かあったんだな？」

ラグは首を縦に振った

リザレ「何かあったのか話して…」

ラグ「実は……」

ラグは話した

別の世界にいるラグとその仲間達が

クレセリアとレジギガスにやられてしまった

その二匹はダークポケモンでかなり強かった

そう、昨日、ヒードランに負けたことの件は解決しても問題がさらに深刻化してきたのだった

ラグ「僕は守れなかった…強くなったのに…みんなを守れなかった
(泣)」

また泣いてしまったラグ

ラッシュ「そうだったのか…クレセリアとレジギガス…あっちの世界のダークポケモンがかなり強くなってるとはな…これはどうにかしないとな…」

だが前回のカリバーの方も炎が宿ったのはいいが、すべてのタイプと属性がないかぎり、エクスカリバーは完成しない

ゼウス校長の話ではこの炎の宝玉しかなく、他の宝玉はラグ達の世界で見つけなければ完成しない、負けたことと仲間がやられてしまったことが、分身のラグによほどショックを与えてしまったようだ

ラッシュ「ラグ…まだあきらめるな」

ラグ「!？」

ラッシュは真面目に言う

ラッシュ「色々たぶんこっちのラグ達にも足りないものがあつたかもしれない、それに感情的になってしまつて、敵に十分なダメージを与えられない、そうなるとお前もがんばらなきゃいけない…：そうだろ？なら涙の数だけ強くなればいい、お前の気持ちはわかる」

そこから

リザレ「俺もわかるよ、辛いのはラグだけじゃないんだよ」

ルング「俺も、あいつに負けたときにはすごく悔しかった、なら今度は俺が助ける番だな」

ホムラ「俺も元々は同族であるモンスターに剣を向けたくない、だが俺はある方に教えてもらった、モンスターにはいい奴と悪い奴がいて、悪いことしてる奴は何か理由があると、そう言われた、俺はそれで色々がんばってきた、辛いのなら俺もお前の辛さをもらうぜ、俺達は仲間だろ？」

仲間…

どんなに辛くても

倒れていても

彼を支えるのは

仲間なのだから

ラグ「みんな……うわあああああああああああああああああ

[illegible]

大声で泣いた

仲間がいるから

戦える

悔しいのなら

強くなればいい

仲間がいるのだから

ラグは数時間後

ラグ「Z
Z
……」

泣きすぎて眠ってしまった

ラッシュ「これから強くなろうぜ、ラグ」

そういつてラッシュはラグの部屋のドアを閉めた

バトル108 ラグの修行1（始まり）（後書き）

ここまでシリアスにいった、そしてここからが俺の本気だ（燃怒）

ラッシュ「作者、マジ無理すんなよ（汗）」

わかってる、次回はラグ君の修行とダイル君の修行の続きです

バトル109 ラグの修行2（ラグの仲間）（前書き）

さて、ついにラグ君（分身）の修行開始です

ラグ（分身）「もう一人の僕のためにも、僕だって強くならなきゃ」

今回はさらにコラボです

ラッシュ「誰なんだ？」

本物のラグ君と一緒に出てたよ

ラグ「もしかして!？」

はいはいネタバレになるからいくよ、バトル109

ラグ「強くなる!！」

バトル109 ラグの修行2（ラグの仲間）

次の日

ラグ「フレイムショット!!」

ラグはパワーアップしたプラズマカリバーでバトルしていた、フレイムショットはプラズマカリバーに炎タイプが宿った技で衝撃波を放つ

ラッシュ「フレアソウル!!」

ラッシュはフレアソウルで防いだ

ラッシュ「今のはよかったぜ♪もう一度だ!」

ラグ「うん!」

ラグはもう一度フレイムショットを放つ体勢にはいる

ラグ「フレイムショット!!」

再び炎の衝撃波がラッシュに迫る

ラッシュ「守る!」

ラッシュは守るで防いだ

ラッシュ「よし、休憩だ」

ラグ「はあ…はあ…」

ラグは疲れてしまっている

カリバー「おいラグ、大丈夫か？」

カリバーが心配そうにラグに声をかける

ラグ「大丈夫…だけど僕、くたくただよ」

ラグの体が汗だらけだった

ちなみに今いるのはラッシュとラグだけ

ここはバトル部のグラウンド、許可を得て特訓をしている

…

ラッシュ「使いこなせてきたな」

ラグ「でもまだまだだよ、これじゃあ勝てない」

ラグは自分を見つめなおす

まだまだ勝てない、みんなを守るために

…

ラグが修行してるその頃、別の場所

???? 「まったく！バトル部の方向何処なんだ」

一匹のポケモンが迷ってきた

頭にはキノコのような被り物、その被り物には少し小さなキノコが生えていた

両腕には鋭い爪、顔はかわいく、足がカンガルーのような足、尻尾の先端には種のようなものが4つつけてある

キノコポケモンのキノガッサだ

彼は種族名の名前でゝだ

キノガッサ「ミュウから分身のラグの所で修行してきてとか言われたしな、はあゝこんな時、かわいい女の子がいたらなゝ」

女癖があるが迷っているようだ（汗）

キノガッサ「ん？あれは？」

キノガッサが何か見つけたようだ

……

一方、こちらは

ラッシュ「それじゃあ再開といくか」

ラグ「うん」

ラッシュ達が休憩が終わり、特訓を再開することになった

ラッシュ「昨日涙した分、がんばるか」

ラグ「うん！」

ラグは笑顔で答える

すると

????? 「おい！！」

誰かの声が聞こえた

ラッシュ「ん？あいつは」

ラグ「キノガッサ！？」

そう、キノガッサだ

キノガッサ「ようやく来たぜ！！」

キノガッサは学園に向かう

……

ラッシュ「キノガッサか、スパーク団の戦い以来だな、元気だった

か？」

キノガッサ「ああ、実はミュウに言われてこっちに来ちゃってな」

キノガッサはこれまでの事を説明した

ラグ「こっちの僕はがんばって修行してるんだね」

キノガッサ「俺もあのデカブツに負けちゃった、カウンターでな！」

キノガッサは拳を強く地面にたたきつけた

相当悔しいようだ

ラッシュ「ならここに来たということは入部ってことだな…どうやらこっちのがんばりを無駄にしないようにがんばらないとな」

キノガッサ「頼んだぜ！ラッシュ！俺を強くしてくれ！！」

キノガッサは頼んだ

ラッシュ「いいぜ、だがやるからには手加減とかはしねえ、覚悟しとけよ」

キノガッサ「ああ！俺はあいつへの借りを返してやるぜ！！」

キノガッサの叫びが学校に響き渡る

ラグ「一緒にがんばろう！」

キノガッサ「ああ！よろしく頼むぜ！分身のラグ！」

二匹は握手をかわした

バトル109 ラグの修行2／ラグの仲間／（後書き）

はい「ポケットモンスター ラグラージの冒険」から、キノガッサが駆けつけました

キノガッサ「よろしくな！」

今回は分身でもなく、本物ですので

キノガッサ「やってやるぜ！」

ただしナンパ禁止だからね

キノガッサ「しょんな／＼（泣）」

ラッシュ「他のバトル部メンバーの女子にナンパしたら覚悟しろよ」

キノガッサ「しょんな／＼（泣）」

これも試練だよキノガッサ

バトル110 ラグ&キノガッサの修行くチートティーチャーと眠りの生徒く

えく今回はラグ君とそしてキノガッサに加えての修行くさらにコラボキヤラがまた来ます

ラッシュ「誰なんだ？」

タイトルからしてあの野郎しかないだろう？

ラッシュ「なるほどな？」

ラグ（分身）「その人って一体？」

まあチートだけど強いよ、その割には：

キノガッサ「その割には？」

ここからは本編で

キノガッサ「ガクッ」

それじゃあバトル110

キノガッサ「負けねえぜ！！」

バトル110 ラグ&キノガッサの修行くチートティーチャーと眠りの生徒く

ダイル「テールスプラッシュ！」

ダイルが強力な水の尻尾を叩きつける

ドガッ

ガイ「グハッ！」

おたまは相変わらずサンドバック（逃げられない）にされている

ラッシュ「完成したな、お前のオリ技」

ダイル「はい！これもラッシュ先輩のおかげです！ありがとうございます！」

ダイルは頭を下げた

ラッシュ「此処に来て1週間とちょっと、だがまだまだだ」

ダイル「はい！」

キノガッサがここに来て1週間、彼等は今もくもくと特訓をしていた

キノガッサ「オラッ！」

ゴスッ

ガイ「グハッ！」

キノガッサ「おっ！すげえなラッシュ、このおたまをサンドバックにするなんてな」

キノガッサは連続でパンチを繰り出した

ラッシュ「まあこのおたまには色々とやっておかないとな、ダイルを痛めたから」

もうダイルも少しは強くはなったはずだ

……

ラグ「フレイムショット！！」

ラグのフレイムショットが空を切り裂く

カリバー「かなりきたな、そろそろ休憩しようぜ」

ラグ「うん」

ラグは一人で特訓していた、カリバーと共に

……

その頃、ポケハン学園の校門には二匹のポケモンの姿があった

一匹は固い鎧のような体に角が2本に逞しい（たくましい）手と足

もう一匹はヒトカゲだ、だがこのヒトカゲ

ヒトカゲ「Z Z Z……」

寝ていた

???? 「ここだな、ポケハン学園は」

そういう、このポケモンは鉄鎧てつよろいポケモンのボスゴドラ、だがこのボスゴドラ、かなりの腕の筋肉と足の筋肉が強く、さらに腹がかなり出ていていわゆるメタボだった

????? 「おいネロ行くぞ」

ネロ「Z Z Z……」

ネロと呼ばれたヒトカゲはまだ寝ていた

ボスゴドラ「はあ…しゃあねえ、運んでいくか」

ボスゴドラはネロをひよいと軽く持って学園に入った

……

キノガッサ「はあ…はあ…」

キノガッサはかなり汗をかいてベタリと座った

ラッシュ「おつかれ、そらよ」

ラッシュはスポーツドリンクをキノガッサに向かって投げた

キノガッサ「サンキュー」

キノガッサは受け取り飲んだ

ラッシュ「どうだ？」

キノガッサ「かなりハードだな、色んな奴がいて、強いな」

ラッシュ「まあお前はパワーだけがとりえみたいだが、少し色々と技を磨くしかないな、お前の場合には力で相手を倒すからな」

キノガッサ「そうだな」

そんな会話に

????「ここだな」

ラッシュ「おっ！ガロか」

さきほど校門にいたボスゴドラとヒトカゲだ

ガロ「よっ！来たぜ」

ガロと呼ばれたボスゴドラは挨拶した

そこに

ガル「おっ！ガロじゃないか」

ガル先生だ

ガロ「ガルか…」

どうやら知り合いのようだ

ガル「それよりお前変わったな、特にこの腹、すごいな」

ガロ「食いすぎてな、まあこれでも鍛えてるし、この腹でも戦えるからな」

そういうとバン！と腹を平手で叩く

ガル「そうか、で？何しに来たんだ？」

ガルはガロに質問した

ガロ「俺はラッシュとのバトルと後ラッシュに頼まれて修行相手をして欲しいみたいでな、その修行相手なんだが」

ラッシュ「こいつだ」

ラッシュはキノガッサを連れてきた

ガロ「こいつが？」

ラッシュ「後外で練習してる、とりあえず今は休憩してるがそろそろ終わりにして特訓にかかろうと思っていたんだ」

ラッシュとキノガッサの汗を収まっていた

ガロ「そうか、じゃあバトルと行こうぜ、ネロは寝てるが（汗）」

ネロは相変わらず寝ていた

ケーシー並の睡眠だ（汗）

ラッシュ「わかった」

ラッシュ達は外へ

バトル110 ラグ&キノガッサの修行くチートティーチャーと眠りの生徒く

はい！「ポケモン学校くおかしな生活く」からはガロとネロの二人が来てくれました

ネロ「ZZZ……」

ガロ「俺はボスゴドラのガロだ、それにしてもガルと知り合いとは驚いたな（汗）」

知り合い設定にしたから、UMAさんすみません

ガロ「まあ感想でお前にメタボにしたおかげでお前に勝てたしな」

俺が一番反省しないといけないな（汗）

ガロ「だがラッシュには負けねえよ」

ラッシュ「やってみな♪」

次回は対決です

ガロ「お前に修行してもらったから負けねえぜ！」

ラッシュ「望むところだ！」

バトル111 ラッシュVSガロ(ラッシュの新技)(前書き)

さて、ついに対決です

ラッシュ「しかも新技って一体？」

それは楽しみにしてて、それじゃあバトル111

ラッシュ「行くぜ!!」

バトル111 ラッシュVSガロ〜ラッシュの新技〜

ゼルス「ではこれより！バトル部部长、ラッシュ対ポケモン学校教師、ガロの試合を始める！」

両者が前に出る

ゼルス「相手を戦闘不能にした時点で終了だ、両者、用意はいいか？」

ラッシュ「OKです」

ガロ「いつでもいいぜ」

両者、いつでもOKのようだ

ゼルス「それじゃあバトル開始だ！！」

今戦いのコングがきっておとされた

ガロ「まずはストーンエッジ！岩雪崩！！」

まずはガロが岩技のオンパレードをしてきた

対するラッシュは

ラッシュ「ブレイバーラッシュ！！」

光をまとった拳を素早く連続でパンチして岩を壊した

ガロ「アイアンテール!!」

そこからガロが隙についてアイアンテールを繰り出す

ガシッ

ガロ「なっ!？」

ラッシュはアイアンテールを両手で受け止める

ラッシュ「そう来たか♪」

ガロ「へっ」

ガロは後退する

ガロ「そう簡単には当ててくれないか」

ラッシュ「行くぜ!!フレアソウル!!」

ラッシュはフレアソウルを吐いた

ガロ「ラスターカノン!!」

ガロはラスターカノンで相殺

ラッシュ「ドラゴニックラッシュ!!」

ラッシュはドラゴニックラッシュでガロの腹を殴る

ガロ「ぐおっ！？だが効かねえ！！」

メタボな腹なためかあんまり効いていないようだ

ラッシュ「やっぱだめか」

ラッシュは後退する

……

こちら観客席は

ネロ「ZZZ……」

ネロはまだ寝ていた

ホムラ「のんきに寝てるな（汗）」

ラグ「たしかこの子ってあまり起きないからどうなんだろうね…」

すると

ネロ「んあ？」

ネロはめずらしく起きた

キノガッサ「起きたぞ！？」

ネロ「ん？あれって……」

ネロはあくびしながらラッシュとガロのバトルを見ていた

……

ガロ「ボディーパージ!!」

ガロはボディーパージで素早さを上げる

ガロは重い体型でもボディーパージで素早さを上げた、だが体重はそんな変わらない(汗)

ガロ「ヘビーボンバー!!」

ガロは突進してラッシュにダメージを与えようとする、この技は体重が重いほど威力が上がる技、ボディーパージで素早さが上がっているため食らえばラッシュもただではすまないかもしれない、しかし

スカッ

ガロ「何っ!？」

ラッシュが消えた

ガロ「どうなってんだ？」

ラッシュ「それは俺の影分身だ」

ガロ「!？」

するとラッシュがたくさんいた

ラッシュ「行くぜ！！セイントリミット！！」

ラッシュの体が光に包まれた

ラッシュ「行くぜガロ！！これが俺の新技だ！！」

ラッシュの分身達が赤色の光に包まれる

ラッシュ「フレアミラージュ！！」

ラッシュの分身とラッシュがガロに向かって突進する

ガロ「たかが分身など」

しかし

ドガッ！！

ガロ「ぐわっ！？」

なんと分身なのに当たった

ガロ「なんだ！？一体！？」

ガロにはわけがわからなかった

次々と分身達がガロを襲う

ガロ「がつ!? ぐっ!? ぐわっ!?」

ガロは食らいまくり、ボロボロ、そこから

ラッシュ「いっけえ!!」

ラッシュが炎をまとい突進した

ガロ「ぐわあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああつ!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ガロはラッシュの突進を食らって体が炎に包まれた

炎が治まり、ガロはその場で倒れた

ゼルス「ガロ! 戦闘不能!! よって勝者! ラッシュ!!」

全員『わあああああああああああああああああああ
あああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

観客席から歓声が響く

ガロ「負けちゃったか…さすがバトル部部长だな」

ガロはボロボロになりながらも立つ

ラッシュ「まあこれでもな♪」

すると観客席では

ネロ「すごい…俺も…」

ネロは闘志をメラメラしていた

バトル111 ラッシュVSガロ（ラッシュの新技）（後書き）

はいラッシュの新技が出ました

ラッシュ「影分身が実体した感じだな」

フレアミラージュは遊戯王5DSのシューティングスタードラゴンの技、スターダストミラージュがモデルとなった技だよ

ラッシュ「だから影分身でも技は当たるようになったか」

効果でチューナーモンスターの数だけ攻撃するならこっちもこういう技にしようかと思ってね

ラグ（分身）「すごい…」

大丈夫、ラグ君もこの技と同じで、しかもラグ君のバージョンの技にするよ

ラグ（分身）「えっ！？本当ですか！？」

うん、今回は新キャラ登場＋そのオリ技の特訓だよ

ラッシュ「フレアミラージュか…面白くなって来たぜ♪」

ガロ「さすがフォックだな」

バトル112 剣を極めしポケモン（前書き）

ラッシュ「やけに早いな」

新キャラが決まったから出そうと思ったの、それにラグ君の修行相手の一人かな

ラグ「修行相手？」

うん

リザレ「誰なんだろう？」

それは見てからね、バトル112

ホムラ「爆せろ!!」

バトル112 剣を極めしポケモン

ここはポケハン学園の門、そこに一匹のポケモンが

???? 「ここがポケハン学園か…ここに私の修行にもなるな」

そのポケモンは頭に貝があり、その先端が角のようになっていて、顔がかっこよく、四つ足のポケモンだ

このポケモンはかんろくポケモンのダイケンキだ

ダイケンキ「では行くとするか」

そういうと学園に入ったダイケンキ

……

1-Aの教室

イックン「今日はまた転校生が来るよ」

イックン先生がそういう

ゴーシュ「どんな奴なんだ？」

レウト「気になるぜ」

ラッシュ「誰なんだろうか」

イックン「それがね、こっちではめずらしいんだ、なんでもイッシュで見るポケモンなんだ」

イックンの発言にみんなが驚く

レウト「マジかよ!？」

リオーネ「たしかイッシュ地方のポケモンだったな、アバリとかもそうだが」

そう、ラッシュ達の住んでいる町、ポケハン町には色んなポケモンやモンスターがいる、しかしここにはイッシュのポケモンはごくまれに見る、今回はそのイッシュのポケモンらしい

イックン「それじゃあ入って」

出てきたのは

ダイケンキ「……」

さきほど校門にいたダイケンキだ

イックン「それじゃあ自己紹介して」

ダイケンキはこくりと頷き紹介した

ダイケンキ「私はダイケンキのタツキです、よろしくお願いします」

と、ペコリとおじぎした

ラッシュ「(きちんとしてるな…しかもダイケンキか)」

ラッシュもある程度だが 이슈シユのポケモンを知っていた

ダイケンキは、 이슈シユで最初にもらう3匹のうちのポケモン、ミジュマルの最終進化系だ

……

放課後

ラッシュ「終わったな」

ラッシュ達は授業を終わらせた

レウト「それにしてもあのダイケンキ、きちんとしてるよな…俺達に挨拶したり」

ラッシュ「たしかにな」

実は放課後になる前、タツキはクラスのみんなに挨拶したり、授業もかなり出来ていたみたいだ

リザレ「すごいですよね、俺よりすごそう」

頭がいいリザレにとっては頭脳では負けそうな感じだ

ホムラ「そうだな…かなり出来てる感じだしな」

アオイ「それにかっこいいよね、でも私はホムラいるし」

ホムラ「ありがとなアオイ／＼／／／」

さすがリオカップル（汗）

ラッシュ「部活行くぞ」

みんな部活へ

……

リザレ「行くよ！！でかりザ変身！！」

リザレはリザードンに変身した

リザレのでかりザ変身はリザードンになるが時間が短いため長期戦には向いていないが

リザレ「少し体が軽くなったかな…先輩のおかげで少しは体力ついたからいいか」

リザレは少し喜ぶ

相手はネロだった

ネロ「俺もできるよ、二段階進化！！」

ネロがそう叫ぶとネロの体に変化が

腹は突き出て、足や手も逞しくなり、背中にはオレンジの翼が生える

リザレ「えっ！？まさか君って!？」

そう、ネロは進化や退化もできるポケモンだ

なので進化や退化も自由なのだ

ネロ（リザードン）「俺もラッシュ先輩のバトル見て眠気が吹っ飛んだ、君も進化や退化できるんだね」

リザレ「俺のはメタモン細胞で変身だけどね、まあ進化したり退化したりはしてるけど」

リザレのはメタモンの細胞なので進化や退化に見えるがこれは変身なので注意

ラッシュ「ラグ、今日も練習だ、今回はガル先生とガロも相手になる」

ガルとガロがつく

ガロ「俺ならお前の攻撃を受け止める、遠慮なくやってくれ」

ガル「俺は攻撃を相殺する」

それぞれ担当が違うが

イッくん「それじゃあラグ君、プラズマカリバーを」

ラグ「うん、プラズマカリバー！」

ラグはカリバーを作り上げた

カリバー「早速暴れるぜ！」

カリバーは叫ぶ

キノガッサ「俺も行くぜ！」

キノガッサも立つ

すると

????「中々の大剣ですね」

全員『!?!?』

そこには

タツキ「ここがバトル部ですか…それに私もここに修行に来たのですが」

ガル「入部希望者か…たしかイックンのクラスの転校生だったな」

タツキ「はい、私はダイケンキのタツキと申します、ガル先生」

タツキは頭を下げた

ガル「きちんとしているな」

タツキ「それでも修行の身です、あの、ラグさん、あなたのその剣、中々いいみたいです、私とバトルをしてくれませんか？」

なんとラグにバトルを申し込んだ

ラッシュ「どういうことだ？俺とかでもいいが」

タツキ「私はラグ君が何かあると思ってラグ君を指名しました、ラッシュさんは強いですが、私ではまだまだです」

タツキも未熟とわかっているようだ

ラッシュ「なるほどな…ならラグ、いいか？」

ラグ「うん」

タツキ「決まりですね」

こうしてタツキとラグのバトルが始まる

バトル112 剣を極めしポケモン（後書き）

はいダイケンキを出しました

タツキ「ダイケンキのタツキです、よろしくお願いします」

ダイケンキはやっぱラグ君の特訓にはいいポケモンだと判断しました

ラッシュ「たしかに、太刀や剣などだしな」

うん、それでダイケンキを新キャラにしようかね

ラッシュ「そうか」

タツキ「さて、ラグさんとのバトルですね」

タツキの実力はいかに!!

バトル113 ラグVSタツキくぶつかり合う剣く（前書き）

ついに対決です

ラッシュ「どうなるかだな」

タツキの實力はいかに、バトル113

タツキ「切捨て御免!!」

ラッシュ「えっ!？」

バトル113 ラグVSタツキくぶつかり合う剣く

バトルフィールドにはラグとダイケンキのタツキが立っていた

ゼルス「それじゃあ、試合開始だ!!」

ラグ「いくよ! 水の波動!!」

ラグは水の波動を放つ

タツキ「水の波動」

タツキは同じく水の波動を放った

互いに放った水の波動は打ち消された

タツキ「今度はこっちからいきますよ、シェルブーメラン!」

タツキが右前足を振ると何処からか貝が出て、ラグに向かう

ラグ「カリバー!!」

ラグはプラズマカリバーを現して貝を切り裂く

貝は真っ二つになり消えた

タツキ「さすがですね、シェルブレード!」

タツキの右前足の固い貝の部分から青くて鋭い剣が現れた

ラグ「くっ！」

ラグはシエルブレードをカリバーの腹の部分で防いだ

タツキ「（剣の腕は少しいみみたいですね）ふっ！」

タツキはバックステップして後退した

ラグ「フレイムショット!!！」

ラグはフレイムショットを放つ

カリバー「いけえ!!！」

しかし

タツキ「水の太刀…水面!」みなも

すると地面から水の刃が飛び出してきてタツキを守った

フレイムショットは防がれてしまった

カリバー「なっ!？」

ラグ「フレイムショットが防がれた」

ラグとカリバーは驚く

タツキ「中々でした、でも私はこれでも修行の身、守る剣技はあるんです、水の舞、水蓮^{すいれん}！」

するとフィールドは水だらけになった

そこから剣がまるで魚のように飛び出す

ラグ「うわっ!？」

ラグは咄嗟にかわしてカリバーで迎撃した

水の剣は次々と消えていく

タツキ「水の太刀…五月！」

するとタツキの四つ足から青い剣が現れた

ラグ「すごい!？」

ラグは驚く

カリバー「見とれてる場合じゃねえよ！」

はっ!としたラグは

ラグ「うん、プラズマソニック！」

電気の衝撃波を放つ

タツキ「剣の舞！」

ラッシュ「待て！」

ラッシュが止めた

ラッシュ「このままでいい」

キノガッサ「でも！」

反論するが

ラッシュ「たとえ負けても、乗り越えなければ意味ないんだ……ここはだまって見てろ」

キノガッサはおとなしく座った

……

ラグ「う……」

ラグは気絶してしまった

ゼルス「ラグ、戦闘不能、タツキの勝ちだ」

するとタツキはラグの元へ

タツキ「大丈夫ですか？」

タツキが声をかける

ラグ「負けちゃった…」

すると

タツキ「いいバトルでした、私もあなたと戦ってここまでの実力があるのは驚きました」

タツキはラグを褒めた

ラグ「タツキ君…」

タツキ「きつとまだまだあなたは強くなる、私もまだまだです」

お互い手を取り合う

こうして

タツキの勝利に終わった

だが負けても

自分が進む道を

そして負けない気持ちと絆を

それぞれが持っているのだから

ラグはそれでも

仲間との絆を

そして……

……

タツキ「それではこれから私はこのバトル部の部員になりました、みなさんどうぞよろしくお願いします」

タツキはバトル部へと入部した

それと同時に

タツキ「ラグ、一緒に特訓しましょう」

ラグ「うん、ありがとうタツキ、助かるよ」

彼等は仲良くなった

剣はそれぞれ交差する武器

彼等の絆は

剣との交差である

バトル113 ラグVSタツキくぶつかり合う剣く（後書き）

はい、おつかれさま

ラグ「負けたけど、これからタツキとがんばらないと」

タツキ「私もです」

すっかり仲良くなったね

ラッシュ「よかったな」

さて次回はなんとあのチートピチューが登場です

ラッシュ「まさか!？」

そのまさかだよ

バトル114 登場!!チートなピチュー!!!? (前書き)

はい今回はついにコラボです

ラッシュ「またか：誰なのかだな」

まあゴーシュ達も知ってる

ゴーシュ「俺達？」

タツキ「誰なんでしょう？」

それは見てからね、バトル114

タツキ「舞い上がれ」

バトル114 登場!! チートなピチュー!!?

ここはポケハン学園の上空

そこに気球が一つ、ポケハン学園へと向かっていた

……

今日もいつもの平和なポケハン学園

ラッシュ「さて、今日もがんばるか!」

リザレ「そうですね」

ゴーシュ「早く部活してえな」

ゴーシュは部活がしたくてウズウズしてる

最近になって、前の中学でも熱いバトルしたかんが戻った感じだ

ラッシュ「まああわてるな、放課後まで待て」

そう、今は朝でHRが始まる前だ

ゴーシュ「そうだな」

モモ「まあ今日も平和でいいけどな」

モモはあくびしながら言う

そこにいたのは

ゼルス「みんなか」

ラッシュ「ゼルスさん!」

ゼルスだ

ゼルス「まさかあいつが来るとはな」

そのあいつとは…

????? 「いっつ…なんとか着いたけど、あゝいてえゝ」

気球から一匹のポケモンが現れた

耳が尖っていて、黒くて短い尻尾、ほっぺには丸いピンクのもの、そして青いゴーグルに青いスカーフを首に巻いていた

ラッシュ「って!?! ライトじゃねえか!?!」

ライト（ピチュー）「あっ! ラッシュじゃん!?!」

このポケモンはピチューと言って、名前はライトと呼ぶ

ゴーシュ「たしかライトって年齢がまだ高校生じゃないよな?」

ゴーシュは疑問に思った

イックン「ああ、ライト君は飛び級で高校入学なんだ」

[illegible]

これに全員が驚く

「ホムラ たしか10歳なんだよな!？」

レウト「マジ!？」

ライト「ああ、俺は頭いいし、それにバトルしてえから来た」

えっへんと胸をはるライト

「そんな理由で（汗）」

レイラ「信じられない（汗）」

もはや全員が混乱していた

するとライトは

ライト「どうせだからラグと戦いたくなつてな」

ラグ「えっ!?なんで僕!？」

指名したラグは驚く

「キノガッサ何っ!？」

ライト「さて、今日は転校生の俺の初登校だぜ☆」

なんか元気なこのピチュー（汗）

これからのバトル部と学園に大きな嵐が吹く

バトル114 登場!!!チートなピチュー!!!? (後書き)

はい!『ライトのハチャメチャトリップライト達の旅改正版』からチートなピチュー、ライト君が来てくれました

ライト「来たぜ!!!ポケハン学園に!!!」

テンション上がりまくりだね(汗)

ライト「俺も戦いたくてウズウズしてきたぜ!!!」

ラッシュ「おいおい(汗)」

次回はそんなライト君が部活に入部&バトル

ライト「なあなあフォック!次回の今すぐ書いてくれよ」

あのね(汗)そんなにすぐには(汗)待っててね

バトル115 ライトのハチャメチャ部活動（汗）（前書き）

ラッシュ「なんだこのタイトル（汗）」

今回はライト君が暴走します

ラッシュ「嫌な予感が（汗）」

ではバトル115

ライト「バトルだ!!」

バトル115 ライトのハチャメチャ部活動(汗)

放課後

ライト「あゝ早くバトルしてえ」

ライトがウズウズしている

ラッシュ「ほらここだ」

ラッシュ達はライトをバトル部に連れて行った

ライト「やっと来たぜ!! そんじゃ早速バトルだ!!」

そういうが

ラッシュ「まずはランニングだ」

ズザーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ライトは地面を滑った

ライト「よし! ならランニングだ!! うおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ライトは勢いよく走った

ゴッシュ「はやっ!?!」

リオーネ「何者なんだホントに!？」

リオーネも驚く

まあ彼等も一度ライトと面識があるので(汗)

タツキ「これがライト君の強さの秘密ですね(汗)さすがにここまで走るとは(汗)」

タツキは唾然としていた

……

ライト「終わったぜ♪」

ラッシュ「お前100周とはすげえな(汗)」

ある意味チートだ(汗)

ライト「なあなあ!バトルさせてくれ!」

ライトはバトルがしたくてウズウズしていた

ラッシュ「はあーしゃあねえな、ラグ、バトルしてやってくれ」

ラグ「うん、わかった」

タツキ「ラグ、がんばってください」

タツキはラグを応援する

……

ラグ「さあ！かかってきて」

ラグはプラズマカリバーを作り出して構えた

ライト「よし！負けないぜ！！行くぞラグ！！」

ライトが攻める

ライト「レジェンド・ウェポン・リィ！！ソード！！」

ライトの頭上から雷が落ちてきて、雷が精製して変化して剣となった

カキーン！

ライトのレジェンド・ウェポン・リィとラグのプラズマカリバーがぶつかり合う

ライト「炎のパンチ！！」

炎の拳がラグを襲うが

ラグ「くっ！」

ラグはバックステップで避けた

ライト「やるな〜！ならこれでどうだ！高速移動！！」

ライトは高速移動でラグをかく乱させる

ラグ「どうしよう、僕では」

ラグラージは素早さが低い

これはかなりやばい

カリバー「へん！そんなの一気にいっちゃえ！！」

カリバーがしゃべる

ラグ「カリバー、それじゃあ無理だよ（汗）」

ラグはカリバーにつっこみを入れる

ライト「今だ！！デスペラードサンダー！！」

尻尾に巨大な雷の鉄球がついていた

ラグ「やるしかない！！奥義！ソニックレイン！！」

ラグはカリバーを振り回す、そこから衝撃波がいくつも上空へ

ライト「わっ！？」

ライトはあわてながら避け、地面へ

ライト「負けるかあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!」
「?」

二匹の技が激突する

そして

ドカ――――
――――ン!!!!!!!!!!!!!!!!!!

爆発が起こった

……

観客席

ラッシュ「勝負はどうなった!?!」

リザレ「どっちが勝ったんですか!?!」

ゴッシュ「一体!?!」

煙があって見えない

だんだん煙がうすれていく

そこにいたのは

ライト「……」

ラグ「……」

互いに倒れた二匹の姿だった

ゼルス「両者戦闘不能!!」

ラッシュ「引き分けか……」

タツキ「ラグもこれから強くなっていきますよ、いいバトルでした」

タツキは喜ぶ

……

ライト「ふえーさすがに効いたぜ」

ラグ「ライト君もすごかったよ」

二匹は互いに笑っていた

いいバトルできたことが

そして、彼等の成長にもつながる

バトル115 ライトのハチャメチャ部活動（汗）（後書き）

ハチャメチャになったかどうか（汗）

ラッシュ「まあすごいバトルだったな（汗）」

ライト「次回はまたまた俺のバトルだぜ!!」

まだやるの!?!? ってか勝手に予告しないでよ!?!?

バトル116 水と雷の暴風・デンミラージュとリーフメガビックバン（前書き）

ラッシュ「なんだこのタイトル？」

今回はラグ君とキノガッサの新技です

キノガッサ「マジ!？」

マジです、ではバトル116

ラグ「負けない!!」

バトル116 水と雷の暴風・デンミラージュとリーフメガビックバン

ライト「とやっ!!」

ただいまライトは誰かと対戦していた、その対戦者は

リリー「よっと」

リリーだ

こちらは白熱のバトルをしている

かなりの接戦だ

……

一方

ラグ「新しい新技どうしよう、それにあの技を完成しないと」

ラグは新しい新技と完成させる新技を考えていた

カリバーで素振りしながら

タツキ「そうですね、色々ありますし」

タツキも素振りをしていた

ラッシュ「まあたしかにな」

ラッシュは腕立て伏せをしていた

レウト「それにしてもライトもすげえな」

ホムラ「女と互角にやりあってるのもな」(汗)「

レウトとホムラは試合の様子を見ながら特訓していた

フレン「すげえな(汗)」

フレンはライトのすごさに唖然としていた

ラグ「はあゝなかなか浮かばないな」

ラグは新技を浮かぶが、中々アイデアが浮かばない

そんなとき

ゴーシュ「おい！」

ゴーシュだ

ラッシュ「ゴーシュか、それに」

アバリ「ピョン」

ゾロアークのアバリも来た

ラッシュ「アバリもか、ライトのバトル見てたんじゃなかったのか？」

ゴーシュ「いや、ライト強すぎだから俺達も負けてられなくてな、一緒にいいか？」

ラッシュ「いいぜ」

ゴーシュとアバリは特訓に参加する

そんなとき

アバリ「ラグ？どうしたピョン？」

ラグが悩んでいるのをアバリは気にしていた

ラグ「新しい新技を考えてるんだ、何か大技的な感じで」

するとアバリは

アバリ「俺の竜巻ゴマみたいな感じにすればいいんじゃないかピョン？カリバーでの遠距離が少ないピョンから」

たしかに

ラグはカリバーでも遠距離技が少ないのだ

フレイムショットやプラズマスラッシャーやウオーターシュートぐらいだ

竜巻…それなら

ラグ「そうだ！！タツキ！水嵐みたいに風をふかせるかな？」

タツキ「これは風を感じないと完成はしません、時間はかかりますがやってみましょう」

アバリのヒントで彼等はラグの新技を完成に協力することに

……

一方

キノガッサ「くそっ！」

キノガッサは苦戦していた

ガロ「おいおい、これじゃ俺には効かないぜ」

ガロは平気そうな顔をする

腹は相変わらず出ているが（汗）

キノガッサ「（こんなおっさんの防御は厄介だ…フレアミラージュぐらいの大技じゃねえとあのおっさんには通用しねえ…リーフメガパニッシャー以上の技を…）」

ガロ「どうした？もう降参か？」

ガロはキノガッサに聞く

キノガッサ「誰が降参するか！俺はまだやれる！」

キノガッサの体はボロボロだ

ガロ「来い！俺がすべて受け止めてやる！！」

キノガッサに勝機はあるのか

キノガッサ「なら…それ以上の与えれば！」

キノガッサはエナジーボールを拳に集める

ガロ「その技は俺が受けきった、そんなんじゃ俺に通用しねえよ」

自身満々に言うガロ

キノガッサ「ならそれ以上やってやる！！」

キノガッサのエナジーボールがどんどん大きくなっていく

さらに大きくなるにつれてエネルギーはでかくなる

キノガッサはジャンプした

キノガッサ「なら…俺の全力…行くぜ！！」

キノガッサの体が緑のオーラに包まれていった

それと同時になおもエナジーボールは大きくなる

……

その頃

ラグ「ウォータルストリーム!!」

ラグはカリバーから水の嵐を放つ

水の嵐は竜巻のように吹き荒れた

ラグ「今度はプラスマストリーム!!」

今度はカリバーから雷の嵐を放つ

雷の嵐は竜巻のように吹き荒れた

ラッシュ「ようやく完成だな」

ラグ「ありがとうアバリ」

ラグはアバリにお礼を言う

アバリ「いいんだピョン、なんとか完成してよかったピョン」

タツキ「そうですね…問題はデンミラーージュですね」

そう

ラグにとって一番の課題、ラッシュのフレアミラーージュと同じ技、デンミラーージュだ

ラグ「そうなんだよね…そうだ！」

ラグは咄嗟にデンラージになった

ラッシュ「それでどうすんだ？」

ラグ「こうするんだ、影分身！！」

影分身で自分の分身を作った

彼も分身だが（汗）

ラグ「それから…身代わり！」

今度は身代わりでさらに分身を作った

ラグ「さらにみんなデンラージに！」

するとラグ達はデンラージになり、それぞれの色の電気がバチバチとなる

ラグ「いくよ！！デンミラージュ！！」

最初に分身達が一斉に分身のカリバーを持って突進

すると対象の木はどんどんボロボロになり

ラグ「やあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああっ！！！！！！！！！！

バトル116 水と雷の暴風・デンミラージュとリーフメガビックバン（後書き）

はい、大量新技&強化技でした〜なんかグダグダになってしまいました
したが（汗）

ラッシュ「デンミラージュ、かなり強力な技になったな」

分身君達がデンラージになって同時にカリバーを発動させてそこから突進する、まあ斬りつけるのもありますけど

ラグ（分身）「すごい！？これなら」

いや、まだまだ

ラッシュ「作者の勢いと執念深さがな（汗）」

バトル117 登場！あさひポケ中学野球部（前書き）

はい、色々変更して今回は野球部編へと行きます！さらに応募のコラボキャラも登場する予定です

ラッシュ「ついにか」

うん、ではバトル117

ラッシュ「燃えるぜ！！」

バトル117 登場！あさひポケ中学野球部

ポケハン学園

いつものように彼等の特訓をしていた

そんな時

ゼルス「みんな！集まれ！！」

ゼルスが号令をかけた

全員が集まる

……

ガル「みんな集まったな」

イックン「実は今日から合宿としてあさひポケ中学の野球部の部員達がここで強化合宿をすることになった」

ゼルス「俺達がバトルや野球などで彼等と合同でやることになった」

どうやら中学の野球部の部員達が来るようだ

レウト「もしかして…」

ラッシュ「たぶんあいつらだな」

ラッシュやレウトは知っていた

それだけでなく、他のみんなもだ

ラッシュ「二人は学園祭で知り合ったから他のメンバーも連れてくるとかいったな」

ガル「ああ、ラッシュの言うとおりだ」

ガルも知っているらしい

すると

????「こんにちは」

バトル部のバトルフィールドから一匹のポケモンが現れた

9本の白い美しい尻尾の狐のポケモンだ

ガル「来たな、こちらは野球部の顧問のキュウコンだ」

ガルは紹介した

キュウコン「キュウコンだ、よろしくな」

キュウコンは挨拶した

そこから

???? 「先輩!!」

ラッシュ 「おっ! カゲっち!」

ヒトカゲが現れた

ヒロ 「まさかカゲっち達まで来るなんてな」

ヒロもカゲっちというヒトカゲを知っている

そこからぞろぞろと部員が現れる

……

キュウコン 「カゲっちとヒートはここを知っているが他のメンバーとは知らないみたいだな、ラッシュ部長とその部員のみなさん、こちらでも自己紹介します」

まずはラグと同じラグラージが前に出る

ラグラージ 「俺はあさひポケ中学野球部キャプテンのラグラージのラージです! このバトル部を合宿に使わせてもらうのは光栄です!! どうかよろしくお願いします!!」

ラグラージのラージは元気よく自己紹介した後、ジャンプした

そこから地震が繰り出された

ラッシュ「って揺らすなよ!?!」

ラッシュはつつこむ

ラージ「すみません!ラッシュ先輩!」

ラージは謝った

次に前に出たのは背中中は固い甲羅のような突起がついてる物に耳がかわいいポケモンだ

乗り物ポケモンのラプラスが前に出た

ラプラス「あたしはラプラスのラブよ♪よろしくね♪」

すると

サクラ「あら、なんかあなたと気が合うわね♪」

サクラが言う

ラブ「そうね、サクラ先輩でしたね?あたしもなんか気が合う感じがするわ♪」

ある意味気が合う二匹

他の部員がガタガタ震える

よほどラブに怖いことされたのだろう(汗)

続いて前に出てきたのは、ムゲンと同じバクフーンだ

バクフーン「俺はバクフーンのラッシーだぜ！よろしくな！！」

この言葉に

リリー「えっ！？ラッシーと同じ名づけと被ってる！？」

リリーだ

ちなみにラッシーとはラッシュのことである

ラッシー「マジ！？」

ラッシーはびっくりする

ラッシュ「まあこっちの方でなんとかする、気にするな」

ラッシュがことを治めた

ラッシー「そうか、ありがとなラッシュ」

ラッシーはラッシュに握手した

ラッシュ「まあ被ったら迷惑になるだろうしな」

まあたしかに（汗）

続いて前に出たのは頭に長い葉がついていて、腕には3枚の葉っぱがついているポケモンだった

ルングとゼルスの進化前のポケモン、ジュプトルだ

ジュプトル「僕はジュプトルのジュジュです、よろしく願いします」

優しいようなジュプトルのジュジュが紹介する

そこに

ブレイ「おう！俺の素早さの新たなライバルよろしくな！！」

スピード馬鹿のブレイだ

ジュジュ「スピードなら負けませんよブレイさん」

ジュジュはイヤミな感じにブレイに言う

ブレイ「んだと！！なら今すg」

ラッシュ「やめろ！！」

ラッシュがブレイを止める

とりあえずスピード馬鹿はほっという

次に翼が生えたかわいいポケモンが前に出る

チック「僕はトゲチックのチックです、みなさんよろしく願いします♪」

笑顔で挨拶するチック

これでもかと笑顔を見せる

次に頭に葉っぱがついたポケモンが前に出る

チコリータというポケモンだ

チコリータ「あたしはチコリータのチコッチです、よろしくお願ひします！」

元気に挨拶するチコッチ

次にピカチュウが前に出る

ピカチュウ「あたしはピカチュウのピカッチです、みなさんよろしくお願ひします！」

ピカッチも挨拶する

後は知つてのとおり、リザードンのヒートとヒトカゲのカゲッチが挨拶した

以上で自己紹介は終わり、バトル部のみんなもそれぞれ自己紹介してそれぞれ特訓の場に

しかし

ラッシュ「ヒート、ちょっといいか？」

ラッシュは突然、ヒートに呼び止める

ヒート「ラッシュ」

ラッシュ「なんか来てから元気ないな？どうしたんだ？」

ヒート「実は…」

ヒートは話した

実はジュジュに15球の勝負に負けて悔しく、さらになぜ負けたのかもわからず先輩として後輩にいい所を見せなかったことをラッシュに話した

ラッシュ「なるほどな…よし！なら俺がジュジュに勝負を挑もう」

なんとラッシュはジュジュに勝負を挑むことになった

ラッシュはすぐさまジュジュのところに

……

ジュジュ「あつ、ラッシュさん、どうかしたんですか？」

ジュジュはすぐにランニングを始めるところだ

ラッシュ「俺とヒートがやったあの15球で勝負していいか？お前の実力を見たいんだが？」

ラッシュは頼んだ

するとジュジュは

ジュジュ「いいですよ？僕は負けませんから」

と、イヤミを言って勝負を受けることに

ラッシュ「ありがとな（なんか調子にのりすぎてる感じだな…これではうまく野球部が優勝できない感じだ…それにヒートもこのイヤミなことで負けてる感じだな…これは何か技を使ったな）」

ラッシュはジュジュの何かを感じた

…

こちらは学園の野球場だ

バッターボックスにはジュジュ、マウンドにはラッシュがいる

そして観客席というか近くにはバトル部メンバーと野球部の部員達がいる

チコっちはなぜか顔が赤くなっていた

それもそのはず、彼女はジュジュの事が好きでもはや彼女は彼に夢中

チコっち「ジュジュ先輩…！がんばって…！」

チコっちは応援する

カゲっち「また始まった（汗）」

カゲっちは呆れていた

まあカゲっちはチコっちとピカっちの友達なので（汗）

そしてキャッチャーはラプ、審判はキュウコン

ラッシュ「それじゃあお手並み拝見といこうか」

ラッシュは構えた

バトル117 登場！あさひポケ中学野球部（後書き）

はい、DreamBaseball！ポケモンたちが野球するよ！
くから野球部全員が来てくれました

ラージ「どうも！！」↑ジャンプ

ちょっ！？ラージ君！？

ラージ「すみません、俺、つい嬉しくなると」

気持ちはわかるけど（汗）

ラブ「ラブよ♪」

ラッシー「ラッシーだぜ！！」

ジュジュ「ジュジュです、よろしく」

チック「チックです♪」

チコっち「チコっちよ」

ピカっち「ピカっちです」

そして

カゲっち「ヒトカゲのカゲっちです」

ヒート「ヒートだ!」

さて、今回から野球部編です、実はヘタレエースさんの方でも野球部視点で話が出るのでこちらもチェックしてください

ラッシュ「こっちはバトル部の視点でいくからな!みんなよろしくな!」

さて次回はラッシュとジュジュ君の15球勝負です!!どのような勝負になるのか

チコっち「ジュジュ先輩!!がんばってください!!」↑好きな先輩なので応援

カゲっち「また暴走した(汗)」

はたしてそういくかな?

カゲっち「えっ?」

バトル118 ラッシュVSジュジュの15番勝負前編〜ジュジュのイヤミな

はい、というわけで対決です

ラッシュ「さて、どうくるかだな」

今回の対決は誰が勝つのか！それではバトル118

ジュジュ「負けないね」

バトル118 ラッシュVSジュジュの15番勝負前編〜ジュジュのイヤミな

こちらはポケハン学園野球場

マウンドにはラッシュ

バッターボックスにはジュプトルのジュジュがバットを構えていた

それではここで改めてルールを説明しましょう

15球ずつラッシュが投げてジュジュがそのうち8球打てばジュジュの勝ちとなる

つまりラッシュへのチャンスは7球

それまでにジュジュに打たなければラッシュの勝ちとなる

キュウコン「プレイボール!!」

キュウコンの掛け声が始まった

ラッシュ「まずは小手調べだな」

ラッシュは振りかぶって投げた

スパン!

キュウコン「ストライク!!」

ジュジュ「(は、速い!?)」

ジュジュは慌てたがなんとか冷静になる

ジュジュ「さすがバトル部部長のラッシュさん、さすがです、ただ次はどうでしょうか？」

と、ジュジュはイヤミを言う

しかしラッシュは

ラッシュ「ずいぶん余裕だな？これはほんの小手調べだぜ？」

と、返した

2球目

ラッシュは大きく振りかぶって投げた

カキーン！

キュウコン「センター前ヒット!!」

キュウコンがコールした

ジュジュ「僕を甘く見ないでくださいラッシュさん♪」

ジュジュは容赦なくラッシュにイヤミを言う

3球目

ラッシュ「そらっ！」

ラッシュは大きく振りかぶって投げた

ジュジュ「（ストレートでも、僕にはこれがある！！）はたく！！」

ジュジュは自分の尻尾でボールを打った

それではご説明しましょう

技は試合1チーム3回までと許されている特別ルールがある、今回もその特別ルールを使っているため許可されている

ジュジュ「どうしましたラッシュさん？この程度ですか？それじゃあこのまま僕が勝たせてもらいますよ」

と、ジュジュはイヤミを言ってラッシュの調子を狂わせる

ラッシュ「そうか、だが負けねえよ」

ラッシュは冷静になりながら構える

ジュジュ「（たとえ冷静になっても、僕の挑発を食らえばなんてことない）」

ジュジュはすでにラッシュに挑発を繰り返していた

ジュジュはイヤミをいいながら相手に調子を狂わせて勝つ戦術だ

彼はトリッキーな感じでスピードもあるいわばスピードトリッキーだ

彼のスタイルも厄介

一方の観客席

ヒート「(ラッシュ、あんたの実力はこんなものなのか!?)」

ヒートはラッシュを見つめそう思う

ラッシュの実力はこんなものなのか?

だがヒートやジュジュ、他の者達は気付かなかった

後にジュジュの戦術が崩れることを

その後2球を投げたラッシュ、すべてボールとなり4球も打たれてしまった

もう残り半分となってしまった

ラッシュ「タイムだ」

ラッシュは少しタイムをした

ラプがラッシュに近づく

ラプ「ラッシュ先輩、大丈夫ですか?」

ラブが声をかける

ラッシュ「ああ、大丈夫だ」

ラブ「イヤミなら気にしないでください、ジュジュはこういうポケモンなので」

と、ラブは謝るが

ラッシュ「いや、気にしていない、後は俺が投げる、サインはしないでくれないか？」

ラッシュはラブにサインを求めないように指示する

ラブ「わかりました、でも危なかったらサインだしますので」

と、ラブは一言言ってキャッチャーのポジションに戻った

ラッシュ「(さて：どうやらジュジュの戦術がわかったことだし：そろそろあいつの天狗の鼻をへし折ってやるか)」

ラッシュは構える

……

6 球目

ジュジュ「(さて、ラッシュさんに挑発したことだし、後は自滅するのを待つだけ)」

ジュジュは内心そう考えていた

ラッシュが大きく振りかぶって、投げた

パシッ

キュウコン「ストライク!!」

ジュジュ「えっ？」

ジュジュは啞然とする

ジュジュ「(どうなってるんだ？挑発にかかったはず?)」

少し焦っていた

とうの本人は

ラッシュ「よし」

口がニヤけていた

ジュジュ「(あのラッシュ先輩の口のニヤけた感じ…まさか!?)」

ジュジュは自分の戦術がバレたのではないかと焦ってしまう

冷静な彼がここまで焦るとなり、それを見ていたラッシュは

ラッシュ「(やっぱりか、だからヒートはそれに乗ってしまっ

けたんだな…だが俺がそう簡単にいくと思ったら大間違いだジユジユ」

はたして、勝負の行方は！？

バトル118 ラッシュVSジュジュの15番勝負前編〜ジュジュのイヤミな

はたして誰が勝つか!!

ラッシュ「次回だな」

うん、次回で決着つくかも

ラッシュ「かもって(汗)」

バトル119 ラッシュVSジュジュの15番勝負後編〜調子に乗るな〜(前編)

はい、後半です

ラッシュ「まあ俺は負けねえよ」

ジュジュ「僕だって!!」

さて、ついに決着です、バトル119

ジュジュ「負けない!!」

バトル119 ラッシュVSジュジュの15番勝負後編／調子に乗るな／

ジュジュ「（やはり僕の挑発が効いてない感じだ…まさかあの2球のボールはわざと!?!）」

ジュジュは戸惑ってしまった

まさか自分の策が破られるとは思わなかったのだ

ラッシュ「（どうやら、あいつの策は崩れたな、さて…俺も本気を出すか）」

ラッシュは腕に力をいれる

一方

ヒート「あのジュジュが戸惑ってる!?! 一体ラッシュは!?!」

ヒートは驚いていた

自分が負けた相手が逆に追い込まれてることに

ラッシュ「ラッシュさんすげえ」

カゲっち「ラッシュ先輩、ここまでやるなんて」

すると

……

ラッシュ「どうした？俺を楽しみにさせてくれよ」

ラッシュは楽しそうに言う

ジュジュ「う…まだまだこれからですよ！ラッシュさん！」

ジュジュはマイバットを構える

ジュジュのバットは茶色かった

ラッシュ「そうこなきやな…だが…」

ラッシュは大きく振りかぶって投げた

ボールは山なりにジュジュに向かっていく

ジュジュ「（スローボール…だけど）もらった！！！」

しかし

スパンツ！

キュウコン「ストライク！！」

ジュジュ「えっ！？」

ジュジュはまた啞然とした

それを見ていたヒート達は

ヒート「あれは!?!」

ラージ「ナックルボール!?!」

ラグ「ナックルボール?それって一体なんなの?」

ラグの質問にラージは答えた

ラージ「ラグさん、ナックルボールというのはボールを回転しない球種です、さっきのラッシュ先輩のあの指の構えはナックルボールなんです!」

ジュジュ「しまった!?!」

ジュジュはミスをしてしまった

ラッシュに負けたくないことと、挑発が効かないことによる焦りでナックルボールを見抜けなかったのだった

ラッシュ「油断大敵だジュジュ」

ラッシュはボールをポーンと上にあげる

ジュジュ「くっ!」

次第にジュジュに焦りが見え始める

ラッシュ「行くぜ!!」

8球目を投げたラッシュ

ジュジュ「ここで負けるわけにはいかない!!」

カキーン!!

ジュジュはなんとか打った

ジュジュ「はあ…はあ…」

ジュジュに疲れが見え始める

ジュジュ「(ラッシュさんに挑発が効いてないし…一体…)」

ラッシュ「オラァ!!」

ラッシュはボールを投げる

パシッ

キュウコン「ストライク!!」

ジュジュ「(しまった!?)」

意識が集中できずストレートをまともに打てなかったジュジュ

ただいま9球目で8球中ジュジュが打ったのは5球、ラッシュも後

3球しかチャンスはない

それでも

ラッシュ「オラァ!!」

ラッシュは投げた

ジュジュ「(負けるわけには!!)」

しかし

スパン!!

キュウコン「ストライク!!」

バットを振ったがストライクだった

ラッシュ「(さて…そろそろ)」

ラッシュは大きく振りかぶって投げた

ボールは青い何かに包まれた

そこから二つの球に分離した

ジュジュ「(どれが本物なんだ…)」

ジュジュは戸惑う

ジュジュ「やるしかない！」

ジュジュはバットを振った

ボールが当たる

ジュジュ「（よしっ！）」

しかし

パシュン！

ボールは消えてしまった

ジュジュ「なっ！？」

スパン！

キュウコン「ストライク！！！」

本物のボールはすでにラプのグローブに納まっている

ラプ「（すごい！？バトル部部长なのに！？）」

ラプも驚く

一方の観客席

ヒート「なっ！？ラッシュすげえ！？」

カゲっち「あんな球を打つなんて!？」

ヒートとカゲっちは驚く

ムゲン「まさか僕が教えた技をここまで利用するなんて」

ムゲンが何か言う

ゴーシュ「それってどういうことだ？」

ゴーシュはムゲンに聞く

ムゲン「ラッシュが僕の技、ライアーショット嘘弾と本当弾の事を教えてほしいと言われて僕はラッシュに説明してね…まさかこれをラッシュが使うとはね」

ムゲンのこの二つの技は詳しくは『バトル部を守れ!!』スパーク団VSポケハン学園バトル部+α』で

ラッシュ「ムゲンに教わってよかったぜ…この技を参考に作った俺の球…ライアーリアル波動弾がな」

ライアーリアル波動弾とは

ラッシュは波動を使えるため波動を使うことができる

ムゲンに教わったのは、そのムゲンの技を波動でかく乱できるんじゃないかとラッシュはひそかに練習をしていたのだった

そう、この球は波動の球か本物の球かわからない

これにより相手はどっちを打てばいいのかわからない、いわゆるラ
ンダムだ

ジュジュ「(くっ!ここまでやるなんて!?)」

だがジュジュも終わらない

だが

パシン!!

キュウコン「ストライク!!」

ジュジュ「やばい!?!」

11球を投げて、後3球を打てば勝ちなのだが

ラッシュ「行くぜ!!」

ラッシュは大きく振りかぶって投げた

ジュジュ「ならはたく!!」

ジュジュははたくで波動弾をたたく

ジュジュ「これで!!」

パシン!!

キュウコン「ストライク!!」

ジュジュ「なっ!？」

すでにストライクを出してしまった

ラッシュ「無駄だぜ、ボールはたとえはたくをやってもその後の本物にスピードを出させる、そうやってもな」

もう後がなくなったジュジュ

ラッシュ「さて…これで行くぜ!!」

ラッシュが投げた

今度は波動にまどってない

ジュジュ「(どういうことなんだろう?なんであの球を投げないんだ?)」

ライアリアル波動弾ならたしかにできるのだが

ジュジュ「(でも…これはチャンス!!)」

そう思ったが

ボールは曲がって速くなり、あっという間に

パシン!!

グローブに納まった

キュウコン「ストライク!! ゲームセット!!」

ジュジュ「そんな……」

ジュジュは愕然^{がくぜん}と地面に伏した

チコっち「そんな!?! ジュジュ先輩が!?!」

チコっちがショックを受けた

ヒート「すげえ!?! すげえよラッシュ!!」

カゲっち「ラッシュ先輩すごい!?!」

ヒートとカゲっちはすごく嬉しく騒いだ

サクラ「やっぱやるわねラッシュも♪」

サクラは笑顔になる

レイラ「ねえサクラ?もしかして彼が頭いいの知ってたの?」

レイラが聞くが

サクラ「幼馴染だから」

そう言った

……

ラッシュ「大丈夫か？」

ラッシュは手を差し伸べた

ジュジュ「……」

ジュジュは無言でラッシュの手を掴んで立ち上がった

ラッシュ「ジュジュ、なぜ俺に負けたのかわかるか？」

ジュジュ「…僕の挑発が効かなかった…ヒートなら効くのに」

しかしラッシュは

ラッシュ「やっぱりな、お前がイヤミを言ってるなら挑発も来るだろうと思っていたけどな」

ラッシュにはバレてしまっていた

ラッシュ「だがなぜ俺が挑発が効かないのかは教えてやるよ…俺はバトルで色々と経験している、挑発などは厄介だが平常心など心を落ち着かせれば、挑発だとわかって効かない、まあ俺は経験があるからそのぐらいは対策はとってある」

ラッシュはバトルの経験が豊富で技などもわかっているため挑発などの技は効いていない

そりゃあラッシュは俺に打たれたり、ランニングしたりもあり、経験や努力では豊富だ

ラッシュ「ジュジュ、お前ヒートに勝ったから調子に乗ってるんじゃないか？」

ジュジュ「えっ？」

その言葉にジュジュは哑然とする

ラッシュ「バイオリズムは大体一定にし、調子に乗ると…今の俺みたいに負けるぜ、バトルや野球も同じで、相手が挑発に乗るのかは相手次第、そして相手もそれを見抜くだろう、同じ手は通用すると思ったら大間違いだ、そこを自覚してくれ」

ラッシュはジュジュに静かに言った

ヒート「そうだったのか…俺もまだまだだったんだな…」

ヒートが来た

ラッシュ「お前も熱くなりすぎて挑発に乗っちゃったんだからそこは考えてくれよ」

ヒート「ごめんな…俺も甘かった…ジュジュに勝ちたかったのもあったし…負けたくなかった」

そこにラッシュがヒートの右肩を軽くポンポンと叩く

ラッシュ「野球バカでいい、お前の熱い気持ちは俺にも伝わるぜ…」

次からそう来るように考えておけば大丈夫だ：俺もいる、だからお前は俺に頼ってもいい、仲間と一致団結するのも：野球だろう？」

そう静かにヒートにアドバイスを言った

バトル119 ラッシュVSジュジュの15番勝負後編〜調子に乗るな〜(後事

シリアスっぽくなった感じかな(汗)

チコっち「ジュジュ先輩があああああああああああああああああああ
あああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
(泣)

泣かないでよ(汗)

ジュジュ「僕は舐めすぎてしまったかも…ラッシュさんの事を」

まあ挑発って厄介だけど相手だって同じ手が通用するとは思えない、
バトルも野球も同じだからジュジュ君は調子に乗りすぎないで普通
に行くんだよ、君らしいのはイヤミな感じだけど、相手をよく見る
ことも大事だよ

ジュジュ「フォックさん」

ラッシュ「挑発もそのうち収まる、それでもう一度やっても相手が
通用するかどうかもわからないからな」

ヒート「俺ももつとがんばれば…」

バトル120 合宿場所は？（前書き）

はい、今回は彼等野球部が泊まる場所です

ラッシュ「まさかとは思うが（汗）」

そのまさかだよ（黒）

ラッシュ「（汗）」

ではバトル120

ラッシュ「燃えるぜ！！」

バトル120 合宿場所は？

15番勝負をしてたらかもう夕方になってしまった

ヒート「すげえよラッシュ！あんたすげえ！！」

ヒートはラッシュを尊敬するまなざしを浮かべる、しかもヒートの目が燃えていた

ラッシュ「お前はまだまだ精神的にも甘いが…まあ俺がなんとかやってやるぜ♪」

そういうとヒートの背中をバンバン叩く

ヒート「ぐえっ！？お前加減しろよ！？」

ラッシュ「ハハハハ」

ラッシュは笑顔で笑う

カゲっち「ラッシュ先輩ってやっぱすごい！」

カゲっちも頭がオーバーヒートだ

……

キュウコン「今日から合宿だ、まあラッシュ君とジュジュの15番

勝負で終わったが、みんな！バトル部とちゃんと仲良くするんだぞ！では解散！！」

野球部は解散した

キュウコン「ああ、それともう一つ、今回泊まる所だが、彼等の家を使って泊まることとなった、許可はおりにいる」

全員『えっ！？』

野球部全員が驚く

ゼルス「まあこっちにも合宿用のはあるが色々限度がある、なので野球部の者達はどっちにするかキュウコン先生に言ってくれ」

どうやら誰かの家に泊まることになるらしい

……

ラッシュ「俺の所に泊まるのは…ヒート、ラージ、カゲっち、ピカっちだな」

ラッシュの家に泊まるのはこの4匹だ

ヒート「ラッシュの家に泊まれるのは感激だぜ！」

燃えるようにヒートは言う

ラージ「ラグさんがいるなら俺は喜んでだ！」

ラージはラグがいるというか同じラグラージだからという理由でラッシュの方に

ジャンプはラッシュ止められているのでやらないというか地震で被害が出るからだ(汗)

まあ彼も悪気がないが喜ぶとついやってしまうのでというかド○ル○みたいな感じだ(汗)

カゲっち「僕はラッシュ先輩の家が気になりますし♪なにより憧れの先輩の所に泊まれるなんて夢に思いませんでした♪」

カゲっちはラッシュの家に泊まれることに喜ぶ

ピカっち「あたしはカゲっち君を見てないといけないし」

ピカっちはカゲっち君を支えるためにラッシュの家を希望

ラグ「僕もラージ君と泊まれるの嬉しいよ」

リザレ「ヒート先輩やカゲっち君は喜んでるね(汗)俺体弱いけどありがとね」

カゲっちとヒートはリザレの荷物というかカバンを持っている

ヒート「リザレの事はラッシュとかに聞いたから、何かあったら俺達に言ってください」

リザレ「ありがとう」

リザレは感謝する

ラッシュ「着いたぞ」

ラッシュの家についた

カゲっち「うわー大きいですね」

ヒート「ラッシュの家は広いと聞いたが、ホントだったな」

まあラッシュの家は部屋が多いので泊まることが可能だ

早速ヒートとカゲっちはラッシュの家に入った

……

ヒート「すげえな！部屋は綺麗ですげえ！！しかもこの汗臭いようなニオイとかもいい感じだぜ！」

まあラッシュもかなりの運動量のため汗をかく、タオルもラッシュの汗臭いニオイがしみついている、まあ洗濯はしているが

カゲっち「先輩って運動量半端ないですね」

カゲっちはそういう

ラッシュ「まあ俺も汗臭いが体は洗ってるぜ？」

本人はちゃんと体は洗っている

リザレ「でも結構広いからいいんだ」

ヒート「おっ！トレーニング用品とかもあるぜ！」

カゲっち「すごい！」

ヒートとカゲっちはラッシュの部屋に夢中だ

ラッシュ「おいおい（汗）あんま荒らさないでくれよ、お前等の部屋はこっちだ」

ラッシュは部屋へと案内する

……

ラプ「サクラ先輩の所に泊まれるなんてあたし嬉しいわ♪」

サクラ「ちょうど大丈夫だからラプにはいいわよ♪」

一方こちらはサクラ

サクラの家に泊まるのはラプラスのラブだ

サクラ「ここよ」

サクラの家についた

ラプ「わあゝ綺麗ですね♪」

サクラ「さあ入って♪」

ラブは頷き、サクラの家へと入った

……

リング「なあ？チコっちだったっけ？なんで俺に引っ付いてるんだ？
（汗）」

一方のリングの方はチコっちとジュジュがついていた

ジュジュ「……」

ジュジュは先ほどの15番勝負で敗れているためまだ立ち直れない様子だ

リング「はあゝ何がなんだかな（汗）チコっちはなんで俺についてるのかわからないが（汗）」

チコっちの顔は赤く染まっていた

理由は多分リングだろう（汗）

ジュジュもかっこいいがリングはそのジュジュの進化後のジュカイン
当然チコっちは赤くなるが、リングは鈍感なためか好きだというのがわからない

……

レウト「ここだぜ」

ラッシー「おっ！ここがレウト先輩の家ですか」

ホムラ「ラッシー、上がろうぜ」

こちらはバクフーンのラッシーとレウトとホムラ

ラッシーはレウトの所で泊まるらしい

ホムラ「俺が腕によりをかけて料理作ってやるからな」

ラッシー「マジですか！？ありがとうございます！！ホムラ先輩！」

……

リリー「チックくついたよ」

チック「ありがとうございますリリーさん」

がばね「チックはいつも笑顔なんだな」

チックはリリー&がばねの所で泊まるらしい

リリー&がばねの家はがばねに合わせてでかく、まるでお城のようだ

リリー「そんじゃ入ろうチック」

こうしてそれぞれ泊まる所へ

バトル120 合宿場所は？（後書き）

ついに泊まる所へ

ラッシュ「さすが作者だな、たしかにヒートやカゲっちは歓迎だな」
そりゃね、後チコっちはルングの所なのはルングがジュカインだから、かつチコっちのタイプっぽい感じなので

ルング「なんだよ（汗）そのタイプって（汗）」↑鈍感なのでわからない

次回はそんな彼等の様子を見えます♪

バトル121 野球部の夜(前書き)

野球部のみんなはそれぞれのバトル部の部員達の家へ合宿することになった

ラッシュ「さて、行くぜ！バトル121」

ヒート「燃えるぜ！！」

バトル121 野球部の夜

ラッシュュサイト

ラッシュュ「よし！できたぞ！」

カゲっち「わあゝい！」

ピカっち「できたんですか！？」

ヒート「おっ！すげえいい匂いがしてきた」

おいしそうな匂いがラッシュュの家の食卓に漂う

シュナ「アルス、野球部のみんなもいるんだからあまり迷惑かけないでね」

アルス「わあーたよ」

アルスはしぶしぶだが返事をする

フレン「こっちは運んだぜ」

御羅「これでいいな？」

ラッシュュ「ああ」

ヒロ「先輩ここに泊まれるなんて俺も嬉しいです♪」

ヒロも泊まれるとあって早速泊まりに来たのだ

ダイル「先輩の料理楽しみです♪」

もちろんダイルも来ていた

ラッシュ「みんな集まれ！いただくぞ！」

リザレ「はい！」

みんな集まる

……

ラージ「もぐもぐ…さすがラッシュ先輩だ！」

ヒート「うめえ！！！」

カゲっち「先輩って料理できるんですね」

ラッシュ「そのぐらいはしとかないな」

全員、料理を食べていた

夕食はかなり豪華でカゲっち達は満足そうに食べていた

ラージ「ラグさん！俺にも剣を参考にした打つ技を教えてくださいん
です！」

ラグ「ラージ君、僕と同じだからいいよ♪タツキも一緒だからラージ君もがんばろう」

ラージ「はい！」

ラグラージの二人、ラージはラグとタツキに教わることになった

ラッシュ「ヒートは俺と一緒にピッチングとかの特訓だな、後精神もだ、挑発に乗らないように特訓だ」

ヒート「わかった」

ヒートはラッシュに鍛えてもらうこととなった

リザレ「カゲっち君は俺と特訓だね、よろしくね」

カゲっち「リザレ先輩、無理しなくても」

心配をかけるカゲっち

リザレ「俺も慣れないとだめだから、もしものときには先輩がいるから先輩の近くで特訓するから大丈夫だよ」

仮にも体が弱いのだ、誰もが心配する

ラッシュ「リザレもなれないとだめだからな、それじゃあそろそろごちそうさまするか」

全員ごちそうさましてみんな片付けを早速始めた

……

サクラ「ラプ、ただ氷を利用するだけじゃなくて、もっと色々あるわ」

ラプ「はいサクラ先輩♪」

こちらサクラとラプは夕食を食べ終わってラプはサクラから色々アドバイスを聞いていた

サクラ「もっともだけど相手も誰なのかわからないわ、でもあまり怒らないで、ヒート君達も色々困ってるから」

ラプ「すみません」

もはや気が合う仲の二人であった

……

ホムラ「できたぜ！ホムラ特製のチャーハンと肉じゃがと大根ステーキだ！」

ラッシー「うおー！！うまそう！！」

レウト「早く食おうぜ！！」

ホムラ「待て待て、まずはいただきますしろ」

こちらラッシーと一緒にレウト＆ホムラのリオコンビ

ハンターラセ「リオ、こっち」

リオ「飯飯♪」

ハンターラセとリオは座る

ホムラ「それじゃあみんな一緒に」

全員『いただきます!!』

そこから勢いよくリオとレウトががつがつ食う

ラッシー「すげえ（汗）」

啞然とするラッシーであった

……

チック「リリーさんって料理うまいんですね」

リリー「これでもうまいから♪」

リリー達は料理を食べていた

がばね「さすがリリーだな」

みんな食べている

……

ルング「おいしいジュジュ？食べないのか？」

ジュジュ「……」

ジュジュはラッシュに負けたことがショックであまり食べなかった

ルング「何がなんだかな（汗）」

ルングも困ってしまった

ただ一匹を除いて

チコっち「（あくルング先輩の料理って最高／＼／＼／＼／＼）」

チコっちは頭の中がオーバーヒートしていた

ジュジュとルングが好きな彼女にとってはもはや頭の中はルングでいっぱいだった

……

ラッシュ「そらっ！」

ヒート「負けねえ！！！」

こちらラッシュ家はラッシュとヒートがまくら投げをしていた

他のメンバーもまくら投げをしていた

ラッシュ「オラッ！」

ヒート「プワッ！やったな！」

ヒロ「それ！」

ダイル「負けませんよ兄貴♪」

カゲっち「それっ！」

ラージ「ほいっ！」

ラグ「まだまだ！」

ピカっち「楽しそう」

シュナ「みんなやっぱはしゃぐね（汗）」

アルス「ふわぁ〜ねみい〜」

みんな楽しそうに遊んだ

……

ラッシュ「さて、寝るぞ！」

みんなそれぞれ部屋へと戻った

ラッシュ「寝るか」

みんなは部屋に入り眠りについた

バトル121 野球部の夜（後書き）

ラッシュ「1日目終了だな」

まだまだこれからだよ、さて次回は彼等の特訓が始まります

ヒート「よろしくな!!」

カゲっち「僕もがんばらなきゃ」

バトル122 練習バトル（前書き）

ラッシュ「さて、今回はなんだ？」

今回はバトルです

カゲっち君のトラウマや色々あるのでバトルになります

ラッシュ「そうか」

でもバトル前になるね

カゲっち「大丈夫なんですか？」

大丈夫、カゲっち君もトラウマなんとかしないと野球ができなくなるから、それじゃあバトル122

カゲっち「燃え上がれ！！／／／／」

バトル122 練習バトル

次の朝

ただいま朝の5時だ

ラッシュ「さて…行くか」

ラッシュはいつものランニングだ

その時

????「ラッシュ」

誰かがラッシュに声をかけた

それは

ラッシュ「ヒートか」

ヒートだった

ヒート「俺もいいかな？ラッシュが準備してるところ見ててな」

どうやら起きていたらしい

ラッシュ「いいぜ♪走るか」

ヒート「ああ！」

ヒートは喜んだ

早速二匹はランニングをしに家を出た

……

ヒート「ふう〜」

ヒートは汗をぬぐう

ラッシュ「どうだ？ 走った感想は？」

ラッシュは感想をのべてきた

ヒート「ああ、ラッシュも朝からやっていたんだな」

ラッシュ「色々スッキリしないとやっていけねえよ、ヒートもこれから精神とか色々鍛えねえと優勝できねえよ」

ヒート「ありがとな…行こうぜ」

二匹は家へと戻った

……

ポケハン学園バトルフィールド

ガル「さて！ みんな集まったな！ 今回はバトルをすることになった、野球部のみんなも参加だ、どれぐらいの実力か、見せてもらおう！」

今回はバトルをすることになった

ラッシュ「バトルか…カゲっち、覚悟はいいか？」

ラッシュはバトルでのトラウマを持っているカゲっちに聞く

カゲっち「これも自分の過去を振り切るためですね、僕はがんばります」

カゲっちは若干震えているがやるみたいだ

ラッシュ「無理すんなよ」

ラッシュに言葉をかけられ

カゲっち「ありがとうございます」

震えも少しは治まった

ゼルス「みんないいな、まず最初の相手はラッシーとモモだ」

モモ「よっしゃあー!!」

モモは気合が入る

ラッシー「相手はあの鬼炎のモモさんか…俺大丈夫かな（汗）」

ラッシーは不安に思ってしまう（汗）

ゼルス「次にラブとレイラ」

ラブ「レイラ先輩が相手ね…負けないわ」

ラブはやる気を出す

ゼルス「次にジュジュとルングだ」

ジュジュ「……」

ジュジュはまだ落ち込んでいる

ルング「こりゃジュジュに気合いれねえとだめだな」

ゼルス「次にラージとキノガッサ」

ラージ「ラグさんの仲間であるキノガッサさんと相手とは…相性は不利でもやるしかない！」

ラージは気合を入れる

キノガッサ「俺は負けねえ！！」

こっちも気合を入れる

ゼルス「次にヒートとゴーシュ」

ヒート「元スパーク団だったな、その実力見せてもらうぜ！！」

ゴーシュ「かかってきな♪俺もお前には負けねえよ」

ゴーシュはファイティングポーズをする

ゼルス「最後にカゲっちとダイルだ」

最後はカゲっちと、こっちに来てだんだん強くなったダイルと対戦だ

ダイル「オイラのデビュー戦ですね」

ラッシュ「どちらもがんばれよ」

カゲっち「（僕は…）」

ブルー「俺たちはここで見ておくか」

イエロー「楽しみ♪」

グリーン「どんなバトルになるんすかね♪」

シルバー「そうだな」

ハンターラセ「楽しみだねリオ」

リオ「そうだな♪」

異世界ラセ「どうなんだか（汗）」

タツキ「さて、見せてもらいましょう」

ライト「ちえ、俺も戦いたかったのにな」

ライトはつまんなそうに席に座る

リリー「さすがに無理よ」

がばね「まあ焦るなよ、俺たちも見てるのも強さの秘訣だからな」

みんな全員が観客席に座る

今熱いバトルが展開される

バトル122 練習バトル（後書き）

次回はラッシーVSモモです

モモ「うっしやあー!! 久しぶりのバトルだー!!」

暴れすぎるなよ（汗）

モモ「わかってる」

バトル123 ラッシーVSモモ モモの新しい必殺技？（前書き）

はいまずはラッシー君とモモの対戦です

モモ「燃えるぜ!!」

ラッシー「負けないぜ!!」

それじゃあバトルバトル123

ラッシー・モモ「熱く行くぜ!!」

バトル123 ラッシーVSモモ モモの新しい必殺技？

今バトルフィールドにはバクフーンのラッシーとゴウカザルのモモが立っている

ゼルス「これより、ラッシーとモモのバトルを行う、両者、準備はいいか？」

ラッシー「はい！」

モモ「OKだ！」

二人は準備万端だ

ゼルス「それじゃあ、バトル開始だ！！」

ホムラ「さあ！ついにラッシーVSモモのバトルが開始されました！！司会は俺、元リオレウスのホムラと」

レウト「バトル部副部長のレウトが実況いたします！！」

リオコンビの二人は実況兼司会だ

モモ「行くぜ！俺の必殺技パート1！オーガフレイド！！」

モモはいきなり自分の技、オーガフレイドを繰り出した

ラッシー「ここはえんまく！！」

ラッシーはえんまくを使って身を隠す

モモ「やるじゃねえか」

ラッシー「ニトロチャージ!!」

ラッシーはそこからニトロチャージで攻める

モモ「よっと!」

モモはバックステップでかわす

モモ「鬼火!」

モモは複数の鬼火を出した

ホムラ「おっとモモがここで鬼火を使った!!あの攻撃的な彼がまさかの補助技を!!」

ラッシュ「どうやらあいつも修行の成果出てるな」

モモはこの鬼火を使い

モモ「オーガフレア!!」

鬼火がラッシーに向かう

ラッシー「なっ!?!」

ラッシーを囲む

オーガフレアは上空に上がってから急降下でラッシーに当たり、爆発

ラッシー「うわっ!？」

ラッシーはダメージを受けた

モモ「まだまだ行くぜ!! オーガトリガー!!」

モモは鬼火をまるでマシンガンのようにラッシーに連射した

ラッシー「やばっ!?! スピードスター!」

ラッシーは星型のものを放った

オーガトリガーは相殺される

ラッシー「ふんか!!」

ラッシーの背中の炎からあふれんばかりの炎が降り注ぐ

モモ「ほっ!はっ!」

モモは軽々と避ける

モモ「ストーンエッジ!!」

尖った岩を複数放った

ラッシー「きあいだま!!」

きあいだまで相殺するが

モモ「このときを待ってたぜ!!」

モモはラッシーに接近していく

ラッシー「スピードスター!!」

再びスピードスターを放つが

モモ「マッハパンチ!!」

モモはマッハパンチでスピードスターを次々と打ち落とす

モモ「これが俺の最強技だ!!オーガバースト!!」

モモは両拳が炎をまとう

モモ「オラァ!!」

モモはラッシーを炎のパンチで連続で殴り、そこから

モモ「とりゃ!!」

ラッシー「ぐおっ!?!」

サマーソルトで上空に飛ばした

カゲっち「えっ!？」

リザレ「モモすごい!？」

タツキ「さすがですね、ここまでやるとは」

フレン「さすがモモだぜ」

スバル「どういく」

モモ「ブラストバーン!!」

まずはブラストバーンがラッシーに襲い掛かる

モモ「オーバーヒート!!」

次にオーバーヒートがラッシーに襲い掛かる

ラッシー「うわっ!？」

そこからモモは上空にジャンプして

モモ「フレアドライブ!!」

炎をまとってラッシーに突進

ラッシー「ぐほっ!？」

モモ「そしてとどめの大・文・字!!」

大の字を書いた炎がラッシーに当たり、ラッシーは真下に落ちた

周りから砂ほこりが舞う

シュタツ

モモがかつこよく降り立った

砂ほこりがおさまり

そこにいたのは

ラッシー「うゝん……」

目を回して倒れてしまったラッシーだった

ゼルス「ラッシー戦闘不能!! モモの勝ち!!」

モモ「よっしゃあ!!」

モモは歓喜した

モモ「大丈夫か？」

モモはラッシーに手を伸ばす

ラッシー「うう…さすがってところッス、いて〜」

ラッシーはボロボロだがなんとか立てた

ラッシーVSモモ

勝者..モモ

バトル123 ラッシーVSモモ モモの新しい必殺技？（後書き）

ラッシー「俺の負けか」

まあいいバトルだったよ、でも負けが次につながるから、ラッシー君もがんばろう

ラッシー「フォックさん、ありがとうございます!!」

さて次回はラブちゃんとレイラの女の子の対決です

ラブ「あたしの北の国からスペシャル絶対零度が炸裂させてやるわ!!」

レイラ「すごい技ね（汗）」

バトル124 ラプVSレイラ 氷の女王と陸の女王（前書き）

ラッシュ「なんか二人らしいタイトルだな」

やっぱそうでもないかね

ラプ「さすがフォックさんね♪」

レイラ「私がんばらないと」

それじゃあバトル124

ラプ・レイラ「燃えるわ!!」

バトル124 ラプVSレイラ 氷の女王と陸の女王

次に対戦するのはラプラスのラプとリオレイアのレイラがフィールドに立つ

ゼルス「それではこれより！ラプとレイラのバトルを行う！！二人とも、準備はいいか！」

ラプ「いつでもOKです！」

レイラ「私もOKです！」

ホムラ「ラプVSレイラの対決だ！！はたして勝つのは！！！」

レウト「レイラ〜がんばれ〜！！！」

レウトが応援する

レイラ「あんたみたいなヘタレと一緒にされたくないわ！」

酷いことを言うレイラ

レウト「ひでえ〜よレイラ（泣）」

やっぱりヘタレになるヘタレウス

ゼルス「それじゃあバトル開始だ！！！」

ホムラ「ついにバトルの始まりだ!!」

ラプ「行きますよレイラ先輩!!絶対零度!!」

ラプのお得意技絶対零度が来る

ホムラ「出たー!!!ラプ得意の絶対零度だ!!」

サクラ「一撃必殺の技だからレイラが食らえばやばいわ!!」

そう、この技はいわば一撃必殺の技、一撃で倒される場合がある

しかし

レイラ「でも当たる確率は少ししかないわ!グランドフェンス!!」

レイラは足を地面に軽く叩くとレイラの周りに土の壁が現れた

絶対零度は土の壁に当たり、土の壁は氷ついた

ラプ「なっ!?!」

レイラ「そんなんでは私には通じないわよ」

そう、絶対零度には多くのデメリットがある

それは一撃必殺の技で当たれば一撃で倒される技だが、この技は当たる確率が非常に低いのだ、ただ一部を除くが(汗)

ヒート「すげえ(汗)」

ヒートはなぜか身震いしていた

絶対零度をいつも浴びせられているためそのことを身を持って体感しているのだ

ラッシュ「すごいなラブ、だがレイラはそのぐらい知っている」

そこからレイラが空を飛ぶ

レイラ「いくわよ！火炎放射！！」

レイラは空から火炎放射を吐いた

ラブ「守る！」

ラブは守るで防いだ

レイラ「よっと」

レイラが地上に降り立つ

レイラ「ラブもやるわね、でもこの地上が私のフィールド、陸の女王の異名であるリオレイアのバトルフィールドよ、炎ブレス！！」

レイラが炎ブレスをラブに向かって放つ

ラブ「（守るはもう使ったから…）水の波動！！」

ラブは水の波動で炎のブレスを相殺

だがそれをレイラは見逃すわけにはいかなかった

レイラ「グランドロック!!」

レイラは技を叫ぶとラプの周りに土の壁が現れラプを囲む

ラプ「えっ!?!」

レイラ「閉じ込めなさい!」

土の壁がラプに迫る

ラプ「(どうすれば!?!?)」

そうこうしてるうちにラプは土の壁に閉じ込めてしまった

レイラ「私の勝ちね」

ゼルス「ラプ、s」

しかし

????? 「まだよ!」

そこから

吹雪が立ち込める

レイラ「きゃっ!?!」

レイラが翼で顔を覆う

しかし

ラブ「これがあたしの全力！！北の国からスペシャル絶対零度！！」

どうやって脱出したのかわからないがラブが全力の北の国からスペシャル絶対零度がレイラにあたり、レイラは凍ってしまった

ゼルス「レイラ戦闘不能！！この勝負ラブの勝ちだ！！」

ミナミ「すごい！？」

アオイ「負けちゃった」

アイリス「なんか私が震えてるような」

アイリスは震える

ラブ「あたしの勝ちですねレイラ先輩」

後でラッシュ達炎タイプのポケモンの炎技やレウトなどの炎を吐ける者によりなんとか氷から解放されたレイラは

レイラ「さすがね、あなたは氷の女王みたいよ、私もまだまだね」

自分の未熟さを身を持って知ったレイラ

2戦目 ラプVSレイラ

ラプの勝利

バトル124 ラプVSレイラ 氷の女王と陸の女王（後書き）

ラプ「勝ったわよ!!」

よかったね、さすが北の国からスペシャル絶対零度（汗）そういえばどうやって脱出したの？

ラプ「守るとかで防いでから吹雪で壊したわ、そこからあたしのお得意の北の国からスペシャル絶対零度をね♪」

まあラプちゃんに異名をつけてしまったけどね（汗）まあ君らしい感じだから

ラッシュ「たしかにそうだな」

さて今回はジュジュとルングの進化前と進化後の対決です!!

バトル125 ジュジュVSルング 勝っても負けても(前書き)

さて、連続更新だよ!!

ラッシュ「気合入ってるな〜作者」

エースさんの熱い闘志が俺に伝わってきたからやる気出てきたんだ、
さて、まだ立ち治っていないジュジュ君をルング君が!?!それじゃあバトル125

ルング「かかってこい!!」

バトル125 ジュジュVSルング 勝っても負けても

次の対戦相手はジュプトルのジュジュとジュカインのルングだ

ハンターラセ「あのジュジュというジュプトル…まだ立ち直っていないね」

タツキ「そうですね…彼…大丈夫なのでしょうか？」

心配そうなこのバトル

ジュジュはまだラツシュに勝てなかったことにまだショックを受けていた

ゼルス「これより、ジュジュVSルングのバトルを行う…両者準備いいか？」

しかしジュジュはだまってしまっている

ゼルス「(困ったな…これでは)」

ゼルスも困った表情をする

そこに

ルング「それで負けたからって簡単にあきらめるのかよ」

ジュジュ「!？」

ルングがジュジュに言葉をかける

ルング「俺もそうだ、俺もあいつに負けてすげえ悔しかった、ジュジュ、お前もそうだろ？ならバトルも勝っても負けても楽しもうぜ、俺もお前の気持ちよくわかってるから」

そう、ルングも気持ちは同じでわかる

彼も前、ある者に負けてしまっただけ悔しい思いをしていた

ルング「ゼルスの兄貴、ちょっと待ってくれないか？もう少ししてからでいいから」

ゼルスに頼む

ゼルス「いいだろう、少しだけ待ってやる」

許可を得たルングはジュジュの元へ

ルング「悔しいのはわかるぜ、俺もそうだし、だからって落ち込むなよ」

ジュジュ「でも…」

まだ立ち直っていないジュジュ、そこに

バキッ！

ジュジュ「!？」

なんとルングはジュジュの頬に一発殴った

ジュジュの頬には殴ったあとができる

ルング「いつまでも落ち込んでんじゃねえ!! (怒) 負けたんなら強くなればいい!! 何回負けても勝つまで特訓すればいい!! 俺もそうだ!! お前も悔しいのを俺にぶつけてこい!!」

ルングはジュジュに怒鳴る

それが通じたのか

ジュジュ「あんたに言われなくてもやってやるよ!!」

ジュジュは立ち上がる

ルング「そうだ、それでこそだ!!」

ルングは指定位置に戻った

ゼルス「両者いいか？」

ジュジュ「はい！」

ジュジュは涙を流しながら答える

ルング「いつでもOKです！」

ゼルス「よし!! それじゃあバトル開始だ!!」

ホムラ「ようやく彼らのバトルが始まりました!! 進化前と進化後の対決です!!」

今彼らのバトルが始まった

ジュジュ「種マシンガン!!」

ジュジュは種マシンガンを吐く

リング「こっちも種マシンガンだ!!」

リングも種マシンガンで対抗する

ジュジュ「アクロバット!!」

ジュジュはアクロバットでリングにダメージを負わそうとするが

リング「そう来たか! リーフブレード!!」

リングはリーフブレードで防ぐ

ジュジュ「こっちもリーフブレード!!」

ジュジュもリーフブレードで応戦

リング「とりゃ!」

ジュジュ「はっ!」

カキーン!!

お互いのリーフブレードが交差する

ラッシュ「ルングもやるな…あいつもジュジュの気持ちわかってるみたいだしな、まあこれでなんとか立ち直れたみたいでよかったぜ」

ラッシュ安堵の表情を見せる

リザレ「すごい戦いですね」

リザレも緊張した面持ちで見る

カンッ！キンッ！

互いのリーフブレードが音を鳴らす

ジュジュ「どうしたんですか？それで終わったってわけじゃないですよね？」

ジュジュは挑発したようにルングに言う

ジュジュ「（僕の挑発はそう簡単にはいかない！ラッシュさんには効かないけどルングさんなら！）」

ジュジュはその言葉を挑発の技として繰り出していた

ルング「そんなわけ…ないだろ！」

ルングは後退する

ジュジュ「種マシンガン!!」

ジュジュは再び種マシンガンを繰り出す

リング「フェンスリーフ!」

リングはフェンスリーフを繰り出そうとしたが

リング「(技がでねえ!...まさかあの言葉に挑発を混ぜたってことか!?)」

リングは気付いた

ジュジュ「(よし!これで!)」

しかし

リング「って挑発ならこれで!種マシンガン!!」

再び種マシンガンで相殺

ジュジュ「気付かれましたか、でもリーフブレード!!」

ジュジュはリーフブレードを繰り出す

リング「おっと!」

リングはバックステップでかわす

リング「エナジーシューティングスター!」

数多の緑のエネルギーが降り注ぐ

ジュジュ「くっ！」

ジュジュは苦しい表情をしながら避ける

ジュジュ「でも空中なら隙がつく！エナジーボール！！」

ジュジュがエナジーボールを繰り出す

今リングは空中にいる、今避けられない状況だ

リング「フェンスリーフ！」

リングはフェンスリーフを繰り出す

だが挑発で使えないはず

しかし

リングの周りから草木が現れ、エナジーボールを防いだ

ジュジュ「なっ！？」

ジュジュは驚く

リングはスタツと着地する

リング「挑発は少し立つときれるみたいだ、挑発にも欠点があるみ

たいだな」

そう、挑発はいつまでも続くわけではない

挑発はたしかに相手の補助などを封じることが出来るが

ラッシュみたいな精神を鍛えているものには効かないがもう一つ、この技には欠点があった

それは短時間にしか効果がなく、長時間もすれば効果もなくなる

それが挑発の欠点だ

さっきのルングの場合エナジーシューティングスターを長く放ったため時間稼ぎにもなったのだ

ルング「クロスフールング！！」

ルングはフールング状態でジュジュに攻める

だがジュジュもあきらめたわけではない

ジュジュ「ならここから真っ向勝負と行きましょう！！シザークロス！！」

互いの技がぶつかり、周りから砂ほこりが舞った

ホムラ「おっと！！ここで砂ほこりで二人の姿が見えない！！」

ブルー「これはどうなるかだな」

シルバー「あいつらは大丈夫なのか…」

ライト「どうなるんだ!？」

バトルフィールドに緊張が走る

砂ほこりがおさまるとそこには

ルング「はあ…はあ…」

ジュジュ「はあ…はあ…」

二人が立っていた

しかし

ルング「うつ…」

ジュジュ「くっ…」

二人は倒れてしまった

ゼルス「両者戦闘不能!！」

ラッシュ「いいバトルだったな」

こうして二人の勝負は引き分けに終わってしまった

ジュジュ「ありがとうございますルング先輩…僕…」

ジュジュは倒れながら倒れているルングに言う

ルング「それはお互いさまだ」

ルングも笑いながら言う

ジュジュVSルング

結果..引き分け

バトル125 ジュジュVSルング 勝っても負けても（後書き）

ラッシュ「引き分けか…」

いいバトルになったよ

ルング「なんとかあったな」

次回はラージ君とキノガッサです！

キノガッサ「ついに俺の番だ！！」

ラージ「ラグさんの仲間でも負けない！！」

キャプテンのラージ君は果たして勝てるのか、ノンストップで燃えてきます！！

バトル126 ラージVSキノガッサ 力の戦い（前書き）

キノガッサ「よっしゃ！俺の出番だ！！」

はいはい落ち着いて（汗）

ラージ「ラグさんの仲間でも俺は負けない！！」

そんじゃあバトル126

ラージ・キノガッサ「燃え上がるぜ！！」

って地震！？

ラージ「すみません（汗）」

バトル126 ラージVSキノガッサ 力の戦い

フィールドにはラグラージのラージとキノガッサが立っていた

ゼルス「これより！ラージVSキノガッサのバトルを始める！！両者準備いいか！」

ラージ「OKです！！」

ラージが気合入る

キノガッサ「俺もOKだ！！」

キノガッサも気合が入る

ヒート「ラージ！！がんばれ！！」

ラッシー「キャプテンだからって負けるんじゃないぞ！！」

負けた君が言えるセリフかい（汗）

ラージ「俺はそれでも負けない！！」

キノガッサ「俺だって！！」

互いが気合入る

ゼルス「それでは！！バトル開始だ！！」

ホムラ「さあ！ラージとキノガッサのバトルだ！！」

ラグ「がんばって！！」

ラグが応援する

ラージ「行きます！！きあいだま！！」

ラージはきあいだまをぶつける

キノガッサ「リーフメガパニッシャー！！」

キノガッサはエナジーボールの3倍のエネルギーを拳に集めて殴った

二つの技は相殺

キノガッサ「エナジーシューター！！」

キノガッサは3つのエナジーボールを放つ

ラージ「守る！」

ラージは守るを使った

ラージ「ハイドロポンプ！！」

ラージはハイドロポンプで防いだ

キノガッサ「こうでないとな！！」

キノガッサは気合パンチの体勢に入る

ラージ「こっちも気合パンチ!!」

二人して気合パンチが炸裂する

ラージ「今度はだくりゅう!!」

ラージはだくりゅうを繰り出した

キノガッサ「よっと!」

キノガッサはジャンプして避けた

そこから

ラージ「アームハンマー!!」

ラージがアームハンマーを繰り出した

キノガッサ「守る!」

キノガッサは守るを使って防いだ

ラージ「瓦割り!!」

ラージは瓦割りを繰り出す

キノガッサ「なら気合パンチだ!!」

気合パンチで相殺した

ラージ「やりますね！さすがラグさんの仲間であるキノガッサさんだ」

キノガッサ「お前もやるじゃねえか！それでこそだ！」

互いに認め合う

リザレ「すごい」

リザレは唾然としてみる

ラッシュ「やるな～二人して♪」

ウィリア「すごい…」

スバル「力あるな～あの二匹」

キノガッサ「さて…それじゃ俺の本気を見せてやるぜ！！」

キノガッサは力を込める

ラージ「なら俺も！！」

ラージも力を込める

キノガッサ「行くぜ！！」

キノガッサはジャンプした

そこから拳にエナジーボールにエネルギーを集める

ラージ「行きます！！気合パンチ！！」

ラージはジャンプしてキノガッサに向かう

キノガッサの拳のエネルギーが大きくなる

キノガッサ「リーフメガビックバン！！」

キノガッサは特大のエネルギーを殴った

それがラージに当たり爆発した

ガロ「うわぁゝ（汗）」

前に食らったガロはもう体験しているためこの技の恐ろしさを知っている

爆発が収まり、そこからラージが落ちていた

ドスン！とラージは目を回して倒れていた

ゼルス「ラージ！戦闘不能！！キノガッサの勝ちだ！！」

シュタツ！

キノガッサは着地した

キノガッサ「ふうゝ…大丈夫か？」

キノガッサはラージに駆け寄る

ラージ「さすがに俺の全力でもここまで勝てませんでした…でも楽しかったです！！次は負けません！！」

ラージはボロボロながらも笑顔になる

ヒート「キャプテン負けちゃったな」

ラッシー「まあ俺も負けちゃってるから俺もがんばらないとな（汗）」

…

ホムラ「ついに次はヒートVSゴーシュの戦いだ！！」

しかし

ヒート「ちょっと待った！！」

ヒートが待ったをかける

ヒート「お願いがあります！！ラッシュと戦わせてください！！」

なんとヒートがラッシュと戦いたいと言ってきたのだ

ゼルス「どうするラッシュ？」

ゼルスがラッシュに問う

ラッシュ「俺はいいぜ、ゴーシュ、すまないがいいか？」

本当に戦う相手、ゴーシュに言う

ゴーシュ「俺は別にいいぜ、それじゃあがんばれよ部長さん♪」

ラッシュがバトルフィールドに降りる

ヒートもバトルフィールドに降りた

ヒート「ラッシュュ!! 俺は全力でお前に挑むぜ!!」

気合が入ったようにラッシュに言う

ラッシュ「いいぜ、かかってこい!!」

今リザードン同士の戦いが始まる

バトル126 ラージVSキノガッサ 力の戦い（後書き）

ごめんゴージュ

ゴージュ「いや、ヒートが望んでるのならそうするしかねえな」

次回はついにリザードン同士の戦いです！！

バトル127 ヒートVSラッシュ エースの全力（前書き）

ついにヒート君のバトルです

ラッシュ「ついにか」

ヒート君とエースさんのこの熱い思いをこの話でぶつけていきます
！それではバトル127

ラッシュ・ヒート「燃えるぜ！！」

バトル127 ヒートVSラッシュ エースの全力

ゼルス「それではこれより！ヒートVSラッシュのバトルを行う！
！二人とも！準備はいいか！」

ヒート「OKです！！」

ラッシュ「こっちもOKです！！」

二人は熱くなる

ゴーシュ「この勝負：見逃せねえ」

モモ「二人して燃えてるぜ！」

アルス「これは燃えるな」

シュナ「珍しいね、アルスが熱くなるなんて」

アルス「こいつらの熱い気持ちが俺にも伝わったんだよ」

アルスは赤くなる

ブルー「かなり熱い戦いになるそうだ」

イエロー「燃えてくるね」

グリーン「そうっすね」

シルバー「たしかに：見てる俺たちも熱くなりそうだ」

ゼルス「それではバトル開始だ！！」

バトルの合図が出る

ホムラ「さあ！ついにリザードン同士の戦いの始まりだ！！」

アオイ「ついに！？」

サクラ「この戦い…何か起こるかも」

ラッシュ「行くぞ！！フレアソウル！！」

ヒート「大文字！！」

ラッシュはフレアソウル、ヒートは大文字を繰り出した

二つの技は相殺された

ヒート「まだまだ！！」

ヒートが低空で攻める

ヒート「ドラゴンクロー！！」

ヒートはドラゴンクローを繰り出す

ラッシュ「こっちもドラゴンクローだ！」

ラッシュもドラゴンクローで対抗

カキーン！

お互い攻撃を繰り出す

ゼルス「（ヒートは攻撃型か…しかも補助や防御などはあまり覚え
ない…攻撃は最大の防御か）」

ゼルスはしっかりヒートを分析

ラッシュ「（ヒートは攻撃技が多いみたいだな…どうやらこれは力
と力の戦いのようだな…それでこそだ！）」

ラッシュはニヤリとしながら空を飛ぶ

ヒート「逃がすか！」

ヒートも空を飛んだ

ヒート「火炎放射！！」

ヒートは火炎放射を吐く

ラッシュ「おっと」

ラッシュは空中で避ける

ラッシュ「こっちも火炎放射だ！」

ラッシュも火炎放射を吐く

ヒート「よっと」

ヒートは軽々とかわす

ヒート「（ラッシュすげえ、全力の俺の技を避けたり相殺したりしてる…それでこそだ!）」

ヒートもニヤリとする

一方の観客席

リリー「ラッシュとヒートもかなり白熱な戦いになってる」

がばね「あいつらなんか楽しそうにバトルしてるみたいだな」

ブルー「たしかにそうだな」

がばねとブルーはそれを見て彼ららしいと思っていた

スバル「すげえ…」

戦ったことがあるスバルは哑然としていた

スバル「俺の時もそうだったが、ラッシュも楽しそうだ」

アイリス「たしかにそうだね」

プリムラ「見てるこっちが熱い…（汗）」

暑さが苦手なプリムラが言う

プリムラに耐えられるかどうかだが（汗）

ヒロ「ラッシュ先輩やヒート先輩楽しんでるな」

ダイル「兄貴…すごいですね、二人して」

ヒロとダイルはそんな二匹を見ていた

ゴッシュ「あいつらすげえ俺の心を改心したラッシュ、ここまでやるなんて」

リオーネ「バトル部部长らしい」

ムゲン「すごい戦いだね」

アバリ「さすがピョン」

バベル「この強い波動！？かなり白熱になっている」

ユーム「さすがラッシュ…」

元スパーク団の6人でも啞然としていた

リザレ「これが…先輩の熱いバトル…すごい！がんばってください
！！」

リザレは上空にいる二匹を応援する

……

ヒート「きりさく!!」

ラッシュ「ドラゴンクロー!!」

二匹の技が相殺する

ヒート「はあ…はあ…」

ラッシュ「ぜえ…ぜえ…」

二人はかなりボロボロだった

死力な戦いになり、二人は体力を消耗していた

二人はかなり汗をかいていた

汗がしたたり落ちる

ヒート「ラッシュ」

ラッシュ「ヒート」

互いに見つめる

ヒート「ありがとな…俺が攻撃的だからここまでやって」

ヒートは感謝の気持ちを込めた感じでラッシュに言う

ラッシュ「たしかにお前は単純かもしれない、だがお前の熱いバトル、それが俺にとっては俺の心をゆれ動かした、攻撃が違っても、お前は全力でせめてきた、バトルは単純だけどな…技が色々ある、お前の技、そして全力…気に入った」

ヒート「ありがとな…それでこそお前とバトルしてよかったぜ…さて…ここからだ」

ラッシュ「ああ！」

互いに距離をおく

ヒート「破壊光線…！」

ラッシュ「ブレイバーラッシュ…！」

ラッシュは破壊光線をブレイバーラッシュで相殺

ヒート「やるな」

ラッシュ「そっちな」

互いに笑顔になる

……

エイク「すげえ（汗）」

ミナミ「さすがバトル部部长だね」

タツキ「これほどまでに熱くなるとは」

みんなが彼等の戦いを見ている

これがバトルなんだ

みんなは魅了された

バトルの原点

それは……

技と技のぶつかりあいだ！

……

素早い動きで彼等はぶつかりあった

ラッシュとヒート

同じリザードンとしてのプライドがぶつかり合う

バトル部部长のラッシュとヘタレなエースのヒート

彼等はや、そのバトルの領域を超えていた

……

ネロ「ラッシュ先輩すごい…あこがれる…」

ガロ「すげえ（汗）」

ネロは顔が赤くなる

進化前の彼はもはや彼等に夢中だ

ガロも啞然と見ていた

ホムラ「ラッシュ…」

ホムラは実況を忘れてみていた

…

ラッシュ「はあ…はあ…」

ヒート「ぜえ…ぜえ…」

彼等はさらにボロボロになっていた

ぶつかり合い、互いに何も補助技や防御技は使わない

力と力のぶつかりあいだ

ラッシュ「はあ…はあ…なあヒート、そろそろ本気で決着つけるか…」

ヒート「ぜえ…ぜえ…ああ…」

お互いは力をためる

ラッシュ・ヒート『これが…俺の…』

彼等に周りから炎がまとう

ラッシュ・ヒート『全力だ!!』

互いに技を繰り出した

ラッシュ「龍炎!!」

ヒート「ブラストバーン!!」

ラッシュは龍炎を

ヒートはブラストバーンを

ラッシュの龍炎は炎の龍となった

しかし

ラッシュ「くっ！」

炎の龍はヒートの全力のブラストバーンを吸収できなかった

この二つの技はぶつかり合いそして……

[illegible]

大爆発を起こした

ヒート「うわっ!？」

「ラッシュ、ぐわっ!？」

二匹は爆発に巻き込まれ地面に向かって落ちた

•
•
•
•
•
•

二匹は落下していく

ヒート「ラッシュ…ありがとな…」

「お前もな…ヒート」

互いに笑顔になり、二人は最後の力を振り絞って自分の翼を広げた

互いに手をつなぎながら：バトルフィールドに降り立った

だが彼等は力が尽きたのか

着地と同時に倒れてしまった

ゼルス「両者戦闘不能!!よくがんばった!!」

ゼルスは両者を褒めた

全員『わあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!
』

全員が歓喜した

ラッシュ「ヒート、大丈夫か？」

ヒート「そっこそ大丈夫か？」

二匹ともボロボロになりながら空を見た

ヒート「楽しかったぜ…」

ラッシュ「ああ…」

そして…

ラッシュ・ヒート「ハッハッハッハッハッハッ！」

二人は笑った

笑顔に笑った

最高のバトルをした二人にとっては
もうプライドでもなんでもなかった

バトル部部长とエース

彼等の笑顔はバトルフィールドに響いた

バトル127 ヒートVSラッシュ エースの全力(後書き)

ここまで燃えるようにやるとは(汗)

ラッシュ「作者もごくろうさん」

ヒート「ありがとな！フォック」

俺も燃え尽きた感じだよ、これがバトルだ！！って思う感じに

ラッシュ「引き分けでも学んだことはある」

ヒート「俺もまだまだかもしれない、作者さんの全力を受け取ってくれてありがとな」

エースさんががんばってる努力しているから、ポケモンバトルでも同じ、まあ補助や防御も必要です、ただ攻めるだけじゃないですよ、エースさんも学ぶことっていっぱいありますよ、バトルだってただ攻撃でせめても相手はその上をいってる者までいます、バトルも補助や防御も必要ですよ、それでも俺はここまで書いて満足です♪

ラッシュ「攻撃は最大の防御、それがエースとヒートのバトルスタイルだな」

うん、次回はついにカゲっち君とバトルデビューのダイル君の対決です

バトル128 カゲっちVSダイル トラウマを克服せよ&修行の成果（前書き）

さて、ついに来たよ

カゲっち「ダイル君とか」

ダイル「オイラすごく心配（汗）」

ラッシュ「二人ともがんばれ、俺もついてる」

そうだよ、ダイル君は修行の成果、カゲっち君はトラウマの克服のバトルなんだから、それじゃあバトル128

カゲっち・ダイル「がんばります!!」

バトル128 カゲっちVSダイル トラウマを克服せよ&修行の成果

ゼルス「さて、これで最後だな」

ついに

カゲっち「僕の番が来ちゃった…」

ダイル「オイラの出番…」

二匹は緊張してしまっている

しかし

ポンッ

二匹はびくつとしながら後ろを振り向くと

ラッシュ「大丈夫だ二人とも」

ヒート「いいバトルにしてくれよ♪」

前の戦いでボロボロの二人だ

ラッシュとヒートは思いっきりの笑顔で二人に言う

ラッシュ「最後まであきらめるなよ」

ヒート「お前達ならできる、俺達が期待できるバトルを」

二人は期待している

カゲっちとダイルのバトルを

二人は勇気を振り絞り

カゲっち「行って来ます」

ダイル「オイラも…」

二匹はバトルフィールドに

…

ゼルス「そろったな、これより！カゲっちとダイルのバトルを行う
！！二人とも！準備はできたか！」

二人「はい！」

二人は覚悟ができたようで大きく返事をする

バトル好きだがある事件でトラウマになってバトルでのトラウマを
背負っているカゲっち

おたまに大怪我させられたがなんとか回復し、そしてここで修行し
たダイル

その二人が今このバトルフィールドにいる

カゲっち「（なんだろう…先輩達のバトル見てたら…もう僕は…）」

カゲっちの目が燃える

ダイル「（オイラも…ラッシュ先輩のおかげで強くなれたんだ！絶対負けない！！）」

ダイルの目も燃えている

ゼルス「それじゃあバトル開始！！」

今バトルの合図が出た

カゲっち「大文字！！」

ダイル「水の波動！！」

カゲっちは大文字、ダイルは水の波動を繰り出した

技は相殺され、水蒸気が出る

カゲっち「ドラゴンクロー！！」

ダイル「オイラも！！ドラゴンクロー！！」

二人は同時にドラゴンクローを繰り出す

カキーン！！

お互いはじき返された

カゲっち「ダイル君やるね」

ダイル「カゲっち君もだよ」

二人は互いに褒める、そして笑顔になる

ラッシュ「もう大丈夫だな…ダイルとカゲっちは」

ヒート「ああ、あの二人、すごい笑顔だぜ♪」

ラッシュとヒートは観客席で二人のバトルを見ていた

ダイル「ランブルウィーター!!」

ダイルは前方に進みつつ水をまとった爪で回転しながらカゲっちに攻める

カゲっち「うわっ!?!」

カゲっちは当たってしまふ

ダイル「えいっ!」

ダイルはすかさずそこからカゲっちを蹴って打ち上げ、水をまとった爪を連続できりつけてカゲっちを飛ばした

しかし

ボンッ！

ダイル「えっ！？」

カゲっちは消えたのだ

カゲっち「龍の怒り！！」

カゲっちは青い炎を吐いた

ダイル「うわっ！？」

ダイルは避けきれず直撃する

ダイル「熱湯！！」

ダイルは熱湯を吐いた

この技はたまにやけど状態にさせる技、カゲっちにはやけどしないが水タイプなので食らえば大ダメージだ

カゲっち「火炎放射！！」

カゲっちは火炎放射を繰り返すが

カゲっち「うっ！！」

カゲっちは突然火炎放射を吐くのをやめた

カゲっちは熱湯に直撃

カゲっち「うわっ!？」

倒れてしまう

ダイル「このまま一気にいくよ! ハイドロポンプ!」

カゲっちにハイドロポンプが迫る

カゲっち「(僕は……絶対……過去なんか……)」

ハイドロポンプがカゲっちのすぐに迫る

カゲっち「(負けない!!)」

突然カゲっちの周りから炎が燃え上がり、ハイドロポンプが蒸発した

ダイル「えっ!？」

ダイルは驚く

カゲっちの炎は青白く燃えていた

ぞくに言う怒り状態だ

チコっち「やばい!?! あの時のが出てしまったわ!!」

チコっちが驚く

この怒り状態のせいで彼はトラウマを植え付けてしまったのだ

ラッシュ「トラウマになった…怒り状態か…カゲっち!! しっかりしろ!!」

カゲっちが一步一步とダイルに近づく

ダイル「ヒッ!？」

ダイルが一步後退する

さらに一步カゲっちが進み

ダイルがさらに一步後退するが

ダイル「あっ!？」

ダイルはバトルフィールドの壁ぎわまで来てしまった

ピカっち「もう…やめて…カゲっち君(泣)」

ピカっちがなく

ラッシュ「ダイル!! カゲっち!!」

ヒート「しっかりしろ!! カゲっち!!」

二人は必死に声をかける

ダイルはもはやピンチになっていた

もう逃げられない

ダイルは目を閉じて覚悟した

……あれ？

何も来なかった

カゲっち「僕は…過去に…負けない…」

カゲっちは必死に抑えていた

自分の過去のトラウマに

目には涙が出てくる

カゲっち「ダイル君ごめんね…でも…もう大丈夫」

カゲっちは今もお燃えていた

ダイル「カゲっ…ち…君…」

静まるバトルフィールド

カゲっち「もう…僕は過去なんかには負けない!!」

カゲっちの炎がさらに燃える

カゲっちはダイルから離れた

ラッシュ「危なかったな…」

ピカっち「よかった…」

みんな安堵の表情をする

カゲっち「さあ！ここからだ！！」

ダイル「うん！」

もうカゲっちにはあの時の怖い感じのカゲっちではない

バトルを楽しむ、バトル大好きなカゲっちに戻ったのだ

ダイル「いくよ！！これがオイラの全力！！アクアスプリング！！」

ダイルはハイドロポンプを足した水圧をカゲっちに向かって吐く

カゲっち「なら僕もこれで！！オーバーヒート！！」

カゲっちはオーバーヒートで対抗

互いの技がぶつかり合い、爆発した

カゲっち「うわっ！？」

ダイル「うわっ！？」

二匹は吹っ飛ばされた

あたりが水蒸気となっていた

ラッシュ「どうなんだ!？」

水蒸気がおさまると

二人は倒れていた

ゼルス「両者戦闘不能!!」

ラッシュ「二人とも!!」

ヒート「俺も!!」

ラッシュとヒートは二人に駆け寄る

ラッシュ「ダイル!カゲっち大丈夫か!」

ヒート「しっかりしろ!」

二人は声を掛ける

カゲっち「はい…なんとかか…」

ダイル「オイラも…」

二人は無事だった

ラッシュ「よくがんばった」

ヒート「そうだ、お前等二人最高だぜ」

ヒートはグーサインをした

カゲっち・ダイル「はい」

二人はこれまで以上の最高の笑顔だった

やっと書けた!!

カゲっち「ありがとうございますフオックさん」

いいや、これはカゲっち君自信が過去の鎖を断ち切った証だよ

ダイル「オイラもなんとかバトル終わってよかったです」

怖い思いさせてごめんねダイル君

ダイル「でも楽しかったです、フオックさんやラッシュ先輩には感謝しきれないほどです(泣)」

よかった♪

ラッシュ「これでもう」

大丈夫だよ、辛さを超えないと意味ないし、それにここまでバトル書けたのも自分の努力かな?

ラッシュ「まあ次回はどうかだな」

次回はその後になるね

バトル129 カゲっちのカウンセリング(前書き)

バトルその後です

ラッシュ「このタイトルからして、一体？」

ここで新キャラ登場です、バトル129

ラッシュ「燃え尽きたぜ」

バトル129 カゲっちのカウンセリング

バトルが終わってみんな休んだ

みんな疲れたのか寝ている者もいた

そんな時

ラッシュ「カゲっちいるか？」

ラッシュがカゲっちを呼ぶ

カゲっち「先輩どうしたんですか？」

先ほどのバトルでボロボロのカゲっちが出てくる

ラッシュ「いたか、ちよっといいか？」

カゲっちが言われるままラッシュの元へ

……

カゲっち「えっ！？あの怒り状態はトラウマで出来たものだったんですか！？」

カゲっちが驚いた

どうやらあの怒り状態は負けたくない気持ちが余計出てきてしまっ

たものなのだ、カゲっちはショックを受けた

ラッシュ「ああ、そこでちょっとある所に行こうと思ってな」

そこでラッシュはカゲっちを連れてある場所へ

……

ラッシュとカゲっちがある場所にいた

書かれているのは保健室だった

つまり二人は今保健室の前まで来ていた

ラッシュ「失礼します！」

ラッシュとカゲっちは保健室に入った

????「あら、ラッシュ君じゃない、またずいぶんボロボロね、あなたっていつつもそうなんだから」

出てきたのは一匹のポケモン

かわいい耳につぶらな瞳のピンクのポケモン

ヒヤリングポケモンのタブンネだ

ラッシュ「すみませんヒリル先生、ちょっと見てもらいますか？」

ヒリルという名のタブンネにカゲっちを見させる

実はヒリルはこの保健室の先生で、カウンセリングなど色々やっ
ていて怪我を治す優しい先生なのだ

ヒリル「あら、このヒトカゲ君？君、名前は？」

カゲっち「カゲっちといいます、一応本名はヒカゲっています」

カゲっちは一応本名も言う

カゲっちの本名はヒカゲと言う

ヒリル「ヒカゲ君ね、で？どうしたの？」

そこにラッシュが話す

ラッシュ「実は…」

ラッシュはカゲっちの事を色々話した

トラウマの事など

ヒリル「なるほどね…その過去のトラウマで色々あって怒り状態が
出てしまったってことね、わかったわ、ラッシュ君はもう行ってい
いわ、後は私がこの子にカウンセリングするから」

ラッシュ「わかりました、じゃあカゲっち、後でな」

ラッシュはバトルフィールドへと向かった

ヒリル「それじゃあカゲっち君、早速だけど色々話させてくれないかしら？そのトラウマとさっきのバトルの事を」

カゲっち「はい」

カゲっちは話した

バトル129 カゲっちのカウンセリング（後書き）

というわけで急遽新キャラで保健室の先生、ヒリル先生です

ヒリル「ヒリルよ、よろしくね♪」

やっぱタブンネならいいほうかも

ヒリル「作者さんも色々疲れてないかしら？小説更新しすぎとか後は色々」と

わかってます（汗）次回はそんなカゲっち君のトラウマ治療です

ヒリル「次回も見なさいね」

バトル130 バトル暴走恐怖症（前書き）

ついにカゲっち君が暴走した原因がわかります

ラッシュ「一体？」

それではバトル130

ラッシュ「恐れるな！！」

バトル130 バトル暴走恐怖症

カゲっちはヒリルに自分の過去や今のバトルのことを話した

ヒリル「なるほどね…」

ヒリルは考える

ヒリル「たぶんカゲっち君はバトル暴走恐怖症の症状ね」

カゲっち「えっ!？」

バトル暴走恐怖症

ヒリル「過去にトラウマがあってバトルになんらかの支障が出てしまい、暴走することがある症状なのよ、カゲっち君の場合はその友達を助けるために怒り状態が出てしまった、それ以来バトルできなくなっって、今回バトルしたのが久しぶりだったため自分がピンチになったときと火炎放射が出せなかったときに出た違和感からそれが起こってしまった、だけどカゲっち君は少し症状が軽いみたいだからもう大丈夫だと思うわ」

どうやらカゲっちは症状が軽いためか暴走はもうしないという

ヒリル「でもね、そう言ってもカゲっち君はバトルの勘など色々しとかないとまた出る場合があるから、今度は気をつけなさい」

カゲっち「はい…」

少し暗くなるカゲっち

ヒリル「でもバトルって色々あるのよ、許せない思いもあるけど、カゲっち君は本当はバトルしたいと思ってたでしょ？」

カゲっち「えっ!？」

カゲっちは驚く

ヒリル「もしあなたが一生バトルできなかったらトラウマを消すことはできないでしょ？」

たしかに

ヒリル「でもそんなに早くトラウマは消えないわ、でもね、もうあなたはそれによって少し解放した感じがあるわ」

カゲっち「そうなんですか？」

ヒリル「そうよ、これからは仲良く、もしまたその過去で同じことがあったら、自分が守りたいと思いなさい、怒り出せばまた同じ結果にはなるわ、いいわね？」

ヒリルは一喝した感じに言う

カゲっち「は、はい!」

ぎこちなく返事するカゲっち

ヒリル「それでこそよ、それじゃああなたにこれをあげるわ」

ヒリルはカゲっちにペンダントを渡した

そのペンダントはお守りがついていて、中にはひし形の宝石が入っていた

カゲっち「これは？」

ヒリル「それは進化の奇跡という宝石なの、これは進化前のポケモンに有効なお守りよ、これはあなたのお守りとして大切にしてね、あなたがリザードンになったら必要はなくなると思うけど」

進化の奇跡

持たせると進化前のポケモンの防御と特防を上げる道具だ

カゲっち「ありがとうございます！」

カゲっちはお礼を言う

ヒリル「がんばってね、ちゃんとこまめにバトルの特訓をしなさいね、また何かあったらちゃんと病院でカウンセリングを受けるのよ！」

そうヒリルは言った

カゲっちは保健室を去った

ヒリル「はあくきつとあの子は成長するわ、過去を乗り越えてね」

不思議な言葉を残し、ヒリルは保健室のドアを閉めた

……

ラッシュ「カゲっち！」

ヒート「戻って来たな」

ラッシュとヒート、そして

ピカっち「カゲっち君！」

ピカっちもいた

カゲっち「ごめんなさい先輩達、ピカっち」

カゲっちは謝る

ラッシュ「謝らなくていい、それでどうだった？」

カゲっちはラッシュ達に説明した

ピカっち「そうだったんだ…でももう大丈夫なんだね」

少し涙目のピカっち

一番心配していたのはピカっちなのだから

カゲっち「ごめんねピカっち」

ピカっち「カゲっち君、あたし…」

ガバッ！

なんといきなりピカっちはカゲっちに抱きつく

ラッシュ「彼女に心配かけるなよ、カゲっち」

カゲっち「ピカっち／／／／」

カゲっちは赤くなる

ピカっち「あたしはカゲっち君をちゃんと見る、だからカゲっち君、トラウマ一緒に治すよう努力しよう（泣）」

涙を流すピカっち

カゲっち「ごめんね（泣）」

カゲっちも泣き出す

ヒート「やっぱ二人とも合うぜ♪」

ラッシュ「そうだな…それじゃあ戻るぞ二人とも」

二人は頷きラッシュ達と一緒に戻っていった

バトル130 バトル暴走恐怖症（後書き）

ある意味俺が辛い

ラッシュ「作者無理するなよ（汗）」

大丈夫、これでもね

ピカっち「フォックさん、すみません」

いいんだよ、それにちよつとサトシのゴウカザルが進化前に暴走してたからそれをちよつと参考にしたけどね（汗）

ラッシュ「作者はヒコザル好きな思いがあるからな」

カゲっち「フォックさんはちゃんとしているんですね」

ラッシュ「子供っぽいけどな（汗）」

さて次回はやつと特訓開始です！

バトル131 それぞれの特訓（前書き）

さて、23歳一発目です

リザレ「フォックさん嬉しいね」

うん♪

ラッシュ「まあ23の大人だしな」

まあね、それじゃあいくよ！バトル131

ラッシュ・リザレ「燃え上がれ！！」

バトル131 それぞれの特訓

ここはバトルフィールド

ゼルス「みんな集まったな、それじゃあここからは別々の修行となる、ここはキュウコン先生が言う」

ゼルスは下がって、キュウコン先生が前に出る

キュウコン「それではそれぞれの持ち場だが、まずカゲっち、ヒート、ピカっち、ラッシーはラッシュ君、リザレ君、ヒイロ君、ダイル君、がばね君、ライト君、御羅君、ゴーシュ君、モモ君、リオーネ君達と特訓、特にヒートは精神面、カゲっちはトラウマなどの面がある、なのでこっちの方で特訓してくれ」

カゲっち・ヒート・ピカっち、ラッシー「はい！」

4人は大きく返事した

さすが野球部だ

キュウコン「次にラージはラグ君、キノガッサ君、レウト君、ホームラ君、タツキ君、ルガー君、ガロ先生、ネロ君、ユーム君と特訓だ、いいか？」

ラージ「はい！！」

気合が入ったようにラージが返事をする

そりゃあ同じラグラージのラグがいるためだからだ

ラージ「ラグさん！よろしくお願いします！！」

ラグ「うん、がんばろうねラージ君」

お互い握手する

キュウコン「次にジュジュとチコっちとチックはルング君、エイク君、ミナミ君、スバル君、リリー君、アイリス君、ウィリア君、リナト君、ムゲン君、ブレイ君、ルガー君、アバリ君、バベル君と特訓だ」

ジュジュ・チコっち「はい！」

二人は返事をする

キュウコン「最後にラプはサクラ君、レイラ君と特訓だ」

ラプ「はい！」

みんなそれぞれ特訓をすることになった

みんな、それぞれの思いを胸に

バトル131 それぞれの特訓（後書き）

さて、ここからは分けてそれぞれの視点で見て行きます、まずはラッシュ達からです

ラッシュ「俺達か」

ヒート「楽しみだぜ！」

カゲっち「ラッシュ先輩と特訓できるのは嬉しいです／／／／」↑
頭がオーバーヒート

リザレ「俺もがんばらないと」

ピカっち「あたしがカゲっち君を支えないと」

ラッシー「楽しみだぜ♪」

バトル132 それぞれの特訓 ラッシュュサイト（前書き）

はい！最初はカゲっち君、ヒート君、ラッシー君、ピカっちちゃんのラッシュュの特訓サイトです

ラッシュュ「さて、俺も本気で行かないとな」

うん、カゲっち君とヒート君が特にね、それじゃあバトル132

ラッシュュ「燃えるぜ！！」

バトル132 それぞれの特訓 ラッシュュサイト

こちらはバトルフィールドから離れた滝

そこで特訓するのはカゲっち、ヒート、ラッシー、ピカっちだ

そしてメンバーはラッシュュ、リザレ、ヒイロ、ダイル、がばね、ライト、御羅、ゴーシュ、モモ、リオーネだ

ラッシュュ「そんなじゃあヒートは瞑想を10分だ、精神面ではそうしないとな」

ヒート「瞑想か…わかった」

ヒートはしぶしぶとあぐらをかいて目を閉じた

瞑想は技では特攻と特防をあげる技、この特訓は技でないので普通の瞑想だ

精神面で熱くなるヒートにはとっておきの特訓だ

滝に打たれる特訓もあるが、それでは厳しいことになるため瞑想にしたのだ

ラッシュュ「カゲっちは俺とバトル特訓だ、後リザレとヒイロとがばねとモモとゴーシュもだ」

リザレ「はい」

ヒロ「わかりました」

がばね「ああ」

モモ「もちろんだ!」

ゴッシュ「やってやるぜ!」

五人が承諾する

ラッシュ「ラッシーはライトと御羅とリオーネと特訓してくれ」

ラッシー「OKだぜ!」

ライト「うっしゃあ!!俺がじきじきにやってやるぜ!」

ライトは気合が入る

もはやポケモンの領域を超える特訓をしている

リオーネ「わかった」

ピカっち「あのうあたしはどうすれば」

ピカっちが残っていた

ラッシュ「ピカっちは俺と一緒にだ、とりあえずカゲっちのサポートなど少しバトルの修行もさせるからいいか?」

ピカっち「はい！」

ピカっちは返事する

ラッシュ「それじゃあヒートは10分後、瞑想が終わったら俺のところに来てくれ、バトルフィールドで待ってる」

みんなそれぞれの場所へ

……

ヒート「……」

ヒートは瞑想をした

ヒート「……」

感じるのは風の音と滝が流れる音だけだ

ヒート「……」

少しヒートの足がピクピクと動く

ヒート「（だめだ…だけどこれも修行のうち…俺ががんばらないと……）」

瞑想は続く

……

一方、ラッシュの方は

ラッシュ「フレアソウル！」

カゲっち「火炎放射！！」

カゲっちが火炎放射を吐く

ラッシュ「いい感じだ、もう一度行くぞ！」

カゲっち「はい！」

カゲっちは再び火炎放射を吐く

ヒロ「おっ！カゲっちもいい感じになってきたな」

ダイル「オイラと戦って、落ち着いた感じですね兄貴」

ダイルも強くはなった

少しダイルも笑顔になってきた

いままで彼はいじめという心に傷つくことがあった

しかし交雑種であるヒロやラッシュ達と一緒にしながら彼は大きく成長した

今までの自分が変わってきた証拠だ

モモ「おっ！いい感じだなくあの二人♪」

ゴーシュ「俺達もやろうぜモモ♪」

ゴウカザル二匹がバトルフィールドに立つ

モモ「いつもの行くぜ！！俺の必殺技パート3！こっぴど業火烈火！！」

モモの体が燃える

ゴーシュ「ジグザグフレイム！！」

互いの技がぶつかり合う

一方

ライト「よし！今度はこっち持ち上げてみる！」

ライトが腕組みしてみていた

ラッシー「重っ！？」

数十キロの岩をラッシーが持ち上げる

数が異常に多く、ライトなんて

ライト「このぐらい軽いだろ？」

なんとピチューながら自分よりかなり大きい岩を持ち上げたのでは

しかしこれも特訓

精神の特訓なのだから

そして時間は10分となり

ピピピピッ

その合図がラッシュが残した時計になる

ヒート「よっしゃあ!!」

ヒートはガッツポーズをして時計のアラームを止めた

ヒート「でもまだまだだ…ラッシュのところに戻らないとな」

ヒートはバトルフィールドに向かった

……

ライト「まだまだ!!」

ライトはすでに120周は走っていた

ラッシー「はあ…はあ…さすがライトだぜ…」

リオーネ「俺もやばいんだが(汗)」

御羅「俺はまだまだ余裕だ!!」

疲れている二人と余裕な一人が走っている

彼等の特訓は続く

バトル132 それぞれの特訓 ラッシュュサイト（後書き）

まだまだ続きがあるので

ラッシュュ「ライトの特訓異常だったしな（汗）俺も苦勞したかなんとか（汗）」

そうだね（汗）ライト君はチートピチューだしね（汗）

カゲっち「ある意味すごい（汗）」

差があるもんだね（汗）次回はラッシュュ達の特訓の続きです

バトル133 それぞれの特訓 ラッシュサイト2（前書き）

続きです

ライト「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」↑すごい勢いで走る

（汗）ではバトル133

ライト「燃えるぜ!」

バトル133 それぞれの特訓 ラッシュサイト2

ラッシー「はあ…はあ…」

リオーネ「はあ…はあ…」

御羅「まだ…まだ…」

三人は疲れていた

しかもまだ50周ぐらいだ

ライト「どうした？まだまだ俺は走れるぜ！」

ただいまライトは200周目を回っている

3人は思った

こいつはどんだけチートなんだと（汗）

……

ヒート「終わったぜ！」

ヒートがバトルフィールドに

ラッシュ「戻ったなヒート」

カゲっち「はあゝ疲れた」

カゲっちは地面に倒れこむ

久しぶりにバトルの勘が戻ったようだ

ラッシュ「それじゃあカゲっちは休憩な」

カゲっち「はい…」

カゲっちはバトルフィールド近くのベンチに座る

ピカっち「カゲっち君、はい飲み物」

ピカっちは飲み物を渡す

カゲっち「ありがとう…」

カゲっちはくいと飲んだ

ヒロ「次、俺が」

ヒロが前に出る

ヒロ「ちょうどよかった、ラッシュ先輩！俺とバトルしてください！」

ヒロがラッシュにバトルを申し込む

ラッシュ「おっ！ちょうどヒロともバトルしたかったところだ！」

ちなみに回復していたため、ピンピンしている

ヒート「おっ！俺も見えていないと♪」

ヒートがベンチに座る

モモ「おっ！バトルか！ゴーシュ！見ようぜ！」

ゴーシュ「いいぜ！」

ゴウカザル二匹がバトルフィールドからベンチに座る

リザレ「先輩、ヒート先輩とのバトルで傷ついているのに大丈夫で
すか？」

リザレは前回ヒートのバトルでボロボロなのだが

ラッシュ「もう回復した、まだまだ余裕だ」

もう治っているため大丈夫だ

ヒロ「（先輩とバトルしたかった…俺も燃えてきた！）」

ヒロは燃えている

ラッシュ「来い！」

今電撃ヒトカゲとバトル部部長の戦いが始まる

バトル133 それぞれの特訓 ラッシュサイト2（後書き）

はい！次回はヒロ君のお望みどおり、ラッシュとバトルです

ヒロ「まさか俺がキャラバトンでラッシュ先輩とバトルしたいって言ったから？」

そうだよ♪どうせ来たのだからバトルしないと

ラッシュ「全力で来い！」

ヒロ「はい！」↑電気がバチバチとくる

バトル134 それぞれの特訓 ラッシュVSヒロ（ぶつかり合う炎と雷（前

ついに対決です

ヒロ「ラッシュ先輩とのバトル、楽しみです!!」

ヒロ君、燃えているね、それじゃあバトル134

ヒロ「燃え上がれ!!」↑体から電気がバチバチと響く

バトル134 それぞれの特訓 ラッシュVSヒロ／ぶつかり合う炎と雷

ラッシー「はあ…はあ…マジかよ（汗）」

ライト「どうしたお前等！！このぐらいでへばるなよ！！」

御羅「ぜえ…ぜえ…ライトすげえ」（汗）」

リオーネ「もう…だめだ…」

ラッシーは100周でストップ、休憩することに

御羅はまだまだが大量の汗を書く

リオーネは50周でダウン

目を回してしまった

だがライトは現在500周ぐらいいも走ってると思う（汗）

しかもなぜライトだけは元気だった

ラッシー「マジすげえ」（汗）あ〜でもいい汗かいたぜ♪」

ラッシーは満足していた

御羅「ホントだよな」

御羅は水分補給をする

リオーネ「……」

リオーネは目を回してベンチで眠っている

……

一方、バトルフィールドでは

ラッシュ「いいかヒロ？」

ヒロ「いつでもOKですよ先輩」

ヒロは体をバチバチさせる

今、ラッシュとヒロとのバトルが始まる

ラッシュ「行くぞヒロ！火炎放射！！」

まずラッシュは火炎放射を吐く

ヒロ「こっちも火炎放射！！」

ヒロも火炎放射を吐く

どちらも爆発する

カゲっち「どちらも互角！？」

ヒート「かなりやるな〜ヒイロもかなり強ええな」

カゲっちとヒートはこの二人の戦いを観客席で見っていた

ダイル「兄貴とラッシュ先輩すごい…」

ダイルは啞然と見ている

ゴーシュ「すげえ…」

モモ「ヒトカゲなのにやるな〜」

ゴウカザルの二人も啞然と見ている

ヒイロ「雷!」

ヒイロは雷でラッシュに向けて放つ

ラッシュにとって電気タイプは弱点だ

ラッシュ「守る!」

ラッシュは守るで防いだ

ヒイロ「プラズマアロー!」

ヒイロは電気で作った弓で矢を引いて放った

ラッシュ「フレアソウル!」

ラッシュはフレアソウルでプラズマアローを迎撃

ヒロ「やっぱ先輩にはこの手のは効かないか…10万ボルト!!」

ヒロは10万ボルトを放つ

ラッシュ「バーストソウル！」

ラッシュはフレアソウルよりさらに強力なものを放つ

10万ボルトとフレアソウルを強化した技、バーストソウルが相殺された

ヒロ「やっぱ先輩は強いですね！」

ラッシュ「ヒロも中々だったぞ♪」

互いにニヤリとする

相当なものだ

ハイブリット
交雑種で電気タイプを使うヒトカゲのヒロ

そしてこのポケハン学園バトル部の我等が部長のラッシュ

ぶつかりあい、そして相殺される

ヒロ「ライトニングショットガン!!」

ヒイロはいくつもの小さな電気の球体をラッシュに向けて放つ

かなりの数もある、これではさすがにラッシュでも防げないはず

そう思ったヒイロ、しかし

ラッシュ「バーニングショット9!!」

ラッシュはいくつもの小さな火球を放った

それぞれの技が相殺された

ヒイロ「10万ボルト!!」

ここでヒイロの10万ボルトが来る

ラッシュ「そう簡単に食らわせねえよ♪」

ラッシュは空を飛んで回避、そこから

ラッシュ「メテオスイング!!」

ラッシュは炎をまとしてヒイロに突進

ヒイロ「がっ!？」

ヒイロは食らってしまう

しかしメテオスイングは反動を受ける技、ラッシュにもダメージが来る

ラッシュ「ここまでやるなんてな…」

ヒロ「まだまだこれからです！」

ヒロはまだまだやる気だ

ラッシュ「行くぜ！」

ヒロ「はい！」

リザレ「ここからどう来るんだろう？」

モモ「ラッシュもヒロも互いにダメージとかもあるしな」

みんなが見守る

ラッシュ「フレアソウル！！」

ヒロ「10万ボルト！！」

互いの技が再び相殺する

…

ライト「ふう〜いい汗かいたぜ♪」

ライトはどのくらい走ったのかわからず、走り終わって休憩している

ラッシュ「しかしすげえな、ライトって本当にピチューなのか？」

ラッシーがライトに質問する

ライト「ピチューだZ E☆」

とハツチャけた感じに言う

ラッシー「まあおかげでいいトレーニングだったぜ♪」

ラッシーはライトに握手した

ライト「ラッシーも豪快でよかったぜ♪」

……

ヒイロ「はあ…はあ…」

ラッシュ「やっぱ強えなヒイロ」

ラッシュは少しボロボロ、対するヒイロの方がボロボロだった

ヒイロ「先輩の技強いです…俺もここまでやるなんて思わなかった…でもこれなら…」

ヒイロは拳を強く握り、体を捻って握った拳を引いた、そこから炎が宿る、その炎から青白い電気がバチバチと出てくる

ヒイロ「ヒート・オブ…」

ラッシュ「こっちもだ!!行くぞヒイロ!!」

ヒロ「はい！！レールガン！！」

ラッシュ「龍炎！！」

ラッシュは威力が高い炎技とさらに炎の龍を放つ

ヒロは赤い電撃炎を力いっぱい拳に放った

二人の大技が炸裂し辺りに火柱が立っている

そして爆発し、爆風が起こる

みんなが顔を両手で覆う

……

ライト「なんだ！？今爆発が起きたぞ！？」

ラッシュ「この方角から、バトルフィールドの方だったな」

御羅「行こうぜ」

三人はバトルフィールドへと向かった

……

煙がただよい、そしておさまる

そこには

ラッシュ「はあ…はあ…」

ヒロ「はあ…はあ…」

ボロボロになっている二人の姿だった

しかし

バタッ

ヒロは倒れてしまった

カゲっち「ヒロ先輩!？」

ゴーシュ「すげえ!!二人ともすげえ!!」

ゴーシュが叫ぶ

ピカっち「これがヒロ先輩とラッシュ先輩のバトル…」

ピカっちは啞然としている

ヒート「やっぱラッシュとのバトル最高だな♪」

カゲっち「すごいですよ二人して!」

がばね「それがラッシュだからな、さすが俺が認めたライバルだ」

ダイル「兄貴も先輩もすごいです!!」

リザレ「こんなバトルすごいです！」

みんなは叫んだり、色々と言う

ヒロ「あゝやっぱ先輩は強いな」

ヒロは少し顔を出した

ラッシュ「大丈夫か？」

ヒロ「ラッシュ先輩、あなたと戦えてすごくよかったです…」

ヒロはゆっくりと立った

ラッシュ「こっちな」

ラッシュとヒロは互いに握手した

バトル134 それぞれの特訓 ラッシュVSヒロ／ぶつかり合う炎と雷（後

ヒロ「やっぱ先輩は強いな」

ラッシュ「ヒロも結構強かったぜ、さすがだな」

ヒロ「まあ俺もダイルと一緒にトレーニングしましたし」

いいバトルになったのかわからないけど（汗）次回はラージ君の方になります♪

ラージ「次回も見てくださいよな！！」

バトル135 それぞれの特訓 レウトサイト(前書き)

レウト「俺の方だZE☆」

それ気に入ったんかい(汗)

ホムラ「調子に乗るなよ(汗)」

ラージ「さて、気合入れていくぜ!!」

はいはい(汗) バトル135

ラージ「気合だ×5気合だー!!」

どこぞのあの人(汗)

バトル135 それぞれの特訓 レウトサイト

こちらは野球場

こっちにはレウト、ラグ（分身）、キノガッサ、ホムラ、タツキ、ガロ、ネロ、ユーム、ラージの方だ

ラージ「ラグさん！！早速剣の練習しましょう！」

と、気合が入るラージキャプテン

ホムラ「その前にまずはここを軽く10周したほうがいいな」

ラージ「えっ!？」

ラージは固まる

彼的にはあまり走りたくはないのだ

理由は

ホムラ「どうした？」

ラージ「いや、俺あまり走るのは（汗）ラッシーの豪快スイングで走りまくりであり（汗）」

ラグ「僕達の種族はあまり素早さが高くないから（汗）」

ラグラージは本来は攻撃や特攻が高い、しかしラグはデンラージに

より少し素早さは高い

ラグ「まあでも素早さも必要だから走ろうよ」

この言葉に

ラージ「はい！」

ラージは返事する

ホムラ「ラグには返事するんだな（汗）」

啞然とするホムラ

ガロ「まあ俺も重いから走れるけどな」

と、ガロは自分の腹をドン！と叩く

キノガッサ「まあフットワークにもいいしな」

キノガッサはボクシングのファイティングポーズをしてシャドーボクシングをやる

タツキ「その方がいいですね」

ネロ「ZZZ…」

ネロは相変わらず寝ている

しかし

パチッ

ネロ「やんなきゃ」

寝ている彼が起きていた

ユーム「やるぞ…」

みんな野球場を走る

……

ホムラ「つと俺は終わりだ」

ホムラは10周走り終わった

次々と走り終わり、ラージは

ラージ「はあ…はあ…やっと終わった」

ラージはゴールしてからベタンと地面に仰向けに倒れる

レウト「次は技の練習しようぜ、ラグはラージの方を」

ラグ「わかった」

それぞれ練習をすることに

……

ラージ「やっとなラグさんと特訓だ！」

嬉しそうにするラージ

ラグ「うーん、まずは何処から教えればいいんだろう（汗）」

実は最初はどうするか考えてないラグ

ラグ「しょうがない、まずは剣を作る練習からだね、ラージ君よく見ててね、カリバー！！」

ラグが叫ぶとラグの手からカリバーが現れた

カリバー「おっ！ラグ！やっとな俺の出番か？」

ラグ「うん、でも今回はラージ君に剣を教わるから、少し見てて」

カリバー「戦いてえが、まあいいか」

カリバーはそう言う

ラージ「それがラグさんのカリバーですか！すごい！！」

ラージは目をキラキラさせる

ラグ「まず剣の作り方だけど…手をかざして、剣のイメージを作るんだ」

ラージ「手をかざして：剣のイメージを作る」

ラージは手をかざして頭に剣のイメージを作る

すると少しだが手から水が集まる

ラグ「少し水が集まってるね、もっとがんばれば剣が作れると思うよ」

ラージ「はい！」

ラージでも少しはできるようだ

果たして、うまくできるのか？

バトル135 それぞれの特訓 レウトサイト（後書き）

ラッシュ「レウト達の特訓だな」

色々と教える面はあるから少し分かれる感じになるけど、次回もラージ君の剣製作です、はたしてラージ君オリジナルの技はできるのだろうか！

バトル136 それぞれの特訓 ラグのかりバーバージョアップ!! (前書き

久しぶりの更新です

ラッシュ「久しぶりだな」

今回、『ラグラージの冒険』の変化とともに分身のラグ君のかりバーにも!?

ラッシュ「楽しみだな」

それじゃあバトル136!!

ラッシュ「切り裂け!!」

バトル136 それぞれの特訓 ラグのカリバーバージョンアップ!!

数時間後

ラージ「はあ…はあ…」

ラージはなんとか剣を水で具現化させた

ラグ「うん、がんばったね」

ラージはかなりの汗をかいていた

ラグ「少し休憩しようか？」

ラージは頷き、休憩にはいった

……

ラージ「いつもラグさんはカリバーの具現化はそうするんですか？」

ラグ「うん、僕もがんばらないと」

二匹のラグラージは休憩していた

ラグ「僕の仲間達のためだから……ん？」

ラグは何か違和感を感じた

ラージ「どうしたんですか？ラグさん」

ラグ「ちょっと待って……カリバー！」

ラグは叫ぶとカリバーとは違うものが出てきた

ラグ「黄色の光？」

そう、黄色の光だった

ラグ「こっちの僕の方でも何か変化があったってことだ！」

ラージ「すごい！？ラグさん！早速！」

ラグは早速カリバーを起動した

ラグ「カリバー！！」

カリバーが出てきた

だがカリバーは変化していた

握る部分の下には何かがついていて、さらに剣を生成するためのエネルギーの出力部分の両端には何かがついていた

ラグ「これは！？なのはさんと同じ！カードリッジ！」

カリバー「そうですよ、分身のラグ」

ラグ「えっ！？」

なんとカリバーの性格が変わっていた

ラージ「カリバーの性格が!？」

まさかカリバーの性格も変わるとは(汗)

ラグ「すごい!まさか君まで変わるなんて!」

カリバー「私もです分身のラグ、よろしくお願いします」

と、カリバーは丁重に挨拶する

ラグ「なるほどね」

カリバー「とりあえず説明しましょう」

カリバーは自分の使い方などを分身であるラグに伝える

ラグ「わかった!ありがとう!がんばるよ!」

ラグは嬉しくなった

カリバーのパワーアップはこっちの分身のラグのカリバーにも影響を与えた

……

タツキ「なるほど…カリバーがパワーアップしたんですね」

ラグ「うん!これでなんとかなったよ、ねえタツキ、僕ともう一度

バトルしていい？」

なんとラグはタツキにバトルを申し込まれた

タツキ「いいですよ、パワーアップしたカリバーの実力みたいです」

OKのようだ

再び二人のバトルが

繰り出さそうとしている

バトル136 それぞれの特訓 ラグのかりバーバージョアップ!! (後書き

分身ラグ「もう一人の僕ありがとう！」

さて、次回は再びタツキ君との対決です

バトル137 それぞれの特訓 再戦ラグVSタツキ（前書き）

ついに再戦です

ラッシュ「かなりパワーアップしてるからな」

あのみかつき女クレセリアを潰すにはかなりの力をつけないと気がすまないんだよ（黒怒）

ラッシュ「こわっ!？」

負けるわけにはいかないんだ、あのみかつき女クレセリアにはね（黒怒）

ラッシュ「作者の執念はわかるがやめてくれ（汗）」

という感じにいつてみよう♪バトル137

ラッシュ「行くぜ」

バトル137 それぞれの特訓 再戦ラグVSタツキ

ラグはカリバーを構える

相手はタツキ

前はタツキに負けたラグ、だが今回はいつもとは違う

負けない強さを

タツキ「行きますよラグ！ハイドロスラッシュ！！」

タツキは水の剣を作り、ジャンプしてラグに向かって一振りした

ラグ「カリバー！」

カリバー「ハイドロステインガー」

カリバーがそういうとカリバーからラグの技、ハイドロステインガーを繰り出した

タツキ「！？水の太刀、水面！」

タツキは水面を空中で防御した

ラグ「ウォーターシュート！」

ラグはウォーターシュートを繰り出した

タツキ「シエルバリア！」

タツキは貝の形のバリアでウォーターシュートを防いだ

タツキ「（カリバーもラグもかなりパワーアップしてますね……前回は比べものにならない力だ）」

タツキはラグを見た

ラグの目は真剣だった

ラグ「まだまだ！！」

カリバー「行きます！アクアシューター」

カリバーから水の誘導弾が放たれる

タツキ「シエルブーメラン！」

タツキはシエルブーメランで水の誘導弾を相殺した

ラグ「カードリッジロード！！」

カリバー「ロードカードリッジ！」

カリバーの両端のカードリッジが動いた、そこから中に入っている弾丸が押し上げられ、元のカードリッジに戻る

タツキ「（厄介になりましたね…カリバー）氷の太刀…白氷^{はくひょう}！！」

タツキは氷の剣を作り、そこから

タツキ「氷の舞…氷柱^{ひょうばしら}!!」

タツキは氷の剣を地面につけた

そこから白いベールの光が立つ

するとラグの地面から白い光が出てくる

ラグ「これは!？」

ラグは咄嗟^{とつと}に回避しようとしたが間に合わず、氷の柱に凍ってしまった

タツキ「この技は相手を凍らせる技です」

しかし

タツキ「えっ!？」

タツキは驚いていた

それは

ラグ「危なかった(汗)」

カリバー「私がフレイムカリバーになっていなかったら今頃凍ってましたし」

ラグは凍る直前にカリバーをフレイムカリバーに変えて氷を溶かしたのだ

タツキ「炎ですか……さすがですラグ、それでこそです、私も本気で
行きます！ 風の舞……風月^{ふうげつ}……！」

タツキは氷の剣を一振りする、そこから月の形のかまいたちが現れた
カリバー「ライティングウイング」

カリバーがそういうとラグの背中から、電気の翼が現れた

ラグ「軽い……今までとは違う感じになってる」

分身のラグは驚いていた

ここまでパワーアップしているとは

しかも

タツキ「かなりの電気が……私の体にも伝わってくる」

タツキは少しの電気を体で感じていた

タツキは水タイプ単体のポケモン

なので電気を感じるのはわかるだろう

ラグ「行くよタツキ！ カリバー！」

カリバー「OK…ソードフォーム」

カリバーはそういうと姿が変形した

大剣だったカリバーはまるで太刀のような剣へと姿をとけた

タツキ「これは!？」

タツキも驚く

ラージ「すげえ!! カリバーが変わってる!？」

そう、大剣のカリバーは、剣、つまり太刀に近い形に変形した

ラグ「これなら! ホーリースラッシュュ！」

ラグはカリバーを一振りした、するとカリバーから光輝く衝撃波が
繰り出された

タツキ「エアスラッシュュ！」

タツキはエアスラッシュュで相殺しようとしたが

タツキ「エアスラッシュュが!？」

エアスラッシュュは切り裂かれ消えた

タツキ「くっ……」

タツキは食らってしまった

タツキ「やりますね……」

タツキはボロボロになっていた

ラグ「すごい！すごいよカリバー！！」

カリバー「はい！」

ラージ「すげえ！！」

ホムラ「カリバーもすごいな……」

みんなが絶賛する

タツキ「どうやら……私もこの技を使うことになりますね……」

ラグ「えっ？」

タツキは何か切り札があるようだ

タツキ「ならここでぶつけましょう……私の最強の剣技を……」

タツキの体から青いオーラがまとう

ラグ「なら僕も」

ラグはデンラージになる

タツキ「それでこそラグです……行きますよ！ 光の舞……光水こうすい！！」

タツキは光の剣を作り……そこから光輝く強力な水をラグに向けて放つ

ラグ「行くよ！カリバー！！」

カリバー「はい……フレイムエクスカラッシュ」

ラグのカリバーが赤くなる

ラグ「全力全開!! シューーーーー」

ラグは大きくカリバーを振った

そこから赤い衝撃波が放たれる

それは光水と衝突する

タツキ「くっ……」

ラグ「ううっ……」

二人は粘る

二つの技は大きく爆発した

「うおっ!？」

ホムラ「うっ!？」

レウト「わっ!？」

ガロ「うおっ!？」

ネロ「……」

ユーム「うっ……」

キノガッサ「うおっ!？」

みんなは咄嗟に目を瞑った

……

光が収まったときには

タツキ「……」

バタッ

タツキはボロボロになって無言で倒れた

一方ラグは

ラグ「はあ…はあ……」

ボロボロでもまだ立っていた

プシュー

カリバーは機内にたまった熱を取り出すため、白い煙が蒸気機関車のように出す

ラグ「勝ったんだ……僕……」

バタッ

ラグも同時に倒れた

ホムラ「ラグ！タツキ！」

レウト「部室に運ぶぞ！」

みんなは部室へと二匹を運んだ

……

ラグ「う……」

ラグは目を覚ました

ホムラ「大丈夫か？」

ホムラがラグに声をかける

ラグ「うん……ここは……」

カリバー「ここは部室ですよもう一人のラグ」

カリバーは声をかける

タツキ「私の負けですラグ…私の完敗です」

タツキがラグの前に

ラグ「よかった……ありがとうタツキ」

タツキ「はい」

二匹は握手をかわした

ラージ「ラグさあああああああああああああああ
あん……………」

ラージがラグに抱きつく

ラグ「わっ!? ラージ君!?!」

ラージ「ラグさんが目を覚まさなかったらどうなっていたことか!
! (泣)」

ユーム「落ち着け(汗)」

こうして勝負はラグの勝利となった

バトル137 それぞれの特訓 再戦ラグVSタツキ（後書き）

がんばれたのかな？

ラッシュ「すごいな、タツキは色んな剣があるな」

あれは属性の剣だよ、それぞれ属性あるけど、タツキが扱う属性の剣は限られてるからね

分身ラグ「僕も勝ってよかった」

でもこっちのラグ君達があんの幹部どもを倒してくれればね

ラッシュ「そうだな」

タツキ「勝つことを信じましょう、みんなの絆を」

うん、それが絆だから、次回はジュジュ君達の方になります

バトル138 それぞれの特訓 全力（前書き）

ついにジュジュ君とチコっちゃんとかチック君の特訓です

ラッシュ「ついにか」

今回問題なのはジュジュ君とチコっち劇場をやる不安なチコっちちゃんなんだよね（汗）

ラッシュ「たしかにな（汗）」

そんなバトル138

ラッシュ「行くぜ!！」

バトル138 それぞれの特訓 全力

学園グラウンド

ここではジュジュ、チコっち、チック、ルング、エイク、ミナミ、スバル、リリー、アイリス、ウィリア、リナト、ムゲン、ブレイ、ルガー、アバリ、バベルがいた

さらにゼルスまでいた

ゼルス「よし、今回は俺もつく、ジュジュは俺とルング、ブレイ、ルガー、リリー、スバルとだ、チコっちはエイク、ミナミ、アイリス、ウィリア、リナトとだ、残りはチックの方を頼んだ」

全員『はい!』

それぞれ分けて特訓するらしい

みんなは言われた通りそれぞれ分かれて特訓する

……

まずはジュジュの方

ゼルス「今回ジュジュはバトルをする、相手は……ルガー、相手してくれないか？」

ルガー「はい」

ルガーがジュジュと相手することに

ブレイ「えゝ俺が相手したかったですよ！」

ブレイが不定するが

ゼルス「まあ待てブレイ、後で相手にするようにするから我慢してくれ」

というわけでブレイは後でジュジュと対決することとして、まずはルガーと戦うこととなった

ジュジュ「（相手はルガーさん……どうしようと僕も負けたくないんだよね、ラッシユさんと戦った時は負けたし、ルングと相手した時は引き分け、負ける気はないよ！）」

ジュジュは闘志を燃やす

ゼルス「（まだラッシユのあの負けにこと根に持っているな……ジュジュは仲間の絆というのが欠けているなこれは、ここはルガーの戦いを見て考えるか）」

と、ゼルスは二人の戦いの様子を見る

……

ジュジュ「（ルガーさん、悪いですけど僕は負けるつもりないですからね）」

ルガー「……」

ルガーは無言だ

ゼルス「それじゃあバトル開始!!」

バトルが開始された

早速ジュジュは素早さをいかしてルガーに攻める

しかしルガーは

ルガー「……」

無言のまま避けた

ジュジュ「（さすがに種族が知らないモンスターだ、でも僕は負けない!）」

ジュジュが力を入れる

ルガー「悪の波動」

ルガーの口から黒い螺旋状らせんじょうの波動がジュジュに迫る

ジュジュ「よっと」

ジュジュはバックステップをして避けた

ルガー「トゲ弾」

ルガーは自分の尻尾を振り回してそこからトゲを放つ

ジュジュ「リーフブレード！」

ジュジュはリーフブレードでトゲをきりつけて落としていく

ブレイ「おお！さすが俺のライバル！」

ルガー「ライバルは余計だ」

ルガーは冷たくブレイに言い返した

ジュジュ「（ライバルって、あの人認めてないってことか？でも僕は負けるつもりなんですし、あなたもライバルになると思います）」

ジュジュはそう考えながら種マシンガンを繰り出した

ルガー「さて：俺も本気を出すか」

するとルガーの目が赤く光り

ゼルス「（怒り状態だな）」

ナルガクルガの怒り状態は目が赤く光り、残像を残すのだ

ジュジュはルガーの残像に少し焦る

ジュジュ「（どれが本物：残像が多いよ）」

ジュジュは苦い表情をする

ジュジュ「（それでも僕は負けない！）種マシンガン！！」

ジュジュはそれぞれの残像に種マシンガンを繰り出した

ルガーの残像はごとく消えていく

最後にルガーが残る

ジュジュ「これで！種マシンガン！！」

ジュジュはルガーに向かって種マシンガンを繰り出した

だが

ルガー「〜♪」

ルガーが口笛を吹いた、すると

ジュジュ「なっ！？」

ラッコみたいな残像が現れ、お腹のホタテでガードした

ルガー「ミジュマル、シェルブレード」

ルガーは残像に指示をした

すると残像のミジュマルはお腹のホタテ、いわゆるホタチでジュジュを斬りつける

ジュジュ「くっ！」

ジュジュは食らってしまい、後方へと下がった

ジュジュ「くっ！」

ルガー「これが俺の技……残像の者を現し倒す……シエルアタツカ
ーだ」

バトル138 それぞれの特訓 全力（後書き）

ラッシュ「ルガーもやるな」

この技、実は雷牙さんがルガーに使用する技を別にして技にしたんだ

ラッシュ「なるほどな」

だがここからがルガーの攻撃の始まりです

ルガー「次回も楽しみにしててくれ」

バトル139 それぞれの特訓 仲間を思う気持ち（前書き）

さて、ジュジュ君VSルガーの続きです

バトル139 始まります

バトル139 それぞれの特訓 仲間を思う気持ち

ジュジュ「シエルアタッカー……」

ルガーの残像はこういうことができるらしい

ルガー「まだ他にモンスターの残像はできる……♪」

ルガーは再び口笛を吹いた

すると今度は豚のようなポケモンの残像が現れた

ルガー「ニトロアタッカー、ポカブ、ニトロチャージ」

残像ポカブが炎をまもってジュジュに突進してきた

ジュジュ「残像は残像、そんなの騙されないよ、種マシンガン！」

ジュジュは残像ポカブに種マシンガンを繰り出した

ルガー「それはどうかな」

ルガーの口がニヤリとする

ルガー「火炎放射！」

残像ポカブの鼻から火炎放射が繰り出された

種マシンガンは燃やされ地面にポトポトと落ちた

ジュジュ「なっ!?!ぐわっ!?!」

ジュジュはニトロチャージを避けられずダメージを受けて後ろに押し出された

ジュジュ「はあ…はあ…ここまでやるなんて」

ルガー「どうした?この程度では俺には勝てないぞ」

この言葉にジュジュは

ジュジュ「負けない!!僕は負けない!!」

と、闘志を燃やした

ルガー「やっぱ口だけではどうしようもないか……ならこれで決める」

ルガーは構えた

ルガー「影分身」

ルガーは影分身で自分の分身を作った

ルガー「明鏡止水^{めいきやうしすい}」

するとルガーと分身が消えた

ジュジュ「消えた!?!」

すると

ザシュ!

ジュジュ「くっ!」

ジュジュは右腕を押さえた

するとまた

ザシュ!

ジュジュ「うわっ!?!」

ジュジュは突然地面に倒れた

するとジュジュの目の前に

シュン!

ジュジュ「!?!」

赤い目で睨むルガーの姿が

ルガー「俺の勝ちだな」

ジュジュ「そんな……」

ゼルス「ルガーの勝ちだ」

ゼルスがそう言う

ジュジュ「また負けた……」

そこにゼルスが近づく

ゼルス「ジュジュ、お前の戦いは……中々だが……だが全力というバトルがお前に見えないな」

ジュジュ「えっ!？」

ジュジュは驚く

ルガー「俺も同感だ……こいつに全力がまったく感じられない」

ルガーもゼルスと同じことを言う

ジュジュ「そんな!？僕は全力だったんですよ!なのに全力が見えないというのはおかしいじゃないですか!？」

ジュジュは動揺する

ゼルス「それはお前の言い訳じゃないのか？」

ジュジュ「!？」

ルガー「俺も最初はそうだったが……バトル部にもなれてきて、こうやって俺も全力を出している、だがお前のバトルは仲間を思って

はなく、ただ単純に一人で抱え込むバトルだ」

ルガーの言うとおり

ジュジュはプライドが高いためか、全力と仲間を思っていない

ジュジュ「でも僕は仲間を思ってますよ！」

しかしゼルスは

ゼルス「お前がそう思っているが実際みんなはそう思っていない、ジュジュ、みんなの気持ちを考えたことあるか？」

ジュジュ「そういつでも……」

ジュジュは首をかしげる

ゼルス「だがチームでやった時、みんながライバルだと思っているわけじゃない、ラッシュと15球勝負したとき、ただ勝ち負けにこだわっているんじゃないか？ここにいるみんなライバルだと思っているわけじゃないだろうな？」

ジュジュ「うっ!？」

ジュジュはゼルスの言ったことに動揺した

ゼルス「凶星だな、そんなんじゃないチームのみんなを不安にさせるだけだ、それにみんなライバルだと思っていたら、それでこそ相手との仲を引き裂くようなものだぞ」

ブレイ「たしかに、ゼルスコーチにも一理あるな」

スピードバカのブレイが話に参加する

ブレイ「あゝあ、お前がこんなんじゃないや俺も戦う気と張り合う気しねえよ」

ブレイは少し落ち込んだ雰囲気を見せた

ゼルス「こんな風になる、ブレイもお前とバトルしたいだろうが、お前がそんなプライドだけの性格じゃこの先やっていけない、キューコン先生からお前の話を聞いた、チームブレイがよくわかってないようらしいな」

ジュジュ「でも僕は!!」

スバル「負けたくないといいたいんだろ？」

そこにスバルが話に入ってきた

スバル「俺も一人で抱え込んでいることはあるが、ラッシュとバトルして楽しかったし、それに仲間が俺にはいる、まあ女性だらけだけどな(汗)」

スバルは一緒に住んでいる女性達がいるためなんとなくわかっている

スバル「だからってわがままはないんじゃないか？」

ジュジュ「僕はわがままじゃない!!」

ジュジュは反論する

リリー「でもジュジュのバトルってそう感じられないよ、あたしだってがばねの事仲間だと思っているし、何よりみんな仲間だと思っているよ」

リリーもここに来て友達や仲間ができた

がばねだけじゃない、受け入れられる仲間が

ジュジュ「僕もそう思ってますよ!」

しかし

リリー「何いってんのよ!! そう思っていないからそうわがままに言ってるだけでしょ!!」(怒)

リリーは怒り出した

ゼルス「リリー落ち着け、俺が話すから」

ゼルスがリリーをおさめる

リリー「そう?」

リリーは落ち着いた

ゼルス「そうやってお前はただわがままでイヤミをいうからみんな心配されるんじゃないか? それにこのままだと野球でも負けだぞ」

負け

その言葉がジュジュに響く

ゼルス「キュウコン先生が言ったこと、そして今回の事よく考えて
みろ、お前はそれでいいと思っているのか？」

ジュジュ「いや……」

ジュジュは暗くなり落ち込んでしまった

ゼルス「よくても悪くても仲間を思っていないようじゃこの先やって
はいけないぞ」

ごもつともな意見だ

みんなみんなが一人じゃない

仲間がいるから一人でもがんばれる

一人では何もできない、でも仲間がいれば一人でできなくてもみんな
がバックアップしてくれる

ゼルス「今回のバトルでルガーにはお前のバトルを見て俺とかが判
断している、頭冷やして来い」

ジュジュは一人で頭を冷やしに去った

バトル139 それぞれの特訓 仲間を思う気持ち（後書き）

ジュジュ君のプライドが一番の問題なんだよね（汗）

ラッシュ「ライバルを見てないで仲間を見てほしいものだな」

何もわかっていないし、何よりみんなの心配をかけすぎているんだよね、これではまともになれないよ

ラッシュ「どうなることやら」

まあそれでも変わらせることが俺だしね

ゼルス「あいつにはかなり厳しくなるな」

そうなるね（汗）次回はジュジュ君の思い、そしてジュジュ君をどう変わらせるのかお楽しみに

バトル140 それぞれの特訓 ライバルとは（前書き）

ラッシュ「さて、ここからはジュジュメインなのか？」

うん、でも少し誰か登場させるよ

ラッシュ「誰だ」

それは秘密、それじゃあバトル140

ラッシュ「燃えるぜ!!」

バトル140 それぞれの特訓 ライバルとは

ジュジュは学校の裏山にいた

ゼルスに言われたこと、他のみんなに言われたこと、そしてキュウコン監督に言われたこと

なぜ自分はチームに貢献こうけんしているのになんでなのか

彼はそれがわからなかった

他のみんなは少しずつ成長している

しかしジュジュはあまり成長していない

言われたことが頭からはなれないのだ

自分のプライド、一番というプライドが彼の成長を止めている

15番勝負でラッシュに負け、あげくのはてにはリングには引き分け、さらにルガーには負ける

悔しさだけがこみ上げていく

ジュジュ「どうして僕はそう言われるの……僕はチームに貢献しているし、なにより僕にもプライドがあるんだ……だからってこんなのは……」

頭を冷やすどころか逆に落ち込んでしまった

そこに

ラッシュ「よっ！ジュジュ」

なんとラッシュだった

他に

リザレ「何やってんの？」

リザレと

ゴーシュ「なんか落ち込んでるみてえだな」

ゴーシュだ

ラッシュ「ジュジュ、何かつかめたか？」

ラッシュはジュジュの特訓状況を聞く

ジュジュ「いや、全然わかんないよ、僕はチームに貢献してるし、
負けたくないし」

と、愚痴ぐちを言ったように言う

するとラッシュは

ラッシュ「それはお前が何も変わってないってことだ」

ジュジュ「えっ!？」

ラッシュ「お前はただ自分のプライドを傷つけない、そしてあいつには負けないと思ってるからキュウコン監督とかに言われてるんじゃないか？」

たしかにラッシュの言うとおりだ

ジュジュ「でも！」

ジュジュは反論するが

ゴーシュ「じゃあ俺とバトルしようぜ♪」

なんとここで話の輪からゴーシュが入りいきなりバトルをしかけたのだ

ラッシュ「そうだな、ゴーシュもまだバトルしていないからいいぞ」

ラッシュは許可した

ジュジュ「わかりましたよ、やりますよ」

ジュジュはバトルをOKする

……

場所は変わり、ここは学校の裏山のバトルフィールド

ゴーシュ「かかってこい♪」

ゴーシュは楽しそうに言う

ジュジュ「（ゴーシュ先輩、なんであんなに楽しいんだ？でも僕は負けたくないねこれ以上は！）」

と、強きに思ってしまう

バトルフィールドの別の場所では

ゼルス「好都合だなこれは」

ゼルスが隠れていた

ルガー「俺までか」

ブレイ「まあバトル見ればわかる、ゴーシュも変わったってことを」

ブレイは笑顔に言う

ラッシュ「バトル始め！！」

ラッシュの合図でバトルが始まった

バトル140 それぞれの特訓 ライバルとは（後書き）

ジユジユ「なんで何度もバトルが？」

ジユジユ君、君にもわかってもらわないとね、次回はゴーシュとのバトルです

ゴーシュ「楽しみにしてくれよ♪」

バトル141 それぞれの特訓 戦いの中で感じるもの(前書き)

ゴーシュとジュジュ君のバトルです

ラッシュ「これでわかるのか？」

うん、こうでもしないとジュジュ君わからないだろうし

ラッシュ「拳で語るしかないな」

それじゃあバトル141

ラッシュ「燃えるぜ!!」

バトル141 それぞれの特訓 戦いの中で感じるもの

ゴーシュ「火炎放射！」

ゴーシュはまず火炎放射をジュジュに向けて吐く

ジュジュ「そうはいかない！」

ジュジュは火炎放射を見切って避ける

ジュジュ「種マシンガン！！」

ジュジュの口から種が数個も吐いた

ゴーシュ「ラッシュ！早速ためすぜ！フレイムファイト！！」

ゴーシュは両手と両足を炎でまとい、種マシンガンをパンチとキックの連続パンチで相殺した

ジュジュ「なっ！？」

ゴーシュ「へへっ♪やっぱラッシュと特訓して正解だぜ♪さすがバトル部部长だ」

ラッシュ「ありがとな♪」

互いに褒めあう

ジュジュ「（どうして褒め合うんだろう？新技だからって僕は負けるつもりはないよ！）」

ジュジュは構えた

ゴーシュ「かかってこいよ♪」

ゴーシュはジュジュに挑発したように笑顔で言う

ジュジュ「言われなくても！エナジーボール！」

ジュジュは両手に力を込めた、すると緑色の球体が現れた

ジュジュ「はっ！」

ジュジュはその球体をゴーシュに向けてはなった

ジュジュ「（次に挑発でゴーシュ先輩の補助技と防御技を封じれば）」

ジュジュは次の一手を考えていた

エナジーボールを放ってから挑発でゴーシュに補助技と防御技を封じるつもりだ

ジュジュ「防げますか？ゴーシュ先輩」

ジュジュは口をニヤリとするが

ゴーシュ「守る！」

ジュジュ「無駄ですよ！僕はすでにちよ……えっ！？」

ジュジュは驚いていた

それは

ゴーシュは守るのバリアを張っていたのだ

ジュジュ「（そんな！？たしかに挑発したのに！？）」

挑発が発してしまったのだ

ゴーシュ「どうした？俺を楽しませてくれよ♪」

ゴーシュはいたって余裕だ

ジュジュ「（どうなってるんだ！？……まさか！？）」

……

ゴーシュ「かかってこいよ♪」

……

ジュジュ「（あの言葉とかですでに挑発を発動したってこと！？）」

ゴーシュ「（挑発で来るなら挑発で……ってな♪）」

そう、ゴーシュは挑発をしたのだ

ジュジュは補助技が挑発やイヤミを得意としている

だが挑発は補助技

同じ挑発をすれば相手の挑発もできない

ジュジュ「くっ……」

ジュジュは苦い表情をする

ゴーシュ「なんだよ、もっと楽しむ笑顔作れよ？」

ジュジュ「えっ？」

ゴーシュはジュジュに言葉をかける

ゴーシュ「俺も最初はそうだった、勝ち負けとか色々あった」

ジュジュ「……」

ゴーシュは静かに語った

ゴーシュ「俺はモモとの試合が終わって足を痛めてしまった……なんとか治ったけどよ、その後俺はバトルを捨てて、スパーク団に入った、かつてのバーン中学の仲間と共に……」

ジュジュ「ゴーシュ先輩……」

ラッシュ「ジュジュ、ただ勝ち負けがすべてじゃない、ゴーシュも

そうだった」

ゴーシュ「だが俺はラッシュやモモなどのバトル部のみんな、そしてこの学園のゼウス先生に救われた、リオネさんとバーン中学、いやスパーク団になった元仲間と共に、この学園に入った、スパーク団が壊滅するまで、俺は……ここでバトル部にしてしまった罪を償うために」

辺りが静寂になる

ジュジュ「そう……だったんだ……」

ジュジュの目から涙が出る

ジュジュ「僕は間違ってた……だからキュウコン監督は僕にそう言っていたんだ、僕に足りないもの……それは楽しむことと、仲間を信じる気持ちと本当に熱くバトルできるライバルがいなかったんだ」

ゼルス「そうだ」

木の茂みからゼルスが降りてきた

ジュジュ「ゼルスさん」

ゼルス「それがお前に足りないものだ、このバトルで気付いたな」

ジュジュはやっと気付いた

自分に足りないものを

ジュジュ「ごめんなさい……」

ジュジュはラッシュ達に謝る

ジュジュ「僕はまだまだだった、みんなの事を考えてなかったんだ
(泣)」

ジュジュの涙がポタポタと地面をぬらす

すると

サッ

ゴーシュとラッシュがジュジュに手を差し伸べた

ラッシュ「仲間を思えば」

ゴーシュ「かならず優勝できるぜ♪」

ラッシュとゴーシュは笑顔になる

するとジュジュは泣き止んで笑顔になり

ジュジュ「はい！」

二人の手を掴んだ

バトル141 それぞれの特訓 戦いの中で感じるもの（後書き）

これでジュジュ君の方は終わりです

ジュジュ「フォックさん、本当にすみませんでした!」

やっと気付いてくれたからよかったよ、ちゃんとみんなの事考えるんだよ、ライバルは自分を熱くした者だけでいいよ、ただ相手が同じ思いじゃなければそれはライバルとは言えないよ、チック君ともそうだからね

ジュジュ「はい……」

ラッシュ「さて、次回はなんだ?」

次回は残っているチコっちちゃんとチック君かな

チコっち「チコっち劇場を楽しみにしてなさいよ!」

何も言っていないのですが（汗）

バトル142 それぞれの特訓 チコっち劇場（前書き）

はい、不安なチコっち劇場です（汗）

チコっち「チコっち劇場の開幕よ!!」

ハイテンションだね（汗）それじゃあバトル142

チコっち「チコっち劇場開幕よ!!」

バトル142 それぞれの特訓 チコっち劇場

こちらは草のバトルフィールド

ここにはチコっちをはじめ、エイク、ミナミ、アイリス、ウィリア、リナトの5人がいた

エイクとミナミは人間の姿になっている

アイリス「ミナミとエイクってモンスターや人間になるようになってるんだ」

ミナミ「アイリス達はスバルの特殊な能力とかで擬人化してるでしょ？」

ウィリア「まあ、アオイやホムラもそうだよな」

リナト「それよりチコっちゃんの特訓どうしよう？」

そう、チコっちの特訓だ

チコっち「えゝなんでジュジュ先輩とかと一緒にじゃないの!!」

と、不機嫌になりわがままなことを言う

アイリス「それってジュジュ君のことが好きなの？」

チコっち「!？」

チコっちは顔を赤くする

ウィリア「図星みたい（汗）」

アイリス「あたしだって！スバルのこと好きなんだもん！スバルとは別になってるけどここはお互いががんばろうよ！」

と、アイリスはチコっちを励ます

チコっち「そうですね！アイリス先輩と気が合いますね♪」

アイリス「あたし達、似たもの同士だね♪」

と、意気投合となってしまった

エイク「どうすりゃあいいんだ（汗）」

ミナミ「とりあえず練習しよう（汗）」

チコっち達は早速練習することに

……

残ったメンバー、ムゲン、アバリ、バベル、そしてチツクは

チツク「わあ〜楽しい♪」

ムゲンが嘘弾^{ライアーショット}の弾を使ってキャッチボールをしていた

チツク「それ♪」

ムゲン「ほい♪」

アバリ「ピョン♪」

バベル「そらっ！」

なぜか楽しそうにしていた（汗）

……

チコっち「チコっち劇場の開幕よ!!」

チコっち劇場

それは彼女の活躍を描いた劇場である（汗）

ただいまアイリスとともに走っている

自分達の愛する者のために二人は走っている

数分後

チコっち「……」

アイリス「……」

二人とも2周でダウン（汗）

ミナミ「二人して（汗）」

エイク「本当に似たもの同士だな（汗）」

ある意味で（汗）

ウィリア「次のトレーニングしないと（汗）」

リナト「私ちょっとスポーツドリンク買ってくるね（汗）」

この先どうなることだか（汗）

チコっち劇場、強制終了

バトル142 それぞれの特訓 チコっち劇場（後書き）

チコっち「強制終了しないで!!」

わがまま言っちゃだめだよ（汗）これ以上は無理だから（汗）

ラッシュ「やっぱこうなるのか（汗）」

スバル「アイリス（汗）」

えゝ次回は残っているラブちゃんの方になります

チコっち「あたしのチコっち劇場おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」
（泣）」

バトル143 それぞれの特訓 粘り強く(前書き)

はい！最後はラブちゃんの方です

ラブ「ついにあたしの番ね♪」

遅くなったけど怒らないでね

ラブ「そんな、そうしませんよフォックさん」

ならいいけど、バトル143

ラブ「凍えなさい！」

バトル143 それぞれの特訓 粘り強く

こちらは別のバトルフィールド

そこにはラプの他にサクラとレイラがいる

ラプ「サクラ先輩、レイラ先輩、あたしはどんな特訓すれば」

サクラ「そうね、まずめいそうからよ」

ラプ「めいそう？」

ラプは首をかしげる

サクラ「そう、ラプの場合はねばり強さでしょ？ならその粘りを利用してめいそうとかで精神を鍛えるのよ」

ラプ「なるほど、あたしもキレる場合があるから少し抑えるってことですね」

レイラ「そうよ」

ラプの場合

粘り強さがあるが、色々あって怒ってしまうことがある

サクラもそうだが

めいそうは魔力を高めることも可能でこめることも可能だ

ラプ、サクラ、レイラは早速めいそうをはじめた

……

ラプ「……」

サクラ「……」

レイラ「……」

始めてから5分

……

ラプ「……はぁ……だめだわ」

ラプは10分のところで限界

だが

ラプ「二人ともすごいわ」

サクラとレイラはまだめいそうしている

……

サクラ「ふう」

レイラ「これが限界ね」

サクラとレイラはめいそうしてから1時間でやめた

ラプ「すごい！？サクラ先輩とレイラ先輩もかなりやりますね」

サクラ「ラプは耐えられなかったわね、これ結構きついけど何度も繰り返しやればなんとかなるわ」

レイラ「まだただだけががんばって」

ラプ「はい！ありがとうございます！」

ラプは二人におじぎした

サクラ「それじゃあ他の特訓とかしましよう、粘り強さがラプの武器なんだから力をこめることも大事よ」

ラプ「はい！」

3人は別の場所へと向かった

バトル143 それぞれの特訓 粘り強く（後書き）

はい！これですべての特訓の方は終わりです

ラッシュ「もう終わりか」

うん、次回はついに別れになります

ラッシュ「寂しくなるな」

また会えるよ、応援は一緒に行こうか

ラッシュ「そうだな」

他の人からのコラボもあるため次回で野球部修行編は終わりです、コラボしてくれたエース先生、ありがとうございました

バトル144 別れと絆と（前書き）

はい、この話で野球部修行編終わりです

ラッシュ「長かったな」

俺も書いてて楽しかったよ

ラッシュ「寂しくなるな」

そんなバトル144

ラッシュ「また会おうな!!」

バトル144 別れと絆と

それから3日後

ラッシュ「今日で最後か…」

ラッシュはランニングのため起きた

ヒート「ふう〜俺も行くぜ」

ヒートも起きてきた

ラッシュ「それじゃあ行こうぜ」

……

二人は町を走っている

誰もいない朝日がまだ昇らない少し暗い道を、二人は走っていた

ヒート「はあ…はあ…なあラッシュ」

ラッシュ「なんだ？ヒート」

ヒート「今日で最後だし、言おうと思ってな…その…ありがとな」

ヒートはラッシュにお礼の言葉を言う

ラッシュ「いいんだ、お前はエースだ、エースだからこそ努力すればきつと勝てる、昨日だってジュジュに勝てただろ？」

ヒート「ああ、補助技も覚えたからよかった、俺もがんばっていかないとな」

ラッシュ「そのいきだ」

互いにほめあい、そして認め合った

燃えるハートと

熱い血がたぎる

炎タイプは燃えるほど、熱くなり

バトルを熱くする

そして野球も

熱血になり、燃えてくる

絆と燃えるハートが

炎タイプを燃え上がらせる

そんな二人もライバルとして

誓いあった

……

キュウコン「お世話になりました」

あさポケナイン『お世話になりました!!』

あさポケナインとキュウコン先生は挨拶した

バトル部全員『ありがとうございました!!』

バトル部全員も挨拶した

キュウコン「ガル先生、イックン先生、ゼルスコーチ、お世話になりました」

ガル「いや、こちらもカントリーリーグ優勝できることを祈ります」

イックン「がんばってください」

ゼルス「我々も全力でやりましたからこちらもがんばってください」

キュウコン「はい」

キュウコン監督とガル先生達は互いに挨拶した

チコっち「アイリス先輩恋の事、色々ありがとうございました!」

アイリス「がんばってね!」

ウィリア「（恋の事って（汗））がんばってね」

リナト「自分を信じて」

エイク「がんばれよ！」

ミナミ「あまりみんなを困らせないでね」

チコっちと特訓したみんなはそれぞれチコっちに言う

ジュジュ「お世話になりました！」

ジュジュがおじぎする

リング「プライドもいいが、プライドすぎるなよ」

ブレイ「また会ったときはスピードの真剣勝負だからな！！」

ルガー「忘れるな、野球でもちゃんと仲間のことを思うんだぞ」

リリー「ジュジュ、ちゃんとみんなのこと信じなさいよ！」

スバル「お前一人じゃないからな、仲間を信じろ！」

ジュジュ「ありがとう…みんな（泣）」

ジュジュの目から涙があふれる

ルガー「がんばれよ」

ルガーがジュジュに言葉をかけた

ラプ「サクラ先輩、レイラ先輩ありがとうございます」

サクラ「怒ったときは冷静になるようにしなさいね」

レイラ「がんばってみんなとの絆を忘れないでね」

ラプ「はい！」

ラプは元気に言葉をかけた

ラージ「ラグさん！ありがとうございます！！」

ラグ「ラージ君、キャプテンとしてがんばってね」

ラージ「ラグさんもこっちでもがんばってください！！」

ラージは燃えるような感じだ

しかもラグの手を握ったまま

ラグ「ラージ君、もう放してね（汗）」

ラージ「すみませんラグさん／／／／」

ラージは恥ずかしくなり、ラグの手を放した

レウト「がんばれよ♪」

ホムラ「キャプテンだからしっかりしろよ」

キノガッサ「がんばれよ！」

タツキ「応援してますよ」

ガロ「ドンと行け！」

ネロ「がんば…ZZZ…」

ユーム「しっかりな…」

ラージ「はい！」

ラージは元気よく返事した

ヒート「世話になったなラッシュ」

カゲツチ「ラッシュ先輩！ヒイロ先輩！ありがとうございます！」

ラッシー「ライトとの特訓楽しかったZE☆」

ピカッチ「本当にありがとうございました！」

4人は頭を下げた

ラッシュ「お前ならやれる、がんばれよ！俺もいつか応援にかけるからね！」

ラッシュはそう意気込む

リザレ「がんばってね」

ヒロ「俺も応援してるからな！」

ダイル「楽しかったよ！オイラも帰って鍛えてラッシュ先輩のようになるよ！」

がばね「俺も楽しかった、また遊びに来てくれよな」

ライト「お前ら！がんばれよ！！俺も応援してるZ E ☆」

御羅「がんばれよ！負けるんじゃないぞ！」

ゴーシュ「楽しかったぜ♪俺もがんばるからお前らも優勝しろよ！」

モモ「熱く燃えて気合入れてがんばれよ！」

リオーネ「こっちもがんばれよ」

ヒート「ありがとな！」

カゲっち「僕達がんばります！」

ピカっち「あたしもカゲっち君の支えになってがんばります！」

みんなそれぞれ別れの挨拶をする

そして……

キウコン「それではみなさん、ありがとうございました!!」

あさポケナイン『ありがとうございました!!』

みんなは深く頭を下げた

ラッシュ「がんばれよ!!みんな!応援だ!!」

バトル部全員『ファイトだ!ファイトだ!あさポケナイン!!かっ
とばせ!!あさポケナイン!!』

バトル部全員があさポケナイン達にエールを送った

カゲっち「さようなら!!また遊びに来ますね!!」

ヒート「ラッシュ!!またもう一度バトルしような!!」

ラッシー「俺とまた特訓してください!!」

ピカっち「ありがとうございました!!」

ラージ「また会いに行きますね!!」

ラプ「今度は合宿じゃなくてプライベートでも遊びに来ますね!!」

ジュジュ「みんな!ありがとう!!」

チック「楽しかったよ!!」

チコっち「絶対チコっち劇場見せますからね!!」

そう言って全員は帰って行った

ラッシュ「行ったか」

ヒロ「先輩」

ラッシュ「ん？」

ヒロが声をかけた

ヒロ「俺もそろそろ」

ヒロも帰ることに

ラッシュ「そうだな、ほらよ」

ラッシュは何処からかおたまを取り出した

たんこぶが数個もあり気絶している

ラッシュ「ウランによろしく伝えといてくれな」

ヒロ「はい！」

ダイル「お世話になりました！また遊びに来ていいですか？」

ラッシュ「ああ♪いつでも遊びに来てくれな♪ダイルもがんばれよ！自分を信じて強くなれ」

ラッシュは笑顔で言った

ヒロ「それではさようなら！」

ダイル「みなさんありがとうございます！」

ヒロとダイルは手を振って帰って行った

それだけではなく

エイク「俺も…決着^{ケリ}つけに帰る、みんなありがとな」

エイクも帰ることに

ミナミ「エイク……」

ミナミが心配そうにエイクを見つめる

エイク「心配すんな、俺はかならず帰るからな、ラッシュ、ミナミのこと頼んだぜ」

ラッシュ「ああ、あまり心配かけるなよ」

エイク「ああ」

エイクはそう言い去って行った

ホムラ「去った奴ら多いな」

レウト「でもそれでも楽しかったな♪」

ブレイ「今度は絶対ジュジュに勝ってやるぜ！」

ルガー「また会えたらな」

こうして

あさポケ野球部の合宿は終わった

また会える日を

胸に刻んで

彼らは歩んでいった

バトル144 別れと絆と（後書き）

ついに終わりました！！

ラッシュ「ようやく落ち着いたな」

うん、やっとだよ、さて次回からは新章です、なんと今回コラボするキャラだけでなくてラッシュに関係する人が登場します

ラッシュ「誰だ？」

それは見てからのお楽しみ♪

バトル145 ラッシュの両親登場!! 波乱の嵐(前書き)

はい! ついに新章突入です!!

ここからは次のコラボキャラが登場となります

ラッシュ「リクエスト多くなったな」

俺も嬉しいから、まあ無理しないようにがんばらなきゃ

ラッシュ「さて、このタイトルからしてまさか」

そのまさかだよ、それじゃあバトル145

ラッシュ「燃えるぜ!!」

バトル145 ラッシュの両親登場!! 波乱の嵐

ここはラッシュ達が住んでいる町、ポケハン町

この世界、モンスワールドの中の町だ

そんな町を二匹のポケモンがあるいていた

種族はリザードンだった

一匹はそれぞれ古傷のようなものがいくつかできていた

まず左目に斬られたような傷、左腕にも少し×印の傷ができていた

そして服はタンクトップだ

もう一匹は首に宝石のネックレスと指輪をしたリザードンだ

????? 「久しぶりにあいつのところまで帰れるからな」

????? 「楽しみだわ♪ラッチちゃん元気にしてるのかしら♪」

と、二匹はある場所へと向かった

……

ラッシュの家

リザレ「先輩、終わりました」

ラッシュ「終わったか、みんなお疲れ」

ラッシュ達は掃除をしていた

今年も残すところあとわずか

なので全員で部屋などを掃除していたのだ

なんとかかたづいてきたのでみんな集まった

御羅「今年もなんとか終えられそうだな」

シュナ「みんなと一緒に楽しかったですし」

アルス「まあ俺はいい物食えてよかったしな」

ラグ「アルス、それはないよ（汗）」

ラグはアルスにつっこんだ

リザレ「そうですね、来年はいい年でありたいですね」

ラッシュ「そうだな、お茶飲むか」

その時

ピンポーン！

ラッシュ「ん？誰だ？」

ラッシュは玄関へ

リザレ「誰なんだろう？」

ラグ「さあ？」

……

ラッシュ「はい」

ラッシュは玄関のドアを開けると

????「久しぶりだな！！我が息子！！」

????「ラッチャン！！元気にしてた！！」

二匹のリザードンだ

ラッシュ「なっ！？親父！？おふくろ！？」

そうこの二人

なんとラッシュの両親なのだ

ラッシュ父「再会のハグw…グハッ！？」

突然ラッシュは父を殴った

ラッシュ「再会のハグじゃねえよ！（怒）仕事ばかりで俺の事をほっぽりやがって！（怒）」

ラッシュは怒っていた

ラッシュ母「ごめんねラッちゃん、私達も忙しかったのよ」

ラッシュ「いや、ラッちゃんはよしてくれおふくろ（汗）俺はもう子供じゃねえんだ（汗）」

ラッシュはタジタジだ

リザレ「先輩どうしました？」

ラグ「何かあったの？」

リザレとラグが出てくる

ラッシュ父「ん？君達は？」

ラッシュ父は顔を殴られて鼻血を出していた

ラッシュ「その前に親父鼻の方どうかしろ（汗）」

ラッシュは父にそう言った

……

ラッシュ父「いやゝそうだったのか、うちの息子が世話になったね、俺はリザードンのリュウオだ」

ラッシュ母「私はラッちゃんの母、リザードンのリエナよ♪」

ラッシュ「だからラッちゃんはやめてくれおふくろ／＼／＼／」

ラッシュは顔を赤くする

ラグ「そうでしたか（汗）こちらこそよろしくお願いします（汗）」

リザレ「先輩にはお世話になりましたのでこちらこそよろしくお願いします
います」

シュナ「ラッシュさんの両親っていいですね」

アルス「その割にはな（汗）」

御羅「不良になった原因作っただもんな（汗）」

そう

両親のせいで過去にラッシュは苦しんでいた

リュウオ「だがなラッシュ、もう苦しむことはない…俺達も仕事の方がだいぶ落ち着いてきたんでな」

リエナ「それでラッちゃんに会いに来たの」

ラッシュ「どういふことなんだ？」

ラッシュは首をかしげる

リュウオ「つまり一段落したからお前と一緒にいる時間がたっぷり
と取れるってことだ♪」

リエナ「だからこれでラッちゃんの事を見れるってこと」

つまり

ラッシュ「まさか親父、おふくろ…ここで世話になるってことか？」

ラッシュはおそろおそろ言う

リュウオ「そうだ、だからお前との…愛のハグw…ゴハッ!？」

ラッシュ「だからハグはやめろ（汗）」

ラッシュは父に鉄拳を食らわせた

リエナ「だから私達に甘えてもいいのよ♪」

ラッシュ「いや、俺も子供じゃねえから（汗）」

と、ラッシュは母につっこんだ

リザレ「それじゃあここでしばらく」

リエナ「そう♪まあ実家の方にセバス残すのも悪いから交代で私達
とセバスにも行ってもらおうから♪」

ラグ「でもいいかもね」

ラッシュ「まあこんな馬鹿親父とおふくろだがよろしくな（汗）」

と、汗だらだらに言うラッシュ

リュウオ「ならリザレ君！きmにグハッ！？」

ラッシュ「やめろ！！このヒトリザ馬鹿親父！！（怒）」

リュウオ「か…かわいいぞ…ラッ…シュ…ガクッ」

リュウオは倒れた

バトル145 ラッシュの両親登場!! 波乱の嵐(後書き)

はい、ラッシュの両親です

リュウオ「俺はリュウオだ」

リエナ「リエナよ♪」

ラッシュ「なんかすごく親父の親バカぶりとしつこさが出てきたな
(汗)」

まあリュウオは親バカ+ヒトカゲとリザードとリザードン好きのヒ
トリザ馬鹿ですww

リュウオ「おゝ作者ゝ君とは…グゲバツ!？」

やかましいわ!! (怒)

ラッシュ「作者、とんでもなくしたな(汗)」

まあ両親の方ださないと意味ないしねゝ(汗)

リエナ「今回はなにかしら♪」

今回はコラボキャラの誰かが登場です

リュウオ「さゝくゝしゃゝ…ガクッ」↑力尽きた

バトル146 魔王と息子と息子は勇者(汗) (前書き)

ラッシュ「なんだ(汗) このタイトルは(汗)」

今回はあの親子が登場です

リュウオ「親子？誰なんだ？」

それは見てからのお楽しみ、それではバトル146

リュウオ「燃えるぜ！！」

バトル146 魔王と息子と息子は勇者(汗)

次の朝

今日もバトル部の活動の日だ

ラッシュ「親父達が来てよかったぜ」

レウト「よかったなラッシュ」

ホムラ「その割には俺のリザレに(怒)」

リザレ「落ち着いてよホムラ(汗)」

怒っているホムラをリザレがおさえる

彼らはなんとか学校に到着してすぐに部活の準備をした

そんなある時間

ポケハン学園にある1組の親子がいた

一人は二本の角を生やしていて、まるで魔王のような者だった

黒い服に黒いマントを羽織っていた

もう一人はいたって普通の少年で、木の棒を持っていた

????? 「ここが噂のポケハン学園か！父さんはここに来たかったんだよね」

少年「いや父さん（汗）ここに来たかったって言っても父さんの修行じゃないからね」

と、ツツコミをする少年

その魔王みたいな彼は

????? 「いいじゃないかピッケル、この物語の作者さんが提供してくれたのだから感謝しないと」

と、父親って感じじゃない魔王の顔の姿で笑顔をする父

彼は魔王である

そしてこのピッケルという少年はその魔王である父の息子である

ピッケル「感謝どころかこの作者さんもどうかと思うけど（汗）」

それはどうかなピッケル君（黒）

ピッケル「あの！フォックさん、すごく黒いんですが（汗）」

細かいことは気にしない♪さてテツさん

テツ（魔王）「いやフォックさん、一応父（魔王）という感じにしてくださいませんか？」

あつ、失礼しました、一応本名だから少し出した感じなので

さて、ピッセルという少年はその魔王を倒す勇者でもある

だがこの父（魔王）の実力ははかりしれないほどのもの

昔はかなり強かった。なので今でも強い。

まさにチートなのだ！！

ピッケル「そんな風に言わなくても（汗）」

はいはい、さっさと中に入ってください

父（魔王） 「それでは！！頼もう！！」

ピツケル「道場破りかあああああああああああ
あああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！

.....

そんな父（魔王）に息子のツツコミが炸裂した

•
•
•
•
•
•

「ん？ 今声が聞こえたようだが」

レウト「誰か来たのか？」

「た！大変です！！先輩！！」

ホムラ「なんか魔王って感じの奴がガキと一緒にいる!!」

リザレとホムラが知らせた

ラッシュ「たしか、作者が呼び出した奴だな、行くぞ」

そう言うともんな飛び出してきた

……

ラッシュ「ん？あれはたしか」

ラッシュは確信した

父（魔王）「おお！あなたがバトル部部長のラッシュさんですか！
！」

ラッシュ「そういうあんたは魔王のテツさんだな」

ホムラ「えっ!？」

リザレ「先輩！この人知っているんですか!？」

ホムラとリザレが驚く

すると

ゼウス「おや、よくいらっしやいましたね、テツさん」

ゼウス校長がやってきた

父（魔王） 「おお！あなたはポケハン学園の校長、ゼウスさんではないですか！」

ゼウス「こちらに来ることはフオック君から聞きました、そしてピツケル君でしたか？ ようこそ、ポケハン学園へ」

ピツケル「あ……はい……」

ピツケルは汗ダラダラだ

赤き龍うせ 「まさか魔王つてものが来るなんてね」

赤き龍のラセが校門から入ってきた

リオ「驚いたな、まさか魔王まで来るとは（汗）」

その後から来たみんなが父（魔王）とピッケルの周りの集まる

ピツケル「なんじやこりゃあああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああ!!!!!!!!!!!!!!」

「

ピッケルは驚いた

ポケモンとモンハンなどのモンスター達がこんなに集まってきたのだから

バトル146 魔王と息子と息子は勇者(汗) (後書き)

はい！『父が魔王で息子が勇者で！？』から父(魔王)さんと息子のピッケルさんです

父(魔王) 「どうも！魔王です」

ピッケル 「息子のピッケルです」

まさかの親子参戦ときました(汗)

父(魔王) 「とりあえず戦えますかフォックさん」

いや戦える準備は

父(魔王) 「そうですか！よし！ピッケル！早速バトルになりそう
だ」

話聞けよ(怒)

ピッケル 「すみませんフォックさん」 ↑謝る

いやいいんだよ、まあとりあえず次回はそんな父(魔王)がバトル
します

相手はやっぱラッシュだな

ラッシュ 「結局俺なんだな(汗)」

バトル147 早速バトル!? ラッシュVS父(魔王) 〴〵つっこみなしの方向で

はい！新年最初のバトル部です！

ラッシュ「ついにか(汗)」

父(魔王)「ハハハハ！さあ！かかってこいラッシュ君！」↑笑いながら構える

えゝここは前書きなのでそれは本編でしてくださいね(汗)

ラッシュ「それじゃあバトル147」

父(魔王)「父さんは強いぞゝ♪」

バトル147 早速バトル!? ラッシュVS父(魔王) 〴〵つっこみなしの方向で

放課後

とりあえずだがこの魔王と勇者の親子はイックン先生のクラスで授業を受けることになった

ある意味いい年しているおっさん(魔王だが)がいるが気にしない
そんなこんなで

ゼルス「ずいぶんと面白い方が入部したんだな(汗)」

早速二人はバトル部に入部(ピッケルは父によって半端強制的に入れた)

父(魔王)「では早速ラッシュ君!バトルだ!」

やる気マンマンの父(魔王)

タツキ「相当実力がありますね、私でも感じます」

タツキはそんな父(魔王)の実力を感じた

レウト「どんなバトルになるかだがな」

そんなわけで

場所は外にあるバトルフィールド

そこに二人は対峙していた

ラッシュ「さて、お手並み拝見といこうか」

父（魔王）「私は負けないぞ♪」

笑顔で父（魔王）は言う

相当余裕なのか、それとも楽しみだろうか（汗）

ゼルス「では！試合開始！」

ついにバトルが始まった

ラッシュ「（まずは小手調べだ）火炎放射！」

ラッシュは父（魔王）に向けて火炎放射を繰り出した

火炎放射が父（魔王）に直撃した

ピッケル「父さん！」

心配そうに観客席からピッケルの声がする

だが

父（魔王）「これはすごい威力だ〜」

ラッシュ「あまり効いてない感じだな」

父（魔王）は無傷だった

さすが魔王と言ったところだ

そう簡単にはいかないだろう

父（魔王）「今度はこっちから行くぞ！父さんの拳は痛いぞパンチ！」

技名が変だがそのパンチはラッシュの腹に直撃する

ラッシュ「がっ!？」

ラッシュは吹っ飛ばされ壁に激突した

父（魔王）「おゝ勝ったぞ♪」

と、父（魔王）は勝利を喜ぶ

しかし

????? 「ドラゴンクロー!！」

ズバッ！

父（魔王）「ぐわっ!？」

なんと何処からかドラゴンクローが父（魔王）に炸裂して父（魔王）

はよろけた

ラッシュ「はあ…はあ…」

ドラゴンクローを繰り出したのはラッシュだった

自分の腹を押さえ、なんとか立っていた

父（魔王）「この俺のパンチを耐えるとは、さすがバトル部部长だ
♪」

父（魔王）はまだまだ余裕だ

ドラゴンクローのダメージもあるが少し苦しい表情をしながら笑う

ラッシュ「俺もそう簡単には負けないぜ♪」

と、ラッシュも苦しい表情をしながら笑う

シュン！

二人は突然消える

すると上空から

キーン！キーン！

刀と刀がこすれ合う音が響く

空から二人は攻撃していた

ラッシュ「フレアソウル！」

ラッシュのフレアソウルが父（魔王）に炸裂

父（魔王）はそのままバトルフィールドに落ちた

父（魔王）「さすがに俺でも苦戦する相手がいるとは…面白い！面白いぞラッシュ君！」

と、ボロボロになりながらラッシュに言う

ラッシュ「さすがは魔王だ、だがこっからだ」

父（魔王）「なら私も回復するか、ICU」

父は魔法を唱えた

すると何処かから医者が召喚してきた

ラッシュ「マジかよ（汗）ケアルガ」

ラッシュはパンチされた腹にケアルガで治す

…

ホムラ「ある意味すげえよ（汗）」

レウト「ある意味魔王つええ（汗）」

ラッシュ「なっ!？」

父（魔王）「さて、続きといこうか♪えーと、なんたらかんたらボール!」

直径200kmもある火球がラッシュに向かう

ラッシュ「そのボール、利用させてもらうぜ! 龍炎!」

ラッシュは龍炎を繰り出した

炎の龍は火球を飲み込んで父（魔王）に向かう

父（魔王）「そうはいかんぞ! 父さんの息は生暖かいぞハリケーン!」

父（魔王）の口から生暖かい風が吹く

それが台風のように吹き荒れ、炎の龍にぶつかる

互いの技がぶつかり合う

ラッシュ「あれしかないな……」セイントリミット!」

ラッシュの体が光をまとう、セイントリミットを発動したのだ

ラッシュ「聖龍炎!」

今度は光をまとった炎の龍が繰り出される

ゼルス「よくがんばったぞラッシュ」

サクラ「まさかあの魔王を倒しちゃうなんて」

ラッシュ「いや、俺も大技に疲れてはまだまだだ」

疲れた表情をするが、その表情はなぜか笑顔だった

父（魔王）「私もまだまだだな」

と、父（魔王）も立つ

するとラッシュに駆け寄り

父（魔王）「ラッシュ君」

父（魔王）は手を差し伸べる

ラッシュ「ああ」

ラッシュはその手を掴む

ピッケル「あの父さんを…ラッシュさんってすごいな…僕もこんな風に強くなれば」

と、ピッケルはラッシュみたいに強くなりたいと少し思ってしまう

バトル148 リザレの成長！ ピッケルVSリザレ（前書き）

ピッケル君の番です

ピッケル「あのゝすごく嫌なんだけど（泣）」

相手はリザレ君だから

ピッケル「僕は大丈夫なのかな（泣）」

はいはい、強くなれないよそんなんじゃ、バトル148

ピッケル「強くなれるのかな（泣）」

おいおい（汗）

ピッケルは微妙な返事をする

リザレ「はい」

リザレもだ

観客席では

父（魔王）「さて、ピッケルはあのリザード君に勝てるのかな♪」
ラッシュ「リザレにとっては二度目だが、あいつも少しは成長してる」

ホムラ「リザレはちゃんとやる奴だ、負けねえよ」

ルガー「リザレはこれでも少しずつは体力も上がっている」

赤き龍ラセ「それにリザレは負けない」

リオ「俺達全員で見ていたからな、負けるはずねえよ」

ラグ（分身）「そうだよ！あれでもリザレは成長しているよ」

キノガッサ「そうだな」

ネロ「リザレなら大丈夫」

ネロはめずらしく起きている

ガロ「そういえば、ラッシュやリザレのバトルだといつ起きるんだよね」

ネロはラッシュとリザレのバトルの時には目を覚ます

なぜなのかはわからないが（汗）

そんなこんなで2人の視点に戻そう

ゼルス「それではバトル開始だ！」

ピッケル「（僕にはあまり技はないけど）えいっ！」

ピッケルは自分の装備であるひのきの棒を振る

あまり攻撃力がないように見えるが（汗）

リザレ「（あまり効かない感じもあるけど…）」

リザレは軽く避ける

ピッケル「（こうなったらグングニル様！）」

ピッケルは頭でひのきの棒に問いかけるが

『わしは今忙しいので無理』

という答えが

ピッケル「（ふざけるなああああああああああああああああ

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ?

リザレ「火炎放射！」

ピッケル「うわっ！」

すると

これがグングニルという神具へと変化する

するとピツケルの姿にも変化があつた

彼の身長が大きくなっていた

ピッケル「ふう〜10年後の僕になったよ」

そう

その影響によって、彼は大人の自分へと姿を変えたのだ

「どうしよう!？」

リザレはピンチな感じだ

ピッケル「いくよ！オーディンブラスト！！」

グングニルから、すざましい雷撃が繰り出される

だがリザレは

リザレ「（ここであきらめたらだめだ…俺だって…成長したんだ！
でかりザ変身！）」

するとリザレはでかりザ変身を繰り出した

雷撃がリザレに直撃する

ピッケル「僕の勝ちだ！」

勝利を確信するピッケル

しかし

????「フレアソウル9！！」

ピッケル「！？」

ピッケルは油断したのか炎の弾を食らってしまった

そこから

リザードンの姿のリザレが現れた

リザレ「チビリザ変身!!」

リザレはすぐにリザードンからヒトカゲへと退化する

リザレ「シューティングブチフレア！」

リザレは小さな火球を数発繰り出した

ピッケル「うわあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

油断をしてしまったピッケルは元の姿へと戻ってしまった

そして倒れてしまう

ゼルス「ピッケル戦闘不能! リザレの勝ちだ」

リザレ「俺の…勝ち…」

リザレは少し固まる

ラッシュ「よかったなりザレ」

ホムラ「少しは成長したな…」

みんなは歓喜した

バトル148 リザレの成長！ ピッケルVSリザレ（後書き）

とりあえず書き直したので見ているみなさんすみません

ラッシュ「とりあえずはリザレは勝ったな」

そうだね、とりあえずはピッケル君の特訓というか新技をどうするか（汗）

バトル149 もはや大家族！？（前書き）

さて前回のバトル148で書き直しなどで色々すみません、自分の不注意でしたので見ている読者様と作者様にはご迷惑をかけてすみませんでした！！次は色々と注意しながらがんばっていきますのですみませんでした！

ラッシュ「とりあえず2人のバトルは終わったがなんだ？このタイトル？」

ああ、この後の部活終了後です、ではバトル149

ラッシュ「燃えるぜ♪」

バトル149 もはや大家族!?

ゼルス「では解散!!」

全員『おつかれさまでした!!』

全員が解散

ホムラ「なあ? ラッシュ?」

ラッシュ「どうした?」

ホムラがラッシュに声をかける

ホムラ「そういえばラッシュの両親が戻ってきたんだろ? ちょうどいいから俺も家に来てもいいか?」

ラッシュ「ああ、いいが」

リザレ「疲れた」

リザレはリザードでも体が少しなれてはいるがさすがにバトルで戦ったためか疲れている

でかりザ変身とかは負担の大きい技だ、ラッシュと特訓はしていて少しは持続時間も長くはなったがまだまだだ

ホムラ「とりあえずリザレは俺の背中に乗れ」

ホムラはリザレをおぶる

リザレ「ありがとう」

ホムラ「いいって♪」

まあホムラとリザレも仲よくなっていた

ホムラは見た目は怖い感じもあるが、根は優しい

ラッシュ以外のヒトカゲ系統は好かれている

ラッシュの場合は友達とライバルとしてだ

すると

父（魔王）「あのく私も泊まるところないのでいいでしょうか？」

ピッケル「僕も」

父（魔王）とピッケルは泊まるところがないと言う

すると

ラッシュ「まあいいけどよ、とりあえずは親父とおふくろがOKならな」

ピッケル「ありがとうございます！」

ピッケルはおじぎした

さらに

ライト「俺も寮生活飽きたからラッシュユの家で世話になっていいか？」

今度はライトまでだ

ラッシュユ「まあいいが（汗）」

結局承諾（汗）

シュナ「あたし達もちょうど別の家ができたからそっちに住むわ」

アルス「家がとなりだから大丈夫だろう」

どうやらシュナとアルスはこっちでの自分達の家を建てていたためこっちに住むことになった

御羅「まあこれでどうなるかだな」

ラグ（分身）「それにキノガッサもこっちに世話になるし」

キノガッサ「まあ分身のラグがいるしな、こっちも世話になるぜ」

ラッシュユ「ああ」

レウト「俺も♪」

レウトまで行くことに

ホムラ「ラセ、リオ、家の方頼んでいいか？」

赤き龍ラセ「ああ、こっちは任せろ」

リオ「こっちの方はやっておくぜ」

ちなみに金曜日なので明日は休みなので大丈夫らしい

こうして一行はラッシュの家へ

……

ラッシュの家

ラッシュ「ただいま」

リュウオ「おゝいとしき我が息子ゝ！！」

リュウオが突然ダイビングしてきたが

ゴツン！！

リュウオはラッシュのげんこつで叩き落とした

ラッシュ「いい加減にしろよ（汗）」

リュウオ「いつつ：いいじゃないかラッシュ、寂しかったんだぞ」

リュウオはたんこぶを押さえながら言う

そこに

ホムラ「こんな奴がラッシュの親父さんかよ（汗）」

リザレを抱えたホムラが帰ってきた

リュウオ「おゝリザレくゝん！」

そのままりザレの元に向かうが

ドガッ！！

リュウオ「ぐおっ！？」

つとホムラに蹴られて顔が足にめり込んだ

ホムラ「俺の弟にてえだすんじゃねえ！（怒）」

すごい形相で怒るホムラ

ホムラ「テメエ！よくもラッシュをほっときやがったな！」

と、リュウオを掴む

リュウオ「ぐるじい〜」

リュウオの顔が青ざめる

ラッシュ「もうやめとけホムラ（汗）」

ホムラ「チッ」

ホムラは舌打ちしてリュウオを放す

リエナ「ラッちゃんおかえり♪」

リエナが駆け出した

ホムラ「ラッちゃんって言われてるんだな（笑）」

ホムラはラッシュの意外な一面にニマニマする

ラッシュ「お前もやめろ！／／／／」

ラッシュが恥ずかしがる

ホムラ「いいじゃねえかラッちゃん（笑）」

ラッシュ「ホムラテメエ！」

ラッシュはホムラを追いかける

ホムラはリザレを抱えたまま逃げる

……

数分後

とりあえずことは収まったので全員がリビングにいる

みんな自己紹介して本題に入った

リュウオ「まあ大家族になってもいいしな」

リエナ「私達も仕事だけじゃなくてもっとラッちゃんのことを大切にしたいし、いいですよ♪」

OKらしい

父（魔王）「おお！それはありがたい♪」

ピッケル「よろしくお願いします」

ライト「よろしくな！」

キノガッサ「まあよろしくな」

こうしてなんとか許可をもらって父（魔王）、ピッケル、ライト、キノガッサはしばらくラッシュの家に居候することに

まあ部屋も広いため、大丈夫だ

ラッシュ「とりあえずはあまり暴れないようにな」

ホムラ「ちなみにリザレとかに手を出したら殺すからな（黒怒）」

ホムラはリュウオを睨む

リュウオ「（ギクッ！？）な…何をいうんだホムラ君、俺はそうし

ないから許して…ね？」

と、ブリっ子するが

ホムラ「やるなよ？」

まだ睨んでいた

ラッシュ「まあ落ち着けホムラ」

レウト「とりあえずは帰ろうぜ、ラセとリオが待ってるしな」

ホムラ「そうだな、じゃあ俺達は帰るな」

ホムラとレウトは帰っていった

ラッシュ「まあとりあえずはどうなるかだな（汗）」

ある意味先が不安になる感じがしたラッシュであった（汗）

バトル149 もはや大家族！？（後書き）

ラッシュが苦勞してる感じだねゝ

ラッシュ「作者がそうしてるからだろ（汗）」

まあまあ、面白くなりそうだし♪

ラッシュ「いや面白くしてるのはいいが（汗）」

次回は新キャラ登場です

バトル150 浪花（なにわ）のエンブオー（前書き）

はい、新キャラです

ラッシュ「一体誰なのか」

まあ今回の新キャラは自分でも設定で入れたかったので、ではバトル150

ラッシュ「燃えるぜ！」

バトル150 浪花（なにわ）のエンブオー

今日もいつものポケハン学園

青空が広がって絶好のバトル日和だ

そんないつもの1－Aの教室

ラッシュ「今日もいい天気だな」

レウト「こんな時はコタツがいいのに今日は学校なんて不幸だぜ（泣）」

ホムラ「いつまでもコタツにいられるわけないだろ（汗）」

ホムラはそんなレウトにつっこむ

リザレ「今日も1日過ごせるようにしないと」

ライト「俺はそれよりバトルしてえゝなゝ」

ライトはバトルしたいとだれる

その時

ガラッ

イッくん先生が入ってきた

みんな慌てて席につく

イツクン「えー今日は新しい転校生が来るよ」

なんと転校生らしい

イツクン「ここから西のコガサカ地方から来た子だからみんな仲良くな、それじゃあ入って！」

ガラッと教室のドアが開いて、中から一匹のポケモンが入ってきた

あごには炎がヒゲの形をして燃えていて、口には牙が2本出ていた。鋭い目にでかい鼻、そしてたくましいほど太い体型のポケモン

おおひぶた
大火豚ポケモンのエンブオーだ

エンブオー「俺はエンブオーのエルブや、よろしゅうな」

と、関西弁でしゃべるエルブと呼ばれたエンブオー

ちなみにコガサカ地方はこのようなコガネ弁、いわゆる関西弁をしゃべるポケモンが多いのだ

こうして紹介が終わって授業が始まった

……

放課後

ラッシュ「そんじゃあ俺達は部活に行くか」

赤き龍ラセ「そうだな」

ゴーシュ・モモ「待ってました！」

ラッシュ達が部室に行こうとしたその時

????「ちょい待ち！」

誰かが待ったをかけた

かけたのは

ラッシュ「ん？エルブだったなたしか」

あの転校生のエンブオーエルブだ

エルブ「あんさん達バトル部のメンバーやな？」

ラッシュ「ああ、これから部室に向かうところだ」

すると

エルブ「俺もちょうどこのバトル部に入りたかったんや、よかったら案内してもらえへん？」

なんと入部希望らしい

ラッシュ「いいが、とりあえずついてきてくれ」

エルブ「おおきに♪たすかるで」

ラッシュ達はエルブと共にバトル部の部室へと向かった

……

バトル部部室

エルブ「広いな〜ここがバトル部の部室かいな」

エルブはバトル部の部室の広さに驚く

ホムラ「まあ俺達も結構使ってるからな」

エルブ「それにしても結構やってるんやな〜かなり汗臭いで」

エルブは鼻をかいだ

エルブ「それで俺、バトルしたいねんけど？バトル部部长は誰なん？」

エルブはバトル部の部長が誰なのかを言う

すると

ラッシュ「それは俺なんだが？」

エルブ「なんと！？ラッシュはんが！？」

エルブが驚く、たぶん知らないということだ

ラッシュ「俺の相手でもするか？」

しかし

エルブ「いや、別の相手がええな…ほなあんさんがええな」

指名したのはタツキだ

タツキ「私ですか？」

エルブ「そうや、あんさんとは相性悪いが俺もそう簡単にいかなさ
かい、勝負してくれへん？」

すると

タツキ「わかりました、お相手いたしましょう」

エルブ「それでこそや」

ラグ（分身）「タツキ！がんば！」

ラッシュ達はバトルフィールドへ

バトル150 浪花（なにわ）のエンブオー（後書き）

はい！新キャラはエンブオーです！

エルブ「俺はエンブオーのエルブや、よろしゅうな」

初めての関西弁をしゃべるキャラです、自分も関西弁をしゃべるキヤラ出そうとは思っていたので、でも京都弁も混ぜてしまった感じになって本当に関西弁をしゃべっているのかどうかもわからなくなりました（汗）

エルブ「大丈夫かいな作者はん（汗）」

とりあえずはね

ラッシュ「次回はタツキとのバトルか」

タツキも強いよ、はたしてどうなるか

エルブ「次回も見てください」

バトル151 タツキVSエルブ前編 剣と拳（前書き）

ついにバトルです。エルブの実力は

バトル151 タツキVSエルブ前編 剣と拳

バトルフィールドにはタツキとエルブがいた

タツキ「お手柔らかにお願いします」

エルブ「いくで」

ラッシュ「それじゃあバトル開始だ！」

ラッシュの合図でバトルが始まった

タツキ「(まずはこの技で)水の波動！」

タツキは水の波動を繰り出した

エルブは炎・格闘タイプ、相性では不利だ

だがエルブはニヤツとした

エルブ「俺にそんなの通用せえへんで、雷パンチや！」

エルブは雷パンチで水の波動に攻撃

すると水の波動は相殺された

タツキ「(相殺!?)」

タツキは驚くが

タツキ「（本気を出させてもらいますよ）水の舞…水蓮！」

フィールドが水となった

そこから水の短剣が繰り出された

しかし

エルブ「そう簡単にはいかないで、ランドブレイカー！」

エルブは拳を地面にたたきつけた

すると水はだんだんと減っていつてしまった

タツキ「これは!？」

エルブ「ここからが本番や」

エルブは構える

ラッシュ「これはどうなるかだな」

ラッシュも緊張しながら見る

バトル151 タツキVSエルブ前編 剣と拳（後書き）

続きは次回で

ラッシュ「短いな」

少し前編とか後編つけたかったからね

ラッシュ「次回もどうなるか楽しみだな」

バトル152 タツキVSエルブ後編 華麗な剣と熱い拳そして思いを胸に(前)

後編です

エルブ「わいの実力、みとったる！」

そんなバトル152

エルブ「いくで！」

バトル152 タツキVSエルブ後編 華麗な剣と熱い拳そして思いを胸に

エルブ「いくで！ビルドアップ！」

エルブは力を込めた

ビルドアップによって攻撃と防御を上げる

タツキ「（厄介な技だ、あれで能力を上げたってことみたいですね）」

タツキは苦い表情をした

エルブ「俺の武器は拳や、そしてこの拳一筋やで、パニッシュラン
ド！」

エルブは拳を地面に向かってたたきつけた

すると地面から青い球体が数発出てくる

タツキ「！？守る！」

タツキは咄嗟に守るで防いだ

エルブ「やるやないか♪やっぱバトルはこうでないとな〜♪」

エルブは笑顔で言う

タツキ「そうですね…このぐらいでないと面白くありませんし、風の太刀…風雷ふうらい!!!」

タツキは前足から緑のビーム状の剣を作り出し、一振りした、すると暴風とさらに雷をあわせた大嵐を作り出し、エルブに向かって襲う

エルブ「ぐおっ!?!」

エルブは食らってしまいが

エルブ「負けへん!バーニングストームや!」

エルブの周りから炎の竜巻が発生して、風雷を打ち消した

タツキ「やりますね」

エルブ「このぐらい、俺は効かへん」

エルブは少しボロボロになりながら余裕の表情を見せる

タツキ「なら私も…剣の舞!」

タツキは回転する

エルブ「こっちもパワーアップかいな」

タツキ「ただ能力を上げるだけではないですよ、風水ふうすいの舞…白銀はくぎん」

すると吹雪が吹いてきた

エルブ「うわっ!?! えらいこっちゃ!?!」

観客席

ラッシュ「吹雪いてきたな」

リザレ「先輩! そばにいていいですか?」

ラッシュ「ああ」

リザレは寒いためかラッシュのそばによる

レウト「さみい」

ホムラ「俺達寒いのは苦手だしな」

レウト&ホムラはリオレウスと元リオレウスのため寒さいわく氷属性が苦手なため震える

リオ「さみい (泣)」

赤き翼ラセ「温かいの持ってくればよかった」

もちろんリオもだ

やっぱりリオレウスは氷属性弱点のため寒さも苦手のようにだ

ルガー「俺はあまり寒くないがな」

レイラ「寒いわ」

あまり氷属性が効かないものはある程度の寒さなら大丈夫だ

エルブ「フレイオーラ！」

エルブは炎をまとったオーラをはる

エルブ「中々やなくでも見えへんな」

すると

タツキ「ならこれで終わりにしましょう」

タツキの声が聞こえる

エルブ「そうやな、俺の必殺の拳をお見舞いしたる」

エルブは構えた

エルブ「いくで！！オーバ―ブレイカー！！！」

エルブの拳がものすごい炎をまとった

タツキ「行きます！水の太刀…聖^{せい}貝^{かい}！！！」

吹雪からタツキが前足の二つから光をまとった剣を構えて突進してくる

エルブ「いくで！！！」

ドカーーーーー！

二人の攻撃が互いに火花を散らす

お互い押し合いで攻防が激しくなる

タツキ「くっ！」

エルブ「や…やるやないか…」

互いに一步も譲らない

すると

ドカーーーーー！

爆発が起きる

互いの力が相殺したのだろう

全員が息を呑む

白い煙がフィールドを包み込む

煙がはれると

エルブ「やるやないか…」

タツキ「あなたですよ…」

二人はボロボロになり、互いに言葉をかわして倒れた

ゼルス「両者戦闘不能!!」

ラッシュ達が二人に駆け寄る

ラッシュ「大丈夫か？」

タツキ「はい」

エルブ「いやゝ俺もまだまだだわ、バトル部っておもしろいなくここに来てよかったわ♪」

エルブは笑顔で言う

エルブ「俺もここに入部や」

エルブはそう言った

ラッシュ「これで仲間が増えたな」

すると

ラグ（分身）「ん？」

ラグ（分身）が何かを感じていた

ラッシュ「どうしたラグ？」

ラッシュは声をかけた

ラグ（分身）「もう一人の僕ががんばってる…相手は…ギラティナ…」

そう言う

タツキ「どうやらこっちのラグもがんばっているようですね、なら私達の思いを」

ラッシュ「ああ、もう一人のラグに俺達の思いを」

みんながラグ（分身）の周りに集まった

遅れてガロやガル先生、そしてイッくん先生も

みんなそれぞれ目をつむって思いをのせる

ラッシュ「かならず勝てよ、俺達はつながっている…」

ラッシュの体が赤いオーラに包まれる

レウト「俺達がついてるからな」

レウトの体にも赤いオーラに包まれる

サクラ「あたし達の思い…受け取りなさいよ…」

サクラはピンクのオーラに包まれる

レイラ「かならず勝って…」

レイラは緑のオーラ

リザレ「本物のラグに俺達の思いを届いて…」

リザレは赤いオーラ

ホムラ「負けんじゃねえぞ！」

ホムラは赤いオーラ

アオイ「私達がいる…だから…」

アオイは水色のオーラ

ブレイ「燃えていけ！」

ブレイは赤いオーラ

ルガー「お前は一人じゃない…」

ルガーは黒いオーラ

ルング「勝てよ！」

ルングは黄緑のオーラ

ガロ「俺達の気持ち…無駄にするなよ…」

ガロは銀色のオーラ

ガル「俺達の思いを…」

イックン「がんばって、本物のラグ君…」

ガルは紫のオーラ、イックンはピンクのオーラに包まれた

ネロ「……」

ネロはオレンジのオーラ

御羅「負けんじゃねえぞ!!俺達はいつでもつながっているんだ!!」

御羅は赤いオーラ

リリー「がんばって…」

リリーはピンクのオーラ

がばね「俺達がついてるからな…」

がばねは赤いオーラ

スバル「俺達の思い…」

アイリス「届いて…」

ウィリア「勝って…」

プリムラ「負け…るな…」

リナト「闇をはらって…」

スバルは黒いオーラ

アイリスはピンクのオーラ

ウィリアは赤いオーラ

プリムラは水色のオーラ

リナトは灰色のオーラ

ライト「ここにくたばるんじゃねえぞ!!」

ライトは黄色のオーラ

異世界ラセ「勝てよ…」

赤き翼ラセ「僕達がいる…」

リオ「お前は一人じゃねえからな」

異世界ラセは紫のオーラ、赤き翼ラセは赤いオーラ、リオも同じく赤いオーラに包まれる

シュナ「私達の思い…」

アルス「かならず勝てよ…負けるな…」

シユナは光のオーラ、アルスは青紫のオーラに包まれる

ブルー「無駄にはしない…」

イエロー「がんばれ！」

グリーン「がんばるっす！」

シルバー「命は俺達にもある」

ブルーは青いオーラ、イエローは黄色のオーラ、グリーンは緑のオーラ、シルバーは銀色のオーラ

タツキ「ラグ…私の思いを…」

エルブ「なにがなんだかわからんが熱い思い受け取ってくれや…」

タツキは青いオーラ、エルブは赤いオーラに包まれる

それぞれの思いがラグ（分身）を包み込み、一つのカードリッジが虹色に輝いて空のかなたへと行き、消えた

ラッシュ「俺達もがんばるからな…」

それぞれの思いをのせて、カードリッジはラグ（本物）の元へ…

その名はセイントカードリッジ

バトル152 タツキVSエルブ後編 華麗な剣と熱い拳そして思いを胸に（後

とりあえずあっちのをつなげてみました

ラッシュ「あっちのラグに届いていればいいが」

きっと届くことを信じて…そして引き分けに終わりました

エルブ「だけど、楽しかったで…さらに入部や」

はいおめでとう

ラッシュ「ますます活気がつくな」

うん

バトル153 ラッシュ、さらなる高みを目指して(前書き)

ラッシュ「久しぶりの更新だな」

うん、今回は急展開！ラッシュに異変が起きます

ラッシュ「なんかすごく嫌な予感しかしねえが(汗)」

とりあえずバトル153

ラッシュ「強くなれ!!」

バトル153 ラッシュ、さらなる高みを目指して

エルブが来て数日

今日も平和なバトル部

しかし

ここはラッシュの家

ラッシュ「調子が上がらないな…」

ラッシュはなぜか落ち込んでいる

しかもなぜか顔が少しげっそりしているようだ

リザレ「大丈夫ですか先輩？」

リザレが心配そうにラッシュを見る

ラッシュ「ああ、大丈夫だ…やっぱあれか…」

あれとは？

リザレ「父（魔王）さんと戦ってからなんだか調子が出ない感じですよね？」

ラッシュ「あの技出してからなぜか力がうまくでなくなったんだよね」

数日前、父（魔王）とラッシュは戦ったがそこからなぜか力はいらなくなってきた

リザレ「無理すぎですよ先輩、結局俺の技で怪我を治す始末ですよ」

ラッシュ「ごめんな（汗）」

ラッシュのあちらこちらには傷ができています

ホムラ「ホントだよな、やっぱあの特技の合体がまずかったかもな」あれからラッシュは少し負けてるのもあった、とりあえずは勝ってるがそれでも調子が上がらなかった

レウト「そうだよな」

レウト、ホムラも来ているため見ている

リザレ「とりあえずはこれでなんとかしたけど…さすがに俺も疲れたよ」

リザレは腰をおろす

ラッシュ「ありがとなりザレ、とりあえずは大丈夫だが…」

ラッシュは笑顔だが、裏では悔しさがあった

父（魔王）「かなり反動が出てるように思う感じですね」

ピッケル「なんとかならないかな」

ピッケルは心配そうにラッシュを見る

そこに

ゼルス「ラッシュ、入るぞ」

そこにゼルスが出てきた

玄関から早速上がってきた

ラッシュ「ゼルスさん」

ゼルス「調子はどうだ？」

ゼルスはラッシュに状態がどうなのか聞いてきた

ラッシュ「あんま調子が上がらない感じですよ…やっぱり白聖龍炎…それがうまくコントロールできない感じだと…」

龍炎と聖龍炎の合体技、白聖龍炎

ラッシュの最後の切り札技なのだが、まだ完璧でないし、反動で疲れてしまってからラッシュの調子もなぜかあがらない

ゼルス「そこでだが、スザクから連絡があって、『私の元に来い』と来た、後、リザレにホムラにレウトも来てほしいみたいだ」

レウト「俺も？」

ホムラ「スザクって誰なんだ？」

リザレ「そういえばそのスザクさんが俺達に何の用なんだろう？」

レウトは一度会っているがホムラとリザレは会ったことはない

ゼルス「とりあえず来てくれたと、じゃあ俺は行くな」

ゼルスは去った

ラッシュ「とりあえず明日行くか、一応準備とかもしたほうがいいな」

リザレ「そうですね」

レウト「それじゃあ俺達は帰るぜ」

ホムラ「呼ばれたのなら何かあるんだろうな」

レウトとホムラは帰って行った

……

次の朝

今日は土曜日のため部活はお休みだ

ここはラッシュの家の前

リユウオ「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおん!!」(泣)二人して行っちゃ嫌だああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 あああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
 !!!!!!!」(泣)

なぜか泣くりユウオ

ラッシュ「心配しすぎだろ親父（汗）呼ばれたんだからいくしかねえし、おふくろ、親父、行ってくるな」

リエナ「気をつけるのよラッちゃん」

リザレ「それじゃあラグや御羅は留守番お願いね」

御羅「任せろ！」

ラグ（分身）
「気をつけてね」

ラッシュとリザレはスザクが待つ虹の山へ

-
-
-
-
-
-

虹の山山頂

レウト「ラッシュ!!」

レウトがラツシュに叫ぶ

ラッシュ「来たぜ」

ホムラ「ようやくだなラッちゃん（笑）」

ニヤニヤしてラッシュにからむホムラ

ラッシュ「殴るぞ（怒）」

ラッシュは拳を強く握る

ホムラ「冗談だって」

冗談でないだろう、そんな感じでラッシュは思った

そんなとき

スザク「来たな」

スザクが出てきた

ラッシュ「来たぜスザク」

リザレ「ホウオウ!？」

ホムラ「マジかよ!？」

リザレとホムラは驚く

スザク「まあその不良リザードンとは縁があってな…とりあえずだがラッシュ、白聖龍炎を出してから調子が出ないようだな」

ラッシュ「ああ、たぶん俺の熟練不足だと思うが」

ラッシュはスザクにそのことなど含めて話した

……

スザク「ふむ…どうやらこの技をさらに制御しなければならんな…それにお前の今の状態、体力も少し落ちているな…相当その合体技の負担が大きい…ならラッシュとその三人、私について来い」

スザクの案内でラッシュ達はスザクの後についていく

……

虹の山スザクのすみか

スザク「ここだ」

スザクがラッシュ達に案内したのは

ラッシュ「これは!？」

ラッシュ達の目の前には何処かへと通じるゲートが出ていた

スザク「今からこのゲートに入って修行をせよ…もちろんラッシュだけでなく…お前達3匹もまだまだだな感じだから入ってもらえ」

ホーム「俺達もか」

リザレ「大丈夫かな…」

リザレは不安そうになる

スザク「大丈夫だ、ここからは使いの者達の任せている安心して行
ってこい」

どうやら使いの者と共に修行するらしい

ラッシュ「だがこっちの時間とか大丈夫なのか？」

そう、修行って言っても時間もある、ラッシュ達の学校もあるのだ
から

スザク「安心しろ、こっちでは時間が長い、戻ってくる頃には夕方
ぐらいになる」

どうやら時間面では安心らしい

ラッシュ「なら…入らせてもらうぜ」

ラッシュは先にゲートへと入った

リザレ「待ってください！先輩！」

リザレも続いて入っていった

ホムラ「行くぜ！」

レウト「俺も！」

ホムラとレウトも続けて入っていった

その後ゲートはゆっくりとゴゴゴと音を立てて閉じていった

スザク「後は頼んだぞ」

スザクはゲートを見ながら静かに言う

……

ラッシュ「ここは……」

ラッシュは何処かの空間にいた

しかも一面が草原だった

リザレ「はあはあ……やっと追いつきましたよ先輩」

リザレは疲れながらラッシュの元へ

レウト「やっとついたぜ」

ホムラ「それにしてもここは一体？」

レウトとホムラが来た

ラッシュ「とりあえず何やるんだ？ しかも使いの者って」

すると

リザレ「何か来ます！」

リザレが何かを見たみたいだ

ラッシュ達のところからまっすぐにこちらに向かってきた

しかもそれは3匹のポケモンだった

3匹はラッシュ達の目の前に止まった

一匹は強そうな2本の角、胸には白い体毛、そして体色は水色で四足のポケモン

一匹はごつい体つきで灰色の体色で同じく四足のポケモン

一匹はスラッとした体格に黄緑の体色で四足のポケモン

????「お前がラッシュだな」

灰色のポケモンがラッシュに問いたたす

ラッシュ「ああ、お前らがスザクが言った使いなのか？」

????「その通りだ」

3匹は自己紹介した

????「私はコバルオンのバルキリーだ、ラッシュには私と一緒に

に特訓をしてもらう」

水色のポケモン、てっしんポケモンのコバルオンがラッシュの特訓の指導者だ

???? 「俺はテラキオンのテラキオだ、そこのヘタレドラゴンと特訓だ」

レウト 「ヘタレドラゴンっておい！（泣）」

ヘタレと言われたヘタレウス（汗）

灰色のポケモン、がんくつポケモンのテラキオンがレウトの特訓相手だ

???? 「僕はビリジオンのビリーブ、リザレ君だっけ？ 君が僕の特訓担当だからよろしくね」

リザレ 「あ…はい…」

黄緑のポケモン、草原ポケモンのビリジオンがリザレの特訓相手だが

ホムラ 「あれ？ 俺の特訓相手は？」

ホムラだけはなぜか相手がいない

バルキリー 「ああ、それならもうすぐ来る」

テラキオ「来たぜ」

するとラッシュ達のところから一匹のポケモンが来た

しかもそれは

ホムラ「ま！まさか！？」

ホムラは驚いていた

そのポケモンがラッシュ達の目の前に降りてきた

それはラッシュと同じリザードンだ、しかも頭にはゴーグル、首には青いスカーフ、そして腰には剣がついていた

ホムラ「し…師匠！？」

そう、このリザードンは

作者であるフォックだった

バトル153 ラッシュ、さらなる高みを目指して（後書き）

ラッシュ「なんで作者なんだよ（汗）」

いやゝホムラ君の師匠だし、やっぱ俺来ないと始まらないからねゝ」

ラッシュ「それはいいがこれから特訓だがどうなるかだな」

大丈夫、3匹のポケモンはイッシュの準伝説だし、一度出したかったから

ラッシュ「まあとりあえず次回は？」

まずはラッシュの特訓からだよ、そしてここから新章ですので

ラッシュ「とりあえず次回が楽しみだな」

バトル154 正義の心と龍炎（前書き）

はい！ラッシュの特訓です

ラッシュ「とりあえずはなんなのかだな」

さて、そんなバトル154

ラッシュ「燃え上がれ！！」

バトル154 正義の心と龍炎

別の空間

そこは川が流れていた

そこにラッシュとコバルオンのバルキリーの二人がいた

バルキリー「ここは私の空間だ、とりあえずまずはラッシュの实力が見たい、いいか？」

ラッシュ「ああ、いいぜ、調子もなんだかよくなってきたいるんだ」

ラッシュは調子がいいようだった

バルキリー「そうだな、ここの空間は自然があり、調子もなんとかしてくれる、とりあえずは白聖龍炎は出るだろう」

どうやらここの空間は環境的にはいいらしい

ラッシュ「それじゃあいかせてもらうぜ、フレアソウル!!」

ラッシュはフレアソウルを放った

バルキリー「聖なる剣!」

バルキリーの二本の角が光、剣のようになってフレアソウルを斬り付けた

ラッシュ「やるな」

バルキリー「それでも私は修行をしているからな」

バルキリーは鋼タイプをもっていて相性では不利だ、だがそれでも彼は戦う

バルキリー「中々の攻撃だ…だがストーンエッジ！」

バルキリーはストーンエッジを放つ

ラッシュ「ブレイバーラッシュー！！」

ラッシュの拳が光をまとい、ストーンエッジをこっぴみじんにした

ラッシュ「なんだか…感覚が戻ってきたな」

ラッシュは元気がない感じだったが、今は感覚が戻ってきたようだ

バルキリー「そうだ！それでこそだ！！」

ラッシュ「なら行くぜ！！これで決める！！セイントリミット！！そして龍炎&聖龍炎！！」

ラッシュはセイントリミットを発動し、さらに龍炎と聖龍炎を繰り出した

ラッシュ「行くぜ！！白聖龍炎！！」

二体の龍が合体し、白銀の炎の龍へと姿をとげた

しかし

バルキリー「あまいな、セイントオブブレイバー!!」

バルキリーの角が神々しい光の剣へと変貌し、白聖龍炎を斬り付けた

龍は真っ二つになり、消えてしまった

ラッシュ「くっ！」

ラッシュに疲労感が襲う

バルキリー「聖なる剣!!」

バルキリーは聖なる剣を繰り出した

ラッシュ「ぐわああああああああああああああっ!!
!!!!!!!!!!!!!!」

ラッシュは避けられず倒れてしまった

ラッシュはボロボロで起き上がれない

バルキリー「私の勝ちだな」

バルキリーはフツとしてニヤリと顔をほこらせる

ラッシュ「負けちゃったな…やっぱまだまだ完成するには時間かか

るな」

ラッシュは悔しそうにしている

するとバルキリーは何かをもってきた

バルキリー「食え、お前にはこのぐらいの方がいいだろう」

持ってきたのはおにぎりだ

ラッシュは立ち上がり、おにぎりを食べた

ラッシュ「うまいな…」

ラッシュはよほどお腹すいているのかおにぎりを食べた、おにぎりはすぐになくなった

バルキリー「お前は少し軽い感じだ、少し体重を増やした方がいいな」

ラッシュ「そうか？」

ラッシュが首をかしげる

バルキリー「お前の今の体重はいくつだ？」

バルキリーはラッシュの体重を聞く

ラッシュ「そうだな…俺は今身長は3mで体重は…たしか80ぐらいだったな」

ラッシュはこれでもたくさん食べているが平均より体重は軽いほうだ
バルキリー「たぶんそれだろう、平均より軽いと逆に体力的に疲労
感がくるだろう」

ラッシュ「結構特訓してるけどな」

軽い体重では、白聖龍炎の体力がもたないのだ

バルキリー「とりあえず平均ぐらいに戻した方がいいだろう」

ラッシュ「特訓しながらか？」

バルキリー「ああ、そうだ、とりあえずまだ料理はある、ついてこ
い」

ラッシュは頷き、バルキリーの後をついていく

……

その頃

スザク「ラッシュは感覚が戻ったようだな」

スザクは水晶で様子を見ていた

スザク「ラッシュの場合は白聖龍炎に耐えられる体力でないから疲
労感がある、ならバルキリーなら色々と料理のことなどには詳しい
からな」

スザクは納得したようにうなづく

するとそこから

????? 「ここが虹の山の頂だな」

????? 「そうね、ここにラッシュ達が来たのを見たけど」

そこにいたのは

スザク 「誰だ？」

スザクが出てくる

リリー 「あら？ ホウオウね、あたしはリリー、で？ こっちはがばね」

がばね 「ここにラッシュ達がいたのを気になってな」

スザク 「なるほど、お前達はあの不良リザードンと知り合いなんだな」

スザクはリリーとがばねを見る

リリー 「知り合いというかあたし達バトル部の部員で」

がばね 「で？ ラッシュは何処に？」

スザク 「案内しよう…でもその前にそのバラの龍…お前は…キラ
ーローズドラゴンだな」

がばね「なっ!?!なぜそのことを!?!」

キラーローズドラゴン

がばねがハンターに言われたがばねの異名だ

スザク「やはりな…お前には闇を感じていてな…ちようどいい、リリーという娘も来い、私はホウオウのスザクだ」

リリー「わかったわ、よろしくねスザク」

リリー達はスザクについていく

…

ついたのはラッシュ達が通ったゲートだ

スザク「ついたぞ」

リリー「ここは?」

がばね「なんか扉があるな」

するとスザクは説明した

スザク「この先は修行者が修行する空間だ、がばねと言ったな…お前もここで修行しろ」

がばね「俺も!?!」

どうやらがばねも修行するらしい

スザク「お前はその娘を守りたい、そして過去の自分を変えたいと思っているだろ？」

がばね「あ…ああ…」

がばねはあせる

リリー「でもあたしはどうするの？」

リリーは逆に言われていないためどうするかわからない

スザク「安心しろ、この扉から帰るまでは1日もかからん、リリーは私と一緒にここにいてもらおう

がばね「だが大丈夫なのか？俺がリリーを守るのに」

がばねはリリーを守りたい気持ちになる

スザク「安心しろ、それは私が保証する、さあ、行かない」

がばね「ああ、リリーの事頼んだぜ」

するとゲートが開いて、がばねはゲートへと入った

がばねが入ったあと、ゲートは閉まった

スザク「それじゃありリリー、やることがある、手伝ってくれ」

リリー「うん、わかった」

スザクとリリーはゲートを後にした

……

がばね「それにしても…霧が深いな…」

がばねは深い霧に覆われて先が見えなかった

すると

がばね「霧が晴れたな」

霧が晴れると

がばね「ここは…山…なのか…それに…あそこに家があるな」

がばねは何処かの山にいた、しかも家が一件あった

がばね「誰かいるのか？」

がばねはその家へと向かった

バトル154 正義の心と龍炎（後書き）

はい！がばねも修行参加だよ♪

がばね「いきなりだな（汗）」

ラッシュ「もぐもぐ…たしかな」

がばね「ラッシュは何食ってるんだ？」

ラッシュ「肉まんだ」

がばね「なんか食べてばかりに思うが？」

まあまあ、これには重要なことがあるから

がばね「まあいいが、一体俺は誰と修行を？」

それは次回あたりに、次回はレウトの修行です

バトル155 新しき姿と戻りゆく力(前書き)

はい！次はヘタレウスの修行です♪

レウト「ヘタレいうな！！」(泣)

さて、どのようにいじってやろうかな(黒)

レウト「(泣)」

それではバトル155

レウト「舐めるなよ！！」(泣)

バトル155 新しき姿と戻りゆく力

ラッシュ「ふゝ食った食った」

ラッシュはパンパンになった腹をさする

バルキリー「それはよかったな、とりあえずはこのぐらいの量は食え、私が作ってやるから」

テーブルにはラッシュが食べ終えた皿がいくつもあった

ラッシュ「でもこんなに食べて大丈夫か？それで持って気になるが？」

ラッシュでも体重は気にする

バルキリー「お前の場合はかなり特訓していて消耗が激しい、そうになるとやっぱ50皿ぐらいで大盛だと大丈夫だろ」

かなりのカロリーにはなるがラッシュにとっては満足なものだ

ラッシュ「なるほどな：俺は特訓してるから食う量が少ないって感じだな」

バルキリー「そうだ、白聖龍炎は体力消耗が激しいからな、このぐらいの量なら大丈夫だ」

とりあえずはなんとかなるらしい

ラッシュ「それじゃあ休んだら特訓だな」

バルキリー「しっかりついて来い」

ラッシュは頷いた

……

一方

レウト「なあ？ここで何やるんだ？」

こちらは岩で囲まれた場所

ここにはレウトとテラキオンのテラキオがいた

テラキオ「よし！それじゃあ修行開始だ！お前にはこの岩などを持って空を飛んでもらうぜ」

用意した岩はレウトの体長にあわせた岩だ

レウト「ちよっ！？マジかよ！？」

テラキオ「マジだ、ほら持てよ」

レウトはしぶしぶと岩を持つ

レウト「重っ！？」

かなり重いようだ

テラキオ「ここから空を飛んでここまで戻ってこい、途中で岩を落としたらやり直しだからな」

[illegible]

レウトは驚く

早速レウトはよろと岩を運びながら空を飛んだ

ちなみに背中で背負っている

•
•
•
•
•
•

レウト 「はあはあ……これマジ重いな」

レウトは汗をたらしながら翼をばたつかせ飛んでいる

ゆつくり慎重に

レウト「それでも…」

レウトはそれでも翼を広げてゆつくりと飛ぶ

-
-
-
-
-
-

数時間後

レウト「はあはあ…なんとかなしとけたぜ…」

レウトは息をきらしながら元の場所へと戻った

テラキオ「やるなくボロボロみたいだ、風呂に入れ」

疲れたレウトは頷いて風呂へと向かった

…

レウト「あゝ生き返るゝ」

レウトは風呂に入ってごくらくになる

レウト「でもどうして風呂なんだ？」

レウトは気になっていた

テラキオ「お前にはまだ何か能力があるからな、この風呂はただの風呂じゃねえぞ」

テラキオがそう言う

すると

レウト「ん？なんだ！？俺の体が！？」

レウトに異変が起きた

レウトの体が銀色になった

レウト「俺希少種でもないのになぜなんだ？」

今のレウトの姿は希少種、シルバーソルだ

なぜこのような姿になったのか

テラキオ「この湯はな、フォルムの湯というんだ、これは種族によってその力を一気に出す湯だ」

レウト「だから俺は普通のリオレウスから希少種になったんだな」

レウトは納得する

テラキオ「それに普通の姿を念じてれば元に戻る」

レウトはためしに念じた

するとレウトの体は光、元の赤い体へと戻った

レウト「すげえ！」

レウトは驚く

テラキオ「岩を運んだのは、お前がフォルムチェンジできるのかをためしたかったんだ」

そのためにレウトは岩を運ばせられたのだ

レウト「これで俺も強く…」

テラキオ「いや、まだまだお前にはなれてもらわねえといけねえから厳しくなるぞ」

レウト「しくしく（泣）」

レウトはテラキオの言葉で撃沈した

……

ラッシュ「ふう〜なんとか感覚がつかめてきたな」

ラッシュは少しずつだが白聖龍炎をある程度制御はできた

その証拠にラッシュのお腹には変化があった

筋肉質は変わらないが、少しだけお腹が膨れていた

この空間からはすでに1週間が経過していた

現実はまだ1日もたっていない

バルキリー「少しなれてきたか…この調子だとなんとか制御はできるな」

ラッシュ「ああ、スタミナもなんとかついてきたしな」

ぐぐう〜

すると何か音が聞こえる

ラッシュ「なんども白聖龍炎したら腹減ってきたな／＼／＼」

バルキリー「それじゃあ食事にするか」

ラッシュは頷いて食事をすることに

……

こちらは草原

ここにはリザレとビリジオンのビリーブがいた

ビリーブ「さてリザレ君、君は回復とかが得意だよね？」

リザレ「はい…それでも俺は回復などのサポートで、攻撃は少ししか覚えていません」

リザレがはっきりと答える

ビリーブ「君は進化はできないからね…そうだ！君には召喚とかをつけたほうがいいね」

リザレ「召喚？」

召喚はつまり誰かを呼ぶことだ

ビリーブ「今からその召喚のための特訓をするよ、いいね」

リザレの特訓が始まる

バトル155 新しき姿と戻りゆく力（後書き）

ラッシュ「ふう〜結構きついな」

まあとりあえずは少しずつがんばればいいし

レウト「すげえ！俺シルバーソルだZE☆」↑フォームチェンジ

あっそ

レウト「ひでえよ作者」（泣）

はい、ヘタレウスは無視して↑ひでえ（汗）

リザレ「次回は俺の特訓だよ」

はたして、召喚をリザレ君はできるのか！？とりあえずヨッシー先生すみません（汗）大丈夫かどうか分かりませんが（汗）

バトル156 守護する者と愛する者（前書き）

はい！リザレ君の特訓です

リザレ 「大丈夫かな（汗）」

無理しないようにはするよ、ではバトル156

リザレ 「見てね」

バトル156 守護する者と愛する者

ビリーブ「まずは召喚になれるようにめいそうするよ」

リザレ「めいそう?」

ビリーブ「とりあえずはまずはなれという感じかな」

リザレはめいそうする

リザレ「……」

すると数分後には

リザレ「はっ!」

リザレは意識を戻す

リザレ「俺には無理だな、やっぱり自分の体だから」

リザレの体では無理がある

ビリーブ「そんなに無理しなくていいよ、それじゃあ休もうか」

リザレは頷き休憩する

……

リザレ「おいしい……」

ビリーブ「僕の特製のおにぎりさ、お味はどう？」

ビリーブは自分が作ったおにぎりの味の感想を聞いてくる

リザレ「うん、味はよかったよ…ありがとう」

ビリーブ「うん、どうやら喜んでくれたね♪」

ビリーブは笑顔になる

リザレ「（俺もなれてきたのかな…でも自分の体はいまだけどそれでもビリーブというのも悪くないかな…ラッシュ先輩と同じ感じがするな）」

リザレはひそかにラッシュと同じ感じをビリーブから感じていた

…

リザレ「ねえ？そろそろ召喚する者とかどうするの？」

ここに来て1週間、リザレは気になることを聞く

ここ1週間、リザレは無理しないように少しめいそうしたり、走ったりもした、だが肝心の召喚の方の特訓をしていない

ビリーブ「そうだね…君はここまでがんばった…どうやら君は僕とは少し合いそうだね」

ビリーブがまるで自分と同調しているように話す

リザレ「そうかなあ？」

リザレは首をかしげる

ビリーブ「ここに来て少しがんばってるみたいでよかった、なら僕の召喚とかも可能みたいだ」

リザレ「えっ？」

するとビリーブは黄緑の光に包まれた

光がおさまるとそこにビリーブの姿はなく、代わりに黄緑の紅玉だけが一つ浮かんでいた

リザレ「これは…」

すると紅玉から

ビリーブ『さあ！それで「召喚！」と叫んでみて』

紅玉からビリーブの声が聞こえた

リザレ「俺が…」

ビリーブ『うん、君が念じればきっと、大丈夫、僕を召喚しても体力は消耗しないから』

そうビリーブはいい、リザレは頷いてやってみる

リザレ「∴召喚！」

すると紅玉は黄緑の光に包まれた

リザレ「うわっ！」

リザレは咄嗟に目をおおい隠した

光が収まるとそこにいたのはビリーブだった

ビリーブ「これで君は僕を呼ぶことができるよ」

リザレ「そうだったんだ∴とんだサプライズだね」

ビリーブ「そうだね♪」

少しだがお互い打ち解けたように思える

∴∴∴

がばね「なんか嫌な予感しかしないな（汗）」

こちらがばねは一軒の家の前にいた

がばねは緊張しながらドアを叩いた

すると

バンッ！

がばね「!?!」

突然扉が開いた

すると

???? 「がばね♪」

がばね「フォック!」

なんと作者が出てきた

フォック「待ってたよ♪ほら中に入るよ!」

がばね「ちよっ!?!まっ!?!」

強引にがばねは中へと入らされた

バトル156 守護する者と愛する者（後書き）

ビリーブ「とりあえず僕は仲間になったから気分いいや♪」

いいのかよ（汗）

ラッシュ「とりあえずはなんとかなったようだな」

リザレ「うん、俺もビリーブがどんな実力かはわからないけど（汗）」

まあ時期に出すよ、さて次回はついにホムラ君の方になります

ホムラ「ついに師匠との特訓が／／／」↑なぜか赤くなる

そしてがばねもくわえてのです♪

がばね「（汗）」↑捕まったためか縄で縛られる

ラッシュ「がばね（汗）」

バトル157 一度の姿と取り戻した翼（前書き）

はい！今回はホムラ君の特訓です

ラッシュ「何がなんだかな〜（汗）」

さて、さらにがばねもフッフ（黒）

ラッシュ「何かたくらんでるな作者（汗）」

なんでもないよ♪ではバトル157

ラッシュ「行くぜ！！！」

バトル157 一度の姿と取り戻した翼

がばね「はあくなんでこうなるんだ(汗)」

がばねはあの家にいた、なぜかりボンに巻かれまくりだった

ホムラ「師匠！」

フォック「とりあえず休憩終わりね」

なんとか休憩を終わらせていた

がばね「俺はなぜか見学のように思うが(汗)」

がばねはタジタジだった

フォック「俺の婿なんだから待っててね♪」

フォックは笑顔になる

ホムラ「師匠、とりあえずは剣の方見てくれますか？」

ホムラは剣の腕の方が見たらしい、それにホムラは基本の特訓をしていたのだ

フォック「その前に君にはためてもらいたいことがあるよ」

フォックが咄嗟にそう言う

ホムラ「試したいこと？」

フォック「うん、えいっ！」

フォックが愛剣を一振りする、するとホムラの体に変化が起きる

顔が龍のような顔になり、尻尾が生えさらに翼が生えた

がばね「これは!？」

ホムラ「元の姿に戻れた!？」

ホムラの姿は、自分が元の姿であるリオレウスの姿だった

ホムラ「戻れるなんてすげえ！早速！」

ホムラは両翼を羽ばたかせた、するとなぜかぎこちない飛び方だった

ホムラ「やっぱ俺は人間になってから勘がにぶったのか…」

すると

フォック「まあそうだね、ホムラ君にはその空を飛ぶ勘を取り戻すこと、ただしリオレウスに戻るのはいこれっきりだから自由に飛んでいいよ」

ホムラ「えっ!？じゃあすぐに元の人間に戻るんですか師匠？」

フォック「そうなるけど、君が勘を取り戻したらね」

しかしホムラは

ホムラ「でも師匠、それじゃあ」

人間に戻っても空をもう飛ぶことはできないと思うホムラ

フォック「まあまあ、それができたら説明とかするよ、今はじっくりとね、俺はがばねと一緒に特訓してるから勘が戻ったら来てね、がばね行こう」

がばね「あ…ああ（汗）」

フォックとがばねは別の場所へと向かった

一人草原に取り残されたホムラは

ホムラ「やるしかないか…師匠何かあるかもしれないから」

ホムラは再び空を飛ぶ練習をした

…

ホムラ「はあ…はあ…」

ホムラは何度もやって少しずつ勘を取り戻していった

ホムラ「でもまだだ、絶対空を飛ぶ勘を取り戻してやる！」

そう意気込み再び練習する

その影でフォックとがばねは見ていた、途中で見に来ていたようだ
がばね「がんばるな、ホムラ」

フォック「そうそう、それでこそ俺の弟子だよ♪君が取り戻す翼を
ね」

そうフォックは言い残し去った

がばね「あっ！フォック！」

がばねもフォックの後を追った

……

ここに来て1週間

ホムラ「はあはあ…よし！」

ホムラはボロボロになりながら飛んだ、するとどうだろう見事に飛
べるようになった

ホムラ「やったぞ！ついに俺は！」

ホムラはうれし泣きする

やっと取り戻した翼、でも

ホムラ「もうこれで飛べるのは最後だな」

そう、リオレウスでいられるのはもうできない、ホムラは空を飛んでフォックの元へ

……

ホムラ「師匠！」

ホムラはフォックとがばねの元へ

フォック「あっ！やっと空を飛べるようになっただね」

フォックは笑顔で言う

ホムラ「はい…でも…」

ホムラはがつくりとして暗い表情をする

フォック「もう飛べないってこと？」

ホムラ「はい…リオレウスである俺は人間に戻ればもう飛ぶこともできませんし」

人間に戻ればもう飛べない、天使みたいに背中に翼があればいいのだが、フォックはある言葉を口にする

フォック「どうかな？」

ホムラ「えっ？」

するとフォックは剣を一振りした

ホムラの体は再び変化を起こし、人間の状態に戻った

フォック「今の君は人間に戻った、でも飛べるよ」

がばね「えっ!？」

ホムラ「それって？」

フォック「意識してみてホムラ君、翼が出てくるイメージを」

ホムラはわけがわからず頭に翼が出てくるイメージをわかせる、すると

バサッ!

ホムラ「!!!？」

がばね「翼が!？」

ホムラの背中からあのリオレウスの両翼が出てきた

がばね「どうなってるんだ!？」

ホムラ「翼が!？」

がばねとホムラは驚いた様子だった

フォック「驚いてるようだね、じゃあ飛んでみて」

ホムラ「はい！」

ホムラは翼を羽ばたかせる、すると

ホムラ「飛んだ!？」

なんと飛べるようになったではないか！

がばね「すげえ…」

ホムラ「これで俺は！師匠！」

フォック「それじゃあ説明するから降りてきて」

ホムラは頷いて降りてきた

フォック「説明すると、まずホムラ君がリオレウスに戻したのは空を飛ぶ勘を取り戻すこと、そして人間の姿で背中から翼が生えて、人間でも飛べるように空を飛ぶ特訓をホムラ君にはしてもらったんだよ」

ホムラ「だから俺は飛べるように…でも師匠、この翼どうやってしまうんですか？」

翼が邪魔になってしまうこともある、だがそこがフォッククオリティだ

フォック「翼をしまうイメージをしてみて」

ホムラ「わかりました」

ホムラが翼をしまうイメージをすると、翼は折りたたまれ背中にしっ
かりとしまった

ホムラの背中には赤いアザが二つついていた

がばね「なっ!？」

ホムラ「翼が!？」

フォック「これによって状況によって空を飛べるようになり、さら
にしまえるようになる、これで君は飛べるよ、人間だけど」

するとホムラの顔に涙がポツポツと出てくる

ホムラ「ううっ…ありがとうございます師匠!! (泣)」

ホムラはうれし泣きしてフォックに抱きついた

フォック「よかったねホムラ君♪」

フォックは素直にホムラを受け止める

がばね「よかったなホムラ」

こうしてホムラは翼を取り戻した

空の王者の証を

バトル157 一度の姿と取り戻した翼（後書き）

はい！ホムラ君の翼が戻ってきました

ラッシュ「まあこれでホムラは空を飛べるみたいだな」

そして次回は修行したラッシュ達が合流します。お楽しみに♪

バトル158 合流（前書き）

はい！試練編も終わりになります

ラッシュ「短いように思うが？」

気にするな♪それではバトル158

ラッシュ「行くぜ!!」

バトル158 合流

ここは草原

ラッシュ「みんな遅いな」

バルキリー「時期に来るだろう」

ここにラッシュとバルキリーがいた

ラッシュを見ると幾分かたくましくなっていた

体型も普通のリザードンに戻ったようで、少しお腹が気になるが腕もさらにたくましくなっていた

バルキリー「まあここで1ヶ月特訓してずいぶんと変わってきてよかった」

ラッシュ「ああ、おかげでなんとか白聖龍炎を使いこなせることができたしな」

ラッシュも体力が戻っていて、体重はリザードンの平均より少し増えてる程度だ

すると

レウト「おい！」

レウトとテラキオが来た

ラッシュ「レウト！」

レウト「いやゝやっとう合流できたぜ♪それにしてもラッシュ、太ったか？」

ゴスツ！

レウトの頭上からラッシュの拳が叩きつけられた

ラッシュ「太ったは余計だ（怒）」

ラッシュの拳が少し煙をふいている

レウト「いてえゝ（泣）」

大きいタンコブを右翼でおさえながら泣くレウト

ラッシュ「ってかお前は少し変わったな…なんか翼もよりリアルっぽい感じだな？」

レウト「あたりめえよ！俺だってこんなこともできるんだぜ！」

レウトは力を込めた、するとレウトの体色が銀へと姿が変わった

ラッシュ「！？まさかお前！？」

レウト「へへっ！シルバーソルにフォームチェンジできるんだZE☆」

いばるように言うレウト

ラッシュ「やるな」

レウト「へへっ♪」

レウトは右翼で鼻をこすりながら言う

そこから

ホムラ「レウト！」

リザレ「すごい!？」

振り向くとホムラとレウトがいた

レウト「ホムラ!？その背中の翼!？」

ホムラ「ああ、これは師匠の愛と絆の結晶だ♪」

ホムラは喜んで言う

フォック「まあホムラ君はこれで空を飛ぶことはできるけどね♪」

フォックが笑顔で言う

リザレ「俺もビリーブを召喚できるけどね」

ビリーブ「まあラッシュ達のところで世話になるよ♪」

ビリーブが笑顔で言う

ラッシュ「ビリーブがな…なるほどな」

バルキリー「まあビリーブは優しい、なら私達も」

テラキオ「俺もだ」

この二人もだった

バルキリー「よく修行に耐えた、そこでだが、ビリーブがこっちにつくなら私とテラキオもラッシュ達のバトル部とラッシュと住むことにしよう」

テラキオ「俺はレウトのところで住ませてもらうぜ」

どうやら二人もラッシュとレウトのところに行き、さらにバトル部に入るつもりだ

ラッシュ「いいぜ」

レウト「俺もいいぜ♪ホムラもいいよな？」

ホムラ「かまわねえよ」

どうやらOKらしい

がばね「ってか俺を忘れてないか？（汗）」

全員『あ…』

がばねがいた

ラッシュ「いつの間にかがばねいたのか？」

がばね「ああ（汗）フォックに連れられてな（汗）」

がばねは冷や汗をかきまくりだった

がばね「それにしてもラッシュも変わってすごいな」

ラッシュ「まあな」

ライバルとして認める二人、それでも変化はするものだ

ラッシュ「がばねも少し変わった感じに思うな？」

がばね「いや、俺はあんまり変わらないけどな（汗）」

フォック「まあまあ、それよりこっちに戻ったほうがいいよ、ここからががんばってね」

ラッシュ「作者は？」

するとフォックは

フォック「俺は別の方があるからこの辺で、じゃあね」

フォックは翼を広げて飛びだった

「ラッシュなんだかな（汗）」

とりあえずラッシュ達は元の世界へ

•
•
•
•
•
•

「ただいま」

リュウオ「おおおおおおおおおおおおおお
 おおおお！ー！ラッシュうううううううう
 うううううううううううううううううう
 ゴハッ！？」

ラッシユは玄関を開けるとリュウオがラッシユに抱きつこうとしたがラッシユがリュウオの顔を殴った、リュウオの顔がラッシユの拳でめり込んでぶっ飛ばされた

リエナ「ラッちゃんおかえり♪」

ラッシュ
「ただいま、おふくろ」

セバス「ぼっちゃまおかえりなさいませ」

「ラッシュセバス!？」

なぜかドサイドンのセバスまでいた

「ラッシュなんでセバスまで!？」

セバス「あつちにはメイド達に任せ、来ました」

どうやら家の方はメイド達などに任せて来たらしい

ラッシュ「そうか」

ラグ「ラッシュがさらにたくましくなってる!？」

ラグが出てきて驚く

ラッシュ「ただいま」

そこから

バルキリー「こんにちは、今日からここでお世話になるコバルオンのバルキリーです。よろしく願いします」

バルキリーはおじぎをする

ビリーブ「僕はビリシオンのビリーブです」

ビリーブも挨拶した

セバス「おお! お友達ですね」

リエナ「家族が増えていいわ♪」

リエナが喜ぶ

ラッシュ「それよりおふくろ、腹が減った、何か飯とかないか？」

ラッシュが苦笑いして言う

リエナ「はいはい♪今夜は私が腕によりをかけて作るわ♪」

バルキリー「なら私も」

御羅「ラッシュ！早速修行の話聞かせてくれ！！」

ラッシュ「そう慌てるなよ」

こうして、ラッシュ達の修行が終わった

だがまだまだ上には上がいる

さらなる高みに向かって：

おまけ

がばね「はあゝ」

リリー「がばねゝ修行どうだったの？」

リリー「がばねに修行の事を言う」

がばね「ああ、フォックが色々と教えてもらってな（汗）」

リリー「フォックが？」

がばね「修行だけでなくもう疲れてくるぜ（汗）」

がばねは疲れた表情をする

リリー「でも♪フォックが喜んでいたらいいじゃない♪」

がばね「そうだな（汗）」

がばねは汗をだらだら流す

がばね「（ある意味だけどな（汗）」

バトル158 合流（後書き）

はい！試練編終わりです

ラッシュ「終わったな」

さて次回はあの作者さんの登場です

ラッシュ「誰だ？」

それは秘密♪

レウト「嫌な予感しかしねえ（汗）」

まあレウトにとってはね♪（黒）

レウト「すげえ嫌に思うんだけど！？」（汗）」

バトル159 現れた作者（前書き）

ラッシュ「作者が来るのか？」

違うよ（汗）今回はあの作者さんの登場ですよ

ラッシュ「何がなんだかな〜（汗）」

そんなバトル159

ラッシュ「燃えるぜ！！」

バトル159 現れた作者

修行から帰ってきてから数日後の放課後

レウト（シルバーソル） 「食らえ！爆炎！！」

ラッシュ 「火炎放射！！」

レウトの爆炎とラッシュの火炎放射が激突し、相殺される

レウト 「突っ込め！！」

レウトは低空飛行でラッシュに突進してくる

ガシッ！

ラッシュ 「やらせるかよ」

ラッシュはレウト自体を両手で受け止める

ホムラ 「行くぜ！」

エルブ 「かかってこいや！」

ホムラが両翼を広げ、空を飛ぶ

ホムラ 「我が剣に宿りし王たる証を示す炎よ」

ホムラが静かな声で詠唱で太刀と片手剣の両剣が炎を纏う

ホムラ「仇なす者を灰燼に帰す」

そこから連続でエルブを斬りつける

エルブ「ぐおっ!？」

ホムラ「灼熱の刃と化せ」

除々にホムラのスピードが速くなる

ホムラ「燃え散れ!! 双炎」

エルブの懷に素早く潜り込み

ホムラ「ひりゅうざん緋流斬!!」

そこから両剣を押しながら斬りつけた

エルブ「ぐわあああああああああああああつ!」

エルブは上空に飛ばされて倒れてしまった

エルブ「痛つ…ようやるわな」

ホムラ「へへっ!これぞ俺の新技、そうえんひりゅうざん双炎緋流斬だ!」

ホムラが鼻をこすりながら言う

こっちでの修行で得た新技だ

リザレ「やっぱみんながんばってるな」

ビリーブ「そうですね」

リザレはビリーブの背中に乗りながら見学していた

サクラ「変わったわね」

レイラ「レウトもだけど」

サクラとレイラは自分の彼氏達を見て驚いたようだった

赤き龍ラセ「帰って来たときはすごかったな（汗）」

リオ「レウトすげえ」

この赤き翼コンビも驚いていた

ルガー「すごい変化だな」

ブレイ「新たなライバルホムラと勝負してやる！」

アバリ「なんでそうなるピョン（汗）」

ルガーは冷静にいい、ブレイはホムラをライバル視する

アバリはそんなブレイにつっこみをする

ゴーシュ「ホントだよなく負けていたのに」

モモ「やっぱ俺達の部長はこうでないと始まらねえしょ」

ゴウカザルコンビが待っていましたとばかりにそう言う

タツキ「ホムラさんも中々の腕でしたよ」

ホムラ「ありがとなタツキ」

タツキがホムラをほめる

バルキリー「まあ私達が特訓させたからな」

テラキオ「俺達がここまでやったからな」

バトル部に入ったバルキリーとテラキオが言う

するとそこから

????「ここだな、ポケハン学園バトル部は」

誰か来たようだ

来たのは一人の少年

顔は女顔で筋肉質でスラリとしていて、髪は銀色で腰まで髪が伸びていた

ラッシュ「ん？誰だ？」

ラッシュはレウトとのバトルを中断してその少年の元へ

????「ああ、ごめんな、俺はクロウドだ」

ラッシュ「まさか！？作者のか！？」

クロウド「ああ♪」

どうやら作者本人が降臨したようだった（汗）

クロウド「実はラッシュとバトルしたくてここまで来たんだ、俺とバトルしてくれないか？」

なんとラッシュにバトルの申し込みだった

ラッシュ「いいぜ」

ラッシュはOKした

クロウド「楽しみだな♪フォックさんに頼んでここに来て正解だけど…俺は負けないぜ」

はたして、クロウドの実力は！！

バトル159 現れた作者（後書き）

えゝポケダンに続いてバトル部でもクラウドさんが来てくれました

ラッシュ「クラウドも油断できないからな」

まあクラウドさん強いしね、次回はクラウドさんがラッシュと戦います

ラッシュ「俺は負けないからな」

バトル160 ラッシュVSクラウド〜完成の秘奥義と超電磁砲（レールガン）

はい！ついにこの話で160話にきました！

ラッシュ「おっ！ついにか」

レウト「しかもラッシュとクラウドのバトルだ！」

そんな記念すべきバトル160

ラッシュ「燃えるぜ！！」

バトル160 ラッシュVSクラウド〜完成の秘奥義と超電磁砲（レールガン）

バトルフィールドにはラッシュとクラウドがいた

ゼルス「それじゃあバトル開始だ！」

ゼルスがバトル開始の合図をした

ラッシュ「（とりあえず空から様子を見るか）」

ラッシュは空を飛んだ

クラウド「打ち落としてやる！アローショット！」

クラウドは銃を構えてラッシュに向けてまるで矢を放ったように撃った

ラッシュ「（打ち落とす気だな…だが俺も修行したんだ…負けるわけにはいかねえ!!）フレアソウル！」

ラッシュはフレアソウルを繰り出した

アローショットとフレアソウルが相殺された

ラッシュ「今度はこっちからだ！火炎放射！」

ラッシュは火炎放射を繰り出す

クラウド「させるか！リフレクショット！」

クラウドはさらに銃を発射した、弾は緑色でそれが火炎放射にあたる…火炎放射が突然ラッシュに向けられた

ラッシュ「なっ！」

ラッシュは咄嗟に回避した

ラッシュ「（反射系統か…厄介だな）」

クラウド「サンダガ！」

今度は魔法を使ってきた

ラッシュの頭上から雷が落ちる

ラッシュ「ぐわっ！」

ラッシュは雷をもろに食らってしまった、飛行タイプも備わっているので効果は抜群だ

ラッシュはそのまま落下した

クラウド「グラビガ！」

クラウドは空を飛ぶ隙を与えないようグラビガでラッシュを飛べなくさせようとする

ラッシュ「ぐっ！うっ！」

ラッシュは重力で苦しむ

レウト「ラッシュがやべえ！」

ブレイ「あのクロウドという奴つええ！」

ルガー「かなりの使い手だな」

サクラ「ラッシュ！」

レイラ「グラビガは厄介だわ」

ホムラ「ラッちゃん！修行の成果を見せてやれよ！！こんなところ
でくたばるんじゃない！！」

リザレ「先輩！！」

ラグ（分身）「負けないで！」

リリー「ラッシュ！」

がばね「（ラッシュ：こんなところにくたばらねえよな）」

スバル「（そう簡単に倒れるわけがない…ラッシュ…）」

赤き龍ラセ「ラッシュ！あきらめるな！」

リオ「そうだ！修行の成果はこの程度じゃねえだろ！」

ルング「俺達がいる！！応援しているんだ！！」

ガロ「俺に勝ったんだから負けるはずねえよな！！」

ネロ「がんば…」

御羅「負けんじゃねえ！！」

タツキ「それでも修行したんじゃないんですか！」

エルブ「気合や！！」

モモ・ゴーシュ「負けらんじゃねえ！！」

リオーネ「お前は俺達が認めた奴だ…くたばるな！」

ユーム「負けるな…」

バベル「俺達に見せてくれ！修行の成果を！」

アバリ「負けるなピョン！」

ムゲン「バトル部部长だからしっかりしてよ！」

みんなが応援する

ラッシュはボロボロになりながらも少しずつ動いていく

ラッシュ「（そうだ…俺はみんながいる…今までの修行の成果の意味がなくなる…だから…）」

ラッシュ「龍炎&聖龍炎!!」

ラッシュは二体の炎の龍を繰り出した

ラッシュ「燃え上がる二匹の龍よ…今ここに絆を生み…燃え上がる刃となれ!!」

ラッシュは詠唱を唱えると二匹の龍は合体した

二体の龍は白銀の炎龍となった

ラッシュ「行くぜ!! 白聖龍炎!!」

白銀の炎龍は超電磁砲を飲み込んでさらに大きくなる

クラウド「ぎゃあああああああああああああああああ
あああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

クラウドはそれをモロに食らってしまった

煙が収まると

クラウド「う…」

バタッ

ボロボロになりクラウドは倒れた

ゼルス「クラウド戦闘不能！ラッシュの勝ちだ！！」

わああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！

全員から歓声が上がった

すると

バタッ

ラッシュも倒れた

ゼルスがラッシュの元へ駆けつけた

ゼルス「大丈夫か！」

ラッシュ「はい…かなりダメージ受けちゃった…まあ楽しかったぜ…」

するとクラウドも

クラウド「やっぱバトル部部长は強いな…こんないいバトルさせてもらって嬉しいぜ…」

互いにそう言った

青空が広がる

そんな青空をラッシュとクラウドは倒れているが見ていた

バトル160 ラッシュVSクラウド〜完成の秘奥義と超電磁砲（レールガン）

とりあえずなんとか久しぶりの投稿でしたが

ラッシュ「かなりのバトルだったな」

色々考えて…とりあえずは修行の成果は出したい感じだったので

ラッシュ「まあいいバトルだったしな」

次回は少し路線をはずしたいと思います。バトルの路線を…本来は次回はさらにコラボする人がいるんですが…こちらの方でそれぞれの視点でバトル部の方になるのでこちらの方が準備できしだいこちらの方のコラボの話を書いていきたいと思います。ちなみに次回は2年生編へ突入いたします…路線はずすためバトルの方はなしになりますのでご注意ください

バトル161 お料理バトル〜始まり〜(前書き)

なぜかバトル路線どころかバトルとタイトルつけてる時点で(汗)

ラッシュ「おいおい(汗)」

そんな今回はお料理バトルです。ではバトル161

ラッシュ「食いまくるぜ!」

バトル161 お料理バトル〜始まり〜

春が咲く

そんな3月の風が吹いてくる

ポケハン学園の方ではただいま春休みになっている

そんな中、ラッシュの家では

ラッシュ「クラウドの料理はうまいな…」

クラウド「へへっ！こう見えても料理は得意なんだ♪」

クラウドが鼻をこすって自信満々に言う

リエナ「私の方もうまいでしょラッシュちゃん♪」

ラッシュ「まあおふくろのも結構うまいからな」

リエナの料理もうまいとラッシュはほめる

リュウオ「やっぱりリエちゃんの料理は最高だよ♪」

リエナ「リュウちゃんありがとう／＼／＼／」

リエナは顔が赤くなる

クラウド「でも俺の料理もおいしいよなりユウオ？」

リュウオ「まあクラウド君の料理もおいしいよ」

クラウドの料理もおいしいようだ

リエナ「でも私の料理の方がうまいよね？」

クラウド「俺の方が！」

バルキリー「なぜこのことで争うんだ？」

なぜかいい争いになってきた、バルキリーも料理がうまいがこの二人の言い争いで疑問をもっていた

そこへ

ピンポーン！

玄関からだ

ラッシュ「どうぞ」

そこから

ホームラ「遊びに来てやったぞ」

レウト「お邪魔するZE☆」

テラキオ「よお！お前等！」

レウト、ホムラ、テラキオが遊びに来た

ラグ（分身「いらっしゃい」

ホムラ「それより…なんであの二人言い争っているんだ？」

ホムラは言い争いをしているリエナとクラウドに視点をおく

リザレ「それが…自分達の料理がうまいとかで言い争ってて（汗）」

ホムラ「何言ってるんだよ…俺もうまくなったしよ」

ホムラはそう言った

その言葉が聞こえたのか二人はホムラのそばへ

クラウド「何言ってるんだよ！俺の方がうまいに決まってるだろ！」

リエナ「私よ！」

ホムラ「なんだと！俺だってうまいんだぞ！」

三つ巴になってしまった

バルキリー「どうすればいいんだ（汗）」

バルキリーもどうしたらいいのかわからなくなった

リュウオ「リエちゃんの方がうまいよ、だから機嫌直して…ね…ね」

リュウオはリエナの機嫌を直そうとするが

リエナ「リュウちゃんはだまって！私だってこれでもラッちゃんのために料理を作っているのよ！（怒）」

やはり怒っている

リュウオ「リエちゃん（泣）」

結局何もできなかった変態オヤジだった

そこに

セバス「おや、何事ですか？」

玄関からセバスが来た

ラッシュ「セバス！お前屋敷の方は！」

セバス「ご安心ください、後はメイドや他の者達に頼んできましたので」

どうやら他の者達に頼んだようだ

セバス「どうやら何か揉め事のような…」

ラッシュ「実はな…」

ラッシュ達は事情をセバスに説明した

セバス「なるほど…それじゃあこうしましょう…あなた方三人で料理バトルをするのはどうでしょう？文句はありませんよね？」

セバスがお料理バトルを考案してきたのだ、それに3人は

リエナ・クロウド・ホムラ「のった！」

OKらしい

そんなこんなで三人の料理バトルが始まろうとしていた

……

ポケハン学園グラウンド

そんな場所に三人とそしてなぜかバルキリーやサクラやレイラやアイリスやリリーまでも参加させられていた

バルキリー「私まで参加か（汗）」

バルキリーは啞然としている

サクラ「面白そうだし腕になるわ♪」

サクラは笑顔で言う

レイラ「そうよね♪でも負けないわよ♪」

こちらにも気合十分だ

アイリス「スバルのために絶対勝つわ！」

アイリスは恋人のために気合を入れる

リリー「よくし張り切って行くわよ♪」

リリーも気合十分だ

ラッシュ「なんでいちいちポケハン学園のグラウンド貸さなきゃなんねえんだよ（汗）」

ラッシュは審査員としてテーブルに座っている

ちなみに他にはリュウオ、父（魔王）、エルブ、レウト、アルスだ

リュウオ「楽しみだな〜♪」

父（魔王）「どんな料理が来るのか楽しみだな〜♪」

エルブ「俺の納得する料理を楽しみにしてるで〜」

レウト「食うZE☆」

アルス「腹減ったな〜」

審査員もとのつたところで

ゼルス「ではこれより料理バトルを行う」

セバス「司会は私セバスとゼルス殿でお送りいたします」

司会はセバスとゼルスの二人がお送りする

他のメンバーは観客席だ

赤き龍ラセ「どうなるんだろう（汗）」

リオ「でも面白そうだしな、ホムラくがんばれよ!!」

異世界ラセ「料理対決かよ（汗）」

ついに始まる

バトル161 お料理バトル〈始まり〉（後書き）

ラッシュ 「料理対決か…どうなるかだな」

まあ腕の見せ所だよ、どうなるかは次回

バトル162 お料理バトル〜大事なのは愛情〜（前書き）

今回もお料理バトルです〜

ラッシュ「さてどうなるかな（汗）」

そんなバトル162

ラッシュ「燃えるぜ!!」

バトル162 お料理バトル〜大事なのは愛情〜

8人によるお料理バトルが開始された

みんなかなり考えて料理を作っているようだ

まずはクロウドの方から見よう

……

クロウド「（とりあえず…完成だな）」

どうやらすべて出来たようだ

まずは卵と鶏肉を使つての料理

出し巻き卵のトロけたさにジューシーに焼いた鶏肉をバジル風にして焼いた一品

そしてスープは薬味などが入ったいたって健康そうな一品

さらにデザートにはようかん

飲み物はそれぞれの紅茶で

他はパンかご飯のどちらかだ

それを審査員の6人が試食した

まずはラッシュから

ラッシュ「いい感じだな…それに出し巻き卵と鶏肉との相性はいい感じだ」

ラッシュはますますの好評

次にリュウオ

リュウオ「うまい！バジルにして鶏肉を焼いた感じが香ばしさを漂わせてる！」

こっちもますますの好評だ

次に父（魔王）

父（魔王）「中々の味わいだ」

たった一言で済んでしまった（汗）

お次はエルブ

エルブ「中々のもんやな…でもなんかしっくりこないような感じや…何か足りひんな」

なぜかエルブは好評だったものの、何かが足りないとかと言われる
レウトとアルスは言うまでもなく

レウト・アルス「うまい!!」

という一言で終わる

クラウド「（エルブが言った足りないってどういう事を言っていたんだ？）」

料理上手な彼にとっては疑問だった

次にホムラだ

ホムラ「俺特製のスペシャルホムラカレーだ!! たんと食ってくれ!!」

まずはラッシュから

ラッシュ「辛味がいいな…炎タイプの俺にはいい味だ」

ホムラ「まあ薬味とかも調整して考えた、いい味になってると思うぜ」

ラッシュは好評だ

しかしリュウオはというと

リュウオ「……」

リュウオは口に入れた途端に倒れた

これには

ラッシュ「親父!？」

その後リュウオは病院に搬送された

ホムラ「(あいつには特別まずいのを入れてやったぜ♪(黒))」

ホムラがリュウオを嫌っているためかホムラはまずいのをリュウオに入れてやった…恐ろしい(汗)

やむをえずにリュウオからガロに変更した

他の審査員の方(ガロを加えた)のを見てみよう

ガロ「うめえけど辛れえ…なくでもうめえよ」

ガロは辛いが好評のようだ

父(魔王)「辛い…おかわり」

父(魔王)はおかわりを要求

エルブ「いい辛さやなく…でもこれなんだか何かもの足りひん」

エルブは好評なのだが辛口なコメント

ホムラ「(そういえばクロウドのも何か足りないとか言われたが?)」

ホムラでもわからないようだった

こちら大食いな二人は

レウト・アルス「おかわり!!」

おかわりを要求

ホムラ「（まああいつらは喜んでいようだからいいか）」

とりあえずはホムラはおかわりを出した

……

次のサクラやレイラやアイリスやリリーなども評価は同じ…エルブが言うもの足りないという意味とは

リエナ「次は私ね♪」

リエナが作った料理はハンバーグだ

まずはラッシュ

ラッシュ「うまいな…まあおふくろのハンバーグはいつもいい味出してるからな」

ラッシュはおふくろの味を堪能した感じだ

他は

ガロ「たしかにいい味を出しているな…」

父（魔王） 「母さんの事を思い出すな…」

レウト・アルス 「うめえ！」

結構うまいと評価、エルブの方は

エルブ 「これはいい味やなく…それに愛情がある感じもあるで」

エルブが愛情と言う

リエナ 「いつもラツちゃんやリユちゃんやみんなのために愛情を込めて作ったの…ちよつとはりきっちゃって♪」

エルブ 「そうや…こういう愛情がこもった感じがいいんや…なのに対戦してはシャレにならへんしな」

エルブがリエナの料理に好評価する

最後はバルキリーだ

バルキリー 「こっちは漬物に刺身定食を作らせてもらった」

バルキリーはきゅうりやたくあんの漬物と刺身定食だ

ラツシュ 「愛情あるなくバルキリーのは」

ガロ 「たしかにそうだな…おかわりねえか？」

ガロはおかわりを要求

レウト・アルス「こっちもだ!!」

大食いコンビもおかわりを要求

父（魔王）「母さんの事を思い出す…」

二人の料理で父（魔王）はうわの空になる

エルブ「…リエナはんとバルキリーはんのは愛情がいいねん…」

エルブも好評価だ

……

セバス「では…結果を発表します!!」

結果は……

全員はリエナとバルキリーの半々に分かれた

ゼルス「どうやらこの勝負はリエナとバルキリーの勝ちだ!」

わああああああああああああああああああああああ!!

全員が歓声を上げる

サクラ「もう少し愛情込めて作っておかないとね…お母様にはまだまだおよばないわね」

サクラはオムライスを作ったようだが、エルブの一言でショックだったか

リエナ「サクラちゃんのオムライスはよかったわ…でも料理は愛情よね♪勝負した私もまだまだだわ」

リエナは自分の反省をする

レイラ「そうですわね…」

アイリス「スバルのためだけに集中しちゃった（汗）」

リリー「愛情か…：今度は愛情たっぷりには作らないとね」

ホムラ「愛情か…：俺も色々と学ばせてもらったな」

クラウド「そうだな…：俺もまだまだだな」

ホムラやクラウドも料理は愛情と胸に刻んだ

料理は愛情が大事

食べさせたい人の事を思えば

きっとその人の思いは届く

バトル162 お料理バトル〜大事なのは愛情〜（後書き）

ちよつとグダグダだけど（汗）

ラッシュ「まあよかったしな…」

俺は料理できない感じだけどね（汗）少しできる部分はあるけど

ホムラ「料理は努力だけじゃないんですね師匠」

そうだよ…今回はレウトの話になります…

レウト「俺？」

レウトの体に異変が！？それは一体！？

レウト「えっ！？俺どうなっちゃうの！？」

死ぬとかじゃないから安心しろ

レウト「ホッ…」

バトル163 副部長のダイエット(前書き)

ラッシュ「なんだ？このタイトルは(汗)」

今回はレウトに異変が起きます、それは…っとバトル163

ラッシュ「気合いれていくぜ!!」

バトル163 副部長のダイエット

朝

ホムラ「おいしいレウトゝ飯だぞ〜！」

ホムラがレウトを起こす

レウト「うゝんむにゃむにゃ…おっ！飯！」

レウトは一目散にリビングへ

ホムラ「飯の時だけは起きるんだなゝ（汗）」

ホムラは啞然とした

…

レウト「ごちそゝさゝん♪」

レウトは早く食べてしまった

ホムラ「はええゝな（汗）」

レウト「おう！なんだか食欲もいい感じだZE☆」

レウトは笑顔で両翼を羽ばたかせる

リオ「最近調子いいな〜レウトの奴」

赤き翼ラセ「たしかにそうだな…」

異世界ラセ「まあでもあいつらしいけどな〜」

そんなこんなで

バサッバサッ！

レウト「はあはあ…なんか体が重いような気がするな〜」

レウトはなぜか体が重いように感じたが」

ホムラ「レウト〜どうした？」

やっと空へと飛べたホムラがレウトに聞く

レウト「なんでもねえ〜よ♪行こうZE☆」

レウト達は学校へ

…

キンコンカンコン！

チャイムになる

ただいま3時限目だ

授業は数学だ

レウト「Z Z Z……」

先生「えーここはこうしてこうだ……」

ラッシュ「（なるほどな……それにしても……あいついねむりしすぎだな（汗）」

ラッシュの視線がレウトに向く

そこにはスヤスヤと眠る一匹の空の王者が（汗）

……

4時限目

レウト「Z Z Z……」

レウトは相変わらず眠っている

すると

ググウ……

何処からか音になる

ホムラ「（ん？今誰か腹が減ったのか？）」

すると

レウト「んあ？」

レウトが目を覚ます

レウト「（あゝなんか腹減ったなゝもうすぐで昼飯だなゝ早くなんねえゝのかなゝ）」

と、昼休みなどが来るのが楽しみになっていた

……

キーンコーンカーンコーン！

4時限目のチャイムが鳴った

すると

バサッ！

レウト「飯ー！！」

レウトが一目散に何処かへと向かう

ホムラ・ラッシュ「はやっ！？」

ホムラとラッシュが一斉にツッコむ

レイラ「料理対決以来食欲が増しているわね…」

サクラ「たしかにそうね…」

クラウド「レウトの食欲増したよな」

みんなレウトの食欲が増したことに驚く

そう、最近レウトの食欲が増えてきたのだった

今までの量は大体適応なほどなのだが、最近では大食いな感じの量を食べていたのだ

まあ普段とは変わらない感じなのだが…

……

レウト「食った食った♪」

レウトは満足そうになる

テラキオ「（なんかあいつ食欲増した感じが…太らなきゃいいが（汗）」

テラキオが心配になる

だがこれが…後に現実のものになろうとは……

……

それから1週間

ホムラ「レウトく朝だぞく！」

レウト「もう朝かよく…なんかだりいくな」

レウトが眠たそうに起きる

ホムラ「とりあえず朝飯ができてる」

レウト「マジ！☆」

レウトの目がキラキラする

レウトが一目散にリビングへ

…

ホムラ「さてと…行こうぜ」

そろそろ学校に行く

ホムラ「よっ！」

ホムラの背中からリオレウスの両翼が出てくる

ホムラ「それじゃあ行くぜ！」

ホムラはジャンプして空を飛んだ

後からリオに乗ったWラセが飛ぶ

その後からテラキオが走る

だがレウトは

レウト「よしっ！行くぜ！！」

レウトは両翼をバタつかせて飛んだ

レウト「はあはあ…なんか最近体重いな…」

レウトは体に違和感を覚えていた

……

キーンコーンカーンコーン！

お昼のチャイムが鳴る

ラッシュ「やっぱみんなで一緒だとうまいよな」

モモ「そうだよな」

ゴーシュ「こういう場とかは特にだよな」

ラッシュ達はバトル部の部室などで食事を取っている

最近になってバトル部でのメンバーで食事をする事が多くなった
なので部室とかでは色々とテーブルなどそれぞれ食事できるように
なっている

ブルー「たしかにな」

グリーン「そうっすね」

イエロー「みんなといれば楽しいしね♪」

シルバー「そうだな…」

プリムレンジャーの4人はそう言う

こういう一つ屋根の下でみんなと食事をするのがみんなとの交流などになる

すると

レウト「あ〜うまかった〜♪」

レウトが先に完食してしまう

ラッシュ「早いなレウト」

レウト「おう！最近よく食うからな〜♪」

レウトが笑顔にそう言う

すると

クラウド「なあレウトに言うけどな…お前なんか太った感じに思えるんだよな〜」

クラウドがそう言う

ラッシュ「たしかにそうだな…なんかお前…俺に太ったといいながら人のこと言えないぞ？」

レウト「へ？」

レウトがすつとんきゅうとなる

レイラ「そうよね…あんた最近たるんでるようだわ」

エルブ「まあ俺は相撲とかもやってるから気にしないやけど」

エルブは元々エンブオーの体型などは難しいものなので無縁なのが運動はしている感じだ

タツキ「そういわれてみればそうですね」

ブレイ「最近なんかお前メタボって感じだよな」

ブレイはからかうように言う

ルガー「たしかに…レウトお前最近太った感じだ…」

ホムラ「そういりゃあ…あいつの腹…モフモフしてプニプニした感じだな」

リザレ「あっ！たしかに太ってるよレウト」

バルキリー「言えてるな…」

そこでレウトは自分のお腹を見える

レウトのお腹はかなり出っ張っていた

レウト「うっ!…」

レウトはラッシュに言われたことに人の事が言えなかった

テラキオ「これはダイエットが必要だな…なあクラウド、お前のあの地獄の特訓とかいいか? あいつに?」

すると

クラウド「OK♪ちようどいじりたくなっただんだよね(黒)」

クラウドがニヤリとする

レウト「嫌な予感が(汗)」

レウトの嫌な予感が当ることに

…

放課後

レウト「ぜえ…ぜえ…」

レウトは汗びっしょりとなる

ただいまクロウドの地獄の特訓を受けている

クロウド「オラオラ！もつと気合入れろ！！」

テラキオ「徹底的にやせさせてやる！気合入れて覚悟決めろ！！」

レウト「しょんなこといったってえゝ（泣）」

レウトは涙目になる

リザレ「レウト（汗）」

アルス「まあ俺はなんかあまりそう感じねえけどなゝ」

シュナ「そりゃアルスは食べる量が多いからでしょ（汗）それに元が（汗）」

アルスは大食いのためか元々のカイリユーの体型のためか太った感じではない

まあかなりの胃袋だってことだろう

ラッシュ「とりあえず俺もやるか」

ラッシュも参戦する

モモ「俺も！」

ゴーシュ「よしっ！俺もだ！」

ゴウカザルコンビも行く

ホムラ「まああいつなら大丈夫だろうな…（本当は師匠とかみたい
に／＼／＼）」

ホムラはなぜか赤くなる

父（魔王）「よしっ！ピッケル！私達も行くぞ！」

ピッケル「勘弁してー！！（泣）」

父（魔王）に強引に引っ張られて強制的にクロウドの地獄特訓に付
き合わされるピッケル

…

それから2週間後

レウト「あゝなんだか体が軽いな♪」

レウトの腹は引っ込んでいった

あれから色々と食事制限などもあってなんとかやせたそうだ

まあ結構な地獄特訓のためかトレーニング量がすごく多い感じだっ
たので（汗）

ホムラ「まあ食事が戻ってもリバウンドしそうだな」（汗）」

リバウンドの不安もあるが

レウト「まあクラウドの地獄の特訓とか毎回受けているから俺は大丈夫だZ E ☆」

レウトは再び元の食欲旺盛に戻る

まあそれでもクラウドの地獄特訓は結局は続くものだった

レウト「今日も気合入れていくZ E ☆」

と、今日も空の王者は羽ばたいていく

バトル163 副部長のダイエット（後書き）

あゝある意味ネタ考えるのもねゝ（汗）

ラッシュ「まあでも結局はダイエットネタか（汗）」

ちようどクラウドさんの地獄特訓にはちようどいい感じだから（黒）

ラッシュ「おいおい（汗）」

バトル164 汗は漢の証と温かいぬくもり（前書き）

ラッシュ「作者（汗）最近タイトル変な風に思えるが（汗）」

気にしない気にしない、それじゃあバトル164

ラッシュ「熱いぜ!!」

バトル164 汗は漢の証と温かいぬくもり

3月でも外は寒い

だがそんな寒さなどお構いなしにバトル部は特訓する

ラッシュ「火炎放射!!」

がばね「バーストギアフレイム!!」

ラッシュとがばねのお互いの炎が相殺される

がばね「さすがにラッシュの炎はつええな」

ラッシュ「まだまだ、もう少し火力を出せば相殺されないとは思うけどな」

ラッシュも気合で特訓はしている

そのたびに汗もかいてくる

がばねも少しだが汗をかいていた

……

部活終了後

ラッシュ「ふう〜今日も終わったな」

レウト「クロウドの特訓でいい汗かいたZE☆」

レウトも汗をかいていた、しかも蒸気が頭に出ている

ラッシュ「そういえば芳香剤もなくなってきたな」

リザレ「なんか俺が頼んだ芳香剤もいつの間にか効力がなくなるんだよね（汗）」

ほとんど男子更衣室と女子更衣室で部屋は分けられているためか男子の方は特に汗臭い感じがあるためリザレが芳香剤を提案したが

リザレ「やっぱ芳香剤の方は学校でも限度があるから（汗）」

学校でも限度がある、もちろん金銭もあるため頼みである芳香剤でも買えなくなる場合がある

ラッシュ「まあ俺は気にしていないからな」

リザレ「でも…やっぱ換気とかもしないと空気に悪いし」

ラッシュ「まあリザレはアレだから無理しないように窓は開けてるけどな」

リザレ「まあ寒さはある程度はなんとか」

空気が悪いと色々ある

それでも部員のほとんどが汗をかいているのだ

モモ「まあよく言うじゃねえか、汗は漢おとこの勲章とか」

モモは冗談交じりに言う

ラッシュ「それはないが…まあ女子の方は汗止めのスプレーとか持参してるからな」

まあ女子などは色々匂いを気にしてしまうので汗止めスプレーはかならず持参する

ホムラ「まあそれでも夏とか特にやべえよな」

レウト「たしかにな」

ハハハハッと男子部員の笑い声が響く

リザレ「（俺もやっぱなれないといけないかもな…でも環境が環境だし…それに先輩がちゃんと換気とかしてくれるから…それに結構動くからストーブいらすかもね（汗）」

ちなみにバトル部の部室などにはストーブはあるがなぜか全員が汗をかいて体が熱くなるためかストーブなどはつけていない、そもそもストーブを使っているのは女子部員達だけだ

リザレ「（まあでもそれがバトル部だからかもね…俺はあまり運動とかだとバテるけど…でも先輩はそれでも男らしい感じだし、リーダーシップはいいから…こういう気遣いとかもしてくれるし…俺も少しはなじめたかな…）」

リザレはそんな3月の晴れた空を見る

春の訪れはいつくるのだろうか…

そんなこんなで

ラッシュ「リザレ行こうぜ」

リザレ「はい先輩」

ラグ（分身）「あっ！待って！」

キノガッサ（分身）「待ってくれよ」

ラッシュとリザレは男子更衣室を出た

……

リザレ「ふう…やっぱり寒いな…」

リザレは震えだす

ラッシュ「ほらよ」

ラッシュはリザレにココア（温かい缶）を差し出す

リザレ「あっ、先輩ありがとうございます」

リザレはココアを受け取り飲んだ

リザレ「(あったかい…)」

寒くても温かいぬくもりを感じるリザレ

リザレ「(なんだか温かくなってきたな…)」

リザレはマフラーなどを首に巻いている

リザレ「(少し汗が出ちゃった…でも汗をかくことも悪くないかもしれない…)」

ラッシュ「熱いか？」

ラッシュが聞いてきたが

リザレ「いえ…ココアありがとうございます」

リザレはラッシュにお礼を言う

そこに

ラグ(分身)「待って」

キノガッサ(分身)「おい！」

ラグ(分身)とキノガッサ(分身)だ

ラッシュ「ああ、ごめんな」

さらに

レウト「おっ！お前等って…」

ゴッ！

ラッシュ「お前この小説の方も考えろよ（怒）」

レウト「ごめん…」

レウトの頭にタンコブがついていた

ホムラ「先帰んなよなラッちゃん」

ホムラも後からついてきた

ラッシュ「すまないな」

ラッシュが苦笑いする

おだやかでぼのぼのな日

もうすぐ温かくなる春の風を

バトル164 汗は漢の証と温かいぬくもり（後書き）

スランプっぽいかも（汗）

ラッシュ「おいおい大丈夫なのか（汗）」

なんかぼのぼのにしちゃったけど

ラッシュ「まあでもこういうたまにぼのぼのも悪くねえな」

まありザレ君とラッシュのぼのぼのっぽい感じだけどどうかな？

ラッシュ「見た人次第だろ…次回どうするんだ？」

気分次第で授業風景など色々書くつもりだよ

ラッシュ「まあ色々出していない感じもあるからな」

バトルだけじゃないものもたまには出さないと

バトル165 授業は神経使う（前書き）

もう165までできてしまったかゝ

ラッシュ「早いな」

まあポケモンとモンハンのクロスどころかなぜか色んなキャラもいるけどねゝ（汗）

ラッシュ「まあとりあえずバトル165だ」

バトル165 授業は神経使う

キンコンカーンカーン

チャイムが鳴る

みんな席についている

レウト「（あゝ授業めんどくせー）」

レウトはあくびをする

ラッシュ「さてと…教科書はあるな」

リザレ「とりあえず教科書とノートは…ある」

ラッシュとリザレは教科書とノートを取り出す、ちなみになりの席でラッシュはサクラとリザレの間の席になる

ホムラ「とりあえず…教科書はあるな」

アオイ「ねえホムラ…私…」

アオイは困った表情をしていた

スッ

ホムラ「教科書がないんだろ？とりあえず俺の教科書見てやろうぜ、

どうせ俺と席となりだしな」

アオイ「ありがとう♪」

ホムラとアオイは教科書を互いに見る

モモ「とりあえずやっておかないとな」

ゴーシュ「そうだな」

ゴウカザルコンビは宿題をやっていた、もう少して終わりそうだ

他のみんなも教科書などを用意している

ガラッ！

そうこうしてるうちに先生が来た

ただいま4時限目だ

来たのはガル先生だ

ガル「それじゃあ授業始めるぞ、起立！」

ガル先生の号令で全員が立つ

ラッシュ「れい！」

ラッシュが号令をかけて全員がれいをして席についた

ガル「それじゃあ今日は教科書130ページからだ」

授業が開始された

……

ラッシュ「……」

カキカキ

ラッシュは黒板で書いている内容やガル先生の話している内容などをノートに書いている

一方

レウト「(ねみいゝ…ZZZ…)」

レウトは睡眠モードに入ってしまった

ちなみにガルの授業はモンスター学だ

モンスター学はその名の通りモンスターの生態やそれぞれのモンスターなどの特徴などの授業だ

ホムラ「(なるほどな…)」

アオイ「(色々あるのね)」

ホムラとアオイのカップルはノートに内容を書く

サクラ「(勉強になるわ)」

レイラ「(モンスター学って面白いのでいいですし)」

サクラもレイラも同様にノートに内容を書きうつす

モモ「(ねみい)」

ゴーシュ「(神経つかうんだよな)」

ゴウカザルコンビは眠たそうだ

アルス「(あゝめんどくせえ)」

シュナ「(このモンスターはそうなんだ…)」

アルスはめんどくさそうにあくびをする、シュナは興味深々に授業を聞きながらノートに書きうつす

スバル「(モンスターでもこう学べるのは嬉しいな)」

アイリス「(ふわぁゝ眠い)」

ウィリア「(やっぱモンスターだから学ぶこと多いからいいのよね)」

プリムラ「……」

リナト「(幻術使うのにやっぱモンスターの幻術が使えるようにはしたいしね)」

アスカ「（めんどくさいわ…あゝ早くお兄ちゃんに会いたいわ）」

サンナ「（こうだと眠くなるわ…）」

イシア「（こうなんだ…）」

ダイアナ「（眠いわ…）」

モンハン組は眠いものなどもあるが学ぶ者も多い

リリー「（へえ…）」

がばね「（なるほど）」

リリーとがばねは納得したような感じだ

ブルー「（こういうのもな…）」

イエロー「（なんか面白いことないかな…）」

シルバー「（…なるほど）」

グリーン「（モンスターにも色々あるんすね）」

プリムレンジャーはうわのそらだったり納得してる者もある

ラグ（分身）「（なるほど…こう…でもやっぱり眠いな…）」

キノガッサ（分身）「覚えるのめんどくせえ…な…あゝねみい…）」

絆の二人の分身は眠たそうだ

バルキリー「（ふむふむ）」

テラキオ「（あくかったり）」

ビリーブ「（なるほどね…）」

ブレイ「（あくなんか眠いな）」

ルガー「……」

タツキ「（ここはこうですね…）」

エルブ「（ふむふむそうなんやな）」

父（魔王）「Zzzz…」

ピッケル「（父さん！起きてよ！）」

赤き翼ラセ「（やっぱモンスターでもこういうことがあるんだ…）」

リオ・異世界ラセ「Zzzz…」

クラウド「（まあ俺にはこんなの簡単だな）」

余裕の者や寝ている者、納得する者もいる

そこに

ガル「寝てる奴ら！起きろ！！」

ガルはバインドボイスを出す

寝てる者達はすぐさま起きる

ガル「まったく…次寝たら宿題を増やすからな」

寝てた者「ええー！！」

とりあえず授業は進み

キーンコーンカーンコーン

ガル「今日はおしまいだ…寝てた者は今日宿題をやってもら
ういいな」

寝てた者達はがつくしとショックを受ける

あの後また眠りの世界へと導いてこっぴどくガル先生にしかられた

なんとか耐えた者までもいた

ラッシュ「とりあえずお昼にするか」

リザレ「そうですね」

他は昼食を食べに教室を出た

バトル165 授業は神経使う（後書き）

こういう風景もやっぱ出さないと

ラッシュ「まあでも色々というな〜でもガル先生の授業は寝てたら宿題のオンパレードだしな（汗）」

まあラッシュは寝なかったから大丈夫でしょ？

ラッシュ「まあな」

とりあえず次回ですが…何かリクエストあるのでしたら書きますので何かあればいいですが…一応未定です。

バトル166 期末テスト1 勉強会前（前書き）

ラッシュ「期末テストか」

まあリアル時間で行きたいとこだけど…色々あるから、まあとりあえずリクエストでテストというのがあったから期末テストをね

ラッシュ「まあテストというといつが不安だけどな（汗）」

まあそんなバトル166

ラッシュ「負けるな!!」

バトル166 期末テスト1 勉強会前

テストは突然の如くやってくる

イツクン「えゝもうすぐ期末テストだからこのテストで取れなかったら追試などになるからもうすぐ2年生になるけど留年にならないようにがんばろうね」

どうやら今学期での期末テストが終われば春休みとそして進級だ、だがテストはその進級に影響にも出るので特に成績が悪い者の進級が危ういところだ

……

放課後

ラッシュ「さてと、リザレは一緒に勉強しような」

リザレ「はい…俺もわからないことばかりですから先輩に勉強教わるのは嬉しいですし」

ラッシュの家に居候している者達は勉強会ができるため大体やっている

だが一番の問題はあのバカ龍であることを

レウト「はあ…」

テンションがいつもとはすごく下がってしまっているバカ龍ことリオレウスのレウト

ホムラ「うわぁーレウト、お前テンションすげえがた落ちしてるぞ（汗）」

そんなレウトを心配する親友である元リオレウスのホムラ

レウト「だってよく俺頭わりいゝし…全然わかんねえゝんだもん（泣）」

テンションだけでなく、涙目であった

1学期からこの3学期までのレウトの成績は悪く、追試などが多かった

ホムラ「はぁーなんでいつも成績悪いのかなんだよな（汗）」

そんなことに苦勞するホムラ

一緒に勉強しているが頭が悪いレウトはテストの時はわからずうわの空だったり、適当だったりもあった

ラッシュ「どうしたレウト？」

リザレ「もしかしてテストの事？」

そんなレウトを心配したのか、ラッシュとリザレが来た

ちなみにラッシュはほとんど成績がいい、リザレはラッシュと勉強

したおかげで成績は普通だ

レウトは頷いた

ラッシュ「じゃあ俺の家で泊まって勉強会するか？テストは3日後の月曜日に行うしな」

ホムラ「じゃあ俺も行くぜ」

ホムラも行くことになる

モモ「俺も暇だし行くぜ」

ゴーシュ「俺も」

モモとゴーシュのゴウカザルコンビも行くらしい

クラウド「まあ俺も大体わかってきたから教えるけどな」

レウト「マジすまねえ」

レウトはみんなに謝る

ラッシュ「お前のことだし、このままレウトが留年は嫌だからな」

ホムラ「そうだ！なら俺やラッちゃんもいるからな！俺もちゃんと教えてやるからよ」

レウト「ホムラ（泣）」

レウトはうれし泣きする

こうしてラッシュの家で期末テストの日まで勉強会をすることになった

バトル166 期末テスト1 勉強会前（後書き）

期末テスト…俺もあまりその勉強をやる気がなかったしね（汗）

ラッシュ「おいおい（汗）だから常識がわからないんだよ（汗）」

う……↑実は高校とか自宅学習してなく、テストとかが悪い

バトル167 期末テスト2 勉強会〜レウトがんばる〜(前書き)

え〜なんとかショックから立ち直りました、みなさんありがとうございます

ラッシュ「さて、続きだな」

そんなバカレウスのテストのいい点取る計画実行です!! バトル167

レウト「めげねえ!!」

バトル167 期末テスト2 勉強会〜レウトがんばる〜

ラッシュの家

そこにみんなが集まっていた

ラッシュ「とりあえず集まったがまずはテスト範囲だ…」

ラッシュはテスト範囲を説明した

ラッシュ「今までのもあるからかなりがんばらないといけないからな」

レウト「マジでやるのか（汗）」

レウトはタジタジする

モモ「しょうがねえじゃねえかよ、お前の点数結構低いし0点とかも取っているんだぜ？」

レウト「うっ…」

たしかにモモの言うとおりだ、レウトもかなりがんばらないとやばいのだから

とりあえずみんなは勉強を開始した

……

開始してから1分後

レウト「……」

レウトの頭から湯気が出てくる、レウトは目を回しながら教科書な
どを見ていた

ラッシュ「（やっぱあいつの場合は結構集中しているがいざとなれ
ば完全にわからなくなるみたいだな）」

ラッシュはレウトがテストで点数が悪い理由がわかっていた。それ
は覚えるものが膨大に多いため、レウトでは覚えるものが頭に入ら
ないというわけだ、それでレウトは混乱状態に陥り頭に湯気が出て
目をまわしているのだ

ホムラ「だー！お前な！！（怒）」

ホムラが怒るが、そこにラッシュが止める

ラッシュ「落ち着け、とりあえずあいつを落ち着かせたほうがいい」

ホムラ「あゝああごめんなラッシュちゃん」

とりあえずラッシュはレウトを落ち着かせる

ラグ（分身）はレウトの頭を冷やすためにハイドロポンプの威力を
弱らせた状態でレウトの頭を冷やす

クラウド「あいつの頭ってもはや単細胞なんじゃね？」

クラウドが教科書の内容をノートに書きながら言う

リザレ「でもどうしたらレウトがこういうわからない感じにならないようにすればいいのかな…」

たしかにリザレの言うとおり、レウト自体曖昧な勉強なので覚えるのにも時間がかかる、そこでラッシュは

ラッシュ「レウト：まずは落ち着け：これがバトルだと思っていけばいい：そう思わせて集中しろ」

ラッシュはレウトにアドバイスをかける

レウト「（バトルだと考えて？：あいつ何を言っているんだ？：とりあえずバトルだと思って：）」

レウトは集中した

レウトは頭の中でバトルの事を思い出す：

色んな思考がレウトの頭をよぎる

レウト「（そうだ：俺はこんなところでテストという名の相手に負けるわけにはいかねえんだ！！ならやってやるぜ！！）」

するとレウトは教科書を見て、ノートに教科書の内容などを書き写した

ホムラ「どうなってるんだ？」

ゴーシュ「急に変わってきた感じが」

たしかによく見ればレウトがそんな感じにみえる

ラッシュ「俺もよく考えていた：まあ遊んだりしたりもしたしな：
だけど集中するのならなにか例えたら：集中できるだろ？」

モモ「：なるほど！そういうことか！」

モモはわかったらしい

説明しよう

レウトがなぜこんなにも勉強に集中できるのかというと：例えというものだ、例えば自分がゲームなどに集中する：でも勉強ではどうしてもゲームの続きがしたいなどそういう思考ができてしまう、そこで勉強をゲームで例えれば、ゲーム感覚で勉強と思わなくなる、レウトの場合はバトルを思い出す。それによってバトルに集中するのと同じような感覚ができる、負けたくない気持ちが：レウトの心を揺れ動かすのだ

ブレイ「俺も負けてられねえ！！」

ブレイなどのメンバーも来ていたのだ、なのでブレイも例えるならスピードだ

ルガー「やれやれ：あいつの頭はどうかしている」

ルガーは呆れたように言いながらノートに教科書の内容を書き写している

リザレ「(ラッシュ先輩らしいな)」

クラウド「(俺も終わったらレウトに色々教えてやってやるか(黒))」

そんなこんなで彼等は勉強を始めた

……

3日後

レウト「ついにテストか…緊張するな」

レウトは緊張する

ラッシュ「誰も緊張はする、しっかりしていくぞ」

ラッシュ達は教室へと向かった

バトル167 期末テスト2 勉強会くレウトがんばるく(後書き)

俺も時に勘が鋭いときもあるんだよなく(汗)

ラッシュ「でも作者ってそんな頭悪いようには思えないしな」

そうかな？

ホムラ「師匠って勘がいいんじゃないですか？」

そういうわけじゃないけど(汗)次回はラッシュ達のテストです

バトル168 期末テスト3 テストと結果(前書き)

ようやくテストです。果たしてどうなるのか!?

レウト「そんなバトル168負けねえ!!」

バトル168 期末テスト3 テストと結果

イックン「それじゃあテストを始めるよ」

1時間目：まずはイックン先生の現代学：じきに言う国語だ

イックン「はじめ！」

ついにテストが始まった

レウト「(さてさて：まず最初の問題は：)」

※作者が作った問題なので実際作者本人は国語が苦手なので問題も
適当です

最初の問題はこう書かれていた

問1…次の空いているセリフを正しく書け

・ポケモン勝負の○○はタイプ○○！これだいじ！

・イッツ！○○○○○○○タイム！

・○○○は○○○のスパイス、なくすとあじけなくなっちゃうよ！

さらにこんな問題も

問4…次の漢字を正しくかなで書きなさい

・咄嗟

・逆鱗

・紅玉

・狩猟

・混沌

そんなこんなで現代学が終わった

レウト「（とりあえずは書けたが…あくでもバトルした感じでいいぜ…）」

レウトは少し調子がいいようだった

ラッシュ「（とりあえずはなんとかあったな…）」

ホムラ「（後は結果だけだな）」

ホムラは伊達メガネをかけながらそう思っている

…

2時間目は数学だが

レウト「（えーと…この問題は難しいな…なんだっけ?）」

ここでレウトがつまらせてしまう

レウト「（そういえば…教科書でもあったな…そうだ！これだ！）」

なんとか試行錯誤でレウトは問題を解いた

……

続けて2日目だ

ちなみにテストはそれぞれ2時間か3時間使って行うのだ、なので午前中で終わって後は家に帰ってから明日のテストなどの復習をするのだ

そんな問題をラッシュ達は解く、レウトも少しずつだがなんとかできるところまでがんばって解いた

そして……

テスト最終日

次の2時限目…教科は……

レウト「モンスター学か…俺大丈夫かな（汗）」

レウトは不安になるが

ラッシュ「心配するな…落ち着いてバトルの時のように集中すれば大丈夫だ」

ラッシュがアドバイスというか慰めをかける

レウト「ありがとなラッシュ」

レウトはラッシュにお礼を言う

ホムラ「ここまで来たのだから絶対にいい点取ろうなレウト！」

ホムラはレウトを励ます

レウト「おゝ心の友よゝ！（泣）」

レウトは泣きながらホムラを抱きつく

ホムラ「よゝしよゝし気合入れていこうぜ！」

レウト「よっしゃあ！！」

お互い気合を入れる

……

ガル「よゝしこれでテストの方はこれで終わりだな…最後はモンスタ―学だ！俺の問題を解けるかやってみろ！」

ガルが勢いよく言う、もはやこれは挑戦状をたたきつけられたような感じだ

何がともあれテストが始まった

そんなモンスター学の問題はこれだ

問1…リオレウスについての問題を解け

1. 弱点の属性を答えろ

2. 異名

3. 種は何か

4. 主に何処に現れるのか？

5. どういう攻撃が得意としているのか？

問2…亜種のモンスターについて答えなさい

1. ロアルドロスとその亜種の違いを述べよ

2. ベリオロスとその亜種の弱点を述べよ

3. ティガレックスとその亜種の違いを述べよ

問3…ポケモンについて答えよ

1. イッシュ地方で石で進化するポケモンを答えろ

2. ミジュマルのお腹についている貝の名前は

3. 季節によって姿が変わるポケモンは？

4. ブラックとホワイトでしか生息しないポケモンをブラックとホワイトに分けて答える

5. イッシュのドラゴンタイプのポケモンはいくつ

などの問題が出てきた

ラッシュ「（これはこうだな…）」

ラッシュはスラスラと解いていく

一方のレウトは

レウト「（最初のは俺自信の事わかってよかったぜ…だがガル先生も選択問題とか少し出してくれてもいいじゃねえかよ」（泣）」

レウトは涙目になりながらも問題を解く

実はガル先生の問題はすべて選択問題は一つもないのだ！？理由は自分で理解するからこそわかるものだとかガル先生は後に言った、だが一つでも選択問題あったほうがいいとは全員思うだろう（汗）

だが一人…すべてのテストで全然な者が一人いた…それは

アスカ「（あゝ！！わかんない！！お兄ちゃんいたら問題解けるのに…！それに何この問題！！全然わかんない！！）」

アスカだった、彼女はかなりのおバカだと今いない兄であるカクサスはそう言っていた。彼女自体むしろしゃしている

キーンコーンカーンコーン！

そんな中テストが終わった

……

レウト「あゝやっと終わった」

レウトの頭から湯気が出てきた

ラッシュ「おつかれ、そんなじゃあ今日はゆっくり休んでいくか」

ホムラ「おっ！そりゃいいな！」

モモ「あゝやっぱ疲れるよな」

ゴーシュ「後は結果だけだしよ」

クラウド「まあテストなんてちよろいちよろい」

クラウドは余裕のようだ、彼もかなり頭いいので大丈夫だろう

だが一人ダウンしている者がいた

アスカ「……」

アスカだ、かなり力尽きたようだ

サンナ「アスカ大丈夫」

イシア「姉さんも大丈夫なの？」

アイリス「あゝすんごく難しかったよお（泣）」

スバル「まあこんだけの問題をなくガル先生もイヤンガルルガなの
にすごいな…」

スバルはモンスターであるガル先生に感心する

みんないい結果が出るように…

そんなテストが終わって2日後

…

レウト「よっしゃあ！！」

レウトは喜んだ

レウトの点数を見ると

レウト

現代学…60

数学…50

社会…50

理科…42

英語…40

家庭…38

モンスター学…70

合計…350

ラッシュ「おっ！点数も0点じゃなくてよかったな」

レウト「おう！ラッシュのおかげだぜ！ありがとう！」

レウトはラッシュに感謝した

ホムラ「やったなレウト！！」

ホムラがレウトの頭をバシバシと叩いた

こうしてレウトはなんとか留年を免れた

だが一人ダメだったのがいた…それは…

アスカ「ガーン！」

アスカだった

スバル「結局は追試とか決定だな」

アイリス「私は英語の追試とかだけど（汗）でもスバルが色々教えてくれたからなんとか／＼／＼」

アイリスは赤くなる、どうやらスバルとかに教えてもらったようだ

スバル「正確には俺とサクラとレイラとだけどな（汗）」

さすが恋のキューピットの二人だ

ちなみにアスカの点数は

アスカ

現代学…0

数学…0

社会…0

理科…0

英語…0

家庭…0

モンスター学…10（ディアブロスの問題だけは）

合計…10

という結果だった

これは相当なものだろう（汗）

ちなみにラッシュの点数は

ラッシュ

現代学…95

数学…90

社会…90

理科…85

英語…90

家庭…89

モンスター学…100

合計…639

かなりの高成績となった

バトル168 期末テスト3 テストと結果(後書き)

レウト「よっしゃあ!!」

よかったね

ラッシュ「ようやくだな」

次回はついに2年生編へ突入します! 新たな新キャラなど姿を現していないキャラなどが登場しますのでお楽しみに!

バトル169 進級！バトル部の新たなスタート（前書き）

はい！ついに新章突入です！

ラッシュ「ついに2年生だな」

レウト「俺達の活躍はまだまだ続くZE☆」

そんなバトル169

ラッシュ・レウト「行くぜ！！」

らないぜ！ゴーシュ！早速バトルしようぜ！」

ゴーシュ「おう！もちろんだ！」

ルング「2年生になっても…がんばらないとな」

ホムラ「レウト！早速バトルしようぜ！」

レウト「ああ！もちろんだぜ！」

放課後、みんなバトルしたくてウズウズしている

サクラ「どうせだからリリー、バトルしましょう」

リリー「もちろん♪」

エルブ「どうせやから誰か、バトルせえへんか？」

タツキ「私も誰かとバトルしたいですね」

ブレイ「アバリ！また勝負だ！」

アバリ「俺と何回も勝負してるだろうピョン（汗）」

ルガー「俺も特訓でもするか」

クラウド「あゝやっぱ体は動かしてえゝからな」

ビリーブ「少し休んでから特訓しようカリザレ？」

リザレ「ありがとう……そうさせてもらおうよ」

アイリス「あゝなんかな」

スバル「そう言うな（汗）それにまさかアスカがな（汗）」

プリムラ
「結局：留年決定：」

リナト「そうだね（汗）」

サンナ「ほっ」

イシア 「たしかにね（汗）」

スバル達モンハン組は一人除いて進級できたようだ

アイリスはスバルの愛の力というか教えてもらったおかげでなんとか進級できた

だがおバカディアブロスアスカは全教科0点で結局留年、答えがほぼお兄ちゃんだったり、答えがまったく意味わからないものばかりで結局留年になってしまったのだった

アスカ「そんなあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああ
あああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?」

「泣」 ↑おバカな子の木霊が教室に響いた

ガル 「みんながんばっているな」

イックン「もう1年か…時は早いね」

ゼルス「だがこの1年があったからバトル部はあったんだと俺は思います」

この1年を2年目でどうなるのか

みんなそれぞれ特訓とバトルをすることになった

……

まず最初の相手は

モモ「久しぶりにゴーシュとバトルだ！」

ゴーシュ「あの頃からどう成長したのか楽しみだぜ！」

二人ともやる気マンマンだ

ムゲン「やる気あるな」

ユーム「…ここにきて…変わってきたな…」

リオーネ「そうだな…あいつらのおかげだからな」

バベル「たしかに」

アバリ「でもよかったと思うピョン、みんな仲間だピョン」

元スパーク団のメンバーはそう言う

あれからバトル部と一緒に……そしてあることがきっかけになって変わってきたのだ……みんな大きく成長している……みんながいたから……仲間がいる、ラッシュの働きや……みんなとの交流でみんな変わってきている

仲間がいるから……みんな駆け出せる、そんな思いだ

そんな中

モモ「全力で行くぜ！」

ゴーシュ「俺もだ！」

ゴウカザル同士のバトルが始まろうとしている

バトル169 進級！バトル部の新たなスタート（後書き）

今回は久しぶりのバトルです。まずはモモとゴーシュのゴウカザルコンビからです。

ラッシュ「俺のバトルとかは？」

まあラッシュだけじゃ意味ないから、他の人のバトルを書くよ…次回もお楽しみに

バトル170 モモVSゴーシュ 成長する二人の猿 (前書き)

今回は熱いです

モモ「おっ！気合はいるな！」

ゴーシュ「俺も負けないぜ！」

そんな二人のバトル170

モモ・ゴーシュ「行くぜ！！」

バトル170 モモVSゴーシュ 成長する二人の猿

ゼルス「それじゃあバトル開始だ!!」

ゼルスの合図と共にバトルが始まった

モモ「オーガフレイド!」

ゴーシュ「ジグザグフレイム!!」

互いの得意技が炸裂する、互いに吹っ飛んだが地面に振り切る

ゴーシュ「お前も強くなったじゃねえか♪」

モモ「お前もな!」

ニヤリと二人の口元が笑う

ラッシュ「お互いに互角になったな」

ラッシュは二人を観客席で見ながら言う

レウト「ゴーシュもあれからよくなってきたしな」

リオーネ「あいつと出会って…そしてバトル部に出会ってからあいつも…俺達も変わってきたしな」

パートナーであるリオーネはそう言う、彼は気づいている…ゴーシ

ユやみんな…自分も…元スパーク団だけどみんな罪を償って清算している。バトル部という名の償いの場所で

ライト「かぁー！！早く俺もやりてえー！！」

ライトはバトルしたいのかウズウズしている

ラッシュ「やっぱライトはウズウズしているんだな」

ラッシュは波動でライトがウズウズしているのを感じていた

ゴーシュ「マキシマムファイアー！！」

ゴーシュは炎を吐いてモモを炎で包み込んだ、そこから炎の弾を作り出してモモにダメージを与える

モモ「俺の必殺技パート2！その炎！利用させてもらうぜ！！チャージオーガ！！」

モモは周りの炎をまとってゴーシュに向かって突進してくる、炎は鬼を具現化していた

ゴーシュ「うわっ！？」

ゴーシュは油断して吹っ飛ばされるが、かろうじて体勢をたてなおした

ゴーシュ「やるじゃねえかよ！」

モモ「へへっ！お前もいい感じじゃねえか？」

お互い笑顔でそう言う

過去に色々あったこともあった…でも一度は悪の道に走った…でも出会いと再会があったから…彼はここまでやれた…罪もあるが彼は彼なりのバトルをしている。熱くさせる好敵手ライバルがいるのだから

ゴーシュ「ジグザグフレイムV2!!」

再びゴーシュはジグザグフレイムを繰り出した。だが今までのジグザグフレイムとは威力が大きくなっている

モモ「へっ!そうこねえとな!!オーガフレイドV2!!」

モモも負けじとオーガフレイドを繰り出す、オーガフレイドとジグザグフレイムがぶつかり合い、互いを吹っ飛ばす

二人はそれでも体勢をたてなおす

ラッシュ「あいつらの技もバージョンアップしているようだな」

サクラ「そうね、技もなんだか威力が増しているようね」

サクラの言うとおり、二人の技は威力が上がっていた…成長するたびにその威力は段々上がっていく

ホムラ「これはすごいぞ!!」

なぜかホムラはマイクを持って実況している

レイラ「私も二人の威力が上がっているのを感じますわ」

レウト「俺もだ」

リオ夫妻コンビは二人の技の威力が上がったのを感じていた。バトルの中では熟練度を上げて新しい技を覚えるもしくは習得する。同じ技を繰り返ししていくと技の威力も段々と成長して上がっていくのがある。技も進化していく。それでもバトルは熱いものだ

リオーネ「あいつも…みんな変わったのはバトル部のおかげだな…」

ラッシュ「そうだな…いきなり襲い掛かってきたが…色んな出会いもあったんだな…ゼウス校長と知り合っていなかったら…今頃どうなっていたんだろうな」

ゴーシュは昔、ゼウス校長と会っていた。それはモモとゴーシュがバトルしたときにゼウス校長の言葉でゴーシュは戦えた…スパーク団にいたときは…その言葉など忘れていた。でもゼウス校長に会って彼は思い出した…励ましてくれた恩師がいることを

ゴーシュ「フレイムファイト!!」

ゴーシュは両手両足を炎でまといパンチとキックの連続攻撃をしかける

モモ「俺の必殺技パート3! 鬼人炎舞!!」

モモは全体で炎をまとい素早い動きで蹴ったり殴ったりとした

お互いの技がそれぞれパンチとキックを防いで打ち消した

ゴーシュ「(くっ！あいつも強くなっているんだな...)」

モモ「(お前も強くなったんだな...)」

お互いにそう思ってきた。それはもうライバルとして認められたのだ：一度悪に染まっても：一度戦った者の思い出は消えない：戦ったライバルとの：

モモ「鬼火！そしてオーガトリガー！！」

モモは鬼火を繰り出して：それをマシンガンのようにゴーシュに向けて放つ

ゴーシュ「こっちも行くぜ！アンスタンフレイム！」

ゴーシュも炎の弾を数発放つ、お互いの攻撃が何発も打ち消していく

モモ「はああああ！！」

ゴーシュ「おおおお！！」

ここからモモとゴーシュの殴り合いが始まった

お互い殴ってはボロボロになる：バトルの原点は：拳にある：炎・格闘タイプで同じ種族の二人がこれほど熱く戦ったのは：こうしてライバルだから戦えることなのだから：

モモ「炎のパンチ！！」

ゴーシュ「こっちも炎のパンチだ!!」

お互いの拳から炎が出てきて互いに拳と拳とがぶつかり合う

それは互いに殴っては殴りの繰り返しだった…互いに傷つきながらもバトルは続く

……

ゴーシュ「はあ…はあ…」

モモ「はあ…はあ…」

お互い一步も譲らない展開だ、二人はすでにボロボロになっていた…これほどまでに長く戦ったのはすごかった

ラッシュ「あいつらもがんばるな…」

レウト「すげえ〜な〜ゴーシュも…モモも…」

がばね「（こうしてみんな成長しているんだな…俺もあいつと結婚してるし…子供も出来ている…俺も守るべき者のために…リリーも含めて守ってやろうと…俺も…あいつらと出会ってよかった）」

がばねは自分の思いをめぐらせながらそう思っている

ゴーシュ「さて…そろそろ決着^{けり}つけっか!」

モモ「そのつもりだ!!」

お互い技を出し合う

ゴーシュ「行くぜ！マキシマムブレイズ！！」

ゴーシュは炎をまとして突進してきた

モモ「俺も行くぜ！！俺の秘奥義！！ファイナル…オーガブレイカー！！！！」

モモも炎をまとった…炎は鬼のような形を作った

互いにぶつかり合う…そこからお互いパンチとキックの格闘戦へと突入した

ゴーシュ「オラァ！！」

モモ「ぐおらぁ！！」

互いに一歩も譲らない…だがモモはゴーシュから離れて

モモ「これで行くぜ！！はあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

モモの全力の鬼の炎がゴーシュに襲いかかってきた…炎の鬼は拳でゴーシュを殴ろうとした

ゴーシュ「負けるかああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ゴーシュは拳を受け止めるが…勢いがこっちの方が上だったためか

…炎が爆発し…二人を襲った

観客席で見ていたバトル部メンバーが目を覆い隠す

……

煙が晴れるとそこには…

ゴーシュ「……」

モモ「……」

ボロボロになった二人の姿だった……そして勝敗は決まった

ゴーシュ「くっ！……」

バタッ

ゴーシュは倒れてしまった

ゼルス「ゴーシュ戦闘不能！！モモの勝ちだ！！」

モモ「よっしゃあ！！」

モモは勝利の雄たけびをあげた

観客席から大歓声が広がる

モモはすぐにゴーシュに駆けつける

モモ「大丈夫か？」

モモが手を差し伸べた

ゴーシュ「ああ…負けちまったな…」

ゴーシュはモモの手を掴んで立ち上がる

ゴーシュ「俺も楽しかった…あの時は俺が勝ったが…次は負けないぜ♪」

モモ「俺もだ♪」

二人は拳と拳をぶつける

一方

ラッシュ「あいつらしいバトルだったな…」

ホムラ「やっぱ最高だな♪」

レウト「こうじゃないと俺達じゃないしな♪」

こんな二人のバトルを熱く思うバトル部メンバー

リオーネ「俺達も…ここに来てよかった…」

リオーネはそんな風に言った…もし敵としてだったら…今頃どうなっていたのだろうか…そんな感じだ

そしてまた…次のバトルが始まろうとしている

バトル170 モモVSゴーシュ 成長する二人の猿（後書き）

ラッシュ「今回も色々つながっているのがあったな」

まあ長く書くのって…結構なもんだしね（汗）↑やっとわかった作者

モモ「でも俺も勝ってよかったぜ！」

よかったね…さて次回は誰が対決するのかお楽しみに

バトル171 女同士のバトル〜サクラVSリリー〜（前書き）

今回は女性同士のバトルです

ラッシュ「サクラ出陣か」

まあこういう組み合わせだけどどうなるか…バトル171

サクラ「行くわよ！」

バトル171 女同士のバトル―サクラVSリリー―

再びバトルフィールド：そこにはリリーとサクラが立っていた

サクラ「リリー！あたしも本気で行くよ！」

リリー「あたしだって！」

もはや女の戦いが勃発しようとしている

ゼルス「それでは始め！」

ゼルスの試合開始の合図と共にリリーがいきなり攻めた

ラッシュ「リリーもサクラもどういう戦いになるのかだな」

がばね「リリーは来てから強くなった、だからこの勝負はどうなるかわからないが…」

リリーを心配するがばね

ホムラ「まあそれでも強いしな、あいつは」

レイラ「そうそう！でも私はサクラにがんばってほしいわ」

レウト「どうしてだ？」

レウトがレイラに質問する

レイラ「そりゃあ私の親友だからですわ」

話を戻してサクラとリリーのバトルに戻そう、リリーはそこから技を繰り出した

リリー「フラワーウィップ！そして唸りの鞭打ち（シェイクカット）！」

リリーは百合の花を走りながら引っこ抜いて鞭をしならせる

サクラ「守る！」

サクラは守るで防いだ

サクラ「赤の流星！」

リリーの頭上から赤い隕石が降り注ぐ

リリー「こんなの避けられるわ」

リリーはバックステップして隕石の範囲から逃れた

サクラ「まだまだこんなもんじゃないわ！…」

サクラは詠唱する

サクラ「流れよく溶岩よ！イラプション！」

地面から溶岩流がリリーを襲う

リリー「花卉の守り（フラワーガード）！」

リリーはフラワーガードで防いだ

サクラ「まだまだいくわよ！風の刃よ！切り裂け！エアスラスト！」

リリーの周囲に風の刃が包まれる、フラワーガードがそこで破られた

リリー「きゃあああっ！？」

リリーは風の刃を食らってしまった

リリー「やったわね！ローズショット！」

リリーの剣先からバラの花が出てきてサクラに向かって放つ

サクラ「火炎放射！」

サクラが火炎放射でバラの花を燃やした

リリー「すごい！サクラも結構やるわね♪」

サクラ「もちろんよ！でもあたしだって負けないわ！」

サクラは強気で言う、それが彼女らしい

サクラ「（今度はこれで行くわ！）ピコハン！」

するとリリーの頭上からピコピコハンマーが落ちてきた

ピコッ！

リリー「きゃっ！？…なんか…変な感じが…」

リリーは何か変な感覚に襲われた…まるで目が回るようなそんな感覚だった

サクラ「ピコハンは気絶の状態異常を発生する補助術よ、ブリザード！」

サクラは隙を見て氷の塊をリリーに向けて放った

リリー「きゃっ！？」

リリーは氷の塊を食らってしまった

サクラ「もう一度ピコハン！」

再びサクラはピコハンの術を発動する

リリー「させないわ！」

リリーは咄嗟に回避した

リリー「蔓の暴走！」
ウィップカーニバル

地面から無数の蔓がサクラに向かって襲う

サクラ「きゃっ！？」

サクラは食らってしまい蔓に捕まってしまった

サクラ「こんなの！火炎放射！」

サクラは火炎放射で蔓を燃やした

リリー「花の光嵐！」
フラワーライトストーム

花と光の嵐がサクラに襲い掛かる

サクラ「エラスラッシュ！」

サクラはエラスラッシュで嵐を打ち消した

がばね「すげえ〜（汗）」

ラッシュ「ここまでやるとはな（汗）」

女の戦いでここまで熱くなるとはとがばねとラッシュは感じていた

レイラ「がんばれ〜！！！」

レイラが応援する

ブレイ「まじですげえ〜な〜（汗）」

ルガー「まあそれでこそだと思いがな」

ブレイはタジタジ、ルガーは彼らしいつめたい態度で言う

ブルー「あのサクラというリザードン、ここまでリリーの対策をしてるとはな」

シルバー「ああ、よく見ていると見えるな」

ブルーとシルバーはサクラをよく見ていた、彼女もかなりの魔力な
ど色々と見ているように見えたからだ

再びバトルに戻そう

サクラ「バリアー！」

サクラは防御を上げる術を発動して防御を上げた

サクラ「さらにレジスト！」

サクラはレジストで状態異常などを受け付けなくなった

リリー「（これじゃあ気まぐれの花達フラワーバフュームが使えない！？）」

リリーの状態異常の技がこれできなくなった

サクラ「真紅の火球よ！これが炎を示す業爆の魔炎！エクスプロード！」

リリーの頭上から火球が降り注ぐ

リリー「花卉の守り（フラワーガード）！」

リリーは再びフラワーガードで防いだ

サクラ「やるわね…それじゃあこれで行くわ！」

サクラは術を詠唱する

リリー「ならあたしも！！これで行くわ！セイントフラワープロ
ション！！」

リリーは剣先で白い花が現れ巨大レーザーがサクラに向かって放た
れる

サクラ「聖なる焰の魔炎！聖なる癒しの水よ！暴風の風よ！強き大
地よ！今ここに！」

それぞれの属性がサクラに集まる

サクラ「すべての力に捧げる属性の心！行くわよ！秘奥義！エレメ
ンタルシャインロア！」

サクラは秘奥義を発動したのだ

ラッシュ「あいつ！秘奥義を覚えたのか！？」

ラッシュは驚いていた。まさかサクラが秘奥義を覚えることが

サクラの周りからオーロラが出てきて背景が火山や海…そして空と
大地が浮かぶ…リリーが放った技が打ち消された

リリー「そんな！？」

そして4つの属性の力がリリーに襲い掛かってきた

リリー「きゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああっ!!!!!!!!!!」
「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

リリーは食らってしまったため倒れた

ゼルス「リリー戦闘不能だ!」

こうして女のバトルはサクラに軍配が上がった

サクラ「リリー大丈夫?」

サクラが倒れてるリリーの元へ

リリー「負けちゃった、あたしもつとがんばらないと」

リリーは負けても笑顔だ

がばね「いいバトルだったな…リリーもあんなに笑顔になってるな
んてな」

ラッシュ「まあリリーも少し成長はしている…がんばればきつとな
…がばねもリリーのパートナーだから守るために強くなれよ」

ラッシュががばねにアドバイスをした

がばね「ありがとな、ラッシュ」

がばねはラッシュにお礼を言う

ラッシュ「ああ…」

バトル171 女同士のバトル〜サクラVSリリー〜（後書き）

サクラ「よかったわ〜」

レイラ「すごいわよサクラ！あなた秘奥義までやるなんて！」

サクラ「それでもあたしだってやれるのよ！」

まあサクラのは回復＋技の打ち消し＋全属性攻撃だし

ラッシュ「まさか覚えていたなんてな」

サクラ「あたしはこれでも習得するの大変だったんだから！」

まあまあ、バトルは後1戦もしくは2戦ぐらいで終わるかと思えます。それでは

バトル172 スピード対決？ブレイVSルガー（前書き）

ラッシュ「遅いぞ作者」

真面目に誰とバトルしようか迷ってた（汗）

ルガー「で？結果は俺とブレイか（汗）」

うん（汗）

ラッシュ「とりあえずバトル172」

ブレイ「燃えるぜ！！」

ルガーは構える

ブレイ「行くぞ！レイジングダッシュ！」

ブレイの足に火が灯り、ブレイの周りに火がまとう

ルガー「そうは行くか！ネガティブゲイト！」

ルガーは魔空間を発生させてブレイの動きを封じようとするが

ブレイ「させるか！」

ブレイはそれを見切って避けた

ルガー「くっ！」

ルガーはブレイの真上にジャンプして回避した

ルガー「ならアイスニードル！」

ルガーは氷のトゲを放つ

ルガー「さらにトゲ弾もだ！」

ルガーはトゲ弾を尻尾を振り回して放った

ブレイ「レイジングバリア！」

ブレイは炎をまとったバリアをはり、アイスニードルとトゲ弾を防

いだ、氷のトゲとトゲは燃えてしまった

ルガー「(あいつも一筋縄では効かない感じだな…)」

ルガーはブレイの何かを感じていた。

ルガー「(だが俺も負ける気はない!) 魔神黒斬^{まじんこくざん}!」

ルガーの尻尾が黒い霧を纏い、ブレイに斬りかかっていく

ブレイ「なら烈火舞乱拳!」

ブレイは両手と両足に炎をまとうてまるでスロージョウダンソウのようにパンチとキックを繰り返す

カキーン!!

両技がぶつかり相殺した

ブレイ「中々やるじゃねえかルガー♪さすが俺のスピードライバルだぜ!」

ブレイは笑顔でそう言うがルガーは

ルガー「フン! 誰もお前をライバルと認めてないぞ」

と、さらりと受け流した

ブレイ「なんだよつめてえくな♪ライバルはこうでないと燃え上がる炎の竜巻! フレアトルネード!」

ブレイは詠唱してフレアトルネードを繰り出す、この術は炎の竜巻を発生させる炎術だ

ルガー「弱点で攻めるほど甘くないぞ…黒翔斬^{こくしょうざん}！」

ルガーは尻尾を黒いオーラをまとい斬りつけた、フレアトルネードは斬りつけられた

ブレイ「あちゃーやっぱルガーはつええ〜な〜」

ブレイは笑顔を崩さずに態勢を整える

ルガー「フン…」

ルガーはツンツンとした態度をとるが…本当は嬉しいのだった

ルガー「(まっ…それもいいか…)」

ルガーはトゲ弾を放つ

ブレイ「こんなの避けられるぜ！」

ブレイは軽くトゲ弾を避けた、そこからジャンプして技を放つ

ブレイ「火炎放射！」

炎タイプの基本的な大技、火炎放射がルガーに迫る

ルガー「守る」

ルガーは守るで防ぐ

ルガー「夜^{やてん}天^{そうは}蒼波！」

ブレイ「紅蓮蒼波！」

黒いエネルギーと炎のエネルギーが相殺される

ブレイ「とりゃ！」

ルガー「フン！」

お互いのパンチとキック、尻尾とブレード状の爪が火花を散らす

ラッシュ「あいつらも…成長していったな」

レウト「あいつらもすごいな」

ラグ「あの二人…仲いいか悪いのわからないね」

ホムラ「あいつらも結構やるじゃねえか（汗）」

がばね「ある意味熱いな（汗）」

ブルー「逆に暑苦しい感じがするんだが」

シルバー「たしかに…金属だから溶けそうな感じだ」

シルバーはメタルプリムのためか溶けそうな感じだ

グリーン「リーダーみたいな感じも少しありそうッスね」

イエロー「たしかにね」

スバル「たしかに熱いな…特にブレイは」

エルブ「それがブレイはんってことや」

エルブはそう言う

クラウド「あいつらもよくやるな」

ゴーシュ「こういうのって燃えるな」

モモ「ブレイもここまでやれるなんてな…まるで生き生きしてるよ
うだな」

バルキリー「ルガーは嫌に思っているが…本当はな…素直じゃない
が」

テラキオ「まあこう熱くねえとな」

テラキオはガキ大将のような感じに座って見ている

ブレイ「オラァ！」

ルガー「はっ！」

二人の殴り合い？が激しくなっていく…ルガーにも傷がつき、ブレ

煙が包み、煙が収まると…そこには

ブレイ「……」

ルガー「……」

二人は倒れていた

ゼルス「両者戦闘不能!!」

二人の対決は引き分けに終わった

ブレイ「いやゝ引き分けで終わっちゃったかゝ悔しいぜ」

ブレイは倒れていても言うが、悔しい表情でなく…笑顔でだ

ルガー「フン…俺に引き分けなんてな…まあ俺もまだまだ強くならないとな」

対するルガーはあいかわらず素直じゃない感じに

ゼルス「（みんなここまで成長したな…そろそろだな…）」

ゼルスは何か考えていた

これが…後に…彼等にとってのことに！

バトル172 スピード対決？ブレイVSルガー（後書き）

ブレイ「やっぱライバルはルガーでねえとなく♪」

ルガー「おいおい（汗）」

ラッシュ「次回は何かの発表だが？」

重要なお知らせになるよ…それは話の中などで発表するから

バトル173 大会に向けて（前書き）

今回は短いです。しかも急展開です。ではバトル173…行くぜ！

バトル173 大会に向けて

ガル「集合!!」

ガル先生の号令でみんなが集まって並んだ

ガル「みんなそろったな…今日は解散する前にゼルスコーチからお知らせがある、ゼルスコーチ、どうぞ」

ゼルスが前に出た

ゼルス「みんな、今日の部活ごくろうだった…さてここでみんなにいい知らせだ」

ラッシュ「いい知らせ？」

レウト「一体何なんだ？」

部員達がざわめく

ゼルス「みんな静かにな…その知らせとは…今年の夏…とある場所で大きなバトル大会が開催されることになった」

ラッシュ「バトル大会!？」

ホムラ「ついに!？」

ラッシュやその他のみんなもザワザワしていた

ゼルス「バトル部にとっての大会となる。そこから様々な世界の強者達が集まってくる…夏の大会に向けて…しっかり休んでしっかり特訓するんだぞ！」

全員『はい！』

全員が返事をした

ゼルス「なおこの大会はチームでのバトルをするようなんだ…そこでみんなには誰かとチームを組む…もしくはそれぞれの世界から誰かと一緒に参加するかをみんなで決めてもらいたいのだ…期間は1週間後…それまでゆっくり考えてくれ」

与えられた期間1週間でするのか…それはライバルとして戦うか…一緒に戦うかだ

ゼルス「(どういう大会になるのかわからない…だが俺は信じているぞ)」

ゼルスは心の奥から彼等を信じていた。それは…1年のブランクがあったからこれたのだから

…

その頃…ここはとある学園、そこはかなり大きい学園であった

ここにもバトル部があるらしい…そんな時一匹のポケモンがいただが影で見えないのでというポケモンなのかわからない

????? 「ついに大会か…俺も暴れまくってやるぜ…本気でな…」

このポケモンが…後に大会で暴れることだろう…それは…ラッシュにとつて負けられない戦いになるとは…まだラッシュ達は知らない

大会まで残り3ヶ月

バトル173 大会に向けて（後書き）

え〜ここでお知らせです。今バトル部でコラボしているキャラでラッシュ達と一緒に戦うか：ライバルとして戦うかを決めてほしいのですが

期限は6月中とさせていただきます。後で活動報告などでわからない方やコラボしているキャラの作者さんにもメッセージなどで送らせていただきます。

さらに大会の参加したいキャラなども募集しております。

ルールは後ほど説明させていただきます。

さらに原作で知らないキャラなどはポケモンの姿としての登場とかもありますので、活動報告などご確認ください

以上です。

バトル174 それぞれの決意（前書き）

久しぶりのバトル部です！

大会出場のメッセージなど皆様からの応募ありがとうございました！

さて！今回はそれぞれの決意です。

彼らは何を決意するのか：迫る大会で彼らは何を考えているのか

物語も今回から終盤へと突入です！

ではバトル174！！貫け！己の決意を！！

バトル174 それぞれの決意

ゼルスが言った期限：

そしてそれは彼等を悩ませることにもなる……その残された期限の様子を見てみよう

……

決断まで残り7日夕方

ラッシュは一人帰っていた。他のみんなは先に帰って行っている。ラッシュは一人大会の事で考えていた。

ラッシュ「大会だどこにいるみんなの中でライバルになるってことになる……問題は他のみんながどうかなんだよな……」

それでもみんなはどうするのかだ……特にポケハン学園に来た者達だ

ラッシュ達バトル部は出場するのは大体は決まっている。それでも……

ラッシュ「俺は部長として……全力で戦うだけだ！」

ラッシュは決心する。たとえ敵だとしても彼等はライバルなのだから……そんなラッシュの前に一匹のポケモンが

ラッシュ「!?!」

ラッシュは驚いていた。目の前のポケモンはリザードンで色が黒色の体色だったのだ

????? 「久しぶりだな」

ニイツとその黒いリザードンは笑う、そこからラッシュに襲い掛かった

ラッシュ「ぐわっ!?!」

ラッシュは思わぬ不意打ちで腹を殴られた

ラッシュ「くっ!」

ラッシュは腹を押さえながら立つ

????? 「さすがはポケハン学園の部長だな」

ラッシュ「お前は…クロア!」

クロアと呼ばれた黒リザードンは「キシシと笑う」

クロア「まあこいつはほんの挨拶代わりだ『龍炎のラッシュ』…テメエとのバトル楽しみにしてるぜ…テメエをボコボコにしてな!」

クロアはラッシュを睨み…後ろを向いて去った

ラッシュ「あいつ…」

ラッシュは腹を押さえながらクロアの後を追わなかった：ただ黒いあいつを見つめて

……

夜

ラッシュは眠れなかった：一人ベットで何か考えているようだった
ラッシュ「（あいつも：参加するようだな：だがあの一発はかなり効いたな：相当のようだった：卑怯なことにならないければいいが）」

ラッシュは不安感を抱いていた。

ラッシュは昔、クロアと戦ったことがあった：

6年前のバトル大会

司会『さあ、ついに決勝戦！ここまで勝ち上がったのはなんと二匹のリザード！これはどんなバトルとなるのでしょうか！！さあまず優勝候補であるリザードのラッシュ選手！』

白煙があがり、そこからラッシュがバトルフィールドに登場した。

わあー！！っと会場は大歓声が響いた。

司会『対するは黒いリザード：クロア選手！！』

再び白煙があがり、ラッシュの反対の方から当時リザードだったク
ロアが登場した。

クロアは黒いオーラに包まれていた。相当強い相手だろう

「（なんだ？殺気が立ってるような感じだ…）」

ラッシュはクロアを見ると殺気を感じていた。油断はできない：勝てるのかと……

司会 『それでは！バトル大会ジュニア決勝！レディー…ファイト！』

戦いのコングが鳴った

クロア（リザード）「うおあああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「

クロアの叫びが木霊し、ラッシュに迫る……クロアは拳から炎を纏う……炎のパンチを繰り出そうとしているようだ

ガシツ！

だが炎のパンチをラッシュは一握りで掴む、だがクロアもラッシュを睨みながらも一方の拳でラッシュを殴ろうとする。

だが咄嗟にラッシュはもう一方の拳を掴む、これで両者両腕を使えない……しかしラッシュはクロアの腕を掴んだまま振り回した。

ぶんぶんと遠心力でまわる、これでもかとまわす…そしてそこからラッシュはジャンプした。そして背負い投げをした状態でクロアを真下に放り投げた、クロアは真下に叩き落され倒れた

フィールドは土煙が包み込む…煙が収まると

クロア「ま…まだだ…」

クロアはラッシュを睨みながら連続で炎のパンチを繰り出した。ラッシュはそれを見切って避けていく。

クロア「オラオラオラア!! 避けてんじゃねえ!!」

イライラしながらもクロアは攻撃した

ラッシュ「(なんてすごい攻撃なんだ…これじゃあ俺もやられちゃう!?)」

ラッシュは思考をしながら炎のパンチを避けていく。だがそれでも

ラッシュ「(俺は…負けねえ!!)」

ラッシュは目をキッと見開いた、そしてあの特技を繰り出した

ラッシュ「龍炎!!」

ラッシュの背後から炎の龍が現れた

クロア「なっ!?!」

クロアは咄嗟にバックステップで避けたがもう遅い、炎の龍はクロアを飲み込んだ

クロー「うわああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
ああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！？」

クロアは燃えてしまい、少しスズ焦げた体になり……倒れた

審判「クロア戦闘不能!!ラッシュの勝ち!!」

司会 『決まったああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああ！！バトル大
会ジュニア優勝は！！ラッシュ選手だ！！』

わあああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああつ！！！！！！！
 !!!!!!!!!!!?

観客席から大歓声が響いた

「ラッシュやったああ!!」

ラッシュは笑顔で喜んだ、なぜか思い出したのか倒れているクロア
の元へ

クロア 「くっ……くそっ！」

クロアは悔し涙を流す、そこにラツシュが来て手を差し伸べてくれた

ラッシュ「大丈夫か？」

だがクロアはラッシュを睨み、差し伸べた手をはたいた

クロア「うるせえ！！…見てろよ！！次からかならずテメエを倒してやるからな！！」

クロアはそう言い去った…

彼の背中が寂しそうに感じていた。

…

ラッシュ「（あの時から6年か…その後俺はそこから中学の時に不良の道を歩んでしまった…だが結局はあいつは会わなかった…今のあいつ…なんだか寂しかった感じだったな…6年前と同じ…苦しい感じもあった、波動から感じたのは…寂しさと悲しさ…あいつも何か理由があったんだろうな、波動を覚えてよかったかもしれないな）」

ラッシュは今のクロアの心の状態を波動で感じていた。

それは寂しさと…ラッシュに対する執念だった

ラッシュ「もし大会で当たった時には…あいつの目を覚まさせてやらないとな…」

ラッシュは殴られた腹を見た

ラッシュ「あいつの拳…かなりの重みを感じた…俺もがんばらないとな…」

そう言いながら彼は眠りについた

…

決断まで残り6日

オレは正直悩んでいた…

オレはバトルで戦えるかどうか…

リザレ「(大丈夫かな…)」

リザレは一人、夕暮れの公園でブランコに座っていた。

ギーコギーコとブランコを揺らす金属が擦りあった音がする。彼は悩んでいた…自分はバトルではみんなの役に立てるのか…

リザレ「(この大会でオレは…なんのために優勝したいんだろう…ラッシュ先輩とかは優勝したらどうなんだろう…)」

それだけ悩むような感じも…彼は何かの達成感というのを考えていた。自分は大会でがんばれるか…

リザレ「(と言っても…オレも不安はあるけどね)」

と、自分に言い聞かせる

でも…先輩も昨日から様子が変だったし、なんだろう…気合がさらに入っているような気がする。

きつと先輩も何かあるんだろうね…ならオレもできることをしてみよう、力は先輩にはおよばない…オレなら何ができる…なら先輩やみんなをサポートすればいいんだ

リザレ「そろそろ帰ろうかな…」

リザレは急いでラッシュの家へと向かった

……

リザレ「ただいま！」

ラッシュ「おっ！リザレ遅かったな」

ラッシュがリザレを玄関で迎える

リザレ「すみません、色々考えていて」

ラッシュ「大会とかの事か？」

さすが先輩…波動っているのはすごいな〜やっぱ

リザレ「はい…でも残り6日ぐらいで言いますよ…オレの決心を」

そう言い自分の部屋へと向かう

ラッシュ「（リザレ：きつとあいつも何か変われることや、色々辛いかもしれないな…あいつもきつと答えが見つかったかもしれないな…その答えは自分自身にある。俺は信じてるぜ）」

と、ラッシュも夕食の準備をしにキッチンへと戻った、ちょうどリエナが料理しているところだった

その後リュウオが必要以上にリザレに抱きつこうとするがラッシュの鉄拳制裁でリュウオは頭にたんこぶをついてしまった。

……

時間を戻して残り6日の昼頃

俺はあいつとバトルするのか…

俺はまだまだ弱い…

師匠にも稽古つけても俺にはあいつには到底かなわない感じもある。

でも……

俺にとってのあいつは……

ホムラ「あゝどうツスかな〜」

ホムラは今回の大会でどうするか考えていた。

ポカポカとした陽気な天気だ、もはや忘れるような気分だ…でも彼

はそんな気分ではなかった、ちなみにお昼を食べたばかりだ

ホムラ「（俺は結局どうしたらいいんだ…）」

そう考えてる時、何処からか1枚の手紙が来た

ホムラ「手紙？誰からだ？」

あて先はホムラの名前がついていた。

ホムラは早速その手紙を確認した。そこにはこう書かれていた…

ホムラへ

こっちはどうだア！？実は大会で俺達も参加するつもりなんだぜエ！お前も俺達の方で参加しろよオ！あっそうかバトル部の方での参加だったんだなア！でも俺達は参加するぜエ！じゃあ決まったら連絡くれなア！

差出人はゴウと書かれていた。

ホムラ「あいつらも元気みたいだな…なら俺も特訓してラッシュに勝てるようにしないとな！それに師匠とかもきつと！師匠のところの特訓させておくか…戻ってあいつらに手紙書くか」

そう言ってホムラは教室へ

……

教室に入ったホムラは早速手紙を書いた、するとそこから

アオイ「ホムラ」

アオイだ

ホムラ「おっ！アオイ、どうしたんだ？」

アオイ「ホムラ、機嫌いいからどうしたんだろうと思ってね」

ホムラ「ああ、別の世界にいる俺の狩友からなんだ…まあどっちも結構個性ある奴等ばかりだけどな（汗）」

と、苦笑して言う

アオイ「そうなんだ…ねえホムラはどうするの？大会は？」

アオイは率直にホムラに言う

ホムラ「ああ、俺の答えは…」

……

アオイ「…それじゃあホムラは…」

ホムラ「すまないな…でもアオイ…俺もあいつには勝ちたいんだ、バトル部メンバーとしてじゃなく…ライバルとして」

と、ホムラは言った…この意味とは

アオイ「そう…じゃあその時は」

ホムラ「ああ…でもアオイとは戦わない…俺にはもう」

アオイ「そうだね…ねえどうせだから今日は何処か寄って行こう」

アオイが何処かへ行こうと誘う

ホムラ「ああ…そうだな」

ホムラはそれを承諾した。

元気にしてっか？

こっちは元気にやってるぜ

それで答えなんだが…俺は…

……というわけだ、また連絡する…それじゃあな

ホムラ

師匠へ

実はお願いがあって手紙を書きました。

俺を強くしてください

もしできるのなら連絡してください

俺！もっと強くなりたいんです！

なのでよろしくお願いします！

ホムラ

……

同日昼……

僕は分身……

僕はもう一人の僕と戦うのか……

最近はまだ一人の僕も段々と強くなっていた。

それはラッシュ達のおかげ……

でも僕は分身……

僕はどうしたらいいんだろう……

ラグ「はあゝ…大会参加かあゝ…もう一人の僕も参加するのかな…
そういえばキノガッサはもう一人の僕の方に入るみたいだし…」

分身のラグは悩んでいた。実は大会には本物のラグがいるチーム絆も参加するようだ、もちろんキノガッサもチーム絆の一員のためライバルとして戦うことになる。しかし分身のラグはどっちの方で戦うのか迷っていた。本物の自分と共に戦うか…それとも本物と戦うのかを…そんな時

タツキ「ラグ？何か悩んでいるのですか？」

タツキだった、彼はラグのライバルでバトル部の一員…そんな彼がラグに近寄る

ラグ「う…うん…僕はもうしたらいんだろう…」

ラグはタツキに自分の迷いや悩みを話した。

数分後、話は一段落し…タツキが口を開く

タツキ「たとえ分身でも…あなたはバトル部の一員ですよ、本物のラグもきつと楽しみにしていますよ。そうじゃないと大会で自分対自分が実現できるじゃないですか…大丈夫…僕も本物のラグの実力をこの目で確かめたいんです。あなたと一緒にパワーアップしたラグの力を…」

タツキは笑っていた。彼は楽しみができていたのだ…本物と戦える

ことができるのだから

タツキ「それでもきつと本物のラグは嬉しいと思いますよ…」

そっか…

そうだよね…

僕は僕だから

なら僕は…

…

残り5日の昼

俺はリリーを守るために強くなりたい…それがバトル部に入ったきっかけだ

俺にはリリーだけでなく…

フォック

俺の妻を守るように…

俺には3つも守りたい者がいる。

リリーとフォックとフウガ

この大会で俺は…

がばね「（リリーの方もバトル部として参加…ブルー達は別の方で参加みたいだしな）」

がばねは一人校舎の屋上にいた。

彼には守るべき者が増えた

それは色々とあったのだった

彼は結婚して子供がいる。そして大切な相棒がいる

彼自身…守れるような強さがあるのか…そしてこの大会で何を得るのかを

がばね「（だけど…俺は強くなったのか…）」

彼は自分が強くなったのかを考えていた。

バトル部になじんできてからがばねを親しむメンバーもいて…ライバルも増えていった

背中に開いたバラの花が陽の光を浴びて輝かしくなる。彼は龍と植物の組み合わせの龍だ…でもその龍を愛している者もいる。闇はあっても…彼は光というものがあるのだから

がばね「（でも俺はそれでも守れるように強くなった…なら大会で見せてやらないとな…この大会で何か得られたら…きつと…）」

俺はドラゴンだ

だけど…

俺には守りたい者がいる。

守れるように…

俺は…

強くなったことを証明してみせる！！

…

残り5日夕方

ハンターとして俺は…

でも俺は決断した

またラッシュと戦えることを

スバル「綺麗だな」

スバルは一人夕日を見ていた。彼はすでに決断した…それはバトル部ともう一度戦うことだった、理由は一つ…ラッシュとは実は前に戦ったのだが引き分けで終わってしまったのだった。なので今回の大会でまた戦おうと彼は決意して、一緒に来たアイリス達とチーム

で参加することにしたのだ

スバル「（こうして一人だとゆっくりできるな…今まではアイリス達に色々されまくりでゆっくりできなかったが…たまにはこうした方がいいしな…この夕日は真っ赤に染まっているな…俺の世界と比べたらどっちが綺麗なんだろう…）」

そう考えるスバル…

俺はあいつともう一度…

大会で絶対に決着をつける！

…

残り4日の夕方

俺はあいつと再会して再びバトルができた

俺はもう番長じゃない…

俺はバトル部の一員だ！！

ゼルス「残り4日だ、それまでに答えを見つけてくれ！それでは解散！！」

バトル部の練習が終わり、みんなが更衣室へ行き帰りの準備をした。

ラッシュ「モモ、今日は一緒に帰るか？」

モモ「あゝわりい、俺はちよつと用事あつからすまねえな」

ラッシュ「そうか、じゃあ俺達は帰るぜ」

ラッシュと他のメンバーは帰っていった

残ったモモは一人部室のトレーニングルームへ

……

トレーニングルームはがらんとしていた。そりゃあみんなが帰った後なのだから誰もいないのだ：そんな中、トレーニングルームでモモは残ってトレーニングをした。

サンドバックでパンチや蹴りなど様々な特訓をした。モモの汗が飛び散る、それはもう番長ではない自分なのだから

それから1時間

モモ「もうこんな時間か：そろそろ帰っか」

モモは急いで帰りの仕度をして学校を出た

……

ここはポケハン町が一望できる高台、そこにモモはねっころがる

モモ「あゝ疲れちゃったな」

背伸びをして夜空を見た、空は星が数個もでき…輝いていた。

モモ「バトル部に入ってから俺も段々なじんできたな…」

するとモモはかばんからある物を取り出した。それはお守りだった…赤色で炎を模ったお守りだった

モモ「おふくろ…親父…俺には仲間ができたぜ…親父の言ってることがわかった気がする」

モモは昔の事を思い出した。

…

????『バツキヤーロ!!』

モモ『いてえ!!何すんだ!!クソ親父!!』

当時のモモはまだモウカザルだった、彼は強くはなったが親父は頑固だった

だがそれでもモモの事を思っで殴られたり…時には喧嘩もした。この時のモモはまだ中学に上がったばかりだった

だがここを離れる時

モモ父『出て行け!!テメエはもう俺の息子じゃねえ!!』

モモ（モウカザル）『ああ！もうこんな家出てってやるよ！！』

モモはそう言って家から出てった

彼はそれから不良となり：そして番長となった、その二つ名が『鬼炎のモモ』という名だった。鬼のような炎：そしてなにより鬼のような力を持っていたということは噂にもなっていた。

だが彼にはある物があつた、それは

……

モモ「あの時俺は親父と喧嘩して家を出てった：そして中身は生活費と：こいつが入っていた」

そう、お守りだ：母親が彼がいつか巣立っていくことを思い作ったのだろう：

モモ「ありがとなおふくろ：学校卒業したら、俺：立派になって帰ってくるからな！待ってるよ！クソ親父！！」

モモは夜空に向かって叫んだ、遠い地にいる両親に向かって

……

残り3日

俺はあいつの決心に答えるしかなかった

でもあいつと当たったその時は：

俺はお前とバトルする！

ライバルとして

レウト「うめえ〜な〜♪」

ホムラ「ありがとな…」

レウトはホムラの決心を聞いた。それでも彼はホムラの事を実の兄弟に思えていた…たとえ戦うことになっても…心の中ではライバルという四文字が

レウト「あゝホムラの料理が食えるのは後何回だろうな」

ホムラ「俺が修行に行ってる間は自分で作れよ」

と、ホムラは苦笑して言う

レウト「やってやるよ！できないと俺の飯が抜きになるしな〜」

レウトは料理の事で色々と考えていた。

なぜかというところ…ホムラの決心がついたからだ

だがそれでも

レウト「お前と離れていても…俺はがんばるからな」

ホムラ「その時は大会で会おうな」

と、お互い手（レウトは翼）で握手した

……

残り2日の夕方

ルガー「大会もどういう戦いになるかだな」

ブレイ「でも俺達はそれでもやる！絶対！」

ルガーとブレイは部活の帰りだった、ただ今回は一緒に帰ることに
なっていた。だが珍しくルガーは断ることもなくブレイと一緒にだ

ブレイ「あくでも他の世界に来たみんなはどうなんだろうな」

ルガー「それはあいつら自体だ：戦うことになったら：ライバルに
なるだろうな」

そう、他の世界に来た彼らはどういう決心をするのかだ

ブレイ「まあでも俺はスピードなら負けないぜ♪目指すは優勝ある
のみ！！」

スビシツと指を指して決めるブレイ

ルガー「呆れるな…」

ルガーはそんなブレイを無視して先に行く

ブレイ「っておい！？置いていくなよー！」

ブレイもルガーの後を追った

……

バトル大会か…

あたしの魔法でラッシュ達を支えることができるのか…

それでもあたしは…

私もこれまでの特訓の成果を見せる時…

負けた時もありましたが…私はそれでも

『陸の女王』…それが私の二つ名ですもの

残り2日の夕方

サクラとレイラは歩いていた。

サクラ「大会だけでなく…ゼルスコーチの言った期限も近くなってきたわ」

レイラ「そうですね…私達も一緒にがんばりましょう」

お互い励ましあい…そして誓い合う

サクラ「そうね…あたしはレイラやみんながいるもの！ここでネガティブになるわけにはいかないわ！」

レイラ「それでこそですわ…サクラ、私もこのバトル部で色んなことを学ばせてもらいました」

レイラは静かに話す

レイラ「最初はバトルは野蛮なものだと思っていました。でも段々バトルを見たり、したりしてから自然となれてきました。ラブと戦った時は私油断していました」

レイラは前にあさポケ野球部のラブとバトルをした、だが一撃必殺の技で敗北してしまった

サクラ「そうね、あたしもラッシュと一緒に行った大会でがんばってきたのに負けちゃったしね」

サクラはラッシュと一緒に行ったバトル大会で惜しくも優勝を逃してしまった

サクラ「でも私達は」

レイラ「バトル部の一員…大会でも全力でがんばりましょう！」

二人はそう決心する。

炎の龍と陸の女王…二人の龍の絆を

……

そうして向かえた1週間

部活終了間近、みんなは集まっていた。

ゼルス「みんなそろったな…さてみんなの決意を聞きたい…別チームで参加する者！その者は手を上げてくれ」

すると手を上げたのはホムラ、キノガッサ、スバル達モンハン組、プリムレンジャーの四人、ゴーシュ達元スパーク団だ

ゼルス「ということは…ライバルとして戦うか…その覚悟…大会で待ってるぞ」

手を上げた者達『はい！』

ライバルとして戦う者達、彼らはそれでも戦うライバルがいるから戦う…たとえばバトル部みんなが相手でも

ゼルス「次に大会に参加しない者は手をあげろ！」

手を上げたのはルング、アルス、シュナ、御羅、Wラセとリオ、ライト、父（魔王）、ピッケルの10人だ

ルング「兄貴：俺は仲間のところに帰ろうと思います。俺もまだやるべきことがあります」

ルングはそう言った

彼には待っている仲間がいる。だが連絡もないため何かあったんだろうと彼は察した

ゼルス「そうか…お前といた時間は楽しかったぞ…また何かあったら来い、俺はいつでもいるからな」

ルング「ああ、ラッシュも世話になったな」

ラッシュ「元気でな…仲間を助けてやってくれ」

ルングは「ああ」と一言言って去った

アルス「俺達もここを去るぜ…名残惜しいが俺の事とかがよくわからなかったしな」

シュナ「別の場所を調べようと思っているの…みんな元気でね」

ラッシュ「またいつか来てくれな…二人とも」

二人は「うん」と言い、シュナはアルスの背中に乗ってアルスは空を飛んだ…上へ上へと彼らは去って行った

御羅「俺もこの学校はもう支配高にした感じだし…楽しかったぜ…またな」

ラッシュ「色々無理するなよ」

御羅は後ろを向いて歩いて行った…背中が一瞬輝いて見えるような感じがラッシュ達には感じていた。

ハンターラセ「僕も行くよ…みんな元気で」

リオ「俺達はいつでも繋がっている。大会で優勝できることを期待してるぜ」

ハンターラセはリオの背中にまたがり、リオは両翼をホバリングして空を飛んだ

ハンターラセ「さようなら!!」

二人の姿はまるで龍使いのような感じだった…二人の姿が上空で見えなくなった

異世界ラセ「じゃあ俺も行くよ…お世話になったぜ…それじゃあな」

異世界のラセも魔法陣を組んで魔法陣の中へと消えて行った

父（魔王）「それじゃあ俺達はこれで…バトル部が優勝できることを!!」

ピッケル「ちよっ!?!」

父（魔王）はピッケルの腕を掴んでそのままひとつとびした、ピッケルの叫び声が聞こえたのは気にしない…

ライト「俺も行くぜ、仲間が待ってるし…それに本当は大会に参加してえけどあいにく色々優先したいのがあってな…じゃあな!!」

ライトは何時の間にか用意されていたマイ気球に乗って空を飛んで

行った、彼の着けているゴーグルが光を反射し、夕焼けを輝かせた
ゼルス「それじゃあ最後に…バトル部として一緒に大会に出場する
者は手をあげてくれ！」

それぞれ手を上げた…それはほぼ全員だがイッシュの準伝説の3匹
は上げなかった

リザレ「（オレはオレに出来ることをやるまで！ビリーブはたぶん
応援かもしれないけど…俺がんばるよ）」

ラグ「（僕は分身でもバトル部の一員だから！僕は戦う！）」

アオイ「（レウトががんばるならあたしもがんばる！）」

タツキ「（私達はそれでも！）」

エルブ「（出来ることをやるだけや！）」

モモ「（最初からクライマックスだぜ！！）」

ブレイ「（燃えるぜ！！）」

ルガー「（油断はできないがそれでも…）」

レイラ「（みんなの絆を深めますわ！）」

サクラ「（あたしたちだって！）」

レウト「俺達は！」

ラッシュ「（ポケハン学園バトル部だ！！）」

みんなの決意は固まった

ゼルス「それじゃあみんなそれぞれ特訓を明日からしてくれ！チームとして戦う者…俺達は待ってるぞ！大会で！」

ガル「特訓の成果を見せてもらおうぞ！」

イックン「たとえ離れていても君達はバトル部のメンバーだから、がんばってね」

顧問と副顧問の二人がそう言う

ゼルス「それじゃあ解散！！」

みんなは解散した。

それぞれの決意

それぞれの道

彼らが戦う時が…来るだろう…

それが運命かもしれない…だがそれでも彼らはライバル同士

きつと戦うだろう…

最高の舞台で!!

……

帰り道

ホムラ「今度は俺とはライバルになるな」

ラッシュ「ホムラのチームか…今度紹介してくれよ」

ホムラ「ああ、そんな時は紹介してやるよ…まあそれぞれ個性あるけどな」

みんなは一緒に歩いていた。

リザレ「オレも…がんばってみるよ」

ラッシュ「でも無理するなよりザレ」

ホムラ「そうだぞ！無理はするなよりザレ」

リザレ「ありがとう…でもオレはラッシュ先輩などをサポートするよ…オレはバトル部の一員だから」

リザレはそう言う

サクラ「あたしたちも負けないわ！」

レイラ「そうですわ！優勝したい気持ちはみんな同じですし」

仲良しの二人はそう言う：だがラッシュだけは違った

ラッシュ「（みんなそういう気持ちだろうな：だが俺はあいつの心の闇を振り払う：たとえば俺がボロボロになっても全力で！）」

クロア：ラッシュの最大のライバルである：ラッシュはクロアを止めることができるのか：

いや彼なら大丈夫だろう：

彼には仲間がいるのだから

たとえ遠く離れていても：絆は断ち切れないのだから、それが：ポケハン学園バトル部なのだから！

バトル174 それぞれの決意（後書き）

えゝまさか10000文字を書いてしまいました（汗）

ラッシュ「お疲れ作者」

まあこれで準備はできた…後は次回からの特訓から大会までどうつなげるか…

ラッシュ「大丈夫なのか（汗）なんか不安だが（汗）」

そして今回連絡のなかった方々…勝手に参加させるわけにはいかなのでコラボの方を終了させていただきました。すみません…そしてコラボしてくれたコトハさん、わたぬけさん、UMAさん、神月ラセ先生、守り人さん、sibugakiさん、ありがとうございました！！

バトル175 それぞれの意地（前書き）

さて、ついにそれぞれの特訓開始です！

ではバトル175

ラッシュ「行くぜ！…って最近手抜きとかしてねえか作者？（汗）」

大人の事情だ

ラッシュ「なわけねえだろ（汗）」

バトル175 それぞれの意地

ラッシュ「100!1!2!」

ラッシュは腹筋をしていた。それも腹には重りがついていてかなりの特訓だ…だがラッシュはそれでもやっていく。

再戦するある者と

一方

ホムラ「ここだな」

ラッシュ達と戦うことになったホムラは、作者でもあるフォックの元を訪ねていた。

ホムラ「師匠!ホムラです!特訓お願いします!!」

ホムラは玄関で頭を下げた、すると玄関のドアが開いた

出てきたのは作者のフォックだ

フォック「あつ、ホムラ君いらっしやい…中に入って」

ホムラ「お邪魔します!」

ホムラはフォックの家の中へと入っていった」

……

ここはフォックの家のトレーニングルーム

ホムラ「師匠！稽古よろしくお願いします！」

ホムラは頭を下げた

フォック「わかった！それじゃあかかってきて！」

フォックは構えた、しかも武器は木刀だ

もちろんホムラも武器は木刀…それも二つもだ

ホムラの場合は双剣みたいに二刀流を使うため、木刀を二つつかう…しかもこの木刀は火の耐性があるので燃えないようになっている。

そんな中ホムラの特訓が始まった

……

一方別の場所では

レウト「天空龍撃！」

レウトは一人、空を飛んで龍の波動を繰り出した

どうやら技を作ったりと特訓しているようだ

レウト「うーん、もう少し動きを考えたほうがいいかもな」

バカなところはあるレウト…だが彼はバトル部の副部長、それでも考えないと副部長として…空の王者としてのプライドもあるのだから

さらにレウトがいる高台から離れた場所では

リザレ「ナースサークレーション！」

リザレが練習をしていた。もちろんビリーブもだ

ビリーブ「いい感じだね…疲れない？」

リザレ「大丈夫だよ…少しクタクタするけど」

リザレは少しクタクタどころかフラフラしているように見える

ビリーブ「君の場合は長期戦には難しいから短期戦でなんとかしないといけないしね…今フラフラしているから休憩した方がいいよ、体力とかの体調管理も大会では影響を受けるからね…それに大会だと会場の観客などの影響でリザレは人がいるところだと呼吸とかにも影響を受けるからしっかりと休憩は必要だよ」

リザレ「ありがとう…それじゃあお言葉に甘えるよ」

リザレは休憩をすることに

……

リリー「ウィップカーニバル！」

リリーは大量の蔓を発生する。対象はサクラ、だがサクラは避ける素振りを見せない

サクラ「レイジングバリアー」

サクラの周りに熱い霧が発生し、襲ってくる蔓は燃えてしまった

サクラ「降り注げ火球！エクспロード！」

サクラはリリーの上空からエクспロードの術を放つ

リリー「よっと」

リリーはバックステップして避けた

レイラ「いい感じですよ」

アオイ「二人ともいい感じよ！」

レイラとアオイは二人のバトルを見ていた。実はこれは特訓で練習バトルをしていたのだ

サクラ「エクспロードを当てるのも難しいものだわ」

リリー「でもレイジングバリアーはよかったわ♪サクラも強くなってるし」

だがサクラは首を横に振る

サクラ「いや、まだまだこんなもんじゃないわ…大会では油断でき

ないもの、でも…みんながいるから大丈夫…それでもあたしはがんばるわ」

レイラ「そうこなきゃですわ…それじゃあ今度は私とですわ」

サクラ「いいわよ、かかってきて！レイラ！」

レイラがバトルフィールドに立つ

アオイ「あたしもがんばらないと…ホムラもがんばってるし」

リリー「がばねは別のメンバーと修行しに行ったけど…一人で特訓していなければいいんだけど」

リリーはそんな自分の相棒の事を心配する

……

そんな一方の相棒は

がばね「へっくしゅん！かぜでもひいたか？」

がばねは一人で特訓をしていた。最初はラッシュとゼルスと一緒にいたががばね本人は自主トレをすることになった、それから数時間後だった

がばね「さて、自主トレはここまでにして…ラッシュのところに戻るか」

がばねは翼を広げラッシュの元へ

……

フォック「雷の剣よ！サンダーブレード！」

雷の剣が生成してホムラに迫る

ホムラ「（さすが師匠、術の詠唱が早い…でも俺は負けません！）
ノヴァブレード！」

太刀が炎を纏いサンダーブレードを斬りつける、雷の術が打ち消された

フォック「（いい感じだけど…そうはいかないよ）双牙斬！」

斬り下ろしからジャンプして斬り上げた、だがホムラは木刀で防いだ

ホムラ「（くっ！師匠の剣の威圧感…やっぱ師匠は強い！？）」

ホムラは自分の師の強さに戸惑う…だが

ホムラ「（ここで戸惑ってるわけにはいかねえ！それでも俺は！）
こっちも双牙斬！」

ホムラも双牙斬を繰り出す…だがフォックもそう簡単にはいかない

カキーン！

フォックは木刀でなんとか防いだ

フォック「いい感じだね…ふう〜それじゃあ今日はここまでね」

ホムラ「はい！お疲れ様でした！」

ホムラは頭を下げた

…

ラッシュ「ふう…」

ラッシュは汗を腕で拭う…相当だろうかかなりの汗だ

ゼルス「今日は終了だ、気合入っているな」

ラッシュ「はい！」

ラッシュは大きく返事をする

ゼルス「気合も入れるのもいいが油断は禁物だ、気をしっかり入れろ」

ラッシュ「わかってます…俺ができる全力を出さなきゃって思っています」

ラッシュは自分の意地をゼルスに伝える

ゼルス「そうか…ならお前の信念で行け…強いライバルがいるのなら、お前の努力を見せてやれ！」

そう、バトルはぶつかり合い…そして倒しあいなどの戦い…それで

もお互いの実力をぶつけ合うのがバトルなのだから

ラッシュ「（もう俺は迷わない：俺があいつに見せてやる！）」

ラッシュの意地：止める相手のために全力でぶつかり合う：それが今できるラッシュのバトルだ

……

帰り道、ホムラは少し剣と技の調整をしていた

ホムラ「閃け、魔炎閃！」
まえんせん

ホムラが上段の構えをした太刀に片手剣を押し当て、振り向いた：これにより摩擦で炎が飛ばされた

ホムラ「いい感じだな！この調子で今度は：師匠の時の力はすげえしな：やってみるか」

ホムラは集中した、すると異次元空間が現れた

ホムラ「な：なんだ！？」

ホムラは驚いたがすぐにその異次元空間はなくなった、すると

ホムラ「うっ！？」

ホムラは少しめまいがしたような感覚を感じた

ホムラ「くっ！この技はあまりつかわねえほうがいいかもしれない

…」

ホムラが使ったあれはなんだったのか？

とりあえずホムラは立ち、歩きながらこの技を考えた

ホムラ「（とりあえず神羅万象しんらばんしょうと付けるか…こいつはピンチの時の切り札だが…使い続けるのはやめておこう…かなり体力消費しそうだな…でもなんだか師匠の時の力を使ったようないやまさかな）」

とりあえずホムラは究極の技を覚えた

ホムラ「（これはみんなには内緒だな…もちろん師匠にもだ）」

ホムラは内緒にするようにした

それぞれが交差するそれぞれの意地

己自身の決意を

バトル175 それぞれの意地（後書き）

ラッシュ「俺もがんばらないとな」

次回のは未定です。話をどうするのかまだわからないので

ラッシュ「おいおい（汗）」

バトル176 つっぱれ！復活のつっぱり！（前書き）

ラッシュ「遅いぞ作者」

ごめん、今回はとあるキャラの過去などです。

ラッシュ「一体誰なんだ？」

それは見てからのお楽しみに、それではバトル176

ラッシュ「つっぱれ！」

バトル176 つっぱれ！復活のつっぱり！

大会まで残り2ヶ月ときった、ラッシュ達は大会に向けて特訓していた。それぞれの想いを胸に大会でどう活躍するのか…さらに今回はバトル部に助っ人達までも登場するらしいが、それは大会になってからのお楽しみだ、そんな中一匹のエンブオーが暗い表情をしていた。

エルブ「……」

何か迷いがあるのだろうか…それは彼…エルブにとっての悩みがあった…

彼の手には手紙があった…その手紙にはこう書かれていた。

エルブ先輩へ

元気にやっていますか？

みんな先輩が別の学校に行ったのは寂しいです…でもわてらは大丈夫や、また相撲やれたらええなゝ

先輩もまた相撲やれるようにがんばってください

と、最後に名前がチャオと書かれていた。

エルブ「…わいはもう…相撲なんてやれないんや…」

エルブの目から涙が出てきた。

なぜエルブはそうなのか……

……

2年前

エルブはまだ14歳の時だった

エルブ「行くで！」

エルブは相撲では負けることはない最強の横綱だ、彼は『浪花豚なにわのエルブ』と呼ばれていた……しかし

エルブ「なんや？」

不良に囲まれ、不良どもはいつせいにエルブを襲った……しかしエルブは見事なつつぱりなどで不良どもを倒したのだ……だが

エルブ「出場停止！？なんでや！？」

校長「となりの学校はつつぱりで大怪我などを負ったのだ……残念ながら相撲部は大会に出場できない……」

なんと、不良共の喧嘩だと勘違いしてしまい、相撲部は大会に出場させてもらえないのだ……エルブは納得できないと校長などに話すが校長はそれでも考えを変えてくれなかった。

そこでエルブは

エルブ「なら！俺がやめる代わりに相撲部を大会に出場させてください！お願いします！！」

エルブは頭を下げた

校長はそれで納得し、エルブは退部した。

……

彼は夕日に染まった道を歩いていた。彼の目には涙が浮かんでいた。すると後ろから

チャオ「先輩……」

一匹のチャオブーで後輩のチャオが声をかけたのだった

エルブ「チャオ、なんや」

エルブがチャオに声をかける

チャオ「先輩！なぜやめたんですか！？大会に参加しても先輩がいないと」

エルブ「もうええんや！！」

エルブが叫んだ

エルブ「もう俺は二度と相撲をやらへん……たとえ俺がいなくてもや

っていける…だからお前等に任せてもらうわ…じゃあな…」

エルブは走り去った

チャオ「先輩…」

チャオはそんな先輩を追いかけることができなかった

その後エルブは高校に入ったが…相撲部とかには入らなかった…自分のせいでこれ以上相撲に関わらなかった

…

エルブ「わいには拳だけなんや…」

エルブは自分のにぎり拳を見る…にぎった感覚が今もなお感じていた。

そんな時

ラッシュ「おい！エルブ！」

ラッシュが声をかけてきた

エルブ「なんやラッシュか…なんの用や？」

ラッシュは何しに来たのか？

ラッシュ「ああ、なんかお前が暗い感じがあったから気になってな…大会も後2ヶ月だし、みんなの様子も見てみようと思ってな」

ニカツとラッシュは笑う、バトル部部长として…みんなの事も考えてあげないといけないのだ

エルブ「ようもそんな笑顔になれるな…まあいいやけど、さすがバトル部の部長や…波動使えるから俺の気持ちわかるんやな」

エルブは最初暗いような感じにはなったがラッシュの言葉で呆れたような感じになった

エルブ「まあ俺の中学の後輩からや…相撲やれるようにがんばってくださいやで…俺…」

ラッシュ「話してみてくれ…俺も気持ちを知りたいからな」

ラッシュの表情が真剣になる。

こくりとエルブは頷いて自分の過去の事を話した

…

ラッシュ「そうだったのか…元は相撲をやっていたのか…体型からしてそうだろうと俺は思っていたしな」

ラッシュはエルブの話を聞いて納得する。すると

ラッシュ「俺も過去に不良になった…でもキツカケを作ってくれたゼルスさんによって俺も変わってきた…その証拠に…」

ラッシュはゼルスがつけた古傷をエルブに見せた

ラッシュ「この傷は俺にとっての証のようなものだ：それにとある奴から言われたんだ：『ためらうな、迷うな、振り返るな、お前の背中にはデカイ思いが乗っかってる』とな：だから俺はもう迷わない：それにみんながいるから俺はいるんだ：だからエルブ：お前には熱い拳と燃えるつつぱりがあるんだと俺は思うぜ？お前もそれを活かせるじゃねえか：バトルがな」

エルブ「ラッシュ：」

エルブは思った：そうだ：俺は：俺は！！

エルブ「ならあんと勝負や！」

ラッシュ「そう来たか：望むところだ」

ラッシュとエルブは構えた

ラッシュ「フレアソウル！」

ラッシュはフレアソウルをエルブに向かって放つ：しかしエルブは手を突き出してつつぱりだした：フレアソウルは打ち消された

ラッシュ「打ち消した！？」

エルブ「へへっ！久しぶりにつつぱりを使うのはなんかスッキリするやな」

エルブはニカッと笑う

ラッシュ「そうこなくちな！」

エルブ「いくで！！ドスコイ！！」

エルブの勢いのつっぱりがラッシュに炸裂する。ぐおっ！とラッシュは声を出してしまう

ラッシュ「こんなつええ！つっぱりは初めてだな…やれるじゃねえか」

ラッシュは立つ

エルブ「いくで！！」

ラッシュ「かかってこい！！」

……

チャオ…

俺はもう迷わん…俺には相撲だけでなく…バトル部のメンバーとして活躍するで

相撲をいかしたバトルも悪くない…これが俺のバトルスタイルなんや…

見ていてくれ…

俺の浪花精神を！

バトル176 つっぱれ！復活のつっぱり！（後書き）

エルブ「もう俺は迷わへん！」

ラッシュ「そうでないとな」

次回はどうするかな…

ラッシュ「大会もいつになるかなんだよな（汗）」

バトル177 タツキの秘奥義習得特訓（前書き）

さて、今回はタツキです。

タツキ「私ですか…どうなることやら」

まあここで君に秘奥義ができるよ

タツキ「他のみなさんも秘奥義は持っているのでしょうか」

うん、それではバトル177

タツキ「容赦しませんよ」

バトル177 タツキの秘奥義習得特訓

大会まで残り1ヶ月ときった

ラッシュは

ラッシュ「はっ！やっ！」

鍛錬を怠らす精神を集中してトレーニングに励む

ホムラは

ホムラ「はあ…はあ…」

フォック「いい感じだけど体力もう少しつけておかないとね」

師匠であり、作者のフォックとの特訓を日々励んでいる。

他のメンバーは

レウト「ドラゴンインパクト!!」

ブレイ「……」

レウトは技の習得、ブレイは精神を鍛えていた。

ブレイはある者などの事で単純になっていたこともありゼルスさんに精神統一とかをやらされている。今後彼がどう変わっていくの

か：ブレイには期待はあるのだろうか：

ルガー「：はあ！」

ルガーは尻尾を使って木を斬った、木は見事に斬れてズシーンと音をたてて地面に落ちた

ルガー「残り1ヶ月、俺も本気でいかないとな」

そう言うともう一度木を斬った

リザレ「フレアヒール！」

モモ「サンキューリザレ♪」

リザレは回復技でモモを回復した。リザレは回復や補助などがバトルスタイルなのだ、攻撃技も覚えてはいるが：まだまだだ、モモの方はなにやら秘奥義を考えていた。

モモ「あれを完成させねえとな：」

リザレ「無理しないでね」

リザレは心配そうに言うが

モモ「大丈夫だ！俺はこれでも最初からクライマックスだぜ♪」

自慢そうに言うモモ、リザレはそんなモモに苦笑する。

みんなそれぞれの想いを胸に、今やっているのだ

そんな中

タツキ「うゝん…秘奥義ももう少し何かできればなんとかなるのに…」

タツキは秘奥義の事で悩んでいた。実はタツキ、大会のために秘奥義の練習をしていた。

秘奥義とは…奥義を超えるさらなる奥義で、いわば最後の切り札的な奥義なのだ…つまり必殺技とかそういうのになる。そんなタツキは自分の剣を見てため息をつく、そこに

ラグ「ん？タツキ？どうしたの？」

分身のラグが来た

タツキ「ああ、ラグですか…実は私、秘奥義の練習をしていたんです」

ラグ「秘奥義？」

分身のラグは秘奥義という言葉に首をかしげる

タツキ「説明すると…」

タツキが秘奥義について説明した。

ラグ「なるほど…つまり自分の必殺技みたいなのを完成させるってことだね」

タツキ「はい：まあ本物のラグと戦うかもしれないと思いますので」

タツキはまだ秘奥義を覚えていないのだ：だから練習をしているのだ

ラグ「だったら僕も手伝うよ：もう一人の僕と戦うかもしれないし
：それに僕も何か秘奥義っていうのを覚えたいね」

分身ラグはそう言う

タツキ「なら手伝っていただけますか？」

ラグ「もちろん！」

分身ラグはOKをだした

早速タツキの秘奥義特訓が開始した。

……

タツキ「風牙水月斬！」

タツキの剣が風をまとい月を描くように斬り上げた

タツキ「うーん、水をうまく纏えませんね」

タツキが言うには、風を纏うことができるが：問題は水を纏うタイ
ミングだった

ラグ「充分完成に思えるんだけど？」

分身ラグはそう言うがタツキは納得していない様子だった

タツキ「いえ、これではうまくいったわけじゃないですから…あの技には風と水の両方で月を描くように斬り上げていかなければ成功しないんです」

この技の特徴はうまく月を描くような斬り上げなのだ…風だけでなく水も操らなければいけないのだ

ラグ「難しいね…剣が回るようにできたらな」

するとタツキはラグのある言葉に反応した。

タツキ「ラグ！今なんと？」

ラグ「え？剣が回るように」

するとタツキはすぐに準備に取り掛かった

ラグ「え？一体どうしたのタツキ？」

タツキ「これならなんとかあります」

タツキは剣に風を纏った…そして斬り上げる…すると今度は剣が水を纏いもう一度斬りあげた

タツキはシュタツと着地した

タツキ「これです！これならきつと！」

タツキは喜んだ

ラグ「よかったね！」

分身ラグも喜んだ

タツキ「はい！ラグのおかげで秘奥義が完成しました。名づけて…
ふうすいげつ そうが
風水月双牙、風で斬り上げ、さらに水で斬り上げる…これでなんとか」

ラグ「よかった！」

分身ラグはまだ喜んでいた。

…

ラグ「リヴァイブウェイブ！！」

分身ラグは大波を2発放った

タツキ「これで本物のラグに対抗できるかですね」

ラグ「もし戦うことになったら…その時は僕も全力でいかないと」

分身ラグは剣を上を立てて構える

タツキ「私も負けてられませんね…他にも練習しないと」

タツキも剣を構えた

残された時間

大会までの時間は刻々と近づいている。

それぞれが極めた技と魔法で

バトル177 タツキの秘奥義習得特訓（後書き）

ラッシュ「今回は俺の出番ないな」

タツキ「でもなんとか秘奥義を完成させましたね」

まあ分身君のも本物君対策かもしれないけど（汗）次回はラッシュと他のメンバーの方になります。次回が終わりますといよいよ大会編に突入します。

ラッシュ「ついにだな」

本当はこの7月から8月中に仕上げたかったけど…色々あってか長くなっただけだね（汗）

バトル178 完成！ラッシュの最強秘奥義とサクラの秘奥義

大会も残りわずかとなったこの頃

ラッシュ「やっぱ近距離系の秘奥義の方がいいな」

ラッシュは自分の秘奥義を考えていた。これまで秘奥義である聖龍炎や白聖龍炎は遠距離からの秘奥義なので近距離での秘奥義がラッシュにはないのだ。なので大会までにこの秘奥義を完成させないと意味がないのだ

がばね「おーいラッシュ！」

そこにがばねがやってきた

ラッシュ「がばねか、なんだ？」

がばね「俺も特訓に付き合ってくれないか？」

がばねはラッシュに特訓に付き合いたいようだ

ラッシュ「わかった、俺もちょうど秘奥義の特訓をしているところだ」

がばね「秘奥義か…俺も何か大技ぐらいはあみだしたいからな」

あっさりとラッシュは承諾してがばねとともに特訓することに

……

一方

サクラ「……」

サクラは集中していた。

サクラ「……」

彼女の周りから炎があふれ出す：するとそこから炎の両翼のモンスターが現れた、そのモンスターは光る炎を横になぎ払うように操った

サクラ「……」

するとそのモンスターは消えていった

サクラ「はあ…はあ…」

サクラは汗をかいていた。これほどまでにあのモンスターを操っていたのだということだ

サクラ「あたしの秘奥義、インフィニティブレイブは完成したけど…集中力はんばないわ…」

そう、今のはサクラの秘奥義だった。

インフィニティブレイブ

相手に炎を浴びせ、炎系の術からさっき召喚したモンスター…いや

精霊を具現化して焼き尽くす秘奥義なのだ

だがサクラはもう一つの秘奥義を編み出そうとしていた。

サクラ「後はみんなを回復できる秘奥義ね…光を使った」

サクラは光術の詠唱を開始した。ちなみにさっきの秘奥義は上級炎術でないで成立しない

……

がばね「炎の回転頭突き（ローリングファイヤー）！！」

ラッシュ「はっ！」

がばねのローリングファイヤーをラッシュが抑える、咄嗟にがばねは翼を広げて飛んで後退した。

ラッシュ「（かなりやるようになったながばね…なら！あの秘奥義を完成させないとな！）」

ラッシュはセイントリミットを発動した。そしてそこらがばねに奥義を繰り出す

ラッシュ「行くぞ！ドラゴンブレード！！」

ラッシュのドラゴンクロウがさらに強化されて巨大となりがばねを切り裂いた

がばね「ぐわっ！？」

そしてラッシュの猛攻は止まらない

ラッシュ「燃える魂の心！」

最初は連続で神速の突進ががばねを襲い

ラッシュ「熱き龍の心となり！」

そこから連続でパンチが繰り出される

ラッシュ「すべてを切り裂く剣となる！」

さらに連続でキックを繰り出したラッシュ、そこから炎を纏って突進してくる

ラッシュ「今駆け巡る俺達の絆！！デймロスソウルモーメント！！」

炎を纏った連続突進ががばねにダメージを与えた

ラッシュ「さよならだ」

そしてセリフを言い終わるとラッシュは背中を向けて降り立った

がばね「くっ！」

がばねはボロボロでも立ち上がる

がばね「よ…ようやく完成だな…俺もさすがにボロボロになって耐

えられないな」

がばねも耐えられないとか言いながら耐えてはいた。

ラッシュ「そうだな…これであいつに…」

ラッシュは拳を握りそう誓う…秘奥義、ディムロスソウルモーメントで

……

サクラ「これでいいかしら…後は練習相手誰にしようかしら？」

一方のサクラ、そこに

リリー「サクラ」

リリーが手を振ってやってきた

サクラ「リリー！ちょうどよかったわ！あたしとちよつと練習相手になってくれない？」

リリー「良いわよ、喜んで♪」

二人はバトルの準備をした

……

リリー「行くわよ！」

リリーは剣を構えながらサクラに迫る

リリー「まずは気まぐれの花達！」
フラワーバフユーム

リリーはいきなりサクラの体に花を数枚咲かせた、そこから粉がサクラを襲う、サクラは苦しそうな表情をするが、術を詠唱する。

サクラ「浄化する異常を…癒せよ！リカバー！」

サクラはリカバーを唱え花達が枯れた、さらに状態異常も回復した

リリー「やるわね！これはどう！唸りの鞭打ち（シェイクカット）！」

剣を鞭のようにしなやかに攻撃する。

サクラ「きゃっ！？」

サクラは両腕でかばうが右腕にダメージを受けてしまった

サクラ「（やばいわね…痛みが出てきたわ…こうなったらあの技で）」

サクラは呪文を詠唱した

リリー「さて、今度はこれでトドメといくわ！花々の最後！」
ラストフラワーアウト

サクラの頭上に大きな花が光を吸収している。術の詠唱が早いのか…それともリリーの技が早いのか…

サクラ「聖なる雷撃よ…あだなす敵をうて！ディバインセイバー！
」

雷撃がリリーを襲う

リリー「花卉の守り（フラワーガード）」

リリーが攻撃を防ぐが、ここからサクラの秘奥義が発動した。光が突然リリーに襲ってきた

サクラ「光行く希望の力…運命さだめを変える輝きの光！」

サクラの背後から数発のレーザーがリリーに向かって放たれた

サクラ「今こそ希望を導きここにしめさん！！ソルブレイブシャリ
オン！！」

リリーは光に閉じ込められた…そこから爆発が起きた

リリー「きゃあっ!？」

リリーは落ちた

リリー「いたた…サクラもいい感じだったわ」

リリーはサクラを褒める

サクラ「ありがとう、おかげであたしの秘奥義が出来たわ…なんとかこれで」

彼女の秘奥義がどんな活躍をするのか…

そしてそれぞれの想いを胸に…

大会の日は来た！

バトル178 完成！ラッシュの最強秘奥義とサクラの秘奥義（後書き）

ラッシュ「準備は整った：後は大会で目指す優勝だ！」

気合入れてがんばらないとね

サクラ「あたし達もがんばるわ！」

さて次回はいよいよ大会編です。

バトル179 大会前の出来事1（チーム・ドラグノンハーツ（前書き））

はい！大会編ですが…大会前…3日前となります。

舞台が変わりついでです。今回からは出場チームの紹介などになります。出場チームの紹介が終わりましたら大会編に突入したいと思います。

ではバトル179！燃えるぜ！！

ラッシュ「ここが…」

ラッシュ達はペストヴィレに到着した。ここは闘技場がたくさんあり、賑やかなところだ…そしてラッシュ達がいるのがペストヴィレにあるコロシウム…ここペストヴィレにはそれぞれの闘技場やコロシウムがあり、フィールドの風景もかなりのものだ…そしてメイン会場はかなり大きく、かなり豪華だった

レウト「ここがメインスタジアムか…ワクワクするZE☆!!」

レイラ「バカな事やってないでホテルに行きますわよ」

レウトが一人ワクワク感をしてる間にラッシュ達はホテルに向かって行こうとしていた。

レウト「おいてくなく!!」

レウトは涙目になりながらみんなを追いかける

レイラ「先が思いやられますわ(汗)」

呆れたレイラもラッシュ達を追いかける

…

ついたホテルはかなり豪華だった

ラッシュ「すごいな、これをよくも取れるなんて…ゼルスさん、ガル先生、かなりかかったんじゃないんでしょうか？」

たしかに豪華なため見た目は値段が高いようにみえる

ゼルス「いや、どうやら大会中はそれぞれ無料らしいんだ…レストランとかもだが」

どうやら大会中はすべてホテルの宿泊費などは無料になっているらしい

レイラ「タダですよ!?!」

ブレイ「マジかよ!?! 飯が食べ放題じゃねえか!?!」

ルガー「飯ごときで騒ぐな!」

みんな驚くがルガーがブレイを一喝した。

イックン「それじゃあ各自自由行動にするよ、大会までトレーニングしてもよし、ここで休憩してもよし、残り3日で大会が開かれるからそれまではみんなは自由行動ね…ただし色々注意点を言うからね」

イックン先生は注意点を言った

イックン「というわけ…わかった?」

全員『はい!』

全員が返事をする

ゼルス「それじゃあここで解散だ！」

みんなは解散した

……

ラッシュ「俺達はどうする？」

ラッシュ、レウト、ブレイ、ルガー、モモ、タツキ、エルブ、がばね、ラグ（分身の）、リザレ、バルキリー、テラキオ、ビリーブ、クロウドの男子14人が集まる

ブレイ「俺は食事とか取る！」

レウト「あ！俺も行くぜ！」

エルブ「なら俺も行くぜ！体力つけなあかんしな」

レウト、ブレイ、エルブの三人は食事をとることに

リザレ「先輩、俺は部屋で休みます」

ビリーブ「さすがにここまでの長旅は疲れるから僕も寝るよ」

リザレとビリーブの二人は指定した部屋へと休みに行った

タツキ「私はルガーさんと一緒に稽古をつけます」

ルガー「俺もタツキと稽古をつけに行く、後はお前達でなんとかできるだろ」

バルキリー「なら私も行こう」

ラグ「僕も行くよ」

タツキとルガーとバルキリーとラグ（分身）はホテルのとなりにあるバトルクラブへ

テラキオ「俺はちょっと外へ散歩しに行くぜ」

テラキオは外へと出た

残ったのはラッシュとモモとがばねだ

がばね「俺達はホテルの中を見学とするか」

モモ「おお！いいぜ！」

ラッシュ「そうだな、少しここで見学してみるか」

そう言うと三人はホテルの中を歩き出した。

……

ラッシュ達が歩いていると、そこに5人の者達がいた、その一人は知っている者だった

ラッシュ「ホムラ！」

ホムラ「うおっ！？ラッシュにモモにがばねじゃねえか！」

なんとホムラだった、彼は別のチームでの参加だった

ラッシュ「こんなところで何していたんだ？」

ラッシュがホムラに話す

ホムラ「ああ、実は俺達のチームで話し合っていてな…俺のチーム、ドラグノンハーツのメンバーとな…」

そこにドラグノンハーツの四人が来た

????「おオ！テメエ等だなア！バトル部って言うのはア！」

一人はライオンを連想させるような鬣たてがみを後ろに伸ばしていて、筋肉質な体型の男だった

ホムラ「こいつはゴウ、元ティガレックスで豪快な奴なんだ」

ホムラがゴウと呼ばれた人間の元ティガレックスを紹介した。

ゴウ「よろしくなア！」

ゴウは豪快に言う

ラッシュ「ああ！こちらこそよろしくな！」

ラッシュも挨拶した

????「…やかましい」

ゴウ「なんだとオ!!? (怒)」

ゴウはとなりの男に怒鳴る、後ろ髪を縛っていて、もみあげが長く、無表情な男だった

ホムラ「おいおい (汗) こいつはジン、元ナルガクルガだ」

ジン「…ジンだ」

ラッシュ「あ、ああ… (ルガーに似てるななんか)」

ラッシュはジンがルガーに思えてきた。たしかにルガーも同じナルガクルガなのだから

ゴウ「おいィ! 根暗ア! テメェ! (怒)」

ジン「…黙ってろ筋肉バカが」

ゴウ・ジン「(怒)」

ゴウとジンがにらみ合う

ホムラ「お前等な! ラッシュ達の前で失礼だぞ!」

????「すまないな、この二人が無礼な事をして」

今度は銀髪のストレートで右目に傷がついている隻眼の男だった

ラッシュ「ああ、大丈夫だ…あんたは?」

???? 「我は元クシャルダオラのハガネだ、何卒よろしく」

礼儀よくハガネという元クシャルダオラの男が挨拶した

ラッシュ「いや、こちらこそ」

ラッシュもハガネに挨拶する。

???? 「ていうか俺にも喋らせろよー!!」

そこにもう一人の男が割って入った、耳から後ろの髪を真横に跳ね
ていて、さらに髪は青色だが見あげだけは黄色で口の端から八重
歯を覗かせている。

???? 「俺は元ジンオウガのロウガ!よろしくー!!」

元気いっぱいの男、元ジンオウガのロウガが挨拶した

ラッシュ「よろしくな」

ラッシュも挨拶する

がばね 「(元モンスターが多いな)ホムラのチームは)」

モモ 「(これはますます燃えてきたぜ!これは最初からクライマッ
クスだぜ!)」

がばねは冷静に相手を見て、モモは戦いたいとウズウズする。

ラッシュ「ホームラ、戦うときが来たら全力で行こうぜ」

ホームラ「ああ！俺もラッシュ達と戦えることを楽しみにしているぜ！なんてたってフォック師匠に修行してもらったからなく♪」

がばね「フォックに！？」

がばねは驚く

がばね「（フォックも弟子もってるわりに俺やリリーにここで修行させてるからなく（汗）さすがフォックだな（汗）」

がばねは作者でもあるフォックの事でタジタジであった

ラッシュ「それじゃあ俺達に行くぜ」

ホームラ「ああ！」

ラッシュ達三人はホームラ達チーム・ドラグノンハーツにもう一度挨拶して行った

バトル179 大会前の出来事1（チーム・ドラグノンハーツ（後書き））

ラッシュ「ホムラのチームは大丈夫なのか（汗）」

四人は今回初めての出演でナエちゃんことナエトルさんの小説で出演予定でもあったのですがここで先行出演という形になってしまいました。

ラッシュ「でも個性的でいいな、それぞれ俺達バトル部のメンバーに似た感じもあるな」

たしかにそうだね、さて大会出場チーム紹介はまだまだ続きます。後ここでお知らせがあります。さらに大会ではバトル方式の追加もします。

追加するのはリニアモーションバトル、テイルズでおなじみの4体4でのバトルを追加しました。ルールも色々異なっていくしますので、大会本戦になったら再びルールを本編で書かせてもらいますので

ラッシュ「次回はどんなチームが登場するんだろうな」

バトル180 大会前の出来事2 再会のライバルとレストランにて (前書き)

さて、前回に引き続き大会出場のキャラの紹介です。

次はどのキャラが出るのでしょうか

ではどバトル180をどうぞ

バトル180 大会前の出来事2 再会のライバルとレストランにて

ラッシュ、モモ、がばねはホテルを見学していた。現在3階へと足を運んでいた。3階は娯楽施設が並んでいた。UFOキャッチャーなどその他のゲームなどがあった、そこに

???? 「おい！ラッシュ！！」

駆けつけたのは

ラッシュ「ゴウ！？」

なんとゴウカザルのゴウだった、ゴウは前にバトル部で世話になった一人のポケモンだ

モモ「ひっさしぶりじゃねえか兄弟この！」

モモは左腕でゴウの首を掴み、そこから右手に拳をつくりゴウにグリグリを

ゴウ「うおっ！？いてててて！やめろ！」

ゴウは痛がるが

モモ「久しぶりなんだからよ♪ずいぶんと逞しく成長したじゃねえかよ♪」

ラッシュ「おいおいいい加減離してやれよ（汗）」

ラッシュの一声でゴウはなんとかモモから解放した

ゴウ「いってえゝ…マジ久しぶりだな、元気だったか？」

ラッシュ「ああ、おかげでな、ゴウももしかして大会に出るのか？」

ラッシュは大会にゴウも出るか聞く

ゴウ「ああ！俺の仲間と一緒にな！」

どうやらゴウは自分の仲間と一緒に大会に出場したらしい

ゴウ「まあフォックに色々と俺のブレイクオーラの方とかで修行させてもらったから少し慣れてきているけどな」

と、ゴウはブレイクオーラの事で言う

前にゴウはブレイクオーラという白いオーラで暴走したことがあった、だがラッシュ達が止めたおかげで危機は免れた

彼は別世界に戻って行き、作者であるフォックの元でブレイクオーラ制御の修行をさせてもらったのだ

ラッシュ「作者もようやるな（汗）」

ラッシュは自身の作者に啞然としていた。

ゴウ「まあ元は死んでいたけど今はこうやって生き返ったからなんとかなったけどな」

ゴウは元気に動いた。彼は今でも元気だ

ラッシュ「まあよかったな…ゴウと戦えることを楽しみにしているぜ」

ゴウ「おう！」

ゴウは元気に返事をした

がばね「ラッシュも負けてられないな」

モモ「俺も兄弟とバトルできる日が楽しみだぜ♪」

同じゴウカザルであるモモはゴウとのバトルを楽しみにしていた。

……

一方こちらレストラン

レウト「うおううまそうだな」

レウトはよだれを垂らしながら食べたいという本望がうずいていた。

レストランにはレウト、ブレイ、エルブの三人がいた

エルブ「結構な量があるんやなくしかもどれもうまそうやで」

どれもバイキングなためか料理の量がハンパない、そこに

????? 「レウト!!」

レウト「ホムラ!？」

そこにホムラ達チーム・ドラグノンハーツの面々が来た、しかしジ
ンとハガネはいないみたいだ

レウト「ついに来たんだな」

ホムラ「ああ!それより俺達のメンバーを紹介するぜ」

再びメンバー紹介した

ゴウ（ドラグノンハーツ）「テメエがヘタレなレウトだなア!俺は
元ティガレックスのゴウだア!!よろしくなア!!」

ゴウが相変わらず豪快に自己紹介する。

レウト「豪快だなあゝ（汗）しかもヘタレ（泣）」

レウト涙目

ゴウ（ドラグノンハーツ）「ホントにヘタレなんだなア!けどホム
ラが世話になったなア!!よろしくなア!!レウトオ!!」

やっぱり豪快に喋るゴウだった

ロウガ「俺は元ジンオウガのロウガ!よろしくヘタレレウトー!」

レウト「なんで俺ヘタレ（泣）」

やっぱりレウトの印象はヘタレが付けられた

レウトはやっぱりヘタレという称号を習得した。

ブレイ「そういりゃあ俺達も自己紹介しないな！俺はブレイ！ス
ピード命のバシャーモだ！よろしくな！！」

エルブ「俺はエンブオーのエルブや、よろしゅうな！」

ブレイとエルブの御三家炎・格闘コンビが自己紹介した

ゴウ（ドラグノンハーツ）「おオ！よろしくなア！！」

ロウガ「よろしくー！」

エルブ「とりあえず飯にしところか」

エルブがそう言う

ゴウ（ドラグノンハーツ）「おオ！俺は肉を取るぜエ！やっぱり肉は
最高にいいよなア！！」

さすが元ティガレックス、肉はやはり大好物のようだ

レウト「俺も肉好きだZE☆」

レウトもボケた感じでそう言う

ゴウ（ドラグノンハーツ）「おオ！オメエと気が合うじゃねえかレ

ウトォ!!」

肉で共感した同じ飛竜種の二人

ホムラ「それじゃあ俺達も」

ロウガ「飯飯ー♪」

ホムラ達とレウト達はバイキングへ

バトル180 大会前の出来事2〜再会のライバルとレストランにて〜（後書き）

え〜今回はゴウさんのキャラ、ゴウ君の方が登場しました。

前に出演しましたが今回は大会に参加で他のメンバーも次回から何処かで登場する予定です。

まあちよつとナエトルさんとこのゴウ君と名前がかぶっているので表示をこうします。

ゴウ（ドラグノンハーツ）

ゴウ（フレイムスター）

というように表記します。

かぶるような形になりましたがとりあえずはこうしておきます。

レウト「にしてもなんで俺ヘタレ言われなきゃなんないの（泣）」

ヘタレと執着ついたからだあきらめろ

レウト「ひでえ〜よ作者〜（泣）」

モモ「久しぶりに兄弟に会えて嬉しかったぜ♪」

よかったね、次回も紹介は続きます。

バトル181 大会前の出来事3 ついに登場！赤いあいつ（前書き）

ラッシュ「誰だ？」

今回はなんとあいつが登場します。ちなみにバトル部では初登場です。ついにあの赤い奴の登場です。ではバトル181

????「ホワチャー！！」

バトル181 大会前の出来事3 ついに登場！赤いあいつ

ホテルをすべて回ったラッシュ、モモ、がばね

ラッシュ「さて、どうすすかな」

モモ「なあなあ！バトルクラブ行ってみようぜ！どうせ後3日しかねえし」

がばね「たしかにな、どうするラッシュ？」

二人はラッシュの判断を待つ

ラッシュ「そうだな、行ってみるか」

ラッシュ達はバトルクラブへ

……

ここはバトルクラブ、平たいような施設だが広そうだ

ラッシュ達が入るとそこに一匹の筋肉ムキムキで4本の逞しい両腕のポケモンがいた。かいりきポケモンのカイリキーだ

カイリキー「ようこそバトルクラブへ！私はここのクラブのグランドマネージャーのドン・リッキーである！」

勢いよく喋るバトルクラブのマネージャー、ドン・リッキー

ラッシュ「驚いたな（汗）」

ラッシュ達は勢いよく登場したドン・リッキーに驚く

ドン・リッキー「さあ！今日はなんの用かな？」

ラッシュ「俺達はトレーニングしに来たんでな（汗）3日後の大会があつて」

ドン・リッキー「おお！そうかそうか！君達は大会出場者だな！ならこの先にトレーニングルームで鍛えてくれたまえ！」

と、でかい声で説明したドン・リッキー

ラッシュ「それじゃあ使わせてもらうぜ」

ラッシュ達はトレーニングルームへ

……

ラッシュ「すげえ」

ラッシュは啞然とした、トレーニングルームは広く、熱気が漂っていたのだ

がばね「それにしてもすごいな…ん？」

モモ「どうした？がばね？」

がばねは何か気づいた。

それは目の前のとある色々とした5人、言わずともわかるようにプリムレンジャーの四人だがもう一人は赤い色のプリムだった

がばね「まさかリーダーか！」

するとリーダーと呼ばれた赤いプリムが振り向く、もちろん他の四人も振り向いた

赤プリム「うおっ！？がばね！？」

赤プリムことレッドは驚く

ブルー「お前等も来たんだな」

ラッシュ「ってかその赤いプリムは何者なんだ？」

がばね以外、ラッシュとモモは赤いプリムの事を知らない

グリーン「そういえばラッシュには紹介していなかったっすね」

イエロー「僕達のリーダー、レッドって言うんだ」

レッド「いやーうちの奴等が世話になったな！」

レッドと呼ばれた赤プリムはラッシュに挨拶する。

ラッシュ「あ、ああ、俺はリザードンのラッシュだよろしくな」

ラッシュもレッドに挨拶する。

レッド「がばねがいるってことはピンクもいるんだな！」

モモ「ピンクウー？誰だよ」

ブルーが説明する。

ブルー「リリーの事だ」

がばね「リリーがプリムレンジャーのピンクでな」

ラッシュ「なるほどな（汗）戦隊物のピンクは大抵女性だしな（汗）」

そう、大体戦隊物のピンクは女性しかたりたたないのだ

レッド「つかピンクは何処にいるんだ？」

がばね「それならサクラとレイラと一緒に買い物n」

勢いよくレッドはものすごいスピードで走って行った

ラッシュ・がばね「はやっ!？」

ラッシュとがばねはツツコミをいれた

シルバー「あのバカリダー（汗）」

グリーン「待ってくださいっすよー!リーダー！」

他の四人もレッドを追いかけに行った

ラッシュ「なあがばね(汗)」

がばね「ああ、リーダーはこういう奴なんだ(汗)でも強いぜ」

がばねはとりあえずそう言った

ラッシュ「油断できねえな(汗)」

ラッシュはレッドのバカさに焦るが強いという波動は感じていた。

……

一方レストランでは

レウト「やっぱ肉はうめえな♪」

ゴウ(ド)「やっぱそうだろォ!!最高にうめェ!!」

こちらは色々と仲良くなっているようだ

????「おっ!肉!俺も混ぜてくれ!!」

そこに入ってきたのは…一人の赤い髪の赤ん坊だった

バトル181 大会前の出来事3 ついに登場！赤いあいつ（後書き）

登場したのはリアルルイージさんのキャラでプリムレンジャーのリーダー、レッドです！

がばね「リーダーまで参加するとはな（汗）でもたしかリーダーもブルー達と同じ」

まあ俺が蘇生したわけじゃないから（汗）別の方法でだとは思うけど…俺は知らないけどね（汗）

ラッシュ「この大会、何が起こるかわからねえな（汗）」

そして最後に出てきた赤ん坊は次回にて！

バトル182 大会前の出来事4 ポケな父と初代主人公とチキン大好きな赤

さて、今回はあの赤ちゃんが誰なのかわかります。

ラッシュ「考えるとあいつしかないな」

ではバトル182

ラッシュ「燃えるぜ!!」

バトル182 大会前の出来事4（ポケな父と初代主人公とチキン大好きな赤

レストラン

レウト「んあ!？」

ゴウ（ド）「赤ん坊だとオ!？」

レウト達は驚いてしまう

????? 「ああ、すまねえな、俺様はアトリ、まあちよつと事情で赤ん坊になっていてな、それより俺様に肉食わせろよ!特にチキンだ!」

アトリと呼ばれた赤ん坊はドカッと席に座る

ブレイ「こんな赤ん坊まで参加するなんて…いやあ、大会って何があるかわからねえなあ」

ブレイが納得する。

レウト「まあいいZE☆アトリも一緒に食おうぜ♪」

アトリ「よっしゃあ!」

アトリを加えてレウト達は食事をした。

……

一方こちらラッシュ達三人は

ラッシュ「いやゝまさかクレス達に会えるなんてな」

クレス「僕もだよ、あのバトル以来だね」

と、ラッシュ達が会ったのは一人の青年だった

おでこには赤いハチマキをして、背中には赤いマントをつけていて
優しい目つきに左腰にはロングソードと呼ばれる剣、髪は短髪でツ
ンツンヘアで色は黄色をしていた。

この青年がクレスのようだ、彼はアセリアという世界の出身の青年だ
見た目からしてイケメンである。

そんなラッシュ達はトレーニングした後クレスと会い、そこから一
緒に歩いているのだ

クレス「それにしても父さんとか何処に行ったんだろう…アトリも
みんな何処に」

どうやらクレスは他のみんなを探しているようだ

なのでラッシュ達も探すことになった

がばね「ミゲールとかナンパとかしていなければいいけどな（汗）」

がばねはそう言う、ちなみにラッシュとがばねはクレス達に会った

ことはあるので面識がある。モモは知らないためラッシュとがばねが説明してモモを納得させた

モモ「でもそのミゲールって奴はどういう奴なんだ？」

モモがラッシュとがばねに質問した。

ラッシュ「ああ、あいつは変態というか頭がボケな奴なんだ（汗）
大体結婚しているんだがその奥さんに色々とな（汗）」

ラッシュは恐ろしいんだよなと言言う

モモ「（なんかとんでもない奴等と戦いそうだな（汗））」

モモはそう思った

……

一方こちらはカフェ

????「おゝそこのおねえさん!!」

ナンパをしている男が一人、髪の毛は黄色でツンツンとした頭、そしておでこには青いハチマキを巻いていて。背中には青いマントをしている。目はクールだが今のでクールなのが台無しになっていた。背腰には剣、左腰には木刀がついている。

ナンパした男はモンスターである♀のポケモンで男はナンパしようとしたがそのポケモンにビンタを食らってぶっ飛ばされてしまった

????? 「あゝれゝ!!」

そう、この男がクレスが探しているミゲールであった。

……

こちらは変わってレストラン

アトリ「やっぱチキンはうめえな!!」

ゴウ(ド)「俺は豚肉が好きだぜエ!!」

レウト「俺は肉はなんでも好きだZE☆!!」

ブレイ「ふざけるな!! 鳥は俺にとっては共食いだ!! やっぱ牛肉
だろ!!」

ロウガ「俺もブレイに同感ー!!」

エルブ「なんや肉討論になってないやろうか(汗)」

ホムラ「たしかにそうだな(汗)」

エルブとホムラは啞然としていた

バトル182 大会前の出来事4（ポケな父と初代主人公とチキン大好きな赤

はい！今回はミゲールさんとのチームからミゲールさん本人、テイルズオブファンタジア主人公、クレス・アルベイン、そしてミゲールさんとのオリジナルキャラであるアトリが登場しました！

ラッシュ「赤ちゃんなのわかったしな（汗）」

まあ本当の事はミゲールさんの小説でわかるけどね（汗）

ラッシュ「それにしてもクレスも参加か」

他のファンタジアメンバーも参加だからその時には出すよ

モモ「テイルズからの参戦ってあるんだな」

まあ俺もテイルズにはまったからクレスの事とかは知っているし

ラッシュ「そうだったな（汗）」

さて、今回は誰の紹介になるのか…お楽しみに

バトル183 大会前の出来事5（探検隊と再びのあいっら）（前書き）

さて、今回はとある探検隊の登場です。うまく書けたかどうかかわかりませんが（汗）

ラッシュ「おい（汗）でも探検隊ってドルク達ブレイブか？」

実際ドルク達は参加しないからこの大会には

ラッシュ「事情でもあるんだな？」

まあそうだね、それじゃあバトル183

ラッシュ「貫け！」

バトル183 大会前の出来事5（探検隊と再びのあいっら）

前回、ラッシュ達は大会に出場するザ・ミゲールファミリー☆の一員であり初代テイルズ主人公のクレス・アルベインと共にミゲールを探しに行っていた。

一方ミゲールはナンパしていたが結局ぶっ飛ばされてフラれた（奥さんいるのにもかかわらず）

……

ラッシュ達四人はカフェに来ていた。

ラッシュ「さて、ミゲールは…ん？」

ラッシュは何かを感じていた。

ラッシュ「この波動…人間って感じの波動だな」

ラッシュが感じる波動…視線を見ると2匹のポケモンがカフェのイスに座っていた。

一匹は小さい体格に黒い耳、青い尻尾の人型のポケモン、はもんポケモンのリオルだ

もう一匹は頭に葉っぱをつけていて首にはいくつもの丸い緑の玉をつけているポケモン、葉っぱポケモンのチコリータだ、ラッシュが波動で感じたのはリオルの方だった、ラッシュは声をその二人に声

をかけた

ラッシュ「ちよつとすまないな」

リオル「ん？あなたは？」

ラッシュはとりあえず自己紹介した。

ラッシュ「俺はリザードンのラッシュ、バトル大会に出場するんだ」

リオル「あなたも大会にですか、僕達もなんですよ」

どうやらこのリオルとチコリータも大会出場者のようだった

リオル「僕はシアンⅡロビンソンっています、探検隊、チーム..
ブライトのリーダーをつとめています」

シアンと呼ばれたりリオルがラッシュ達に挨拶する。

チコリータ「私はハーブⅡフローラっています、同じくチーム..
ブライトの一員でサブリーダーをやってます」

ハーブと呼ばれたチコリータも挨拶する。

シアン「ところでラッシュさんは僕を見ていましたか何か？」

ラッシュ「やっぱバレたか」

ラッシュがシアンを見ていたことはシアン本人にはバレていた。

ラッシュ「まあなんかお前が人間のような波動を感じていたからな」

シアン・ハーブ「!？」

この言葉にシアンとハーブは驚きの表情をする。

ハーブ「えっ!？ なっ! なんでシアンが人間とわかったの!？」

シアン「元人間だと知っているのはかぎりある者しか知らないはずなのにどうして僕が元人間だとわかったんですか？」

シアンは驚いた後、すぐに冷静にラッシュに質問した。

ラッシュ「ああ、俺には波動を使うことが出来て相手の波動がわかるんだ…まあ相手の気持ちとかもだけどな」

へへっとラッシュは少し照れるようになる

シアン「たしか波動はリザードンには使えないはず」

そう、リザードンは波動を使うことはできないのは誰も知っているが

ラッシュ「まあ俺は特訓とかしていて習得したからな」

ハーブ「嘘っ!？」

ハーブはさらに驚く

シアン「どうやら僕達も油断できないよハーブ、ラッシュさんでし
たっけ？ 僕達も負けません…なのでもし当たったらその時は相手し

ましよう」

ラッシュ「ああ、もし当たったら全力で来い！」

ラッシュとシアンは拍手した

シアン「それじゃあ僕はこれで」

ハープ「ああ！待って！シアン！」

チーム…ブライトの二人は去った

がばね「探検隊からもかゝ」

モモ「こりゃ負けてられないな」

ラッシュ「ああ、シアンというリオルは強い波動を感じたからな」

ラッシュはシアンの強い波動を感じていた。

がばね「まさか元人間もいるんだな」

モモ「つまりホムラ達だけじゃねえんだな…まああいつらは元モンスターだしな」

そう、元人間の者や逆に元モンスターもいる、世界は何があるのか
わからないのだ

ラッシュ「そういえばクレスは？」

クレスはなぜかいなかった…しかし

クレス「おい！」

クレスの声が聞こえた、ラッシュ達は視線をクレスの声が聞こえたところに振り向くとクレスとさらにもう一人の男もいた。しかもう一人の男は頭にたんこぶをつけていた。

ラッシュ「どうやら見つかったようだな」

クレス「うん、ごめんね、心配かけて」

クレスは謝った

ラッシュ「いや、それよりミゲールをホテルに運んだ方がいいな、なんだか頭にたんこぶがついているが（汗）」

クレス「アハハハ（汗）」

クレスは苦笑する。

……

数分後、ラッシュ達はなんとかホテルについた

クレス「ありがとうラッシュにがばねにモモ、それじゃあ僕は父さんをつれて部屋に行くね、それじゃ」

クレスは気絶しているミゲールを運んで行った

ラッシュ「今回の大会…強豪が多いな」

それほどのバトルが期待される感じだ、さらにそこに

????? 「よっ！来たぜ！」

ラッシュ「ゴーシュ！」

なんとゴーシュ達スパーク団も来ていた。

リオーネ「今回俺達も参加だから負けないよう全力で生かせてもらうからな」

ムゲン「楽しみにしてて」

ゴーシュ達はやる気まんまんだ

ラッシュ「ああ！当たったら全力でバトルしような！」

ゴーシュ「こっちこそ！」

モモ「俺も負けないぜ！」

三人はそう誓った

がばね「これは負けられないな」

負けられないこの大会…

強豪はちやくちやくとここに集まっているのだから

バトル183 大会前の出来事5（探検隊と再びのあいっら）（後書き）

ラッシュ「今回は鏡花水月のキャラであるシアンとハーブだな」

そう、彼等も実力あるからどういう戦いになるのか：

ラッシュ「さらにゴーシュ達もだな」

まあ参加許可はしたから後は大丈夫、さて次回はどんなキャラ達が登場するのか：お楽しみに

バトル184 大会前の出来事6（本物と病弱な女性）（前書き）

さて、今回は…

ラッシュ「本物って…まさか！」

それは本編で、ではバトル184

ラッシュ「負けるか！」

バトル184 大会前の出来事6（本物と病弱な女性）

ホテルに戻ってきたラッシュ達三人、そこに

???? 「ラッシュ！」

分身のラグだ

ラッシュ「ラグ、どうしたんだ？」

ラグ「なんだか部屋に戻ってもつまらないからラッシュ達と一緒に
行こうと思ってね」

どうやら部屋にいたようだった

ラッシュ「いいが、モモやがばねはどうだ？」

モモ「いいんじゃない？」

がばね「それもそうだな」

OKらしい

ラッシュ「それじゃあカフェでゆつくりとするか」

ラグ「うん！」

分身のラグを引き連れてラッシュ達は前回、シアンという元人間の

リオルとパートナーであるハーブというチコリータがいたカフェへ

……

カフェへと到着したラッシュ達、椅子に座り注文をする

ラッシュ「マトマジュースを1つ」

がばね「お前って案外辛い好きなのか？」

がばねがラッシュに質問する。

ラッシュ「まあな、辛いのはなれている」

がばね「そうか、それじゃあ俺はオレンティを」

モモ「俺はオボンソーダを」

ラグ「僕はコーラで」

それぞれ飲み物の注文をとった、そこに

????「あっ！ラッシュにもう一人の僕！」

ラッシュ達が振り向くとそこにいたのは…ラグと同じラグラージ…
そう、本物のラグだった

ちなみに分身のラグの記憶は本物にも伝わっているためラッシュ達の事は知っている。

ラグ「もう一人の僕!？」

分身のラグは驚く

※ここからは分身、本物と書いていきます

ラグ（本物）「こんなところでラッシュ達に会えるなんて…あっそうか本物の僕とはラッシュ達は初対面だったね」

ラッシュ「いや、どっちも同じだから初対面じゃないだろうが…そうだろうな」

がばね「そっくりだな」

モモ「ホントだよな」

がばねとモモは二人のラグに驚く

ラグ（分身）「でももう一人の僕がいるってことは…」

????「俺もいるぜ!」

そこに

ラグ（分身）「キノガッサ!」

キノガッサ「よっ!俺も来たぜ」

なんとキノガッサまで来たのだった、さらに

???? 「こんばんわ！」

???? 「初めまして！」

???? 「こちら初めまして！」

3匹のポケモンが来た、一匹は同じキノガッサ、一匹はヒラヒラした白いものをつけていて透き通るような水色の体色のポケモン、あわはきポケモンのシャワーズ

もう一匹は両腰にホタチがそれぞれ一つずつつけているポケモン、しゅぎょうポケモンのフタチマルだ

ラグ（本物） 「まずシャワーズの方はアクア」

アクア 「初めまして、私はアクアです。もう一人のラグちゃんがお世話になってます」

アクアと呼ばれたシャワーズが頭を下げる

ラグ（本物） 「次にキノさん」

キノ 「キノっていいいます、うちのキノガッサがご迷惑をおかけしてすみません」

と、同じキノガッサのキノがペコペコと謝る、理由はキノガッサ本人のナンパ癖だろう

ラッシュ 「いや、気にするな（汗）」

ラッシュはタジタジする

キノガッサ「まあ別にあいつぐぐふっ!？」

キノガッサはキノによって吹っ飛ばされた

キノ「ホントにごめんなさい!!」

キノはペコペコと謝る

ラッシュ「いやだから気にしないでくれ(汗)あいつもナンパ癖はあったがそれでもバトル部のメンバーとしても強かったからな」

なんとかラッシュはキノをなだめる

ラグ(本物)「アハハ(汗)そして最後にタチマル君」

タチマル「自分、フタチマルのタチマルです。ラグ(本物)ししよーの一番弟子です」

がばね「一番弟子?つまりラグの師匠…って本物と分身のってことか?」

ラッシュ「実際は本物の方だろう」

タチマルと呼ばれたフタチマルは礼儀よく自己紹介する。

ラグ(本物)「今回はこのメンバーで大会で戦うんだ、もし当たったらその時は負けないよ」

ラッシュ「ああ、分身のラグと堂々にこっちも修行したのなら俺も全力でいかせてもらうぜ」

ラッシュとラグ（本物）は握手する。

……

「????」さて、これで買い物はOKね…でもミゲールは何処に行ったのかしら？ 見つけたらミゲールぶっ殺すボウダークネスで（黒激怒）」

荷物が多く、運んでいる一人の女性、しかも困っているがなぜかごりっぷくな感じだった

茶色っぽい髪の毛に緑のローブ、背中には弓と矢を背負っている。

そこに

サクラ「ここはいいわね♪」

レイラ「さすが人気のあるデパートですわ♪いい買い物ができましてし」

リリー「がばねやみんなのお土産も買えたしね♪」

サクラ、レイラ、リリーだ

するとサクラ達は茶色っぽい髪の女性に気づく

サクラ「あの一瞬なんだか苦労してるみたいですから私達が運びます

よ？」

????「あら、ありがとう、あなた達は？」

サクラ達は自己紹介した

サクラ「私はピンクリザードンのサクラ」

レイラ「私はリオレイアのレイラと申します」

リリー「あたしはリリー」

????「私はマリアっていうの、とりあえずホテルに運びたいの
いいかしら？」

マリアと呼ばれる女性と一緒にサクラ達は荷物を運んでホテルへと
向かった

バトル184 大会前の出来事6（本物と病弱な女性）（後書き）

ラッシュ「まさか本物のラグまで来るとはな」

チーム絆メンバー（いないメンバーもいるが）が登場しました。ちよつと彼等をうまく表現できたかわからない（汗）

ラッシュ「おいおい（汗）」

そしてミゲールさんのところからマリアさんを登場させました。

サクラ「なんだか気が合いそうね」

次回は誰が来るのか、お楽しみに

バトル185 大会前の出来事7（転生したあいつと味方キャラ達）（前書き）

今回は再びあいつが登場します

ラッシュ「あいつって？」

再びあの作者さんのだよ

ラッシュ「なんか気になるな（汗）」

バトル185 大会前の出来事7（転生したあいつと味方キャラ達）

ラッシュ達は本物のラグのチーム絆と共にカフェで飲み物を飲んでいた。

ラッシュ「辛味があって刺激的な味だ」

と、グルメリポーターな感じでラッシュは味の感想をのべる

そこに

????「おい！」

そこに来たのは一匹のバクフーンだった

ラッシュ「誰だ？」

ラッシュは記憶になかった、しかしこのバクフーン…実は

バクフーン「久しぶりだな！俺だよ！エイクだ！」

ラッシュ「エイク！？」

なんとエイクだった

がばね「エイク！？」

モモ「お前も参加してるのか！？ってかなんでバクフーンの姿にな
ってんだよ」

驚いたラッシュ達三人、ラグ達も驚く

エイク「とある事情でバクフーンになっちまったんだよ、それに御羅もバシャーモになってな」

ラッシュ「御羅までもか!？」

これにはさすがに驚くラッシュ達、まさか御羅までポケモンの姿になっているとは思わなかったのだ

モモ「まあとりあえず座れよ」

エイクは頷いて席に座った

ラッシュ「でも驚いたな：アカムの姿や人間の姿にはなるが」

エイク「それなんだがなぜか元に戻らなくなってな（汗）」

ラグ（分身）「えっ!？」

なんとバクフーンの姿のまま元に戻ることができないようだ

ラッシュ「何か原因がありそうだな：でもここに来たということは大会参加か？」

エイク「そうだ、ガロもいるぜ、あいつもなぜかフォックのせいでメタボ率が増加しているんだよ（汗）」

モモ「あのバカ作者、何考えてやがるんだか（汗）」

と、何処かにいる作者リザードンに言う猿

ラッシュ「まあとりあえず何か注文するか」

エイク「ありがとな、それじゃあ」

エイクは注文をした

なぜかここから悲鳴が聞こえたのは気のせいだろうか、まるで何かバレて痛い目にあったような感じであった

……

一方

ゼルス「来たか」

ゼルスは誰かを待っていた。そこにいたのは男女合わせて10人、しかもほとんどが学生服を着ていて学生のようなだった

????? 「初めましてだな、俺はバトル部味方チームの『とある学生
の電波放送』リーダーの西京圭だ」

西京圭と名乗った青年はそう名乗った

……

さらにこちらレストランでは

アトリ「やっぱチキンは最高だ!!」

ゴウ「肉は最高だぜエ!!」

レウト「マジうめえ!!」

こちらは肉とかで最高になってる(汗)

ホムラ「あいつら(汗)」

エルブ「なんかすごいことになってるんやなく(汗)」

タジタジのホムラとエルブ

ブレイ「よっしゃあ!!俺は牛肉とか食うぜ!しゃぶしゃぶだ!!」

と、バカ軍鶏は牛肉でしゃぶしゃぶをしていた

バトル185 大会前の出来事7（転生したあいつと味方キャラ達）（後書き）

今回登場したのはUMAさんとのエイク、そしてカイ・R・銃王さんとこの数名のキャラが登場しました。

ラッシュ「銃王のそこは2チーム味方だったな」

うん、名前も結構あるから（汗）

ラッシュ「大変そうじゃねえか（汗）」

プロフィール送ってもらったからなんとか…そしてエイクはバクフーンとして戻ってきました。

ラッシュ「御羅もだな」

御羅君はバシャーモというかあのバカ軍鶏の姿だけどね（汗）

ラッシュ「エイクの方はなぜバクフーンとかに？」

詳しくはUMAさん作『ポケ学（元人間投入）』にて

ラッシュ「カオスになってきたな（汗）」

まだまだ紹介するキャラ達は続きます。

バトル186 大会前の出来事8 ハンターと元モンスターとカオスなチーム

ラッシュ 「ん？このタイトルのハンターと元モンスターって」

ラッシュの知ってる者達だよ、今回は一体どんなキャラが来るのか、
バトル186

ラッシュ 「行くぜ！」

バトル186 大会前の出来事8 ハンターと元モンスターとカオスなチーム

こちらカフェでラッシュ達はゆったりと満喫していた。

前回エイクも来たので今回はエイクも一緒だ

ラグ（本物）「それにしてもポケモンに転生なんてね…たしか分身の僕の記憶からだとかカムトルムだったようだったね」

エイク「まあちよつとな（汗）」

ラッシュ「でもこうしてエイクに会えたのは嬉しいな」

たしかにラッシュの言うとおり、彼もまたバトル部の一員でもあるのだ

ラグ（分身）「これは覚悟していかないかね…」

ラグ（分身）はそう言う

……

こちらホテル

????? 「やっと着いたな」

ホテルではなんとスバル達が来ていた。

スバル「ついにラッシュ達とか…」

カクサス「そうだな…この大会は負けられないな」

アイリス「スバルと私の愛で」

プリムラ「違う…私の愛の」

アイリス「だから私の…！」

と、なぜか喧嘩になってしまう

ノブ「あゝもう！喧嘩してる場合じゃないよ！」

と、元アイルーであり、スバルのパートナーであるノブが二人を止める

スバル「そうだ、喧嘩してる場合じゃないぞ（汗）」

アイリス・プリムラ『むゝ』

と、二人は頬を膨らます

カクサス「行くぞ」

スバル達はホテルの中へ

……

次にホテルに来たのは数匹のポケモンとモンスターだ

一匹は赤いスカーフを首に巻いていて、二本の短い角に尻尾はトゲの突起がいくつもついてるモンスター、らいろうりゅう雷狼竜ジンオウガ

一匹は小さくてピンクの体色で長い尻尾のポケモン、伝説のポケモンで貴重でめずらしいポケモンでもあるミュウだ

一匹は草蛇の姿のポケモン、くさへびポケモンのツタージャだ

一匹はチーム…ブライトのシアンと同じリオル、もう一匹は耳が長く、兎のようなポケモン、ミミロルだ

ジンオウガ「ついに来たぞ！お前等！優勝するぞ！」

ジンオウガ以外の全員『おー！！』

と、掛け声を出す

ミュウ「作者も参加だからこの先どうなのか不安（汗）」

と、ミュウは不安がるが

ジンオウガ「そんなの関係ねえ！ジンオウスパークの親方の意地を見せてやるZE！！」

と、ジンオウガは言う、このジンオウガは作者であるミュウ&ツタージャ&デスピサロ&ジンオウガという名前だ、とりあえずこの小説ではミュウという名前で行く（作者フォックの都合で）

作者ミュウとその仲間達はホテルへと入って行った

バトル186 大会前の出来事8 ハンターと元モンスターとカオスなチーム

今回は三月語さん、ミュウ&ツタージャ&デスピサロ&ジンオウガさんのキャラと同時に作者であるミュウさんがジンオウガの姿で登場です。

ラッシュ「長いなやっぱ(汗)」

呼び方はミュウさんでいいって本人言ったし(汗)

ラッシュ「なんかなく(汗)」

次回はどんなキャラが登場するのかお楽しみに、残りゲストチームは後4チームとなっております。

バトル187 大会前の出来事9／5人の少年少女とソウル再びと作者混合チ

ついにこれでコラボ参加者チームの紹介が終わります。一気に4チームいきたいと思います。

ラッシュ「大丈夫なのか？（汗）」

大丈夫だ、問題ない、それではバトル187

ラッシュ「ガチで行くぜ！」

バトル187 大会前の出来事9／5人の少年少女とソウル再びと作者混合チ

こちらホテル前には6人の少年少女達がいた。

どうやらホテルに入るようだ

「ここがペストヴィレのホテルか…」

「俺達も参加だ、油断はできない…気を引き締めないとな」

長い黒髪の少年と青い短髪の少年が言う

「神魔法使用できないからな」

「やるしかないわね」

「そうね」

赤い瞳で白髪の少年、黒長髪の少女、白い長髪の少女が言う

「とりあえず行こう作者」

「ああ、行こうぜ聖夜」

聖夜と呼ばれる黒長髪の少年が作者と言った青い短髪の少年と一緒にホテルへと入っていった、他の三人も二人に着いて行ってホテルへと入った

ちなみに作者である青い短髪をした少年の名は霊宮空刀というらし

い…

…

ミュウ&ツタ（以下ミュウ）「さて、これから各自自由とする！では解散！！」

こちらミュウ&ツタ（以下略）は各自それぞれ散らばる

ミュウ「ねえツタン、僕達はどうか？」

ツタージャ「そうね…お腹すいたから食事に行こうサイコ」

ミュウの名がサイコでツタージャの名前がツタンのようだ、ちなみにツタンは♂のツタージャである。

ミミロル「ねえジーク、私カフェに行きたいけどいい？」

リオル「ああ、いいぜシロップ」

ジークというリオルとシロップというミミロルはカフェへと向かった

…

一方ラッシュ達

エイク「にしてもラッシュは変わらないな…でもなんか太ったか？」

ラッシュ「おい（怒）」

ラッシュは太ったと言われてムツとした

エイク「マジごめん（汗）」

エイクは謝った

ラグ（本物）「でもこうして集まると」

キノガッサ「なんかいいよな」

キノ「ポリさんやハスボーさん達も事情でこれないですし」

アクア「でも精一杯がんばろうね本物のラグちゃん」

ラグ（本物）「うん！」

チーム絆のメンバーは絆を深めているため仲がいい

ラッシュ「こりゃ分身のお前もがんばるしかないな」

ラグ（分身）「うん！」

意気込む分身のラグ

……

一方、こちらレストラン

ガツガツガツガツ！

ものすごい量を食べる一匹のヒトカゲ：いやなぜか足はないようだが
????? 「リュウ（汗）」

一人の青年が啞然とする。前にラッシュとバトルしたトオルという青年だ、ソウルアウトしているため、リュウはリザードンではなく、ヒトカゲの姿になっている。

トオルだけでなく、マキやアキといったメンツもいた。だが見かけない二人がいた。一人は少年でもう一人はリュウとマキと同じ幽霊のポケモンだった

顔はかわいく耳は尖がついて目はまん丸でかわいいポケモン、人気のポケモンであるピカチュウだ

レウト「さすがだな！ライドとパイルって大食いだな♪」

ゴウ「すげえなア！！」

ライド「だってタダだもん！」

リュウ「そうだぜ！食べ放題だ！！」

パイル「俺も！！」

ライドと呼ばれた少年とパイルというピカチュウ、彼等はトオルの仲間でもある。

アトリ「チキン食い放題だ！！」

ホムラ「あいつら（汗）」

トオル「こっちも苦勞してるんだな（汗）」

彼等は肉の大食い対決とかなんとかでやっているようだった

……

ホテル入口

????? 「やっとなつた！」

????? 「ダンテ、あんたのポケモンとかあんた自身大丈夫なの？」

黒の長髪の女性がダンテという金短髪の女性に言う

????? 「大丈夫よ、ねえみんな」

ピカチュウ「お前もな」

バタフリー「問題ないぜ」

彼女の手持ちポケモンであるピカチュウと蝶のようなポケモン、バタフリーがそう言う

さらになぜか他には某アニメの少女に頭悪いメガネをかけた少年もいた

????? 「どうでもいい…行くぞ」

黒短髪の冷酷の青年がホテルへと入った

???? 「行きましょうダンテさん、毒牙さん」

ダンテ 「はい、自由自在さん」

自由自在と言う青年と一緒にダンテと毒牙という黒長髪の女性もピカチュウとバタフリーと一緒にホテルへと入っていった

バトル187 大会前の出来事9／5人の少年少女とソウル再びと作者混合チー

今回は紹介できなかったミユウ&ツタージャ&デスピサロ&ジンオウガさんのメンバー紹介、そして今回紹介した4チーム、霊宮空刀さん、九龍拓実さん、作者混合でダンテさん、毒牙さん、自由自在さん、以上の作者様のチームが紹介され、これで紹介終わりだと思いますが、次回は別のチーム（作者推薦のチーム）紹介で終わり、その次から大会になります。

ラッシュ「ついにか（汗）」

どんなチームなのかは楽しみに

バトル188 大会前の出来事10ゝギルドの人間とわがままな奴と振り回され

ラッシュ「タイトル長っ!？」

この話が終わると次回で大会開始になります。

ラッシュ「まるで前夜みたいだな(汗)」

でも3日前だからね？

ラッシュ「わかったから(汗) それじゃあバトル188、覚悟を決めるぜ!！」

バトル188 大会前の出来事10／ギルドの人間とわがままな奴と振り回され

ラッシュ「それじゃあ俺は特訓しにバトルクラブに行く」

がばね「俺とモモはホテルに戻ってるからな」

ラッシュはがばねとモモと別れ、バトルクラブへと向かった

がばね「それじゃあ俺もホテルに戻るか」

モモ「ゲームとかしたくなっただけ」

二人はホテルへと向かった

……

バトルクラブ

ラッシュ「フッ！ハッ！」

ラッシュはサンドバックで殴ったり蹴ったりと繰り返し出す、ラッシュの体から汗がふきだし飛び散る。トレーニングをしてもう2時間だ

ただいまの時刻は22時だ

ラッシュ「はあ…はあ…」

ラッシュは一息つけてドリンクを飲んだ

ラッシュ「後3日か：あいつにも何か理由あるだろうな：」

ラッシュはクロアの事を思い出していた。彼の心の闇を：ラッシュは感じていた。そこに

????「ほお／＼さすがはバトル部部长だな：」

ラッシュ「誰だ？」

そこに来たのは黒い長髪に黒い服の男だった

????「俺はユーリ・ローウェル、チーム…凛々の明星の一員だ」
ブレイブヴェスペリア

と、黒長髪の男：ユーリは自己紹介する。

ラッシュ「凛々の明星？」

ユーリ「俺が所属しているギルドの名前なんだ」

ユーリはそう説明する。凛々の明星：ユーリが所属しているギルドでユーリの世界をまわっているようだ

ラッシュ「へえ／＼ギルドか：すごいな」

ラッシュはユーリの話聞いて感心した

ユーリ「まあ、俺もこの大会では全力で行くぜ、その時はラッシュと戦えたらな」

ラッシュ「ああ、その時は全力で行かせてもらおうぜユーリ」

ラッシュとユーリは拳を握りコツンと拳と拳の間を軽くぶつけた

……

ラッシュ「ふう〜もうこんな時間か」

ただいまの時刻は23時、さらにそこに

????「あ〜ったく！ホテルは何処だっつゝの！」

????「ルーク！ここで大声出さないでよ」

ラッシュは二人の人間に視線を傾けた、一人は赤い長髪の青年、もう一人は茶黒い感じの長髪の女性だ

ラッシュ「どうしたんだ？」

ラッシュは声をかけた

ルーク「わっ！？って脅かすんじゅあねえよ！！」

長い赤髪の青年、ルークと言う青年が驚いた表情をする

????「あなたは？」

女性がラッシュに話しかける

ラッシュ「俺はラッシュ、あんたらは？」

ティア「私はティア・グランツ、こっちはルーク」

ルーク「ルーク・フォン・ファブレだ」

生意気そうな顔でラッシュを見るルーク

ラッシュ「ルークにティアか：よろしくな、ところで何か困っていたが？」

ティア「実はここのホテルを探しているの、実は私達大会参加者なの」

ティアが説明する。

ラッシュ「それならここからまっすぐにいけば大きい建物だから目立つとは思うが」

ティア「そう、ありがとう、ルークがまたわがままいいそうだからこの辺で、ありがとう」

ティアはルークを連れてホテルへと向かった

ラッシュ「なんだったんだあの二人は？（汗）」

ラッシュはそんな二人の事で疑問に思ってしまった

……

ホテル前

ラッシュ「ふうとりあえず部屋に行くか」

ラッシュはホテルへと入った

……

ホテル7F 705号室

ラッシュは部屋の鍵でこれから寝る部屋に入る、ちなみにそこには

レウト「ZZZ…」

モモ「ZZZ…」

レウトとモモが寝ていた。

ラッシュ「二人してかわいく寝ているな…」

と、苦笑するラッシュ

がばね「戻ってきたか」

がばねはまだ起きていた

ラッシュ「がばね…」

がばね「相当トレーニングしてきたんだな」

図星を言われラッシュはタジタジする

がばね「まあ戻ってきてよかったぜ…」

ラッシュ「すまないな…なあがばね」

がばねは「なんだ？」とラッシュに言う

ラッシュ「バトルって…辛いのか？」

がばね「なんだよ唐突に？」

ラッシュ「俺は今まで楽しいバトルをしてきた…でも中には心に闇をもった奴だっていた。本当に伝わったのかわからないんだよね…戦ったライバルには」

その質問にがばねは

がばね「伝わってるぜ…俺は」

ラッシュ「がばね…」

がばねは続けて話す

がばね「俺は今まで俺を狙う奴等をかたっぱしから倒していった…でもリリーがいたから俺は変われたと思っていたが…結局は変われなかった…そんな時にお前とかと出会ってから変わった…それにフォックとも出会ってからも変わった…フォックは俺の気持ちをわかって俺を支えるために優しくしていた。ラッシュもこんな俺をライバルとして認めてくれたのは嬉しかった…俺はラッシュやフォックとかに感謝しているんだ」

ラッシュ「そうか…ありがとな」

ラッシュは納得したように頷く

がばね「それじゃあ寝るか」

ラッシュ「そうだな…おやすみ」

がばね「おやすみ」

二人は電気を消して寝た

決意と覚悟

その信念を

それぞれの想いをむねに

今戦いが始まろうとしている

バトル188 大会前の出来事10ゝギルドの人間とわがままな奴と振り回され

ラッシュ「ユーリにルークもかゝルークは長髪での出場だな」

まあ短髪希望なら次回の大会編で短髪モードにしてもいいけどね

ラッシュ「なんか少ないな」

そう思って次回あたりでも出るチームも紹介する感じにするから

ラッシュ「一体どんだけの規模にすんだよ（汗）」

バトル189 大会本番！思わぬ乱入者！？（前書き）

ついに大会なのですが…ちょっとハプニング的なことが起こります。

ラッシュ「なんか妙にカオスと嫌な予感がするが（汗）」

それではバトル189！

ラッシュ「行くぜ！！」

バトル189 大会本番！思わぬ乱入者！？

それから3日後

闘技場

バンバン！！

空から花火が上がる

会場はすでに観客がいっぱいで満員の状態だ

そして会場が静かになり、どこからか声が

????? 「レディ！スエ！ンドジェントルメ！ン！」

????? 「ペストヴィレのあなただけにお届けするスペシャルな大会」

すると二人の影が現れた

?????・????? 「全世界バトル大会！！IN！ペストヴィレ！！」

そこから二人というか一人と一匹が現れた

一人はラッシュと同じリザードンだが頭にはゴーグル、首には青いスカーフ、左腰には剣をかかえている。

フォック「説明苦手だけどそれでは説明します」

ルール

- ・アイテムなど禁止

- ・武器は対策として殺傷能力なし、ただし素手は別

- ・バトルは1回戦はシングルバトル、2回戦はダブルバトル、準決勝と決勝はRMリニアモーションバトルとなる

- ・1回戦は3対3で先に2勝したチームが2回戦に進出、2回戦は2体戦闘不能したチームが準決勝進出、準決勝と決勝は4対4でリング内で自由に戦う事は可能、チームのどちらか全員が戦闘不能になった時点で勝ち

- ・なお反則などは不正とみなし負けとなる

フォック「以上となっています！それではトーナメントの発表です！」

フォックがトーナメントの発表をしようとしたその時

ドガシャーン！！

闘技場の壁が壊されたのだ…その壁から一人の大男が入ってきたのだ、長い水色の髪に顔はゴツイイカついた顔だった

ラッシュ「なんだ！？」

全員がその場で構える

「ブアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアア！！！！フオツク・リザハートは何処にいるう」

と、作者であるフォックを探しているもよう

ゼロス「おい！作者！帝国騎士団の方はどうしたんだ！」

フォック「どうやらあいつにやられたようだな…厄介な相手が来たようだな」

苦虫を噛み締めたような表情をするフオック

ゼロス「どうすんだよ!?! このままじゃ!」

ゼロスは怒鳴るように言う、そこでフォックは

フォック「ちようどいいや、ここでRMリニアモーションバトルがどういいうのかをかねてエキシビジョンマッチでもやるよ」

と、フォックはジャンプした

ゼロス 「つておい!？」

スタツとフォックは両翼を使ってホバリングして着地した

「ようやく来たかゝ待ちわびたぞ」

と、大男は斧を構える

フォック「ここで好き勝手暴れさせては困るのよね〜バルバトス・デーティア！」

フォックは左腰の剣を抜く

フォック「みんな！ここでちょうどいいからエキシビジョンマッチを行うよ！選手達は観客席から見ててね、ゼロス！」

ゼロス「お！おう！わかった！それじゃあまずはトーナメントの前に……エキシビションマッチを執り行いたいと思います！みな！応援よろしくうゝ！！」

わあああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!

観客のみんなは最初バルバトスの登場でざわざわしていたがそこをフォックがエキシビジョンマッチとカバーして観客を沸きあがらせた

•
•
•
•
•
•

ラッシュ達は観客席にいた

「この勝負どうなるんだろうか……」

ユーリ「だが作者一人でも充分だろうとは思いますが油断できない相手だしな」

ユーリはバルバトスが油断できない相手だと見切っている

???? 「でも大丈夫なのかな？」

と、ユーリの真上の席には一人の少年がいる。茶色の短髪をして、でかいカバンを抱えている

ユーリ「そうでもないかもしれねえぞカロル」

と、カロルと呼ばれた少年にそう言うユーリ

???? 「たしかにあのバルバトスという奴からなんか威圧を感じるんだよな」

と、赤い服で茶髪だが上に伸びている青年がラッシュの上の席で言う

ラッシュ「ロイドもそう感じているのか？」

???? 「俺もなんかそんな感じがするんだ……」

ロイドの上の席で赤に近い短髪に白い服の青年が言う

ラッシュ「アスベル……」

ロイドとアスベルという若い二人はラッシュが声をかけてたらだんだん話をして仲良くなったのだ

アスベル「だが油断できないのは間違いない……作者はどうするつもりなんだろうか？」

ロイド「どうなんだろうな」

ルーク「大会が中止になったらやばくなるんじゃないか？」

と、声をかけたのはルーク：しかし今の彼は長髪ではなく短髪だった
一方こちらはバトルの準備ができたようでフォックとバルバトスは
対峙していた。

バルバトス「覚悟はできているか？ 貴様みたいな強い奴と戦えるこ
とをな〜」

かなりやばい感じになっていた

フォック「それはどうかな」

フォックは何か考えがあるようだ

フォック「来て！」

フォックが合図を送るとそこから黒いローブを来た三人の者が現れた

フォック「俺だけで戦うと思っていたのか？」

フォックの目が真剣な表情をする

三人はローブをはずして正体を現した

一人は水色の髪で後ろ髪は三つ編みで結んでいる青年、一人は黒い
短髪に紫の玉のヘアアクセサリーをつけていてピンクのローブを着
た少女、もう一人は黒い長髪に白い闘技服を着た少女だ

フォック「いくよ！ヴェイグ！リアラ！コハク！」

ヴェイグ「ああ」

水色の髪の青年、ヴェイグが頷く

リアラ「任せて！」

ピンクのローブの少女、リアラが頷く

コハク「もちろんよ！」

黒い長髪の少女、コハクが頷く

四人は今バルバトスと視線を向ける

バトル189 大会本番！思わぬ乱入者！？（後書き）

ラッシュ「つか作者、ツツコミどころありすぎだろ（汗）まず作者が司会でなぜD2からバルバトスを（汗）」

ハプニング的に奴が現れそうと思ってちょっとねゝ

ユーリ「とんでもない奴が現れたな（汗）」

ラッシュ「これどうなるんだよ（汗）」

次回はエキシビジョンマッチです。本戦期待していたみなさんすみません（汗）

バトル190 エキシビジョンマッチ！フォック&ヴェイグ&リアラ&コハクV

前回、大会は始まろうとしたが思わぬ邪魔者が乱入したのだ…その名はバルバトスと言う

ラッシュ達はフォックと三人の戦いを観客席で見ることになり、フォックは一人の青年と二人の少女の三人と共にバルバトスと対峙する。

バルバトス「行くぞおー！！灼熱のバーンストライク！！」

頭上斜めから火球、地面から強力ば爆発が起こる

ヴェイグ「散れ！」

四人は散った、そこにフォックは術を詠唱する。その隙をバルバトスは見逃さない、すぐにフォックに攻撃するつもりだ、術詠唱は時間がかかるものがあり、隙を見せてしまうためその場で動くことはできない

バルバトス「隙だらけなんだよ！！」

バルバトスは斧を振り下ろす、しかし

カキーン！

ヴェイグが剣で防ぐ

ヴェイグ「絶氷刃！」

圧縮した冷気でバルバトスを斬りつけるヴェイグ

バルバトス 「その程度か？」

だがバルバトスには効いていないようだ

フォック「ヴェイグ！ 離れて！」

ヴェイグはフォックの声を聞き、バルバトスから離れた

フォック「終焉の氷結に閉ざされろ！インブレイスエンド！！」

するとバルバトスの周囲に氷が棺を作りバルバトスを閉じ込める

バルバトス「ブラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア!!!!!!!!!!!!!!」

インブレイスエンド、それはまさしく氷の棺である。氷は砕けていた

そこからさらに迫撃が

コハク「煌け！ 夜天の極光！ 落ちよ！ スターライト！」

上空から隕石が降り注ぐ

[illegible]

バルバトスはスターライトでダメージを負いながらも攻撃する

コハク「キャッ!？」

リアラ「ヒール!」

リアラが回復術、ヒールでコハクを回復する。

フォック「大丈夫!」

コハク「こっちは大丈夫よ!」

コハクは大丈夫のようだ

ヴェイグ「絶翔斬!」

ヴェイグは冷気を纏いながら上空で斬り上げを繰り返す、そこからさらに

ヴェイグ「絶空裂氷撃!」

斬り上げからの衝撃で無数の氷柱がバルバトスを襲う

バルバトス「こしゃくな〜貴様等!」

バルバトスはひたすら斧を振るう

ヴェイグ「負けるわけにはいけないのでな、行くぞ!」

フォックは立ち上がる、体はすでにボロボロになっている

フォック「このぐらいで倒れると思ったか？ 貴様はわかっていないようだな……ただ力で圧倒させると思ふな！！」

フオツクの周りに赤いオーラが漂う

フォック「古により伝われし浄化の炎よ！ 焼き尽くせ！！ エンシェントノヴァ！！」

バルバトスの頭上から炎がバルバトスを焼き尽くす

バルバトス「何っ!? ブラアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

バルバトスが炎を浴びてる間、フォックはさらに術を詠唱する。

「癒しの天使よ、俺達に癒しを！ ナース！！」

四人の周りにから天使が四人の傷を癒す

リアラ「なら私も！我が呼びかけに応えよ！静かなる意思肅清の力に変えて、正義の心我らに！アクアリムス！！」

リアラの秘奥義により四人の傷が癒される

バルバトス「おのれ！！」

なんとか大会が中止になることはなかった、あの後バルバトスは作者により何処かの空間に閉じ込めておいた

……

フォック「さあ！ついにトーナメントの発表だ！！」

電光掲示板にトーナメント表が映し出す

ラッシュ「俺の相手は…」

ラッシュ達バトル部のチーム名は『ブレイズソウル』という名前だ

ユーリ「どうやら俺達と当たったようだな」

どうやらラッシュ達バトル部の相手はカロールがボスのチーム、凛々の明星と対戦のようだ

ラッシュ「いきなりか…これは白熱になりそうだな」

ラッシュはそう予感した。

しかもラッシュ達バトル部と凛々の明星は1回戦、第10試合…つまり最後らへんとなった

残りのチームの1回戦の相手はこうだ

第1試合…カオスリボルバー VS オールブレイク

第2試合…プリムレンジャー VS アビス

第3試合…作者混合チーム VS ダークグライド

ダークグライドはあのクロア率いるチームの名前だ

ラッシュ「(クロアのチーム…油断はできないな)」

ラッシュは覚悟を決める

第4試合…グレイセス VS スパーク団

第5試合…スノウブレイド VS 霊宮チーム

第6試合…ザ・ミゲールファミリー☆ VS シンフォニア

第7試合…絆 VS ソウルチーム

第8試合…チーム…ブライト VS ドラグノンハーツ

第9試合…S U Y S VS フレイムスター

第10試合…ブレイズソウル VS 凛々の明星

第11試合…とある神様の介入軍団 VS とある転生の好敵手達

シード とある学生の電波放送

ついに大会が…始まる!!

バトル190 エキシビジョンマッチ！フォック&ヴェイグ&リアラ&コハクV

ラッシュ「なんとか勝てたな」

回復邪魔した恨みだもん（黒）

ラッシュ「おいおい、っとついに対戦相手が決まったな」

ラッシュ達バトル部のチーム名はブレイズソウル、熱き魂でどこまでもいく、そんな感じで

ラッシュ「いい感じだな」

次回は第1試合から始めます。ハイライト形式になるかもしれないバトルもあるのですみません（汗）

※それとチーム名が決まっていけないのがありますのでチーム名が来たら修正します。なのでチーム名がこのままのチームもありますので、ご了承ください

バトル191 開幕！（前書き）

ついに開幕ですが…ここで一つ注意が

バトルに負けても文句などは受け付けませんので、たとえ負けても感想で文句のコメントは受け付けませんのでそこだけはお願いします。大会なので迷惑なことになるのは嫌なので、それではバトル191

御羅「燃えるぜ!!」

バトル191 開幕！

ついに始まったバトル大会、それぞれの想いを胸に今彼等の戦いの火蓋がきつて落とされた

まずは第1試合からだ

ラッシュ「第1試合はエイクと御羅とガロのチーム、カオスリボルバーとチーム、オールブレイクか…」

リザレ「それにしてもなんでエイクと御羅さんだけポケモンの姿になったんだろう？」

リザレはそれが疑問に思っているらしい

レウト「まあエイクと御羅、それにガロもメタボなのにつええ〜かな」

と、レウトは笑う

ルガー「だがどちらもカオスなチームのようだ…オールブレイクの方は名前が長い奴や何処かの王子やお姫様やらのチームのようだ、油断はできない」

ルガーはオールブレイクがどんなチームなのかを把握していた。

ブレイ「でもさ〜この勝負面白そうだな〜」

ブレイはこの試合でワクワクしそうな感じだった、一方

クロア「フン！くだらねえ」

黒いリザードン、クロアはふてぶてしい態度で観客席からフィールドを見る

クロア「だが最後に勝つのは俺だ、せいぜい足掻いてろよ…特にラッシュ…テメエだけは俺がぶっ倒す」

と、怒りを込めた声でそう言う

フォック「それじゃあ第1試合、カオスリボルバーVSオールブレイク！最初は誰が戦うのか！！いってみよう！」

フィールドに立ったのは…

御羅「おっしやあ！！行くぜ！！」

なんと御羅だった…しかもブレイと同じバシャーモの姿でだが首にはペンダントをぶら下げている

ラッシュ「本当にあいつバシャーモになったのか（汗）」

ブレイ「おおっ！同志が増えたぜ！！」

と、バカ喜びをするバカ軍鶏ことブレイ

ルガー「なんかバカが増えたように思える（汗）」

ルガーは呆れた表情をする

対するは

ミュウ「それじゃあサイコ！いけ！」

サイコ「僕！？」

最初はサイコが行くことになった

サイコ「（えっ！？MAZI！？この人強そうなんだけどどうしよう！！？）」

サイコはパニくる、サイコの装備は鉄で出来た装備だ

御羅「かかってこい！」

フォック「それでは第1戦開始！」

ついに試合が始まった

御羅「まずは！！」

御羅はいきなり消えてサイコの目の前に

サイコ「えっ！？」

御羅「スカイアッパー！！」

サイコ「うぎゃあああああああああ！！！！！！」

サイコはモロに食らい吹っ飛ばされた、ミュウなため効果はいまひとつなのだが

ミュウ「おい！何やってんだよ！」

ミュウはサイコに怒る

サイコ「やっぱ重いよ〜これ〜（泣）」

どうやら装備している鎧が重いためかうまく技を使うことができないようだ

そこから御羅は接近してきた

ラッシュ「あいつ、やっぱ遠距離系攻撃ないんだな（汗）」

ラッシュ達は御羅のバトルスタイルはわかっていた。やっぱり距離で来るかと思っていたようだ

御羅「オラァ！！炎のパンチ！！そして筆記殴打！！」

炎のパンチで殴り、拳を引いてまた殴る

フォック「これはすごい！隙を与えず近距離で決める！！実況席から俺、フォックとテイルズオブリバーズからユージーン・ガラルドとそしてゼロスの三人でお届けします！ユージーン、今の御羅君のバトルを見てどうですか？」

と、フォックは隣に座っている三つ編みの黒豹の獣人に話す

ユージーン「うむ、遠距離がないのは関心せんあ、一つぐらい遠距離の攻撃はあってもおかしくない…だが元人間ということもあり、遠距離の技を覚えるのは難しいことかあるいはだ…」

と、厳しいコメントを言うユージーン

ゼロス「でもなんであのバシャーモ…御羅だっけ？なんで遠距離の技を覚えないんだ？」

ゼロスが疑問に思い言う

フォック「本人は『男なら黙って拳だ!!』ということだって」

ユージーン「漢を見せているようだな…」

実況席から彼等の戦いに戻そう、サイコは防御とかもできず倒れてしまった

審判「サイコ、戦闘不能！」

ミュウ「あゝ何やってんだよ！今度は俺が出る！」

今度はミュウ自信が出る

エイク「おつかれ」

御羅「勝ったぜ♪」

エイクは御羅にハイタッチする

ガロ「今度は俺が行く、なんかさっきからフォックに見られているように思うしな(汗)」

ガロは不安になりながらフィールドに立つ、遅くなった体(とくに腹)はさらに遅しくなっていた。特に腹が出ているのだが動けるのだが：ボスゴドラの能力で素早さが低いという欠点が出てくる

一方のミュウ自体はジンオウガの姿、首には赤いスカーフを巻いている。

審判が試合開始の合図をする。

ミュウ「さて、まずは！」

するとミュウの周りに電気がたまる、しかもピンク色の電気だ、まあ彼の姿も少しピンクっぽいが：それが最大にたまると

ミュウ「おっしゃあ!!!!!!」

ミュウの周りに電気が放電する。背中や尻尾などの突起が逆立ち背中にピンクの電気が流れている

ミュウ「食らえ！雷弾!!」

手の平で気を集中し、丸い電気のかたまりがガロに向かって投げられる

だがガロは動じない、なぜなら彼もやばいほどだった

ガロ「守る！」

まずは守るを使って守った、だがこれだけでは終わらない

ガロ「クロスフレイム！」

なぜかボスゴドラが覚ええない技、しかもレシラムが使う技、クロスフレイムを放ったのだ

ミュウ「何っ!？」

これに驚いたミュウは避ける

ミュウ「(まさかクロスフレイムを覚えるとは…ありえねえ!?)」

ミュウだけでなく、ラッシュ達も

ラッシュ「あいつ覚ええない技を覚えるとは(汗) さらに腕を磨いたのか(汗)」

ラッシュも波動使える時点でどうかと思うのでは(汗)

ルガー「ガロは本当にポケモンなのか(汗)」

がばね「フォックに弄られているのにこんなことできるガロって(汗)」

リリー「わあゝやっぱガロと戦いたい♪」

ほとんどが唾然としているがリリーとかの戦いたい気持ちがあるも

のま でいた

レイナ「ありえませんわ、でもガロならありえますわ」

サクラ「本当にボスゴドラなのかしらあれ？（汗）」

もはや開いた口が塞がらない

ガロ「冷凍ビーム！」

今度は口から低温度のビームが発射される

ミュウ「うわっ!？」

ミュウの足元が氷つく

彼の姿はジンオウガ…ジンオウガの弱点は氷や水属性に弱い…つまり

ガロ「これでしまいだ、吹雪!！」

吹雪が吹き荒れ、ミュウは完全に凍ってしまった

審判「ミュウ、戦闘不能!!カオスリボルバー2回戦進出!」

わあああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!

会場は大歓声に包まれる

ミュウ「ヂグジョ〜」

ガチガチと体を震わせるミュウ

第1試合はカオスリボルバーが勝利した

ユージーン「まさか種族的に別の技を覚えるとは…ありえんな」

ユージーンはありえないと驚いたコメントを言う

ゼロス「ホントにこいつってボスコドラなのか!？」

ゼロスも驚く

フォック「まあそれがあいつだろうと思う」

と、フォックはあまり驚かないコメントだ

……

続けて第2試合、ここからはハイライトでお送りしよう

第2試合、プリムレンジャーVSアビスチーム

最初の相手はグリーンVSアニス、グリーンの巨大さで圧倒されるがアニスの（というかトクナガという人形と一緒に）殺劇舞荒拳と十六夜天舞によりアビスチームが1戦目勝利

しかし2戦目のブルーVSガイでブルーの氷系の技にガイは苦戦し2戦目はプリムレンジャーが勝利

そして最後の3戦目、レッドVSルーク（短髪）の対決、レッドの燃える炎攻撃などでルークは苦戦、ルークの秘奥義、レイディアン・ト・ハウルを放つがレッドはそれに耐え第2試合はプリムレンジャーの勝利で終わった

そして第3戦目

ラッシュ「（ついにクロアの試合か…）」

クロア率いるダークグライドはほとんどが悪タイプのチームのようだった、メインのクロア、マニユーラ、バンギラス、ドクロッグ、レパルダスの5匹、控えはワルビアル、ゾロアークだ

相手は作者混合チーム

最初に行くのは

ピカチュウ「俺からだ」

行くのはダンテの手持ちポケモンのピカチュウだ

ダークグライドからは

バンギラス「へへっ！テメェからか小僧」

バンギラスからだ

クロア「しくじるなよバギス」

バギス「わかってらあゝ」

バギスと呼ばれたバンギラスの目は怖かった、まさにバンギラスらしい怖さだ

審判「では試合開始！」

試合が始まった

バトル191 開幕！（後書き）

ラッシュ「白熱だな」

まあ色々だね、少しハイライトつくのもあるのですみません

次回はクロア達の実力がどんなものなのか…

バトル192 圧倒的な絶望（前書き）

ラッシュ「なんか嫌な予感がするぜ」

今回から残酷表現をしました。理由はこれから残酷な表現があるかもしれないためそうしておきました。そして今回はクロア達の実力がみれます。一部見れない場合がありますので（汗）ではバトル192

クロア「絶望に消えな」

審判「バギス戦闘不能！ピカチュウの勝ち！」

まさかの技のパ○○で会場は啞然とした

ピカチュウ「後は頼んだぜ」

ピカチュウは某子供アニメパンチを使ったため眠ってしまった

ダンテ「よっしゃあ！！」

チーム…悪魔の城は1勝して喜ぶ…だが彼等デビルズフォートレス（彼女等）は知らなかった…これが絶望への始まりにすぎないことを

バギス「すまねえクロア」

クロア「このぐらいで勝ったと思うなよクズ野郎が」

クロアは周囲に黒いオーラを放つ

それはなぜかラッシュに感じた

ラッシュ「（黒いオーラ：何か嫌な予感がする）」

ラッシュの嫌な予感が…後に思い知らされることになる。

続けて悪魔の城からは、ドラえもんでおなじみののび太だ

※のび太は自由自在先生のキャラ（版權キャラ）であり、キャラが変わっています。

さらにフィールドの外には同じくドラえもんでおなじみの源静香もいた

※静香も同じく自由自在先生のキャラ（版權キャラ）であり、こっちもキャラが変わっています。

ダークグライドからはドクロッグだ

クロア「ぶちのめせ！ドクロ！」

ドクロ「キシシ、わかってらくこんな雑魚眼鏡など一瞬でやってやるよ」

と、余裕の表情だった

のび太「行くぞ！」

審判「第2戦バトル開始！！」

2戦目のバトルが開始された

のび太「気功b」

ドカツ！

のび太は技を繰り出そうとしたが何かで技を中断させられた、そこから

ドクロ「どくづき！」

のび太「うわっ!？」

のび太は吹っ飛び倒れてしまった、しかも顔色が悪い

審判「のび太戦闘不能! ドクロの勝ち!」

ここでダークグライドが1勝した

ラッシュ「今のは…」

リザレ「先輩、今のは一体…」

周囲が啞然とする。

ユージーン「今のはふいうちを使ったようだな…」

フォック「ふいうちは攻撃技を相手が使うときに先制できる悪タイプの技」

そう、さっきのはふいうちにより、技を中断させられたのだ、ドクロはふいうちなどの悪タイプの技を覚えられる、毒・格闘タイプだが

ドクロ「キシシ…勝ったぜ」

ドクロは不適な笑みを浮かべ喜ぶ

クロア「さて、後は俺がやる…見せてやる…あいつに絶望を味わうようにな」

クロアは不適な笑みを浮かべながらフィールドへ

のび太は早速タンカで運ばれていった

……

静香「やばいようだな…ここは私が」

静香が行こうとしたがここで

悪牙「ここは俺が行く」

ここで悪牙が行くことになった

ダンテ「そうね、ここは毒牙達の人造人間ホームクルスのあんたに任せるわ」

悪牙「フン！見ている」

と、冷酷な態度でフィールドへ

クロア「テメエがか…てつきり静香って奴だろうかと思っていたが
テメエはやれそうだなあ」

クロアは黒いオーラを放つ

悪牙「黙れ、テメエみたいな奴に俺が負けるか」

クロア「はたしてそれがテメエにできればの話だな…」

ニヤリとクロアは不適な笑みをする

審判「では第3戦はじめ!!」

悪牙「武器練成『剣』!」

悪牙の肩に乗っている黒猫が剣へと変形する。

クロア「なんだ? 雑魚猫が剣に変形なんてな」

悪牙「『シャオロン』は賢者の石そのものだ…貴様を斬らせてもらうぞ」

悪牙が接近してクロアに迫る、しかし

シュン!

なんとクロアは消えた

悪牙「何処だ?」

悪牙は辺りを見渡す…そこに

クロア「食らえ! ダークフレア!」

突然黒い炎が悪牙を襲う

悪牙「くっ!?!」

悪牙は咄嗟に避けるが食らってしまった、だがクロアの攻撃はこれだけで終わったわけではない

クロア「絶望へと誘い、闇へと飲まれろ！デモンズバースト！！」

フィールドから紫の魔法陣が表れそこから闇が悪牙を飲み込み爆発し、煙が上がる

煙が収まると悪牙は倒れていた

審判「悪牙戦闘不能！勝利チーム！ダークグライド！！」

フォック「（これは…強い感じもあるけどなんか妙だ）」

フォックは何かを感じていた。

ユージーン「（うむ、ドーピングでも使ったようなそんな感じだ…それに他のメンバーもそんな感じがするな…これは何か裏がありそうだな）」

それとは別に、フォックとユージーンは何かを感じ取っていた

観客席の入口、そこに一匹の黒いリザードン

黒リザードン「いいぞクロア…もっとだ、もっと苦しめ…そして前から奪ったラッシュを…殺せ」

黒いリザードンは不適な笑みを浮かべる、この黒いリザードンの正体は…

そして大会はどうなってしまおうのか！？

バトル192 圧倒的な絶望（後書き）

ラッシュ「圧倒的だ…あいつらに勝てるかどうかもあるが…負けられないな」

そうだよ、その意気だよ…まあ今回ここまで悪っぽい感じにしたのは初めてです（汗）

ラッシュ「作者って悪の心ありそうじゃねえか？」

おいおい（汗）まあなんかこう悪って感じが俺にあったりもする（汗）次回は第4試合からです。

バトル193 守る者達のためにと激しい戦い（前書き）

さて、今回は第4試合と第5試合となります。それではバトル193

ラッシュ「気合だー!!」

バトル193 守る者達のためにと激しい戦い

第3戦が終わってラッシュ達は咄然としていた。クロアのあの技……いやたぶん秘奥義であろうあの技を、圧倒的でもはや絶望を味わったような感覚を覚えた……しかしラッシュは

ラッシュ「みんな！この試合で負けて決めたわけじゃない！俺達は勝っても負けても楽しいバトルができるよう……そして希望を捨てないようにするんだ！俺達には俺達なりの戦いがある！」

と、力弁するラッシュ、するとみんなは

レウト「そうだ！俺達はあきらめない！」

ブレイ「そうだな、あいつとやってみないとわからないからな」

ルガー「あきらめるのはまだ早いだろう」

モモ「そうだな、俺達とバトルするのを楽しみにしてるみんながいる！」

エルブ「そうや！ここで気を抜いたらアカン！」

タツキ「みんな努力してここまで来たのですからがんばらないといけませんね」

リザレ「オレは……絶対あきらめないよ！」

リリー「そうだよ！最後まであきらめないで行こう！」

がばね「ここで絶望しては何も変わらないからな」

サクラ「そうよね、あいつの秘奥義を見たって怖いと思わないようにしないと!」

レイラ「そうですわ、私達には仲間がいます!」

アオイ「どんな時でもみんながいたから」

ラグ（分身）「うん!僕だって!」

バルキリー「そうだ!それでこそバトル部だ!」

テラキオ「ビビるんじゃないよ、こんな奴にビビってちゃ意味ないぜ」

ビリーブ「僕達だからこそバトル部があるんだ」

クラウド「あんな奴に負けてたまるかってんだ!」

そうだ、バトル部みんなは互いに支えあっているのだ、だからみんなの絆は一つなのだ

なんとかみんなは落ち着き席についた、次の対戦に目を向ける

次の対戦相手はラントファミリアVSスパーク団だ

ラッシュ「ゴーシュ!みんながんばれよ!」

ゴーシュ「おう！応援ありがとな！！」

ゴーシュ達は観客席にいるラッシュ達に手を振る

アスベル「相手は元悪の組織だったメンバーか…油断できないみたいだな…」

????「だが元々バトルも強いいため相当な実力なのは間違いない」

と、アスベルに話したのはたくましい男性だった、ブーメランのような剣をもっていてごつい感じだった

アスベル「はいマリク教官」

アスベルはマリクという男にそう話す

????「アスベル、この人達って強い？」

と、アスベルに話しかけてきたのは紫髪のツインテールの少女

アスベル「ああ、強いみたいだソフィ、油断はできなようだぞ」

ソフィ「うん…私がんばる」

と、ソフィは頷く

????「でも相手は元々悪の組織のポケモン達です。これはなんとしても勝ちましょう」

と、眼鏡をかけた青い軍服の青年が言う

アスベル「でも相手チームはバトル部のチーム、ブレイズソウルによって改心したようだって、ヒューバート」

ヒューバート「しかし兄さん、本当に改心したのかどうかも危ういと思いますよ?」

と、ヒューバートと呼ばれるさっきに眼鏡の青年が言う、ちなみにアスベルとヒューバートは兄弟であるが名前が違う、アスベルの下の名はラント、ヒューバートの下の名はオズウェルだ

????? 「でも見てみると危うい感じがしないわ」

????? 「うゝん、弟君の考えすぎじゃない」

と、濃いサクラ色の髪に黒いリボンをつけた少女と元気いっぱい白と赤の髪の少女が言う

ヒューバート「シェリア! パスカルさん! それでも油断はできませんよ!」

と、シェリアという少女とパスカルという少女に忠告するヒューバート、彼の性格上信用できるかどうかかわからないものだった

一方スパーク団の方は

リオーネ「相手は実力が高そうだな」

ゴーシュ「でも俺達はラッシュ達に鍛えてもらいましたから全力で行きますリオーネさん」

スパーク団みんなは頷く、最初に出るのは

ムゲン「まずは僕から行くよ」

最初はムゲンからだ、一方チームラントファミリアからは

マリク「まずは俺から行こう」

マリクから行くそうだ

ムゲン「あなたが僕の相手ですか？」

マリク「ああそうだ、どっからでもかかってこい」

マリクは平然と立つ、相当な実力者だとムゲンは感じていた。

審判「それでは第1戦開始！！」

ムゲン グラビティ・ボール「重力球！」

ムゲンの周りに灰色の球体をマリクに向かって投げる

マリク ロールフレア「旋の炎」

炎を纏った剣：投刃をブーメランのように投げるように回転させた、マリクの武器はブーメランのように投げる剣のため遠距離でも対応できる

だが重力球は重力を帯びているため威力が落ちるのがオチだ、だが

ムゲン「うそっ!？」

マリクの投げた剣は回転を落とさずにそのままムゲンに向かっていく、ムゲンは避けられず食らってしまった

ムゲン「なんで!？」

マリク「重力ごときで俺の技は破れん、まあその球体に当たらなければ問題はない」

と、腕組みしてそう語るマリク

アスベル「さすが教官だ」

アスベルはそんなマリクに憧れの眼差しをいなく、左目には紫、右目は青の二つの瞳が輝く

ソフィ「教官、すごい」

ソフィはぼろっとした表情でマリクを見る

マリク「今度はこちらから行くぞ!其は耐え無き息吹!フォトンブレイズ!」

円形の熱波がムゲンを襲う、しかし

ムゲン「クリムゾンハンマー!」

口から炎を出し炎の槌を生成し、フォトンブレイズを防いだ、だが

これで終わりがなかった

マリク「あまり調子にのるんじゃないぞ！出でよ氷閃！」

氷の槍がムゲンを貫こうとする

ムゲン 「僕もそう簡単にはいかない！」

ムゲンはクリムゾンハンマーで防ごうとするが、クリムゾンハンマーが貫かれてしまった

「何っ!？」

これにはムゲンは驚く

マリク「さて、これで決めてやるか」

マリクは構える

マリク「始めるぞ！漢なら背中で語れ！」

なぜかムゲンとは違う方向を向く、すると背中から何かが光だす

マリク 「マリクビーム!!」

マリクの背中から巨大なレーザーがムゲンを襲う

ムゲン「うわあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!」?

ムゲンは食らって吹っ飛ばされ目を回してしまった

審判「ムゲン戦闘不能！マリクの勝ち！」

わああああああああああああああああああああ！！！！！！

会場は大歓声をあげる

フォック「さすが漢の中の漢マリク教官！まさかのマリクビームが炸裂です！」

ユージーン「うむ、彼の技は変わった技があり、どれも鍛え抜かれた技ばかりが多い、術を使うためさすが教官と言えるな」

ゼロス「あのおっさん、どんだけすげえんだよ（汗）」

ゼロスはマリクのあの秘奥義、マリクビームに啞然する。

マリク「大丈夫か？」

マリクがムゲンの手を差し伸べる

ムゲン「マリクさん強いですね、ありがとうございます」

ムゲンはマリクの手を掴んで立ち、感謝した

続けて第2戦

ヒューバート「僕が行きましょう」

アバリ「行くピョン！」

ヒューバート、アバリがフィールドに立つ

アバリ「さて、俺のスピードについてこれるかピョン？」

ヒューバート「スピードですか：あなたには負ける気はしませんが本気で攻めさせてもらいますよ」

ヒューバートは上下の剣、双刃を構える

審判「第2戦、試合開始！」

ヒューバート「アクアバレット！」

ヒューバートは剣から両腰についている銃を取り出してV字に水の弾を撃った

アバリ「無駄ピョン！竜巻ゴマ！」

竜巻を起こし、水の弾を絡めとる

ヒューバート「中々やりますね」

ヒューバートは眼鏡を上にあげる

アバリ「まだまだピョン！タイフーン・ターン！」

竜巻の回転を利用してアバリはヒューバートの周りを回る

ヒューバート「僕をかく乱させる気ですか…だけど僕がそんな小細工が通用すると思わないでください、R・サンダーボルト！」

空中にヒューバートは飛び上がる

アバリ「無駄だピョン！飛んでも」

ヒューバート「はたしてどうでしょうか？」

するとドーム状の電撃が放たれた、これによりアバリの動きが

アバリ「なっ！？ぐおおおおおおおっ！？」

アバリは食らってしまいマヒしてしまった

ヒューバート「今だ！覚悟を決めろ！派手に踊れ！」

両腰の双銃を乱射する。空間がガラスのように割れるような感じがし、派手に踊るようにヒューバートは双銃を乱射し

ヒューバート「アンスタンヴァルス！」

トドメの弾を撃ち、ガラスが割れたような感じになり、アバリは倒れた

審判「アバリ戦闘不能！ヒューバートの勝ち、よって勝利チームは！ラントファミリア！」

わあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！

歓喜が会場全体を湧かせる

アバリ「負けちまった…」

アバリは立つ

ヒューバート「あなたの技はどれもよかったです！がスピードに翻弄しても僕みたいなのに見破られます、そこだけは反省が必要です！ね」

ヒューバートは辛口のコメントをする

アバリ「俺がまだ甘かったかもしれないが…いいバトルだったぜ」

ヒューバート「こちらこそ」

二人は握手する

続けて第5試合

ラッシュ「スバル達の出番だな」

レウト「これは応援しねえとな」

ラッシュ達もスバル達を応援する

一方フィールドではスバル達のチーム、スノウブレイドとレジエンドガイアのバトルだ

スバル「全力で行くぞ！」

チーム全員『おおーーーーー！！！！！』

一方のレジェンドガイア

霊宮「みんな！心していくぞ！」

チーム全員『おおーーーーー！！！！！』

こちらも気合十分だ、最初に行くのは

疾風「私からね」

黒い長髪の少女、駆動疾風がフィールドに立つ、対するは

プリムラ「私が…行く…」

プリムラだ、氷の爪を生成して構える

審判「それでは第1戦、始め！！」

ついに始まった

プリムラ「氷柱千本^{つらら}！」

プリムラは複数のつららを疾風に向かって放つ

疾風「秋風・回し蹴り！」

疾風は音速の速さで避けてプリムラの上に行く

プリムラ「くっ！」

プリムラは氷の爪で防御しようとする、しかし

疾風「春風・かかと落とし！」

ここがかかと落としで氷の爪は割れてプリムラは吹っ飛んだ

プリムラ「だが負けるわけにはいかない！吹雪！そして氷結葬送！」

プリムラは吹雪を放ち、強力な大技で攻める

疾風「一気に決着をつけるわ！冬風・連鎖！」

二人の技がぶつかり、二人は吹っ飛ばされ、倒れてしまった

審判「両者戦闘不能！！」

なんとここで両者戦闘不能になった

ラッシュ「まさかここまでやるなんてな」

モモ「すげえな、あのレジェンドガイアの方結構やるじゃねえか」

一方、実況席

フォック「これは意外な戦いになってきたぞ！ちなみに引き分けの

場合はどちらも敗北となりますのでご注意ください」

ユージーン「うむ、まさしくこれはかなり強力なバトルとなるだろう」

と、ユージーンはそうコメントする

続けて2戦目は

カクサス「ここは俺が行こう」

スノウブレイドからはカクサス、レジェンドガイアからは

聖夜「俺が行く」

空刀聖夜が行く

審判「それでは第2戦、はじめ!!」

聖夜「行くぞ!」

聖夜は鍵みたいな武器、キーブレードを構える

カクサス「いざ!尋常に勝負!」

カクサスが攻める

聖夜「ハアアアッ!!」

カクサス「ハッ!」

拳と剣のぶつかる音が響く

聖夜「雷竜の鉄拳!!」

カクサス「瞬影打!」

それぞれの拳がぶつかり合う、互いに互角だ

ラッシュ「カクサスはいつもの拳できたか…相手の聖夜って奴は雷の波動だけでなく…龍の波動を感じるな」

サクラ「どうということ?」

サクラがラッシュに聞く

ルガー「おそらくあの聖夜という奴は雷だけでなく、龍の力を持っているようだな」

ルガーもそう感じていた。聖夜の雷と竜の正体は…魔法が発展している世界でめずらしい滅竜魔法というものだ、それぞれ属性をもっていてドラゴンスレイヤーという者にしか使えないという魔法なのだ

聖夜「雷竜の咆哮!!」

聖夜の口から雷の砲撃が放たれた

カクサス「ハッ!」

カクサスは避ける

カクサス「ここまでやるとはな…それでこそバトルしがいがある」

カクサスは構える

聖夜「そうだな、俺も全力で行くぜ！」

聖夜は構える

カクサス「双剛打破！」

聖夜「雷竜の碎牙！」

互いの技が相殺される

お互い一步も引かない戦いとなってきた…電気がバチバチとフィードルに響く

レウト「うひゃあゝこりやかなりやべえな」

レイラ「ここまでこんな戦いをするなんて…どちらも一步も引かない戦いになってきましたわ」

レウトは驚き、レイラは真剣になる

カクサス「これで決めるぞ！黒氣討滅刃^{こくきとうめつじん}！！」

聖夜「こっちも決める！！滅竜奥義！雷竜神技！！」

黒色の気の剣と雷の竜が激突して爆発を起こし、煙が立ち込める

ラッシュ「くっ！勝負はどうなった！」

煙が収まると

カクサス「俺の負けだな」

聖夜「いや…俺もだ…」

両者倒れてしまった

審判「両者戦闘不能！！」

ここでまた引き分けとなってしまった、この3戦目によってどうなるのか決まる、もしどちらかが勝つか負けるかによって勝利チームも変わる、しかし引き分けで終われば両チーム2回戦進出はできないはたして！

スバル「ここは俺が行く、みんなは見ていてくれ」

アイリス「スバル！がんばって！」

アイリスがスバルを応援する

レジェンドガイアの方は

霊宮「よしっ！俺が行くぜ」

ここで作者である霊宮がフィールドに立つ

スバル「お互い本気で…」

霊宮「行きましようか!!」

スバルは黒の剣：無属黒剣・ノワールを構え、
霊宮は蒼狼ウルフィ
リアスを構える

審判「それでは第3戦はじめ!!」

スバル「空閃斬!!」

霊宮「日本刀!!」

お互いの剣のぶつかる音が響く

スバル「くっ!結構やるな」

霊宮「俺は本気だぜ」

霊宮の武器が銃に変わってスバルに向かって撃つ

スバル「(ここは避けないとな)」

スバルはバックステップして避ける

スバル「絶空波!」

そこから風の衝撃波を放つ

霊宮「チッ!」

霊宮も避けてウルフィリアスを鎌に変えて攻める

カキーン！！

鉄と鉄とがぶつかる音が響いた、それが火花を散らし、互いに剣のぶつかる音が何度もぶつかりながら続く

アイリス「スバル……」

アイリスはただ祈るばかり

プリムラ「スバル……」

プリムラもスバルの勝利を祈る

ノブ「がんばってご主人」

元オトモアイルーのノブもそんな主人の事を見る

スバル「はあ……はあ……」

霊宮「ぜえ……ぜえ……」

互いに剣を構える

スバル「これでどうだ！！！屠龍滅舞陣！！！」

霊宮「すべての武器に変えて行くぜ！蒼狼の極器！！！」

スバルは大技、霊宮はすべての武器に変えた、それぞれの武器とがぶつかり合い、爆発を起こした、この影響で二人は

スバル・霊宮『うわあああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

互いに吹っ飛ばされた二人共倒れてしまった

審判「両者戦闘不能!この勝負!引き分け!」

審判のジャッジが下されたあとアイリスはスバルの元へ

スバル「アイリス…」

アイリス「スバル…」

アイリスの目には涙がポロポロと零れ落ちる

ゼロス「ううつ、泣けてくるじゃねえか」(泣)

フォック「これまでにない迫力のバトルを見せてくれた両チームに拍手!」

パチパチパチパチ!!

こうして第5戦は引き分けで両者敗退となった

ラッシュ「こんなバトル…迫力的だったな」

サクラ「そうね、私達も負けてられないわ」

バトル部全員が気合を入れる

バトル193 守る者達のためにと激しい戦い（後書き）

今回大会では作者様の方から出演がいらっしゃるので小説内では呼び捨てになってしまっています。すみません

ラッシュ「それにしても今回は引き分けとはめずらしいな」

こういう時もあるんだよ、まあ応援という形になるけど…次回は第6試合からです。

バトル194 恐妻とチームの絆（前書き）

はい！今回は第6試合〜第7試合となります

ラッシュ「なんかタイトルのに前半嫌な予感がするな（汗）」

どうなんだろうね（汗）ではバトル194

ユージーン「迷うな！」

バトル194 恐妻とチームの絆

第5戦を終えて、激しいバトルが繰り広げられた…時に引き分け、時に傷ができ…そして分かち合い…だがその中では闇自体も大きく動いていることを…

クロア「親父、とりあえず勝ったぜ」

黒リザ「ごくろうだクロア、よくやってくれた…」

と、黒いリザードンがクロアを褒める、ここは会場の中

クロア「あいつと決勝で当たったら…俺は…」

黒リザ「そうだ、復讐を果たせ、期待しているぞクロア」

と、笑みをこぼす黒いリザードン

クロア「それじゃあ」

クロアは去った

黒リザ「ククククッすべては私の復讐のためだ…そのためにはあいつの息子…ラッシュを…我が息子のクロアによって殺されば、私の目的は完成だ…」

黒いリザードンは懷から何か緑色の液体を取り出す

観客席のみんなが啞然とする。

ちょっと茶色っぽい髪の毛が肩よりちょっと下らへんにあり、緑のローブを着ていて背中に弓と矢をつけているのがマリアという女性だ

クレス「母さん（汗）観客のみなさんが見てるよ（汗）」

マリア「あらごめんなさい」

マリアは恥ずかしながらミゲールを引きずってさがった

アトリ「ったくあのクソ親父」

アトリは不機嫌そうに言う

????「ボケール（汗）」

啞然としているのは一人の人間というか妖精だった

頭にはトンガリ帽子を被っていて茶色の髪、クリクリとして猫みたいな目、背中には美しい銀色の羽が4枚も生えていて左手には星を模った紋章がついている

ミゲールの事をボケールと呼んだこの妖精の名はデインという

デイン「フォック教官が見ていないけどがんばるヨ」

このデインという妖精は語尾の最後にヨとつけるようだ

ユージーン「このデインという妖精はマオみたいだな」

と、ユージーンは彼を見てこの語尾を言う仲間を思いだしてしまった
「?????」「とりあえずみなさんががんばりましょう」

と、声をかけたのは一人の少女

武器はロッドで白くまるで何かの角のようなロッドだ、黄色の髪で髪
の毛が肘辺りまであり、頭には白く真ん中に十字架が書かれている
ベレットという帽子を被っていて白いローブを着ている

クレス「そうだねミント」

と、クレスはミントというさっきの黄色の髪の少女に声をかけた

「?????」「相手はシンフィニアの奴等だしな」

「?????」「あのエロ親父がやらなければいいけどね」

と、青年と少女が言う

青年の方はきれいな水色の短髪にクールな目で背中には弓と矢を装
備している。少女の方はピンクの髪の毛で青いリボンで髪を整えて
いて左耳には大きくてちょっと大きいイヤリングをつけていて肘ま
で隠れるグローブをつけていてローブを着ている。さらに箒にまた
がっていてふわふわと浮いている

「?????」「お前も油断するなよアーチェ」

アーチェ「あんたも油断しないでよねチュスター」

チェスター「お前ほど油断しねえよ」

と、青年の方はチェスター、少女の方がアーチェと言う

????? 「でも油断できませんね」

????? 「キュキュキュイ！」

と、長い綺麗なスカイブルーの髪に冷静そうな目の女性と赤くてふさふさした体毛で小さな翼のドラゴンが言う（というかドラゴンの方は叫んでいる）

クレス「わかってますメラさん、ルシも大丈夫だよ心配しないで」

ルシ「キュウーン」

と、心配そうに見つめるルシという小さな龍

対するシンフィニアチーム

????? 「相手はクレスか」

????? 「ロイド、油断できないね」

と、ピンクの羽を生やした少女がロイドというつん立った茶色の髪に赤い服を着た青年に言う

????? 「でも相手はあのミゲールさんだからねえ」

???? 「たしかに油断できない相手でもあるわね」

と、水色の短髪に水色の服を着てけん玉をもった少年と少年と同じ髪型と色をしてオレンジのローブを着た女性が言う

???? 「たしかにそうだがクレスも実力は高い：しかし父親であるミゲールもあんな感じだが油断は禁物だ」

と、厳しい言葉をかけたのは茶色の短髪に紫の鎧を着た男だった

???? 「クラトスのいうとおりかもしれないわね」

???? 「たしかにそうだね」

と、オレンジのローブの女性、リフィルとその弟であるジーニアスが言う

???? 「でも相手にとって不足はないけどゼロスの馬鹿が実況だし」

と、紫の装束服を着た女性が言う

クラトス「たしかにしいなの言うとおりかもしれん、ゼロスが抜けた穴があるからな」

しいな「まったくだよ、それにリーガルは会長の仕事とかで参加できないしさ」

と、冷静に言うクラトスという男と文句を言う紫の装束服を着た女性、しいな

????? 「ゼロス君とリーガルさんが抜けた分がんばりましょう…」

と、ピンクの短いツインテールで斧をもった少女が言う

ジーニアス「プ、プレセアはぼ、僕が…ま、守るからね!／／／／」

と、ジーニアスは赤くなるプレセアとはさっきのピンク髪で斧をもった少女のことだ

プレセア「ジーニアスがんばりましょう」

と、少し暗い声でプレセアは言う

フォック「さあて! ついに第6試合となりました! はたして勝つのは! 最初の1戦は! ザ・ミゲールファミリー☆からはデイン! 対するシンフォニアチームはジーニアスがフィールドに出た!」

ゼロス「いつの間に作者いたのか(汗)」

何時の間にかフォックが戻り、ゼロスは啞然とする

デイン「おれっちはそう簡単に負けないヨ!」

ジーニアス「僕だって!」

二人ともやる気を出す

ユージーン「うむ、どちらも魔法を使う相手だ、術の打ち合いになりそうだな」

と、ユージーンは冷静に言う

フォック「まあデインは妖精で主に地属性の術を得意としています。
一方ジーニアスはザ・ミゲールファミリー☆の控えのアーチェと同じ
ハーフエルフで術もかなり覚えています！この勝負見逃せません
！！」

ゼロス「まあチビッコも結構やるからな〜がんばってくれよ〜」

と、ゼロスはバカにしたように言う

ジーニアス「ゼロスの奴（怒）」

ジーニアスはそんなゼロスの言葉に怒る

ジーニアス「っと今は冷静にいかないと」

ジーニアスはけん玉を構える

一見けん玉で攻撃できないんじゃないかと思っていますがジーニアスの武器であるけん玉は武器となるので使えます。

審判「それでは第1戦はじめ！！」

二人の対決が今始まった

ジーニアス「行くよ！まずはファイアボール！！」

ジーニアスは火属性下級術、ファイアボールを放つ

デイン「こっちはグレイブだヨ！」

対するデインは尖った岩を発生させるグレイブで火球を防いだ

ジーニアス「中々やるね」

デイン「そっちもだヨ」

と互角の戦いとなってきた

デイン「今度はこっちから行くヨ！グランドダッシャー！！」

フィールドの大地が割れ、爆発的なエネルギーがジーニアスに迫る

ジーニアス「こっちもグランドダッシャー！！」

ジーニアスもグランドダッシャーを唱え防ぐ

デイン「こうなったらこれしかないヨ！光速の力！」

デインの紋章が光る

デイン「そしてグレイブだヨ！」

デインは尖った岩を2回も発生させた

ジーニアス「うわっ!？」

ジーニアスはしりもちをついた、そこからさらにデインの紋章が光る

デイン「今度は光襲の力発動ヨ！これで決めるよ！」

デインは術を詠唱する

ジーニアス「何か来る…でも僕は負けない！天光満るところに我はあり、黄泉の門開くところに汝あり、出よ！神の雷！」

ジーニアスも負け時と術を詠唱する

デイン「スターダストレインボー！！！」

ジーニアス「インディグネーション！！！」

デインは7色に輝く岩をジーニアスに、ジーニアスは神の雷をデインにお互いが吹っ飛ばす

デイン「うわっ！？」

ジーニアス「うわっ！？」

お互いボロボロの状態だ

ジーニアス「でも僕は負けないよ！いくよ！格の違いを見せてやる！！！」

デインの周りから魔法陣が張られ、そこから雷がデインを襲う、さらに上空から巨大な剣が魔法陣の中央に刺される」

ジーニアス「インディグネイト・ジャッジメント！！！」

雷にやられデインは倒れてしまった

審判「デイン戦闘不能！ジーニアスの勝ち！」

まずはシンフォニアチームが先制、続く第2戦はクレスVSロイドの主人公対決となった

クレス「ロイド、お互い全力を尽くそう！」

ロイド「ああ！こっちも来い！クレス！」

互いに剣を構える

ラッシュ「クレスとロイドか…」

レウト「同じ声としてがんばれようロイド」

と、レウトはそう言う（レウトのイメージCVはロイドなので）

審判「それでは第2戦はじめ！」

ロイド「はああっ！！」

ロイドが双剣を構えて攻める

クレス「こっちも行くよ！」

クレスも攻める

カキーン！！

お互いの剣がぶつかる音が響く

ロイド「秋沙雨！」

クレス「こっちも！」

お互い無数の突きをするが剣とがぶつかる音だけだ

クレス「魔神剣！」

ロイド「こっちも魔神剣だ！」

互いの斬撃はぶつかり相殺される

ラッシュ「これはかなりの戦いだな」

ルガー「クレスだけでない、ロイドという奴もかなりの腕前のようにだ」

ルガーはそう見る

アオイ「でも思うのはこの二人だけでなくなんかどちらも似てる部分がありそうなのよね？」

サクラ「言われてみればたしかにそうね」

アオイとサクラはそう感じる

観客席からは拍手がいっぱいおくられた

ミゲール「くうくレスの奴く!!俺も目立ってお姉さん達に拍手されたい!!」

ミゲールは勝手にフィールドに立つ

フォック「おっとここでミゲールさんがフィールドに立ったぞ!!これはどのような戦いを見せてくれるのか!!」

一方シンフォニアチームは

ロイド「負けちゃった」

ロイドは落ち込む

クラトス「ロイド、お前はまだまだだ…だがいつか勝てるように精進しておけ…後は私に任せろ」

クラトスがフィールドに行く

ロイド「クラトス…」

そんなロイドはクラトスを見る

クラトス「さて、ミゲール殿…あなたの噂は聞いています…だがこの勝負…正々堂々戦いましょう」

クラトスは剣を構える

ミゲール「よ、よし！絶対勝ってやるぞ！」

と、ミゲールは足を震えたまま短剣、『ヴァルデイン』を構える

審判「第3戦はじめ!!」

ついに第3戦が始まった

クラトス「まずは小手調べだ、ファイアボール！」

クラトスはファイアボールを唱えた

ミゲール 「うわっ!？」

ミゲールは避けた

クラトス「さすがだな……だがこれならどうですか？ イラプション！」

地面からマグマが吹き出たように炎が出てくる

ミゲール「アチチチチチチチチチチ！」

ミゲールの服から炎が飛び移って引火し、ミゲールはフィールドを走り回る

クレス「なにやってんだよ父さん（汗）」

アトリ「あのクソ親父！何やってんだよ！」

チームのみんながミゲールに対してそう言う

ミゲール「しよんなこといったでえ〜!! (泣)」

ミゲールは泣きながら言う、ここでマリアがミゲールに一言言う

マリア「ミゲールテメェ!! 負けたらぶっ殺すぞ!!」

と、愛用の弓である『ミゲールぶっ殺すボウダークネス』略して『ミゲールボウ黒』をミゲールに見せるマリア、これにミゲールは

ミゲール「ヒイイイイイイイイイイイイイイイ!!!!!!!!!!」

冷や汗とかだらだら書きもはや負けたら殺されるというプレッシャーを与えられた

ミゲール「うわああああああああああああ!!!!!!!!!! 魔神剣! 魔神剣! 魔神剣!!」

ミゲールはマリアの脅しにより魔神剣を放つ

クラトス「何っ!?!」

これにはクラトスは驚く

ミゲール「冥空斬翔剣!!」

ミゲールも秘奥義である冥空斬翔剣でクラトスを吹っ飛ばした

クラトス「くっ！？私の負けか」

クラトスは倒れてしまった

審判「クラトス戦闘不能！勝利チーム！ザ・ミゲールファミリー☆
！！」

わああああああああああああああああああああ！！
！！！！！！！！！！

大歓声があがる

ラッシュ「これもはや脅しで勝ったような気がするが（汗）」

ラッシュは啞然とする。こちら観客席も

ユージーン「マリアのお…説得によっての勝利だな（汗）」

フォック「なぜこうなるの（汗）」

ゼロス「マリアちゃんって結構恐ろしいな（汗）」

もはや開いた口が塞がらない

気を取り直して第7試合、チーム絆VSチームドラゴン

第1戦は絆からはキノガッサ、対するチームドラゴンからはライド
が行く、ちなみにライドはピカチュウになってる

キノガッサ「俺が勝ってハニー達をとりこにしてやるぜー！！」

と意気込むキノガッサ

キノ「もう！キノガッサたら！」

キノは不機嫌そうな顔で怒る

ラッシュ「相変わらずだな（汗）」

ラッシュはキノガッサの性格に呆れる

フォック「ゼロス、お前と性格一緒に感じじゃない？」

ニヤニヤ顔でゼロスに言うフォック

ゼロス「冗談じゃないぜ、あんなキノコ頭と一緒にされちゃ困るぜ」

と、嫌がるゼロス、まあ少し性格が一緒なところはあるように思える

審判「それでは第1戦はじめ！！」

キノガッサ「ストライクハンマー行くぜ！」

ストライクハンマー『OK！』

キノガッサはストライクハンマーを出して構える

キノガッサ「（相手はスピードタイプだしなく油断しねえようにしないとな）」

キノガッサのバトルスタイルではスピード系の相手は苦戦しそうだ
ライド「（攻撃高そう〜ってかあのハンマーに叩き潰されたくない
！ここは！）でんこうせっか！」

ライドはでんこうせっかで先制する

キノガッサ「守る！」

キノガッサは守るを発動して防いだ

キノガッサ「今度はこっちの番だ！」

ストライクハンマー『エナジーシューター』

エナジーボールが複数現れ、ライドに向かって放たれた

ライド「うわっ!？」

ライドはかろうじて避ける

キノガッサ「やっぱやりにくいな〜」

キノガッサは苦い表情をする。パワー系のキノガッサではスピード系の相手には不利な感じだ、だがキノガッサの目はあきらめの目をしていない…むしろ燃えていた。

キノガッサ「このぐらいじゃないでバトルは燃えないからな!!行
くぜ！」

ストライクハンマー『ロードカードリッジ』

カシャン！と音になる

キノガッサ「アースグラビティ！」

ストライクハンマー『アースグラビティ』

するとライドは妙な違和感を感じた、するとライドはまるで押しつぶされそうなのを感じていた

ライド「うわっ！？体が…」

動きが鈍くなっていた。一体なぜなのか

キノガッサ「やっぱこの技で動きを鈍くしたほうが正解だったな」

と、キノガッサは言う、アースグラビティは引力を操り、相手の動きを鈍くする技だ

キノガッサ「ついでにこれもだ！バニッシュシード！」

キノガッサは種を投げた、すると蔓が生えてライドを拘束する。これによりライドは動けない

ライド「10万ボルト！」

ライドは10万ボルトを試みるが重力のせいで威力が無効化されてしまった

キノガッサ「行くぜ！バトル部みんなのおかげで作った、俺の新技をな！」

キノガッサはまず種爆弾を投げた

キノガッサ「爆裂の宿る一撃!! 一気に叩く!! 奥義! メガバニツ
シュハンマー!!」

ストライクハンマー 『ロードカードリッジ、メガパニツシュハンマ

ハンマーが光を帯びてライドを叩きつけ、爆発する。光がおさまるとライドはのびてしまい倒れた

審判「ライド戦闘不能！キノガッサの勝ち！」

わあああああああああああああああああああああああ
あああ！！！！

フォック「さすがキノガッサ！バトル部での特訓の成果のより新技を生み出した！！」

ラッシュ「キノガッサもやるな」

ラッシュはキノガッサを見て褒めるようなコメントを言う

キノガッサ「よっしゃあ！！見てくれたかかわいこちゃん達！！」

ピースサインをして観客席のみんなにアピールするキノガッサ

キノ「もう！ いい加減にして！」

キノガツサ 「イデデデデデ！」

キノに引きずられ強制退場となった

フオック「やっぱゼロスと似た部分あるな」

ゼロス「おいおい！作者ゝあんなキノコ頭と一緒にすんなよなゝでもキノちゃんかわいいなゝ俺様ちよつとタイプかもなゝあんな野蛮な凶暴メロンとは大違いだぜ」

「誰が野蛮な凶暴メロンだい？」

と、いつの間にかしいなが入ってきた

ゼロス「って!?!? いつの間にお前入って来たんだよ!?!?」

「さて、たっぷりとお灸を吸ったほうがいいかね」

と、ゼロスを引きずり

ドガバキドゴズゴツ！！

ゼロス「ぎゃあああああああああああああああああ
あああああああああああああああああつ！！
！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ゼロスの断末魔が響く

フォック「さて、気を取り直して第2戦と参りましょう（汗）」

第2戦の対戦カードは

アクア「ここは私が行くね」

アキ「ここは私ね」

アキがフローゼルの姿で行く

アクア「すごいフローゼルの姿でなんですか？」

アキ「そうよ、ソウル・インすればこうして変身できるの」

アキはそう説明した

アクア「でも私がんばる、よろしくお願いします」

アキ「こちらこそ」

二人が挨拶したところで

審判「第2戦はじめ！」

アキ「ソニックブーム！」

アキはソニックブームを放つ、アクアの特徴がちよすいのため水タ
イプの技を出しても回復させられるからだ

アクア「龍ちゃん！」

アクアがそう言うところから水を氷で固めた龍が現れ、ソニックブームを防いだ

アキ「えっ!?!」

これにはアキは驚く、それだけではない

ラッシュ「召喚ができるのか!?!」

リザレ「しかもポケモンじゃないのを召喚!?!」

ラッシュ達も驚いていた

ビリーブ「まさか召喚が使えるなんてね、あの子結構な使い手だね」

リザレ「でもオレはビリーブがダブルバトルで参加しなければ無理だしね(汗)」

バトルに戻そう、アクアの召喚した龍ちゃんという氷のドラゴンによりソニックブームは防がれた

アクア「龍ちゃんはドラゴンポンプ」

龍ちゃんの口から水が発射する

アキ「うずしお!」

アキはうずしおで防いだ

アキ「（厄介ね、あの氷の龍…どうやって戦えばいいのかしら…）」

アキは龍ちゃんをどう倒すのかを考えていた。その隙にアクアは別のを召喚しようとした

アキ「（やばい！？今度は別のを召喚するつもりね！その前にあの龍を倒す！）かわらわり！」

アキはかわらわりで龍ちゃんを攻撃、格闘タイプの技なら氷に通用するからだろう

龍ちゃん「キュル！？」

龍ちゃんはダメージを受けた

アクア「よしっ！行くよ！アストラス！」

今度はまるでフェニックスのようなのが現れた

アキ「嘘っ！？」

アクア「行くよ！アストラス、セイントウォーター！」

アストラスは光の水を放った

アキ「冷凍ビーム！」

アキは冷凍ビームで防ぐ

アクア「こっちも冷凍ビーム！」

アキ「しまった！」

アクアは隙を狙って冷凍ビームでアキの足を凍らせた

アキ「きやつ!？」

アキは足を凍らせてしまう動けなくなった

アクア「行くよ! 龍ちゃんとアストラスは戻って!」

龍ちゃんとアストラスは頷いて光の粒子となり消えた

アクア「氷水に眠る二匹のわが龍よ、今ここに姿を現し、我が力となり、闇を氷水とせよ！ 発動！ 氷水凍化龍 双龍！！」

アクアの前に青い魔法陣が発生し、そこから二匹の龍が現れた

アクア「おいで！ ヒヨウちゃん！ スイちゃん！」

二匹の龍は頷いた

アクア「行くよ！これが私達の力！ヒョウちゃんはブリザードポンプ！スイちゃんはウォーターカレント！！」

ヒョウちゃんは吹雪の混じった水、スイちゃんは超高圧の水流を放った

アキ「きゃあああああああああああああつ！！！！！！！！！！！！！！」

アキは吹っ飛び倒れてしまった

審判「アキ、戦闘不能! アクアの勝ち! よって絆の勝ち!」

わあああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!

フォック「アクアちゃんの召喚によりチーム絆！見事勝利だ！！」

大歓声の中、アクアはアキに近づく

「アクア ありがとうございます」

アキ「あなたの召喚した龍達やフェニックス、強かったわ、また何処かで会ったら勝負しましょうね」

お互い握手した（アクアは前足にある手で）

トオル「強かつたな、絆ってチーム」

リュウ『それほど俺たちもまだまだだっただってことだな』

リュウがトオルに話す

トオル「そうだな…俺達ももつと絆を深めた方がいいかもな」

アキ「ただいま」

アキがフィールドから降りる

トオル「よくがんばったな」

アキ「負けちゃったけど」

アキは残念そうな顔をする

マキ『私達もこれからがんばって強くなればいいのよ、だから私達の分を絆や他のチームとか応援しよう』

リュウ『おっ！それ賛成！でもなく俺本当はラッシュと戦いたかったな』

リュウはそう言う

トオル「いつかまたラッシュと戦う時が来る…その時が来たらあいつとまた勝負すればいい」

リュウ『それもそうだな…俺達も観客席に戻って応援だ！』

チームドラゴン達は観客席へ

一方、絆の方は

ラグ（本物）「お疲れ、アクア」

アクア「ラグちゃんやったよ私♪」

アクアは笑顔で戻ってきた。

キノ「でも2回戦があるから油断はできないし」

タチマル「それに分身の師匠とラッシュさん達と戦えるのも楽しみです
ですから次もがんばりましょう」

ラグ（本物）「そうだね…ラッシュと分身の僕との対戦楽しみだな
」

チーム絆も観客席へと向かう

激しくなったバトル大会…そして逆巻く陰謀…

彼等はどう立ち向かうのか…そして刻々とラッシュ達の出番が近づ
いていく

ラッシュ達ははたしてこの大会で優勝できるのか…！

それはまた次回をお楽しみに…！

バトル194 恐妻とチームの絆（後書き）

結構長く書いたな」（汗）

ラッシュ「結構時間かったけどな（汗）」

がばね「ミゲールはやっぱこうなったか（汗）」

マリアさんが恐ろしく思える（汗）

ラッシュ「でもクレスとロイドのはよかったな」

レウト「でも残念だったな」

まあでもいい感じになったのかな？

ラッシュ「なんでそこで疑問系なんだよ（汗）」

他の人の反応がどうかわからないから、さて次回はついにあのキラの出番が！

????「師匠！見ててください！」

バトル195 ハンターの実力（前書き）

さて、今回はハイライト部分のチームとそして…ホムラ君達のチームとチーム…ブライトが激突します。

ラッシュ「これはどうなるかだな」

それじゃあバトル195

ラッシュ「拳が燃えるぜ!!」

バトル195 ハンターの実力

盛り上がってきたバトル大会…

観客達のテンションは1回戦なのに最高潮に達していた

フォック「さて、続いて第8試合！チーム…ブライトVSドラゴンハーツだ！！」

ラッシュ「ついにホムラのとこのチームの出番だな」

レウト「こりゃあ応援しねえとな！！がんばれよ！！ホムラア！！」

レウトが大声でホムラを応援する

一方、ホムラ達は

ホムラ「なあ…これさあ…本当にこの格好でいくのかよ…」

ハガネ「む、不服か？」

何か服装のことで何かあったようだ

ドラグノフハーツ全員の服装は白のYシャツに黒スーツだ、だがホムラはシャツを出していてジャケットの前をあけている格好、ネクタイは少し緩め、ゴウ（ド）はジャケットを腰に巻いていてYシャツを胸元までだけさせているラフな格好だった、ジンは着こなし

ていて、ハガネはネクタイとスーツ共にぴつしりと着こなしている。
ロウガはまるでホストのような格好でシャツも出していて胸元もあ
けている

ホムラ「いや不服っつか…」

すると

ゴウ（ド）「うおオ！格好えじゃねえかア！♪」

ロウガ「なぁー♪」

ゴウ（ド）とロウガは気に入った様子だ

ホムラ「…ええー」

ホムラは啞然とする

ゴウ（ド）「それにしてもこの紐みたいなものはなんだア!？」

ロウガ「さぁー？」

この二人、結局はファッションセンスがわからないほど気に入った
ように思える

ハガネ「ふふ、気に入ってくれたようだな」

とうのハガネ本人は嬉しそうだった

ホムラ「……」

ジン「…俺はどうでもいい」

もはや開いた口が塞がらない

ホムラ「よし分かった！もういい！行くぞッ！！」

結局はヤケクソになりながらフィールドの前へ

ホムラ「師匠へ、こっちは馬鹿ばかりです…」

と、実況席にいる師匠であるフォックへと言う

フォック「さあ！盛り上がった第8試合！ここからどういくのですよう！！」

だがフォック自体は実況に集中していたのであった

…

第8試合はチーム…ブライドVSドラグノンハーツだ、ブライドはポケモンだけの世界でしかも探検隊のチームなのだ、メンバーはシアンとハーブ、そして茶色のふさふさのポケモン、イーブイのレイナ、そしてなぜか人間の存在もいた。髪は金髪で肉食的な顔立ちでローブを羽織っている。しかもかなりの長身の人間だった、この人間の名はゼアンという、そしてサイコと同じミュウ、控えにはチツプという名のパチリスと蝶のようなポケモン、バタフリーが控えていた

ゼアン「ヒャッハアアーーーーーッ！！！！戦いた

くてうずうずするぜ!!」

と、奇声をあげるゼアン

レイナ「ちょっと静かにしてなさいよ!」

レイナが注意する

シアン「でも相手は元モンスターというか…」

ハーブ「たしか私達ポケモンとは別のモンスターだったような?」

ハーブは首をかしげる

ミュウ「戦ってみるしか確認ないですね…」

冷静にミュウは言う

レイナ「で?まずは誰が行くのよ?」

ゼアン「クッククツ、まずは俺が行くぜ」

ゼアンがフィールドに立つ

レイナ「なんか不安に思えるけど(汗)」

レイナは不安そうだ、一方のドラグノンハーツの先頭は

ゴウ(ド)「俺が行くぜエ!!」

元ティガレックスのゴウだ、ゴウ（ド）は気合十分にパシッと拳を平手で叩く

ホムラ「まあ相手もなんか妙な感じだが頼む」

ゴウ（ド）「おうッ！！行ってくるぜエ！！」

気合十分なゴウ（ド）はフィールドへ

ジン「…あいつ…大丈夫なのか？（汗）」

ジンは呆れた表情をする

ゼアン「おっ！こりゃあ燃えるような相手だなあ〜ヒヤッハア〜」

ゴウ（ド）「こりゃあア！！すげえ相手だなア！！おめえすげえ身
長だなア！！」

なぜか気が合いそうな雰囲気だ

ラッシュ「なんか少し似たような感じもあるが（汗）」

「いや似てないように思えるが少し似てるかもな（汗）」

と、ラッシュとがばねは二人が少し似たような境遇を感じていた

ゴウ（フ）「俺と同じ名前でさらに元ティガレックスというモンスターかよ（汗）」

????? 「ゴウと同じ名前のがいるなんてな」

ゴウの隣にいる一匹のポケモンがそう言う、半分がクリーム色の体毛でもう半分、背中辺りなどは黒い体毛をしているポケモン、バクフーンだ

審判「それでは両者構えて！」

二人は構えた

ゴウ（ド）「いいバトルしようじゃねえかアゝ!!!!!!」

ゼアン「こっちも全力で行くぜ!!」

もはやどちらも戦いたくてウズウズしているようだ

審判「それでは第1戦はじめ!!」

審判の合図とともにゴウ（ド）とゼアンはいきなり殴りまくりの格闘戦を仕掛けた

ゴウ（ド）「オラオラオラア!!」

ゼアン「オラア!!!!」

どちらも目にも留まらぬ速さでパンチとキックを叩き込む

フォック「おっと!!これは格闘戦だ!!どちらも拳と拳とがぶつかりあっていく!!」

ユージーン「どちらもかなりのものだな…ここまでやるとは」

ユージーンは腕を組んで頷く

ゼアン「オラァ!!」

ゼアンは蹴りをかます、しかし

ガンッ!と鈍い音が響いた…ゴウが背中にある大剣を引き抜き、剣の腹で防いだのだ

ゼアン「やるじゃねえか」

ゴウ(ド)「これでもなァ!!」

ゴウは叫ぶ、大剣を右手で軽くもっていた。普通なら大剣は両手でもつのだがゴウはかなり鍛えている腕っぷしなので軽々ともちあげているようだ

ゴウ(ド)「吹き荒ベェ! 虎嵐襲ウ!!」
こらんしょう

ゴウ(ド)はゼアンに大剣の乱舞を繰り出し、横風でゼアンを吹っ飛ばした

ゴウ(ド)「おおッ!!」

ゴウはグッと拳を握る

ゼアン「やるじゃねえかテメェ!!」

ゼアンも負けじと蹴りやパンチを繰り出す

ゴウ（ド）「うおッ!？」

ゴウ（ド）のガードが間に合わないほどのパンチとキックの乱舞だ、だがゴウ（ド）も負けじと技を繰り出す

ゴウ（ド）「百獣の王よオ！」

ゴウ（ド）は大剣を下から真上に振り上げた、すると獅子の形を成した衝撃波が放たれた

ゴウ（ド）「獅子斬波ア!!」

獅子がゼアンを飲み込んだ

ゼアン「チッ負けちゃったか…つええ～なおい」

と言いゼアンは倒れた、ローブはボロボロになっていてかなり効いたようだ

審判「ゼアン戦闘不能!ゴウの勝ち!」

ゴウ（ド）「おっしゃあア!!」

ゴウ（ド）はガッツポーズをした

ゼアン「負けちゃったな…でもなんかすげえ楽しかった」

シアン「ゼアンさんが負けるなんて…」

レイナ「元々人間だから技とかがないのよね（汗）あのゴウ（ドラグノンハーツの）って奴もあなどれないほど強かったわね」

レイナはそう分析する。たしかにゼアンは技を覚えていないためかパンチやキックなどのものしかないのだから：だがここまでやれることはすごいと感じられる

ラッシュ「ゼアンという人間も技を覚えていないのによくやれたな」

ルガー「ラッシュは感じたのか？」

ルガーがラッシュに言う

ラッシュ「ああ、人間だから波動もそんな感じだが：シアンとは同じ何かの波動を同時に感じるけどな」

サクラ「そういえばどちらもロビンソンだったわね？」

サクラは二人の名前の下が同じなのに気づく

ラッシュ「それもあるだろうな：ここからどうするんだシアン達は」

ラッシュ達はシアン達とホムラ達に視線を戻す

第2戦の相手は：

シアン「ここは僕がいきます」

シアンがフィールドに立つ、対するは

ホムラ「ここは俺が行くか？」

ホムラが行こうとした時

ハガネ「待て、ここは我が行こう」

ホムラ「お前が？」

ハガネはフィールドに立つ

シアン「相手はあなたみたいですね…その前に自己紹介です。僕はシアン・ロビンソンといいます」

シアンがハガネに挨拶する。ハガネも

ハガネ「我は元クシャルダオラのハガネ、以後お見知りおきをシアン殿」

ハガネは紳士的に挨拶する

シアン「それにしてもあなただけでなく僕達ポケモンとは違うモンスターまでいて、それにあなた方もポケモンじゃないモンスターだと聞きましたが？」

シアンは気になったので質問する

ハガネ「我らは別の世界のモンスター…とある事情でこの姿となっているのでな」

ハガネはそう応えた

シアン「なるほど…そうだったんですか…」

シアンはそこで口を塞ぐ

ハガネ「では話はここまでにして…参ろうか？」

ハガネは弓を構える

審判「それでは第2戦はじめ！！」

シアン「（ここは相手の出方を見てみよう）気合だま！」

シアンは大きいオレンジ色の球体をハガネに向かって投げた、するとハガネは矢を取り出して弦を引いて構える

ハガネ「射抜け…疾風」

弓が放たれ、弓が風を纏わせ気合だまを貫通した、すると気合だまは爆発し、弓はシアンに向かってきた

シアン「くっ！」

シアンはそれを見抜いて避けた

シアン「（あの集中力…それに僕の技まで射抜くなんて）」

シアンは自分の技を射抜かれたことに啞然とするがすぐに冷静に戻る

シアン「でも近距離からなら射抜くことはできないはず」

シアンはすぐに弱点を見つけた

弓などの遠距離系の相手は近距離での攻撃が苦手、なので近距離で攻めれば相手はノーガードとなる

シアンは素早くハガネに迫る、対するハガネはシアンに狙いを定めて矢を撃ってくる、しかしシアンはそれを軽々と避けていく。シアンはどんどんハガネに近づいていく。そしてついにシアンはハガネに近づいて攻撃技を繰り出す

シアン「（これで！）シャドー」

ハガネ「すまないな」

するとハガネはシアンが技を繰り出す前に弓自体を使ってシアンを叩きつけた

シアン「がっ!？」

シアンは吹っ飛んだ

ハガネ「逃がさん、無弦^{むげん}」

最大10本の矢が射抜かれた、それがシアンに当たってしまいシアンにダメージを与えてしまった

シアン「まさか近距離の技を覚えていたなんて」

ハガネ「我もそれなりの対策はしている。このぐらいで我は驚かない」

ハガネはそう言う、弓を使うのに近距離を使う…シアンには想定外だった

フォック「これはすごい！近距離から弓で叩きつける荒技！」

ユージーン「熟練しているようだな…」

ユージーンはそうコメントする

シアン「こうなったら…でもあの技はアイテムを使ったらだめだから無理だ」

そう、シアンにもオリジナルの技がある：だがその技には投擲アイテムである。銀の針が必要なのだ：しかしこの大会のルールではアイテム使用禁止：つまり投擲アイテムである銀の針なども使うのを禁止なのだ

シアン 「悔しいけど……降参します」

ここでシアンは降参をした

審判「シアン、戦意喪失！この勝負ドラグノンハーツの勝ち！」

わあああああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!

フオック「ここでシアン君が戦意喪失となった！」

ユージーン「オリジナル技がアイテムとしての規定のためか大会では使えないためここで披露できんな」

ホムラ「おっしゃあ！！これで2回戦進出だ！！」

ドラグノンハーツは2回戦進出が決まった

ラッシュ「これは楽しみになってきたな」

レウト「あいつと戦う時は…全力で行こうな」

レウトはめずらしく冷静に言う

続けて第9試合、チームS U Y S V S チームフレイムスター

ここからはハイライトでお送りしよう

まず1戦目はS U Y Sからはウルガモスのカゼル、対するフレイムスターからはモジャンボのクリーパーがフィールドに出た

最初カゼルが虫のさざめきで攻撃するがクリーパーの守るで防がれる、しかしここでクリーパーが日本晴れでひざしが強い状態にさせた、これを好機にカゼルは熱風を繰り出す、しかしクリーパーの特性であるようりよくそにより素早さが2倍となり、熱風を放つ前につばめがえしが決まり、カゼルが戦闘不能になった

2戦目、S U Y Sからはキュレムのゼロ、対するフレイムスターからはガブリアスのハヤトがフィールドに

ゼロは凍える世界を繰り出すがハヤトが砂嵐を発生させて防ぐ、ゼロは攻撃を続けようとしたがハヤトのスピードにより攻撃できなくなり、ハヤトのドラゴンクロードとどくづきを組み合わせた技など合体技により短期決着を決め、フレイムスターが2回戦進出を果たした
そしてついに：

ラッシュ「ついに俺達の出番だな」

ラッシュ達バトル部のチーム、ブレイズソウルの出番が来たのだ

対するはチーム…凛々の明星、ブレイブヴェスベリア一体どんな戦いが繰り広げられるのか！！

バトル195 ハンターの実力（後書き）

ラッシュ「ついにか…」

次回、ついにラッシュ達出陣です！

レウト「かつこよく決めるZE☆」

レウト、お前出るかどうかわからんぞ？

モモ「俺は最初からクライマックスだぜ！！」

クライマックスになってないから（汗）

バトル196 ブレイズソウルVS凛々の明星（ブレイブヴェスペリア）火花戦

ついにラッシュ達の1回戦です。

ラッシュ「油断できないな」

この話で1回戦は終了になります、それではバトル196！

ラッシュ「決めるぜ！！」

※レイヴン好きな方は見ないことをオススメします

バトル196 ブレイズソウルVS凛々の明星（ブレイブヴェスペリア〜火花戦

フオック「さてて！第10試合、バトル部のチーム、ブレイズソウルと凛々の明星とのバトルだ！どちらかが勝てば次はシードである、とある学生の電波放送チームとの対決となるぞ！」

カイ「（どうしよう〜）」

こちら観客席、一人の少年：擬人化カイオーガのカイは何かとまどっていた

なぜそうなったのかは数時間前にさかのぼる

……

カイはトイレとかに行っていた。すると

カイ「ん？あれって？」

カイは見てしまった……

クロアと父親である黒いリザードンとの会話を聞いてしまったのだ、カイはなんとか隠れてバレずに急いで観客席に戻った

……

カイ「（この事をゼウスさんに知らせておいた方がいいかもしれない……とりあえず2回戦の時、みんなに話してラッシュさん達と戦うのやめておいた方がいいかもしれない……）」

カイは色々考える：聞いてしまったのでどうするのかをだ

カイ達のチームのみんなはどうしたんだろうとカイを見ていた

それはおいといて、こちらラッシュ達と凜々の明星のメンバー達

ラッシュ「まずは誰から行くかだな」

最初は誰で行くのかを決めているようだ、控えも出ることは可能なので試合が始まる前に決めることができる

がばね「ここはラッシュは体力温存の方がいいかもしれないんじゃないか？」

がばねはそう提案する

ラッシュ「俺は別に大丈夫だ、たぶんだがユーリとかと戦う時は俺とかの方がいいかもしれないな：あいつの強さは俺にも感じるからな：後はあっちの出方次第だな」

と、ラッシュは凜々の明星の方を見た

一方、凜々の明星

ユーリ「相手はバトル部、これはかなり激しいバトルとなりそうだ」

カール「でも大丈夫かな？」

カールは少し心配そうだ

「でも油断はできませんね」

「まあなんかあつちは暑苦しい男共がいるけど」

と、白い服を着て、ピンクのショートヘアの少女と茶色のショートヘアでゴーグルをつけた少女が言う

「あゝおっさんあんまりバトルとかしたくないね」

と、ぶしようにひげを生やして、和風っぽい紫の服を着た男が不満を言う

「あら、それでもあなた強いと思うわよ？」

と、紫の髪に美しい女性がそう言う

「ジュデイスちゃんもいうね」

と、男はジュデイスと呼ばれた女性にそう言う

ジュデイス「あら、それでもバトルは面白そうだと思うわ」

彼女はそういう…この美貌と肌の露出が多い服は彼女を魅了しているのだろうか…バトルにどう影響されるのか…

「リタ、がんばりましょう」

「まあこういうのも悪くないわね…エステルも油断しないようにね」

白い服の少女、エステルとゴーグルの少女、リタがそれぞれ言う

「?????」「ワンワン！」

一匹の犬？が楽しみのような感じで吠える、左目には傷がつけられていて、黒紫の体毛をしている

ユーリ「ラピード、今回戦う相手は手ごわいから気をしっかりもてよ」

ラピード「ワン！ワン！」

それに応えるかのようにさきほどのラピードという犬？が吠える

「?????」「そうなのじゃ〜うちも大きなマグロを釣ったようにがんばるのじゃ〜」

と、海賊帽を被った少女が言う

ユーリ「よし、それじゃあまずは誰から行くかだな」

ユーリ達は考える

……

まず最初に行くのは

レウト「俺がいくZE☆」

レウトからだ

凛々の明星からは

ユーリ「おっさん、あんたが行った方がいいな」

おっさん「えゝあんな竜を無理やり戦わせるのゝ」

少々不満になるのはさっきの男：名はレイヴンと言うちなみにおっさんというあだ名で呼ばれている

レイヴン「ちょっ！？ナレーションさん！？あだ名じゃないわよ、レイヴンよレ・イ・ヴ・ン！」

リタ「誰と話してるのよおっさん」

リタにもおっさんと言われるレイヴン：いやおっさん

おっさん「ちょっと！？しかもなぜおっさんという名前にしてるのゝ！！？」

さてさて、ゴタゴタしてる場合ではない：バトルの方に戻そう

レウト「ん？相手はおっさんかゝなんかなゝ」

レウトは不満をもっているが

おっさん「竜なのに喋るなんてすごいねゝ」

おっさんことレイヴンはレウトにそういう

レウト「そういうあんただってなんか強い感じるな〜まあ俺は負けないZE☆」

いつものヘタレなりオレウスであるレウト…はたしてこの勝負どうなるのか

審判「それでは第1戦…はじめ!!」

ついに始まったラッシュ達バトル部の戦いの火蓋がきっておとされた!

レウト「行くぜおっさん!! 火炎放射あ!!」

レウトは火炎放射を口から発射する。リオレウスにとってはかなりの技だ

おっさん「ちょっ!?! 熱いつて!?! つて!?! いい加減おっさんの名前戻して〜!! (泣)」

と、泣き泣きに避けるおっさん

おっさん「こうなったらヤケよ、ホイッ!」

レイヴンは天に向かって矢を放つ

レウト「何処狙ってるんだ? でも攻めるぜ!!」

レウトはさらにレイヴンに炎ブレスなどを吐く

おっさん「ちよっ!?! だからマジやめて〜!!」
(泣)

おっさんことレイヴンは炎ブレスを避ける

一方觀客席

ホームラ「なんかあのおっさん、逃げてばかりだな。だがレウトにはがんばってもらわないとな！がんばれよ！！レウト！！」

ゴウ（ド）「ヘタレの実力見せてみろオ！！」

ホームラ達ドラグノンハーツは応援している。ただゴウ（ド）だけは余計な言葉とかが入っているが（汗）」

さて、バトルに戻そうとしよう……すると空からさつきレイヴンが打った矢がレウトに向かっていく

グサツ！

レウト「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!!!!!!!!! イテエエエエエエエエエエエ
エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエエツ!!!!!!!!!!!!」

頭に刺さったためダメージ（頭にだが）を受けた

おっさん 「甘くみちやあゝだめだよ」若人にはまだまだ修行が足り
くん♪」

と、なぜかノリノリになるおっさん

レウト「ううゝ（泣）マジいてえゝけど…だが負けてたまるかゝ！
」

レウトは頭に矢が刺さったままテンションを上げた…無駄にかっこいい感じもあるが…

レイヴン「そうそう、それでこそ若人だねゝ…あゝでもおっさんあんまり激しく戦うのってなんかこうゝいやゝなんだよねゝ」

と、あまり戦う気ないような事を言うおっさんことレイヴン

レウト「でもよ！あんたも結構強いんじゃない！最後まで燃えるように行こうZE☆」

レウトはノリノリだ

おっさん「おゝそれでこそだ若人よ、おっさんも最後までやつちゃうよゝ♪」

おっさんは弓を構える

レウト「よしっ！行くぜ…！りゅうとうげき龍投撃…！」

レウトはおっさんことレイヴンを掴んで空中に飛んで急降下してそこからレイヴンを放して地面にたたきつけた

レイヴン「ぐはっ！？中々やるではないかゝ龍の若人よ…今度はおっさんがいっちゃうよゝあゝ回る回るゝ」

レイヴンはレウトに接近して小太刀と剣を使って大回転してレウトを斬る

レウト「ガッ!?グハッ!?!」

レウトにダメージが通る、リオレウスの鱗は硬いがそれほど貫くほどのダメージだ、ベテランな感じに思われる

レウト「やっぱおっさんつええ」

レウトは改めてレイヴンの強さを実感した

おっさん「そうだろう若人：ってか名前なんて言うの?」

レイヴンはレウトの名前を聞く

レウト「俺はレウト：リオレウスのレウトだZE☆」

おっさん「レウト君か：よしっ!?それじゃあレウト君よ!ここで決着をつけようではないか!」

レウト「おう!おっさんも来い!!」

お互い構える

レイヴン「いちゃうよ：この命に懸ける!」

レイヴンの周りに気を張ったようなオーラが流れていく

レイヴン「轟け鼓動！ブラストオハート！！」

レウト「燃える龍の魂！！空の王者の名にかけて！天へと羽ばたけ！！」

レウトはブラストハートでダメージを受けながら秘奥義を発動する。
レウトの両翼が白く輝き銀色：シルバーソルの両翼に変化する。レウトは空へ羽ばたきレイヴンにつっこむ

レウト「今こそ決めてやる！！えんりゅうてんしょうよく炎竜天翔翼！！」

レウトは炎を纏いレイヴンを吹っ飛ばす

レイヴン「あゝ俺はもうだめだわ」

レイヴンはやけどの痕が出てきて、倒れた

審判「レイヴン戦闘不能！レウトの勝ち！」

レウト「おっしゃあ！！」

レウトは両翼を広げる

ラッシュ「よっしゃ！」

レイラ「さすがですわよ、レウトも秘奥義を」

レウト「おう！そうじゃないと俺が副部長としてのプライドがな」

と言ってもやっぱり彼は副部長なのだから…さて次の第2戦目…こ

こはハイライトでお送りしよう

2戦目はサクラが出陣、相手はリタ

サクラとリタの術合戦が繰り広げられる、しかしリタはタイダルウエイブとサクラの弱点である属性の攻撃を突いて勝利した

サクラ「油断したわ、弱点で攻められるなんて」

ボロボロのサクラは負けたのがショックだった

ラッシュ「よくがんばった、あれだけ術を連発して結構いい線いっていたと俺は思う」

ラッシュはそう言う

サクラ「リタと言う少女も天才魔術師だったからそれなりにポケモンの弱点も見破られていたわね」

そりゃありザードンの尻尾に炎が宿っているのを見ればわかるだろう

ラッシュ「後は俺に任せろ」

ラッシュはフィールドに出る

その相手はやはり

ユーリ「やっぱあんたと戦うことになるなんて・・・」

ユーリは剣を構える

ラッシュ「さて、悪いが俺も負けられないんでな」

ユーリ「あのクロアという奴のことか…それじゃあ俺も本気でいかせてもらうぜ…龍炎のラッシュさんよ」

ラッシュ「その言葉久しぶりに聞いたが…本気で行こうぜ！」

二人が燃える…火花散るこの戦いを

????「試合はどうなっているんだ？」

凛々の明星側から一人の若い騎士が現れた、髪は金髪で短く、騎士の格好をしていた

カロール「フレン！」

フレン…この闘技場に来ている帝国騎士団の隊長で試合のため今仕事を終えてきたのだ

フレン「どうやらユーリはあのリザードンと戦うのか…龍炎のラッシュ…噂ではかなり強いようだが…」

フレンはそう言う

エステル「でも今のユーリは真剣になってますよ…」

フレン「エステリーゼ様…」

エステルはそう言う…彼女はお姫様でフレンがエステリーゼと言っ

ているのは彼女自体がお姫様だってことだ…フレンもその護衛もあるがエステルの護衛は凛々の明星に任せてあり、彼女も凛々の明星のメンバーなのだから…

さてラッシュとユーリのバトルに戻そう…

審判「それでは第3戦…はじめ!!」

ラッシュ「魔神拳!」

ユーリ「蒼破刃!」

ラッシュは斬撃、ユーリは青い衝撃波を繰り出した…二つの技は互いに相殺された

ラッシュ「(相殺か…ならば) 幻竜拳!」

ラッシュは前進し、同時に拳で一閃する

ユーリ「こっちは三散華!」

ユーリは3連続で拳を突き出す、しかし

ラッシュ「と、そこから連牙弾!」

ユーリ「なっ!?!」

ラッシュはフェイントをかけてそこから6連続攻撃を素早く繰り出した

ユーリ「くっ！」

ユーリは吹っ飛ばされるが受身をとった

ユーリ「やるじゃねえか…」

ラッシュ「お前もな…」

互いにそう言う

ラグ（本物）「ラッシュはすごいな…僕でも通用できるのかな？」

キノガッサ「でも戦ったら面白そうだな」

キノガッサはウズウズして落ち着かない

キノ「少しは落ち着いてよキノガッサ」

キノはそんなキノガッサを落ち着かせようとする

ゴウ（フ）「ラッシュも強くなってるな…」

バク「ゴウもよかったじゃないか？あのラッシュというリザードンに鍛えてもらって」

ゴウ（フ）の親友であるバクフーンのバクが言う

ゴウ（フ）「あいつにも借りができた…バトルで当たった時には今の俺を見てもらってほしい…世話になっちまったし」

と、ゴウ（フ）はバトル部での借りを返そうとしている。ラッシュ達のおかげで自分が強くなれたと…

バトルに戻そう…こちらは技と技とのぶつかり合いだ

ラッシュ「殺撃舞荒拳!!」

ユーリ「爪竜連牙斬!!」

斬撃と拳がぶつかり合う

ラッシュ「はあ…はあ…」

ユーリ「かなり消耗しちゃったな…さて飛ばしていきますか!」

ユーリはラッシュに迫る

ユーリ「お終いにしようぜ! 貫け、鮮烈なる刃! 無辺の闇を鋭く切り裂き! 仇名す者を微塵に砕く!」

ユーリは神速してラッシュを斬りつけていく

ラッシュ「くっ!」

ラッシュもかなりボロボロになる

ユーリ「漸毅狼影陣!」

最後の一閃が決まる、だがラッシュは

ラッシュ「俺はそれでも…負けられない！」

ラッシュはセイントリミッツを発動した、そして

ラッシュ「裂破雷拳^{れつぱらいけん}！」

ラッシュは拳から雷撃を溜めてユーリを吹っ飛ばす、そこからさらにラッシュは術を詠唱する

ラッシュ「魂を宿いし炎の剣よ！ディムロスラッシュュ！！」

上空から炎の剣が数個も横から降ってきた、地面に剣が刺さると爆発した

ユーリ「くっ！やばっ！？これはやべえかもな」

ユーリはやばい状況に感じてきた

ラッシュ「そろそろ決めさせてもらうぞ！二つの龍混ざりし時…」

ラッシュの背後から白き炎の龍と炎の龍が現れ二体が合体し白銀の龍へと変貌した

ラッシュ「真の力をここに現せ！！白聖龍炎！！」

白銀の龍はユーリを巻き込むように包み込んだ

ユーリ「俺の…負けだな…」

ユーリは倒れた

審判「ユーリ戦闘不能！よって2回戦進出はチーム・ブレイズソウル！！」

わああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！

ホムラ「ラッちゃんやるじゃねえか！！」

ラッシュ達は2回戦進出を果たした

ラッシュ「大丈夫か？」

ラッシュは倒れているユーリに手を差し伸べる

ユーリ「ああ…いいバトルだった…ありがとな」

ラッシュ「ああ」

お互い握手を交わした

フォック「ブレイズソウル！ラッシュの秘奥義が炸裂した！」

ユージン「鍛え抜かれた経験…ラッシュも若いのに実力もかなりもの…とてもいいバトルだった」

ユージンはそうコメントする

そして最後の第11試合では、とある神様の介入軍団ととある転生の好敵手達が対戦

介入チームのリーダー、時任巧のディアルガの使う時の咆哮で勝利を飾った

こうして1回戦は終了し、一旦休憩となった

……

ラッシュ達は休憩していた

リザレ「ついに2戦目ですか：ダブルバトルはオレとラッシュ先輩でですが…」

サクラ「無理しなくていいわよりザレ」

サクラが心配そうに言う

リザレ「いえ、オレだって足手まといになるのは嫌だから…」

ラッシュ「わかった、2戦目はリザレと俺で行こう：回復技はリザレは覚えているから補助にまわれるからな：リザレは俺から離れないように俺の背中につかまっていたほうがいいぞ」

ラッシュは心配そうに言う

リザレ「わかりました、オレはここでラッシュ先輩をサポートします…」

リザレはそう決意する

ビリーブ「後はしっかりねリザレ」

リザレ「うん、ありがとうビリーブ」

ビリーブに励まされ、リザレは緊張もしてくる

リザレ「（俺も絶対にがんばらないと）」

リザレはそう決意する

次の相手はとある学生の電波放送チームだ…そして2回戦の幕が
あがる……

だがそれぞれのチームやラッシュ達はまだ知らない…

この大会には裏があるということを……

バトル196 ブレイズソウルVS凜々の明星（ブレイブヴェスペリア）火花撃

ラッシュ「1回戦突破だな」

レウト「おっさん強かったな」

なぜおっさんとかにしてるかというレイヴンをいじっていますので（黒）

ラッシュ「結局はそうなるのかよ（汗）」

さて、次回はついに第2回戦…そして急展開をむかえます

バトル197 2回戦開始！大会の裏で（前書き）

ついに大会も2回戦、今回は2試合ハイライトでお送りします。

ラッシュ「おいおい（汗）」

そして今回はこの大会の裏が少し明らかになります…それではバトル197

ラッシュ「かかってこい！！！」

バトル197 2回戦開始！大会の裏で

2回戦：さらに戦いは激しさをます

第1試合カオスリボルバーVSプリムレンジャー

ダブルバトルで御羅&エイクVSレッド&ブルーでの対戦だ

御羅が近距離で攻めるがレッドとブルーは対応してそこからブルーが氷結などの氷系の攻撃を繰り出し、御羅とエイクを倒してプリムレンジャーは準決勝までこまを進めた

続く第2試合もアスベルとソフィーはいい感じに言ったが、マニユーラのマニの鋭い攻撃とクロアの闇属性の攻撃や秘奥義が強力なためか二人ともやられてしまい、準決勝はプリムレンジャーVSダークグライドの対戦となった

ザ・ミゲールファミリー☆チームはこのまま2回戦を通過、第1回戦の第5試合が引き分けだったため準決勝に駒をすすめた3チームが決まった

そして2回戦第3試合：絆VSドラグノンハーツの試合は準備が出来次第のようだ

その裏で：

黒リザ「クロア、これだ：」

こちらクロアとクロアの父である黒いリザードン…彼の名はダーネスと言う

クロア「ありがとな親父…」

クロアはダーネスから渡された赤い液状のドリンクを飲んだ…するとクロアの体に異変が起きる…両腕が見事な力こぶを生み出し、両足などの筋肉も増量した

クロア「次のプリムレンジャーという奴等もこれで潰してやる…」

クロアの周りに黒いオーラが包む

ダーネス「それでいい…私の野望も達成される…フッフ」

不適な笑みをダーネスは浮かべ、去っていった

クロア「俺も行くか…ラッシュ…テメエとの復讐を果たしにな」

クロアは舌を舐めまわし去っていった

それを一部の者が見ていた

ゼルス「やはりあいつと関わっていたのか…ラッシュ…」

ゼルスだった、ゼルスはそのまま去っていった、だがゼルスだけでなく他に見ていた者がいた…それは…

カイ「（やはりこういうことになってる…これはみんなに知らせてラッシュさん達のチームのみんなにも伝えないと…何か取り返しが

つかないことになりそうな予感がする…」

カイだった、カイは言わないと何か取り返しがつかないことになりそうだと思ってしまった。聞いてしまった自分…やはり何かやばいことになるということが起こりうるということが…カイは急いで自分のチームの元へ

…

フォック「さあ！お待たせしました！！2回戦第3試合！！ラグ君（本物）達率いるチーム…絆か…はたまたホムラ君率いるチーム…ドラグノンハーツなのか…2回戦ダブルバトル！果たして勝つのは！！」

2回戦ダブルバトルは1戦しかないと出るのは二人ペアということになる…

まずはドラグノンハーツから見よう…

ホムラ「やっぱ本物ラグも出るかもしれないな…ここは俺が行く…後は」

ロウガ「俺がいくー！」

ロウガがバトルしたいと言う

ホムラ「だけどラグは電気通用しねえぞ？」

ホムラはわかっていた。作者フォックの修行の元でポケモンのタイプなどを教わっていた、大会ではポケモンなどもある…なのでかな

らずタイプを教えられるのだ

ロウガ「それでも俺行くー!!」

やっぱ参加したいようだった

ホムラ「あゝわかった! そんじゃあ俺とロウガで行くみんないいか?」

ゴウ(ド)「犬っころと組みたかったがア! ここはホムラに任せるウー!!」

ジン「…問題ない」

ハガネ「ロウガもバトルしたいだろうからそれでいいだろう」

みんなOKのようだった

…

一方ラグ(本物)率いるチーム…絆は

ラグ(本物)「僕が行くよ、後は誰が行くかなんだよね」

ラグ(本物)は決まりだが後もう一人だ

タチマル「ししよー、ここはオイラが行きます」

タチマルが出たいと言う

ラグ（本物）「そうだね…でも…」

キノガッサ「いいんじゃないか？どうせあっちは男共しかいねえし…カワイ子ちゃんだったら別だが」

キノ「はいはいそれとこれとは話が別でしょ」

キノに耳をつねられてキノガッサ退場

ラグ（本物）「それじゃあタチマル君行くよ！」

タチマル「はい！ししよー！」

二人はフィールドへ

…

互いのチームのペアが並ぶ

ホムラ「ラグ！悪いが勝たせてもらうぜ、なんてたって次はラッチャんと当たる可能性もあるからな」

ラグ（本物）「でも僕も負けないよ、カリバー行くよ」

ラグの大剣、カリバーが喋る

カリバー『ハイ、ラグ』

タチマル「よろしくお願いします！」

ロウガ「こっちこそ負けないぜー!!」

互いに構える

審判「それではダブルバトル…はじめ!!」

バトル197 2回戦開始！大会の裏で（後書き）

ラッシュ「次回はついにラグ（本物）とホムラ達とかか〜」

果たして勝利はどちらに微笑むのか！！

バトル198 ラグ&タチマルVSホムラ&ロウガくホムラの隠された秘奥義く

さて！ついに絆ちとドラグノンハーツが激突です！

ラッシュ「これはどういうバトルなるのか

バトル198 ラグ&タチマルVSホムラ&ロウガ／ホムラの隠された秘奥義

ラグ（本物） 「行くよ！まずはハイドロステインガー！」

カリバー 『ハイドロステインガー』

カリバーから水の短剣が数発もホムラとロウガに向かう

ホムラ 「炎陣…爆華！！」

ホムラは太刀で地面を削り、さらに地面に突き刺して周囲に炎を華のように散らす、水の短剣は炎により蒸発して水蒸気となった

ロウガ 「踊れ、獣連槍！」

ロウガは間合いを計りながらそこから連続で突きを繰り出す

ラグ（本物） 「エレメントカードリッジ！リソーヴ&クリエイト！」

ラグはメタルカリバーで土の壁を作り出し突きを防いだ

ロウガ 「おっ！やるじえねえかー！」

ロウガはバックステップで後退する。ガンランスは前転できないという弱点があるのだがバックステップで後ろに後退することができるのだ

ホムラ 「連なれ、連瞬脚！」

その隙にホムラはラグの懷に潜り込み、瞬間的に連続で蹴りを食らわせる、ラグ（本物）は吹っ飛んだ

タチマル「よくもししよーを！水風斬！」

タチマルは水と風の斬撃を放つ

ロウガ「おっと！そうはいかねえぜー！吼えろ！狼鋭衝！」
ろうえいしょう

ロウガは槍を素早く突いて狼の形を成した衝撃波を放ち、水と風の斬撃を相殺した

ラグ（本物）「（すごい…ホムラもここまで強くなってると感じる）
」

ラグ（本物）はホムラが強くなったことを感じていた。カリバーを持つ手が重く感じる…

ホムラ「行くぜ！」

ホムラの太刀と片手剣を構えてラグ（本物）をきりつけようとする。しかし

カキーン！

タチマルがホタチを使つてガードした

ラグ（本物）「ありがとうタチマル君、行くよ！カリバー！」

カリバー「エレメンタルチェンジ、ウォーターカリバー」

カリバーが水の大剣へと変化する

ラグ「ウォーターストリーム！」

ラグがカリバーを振ると水を含めた暴風がホムラとロウガに襲いかかる

ホムラ&ロウガ「うわぁー！」

二人は暴風に巻き込まれる

ラグ「サークルレディアソード！」

複数の水の剣が二人に向かって放たれる

ホムラ「やばっ！」

ホムラは咄嗟に片手剣と太刀で水の剣を打ち落とす、ロウガは槍を横なぎに振り打ち落とした

ホムラ「やっぱ本物はつええな」

ラグ（本物）「いつも分身の僕がみんなを見ていたから…それに僕も全力でバトルできたことがうれしいんだ」

と、ラグはそう言う、それと同時にホムラとロウガが着地する

ホムラ「やっぱそうこねえとな」

ニイツとホムラは笑う

ラグ（本物）「なら僕も本気で行くよ！」

カリバー「ロードカードリッジ！！」

セイントカードリッジがカリバーにセット、そしてラグは金色の風を纏いデンラージ状態になる

タチマル「こっちもリミットバースト！！」

タチマルはリミットバーストを発動した、タチマルの周りに風が吹く

本当の力：彼らの絆を

ホムラ「俺も本気で行くしかないな…（師匠：ごめんなさい…あなたの時の力を少し使いますが、それをお許しください）」

なぜかホムラは心の中で師匠であるフォックに謝る

ラッシュ「どうやらこっちも本気のようにだな」

ラッシュ達は観客席で互いのチームのバトルを見ている

タツキ「これが本物のラグの本当の力なんですな」

ラグ（分身）「うん、それでも僕とは一心同体…これはホムラが勝てるかどうかわからないからね」

たしかに、ホムラとロウガが勝てる可能性はあるかどうかともわからない」

エルブ「だがラグはんもホムラはんもなんだか笑っているような」

ラッシュ「言われてみればそうだな…あいつらもいい感じになってきたじゃねえか…どんな技を出すのか楽しみだな」

レウト「そうだな」

ラッシュやレウトは期待感をワクワクさせていた

ラグ（本物）「行くよ！輝くは雷光、今我が手に集いて、悪しき闇を広く、大きく、包み込め！」

ラグは詠唱し、それを唱えると小さな金色の電気の球体が数発も現れ、少しずつ大きくなった

ラグ（本物）「雷空球封！！ライトニングエミッション！！」

その瞬間、球体は巨大化してホムラ達を包み込んだ

ラグ（本物）「これで」

しかし

ロウガ「おっと！こっちにも雷を使うのいるんだよな」

タチマル「えっ！？」

ラグ（本物）「嘘っ!？」

二人は驚いていた、なぜならロウガはランスをアース代わりに使ったのだ：しかも背中には電気が流れている

ロウガ「俺は元ジンオウガなんだー♪だから電気はぜーんぶ俺が吸収してやったぜー♪」

ロウガは元ジンオウガのため、電気を吸収してしまったのだ：元々ジンオウガは電気を背中にためる：そして電気がある程度にたまると放電するのだ

ロウガ「今の俺は本気になったぜー!」

ホムラ「危なかったな、ロウガを入れていなかったら、雷光を食らわないで済んだな」

ホムラはかろうじてロウガから離れていて、さらに雷光が当たらない範囲まで離れたのだ

バチバチとロウガの周りに電気が流れていく

ラグ（本物）「くっ！電気じゃ無理があるみたいだね」

ラグ（本物）は苦い表情をする

ラグ（本物）「でもここで負けるわけにはいかないよ！行くよ！サードアビリティ！インクリネイションフォーム！」

カリバーが光輝き、カリバーは剣から弓へと変化した

ラグ（本物）「闇を貫く正義の弓、このインクリネーションで行くよ！」

ホムラ「なら俺も本気で行くぜ！（師匠…あなたの時の力を少し使います…お許しください）」

ホムラは構える

ロウガ「面白くなってきたー！！」

ロウガは槍を構えて笑顔になる

カリバー「ロードカードリッジ！」

カリバーのカードリッジに3発もロード、そして弦と矢が生成され、ラグ（本物）は構える

ラグ（本物）「これで決めるよ！！聖光雷弓矢！！」

ラグ（本物）は弦を離す、矢はまっすぐにホムラとロウガに向かう

ホムラ「閃け！魔炎閃」

ホムラは摩擦の炎を飛ばし、矢を相殺させる、ロウガが槍を構えて

ロウガ「行くぞ！うおおおっ！！」

体内の雷が槍に注がれて形態を変化させる

ホムラ「師匠：俺に力を…！」

ホムラは目をつむりながら祈るようにする

ホムラ「解放するっ…！」

ホムラは開眼する、すると時間が止まったような感覚がした

ラッシュ「（なんだ？作者が時の力を使った感じじゃないのにホムラから時の力を感じる）」

ラッシュはホムラの力を何か感じていた

ホムラ「刹那に煌めく時の躍動よ！今その姿を我に示し、万物を凌駕する神々の軌跡へ…！」

宇宙を模した異次元空間が現れラグ（本物）を攻撃と共に閉じ込め、そこからホムラは素早くラグ（本物）に迫り

ホムラ「満ちよ…！輝け…！永久に響け…！神羅！万象おおッ…！！」

ホムラ自身が銀色に輝き、超高速でラグを連続で斬りつけていった宇宙を模した異次元空間は消えたと同時にスターライトインパクトは打ち消され、ラグ（本物）は倒れた

審判「ラグ（本物）戦闘不能…！よってドラグノフハーツ！」

わあああああああああああああああああああああああああ！

!!!!!!!!!!

フォック「（今は…俺の時の力？ホムラ君には教わっていないはず？時の力はホムラ君では扱いきれない力なのに…一体？）」

フォックは今の技に疑問に思っていた。

ユージーン「うむ、まるで時が止まったような感覚だったな…タイムストップのような感じも感じるが…」

ユージーンもコメントがあやふやになる

ラッシュ「今一体？」

ラッシュは啞然とする

レウト「すげえ…！！一瞬で！！」

レウトが目キラキラさせる

クラウド「今…なんか時が止まったような？」

クラウドも時の感覚を感じていた

タツキ「（本物のラグを一瞬で…ホムラさんも成長しましたね…）」

エルブ「なんやったんや？今のは？どうやって一瞬で倒したんや？」

タツキはホムラに関心し、エルブはどうやって一瞬で倒したのか疑問に思っている

ホムラ「（くっ！やっぱこの技使うのは負担になるな…ラッシュ達には言えないな…それに師匠にも言うわけにはいかないし…）」

ホムラは少し苦しい表情をする、幸い観客やチームのメンバー達などは一瞬で倒したと思いこんでいるようだ

ホムラ「（これ以上は見せられないな…ラッシュと戦う時は使わないようにしよう…）」

ホムラはそう決意する

クロア「（一瞬か…面白くなってきたじゃねえか…だが相手はテメエらみたいな奴らじゃねえ…ラッシュ達バトル部をな…）」

クロアは不適な笑みを浮かべる

そして次の試合はラッシュ達バトル部のチーム、ブレイズソウルVSとある学生の電波放送の対決だ…ブレイズソウルからはラッシュとリザレ、電波放送からは圭とカイだ

圭「（おいカイ、本当なのか？）」

カイ「（うん…でもラッシュさん達にも話さないといけないから…勝負に負けるかもしれないけど…でも伝えないといけないんだ…ラッシュさんが大変なことになってるから）」

小声で圭とカイは会話する

ラッシュ「何話しているんだ？」

ラッシュは首をかしげる

リザレ「作戦か何かを考えているんじゃないでしょうか？」

リザレはそう言うが彼らの考えはそういうものではない

審判「それでは2回戦第5試合開始！！」

試合が開始された

バトル198 ラグ&タチマルVSホムラ&ロウガくホムラの隠された秘奥義く

ラッシュ「一体なんだったんだ？」

俺にもわからないよ

ラッシュ「めずらしいな、作者でもわからないとはな…ホムラの師匠なのに」

うゝん、何かありそうな気がするな…わからない

ラッシュ「お前本当にホムラの師匠なのか？」

師匠だよ？ホムラ君がそう言ったんだから

ラッシュ「おいおい（汗）」

それより、今回はラッシュとリザレ君だよ

ラッシュ「そうだな、リザレを守りながらになるな」

まあそうかも知れど…リザレ君も考えがあるし

ラッシュ「考えか…」

バトル199 託された絆を胸に（前書き）

リザレ「ついにオレの出番だね

今回はリザレ君が活躍します

ラッシュ「どうなるかだな」

それではバトル199

リザレ「が、がんばります」↑緊張している

バトル199 託された絆を胸に

カイ「（今は試合だから試合に集中しなきゃ）ハイドロポンプ！！」

カイはハイドロポンプを繰り出す

ラッシュ「リザレ！しっかり捕まってるよ！」

リザレ「はい！」

リザレはラッシュの背中に乗ってラッシュは空を飛んで避ける

カイ「冷凍ビーム！」

カイは冷凍ビームを放つ、擬人化でも元はカイオーガのカイ

ラッシュ「火炎放射！」

ラッシュは火炎放射で冷凍ビームを相殺させる、そこから圭が大剣を振りかざすがラッシュはパンチして防いだ

リザレ「フレイム9！」

リザレは火球を放つ

カイ「守る！」

カイは守るで防いだ

ラッシュ「厄介だな…カイはカイオーガ自体だから伝説系だと倒すには結構骨が折れそうだな」

ラッシュは苦い表情をする。カイと人間である圭は強い、なんとかしないかぎり勝つことは難しい…ここでリザレが口を開く

リザレ「先輩、僕にいい案があるんです…」

ラッシュ「いい案？」

リザレ「ちょっと耳を貸してください」

リザレはラッシュに耳打ちする

ラッシュ「（…何っ！？でもそれじゃあお前が…）」

リザレ「（オレだけ足手まといは嫌なんです…だから…先輩！）」

リザレはラッシュに訴えかける

ラッシュ「（…わかった…今はお前に託すしかないかもしれないな…）」

リザレ「（オレが技をやっている間にラッシュ先輩はオレを守ってください）」

ラッシュ「（わかった！）」

リザレはでかりザ変身でリザードンへと姿を変える、リザレはラッシュに自分の尻尾の炎をあてかう

カイ「（一体何を？）」

圭「（これはチャンスかもしれないな）」

圭は攻める

ラッシュ「（守るじゃ何度も使うわけにはいかねえからここは）フレアソウル！」

ラッシュはフレアソウルを圭に放つ

圭「うわっ!？」

圭は咄嗟に大剣でガードした

カイ「水の波動！」

カイは水の波動を放つ

ラッシュ「（どうする…水の波動が迫っている…リザレが今がんばっているんだ…俺も期待に応えるようにしねえと…そうだ！閃いたぞ！）灼熱の守りよ、フレアヴォルガニック！」

ラッシュの目の前から溶岩が吹き出て水の波動を防いだ…すると溶岩は固まって壁となった

カイ「えっ!？」

圭「こんなもの！壊してやる!!！」

圭は大剣で壊そうとするが

ガンッ！

圭「かてえ〜！」

思ったほど硬かったのだった

カイ「冷凍ビーム！」

カイは冷凍ビームを繰り出す、壁は凍ったが

カイ「割れていない!?」

そう、割れていないどころかヒビ割れの後がなかったのだ

サフィー「すごいな〜バトル部のチーム」

キララ「アタイ達も戦いたかったな〜」

チームS U Y Sがうらやましくバトルを見る

カゼル「すまない姉さん」

ゼロ「俺達が油断していた」

カゼルとゼロ：ウルガモスとキュレムが謝る

キララ「いやあたい達もまだまだだってことだ、帰ったら特訓しな

いと」

ゼブライカのキララがそう言う

サフィー「そうね、また大会があったら出場して優勝できるようにしたいね」

ダイケンキのサフィーがそう言う

一方バトルフィールド

カイ「冷凍ビームがこうも簡単に吸収するなんて」

圭「なら地震で！」

圭は地震を繰り出そうと構える

ラッシュ「（やばい！この技食らったらリザレの技は失敗してしま
う！）」

果たしてラッシュ達の運命は！？

圭「地震！」

圭は地震を繰り出した、溶岩の壁はヒビができて割れた…煙が包み込む

圭「これで…」

圭は勝利を確信した…だがその時

ラッシュ「炎の竜巻よ…フレアトルネード!!」

圭・カイ「うわっ!？」

圭とカイは炎の竜巻で吹き飛ばされた

煙が晴れるとそこにはラッシュがいた…しかも炎を纏い、リザレは元のリザードに戻り倒れていた

ラッシュ「ありがとなりザレ…後は俺に任せろ」

ラッシュは術を詠唱する

ラッシュ「降り注げ!魂の炎!!ソウルストライク!!」

圭とカイの横と上空から炎の弾が降り注ぎ、上空にいた二人に当たった

二人は落ちて倒れてしまった…火傷した痕がついている。リザレの技…きらめくほのおという技によってパワーアップしたのだ…その技によりさっきの術の威力もあがったのだ

審判「圭・カイ!両者戦闘不能!2回戦勝利チームは!ブレイズソウル!」

ラッシュ達は2回戦を勝ち抜いた

ホムラ「ラッシュちゃんはすげえけど…リザレもすげえ!!」

ゴウ（ド）「やるじゃねえか！」

ホムラ達は観客席で二人のすごさに歓喜をわかせる

ロウガ「すげー！」

ハガネ「さすがはバトル部の部長だ」

ジン「……」

別の観客席では

ユーリ「ここまでやるなんてな」

エステル「でもリザレというリザードも自分の技で倒れてしまいましたが大丈夫でしょうか？」

エステルは心配するが

ユーリ「技の反動だろう、しばらく休めばなんとかするとは思いますが」

ユーリはそう言う、エステルのほっとけなく行きそうというのがあるためか……

レッド「すげえくなやつば」

ブルー「それがラッシュだからな」

シルバー「あれでも実力はすごい方だからな」

グリーン「オイラ達も油断できないっすね」

イエロー「でも僕達の相手ってクロアというリザードン率いるチームだよ？」

プリムレンジャーはラッシュを見てそう言う、レッドはバトル部に来ていないためブルー達が説明をした：だがレッドも理解できているのかできていないのか時々名前を間違えたりもあったりする

レッド「ラッシュか：一度手合わせしてえな：その前にクロアという奴も何かありそうだし本気でいくか」

レッドは本気でいくかと言う

ブルー「いやリーダーだと一瞬で勝ちそうな感じもあるんだが（汗）」

果たして彼らは勝てるのだろうか：

……

ラッシュ「リザレ、大丈夫か？」

ラッシュは倒れているリザレを運びながらリザレに聞く

リザレ「ゲホゲホ、オレ：なんとかお役に立てましたか？」

リザレはせきをしながらラッシュに聞く

ラッシュ「ああ、お前のおかげで勝てた：ありがとな」

ラッシュはリザレに感謝する

サクラ「とりあえず医務室に運んだ方がいいわね」

ユーリ「それなら俺が運ぶ」

そこへユーリが現れた

ラッシュ「ユーリ…」

ユーリ「あのお姫様がほっとけないとうるさいんでな、回復とかは俺の仲間に任せてラッシュはバトルの方に集中しとけ」

そうユーリは言う

ラッシュ「ありがとな…リザレを頼んだ」

ラッシュはリザレをユーリに受け取る

ユーリ「今医務室に運ぶからな、しっかりしろよ」

リザレ「う…うん…」

リザレはユーリに運びこまれ医務室へ

ラッシュ「さて、ついに準決勝か…油断できないな」

ルガー「本格的になってきた…油断するな」

と、そこへ

カイ「あの〜」

ラッシュ「圭にカイ…それに…」

そこには圭達率いるチームがラッシュ達の下に来ていた

カイ「よかった…ラッシュさん！実はお話があるんです。もちろんバトル部のみなさんにも」

がばね「話？」

レウト「どういうことなんだ？」

リリー「何かあったの？」

と、みんなカイ達に視線を向けて言う

カイ「はい…実は僕見たんです。クロアとクロアと同じ黒いリザードンがドーピングをしていたことを」

バトル部全員『えっ!?!?』

バトル199 託された絆を胸に（後書き）

ラッシュ「色々動きだしてきたな」

俺にとっては悪役を書くというのをやるのは神経つかう（汗）

ラッシュ「そりゃごくろうなこったな」

次回：チートな戦いとなりそうです

ラッシュ「なりそうってなんだよ（汗）」

バトル200 強まる闇〜プリムレンジャーVSダークグライド（前書き）

ついにバトル200に達成!!

ラッシュ「やったな!!」

ここまで書けたのはみなさまのおかげです。ありがとうございます

ラッシュ「みんな!これからも応援してくれよな!」

今回はダークはいるので閲覧注意です。それじゃあ記念すべきバトル200

ラッシュ「ありがとう!!」

バトル200 強まる闇〜プリムレンジャーVSダークグライド

ラッシュ「やはりそうか…」

ラッシュは頷いた

レウト「なあ？クロアという奴がドーピングなんて…どういうことなんだ？」

サクラ「たしかに気になるわね、なんなの？」

サクラはカイに質問する

カイ「それは…みなさんにも辛いことなのですが…ラッシュさんを殺すとか何とか言っていたんです」

レウト「なんだと!?!」

タツキ「まさかドーピングしてまでラッシュさんに勝つつもりなのですか…」

タツキは驚くが、すぐさま冷静へと戻る

エルブ「なんでラッシュはんを殺すとかになるんや！」

エルブが怒鳴る

ラッシュ「みんな、ここからは俺が話す」

がばね「ラッシュュ…」

ラッシュュはクロアとは前に戦ったことや、大会前に出会ったことなどを話した

モモ「そうだったのか…」

リリー「次の相手はリーダー達…大丈夫なのかな」

リリーはレッド達プリムレンジャーを心配する。リリーは元々プリムレンジャーの一員でポジションはピンクなのだ

がばね「たしかにリーダー達が心配だな、観客席に戻ってリーダー達の試合を見に行こう」

ブレイ「そうだな…あいつらもかなり強いがドーピングしてまで勝ちてえなんて俺は認めねえぞ!!」

ブレイは怒りをあらわにする

ラッシュュ「急いで観客席に戻るぞ！」

柊「私達も行きます！」

圭「待て！ゼルスさんから俺達はそいつらの事などを調査しに行くんだ、俺達はクロアなど色々調べてくる、カイだけはラッシュュと一緒にに行け！それと巧達にも伝えて不戦勝にして俺達の方に加勢するというのを伝えておいて来る！」

圭達は頷いて去った

カイ「ラッシュさん行きましょう！」

ラッシュ「ああ！」

ラッシュ達は急いで観客席へ

……

レッド「ついに準決勝だな」

レッドはいばるように言う

グリーン「リーダー、いばっても何も変わらないっすよ（汗）」

グリーンは静かにつっこみをいれる

ブルー「クロアという黒いリザードン：こうなると厄介な相手だ：勝つぞ」

ブルーは冷静に言う

イエロー「で？誰が出るの？たしか4人フィールドに立つんだよね？」

イエローはそう言う

レッド「まず俺がいないとだめだろ、あのリュックとかいうリザードンがハイライトぐらいにしか出していなかったんだしな！」

悪かったな!! ってか俺はフォックという名前だ!! (怒) by
フォック

シルバー「だが俺じゃクロアという黒リザードンの炎で溶かされる
な」

ブルー「それじゃあシルバーは見ている…その方がいい」

ブルーの言葉でシルバーはうなずいた

レッド「よしっ! 行くぞ!!」

レッド達プリムレンジャーがフィールドに歩く

一方観客席

ラッシュ「どうにか間に合ったな」

ラッシュ達は観客席に到着

レイラ「そういえばバルキリー達がいらないようですね」

レイラはバルキリー、テラキオ、ビリーブがいらないことに気づく

カイ「3匹は圭達と一緒にいったようです」

ラッシュ「圭達とか?」

どうやら3匹は圭達と一緒に調査に行ったようだった

ラッシュ「（このバトル：嫌な予感がする、それにあの3匹のことだ…大丈夫だろう）」

サクラ「あっ！始まるようよ！」

ラッシュ達は一斉に視線をバトルフィールドに向けた

……

レッド「よしっ！全力で行くぞ！！」

レッド達は構える

クロア「フン！テメエ等なんて興味ねえ…だが容赦はしねえよ…地獄を味わってやるよ…」

クロアは不適にプリムレンジャーの4人を睨んだ、残りはマニユーラのマニ、バンギラスのバギス、ドクロッグのドクロがフィールドへ

審判「それでは準決勝第1試合…開始！！」

ついに試合が開始された

リアモーション
RMバトルのルールはフィールド内で8人が戦い、先にチーム4人全員を倒せば勝ちとなる

マニ「つじぎり！」

マニはつじぎりを繰り出す…対象はイエローだ

イエロー「電磁分身！」

イエローは雷を自身の形に変えて分身を作りだした

マニ「どれが本物なんだい…」

マニは迷う、本物は右か…左か…

マニ「本物はあるた！」

マニは右のイエローに攻撃した

イエロー「残念」

マニ「なっ!？」

マニは触れたとたんに麻痺してしまった

イエロー「僕の分身に触れると麻痺しちゃうよ、ライティングコン
ビネーション！」

イエローの両手に雷の剣が宿る、そこからマニを連続で斬りつけた

マニ「あたいが…負けた…」

審判「マニ戦闘不能!!」

クロア「チッ！」

クロアは舌打ちする。ダークグライドは残り3人

イエロー「しびれごな！」

イエローは黄色の粉を放つ

バンギ「うわっ!？」

バンギは麻痺していった

バンギ「ぐぬぬ…このやろ」

麻痺してバンギは動けない、そこから

グリーン「いくっす!ビッグトス！」

グリーンは巨大化して巨大化した両手でバンギを打ち上げる

グリーン「続けてジャイアントスマッシュっす！」

続けて飛び上がってバンギの上に回りこみ両手を組んでハンマーのように振り下ろしてバンギを下に叩き付けた

グリーン「フィニッシュっす!メテオインパクト!!」

そして大きく飛び上がって全体重を片足にかけてバンギを思い切り踏みつぶした

バンギ「ぐぎゃあああああああああああああああ
あああああああああああああああああ
あっ!!!!!!!!!!!!!!

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ?

プチッとつぶれた音とドカーン！という音が会場に響いた

グリーンがどくとバンギはボロボロでつぶされていた

グリーン「決まったっす！ギガントコンボ！」

グリーンはコンボが決まってうれしそうだ

審判「バンギ戦闘不能!!」

ダークグライドはますます不利な状況になってしまった

ドクロ「毒づき！」

ドクロは毒づきでブルーを攻撃

ブル
「無駄だ」

ブルーは氷の槍のつかむ部分で防いでいく

ドクロ「ならへドロ爆弾！」

ドクロはブルーから離れてヘドロ爆弾を繰り出す

ブルー「アイスシールド」

ブルーの目の前から氷の壁が現れ、ドロ爆弾を防いだ。

ブルー「ブリザードスピア・極」

ブルーの槍……ブリザードスピアが変化を起こす、槍の装飾が派手になっていった。さらに周りは氷点下の温度となっていた

ブルー
「極猛烈突き」

ブリザードスピアでドクロを連続で突いていく

ドクロ 「ぐわっ！？ がっ！？」

ドクロは連続突きに耐えられず倒れてしまった

審判「ドクロ戦闘不能!!」

わあああああああああああああああああああああ
 あああああああ！！！！

ゼロス「これはすげえ！プリムレンジャー強いぞ！」

フォック「さすがプリムレンジャー、あつというまに残るはクロアのみとなった!!」

プリムレンジャーの強さに観客は驚く

「みんな！がんばれ！！」

リリーは一生懸命応援する

「リーダー達ががんばってくれ！」

がばねも応援する

ラッシュ「強いな…ここまで強いなんてリリー達にとっては勝てるかどうかだな」

ラッシュはうなずいた

タツキ「バトル部で鍛えたおかげもあってかブルーさん達の動きもよくなってますね」

エルブ「さすがや…レッドという赤い奴はどうなのかわかんようやけど」

エルブはレッドの実力がわからない感じだった…バトル部にはブルー、イエロー、グリーン、シルバーの4人しか来ていなかったのだから

…

レッド「よし俺の活躍みたか！」

ブルー「お前は活躍してなかっただろ！」

ブルーがレッドにつっこむ

だが…

クロア「それで勝ったつもりか…？」

レッド「はぁ？何言ってるんだ？後はお前だけしかいねえから俺達の勝ちだ」

レッドはそう言うが…彼らは甘くみていた

クロア「貴様らまとめて片付けてやろう…俺がこの手でな」

クロアの目が紫になる

シュン！

クロアは消える

グリーン「消えたっす！？」

一瞬で消えて4人は戸惑う

ブルー「落ち着け！ここで戸惑っては何も始まらない…そこだ！」

ブルーは槍を突く

クロア「俺の動きについてくるとはちっとはやるなテメエ」

クロアは槍をつかんだ、槍をつかんだ手を放して後退する

レッド「フレア・ボム！」

レッドは両手に拳大の火球を生成し、それをクロアに向けて投げた…すると爆発が起きた

レッド「これで」

しかし

レッド「嘘だろ!？」

レッドは驚く

少し火傷した痕があるがクロアは効かない様子だった

ブルー「炎タイプだから効くはずないだろ！」

ブルーにまたもやつっこまれるプリムレンジャーリーダー、レッド

イエロー「でも飛行タイプもってるならこれで！ガルサンダー！」

イエローは体内の電気を3つに分けて分解し、雷エネルギーを放つ

クロア「その程度で俺を倒すなんてあめえんだよ!!！」

クロアは両手に黒いのを纏い3つの雷エネルギーを黒いオーラを纏った拳で相殺し、そこからイエローに迫る

イエロー「わっ!？」

クロア「まずはお前からいけ」

クロアはそう言うといエローを殴り吹っ飛ばした、イエローは吹っ飛ばされ観客席の前にしかけてあるバリアーにぶつかり目を回して

倒れてしまった

審判「イエロ―戦鬪不能!!」

「がばねなっ!？」

「そんな!？」

がばねとりリーは驚きの表情と悲しい表情をする

グリーン「やばいっす!？」

だがそんなグリーンにも

クロア「逃げられると思うな？魔王煉獄拳！！」

クロアの両拳から黒い炎が出てグリーンを殴る

グリーン「うわあああああああああああああああああああああああつす!!!!!!!!!!!!」

グリーンもイエローと同じく吹っ飛ばされバリアにぶつかり倒れた

審判「イエロ―戦闘不能!!」

ブルー「まさかイエローまでもが…」

レッド「おい！これ俺の活躍なしで終わるのか！！？」

と、レッドはなぜか活躍の事とかでパニックになっていた

ブルー「アホか!!」

ブルーはまたレッドにつっこみをいれた

クロア「おしゃべりしてる暇があるか？」

ブルー「くっ！」

ブルーはクロアが放った魔神拳という斬撃を放つ技をよける

クロア「まだ俺の攻撃は終わってないぜオラオラオラァ!!」

クロアの連続パンチがブルーに襲い掛かる

ブルー「くっ!アイスガード！」

ブルーは再びアイスガードを繰り出した、だが

クロア「無駄だ!!殺撃爆裂拳!!」

クロアは連続でパンチする。パンチすることにより爆発が氷の壁に響き、ヒビが割れる

ブルー「何っ!？」

ブルーは驚きの表情を見せる

バリーン!!

氷の壁が壊れて鏡のように散り散りとなってしまった

クロア「オラァ!!」

ブルー「ぐわあああああああああああああああ
!!!!!!」

ブルーも吹っ飛び壁に叩きつけられて倒れてしまった

審判「ブルー戦闘不能!!」

ラッシュ「残っているのはレッドだけみたいだ…」

リリー「そんな!みんな強いのに倒れるなんて!」

リリーは涙が出てしまう

がばね「あんな奴がまさかここまでとは…ただでさえドーピングを
使ってそこまでして勝ちてえのか!!」

がばねは怒鳴る、観客は歓声どころか静かになる

フォック「まさかここまでやるなんてね」

実況席でフォック達は実況マイクをOFFにして見ていた

ゼロス「なんて強さなんだ…」

ゼロスも驚く

すると

帝国騎士兵士「大変です！」

フォック「どうしたの？」

帝国騎士団の兵士がフォック達3人の元に駆けつけた

帝国騎士兵士「これを！」

そう言うと1枚の手紙をフォックに渡した、早速フォックは手紙を読んだ

フォック「何々…『フリーディセNDERであるあなた様に動いては困る…ドーピングだと疑っているようだがもしダークグライドを失格にすれば…そのときはこの会場に仕掛けた爆弾を一斉に爆発させる…もし誰かに知らせてもすればその時は会場を爆発させる…会場に來ている者達全員をな…ククククッ』…」

ゼロス「って！？これはやばすぎないか！？」

ゼロスはあわててしまう

フォック「落ち着いて…君はご苦労だけど…この手紙の内容を絶対他の人に言わないでね…フレンにも」

帝国騎士兵士「はっ！」

帝国騎士兵士は去った

ユージーン「うむ、これでは」

ゼロス「一体誰なんだ…この手紙を送ったのは…」

ゼロスが真剣な目になる

フォック「おそらくチーム…ダークグライドに関わる者の仕業だろう…それにここは監視カメラはないが…実況席には観客席などが丸見え…つまり行動すれば完全にそいつは爆発させる気だろう…それにここにはトイレも近いからなんとかなるけど…」

ユージーン「外など出られないということか？」

ユージーンはそう言う

フォック「そう、それに盗聴器も仕掛けてある可能性もある…そうになると声も筒抜けということだ」

ゼロス「おいおい！？それじゃあどうすりゃあいいんだ」

ゼロスは困惑する

フォック「大丈夫…とりあえずおとなしくしておこう…そうしたら俺やみんな天国にまっしぐらだ」

ユージーン「ならそうするしかあるまいな」

3人は席に座った

フォック「(だけど俺を舐めては困るのよね)犯人さん…ゼロス聞

こえるか?」

ゼロス「(ああ、聞こえる…まさか念話を使うとはな)」

ゼロスはフォックが念話を使えるのに驚く

フォック「(ちよいとシャオルーンから教わってね…念話の使い方を)」

ユージーン「(なるほど…それなら喋らなくても伝えられるな)」

ユージーンは頭の中でそう会話する

フォック「(それじゃ俺は彼らに伝えておかないとね…爆弾を探して解除するように…もちろん犯人が観客席で見ていることも考えられるからね…)」

フォックは早速念話を使ってフレン達などに手紙の事などを伝えに言った

……

クロア「残りはテメエだ!!」

クロアはレッドに殴りかかる

レッド「そうはいかねえ!! 紅蓮!そして獄炎乱舞!」

両手と両足に炎を付加させ、巨大な炎の竜巻を発生させる

クロアが煙から姿を現した、黒いオーラが出て、さらに目が真っ赤に充血したようになっていて青筋がビキビキと体中に出ている

クロア「テメエはぶっ殺してやるよ…」

威圧感がレッドに響く

レッド「なんだ…体がうごかねえ…」

レッドは体が動かない…

クロア「さあて…ショーのはじまりだ…!」

クロアはレッドを連続で殴る

クロア「地獄へと誘え! 轟け!! 地獄魔王撃!!」

クロアの黒い炎の拳がレッドを殴り傷つけていき…

クロア「吹っ飛べ!!」

最大のパンチがレッドに決まりレッドはバリアの壁にぶつかり地面に落ちて倒れていった

リリー「リーダー!!」

審判「レ、レッド! 戦闘不能!! よって決勝進出はチーム…ダークグライド!!」

わああああああああああああああああ！！！！！！！！

プリムレンジャー全員は……負けてしまった、シルバーは急いでみんなの元へ

シルバー「みんな！リーダー！」

シルバーはみんなをゆすり起こすが反応がない

「リリー、こうしちゃいられない!! がばね!」

がばね「ああ！急いで医務室に運ぶぞ！みんな！手伝ってくれ！」

バトル部みんなはうなずいてプリムレンジャーの元へ

アスベル「ソフィ、俺達も！」

ソフィ「うん」

シエリア「待って！私も！」

アスベル、ソフィ、シエリアも行く

•
•
•
•
•
•

一方

フレン「（爆弾処理は完了したよ）」

フォック「（ありがとう…そっちは任せる）」

フォックは念話をきった

フォック「爆弾処理はなんとかなったよ」

ゼロス「ふう〜一時はどうなるかと思ったぜ」

ゼロスは安堵の表情をする

フォック「後は…これだな」

フォックは剣を突き刺した…すると小型のチップのようなものが刺さっていた

ユージーン「これだな」

フォック「ああ、盗聴器だ」

盗聴器を見つけないとかなったようだ

フォック「さて、俺はちよつとプリムレンジャーの4人を回復しに行ってくるわ、後は頼んだよ」

ゼロス「O〓K〓作者〓俺様達に任せておけ」

フォックは急いで医務室へと向かった

バトル200 強まる闇／プリムレンジャーVSダークグライド（後書き）

がばね「リーダー達が負けるなんて」

クロアも俺が考えた悪キャラなのに常識超えたな（汗）

がばね「まるでフォックの怒りそのもののように思えるが（汗）」

いやいやそんなわけないよ（汗）

ラッシュ「次回はプリムレンジャー達の様子などだ」

バトル201 思いを胸に(前書き)

さて、今回は短いです。

ラッシュ「しかも連続更新か」

プリムレンジャー達はどうか！バトル201

リリー「みんな!!」

バトル201 思いを胸に

医務室

レッド達は眠っているような感じだった

今エステルやソフィ、そしてシェリアやリフィル、そしてティアなどが回復術でプリムレンジャーを回復させている

リリー「リーダー…みんな…」

リリーは目から涙が零れ落ちる

がばね「クロア…あいつだけは絶対に許さねえ」

がばねは静かに怒る…そこへ

フォック「みんな！」

フォックだ

ラッシュ「作者！」

フォックちよつとみんなごめんね…

フォックは倒れているレッド達のベットの前へ

シルバー「一体何をしようとするんだ？」

戦いに参加しなかったシルバーが言う

フォック「俺の回復術で4人を回復させるよ」

リフィル「たしかに作者の回復能力なら4人全員を回復させること
だって簡単なはずね」

リフィルはそう言う

フォック「それじゃあやるね…大いなる恵みの光よ…傷ついた者達
に癒しを…リザレクション！」

フォックが術を詠唱し終わると魔方陣がレッド達4人の傷を治して
いった…そして

レッド「ん？あれここどこだ？」

リリー「リーダー!!」

リリーが思いきりレッドに抱きついた

レッド「わわっ!?!リリーおめえ!?!」

リリー「よかった!よかった~!!」

わんわんとリリーはなく…その数分後にはブルー、イエロー、グリー
ンも目を覚ましたのであった

……

ティア「このままでは大会もめちゃくちやになりそうね」

ティアは冷静に言う

レッド「悪い：俺達油断してた」

レッド達は落ち込む、するとフォックはレッドの肩を軽く叩く

フォック「誰も最初は弱い：俺も怒りで強いけど俺もまだまだだ：でも本当はみんな：誰も強いってわけじゃない：とりあえずしばらく安静にしてたほうがいいよ」

フォックはそうレッド達に言う

レウト「俺達もがんばって勝ち進めないとな」

レウトは気合を入れる

フォック「あっ！忘れてたけど：ラッシュ達の次の相手：『とある神様の介入軍団』チームが急用のため不戦勝のようで、次の試合はフレイムスターと対戦だよ」

フォックはそう告げる

ラッシュ「圭達が伝えたんだな」

カイ「フォックさんにも説明しておかないと：フォックさん実は：」

カイはフォックにこれまでの事などを説明した

フォック「なるほどね…それなら犯人はあのポケモンで間違いないな…」

フォックは確信したように言う

ティア「まさかこういうことが」

エステル「これは急いでみなさんに」

エステルは伝えようとするが

フォック「待ってエステル…ここは俺がなんとかしよう…それに闇を振り払うには…ラッシュしかないと思うんだ」

と、ラッシュに視線を向ける

ラッシュ「作者…」

フォック「心の闇はそう簡単に消せないもの…でも振り払えばできるはず…ラッシュならできる」

すると

リリー「ラッシュ、リーダー達の仇をとろう！」

がばね「俺もリリーと同じ考えだ…ラッシュにかかわることだ、ならラッシュに任せるしかないな」

リリーとがばねはそう言う

ラッシュ「…ああ、俺もあいつを目覚めさせるにはバトルで決着^{けり}つけるしかないからな…」

ラッシュはそう言う…

ラッシュ「（それにあのポケモンに言った言葉…『ためらうな、迷うな、振り返るな』俺のために思ったライバルはいっぱいいる…）」

ラッシュはいろんなライバル達の事を思い出す

ラッシュ「それじゃあ行くぞ！」

レウト「おう！」

リリー「リーダー、みんな…私いつてくるね…みんなの分絶対に勝つかから！」

がばね「ゆっくり休んでくれみんな」

レッド「ああ！がんばってこい！ピンク！」

リリーとがばねは振り向かずにラッシュ達の後についていく

レッド「がんばれよ…バトル部」

レッドは静かにそう言う…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5077j/>

限界超えバトル！！ポケハン学園バトル部

2011年10月11日01時50分発行